レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

⑤

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

レーニン10巻選集のしおり

No. 7

1971. 5. 13

大月書店

レーニン10巻選集 第五巻（第七回配本）について

内山弘正

一

第五巻には、一九一〇年二月から一九一四年五月までの約四年間に、レーニンが書いた多くの論文のうち、二八篇を選んでのせてあります。

この時期（一九一〇―一九一四年）は、第一次ロシア革命の時期（一九〇五―七年）、ストルィピン反動の時期（一九〇七―一〇年）につづく、あらたな革命的高揚の時期で、第一次世界大戦の時期（一九一四―一七年）をへて、一九一七年の革命の時期へつづきます。

第一次ロシア革命を圧殺することに成功した皇帝と地主の専制（ツァーリズム）は、ブルジョアジーと手をにぎって、人民を地獄のような苦しみにつきおとしながら、ロシアにおける資本主義的発展の、彼らにとって都合のよい、上からの道を歩もうとします。

これが、ストルィピンの反動期ですが、レーニンは、専制にはロシアの社会的・経済的矛盾を解決する能力がなく、ブルジョア民主主義の諸課題が未解決のまま放置される結果として、遠からず、ふたたび革命が日程にのぼることをふかく確信していました。

レーニンの見通しどおり、ストルィピンの反動期は長くつづきませんでした。

一九一〇年にはいると、労働運動が、じりじりとすすみはじめ、一九一二年四月、シベリアのレナ金鉱で、ツァーリの軍隊が労働者を射殺する事件が起きると、抗議ストライキは全国にまきおこり、つづいて兵士の不満が爆発しました。

一九一二年の政治的ストライキに参加した労働者の数は、第一次ロシア革命の時期の一九〇六年と一九〇七年を上まわり、一九〇五年にわずかおくれをとっているだけでした。

ロシアは、ふたたび、革命的高揚の時期にはいったのです。

たちあがる労働者や農民を、革命の勝利の方向へ指導するには、正しい理論と政策をもち、正しい組織形態をもつ党が、絶対に、必要でした。

ところが、この党は、第一次ロシア革命の敗北とひきつづく反動期の苛酷な弾圧のなかで、多くの組織が破壊されていただけでなく、敵に屈服した日和見主義分子の

反党活動によって、未曽有の危機状態にありました。

党再建のためのレーニンの精力的な活動が必要でした。なによりもまず粉砕しなければならなかったのは、解党派と召還派という二つの反党的潮流でした。解党派というのは、非合法の党の解体を主張し、専制のもとでの改良をよびかけている一派であり、召還派というのは、逆に、非合法活動だけを主張して、国会における党の活動を否定し、党議員団の召還を要求している一派です。解党派が右の日和見主義とすれば、召還派は「左」の日和見主義でした。

つづいて、粉砕しなければならなかったのは、これらの二つの反党的潮流とたたかうことに反対し、無原則的な統一を主張して、党を混乱させているトロツキー等の調停派でした。

一九一〇年一月、パリーで招集された中央委員会総会で、レーニンとボリシェヴィキはメンシェヴィキの中の党維持派とかたく手をにぎり、解党派と召還派を一掃する体制をとりました。

そして、調停派の卑劣な攻撃とたたかいつつ、一九一一年末には党のロシア国内中央部を確立し、一九一二年一月には、プラハで第六回全国協議会をひらいて、レーニンを先頭とするボリシェヴィキ中央委員会を選出し、同時に、解党派は党に所属するものではないと正式に声明しました。

レーニンは、一九一一年一二月に、つぎのように書いています。

「ロシア社会民主労働党は重病にたえぬいた。危機は終わろうとしている。」(一九一一年一二月『党の危機の大詰』)

レーニンがあらゆる反党分子とたたかってきずきあげたのは、国会をはじめ合法団体のできるだけ枝をひろげた網にとりまかれた非合法細胞からなる強靭な党組織でした。それは合法と非合法のたくみな結合でした。

レーニンは大衆とかたくむすびつくために、一九一二年四月二二日(五月五日)合法的な日刊労働者新聞『プラウダ』を発行しました。『プラウダ』は労働者の醵金によって維持され、その発行部数は三万から四万に達しました。

一九一二年の秋におこなわれた第四国会の選挙で、ボリシェヴィキにとってきわめて困難な情勢のもとでも一〇〇万人以上の労働者の投票をかちえ、しかもロシアのプロレタリアートの五分の四が集中している六つの主要工業県のすべてから議員を選出するという大きな成果をおさめました。解党派に投票した労働者は二五万人にたりませんでした。

革命的高揚は一九一三年、一四年とつづきました。

ツァーリズムは、イギリスとフランスの帝国主義と手をむすんで、ドイツ帝国主義との戦争に突入し、そうすることによって、国内の革命運動をかたづけようとしました。

しかし、レーニンがきずいた党は、労働者のなかにふかく根をおろしており、あらゆる困難にたえて、一九一七年へと前進をつづけます。

二

つぎに、これらの論文を年月日順にならべて、紹介します。

『統一にむかって』（一九一〇・二）は、レーニンが一九一〇年一月の党中央委員会総会で採択した決議を解説した論文です。

この総会の意義について、レーニンは、「すべての党勢力の結束にむかって、またこの困難な時期に社会民主党のとるべき道を規定する党の戦術と組織とについての基本的命題を全員一致で承認することにむかってふみだした巨大な一歩」にあるとのべています。そしてこの決議は、一九〇八年の党協議会の基本的な諸命題（＝現情勢の評価とプロレタリアートの政治的任務、党の組織政策、社会民主党国会議員団にたいする党の態度＝）を発展させたものです。

すなわち、レーニンは「この一年は、新しい分派闘争の一年であり、党崩壊の危機がはげしくなった一年であった」とのべ、この情勢に適合した党の正しい活動型態と社会民主主義的労働運動と党の結合についてあきらかにしています。レーニンは「われわれを結束させるものは、反革命の圧制、反革命的気分の横行だけではない、じみな日常的な実践活動の一歩一歩も結束させる」とのべています。

とくに「非合法の社会民主党の国会活動と合法的可能性の利用とを否認し」「社会民主党の偏向をあきらかにし、あらゆる活動分野にあらわれた二つの偏向の危機を説明し、いずれの側へのぐらつきも不可能にするような活動を組織して、「きたるべき革命戦のためのより広範なより堅固なより屈伸性のあるプロレタリア基地の創設」をよびかけています。

『政論家の覚え書』（一九一〇年三月）で、レーニンは、専制が一九〇五年の革命から学んで、ブルジョア君主制への転化の道を一歩すすもうとしている新しい歴史的段階に入りつつあることをあきらかにし、こうしたことが、現代は新しい革命を生みだす独特の諸条件をもった独特の歴史的段階であるとその時代の特徴をあきらかにし、「新しい革命の準備は、その革命が避けられないということをくりかえして言うだけにとどまることはできないからである。その準備とは、この過渡的情勢の特異性を考慮に入れるような宣伝・扇動および組織をつくりだすことでなければならない」と主張し、新たに生まれた分派である召還派の「フペリョード」グループの「新政綱」の誤りを批判しています。

そして、レーニンは、この独特の歴史的段階で「もし……これまでどおりのやり方だけで行動するなら、もし国会の演壇そのものを利用することができない等々であ

るなら、この特異性を掌握することはできないし、この新しい革命の準備をすることができない」とそれを否定する召還派をするどく糾弾しています。同時にレーニンは、この時期の条件のもとでは、非合法党組織を建設することなしには、真に党の指導を貫徹することができないとのべ、それに反対する解党派とたたかっています。

またレーニンは党内の「統合の危機」について二つの見解をあきらかにし、総会の決議を基準にして、解党主義、召還主義とトロツキー一派の「調停主義」を批判し「総会後、党内に起こっていることは、党統合の破綻ではなく、実際に党内でまた党的に働くことができ、また働こうとのぞんでいる人々の統合の始まりであり、ボリシェヴィキ、党維持派のメンシェヴィキ、小数民族の代表、どの分派にも属しない社会民主主義者の真に党的なブロックから、党に敵対的な変節者を、半自由主義者と半無政府主義者とを清掃する仕事の始まりである」とのべ「解党派」と「調停派」との闘争の特徴づけをあたえ、ボリシェヴィキの政綱をあきらかにしています。

『革命の教訓』（一九一〇・一〇）は、第一次ロシア革命五周年の記念論文です。レーニンはこのロシア革命におけるプロレタリアートの偉大な勝利は、半分の勝利でしかなかったとのべ、この革命から三つの教訓をひきだしています。その第一は、労働者の生活や国家の統治から改善をかちとることができるのは、大衆の革命的闘争だけであること。第二に、ツァーリ権力を掘りくずし、制限するだけでなく絶滅しなければならないということ、第三に、主要な教訓は、ロシア人民のいろいろな階級がどう行動するかを知ることができたことにあるとのべています。そしてレーニンは、その教訓から「都市のプロレタリアートの大衆が闘争に立ちあがり、動揺的で裏切的な自由主義者をおしのけ、農村労働者と零落した農民をうしろにしたがえるときには、地上のどんな力も、ロシアに自由がくるのを押しとどめることはできないであろう」「ロシアの人民はもう一九〇五年以前の人民ではない。プロレタリアートは人民に闘争をあたえた。プロレタリアートは人民に勝利を導くであろう」とのべています。

『ロシアにおける党内闘争の歴史的意味』（一九一〇・末）も第一次ロシア革命の経験を研究した論文です。マルトフやトロツキーは、この革命でのプロレタリアートの役割を否認し、革命の歴史を歪曲したマルクス主義に潤色した自由主義的見解をくりかえしていました。

レーニンはこの歪曲を、第一次ロシア革命における労働者のストライキ、政治闘争と経済闘争の結びつき、ボイコット戦術などの経験を分析して具体的に反論しています。

またかれらはロシア革命後に起こったロシア社会民主党の諸分派が「インテリゲンツィアのプロレタリアートへの適用」によって起こったといっていました。レーニンはそうではなく「諸階級間の関係の変化によって起こ

ったのである」と批判しています。

『ヨーロッパの労働運動における意見の相違』（一九一〇・一二）は、オランダのマルクス主義者アントニー・パンネコックの小著の書評です。

レーニンは、ヨーロッパとアメリカの労働運動における戦術上の基本的な意見の相違は、修正主義（日和見主義、改良主義）と無政府主義（アナルコ・サンディカリズム、アナルコ社会主義）、すなわち労働運動で支配的な理論となったマルクス主義に背反する諸傾向との闘争に帰着することを示しています。レーニンは意見の相違をたえず生みだす原因をあきらかにしています。その根本原因が、資本主義諸国の経済制度と発展の性格とにあることをあきらかにしています。

そしてレーニンは、ボリシェヴィキにたいして「弁証法的唯物論の理論としてのマルクス主義は、こういう生きた生活の矛盾、資本主義と労働運動の生きた歴史の矛盾を把握することができる」と社会発展の新しい歴史的諸条件を注意ぶかく研究するよう要求しています。

『マルクス主義の歴史的発展における若干の特質について』（一九一〇・一二）でレーニンは、「われわれの学説は教条ではなくて行動の指針である。これを見うしなうとわれわれはマルクス主義を一面的なかたわの死んだものにしてしまう」とのべ、その変革の立場からロシアの急激に変化する社会的＝政治的情勢の特徴を（一九〇七年と一九一〇年の夏を画期にする三年間づつの二期にわけて）分析しマルクス主義者に非マルクス主義者との闘争の任務をあきらかにしています。

レーニンは、急激に変化する情勢のもとで、「マルクス主義は、社会生活の諸条件の驚くほど急激な変換をそれ自身のうえに反映しないわけにはいかなかったので、この変換の反映が深刻な分解、混乱、あらゆる動揺、一言でいえばマルクス主義のきわめて重大な内部危機であった」と召還主義、解党主義、調停主義等の非マルクス主義が生まれる根源をあきらかにしています。そして「現在この内部崩壊が避けがたい理由を理解し、これと徹底的に闘争するために結束をかためることは、マルクス主義者にとって最も直接の正確な意味で時代の任務である」とのべています。

『ロシアのストライキ統計について』（一九一〇・末）は、ロシアの有名な統計「工場における労働者のストライキ統計」をあらゆる側面から全面的に分析し、人民大衆各層の階級意識の正確な測定、政治的成長の特徴、都市の工場労働者の役割をあきらかにしています。

『農奴制崩壊五〇周年』（一九一一・二）は、ロシアにおける農奴制度崩壊五〇年の記念論文です。レーニンは「一九〇五年の革命について新しい第二の革命が進行している。農奴制度崩壊の記念日は、この革命をおこさせ、この革命を呼びかけている」と革命の歴史的教訓をあきらかにしています。

『ロシア社会民主党の改良主義』（一九一一・九）でレ

ーニンは「すべての文明国における最近数十年間の資本主義の巨大な進歩と労働運動の急進的な成長はプロレタリアートにたいするブルジョアジーの従来の態度に大きな変化をもたらした」。そのもとで「労働運動の内部における改良主義と革命的社会民主主義との闘争の激化は不可避的結果である」と改良主義の生まれる根源をあきらかにしています。とくに当時のロシアにおける改良主義が、すでにブルジョア革命を経過したヨーロッパにおける事態とは異なった条件のあることをあきらかにするとともにロシアの改良主義は、ロシアが西ヨーロッパ諸国よりはるかにブルジョア国であることと、小ブルジョア大衆の動揺性がある特徴をあげています。そしてこのロシアにおけるプロレタリアートの歴史的任務について「プロレタリアートは、完全な民主主義的変革のための全人民の闘争抑圧者と搾取者にたいするすべての勤労者と被搾取者の闘争の指導者とならなければならない」とのべています。

『党の危機の大詰』（一九一一・一二）でレーニンは、「総会（一九一〇年一月）でボリシェヴィキが調停派の軽信や幼稚さに反対して予言したような状態がほかならぬ、そのようなばかげた党に不面目な状態が生じた」ことをあきらかにし、「解党主義や召還主義のような『腫物』の思想的な腐敗と生気なさを、いまだにあきらかに理解できない者にたいしては、いまこそ無力な喧嘩とみじめな策動の歴史がはっきり教えてくれるであろう」とその克服を呼びかけ、統一された非合法の革命的ロシア社会民主党への結束を訴えています。

『ゲルツェンの追想』（一九一二・五）は、ゲルツェンの生誕百年の記念論文です。自由主義者たちは、ゲルツェンの弱い面をほめそやし、その強い面を黙殺するいやしい中傷をしていました。これにたいし、レーニンは「彼が四〇年代にロシアそのもののなかに革命的人民を見い出すことができなかったのは、ゲルツェンの罪ではなく、彼の不幸であった。六〇年代に彼が革命的人民を見い出したとき彼はおそれることなく自由主義に反対して革命的民主主義の側に立ったのである」と、ゲルツェンの歴史的な役割をあきらかにし、プロレタリアートが革命的理論の偉大な意義をいかにまなぶかの模範を示しています。

また**『ロシアの諸政党』**（一九一二・五）は「政党の闘争を理解するためには、言葉を信用するのではなく、諸政党の実際の歴史を研究しなければならない」と「第三国会」当時のロシアの諸政党の階級的性格、特徴を簡潔にまとめています。政党の階級的分析の模範です。

『経済的ストライキと政治的ストライキ』（一九一二・五）でレーニンは、数ヵ年にわたるストライキ統計資料を全面的に分析することによって、政治的ストライキと経済的ストライキの性格を明確にして、とくに経済的ストライキと政治的ストライキの結びつきが必要であり、真に広範な全国民的運動は、このような結びつきが不可

避であることをあきらかにしています。そしてこの全国民的運動の性格を歪曲する自由主義者と自由主義的労働政治家（解党派）を批判しています。またこの運動で、労働者階級が指導者、先進者、首領としての役割を演じることと、他の階層との関係で、労働者が強いとき、「社会の同情をうることができる」とのべているのはきわめて教訓的です。

『**革命的高揚**』（一九一二・六）は、一九一〇年以降のロシアのあらたな情勢をいちはやく鋭く「革命的高揚」としてとらえ、一九〇五年の革命の敗北から教訓をひきだし、たたかいの展望を示しています。

『**二つのユートピア**』（一九一二・一〇）で、レーニンは「政治におけるユートピアは、現在も将来もけっして実現できないような願望であり、社会的勢力に立脚しない願望、政治的、階級的勢力の成長と発展によって裏づけられない願望である」と自由主義的ユートピアとナロードニキ的ユートピアの二種類のユートピアを分析しています。そしてマルクス主義者はナロードニキのユートピアの殻から農民大衆の民主主義的核心をとりださなければならないとのべています。

『**資本主義社会における貧困化**』（一九一二・一二）は、ブルジョア改良主義者と社会民主主義者の隊列内にある若干の日和見主義者が、労働者階級の貧困化を否認する誤った理論を、具体的に批判したものです。

『**カール・マルクスの学説の歴史的運命**』（一九一三・三）でレーニンは、「マルクスの学説における主要なものは社会主義社会の創設者になるプロレタリアートの世界史的役割を解明したことにある」とのべ、『共産党宣言』以後の①パリ・コミューン②パリ・コミューンからロシア革命③ロシア革命以後、のマルクス主義が出現してからの世界史の三つの時代の特徴を分析しています。とくにレーニンは「ロシア革命につづいてトルコ、ペルシア、中国の革命が起こった、われわれはまさに、これらの嵐の時代、そしてそれがヨーロッパに『反映』する時代に生きている」とのべ「きたるべき歴史的時代は、プロレタリアートの学説としてのマルクス主義に、いっそう大きな勝利をもたらす」ことを予言しています。

『**マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分**』（一九一三・三）は、マルクスの死後三〇年の記念論文です。レーニンは、マルクス主義をなにか「有害な宗派（セクト）」のようなものとみなしているブルジョア科学の中傷的な主張を粉砕しています。すなわちレーニンは、「マルクス主義には世界文明の発展の大道のそとで発生した、なにか閉鎖的で、硬化した学説という意味での『セクト主義』らしいものはなにもない。反対に、人類の先進的な思想がすでに提起していた問題に答えをあたえた点にこそ、まさにマルクスの天才がある」。マルクスの学説は「人類が一九世紀にドイツ哲学、イギリス経済学、フランス社会主義という形でつくりだした最良のものの正統の継承者である」とこのマルクス主義の三つの源泉と三つの

構成部分を簡潔に説明しています。

『アジアのめざめ』（一九一三・五）は、二〇世紀初頭におけるアジアの目ざめの世界史的意義をのべています。**『後進的なヨーロッパと先進的なアジア』**（一九一三・五）も帝国主義時代におけるアジアの民族解放運動とヨーロッパの労働運動との団結についての世界史的意義と役割をあきらかにしています。

『階級闘争の自由主義的概念とマルクス主義的概念について』（一九一三・五）は、階級闘争についてのマルクス主義的・革命的見解を自由主義的にすりかえる解党派ア・エルマンスキーの批判論文です。レーニンは『『経済主義者』は階級と階級とのどんな衝突でも、それだけですでに政治闘争であると考えていた。だから『経済主義者』は、政治のための最も高度な、発展した、全国民的な階級闘争を見ようとしないで、一ルーブリにつき五カペイカのための闘争を『階級闘争』とみなしていた。このように『経済主義者』は、萌芽的な階級闘争を認めて、発展した形でのそれを認めなかった。」「マルクス主義は、階級闘争が政治をとらえるだけでなく、また政治において最も本質的なもの、すなわち国家権力の構造をとりあげるばあいに、はじめてこの階級闘争を完全に発展した『全国民的』階級闘争とみなす」とのべています。

『論争問題——公然の党とマルクス主義者』（一九一三・五）は、党を解消、廃絶、否認しようとするものから党を守る原則をあきらかにしたものです。

レーニンは「苦労をおそれる人間は、真実を発見する可能性を自分からなくするものである。だからわれわれは、この苦労をおそれずに、自主的に検討し、諸事実、文書、証人の証言を発見しようと努力する決心をした労働者に訴える」とのべています。そして一九〇八年と一九一〇年の総会決議の原則を明確にして、これにたいする解党派の態度とかれらの主張する「公然の党というスローガンは階級的地位からして反革命的な自由主義のスローガンである」と糾弾しています。そしてレーニンは「マルクス主義者と解党派との闘争は、人民大衆への影響をめぐって人民大衆の政治的啓蒙と教育をめぐっておこなわれている、先進労働者と自由主義ブルジョアとの闘争の現われにほかならない」といかに解党派とたたかい党を守り発展させるかの根本問題についてあきらかにしています。

『マルクス主義と改良主義』（一九一三・九）では、マルクス主義者は改良を否定しない。ただ、改良主義者のように「改良がすべてだ」とみなさないだけだと改良にたいする原則的な態度をあきらかにし、マルクス主義から脱落した解党派が、「マルクス主義の存在そのものを攻撃し、マルクス主義的規律を破壊し、改良主義と自由主義的労働者政治とを説くことによって、労働運動を攪乱している」ことを糾弾しています。当時のロシアの改良主義が、ロシアとヨーロッパの条件の相違を無視して

いる誤りにふれて「ロシアの改良主義はさらに、特別の形で、すなわち、今日のロシアと今日のヨーロッパの政治情勢の根本条件を同一視する形で、現われていることをわすれてはならない」という指摘をこの論文でもレーニンが指摘していることとは、見落すことはできません。

『ヴェ・ザスーリチはどのようにして解党主義をほうむるか』（一九一三・六）は、党を「広範な層」や階級と混同し、党を否認する経済主義者や解党派を糾弾して前衛党の役割をあきらかにした論文です。

レーニンは「マルクス主義者の活動は……困難なことを不可能だと言わない点にある」とのべ、反動期にたえ、変化した情勢に適応し発展しているボリシェヴィキ党と地下組織からの逃亡を正当化する解党派との相違を明確に区分しています。

さらに、レーニンは「党とは一つに結びついた諸組織の総和であり、党は階級の自覚した先進的な層であり、その前衛である」と定義し、もし、この党が階級の利益を代表し、広範な党支持層を媒介にして大衆と密着し、大衆を教育するなら、階級の意志を統一することができる。ここに階級の前衛としての党の最大の役割があることをあきらかにしています。

『テイラー・システムは機械による人間の奴隷化である』（一九一四・三）は、資本主義的「合理化」の本質をあきらかにしています。同時に、社会生産をプロレタリアートの手ににぎり、社会主義的合理化によって、労働者を解放する展望をあきらかにしています。

『民族自決権について』（一九一四・三）解党派は、ローザ・ルクセンブルクが、ポーランド（当時はロシア帝国の一部）のブルジョアジーをたすけることになるという理由で、ポーランドの独立というスローガンに反対し、民族自決権を規定している綱領第九条に反対していることをよりどころにして、党を攻撃しました。この論文は、その攻撃に反論したものです。

レーニンは、「マルクス主義者の綱領における『民族の自決』とは、歴史的＝経済的見地からいって、政治的自決、国家的自立、民族国家の形成以外のどんな意味ももちえない」ことをあきらかにしています。そしてローザが民族自決権を否定しようとする論拠は具体的歴史的条件を無視した抽象的なものであり、ロシアの具体的特殊条件を考慮しないきわめて薄弱なものであるとのべ、この問題を正しくあつかうためには、ロシアの民族問題の具体的特殊性を、ロシアのブルジョア民主主義革命と関連させてとらえなければならないことを論証しています。さらにレーニンは「他の諸民族を抑圧する民族は自由でありうるだろうか？　ありえない」とのべ、プロレタリアートは民族的要求を社会主義の利益に従属して取り上げなければならないことを示し、カデットの国権的自由主義は大ロシア人ブルジョアジーの国家的特権の擁護であること、社会民主主義者が自決権を否定することも被抑圧民族のブルジョアジーのあらゆる民族要求を支

持することも、労働者をブルジョアジーに従属させるようになることをあきらかにしています。

レーニンは、これらの思想をあきらかにするために、スウェーデン、ポーランド、アイルランドの民族問題を取り上げ、インタナショナルの立場を説明しています。「第一にあらゆる民族主義、なによりも大ロシア人の民族主義とたたかうこと、一般にあらゆる民族の完全な同権を認めるだけでなくて、国家建設の点での同権、すなわち民族自決権、分離権を認めること、つぎにそれと同時に、すべての民族のあらゆる民族主義との闘争を有利にすすめるためにブルジョアの民族的分立の傾向に反対して、プロレタリアの闘争とプロレタリアの諸組織の統一を擁護し、それらを国際的統一体に緊密に結合するようにたたかうこと」の二面的な任務をレーニンはプロレタリアートによびかけています。

この思想は、今日なお不滅の真理として生きています。

『ロシアにおける労働者出版物の歴史から』（一九一四・四）でレーニンは、ロシアにおける労働者出版物と民主主義運動、社会主義運動とのむすびつきを歴史的に分析し、「一八九四―一九一四年の二〇年間における労働者出版物の歴史は、ロシアのマルクス主義とロシアの社会民主主義内部の二つの傾向の歴史である」と党活動における出版物の役割を明確にしています。

『統一の叫びにかくれた統一の破壊について』（一九一四・五）は、トロツキーが「非分派性」のスローガンにかくれて現実に労働者の統一を破壊していることをあきらかにし、この分派を思想的な明確さをもたない「分派状態の最悪の遺物」であると特徴づけています。またプレハーノフが動揺して解党派に合流したその行動を攪乱行為の典型であると批判しています。

さらにレーニンは、解党派の階級的性格、党の統一問題をとりあつかうさいに、なによりも労働運動の客観的な資料を重視して「主観主義」を鋭く批判しています。また立論のさいには労働者の経験に立脚しなければならないとのべています。

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第5巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

＊　＊　＊

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』(第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号（一）（二）……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』(全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目 次

民族自決権について……二九二

統一にむかって

ちょうど一年まえの一九〇九年二月に、『ソツィアル－デモクラート』(一)第二号で、われわれはロシア社会民主労働党協議会(二)の仕事を、「崩壊の年、思想的＝政治的混乱の年、党のゆきまどいの年」のあとで党を「大道へ」導きだす仕事と特徴づけた(『大道へ』、全集、第一五巻、三三三ページ)。われわれはそこで、わが党が際会している重大な危機は、疑いもなく、組織上の危機であるばかりでなく、思想的＝政治的危機でもあると指摘した。われわれは、なによりも、協議会の戦術的諸決定が次の基本的任務を正しく解決したことこそ、有機体としての党が反革命期の腐敗的な影響とたたかって成功をおさめる保障であるとみた。最近の疾風怒濤の時期からうけつたえた労働者党の革命的目標と、大衆の直接的闘争の経験によってその正しさが確証された労働者党の革命的社会民主主義的戦術とを労働者党が完全に確認すること、またそれと同時に、われわれの眼前で生じている巨大な経済的・政治的諸変化を考慮にいれること、すなわち、専制が時代のブルジョア的諸条件に適応して、みずからをブルジョア君主制へと組織し、農村のブルジョア的上層や商工業資本主義の巨頭たちと公然と広範(三)に系統的に同盟することによってツァーリズムと黒百人組的地主との利益を保障しようとしている企てを考慮にいれること——これがその基本的任務である。われわれは、新しい歴史的時機に関連した党の組織的任務——大衆のなかに革命的社会民主主義的活動の拠点をつくりだすために、非合法党が社会民主党国会議員団をもふくむありとあらゆる合法的機関を利用するという任務を強調(四)した。われわれは、この組織的任務が、社会主義者取締法の時期にドイツの同志たちが解決した組織的任務と似ていることを指摘するとともに、社会民主党の国会活動を否定したり、わが党の国会議員団の方針を率直に公然と批判することを拒否するような、また非合法の社会民主党を否定したり、軽視したり、それをはっきりした形のない非合法組織とおきかえ、わが党の革命的スローガンを不具化しようと企てたりするような「堅忍不抜なプロレタリア活動の悲しむべき回避」について語った。

　このように過去をふりかえることによって、われわれは、

さきごろひらかれたわが党の中央委員会総会(三)の意義をいっそう正しく評価することができる。本号〔この論文が掲載された『ソツィアルーデモクラート』第一一号〕の別の箇所には、この総会で採択された最も重要な諸決議の全文が出してある。これらの決議の意義は、それが、党の実際の統一にむかって、すべての党勢力の結束にむかって、またこの困難な時期に社会民主党のとるべき道を規定する党の戦術と組織とについての基本的な諸命題を全員一致で承認することにむかってふみだした、巨大な一歩である、という点にある。この道は一年まえに正しくさし示されたものであって、いまでは全党がこの道を進みはじめており、党内のすべての分派がその正しさを確信している。この一年は、党の新しい分裂、新しい分派闘争の一年であり、党の崩壊の危険がいっそう大きくなった一年であった。しかし、地方活動の諸条件、社会民主主義組織の困難な状態、プロレタリアートの経済闘争と政治闘争の緊急な諸任務――これらすべてが、すべての分派を促して社会民主主義勢力の結束へと進ませた。反革命がより強固になり、傍若無人となり、狂暴にふるまえばふるまうほど、自由主義者や小ブルジョア民主主義者のうちに卑劣な変節や革命の否認がより広範にひろまればひろまるほど、すべての社会民主主義者の党への愛着がますますつよまった。一方、メンシェヴィキの同志プレハーノフと、他方、「フペリョード」グループ(六)(正統ボリシェヴィズムからそれていったボリシェヴィキの一グループ)のように、はなはだしく意見を異にしているわが党の党員たちが、一九〇九年の後半におけるこの諸条件の総体に影響されて、党を守る意思を表明したことはきわめて意味深長である。前者は一九〇九年八月に、分裂と党分裂の方針とにたいして「党内での影響力獲得のための闘争」のスローガンを断固としてかかげた。後者が発表した政綱では、なるほど、はじめには「ボリシェヴィズムの統一回復のための闘争」について述べてあるが、終りのほうでは、分派根性、「党内の党」、「分派の孤立性と閉鎖性」を断固として非難し、いろいろの分派を党に「解消」させ、それらを「融合」させ、各派の中央部を「実際にたんなる思想上・文筆上の」中央部に変えるように、断固として要求している(小冊子『現情勢と党の諸任務』一八および一九ページ)。

党の多数派によってはっきりとさだめられた道を、いまやすべての分派が一致して承認したのである、――いうまでもなく、細目にわたってではなく基本的にであるが。はげしい分派闘争の一年は、すべての分派とあらゆる分派根性をなくすための、党の統一のための決定的な一歩をふみだす結果となった。プロレタリアートの経済闘争と政治闘

争の緊急な諸任務のうえにたって、すべての勢力を結束することがきめられた。ボリシェヴィキ派の機関紙『プロレタリー』〔〕を廃刊することが宣言された。『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』(3)つまりメンシェヴィキ派の機関紙を廃刊する必要があるという決定が、満場一致で採択された。いくたの決議が全員一致で採択されたが、ここではわれわれは、そのうちで最も重要なものとして、党内事情についての決議と、きたるべき党協議会の招集についての決議とを、とくにとりださなければならない。これらの決議のうち前者は、いわば、諸分派統合の政綱であって、とくに詳しく検討する値打ちがある。

この決議は、「一九〇八年の党協議会の諸決議の基本的な諸命題を発展させ」……ということばではじまっている。われわれはこの論文のはじめに、一九〇八年一二月協議会の三つの主要な決議――現情勢の評価とプロレタリアートの政治的諸任務とについて、党の組織政策について、社会民主党国会議員団にたいする党の態度について――のうちのそういう基本的な諸命題をあげておいた。それぞれの細目、これらの決議の一つ一つの項目については、党内に意見の一致がないこと、経験の示すところとますます複雑になっていく経済闘争と政治闘争の教訓とに応じて、それらの決議を批判してつくりかえるために、党出版物の門戸がひろく開かれていなければならないこと、批判し、適用し、改善するこの仕事を、こんごはすべての分派、より正しくいえば、党内のすべての潮流が、自分自身の立場を決定する問題、自分自身の方針を明らかにする問題とみなさなければならないこと、これらの点にはすこしも疑う余地がない。しかし、党の方針を批判し訂正する活動のために党の行動の統一が妨げられてはならない。党の行動は一瞬といえども停止することはできないし、動揺したものであってはならないし、あらゆる点で上述の諸決議の基本的な諸命題に導かれなければならないのである。

中央委員会決定の第一項は、これらの命題を発展させながら、社会民主主義的戦術の「原則的基礎」に注意を促しているが、この戦術は、国際社会民主主義運動全体の方法にしたがって、「当面の時機の当面の具体的な情勢だけ」を予定したものではありえないし――今日のような時代にはとくにそうである――、種々さまざまな道やありとあらゆる情勢を、すなわち、「急激に変化する」場合をも、「比較的動きのない情勢」の場合をも、予想したものでなければならない。この戦術的方法を計画的に、また首尾一貫して適用する可能性が、はじめてプロレタリアートのまえにひらかれようとしている。わが党の戦術は、時をおなじくして、プロレタリアートの同一の行動のなかで、同一の組

織的細胞網のなかで、「プロレタリアートに新しい公然たる革命闘争の準備をさせる」(そうしないなら、われわれは、自分を革命的社会民主主義派のなかにかぞえる権利を失うだろうし、一九〇五年の時期がわれわれに遺言し、今日の経済的・政治的情勢のそれぞれの特徴によって指定されている自分の基本的な事業を遂行することができないだろう)とともに、「反革命の不安定な支配のあらゆる矛盾を自分のために利用する可能性をプロレタリアートにあたえ」なければならない(そうしないなら、われわれの革命性は空文句になってしまい、革命的経験および国際社会民主主義運動の知識と教訓の総体を一つ一つの実際行動に適用し、ツァーリズムとその同盟者とすべてのブルジョア政党との一つ一つの矛盾と動揺を利用することに適用するかわりに、革命的なことばを繰りかえすだけとなるであろう)。

決議の第二項は、ロシアの労働運動が目下際会している急転換の特徴づけをあたえている。社会民主主義的労働者の新しい世代が、その歴史的任務を解決し、党組織を一新し、「革命の任務とその方法」とをすこしも放棄することなく、反対にそれらを固守しながら、またきたるべき新しい革命でこれらの方法を適用して、いっそう大きな勝利をおさめるより広範な、より堅固な基盤を準備しながら、新しい闘争形態をつくりあげることのできるように、結束して彼らの援助におもむこう。

決議の第三項は、いたるところで自覚した労働者のあいだに「社会民主主義的党勢力の集中への、党の統一の強化への志向」を呼びおこした諸条件のあらましをえがいている。これらの条件のまっさきにくるのは、広範な反革命的潮流である。敵は結束し攻撃をかけている。旧来の敵——ツァーリズム、官吏の専横と暴力、農奴主的地主の抑圧と恥しらずな侮辱——に、新しい敵、すなわち、プロレタリアートにたいする意識的な、自分自身の経験でかためられた敵意にもとづいてますます団結しているブルジョアジーが加わっている。革命家は、かつてないほど壊滅的な打撃を受け、拷問にかけられ、責めさいなまれている。革命を侮辱し、中傷し、人民の記憶から追いだそうとする努力がはらわれている。しかし、いかなる国においても、労働者階級は、いくらかでも革命の名にあたいするあらゆる革命の主要な獲得物、すなわち、大衆闘争の経験と、いやしくも自分の地位を本格的に改善するためには大衆闘争が必要だという幾百万の勤労被搾取者の確信とをかつて敵に奪いかえさせたことはなかった。ロシアの労働者階級も、彼らがそれによって一九〇五年に勝利をおさめ、こんごも一度ならずそれによって勝利できるであろう、あの革命闘争への決意、あの大衆の英雄精神を、あらゆる試練をつうじて

たもちぬくであろう。

われわれを結束させるものは、反革命の圧制と反革命的気分の横行だけではない。じみな、日常的な実践活動の一歩一歩もまた、われわれを結束させる。社会民主党の国会活動は、着実に前進しており、はじめには避けられない誤りを脱し、懐疑と無関心を克服しながら、すべての社会民主主義者の尊重する革命的宣伝と扇動と組織的階級闘争との武器をきたえあげている。そして、労働者が参加しているあらゆる合法的な会議、プロレタリアートがはいりこんで、その階級意識を、労働の利益と民主主義派の諸要求との公然たる擁護を、もちこんでいるあらゆる合法的な機関が、諸勢力を結束させ、運動全体を発展させている。政府のどんな迫害も、黒百人組やブルジョアジーといった政府の同盟者のどんな奸策も、プロレタリアートの闘争が多種多様な、ときには思いもかけない形態で現われるのを、根だやしにする力はない。なぜなら、資本主義そのものが、その発展の一歩一歩によって、自分の墓掘人の隊列を訓練し、結束させ、増大させ、彼らの憤激をつよめるからである。

最近一年半ないし二年にわたってわれわれの運動をひどくなやませてきた社会民主主義的諸グループの分散性と活動の「手工業性」も、右とおなじ方向（党を強化する方向）へ動いている。勢力を集中することなしに、指導的中央部をつくりだすことなしには、実践活動をたかめることはできなくなっている。この中央部の組織と機能について、実践的な勢力によってその構成を拡大することについて、その活動をもっと緊密に地方の活動と結合すること等々について、中央委員会はいくつかの決定を採択した。沈滞期には不可避的に前面にでてくる理論的関心も同様に、社会主義一般と唯一の科学的社会主義としてのマルクス主義との擁護にもとづいて結束すること、とくに、革命的社会民主主義の思想とたたかうために全勢力を動員しているブルジョア反革命をまえにして結束することを必要としている。

終りに、決議の最後の項は、社会民主主義運動の思想的＝政治的諸任務を述べている。一九〇八―一九〇九年に社会民主主義運動の内部におこなわれたはげしい過程の結果として、これらの任務もこれまでは極度に鋭いものとなり、諸分派のきわめてはげしい闘争によって解決されていた。このことは偶然ではなくて、党組織が危機と崩壊のうちにある状況のもとでは必然的な現象であった。しかし、この決議が全員一致で採択されて、前進しようとする共同の志向、論争中の基本的諸命題をめぐる闘争から　これらの命題を議論の余地ないものと認め、この承認にもとづいて協力一致したいっそう強力な活動へうつろうとする共同

の志向が、はっきりと実証されたことも、まさに必然的なことであった。

決議は、正しい道からそれる二種の偏向は、今日の歴史的情勢とプロレタリアートにたいするブルジョアジーの影響とによって、不可避的に生みだされるものであることを認めている。それらの偏向の一つは、実質上、次の特徴をもっている。「非合法の社会民主党を否認すること、革命的社会民主主義の党の役割と意義を引きさげること、革命的社会民主主義の綱領的・戦術的諸任務とスローガンとを不具化しようと試みること、等々」。社会民主党内部のこれらの誤りが、党外の反革命的ブルジョア的潮流とつながりをもっていることは、当然である。ブルジョアジーとツァーリズムにとっては、自分の活動によって革命の遺訓にたいするその忠誠を証明し、ストルィピン的「合法性」の原則と仮借なくたたかう不屈の覚悟があることを証明している非合法の社会民主党ほど、にくむべきものはない。ブルジョアジーとツァーリズムの下僕どもにとっては、社会民主党の革命的な諸任務とスローガンほど、にくむべきものはない。この両者を守りとおすことは、われわれの無条件の任務であって、ほかならぬ非合法活動と合法活動との結合のためには、われわれが、いやしくも非合法党の「役割と意義」を「引きさげる」いっさいの事柄にたいしてたたかうことが、とくに必要となっている。より小さな問題で、よりささやかな規模で、部分的なきっかけで、合法的な枠内で、党の立場を擁護する必要があるからこそ、これらの任務やスローガンが不具化されないよう、闘争形態を変更したために闘争の内容が骨抜きにされたり、闘争の非妥協性がよわめられたり、歴史的見通しとプロレタリアートの歴史的目標——すなわち、あらゆる勤労被搾取者、あらゆる人民大衆を、民主的共和制をたたかいとる一連のブルジョア革命をつうじて、資本主義そのものをくつがえすプロレタリア革命へ導いていくこと——がゆがめられたりすることのないよう、監視することがとくに必要となっている。

しかし、他方では、——そしてここでわれわれは、いま一つの偏向の特徴づけにうつろう——革命的社会民主主義的活動の諸形態を、それぞれの新しい歴史的時機の特異性に適応させて、変更することを学ばないなら、革命的社会民主主義的活動を実際に、日常的に遂行することはできない。「社会民主党の国会活動と合法的可能性の利用とを否定し、これら両者の重要性を理解しないこと」は、まさに、階級的な社会民主主義的政策の遂行を事実上不可能にする偏向である。ロシアの歴史的発展の新しい段階は、われわれのまえに新しい諸任務を提起している。ということは、われわれの諸任務がすでに解決されたということ、それらを放

棄してさしつかえないということではない。そうではなく、このことは、これらの新しい任務を考慮に入れ、新しい闘争形態を見いだし、それに応じた戦術と組織をつくりだすことが必要だということである。

党内で、これらの基本的な諸問題について意見の一致がうちたてられはじめ、主として社会民主主義的活動をひろげ深めることによって上述の二つの偏向を「克服する」必要があるということについて、意見の一致がうちたてられはじめた以上は、主要な仕事（「社会民主主義運動の思想的＝政治的諸任務」を正しく規定するための）はすでになしとげられている。いまや、達成されたこの成果を系統的に実行し、党のすべてのサークルとすべての地方活動家にこれらの任務を完全に明瞭に理解させ、あらゆる活動分野で二つの偏向の危険を徹底的に説明し、そのいずれの側へのぐらつきをも不可能にするように、活動を組織することが必要である。それからさきはなにをどう仕上げたらよいかは、採択された諸決定を実現するための実践的な諸方策、経済闘争と政治闘争そのものの要求がその後におのずから示すであろう。

これらの要求のうちには、党生活の通常の営みに属する（この「通常の営み」があるときには）一つの事柄がある。それは、党協議会［代表者会議］のことである。この会議は、地方で実際に活動にたずさわっている社会民主党組織やグループの代表者たちを、ロシアのあらゆる地点から一ヵ所にあつめるであろう。この任務がどんなにささやかなものであるにせよ、現在の崩壊状態はその遂行をおそろしく困難にした。中央委員会の決議は、新しい諸困難を考慮に入れており（州協議会の招集が不可能なので、州協議会においてではなく、個々の地方細胞が州代議員を選挙すること）、また新しい諸任務を考慮に入れている（合法運動に従事する党活動家を、評議権をもたせて参加させること）。

客観的諸条件によって、党組織の基礎には、小規模の、現在の活動形態の点からみてささやかな非合法の労働者細胞をおくことが必要となっている。しかし、現在の困難な事情のもとで、系統的に、たゆみなく、計画的に革命的社会民主主義的活動をおこなうことを学ぶためには、これらの細胞は、以前よりもはるかに多くの創意と自主性とを発揮する必要がある。多くの場合それらは、古くから経験をつんだ同志たちの援助をあてにできないだけに、このことはますます必要である。そして、これらの細胞は、第一に、相互間の堅い結びつきをつくりだすことなしには、第二に、ありとあらゆる合法機関の形で拠点をつくりだすことなしには、大衆にたえず影響をおよぼし、大衆と共同行動をと

るという任務を解決することはできない。ここからして、まっさきに、なによりもまず、ただちに、ぜひとも、これらの非合法細胞の代議員の協議会をひらくことが必要となる。ここからして、合法運動に従事する党擁護派の社会民主主義者を参加させ、「地方の党指導機関とのしっかりした組織上の結びつきをうちたてる覚悟のある合法運動内の社会民主主義的グループ」の代表者を参加させることが必要となる。わが国の合法的な社会民主主義者のうちで、だれが口先だけでなく、真に、実際に党擁護派であるか、彼らのうちでだれが、右に指摘した新しい活動条件を真に理解し、またそれと革命的社会民主主義派の従来の諸任務とを結合することを真に理解したか、だれがこれらの任務を果たすために活動する誠実な覚悟をもっているか、どういうグループが党とのしっかりした組織上の結びつきをうちたてる覚悟を真にもっているか、――これらは、現地で、日常の非合法活動の行程そのもののなかでしか決定することはできない。

こうした活動にもとづいて、いまや、いっさいの社会民主主義勢力が結束すること、中央と地方の党活動家が全精力をあげて協議会の準備にとりかかること、この会議がわが党が統一を最後的にかため、きたるべき革命戦のための、より広範な、より堅固な、より屈伸性のあるプロレタリア基地の創設を協力一致しておしすすめるのをたすけるであろうことを期待しよう。

『ツィアル－デモクラート』第一一号、一九一〇年二月一三（二六）日
全集、第五版、第一九巻、一九二－二〇一ページ所収
邦訳全集、第一六巻、一五四－一六二ページ所収

政論家の覚え書

一 召還主義(八)の支持者と擁護者の「政綱」について

さきごろパリで、「フペリョード」グループ(六)の出版にかかわる小冊子『現情勢と党の諸任務。一ボリシェヴィキ・グループの作成した政綱』が発行された。このグループというのは、昨年の春『プロレタリー』(九)拡大編集局会議(一〇)が、新しい分派が形成されたと声明したそのボリシェヴィキ・グループである。いまや、「一五名の党員——七名の労働者と八名のインテリゲンツィアとからなる」(同グループがわれわれに告げるところでは)このグループが、それ自身の別個の「政綱」を、まとまった形で、系統的に、積極的に叙述しようとする試みにのりだしているのである。この政綱の本文は、でこぼこをすべて平らにし、角のたったところをけずりとり、このグループが党と意見を異にしている点よりはむしろ、意見が一致している点を強調する目的で、慎重に、入念に集団的な仕上げをした跡をはっきりとどめている。それだけに、この新しい政綱は、われわれには、ある潮流の見解を公式に述べたものとして、いっそう貴重である。

このボリシェヴィキ・グループは、まず同グループがどのように「わが国の現在の歴史的情勢を理解している」かを述べ（第一章、三—一三ページ）、ついで同グループがどのように「ボリシェヴィズムを理解している」かを述べている（第二章、一三—一七ページ）。ところが、このグループはこのどちらもよく理解してはいない。

第一の問題をとってみよう。ボリシェヴィキの見解（と党の見解）は、現情勢についての一九〇八年一二月協議会(一一)の決議に述べられている。新しい政綱の筆者たちは、この決議に表明されている見解に同意しているのだろうか？ そうだとすれば、彼らはどうしてそのことを率直にかたってはならないのか？ そうだとすれば、なんのために別個の政綱を起草し、情勢についてのそれ自身の別個の「理解」の叙述にとりかかったのか？ そうでないとすれば、これまたどうして、新グループが党の見解に反対するまさにそ

の点を、はっきりとかたらないのか？

かんじんな点は、この決議の意義が新グループ自身にはっきりしていない、ということにある。新グループは、無意識のうちに（あるいは、なかば無意識のうちに）、この決議とはあいいれない召還派の見解に傾いている。新グループがその小冊子のなかであたえている通俗的な解説は、この決議のすべての命題についてでなく、その一部の命題だけについてであって、その他の部分は理解していない（おそらく、その意義に気がついてさえいないらしい）。一九〇五年の革命を呼びおこした基本的な諸要因は、いまでも作用しつづけている——と決議は述べている。新しい革命的危機が成熟しつつある（ヘ項）。闘争の目標は依然として、ツァーリズムを打倒し共和制を獲得することである。プロレタリアートは、闘争において「指導的」役割を演じなければならないし、「政治権力の獲得」をめざさなければならない（ホ項および（1））。世界市場と世界政治の諸条件は、「国際情勢をますます革命的なものに」している（ト項）。これらの命題を、新政綱は通俗的に解説していて、そのかぎりでは、政綱はボリシェヴィキおよび党とまったく歩調をあわせているし、そのかぎりでは、それは正しい見解を述べ、有益な仕事をしている。

しかし、この、そのかぎりでは、ということを強調しなければならないところが難点なのである。新グループが、この決議のその他の諸命題を理解せず、これらの命題と残りの諸命題との関連を理解せず、とくに、これらの命題が、ボリシェヴィキには固有だが、このグループには固有でない、召還主義にたいする非和解的な態度と関連があることを理解していないことが難点なのだ。

新しい革命は避けられない。革命は、ふたたび専制を打倒しようとするにちがいないし、また打倒してしまうにちがいない、——新政綱の筆者たちはこう言っている。これはそのとおりである。だが、今日の社会民主主義的革命家が知りまた銘記しなければならないことは、これだけではない。社会民主主義者は、この革命が新しい仕方でわれわれのほうにむかってすすんでくること、われわれは新しい仕方で（いままでとはちがった仕方で、いままでのような仕方だけではなく、いままでのような武器と闘争手段だけによってではなく）それにむかってすすまなければならないこと、専制それ自体がいままでと同じものではないことを、理解できなければならない。ところが、このことを召還主義の擁護者たちは認めようとしないのだ！ 彼らはあくまでも、一面的な立場にとどまりたがっており、またそうすることによって、自分の意に（二）反し、自分の意識がどうあろうと、日和見主義者と解党派に奉仕し、一方の側への

かたよりによって、他方の側へのかたよりをたすけているのである。

専制は新しい歴史的段階にはいった。それは、ブルジョア君主制への転化の道を、一歩すすんでいる。第三国会は、特定の諸階級との同盟である。第三国会は偶然の機関ではなくて、この新しい君主制の体系における必然的な機関である。専制の新しい農業政策もまた偶然のものではなくて、新しいツァーリズムの政策を構成する必然的な、ブルジョア的な意味で必然的な、またそのブルジョア性によって必然的な一環である。われわれが直面しているのは、新しい革命を生みだす独特の諸条件をもった独特の歴史的段階である。もしこれまでどおりのやり方だけで行動するなら、もし国会の演壇そのものを利用するすべを知らない（その他等々）なら、この特異性を把握することはできないし、この新しい革命の準備をすることもできない。

このあとの命題（国会の利用）を、召還派は理解することができないのである。そして、召還主義を「正当な考えの一つ」だと公言している（問題の小冊子の二八ページ）召還主義の擁護者たちは、これまでのところ、この命題と、思想の全範囲との関連、現情勢の特異性を認めることとの関連、自分の戦術においてこの特異性を考慮に入れようとつとめることとの関連を理解できないでいるのだ！　彼らは、われわれは「革命と革命との中間期」に際会しているの（二九ページ）とか、現在の情勢は「民主主義革命の二つの波の中間の過渡的情勢」である（三二ページ）とか繰りかえしているが、この「過渡期」の特異性がどういう点にあるのか、彼らは理解することができないのである。だが、この過渡期を理解せずには、革命に有利な仕方でそれから脱けだすことはできないし、新しい革命の準備をすることもできないし、第二の波に移行することもできない！　なぜなら、新しい革命の準備は、その革命が避けられないということを繰りかえして言うだけにとどまることはできないからである。その準備とは、この過渡的情勢の特異性を考慮に入れるような宣伝、扇動および組織をつくりだすことでなければならない。

つぎにあげるのは、人々が過渡的情勢をかたりはするが、この過渡期とは何であるかを理解していないことを示す一例である。「ロシアには真の憲法はまったくなく、国会は権力も意義もない憲法の幻影にすぎないということ、このことは住民大衆が経験をつうじてよく知っているだけでなく、いまや全世界に明らかになっている」（一一ページ）と。一二月協議会による第三国会の評価を、これとくらべてみたまえ。「ツァーリズムと黒百人組的地主および上層の商工業ブルジョアジーとの同盟は、六月三日のクーデタ

ーと第三国会の開設によって、公然と承認され、認証された」〔全集、第一五巻、三〇九ページ〕。[3]

この決議は、一年間にわたって、党の出版物でさまざまに繰りかえして噛んでふくめるように説明されてきたのに、それでもやはり政綱の筆者たちがこの決議を理解しなかったことは、「全世界に明らか」ではないだろうか？　そして、それを理解しなかったのはもちろん、彼らの呑みこみが悪いためではなく、召還主義と召還主義的な考え方に彼らが影響されているためなのである。

わが国の第三国会は、黒百人組＝オクチャブリスト[三]的国会である。ロシアのオクチャブリストと黒百人組が「権力と意義」をもっていない（政綱の筆者たちによるとそういうことになるが）と主張するのは、ばかげている。「真の憲法」が欠けており、専制が全権力を保持しているからといって、この権力が全国民的な規模で全国家的意義をもつ公然と活動する諸機関内に一定の諸階級の反革命的同盟を組織せざるをえないような、また一定の諸階級自身が下からツァーリズムに手を差しのべる反革命的ブロックにみずからを組織していくような、独特の歴史的情勢が生ずるのをすこしも妨げるものではない。もし、ツァーリズムとこれらの階級との「同盟」（権力と収入を農奴主的地主の手に確保することを目的とする同盟）が、現在の過渡期における階級支配とツァーリおよびその一味の支配との独特の形態であり、「革命の第一の波」が敗北したという事情のもとでの国のブルジョア的進化が生みだす形態であるならば、国会の演壇を利用せずには、過渡期を利用することなどは問題にもなりえない。それならば、反革命派が〔公衆に〕話しかけるその演壇を、革命の準備のために利用する独特の戦術が、歴史的情勢全体の特異性から生ずる必須の戦術である。だが、もし国会が、「権力も意義もない」憲法の「幻影」にすぎないならば、ブルジョア的ロシアの発展、ブルジョア君主制の発展における、上層諸階級の支配形態の発展等々における新しい段階はなにも存在しないし、それならば、召還派は、もちろん、原則的に正しいことになる！

われわれが引用した政綱の文句を、偶然的な失言と考えてはならない。『国会について』という特別の章（二五一二八ページ）には、冒頭からこう書いてある。「今日までのすべての国会は、現実の力も権力ももたず、国内における諸勢力の真の相互関係を表現しない機関であった。政府は人民運動の強襲におされて、一方では、大衆の激昂を直接的な闘争の道からそらして平穏な選挙闘争の道に引きいれ、他方では、これらの国会のなかで、革命との闘争で政府を支持できるような社会グループと話合いをつけるため

に、それを召集したのである」——と。これは、思想の、もしくは思想の断片の、こんぐらかった糸玉とでも言うべきものである。もし政府が、反革命的な諸階級と話合いをつけるために国会を召集したのだとすれば、そこから生ずる結論は、まさに、第一国会と第二国会は（革命をたすけるための）「力と権力」をもっていなかったが、第三国会は（反革命をたすけるための）「力と権力」をもっていたし、いまももっている、ということである。革命家は、革命をたすけるうえに無力だった機関には参加しなくてもよかった（そして、ある種の事情のもとでは参加してはならなかった）。これは議論の余地がない。政綱の筆者たちは、革命期のこうした機関を、反革命をたすける力をもつ「革命の中間期の国会」といっしょくたにして、途方もない誤りをおかしている。彼らは、正しいボリシェヴィキ的考察を、実際にはそこまでおよぼされていないような、まさにそういう場合に、おしひろめているのだ！　このことは、まさしく、ボリシェヴィズムを戯画化することを意味する。

政綱の筆者たちは、ボリシェヴィズムについての自分たちの「理解」を要約して、特別の項をかかげ（一六ページ）さえしているが、そこではこの「戯画的」革命性が、いわば、典型的に表現されている。つぎにかかげるのがこの項の全文である。

「（d）将来革命が終結するまでは、国会への参加をもふくめて、労働者階級のすべての半合法的および合法的な闘争方法と手段は、独自の決定的な意義をもつことはできず、直接の革命的な、公然たる大衆闘争のために勢力を結集し準備する手段であるにすぎない。」

つまり、「革命が終結した」あとでは、議会活動をも「ふくめて」合法的な闘争方法が、独自の決定的な意義をもつことができる、ということになる！

これはまちがっている。そのときにも、そういう意義をもつことはできないのだ。「フペリョード派」の政綱には、たわごとが書かれている。

さらに、「革命が終結するまえには」、合法的および半合法的闘争方法以外のすべての闘争方法、すなわち、すべての非合法的な闘争方法は、独自の決定的な意義をもつことができる、ということになる！

これはまちがっている。「革命が終結した」あとも（たとえば、非合法の宣伝サークル）、また「革命が終結するまえ」にも（たとえば、敵から資金をうばうことや、力ずくで被逮捕者を釈放させることや、スパイを殺すことなど）「独自の決定的な意義をもつことはできず」……（「政綱」の本文に書かれているとおりの手段）……「であるにすぎない」ような非合法的闘争方法もある。

さらに、ここで言っているのは、どういう「革命の終結」のことなのか？　どうやら社会主義革命の終結のことではないようだ。なぜなら、そのときには、一般に階級がなくなる以上、労働者階級の闘争もないであろうから。したがって、ブルジョア民主主義革命の終結のことを言っているのだ。そこでこんどは、政綱の筆者たちがブルジョア民主主義革命の終結ということをどう「理解したか」をみてみよう。

一般的にいって、この用語で二つのことを理解できる。もしこれを広い意味につかうなら、この用語は、ブルジョア革命の客観的な歴史的諸任務の解決を、この革命の「終結」を、つまり、ブルジョア革命を生みだす原因そのものの除去を、ブルジョア革命の過程全体の終結を、意味する。この意味では、たとえばフランスでは、ブルジョア民主主義革命は、やっと一八七一年に終結した（一七八九年に開始されたのに）。だが、もしこの用語を狭い意味につかうなら、それは個々の革命を、ブルジョア諸革命のうちの一つを、またそう言いたければ、旧支配を撃ちはするが撃ちのめしはせず、次のブルジョア革命の原因を取りのぞかない「波」の一つを、念頭においている。この意味では、ドイツの一八四八年の革命は、一八五〇年または五〇年代に「終結」したが、それによっては、六〇年代の革命的高揚の原因はすこしも取りのぞかれなかった。またたとえば、フランスの一七八九年の革命は、一七九四年に「終結」したが、それによっては、一八三〇年と一八四八年の革命の原因はすこしも取りのぞかれなかったのである。

「将来革命が終結するまでは」という政綱のことばを、広い意味に解釈しようが、また狭い意味に解釈しようが、いずれにしても、そこにはなんの意味も見いだせない。ロシアのありうべきブルジョア諸革命の全期間が将来終結するまでの革命的社会民主主義派の戦術を、いまきめようと試みることが、まったくばかげているのは言うまでもない。また、一九〇五―一九〇七年の革命の「波」についていいえば、すなわちロシアにおける最初のブルジョア革命についていえば、政綱それ自身、「それ（専制）が革命の最初の波をうちやぶったこと」（一二ページ）、われわれが「革命の中間」期に、「民主主義革命の二つの波の中間」の時期に際会していることを、認めざるをえないのである。

「政綱」の、このはてしもない、抜けだしようのない混乱の源は、どこにあるのか？　それはまさに、この政綱が召還主義的な考え方からすこしも抜けださず、その基本的な誤りを訂正せず、それに気づきさえせずに、ただ〔サークル〕外交的に召還主義と一線を画している点にある。それはまさに、「フペリョード派」にとって召還主義が「正

当な考えの一つ」である点に、すなわち、戯画的ボリシェヴィズムの召還主義的考え方が、彼らにとって法則であり、模範であり、比肩するもののない模範である点にある。こういう斜面に立った人は、抜けだしようのない混乱の泥沼にとめどもなくころげおちてまったくころげおちてしまうであろう。そういう人は、ことばやスローガンを適用しうる諸条件や、それらの意義の限界を熟考することもできずに、それらを繰りかえすのである。

たとえば、なぜボリシェヴィキは一九〇六―一九〇七年に、あれほどしばしば、革命は終わっていないというスローガンを、日和見主義者に対置したのか？　それは、客観的諸条件が、狭い意味ででも革命の終結などということは問題になりえないようなものだったからである。せめて第二国会の時期をとってみたまえ。世界で最も革命的な議会と、おそらくは最も反動的な専制政府とがあった。ここからして、上からのクーデターか、下からの蜂起以外には、直接の活路はなかったのであって、すばらしく賢明な物識り学者たちがいまどんなに頭を横にふろうとも、クーデター〔一九〇七年六月三日のクーデター〕以前には、政府がクーデターに成功し、クーデターがすらすらはこび、ニコライ二世がそのために首の骨をくじくことがないとは、だれ一人うけあえるものはいなかったのである。「革命は終わっていない」というスローガンは、最も生きいきとした、直接に重要な、実際に感知できる意義をもっていた。なぜなら、このスローガンだけが、あるがままのものを、諸事件の客観的な論理にしたがって事態がすすんでいる方向を、正しく表現していたからである。ところで、召還派自身現在の情勢を「革命の中間」の情勢であると認めている今日、この召還主義を「革命的一翼の正当な考えの一つ」――「将来、革命が終結するまで」――としてえがきだそうと試みることは、はたして手のつけられない混乱ではないだろうか？

この出口のない矛盾の環から抜けだすためには、召還主義と〔サークル〕外交を弄するのではなく、それの思想的基礎を断ちきることが必要であり、一二月決議の見地に立ち、この見地を最後まで考えぬくことが必要である。現在の革命中間期は、偶然ということでは説明されない。いまではすでに、われわれが直面している情勢が、専制の発展における、ブルジョア君主制、ブルジョア的＝黒百人組的議会制度、農村におけるツァーリズムのブルジョア的政策、反革命的ブルジョアジーによるこれらいっさいのものの支持の発展における特別の一段階であることは疑いない。この時期は、疑いもなく、「革命の二つの波の中間の」過渡期であるが、第二の革命の準備をととのえるには、まさに

この過渡期の特異性を把握し、この困難な、苦しい、暗い、だが「戦役」の行程によってわれわれに押しつけられた過渡期に、自己の戦術と組織を適応させるすべを知らなければならない。国会の演壇を利用することは、その他のあらゆる合法的可能性の利用とおなじように、なにも「めざましい」結果をもたらさない、あまり高度でない闘争手段に属する。しかし、過渡期は、その特有の任務が勢力の直接の進出、その断固たる進出にはなくて、勢力を準備し結集することにあるからこそ、過渡期なのである。この外面的な華やかさのない活動を組織する能力をもつこと、黒百人組＝オクチャブリスト的国会の時期に固有なすべての半公然の機関をこの活動のために利用する能力をもつこと、これを基盤として、革命的社会民主主義派のあらゆる伝統、その最近の英雄的過去のあらゆるスローガン、その活動の全精神、日和見主義と改良主義にたいするその非妥協性全体を固守する能力をもつこと、これが党の任務であり、これが当面の任務である。

われわれは、一九〇八年の一二月協議会の決議に述べられた戦術からの新政綱の第一の後退を検討した。われわれは、これが召還主義的思想への後退であり、現情勢のマルクス主義的分析とも、革命的社会民主主義者の戦術一般の基本的な諸前提とも、縁もゆかりもない思想への後退であることをみた。われわれはいまや、新政綱の第二の独得の特色を検討しなければならない。

それは、「新しいプロレタリア」文化を「創造」し「大衆のあいだに普及させる」という、新グループのとなえる任務である。すなわち、「プロレタリア科学を発展させ、プロレタリアのあいだの真の同志的関係をつよめ、プロレタリア哲学をつくりあげ、芸術をプロレタリアの志向と経験との方向に導く」（一七ページ）というのである。

これこそ、新政綱のなかで、事の核心をおおいかくすのに役だっている幼稚な駆引きの見本だ！「科学」と「哲学」の中間に「真の同志的関係の強化」をはさむというのは、はたして幼稚ではないだろうか？新グループは、政綱のなかに、予想される自分たちへの侮辱をもちこみ、他のグループ（ほかでもなく、まず第一に正統派ボリシェヴィキ）が「真に同志的な関係」を破壊したという非難をもちこんでいる。この滑稽な条項の現実の内容は、まさにこのようなものである。

「プロレタリア科学」もまた、ここでは「わびしく、所をえていない」ように見える。第一に、われわれは今日、ただ一つのプロレタリア科学――マルクス主義しか知っていない。政綱の筆者たちは、なぜかこの唯一の正確な用語〔マルクス主義〕を系統的に避けて、いたるところに「科

学的社会主義」ということばをおいている（一三、一五、一六、二〇、二一ページ）。わがロシアでは、マルクス主義の直接の敵でさえ、このあとの用語〔科学的社会主義〕の使用権を要求していることは、周知のとおりである。第二に、もし政綱のなかに「プロレタリア科学」を発展させる任務をかかげるのなら、ここで念頭においているのは現代におけるまさにどのような思想的・理論的闘争なのか、また政綱の筆者たちはまさにだれの味方なのか、はっきりかたる必要がある。これをだまっているのは、幼稚なごまかしというものである。なぜなら、一九〇八―一九〇九年の社会民主主義者の文献を知っているものなら、だれにでも事の核心は明らかだからである。現代では、科学、哲学、芸術の分野で、マルクス主義者とマッハ主義者の闘争がおしだされている。このだれでも知っている事実に眼を閉ざすことは、すくなくとも滑稽である。「政綱」は、意見の相違をあいまいにするためにではなく、それを説明するためにこそ書くべきである。

わが筆者たちは、政綱のここに引用した箇所で、不器用にも馬脚をあらわしている。「プロレタリア哲学」ということばで、実際にはほかならぬマッハ主義をさしていることは、だれでも知っていることであり、物わかりのよい社会民主主義者ならだれでも、たちどころに「新しい」匿名の面被をひきはがすだろう。こんな匿名を考えだしても、なんにもならない。そのかげにかくれても、なんにもならない。実際には、新グループの中核をなす最も有力な文筆家たちはマッハ主義者であり、彼らは非マッハ主義哲学を非「プロレタリア」哲学とみなしているのである。

政綱のなかでこのことをかたりたかったなら、こういうふうに言うべきだった。――新グループは、哲学と芸術における非「プロレタリア的な」、すなわち、非マッハ主義的な理論とたたかう人々を結合している、と。これならば、だれでも知っている思想的潮流の率直な、正直な、公然たる進出であり、他の諸潮流との闘争への進出であろう。思想闘争が、党にとって重要な意義をもっていると認めるときは、かくれたりせずに、まっこうから宣戦を布告すべきである。

そこでわれわれは、政綱のなかでマルクス主義との哲学上の闘争が隠蔽された形で出されているのに、明確な、はっきりした答えをあたえるよう、すべての人に呼びかけよう。実際、「プロレタリア文化」についてのあらゆる空文句は、ほかならぬマルクス主義との闘争を隠蔽している。新グループの「独創性」は、このグループがまさにどういう哲学上の潮流を擁護するかを率直にかたらずに、党の政綱のなかに哲学をもちこんだことである。

しかし、ここに引用した政綱のことばがもっている現実の内容はまったく否定的なものであるとは、言えないであろう。それらのことばのかげには、いくらかの肯定的な内容もひそんでいる。この肯定的な内容は、マクシム・ゴーリキーという一言で表現することができる。

実際、ブルジョア新聞雑誌がすでに（歪曲し曲解したうえで）わめきたてた事実を、すなわち、エム・ゴーリキーが新グループの支持者の一人であるということをかくしても、なんにもならない。ところで、ゴーリキーは、無条件にプロレタリア芸術の最大の代表者であって、プロレタリア芸術のために多くのことをしたし、もっと多くのことをすることができる。社会民主党のどんな分派でも、当然、ゴーリキーが自派に属することを誇りとしてよい。だが、これを理由にして、政綱のなかに「プロレタリア芸術」をはさむことは、この政綱に貧困証明書を交付することを意味し、まさに自分たちの「権威主義」をみずから暴露する文筆家サークルに、自分たちのグループを引きさげることを意味する。……政綱の筆者たちは、かんじんなことを率直に明らかにせずに、権威者の承認に反対して弁じたてている。かんじんなことは、ボリシェヴィキが哲学において唯物論を擁護し、また召還主義とたたかっていることが、彼らには、マッハ主義の敵が「盲信している」個々の「権威者」（見えすいたあてつけだ！）の企図と思えるということである。このような論難は、いうまでもなく、まったく子供じみたものである。だが、「フペリョード派」こそ、よくないやり方で権威者をあつかっているのである。ゴーリキーがプロレタリア芸術の権威者であることは議論の余地がない。この権威者を、マッハ主義と召還主義をつよめるために「利用」しようと試みる（いうまでもなく、思想的な意味で）ことは、権威者を不当にあつかう見本である。

エム・ゴーリキーは、マッハ主義と召還主義に共感をよせているにもかかわらず、プロレタリア芸術における巨大なプラスである。「プロレタリア」芸術なるものの発展を特別のグループの任務としてかかげることによって、党内で召還派とマッハ主義者のグループとを独立したものにする政綱は、社会民主主義的プロレタリア運動を発展させるうえではマイナスである。なぜなら、この政綱は、偉大な権威者の活動のうちでまさにこの権威者の弱点をなすもの、またこの権威者がプロレタリアートにもたらしている巨大な利益の総和に負数としてくわわっているものを、うちかため、利用しようとのぞんでいるからである。

二　わが党内の「統合の危機」

この表題を読んだら、おそらくある読者はすぐには自分の眼を信じないだろう。「もうたくさんだ！　危機という危機で党内で経験しなかったものが一つでもあるか――それなのに、いきなりまたもや新しい危機、統合の危機だって？」と。

このように異様に聞こえる表現は、私がリープクネヒトから借りてきたものである。リープクネヒトは、一八七五年にエンゲルスにあてた手紙（四月二一日付）のなかで、ラサール派とアイゼナッハ派[一四]との合同について語ったさいに、この表現をもちいた。マルクスとエンゲルスは、当時この合同からはなにもよい結果は生じないだろうと考えていた[一五]。リープクネヒトは彼らの危惧を反駁し、あらゆる危機を首尾よく耐えぬいてきたドイツ社会民主党は「統合の危機」をも耐えぬくだろうと断言した（グスタフ・マイアー『ヨハン・バプティスト・フォン・シュヴァイツァーと社会民主党』、イェーナ、一九〇九年、四二四ページを見よ）。

わが党、ロシア社会民主労働党も、自党の統合の危機を首尾よく耐えぬくであろうということは、すこしの疑いもない。ところで、わが党がいまこうした危機に際会していることは、中央委員会総会[一六]の諸決定と総会後のいろいろな出来事に通じている者ならだれでも理解していることである。総会の諸決議から判断するなら、統合はきわめて完全なものであり、またまったく完了したものと思えるかもしれない。だが、今日、一九一〇年五月はじめに見られる状態から、中央機関紙（『ソツィアル－デモクラート[一七]』）が解党派の発行している『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ[一八]』にたいしておこなっている断固たる闘争から、プレハーノフその他の党擁護派のメンシェヴィキと「ゴーロス派」とのあいだに燃えあがった論戦から、中央機関紙にたいする「フペリョード」グループのこのうえもなく口ぎたない攻撃（出版されたばかりの同グループのリーフレット『ボリシェヴィキの同志たちへ』を見よ）から判断すれば、局外者には、統合はいっさい幻影であるように見えかねない。

党のあからさまな敵は、歓呼の声をあげている。召還主義の支持者であり援護者である「フペリョード派」は、猛烈に悪罵をはなっている。解党派の首領たち――アクセリロード、マルトィノフ、マルトフ、ポトレソフ、その他――は、その『プレハーノフの「ドネヴニーク」への必要な補足[一九]』のなかで、それ以上に憤然として罵声をはなっている。「調停派」は、両手をひろげ、泣き言を言い、たよりない空文句を語っている（トロツキーの見地に立っている「ウィーン党擁護派社会民主主義クラブ」が、一九一〇

年四月一七日に採択した決議(一七)を見よ）。

しかし、わが党の統合がこのような仕方ですすんで、これとは違った仕方ですすまない原因、総会における（外見上の）完全な統合がいまや（外見上の）完全な分裂といれかわった原因、その原因はなにかという最も重要で基本的な問題、さらに、わが党内外の「力関係」によれば今後の党の発展の方向はどうでなければならないかという問題――これらの基本的な問題には、解党派（ゴーロス派）も、召還派（フペリョード派）も、調停派（トロツキーと「ウィーン派」）も、なんの回答もしていない。

悪罵や空文句は回答ではない。

（1） 統合についての二つの見解

解党派と召還派は、人を感動させるほどに協同一致して、ボリシェヴィキを（前者はさらにプレハーノフをも）さんざんに罵倒している。ボリシェヴィキに罪があり、ボリシェヴィキ中央部に罪があり、「レーニンとプレハーノフの『個人主義的』性癖」に罪があり（『必要な補足』一五ページ）、「ボリシェヴィキ中央部の旧メンバーたち」の「無責任な一グループ」に罪がある、とされている（「フペリョード」グループのリーフレットを見よ）。この点での解党派と召還派の協同一致は、完全無欠である。正統派ボリシェヴィズムに反対する彼らのブロック（一度ならず総会での闘争を特徴づけたブロックであるが、それについてはあとで別にふれる）は、争う余地のない事実である。同じようにブルジョア思想への従属をあらわし、同じように反党的である二つの極端な潮流の代表者たちは、その党内政策のうえで、ボリシェヴィキとの闘争のうえで、また中央機関紙を「ボリシェヴィキ的」と宣言するうえで、完全に意見が一致している。しかし、アクセリロードとアレクシンスキーのきわめて激しい悪罵は、党の統合の意味と重要性を彼らがまったく理解していないことを隠蔽しているにすぎない。トロツキー（――ウィーン派）の決議が、アクセリロードやアレクシンスキーの「見解の吐露」と違っているのは、外見にすぎない。この決議は、きわめて「慎重」に作成されていて、「分派を超越した」公平さをもって自任している。だが、この公平さの意味はなにか？「ボリシェヴィキの首領たち」にあらゆる点で罪がある、というのだ。――これはアクセリロードとアレクシンスキーのそれと同じ「歴史哲学」である。

ウィーン派の決議の最初の節にはこう言っている。「……すべての分派と潮流の代表者たちは、……」（総会における）「その決定によって、一定の条件で、一定の人物やグループや機関と協同して、採択された諸決議を遂行す

る責任を、熟慮のうえ意識的に引きうけた」と。ここで問題とされているのは、「中央機関紙内部の紛争」のことである。だれが中央機関紙で総会の「諸決議を遂行する責任を負っている」のか？　明らかに、中央機関紙の多数派、すなわちボリシェヴィキとポーランドの代表たちとである。彼らこそ、「一定の人物と協同して」すなわちゴーロス派やフペリョード派と協同して、総会の諸決議を遂行する責任を負っているのだ、と。

総会の主要な決議は、わが党の最も「切実な」諸問題、すなわち、総会まえには最も多くの議論を呼びおこしていたが、総会後には議論の余地が最もすくなくなるはずであった諸問題にあてられた部分で、なんと述べているか？

それは、一方では、非合法の社会民主党を否定し、この党の役割と意義をひくめること等々が、他方では、社会民主党の国会活動と合法的可能性の利用とを否定し、この両者の重要性を理解しないこと等々が、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの影響の現われである、と述べている。

では、この決議にはいったいどういう意味があるのか？

それは、ゴーロス派は、誠意をもって、きっぱり、非合法党の否定やその軽視等々と手をきるべきであり、それらを偏向と認めるべきであり、それから脱却し、こうした逸脱を敵視する精神で積極的な活動をおこなうべきであったし、――フペリョード派は、誠意をもって、きっぱり、国会活動と合法的可能性との否定等々と手をきるべきであったし、――中央機関紙の多数派は、ゴーロス派とフペリョード派が、総会の決議にくわしく述べられていた「諸偏向」を、誠意をもって、首尾一貫して、きっぱり否認することを条件として、あらゆる手段で彼らを「協同」の活動に引きいれるべきであった、ということなのか？

それとも、決議の意味は、中央機関紙の多数派は、これまでどおりに、いやもっと無遠慮にさえ解党主義を擁護しつづけている「現在の」ゴーロス派や、これまでどおりに、いやもっと無遠慮にさえ召還主義や最後通告主義[一六]その他の正当性を主張しつづけている現在のフペリョード派「と協同して」決議（解党主義的偏向と召還主義的偏向との克服についての）を遂行する責任を負っている、ということなのか？

トロツキーの決議のなかの響きの高い空文句がいかにも無内容なこと、――それが実際には、アクセリロード一派、アレクシンスキー一派が立っているのとまったく同じ立場を主張するのに役だっていることを知るには、こういう質問を出すだけで十分である。

トロツキーはその決議の最初の数語のうちに、最悪の調

停主義、括弧づきの「調停主義」の全精神、一定の方針でもなく、一定の精神でもなく、党活動の一定の思想的＝政治的内容でもなくて、「一定の人物」を問題にする、サークル的＝俗物的な調停主義の全精神を表明した。
　実際には、解党派と召還派に最も忠実に奉仕しており、したがって、さも党的な、さも反分派的な大言壮語によって、より巧みに、より精妙に、より美美しいことばをつかって自分をつつみ隠しているだけに、それだけますます党内の危険な害悪となっているトロツキー一派の「調停主義」と、解党主義と召還主義を党から清掃しようとする真の党性との天地の相違は、一にこの点にある。
　実際、党の任務としてわれわれにはなにがあたえられているのか？
　その方針と無関係に、その活動の内容と無関係に、解党主義と召還主義にたいするその態度と無関係に「和解させる」必要のある「一定の人物やグループや機関」が「あたえられている」のか？
　それとも、われわれには、党的な方針があたえられ、われわれの全活動の思想的＝政治的方向と内容とがあたえられ、この活動から解党主義と召還主義を清掃する任務——「人物やグループや機関」とは無関係に、この方針に不賛成であるかまたはこの方針を遂行しない「人物や機関やグループ」の反抗を排して実現しなければならない任務が、あたえられているのか？
　どんな統合であれ党の統合を実現する意義と条件については、二つの見解がありうる。この二つの見解の相違を理解することは、きわめて重要である。なぜなら、わが党の「統合の危機」が発展するなかで、二つの見解がからみあい、ごちゃごちゃになっているからであり、それぞれの見解のあいだのけじめをつけなければ、この危機を解明することはできないからである。
　統合についての一つの見解によれば、「一定の人物やグループや機関」の「和解」を最も重視することができる。党活動についての、その活動の方針についての、それらの人物やグループや機関の見解の統一は、第二義的な問題になる。意見の相違については、その根元、その意義、その客観的条件を明らかにするのではなくて、それを隠しておくようにつとめなければならない。人物やグループを「和解させること」——これが主要なことである。もし彼らが共同の方針を遂行するうえで意見が一致しないなら、だれにでも受けいれられるようにこの方針を解釈する必要がある。おのれも生きよ、他も生かせというわけだ。これは、不可避的にサークル外交にみちびく俗物的「調停主義」である。意見の相違の源を「ふさぐこと」、この相違につい

てだまっていること、なにがなんでも「紛争」を「おさまらせること」、敵対的な諸傾向を中和させること――このことである。非合法党が国外に作戦基地をもっているという種の「調停主義」がおもに注意をはらうのは、こういうこ条件のもとで、このサークル外交が、「和解」と「中和」のありとあらゆる試みにさいして「正直なブローカー」の役割を演じる「人物やグループや機関」に、門戸をあけはなしているのも当然である。

総会でのこうした試みの一つについて、マルトフは『ゴーロス』の第一九―二〇号で、つぎのように語っている。[二九]「メンシェヴィキ、『プラウダ派』およびブンド派[三〇]は、次のような中央機関紙（編集局）の構成を提議した。それは、党思想の相対立する二つの潮流の『中和』を保障し、両者のどちらをも明確な多数派とならせず、そうすることによって、党機関紙が、どの本質的な問題についても党活動家の大多数を統一できる中間的な方針をつくりあげざるをえないような、そういう構成である。」

周知のように、メンシェヴィキの提案は通らなかった。中和者として中央機関紙（編集局）に立候補したトロツキーは落ちた。同じ職務へのブンド派の立候補は――この立候補は、メンシェヴィキがその演説のなかで提案したものである――、票決にも付せられなかった。

これこそ、ウィーン決議を書いた悪い意味の「調停派」の事実上の役割であって、いましがた私が受けとった『オートクリキ・ブンダ』[三一]第四号所載のイオーノフの論文に同派の見解が表明されている。メンシェヴィキは、自派を多数者とする中央機関紙を提案する決心がつかなかったが、それと同時に、さきに引用したマルトフの議論から明らかなように、党内に相対立する二つの潮流があることを承認していた。メンシェヴィキには、自派を多数者とする中央機関紙を提案することなど、思いもよらなかった。彼らは、一定の方向をもった中央機関紙をかちとろうと企てさえしなかった（総会では、メンシェヴィキがなんらの方向ももたなかったことは、それほど明らかであって、彼らになお要求され、期待されていたことは、誠意をもって、一貫して解党主義を否認せよということだけであった）。メンシェヴィキは、中央機関紙を「中和」させようとつとめ、中和者としてブンド派またはトロツキーを押しだそうとした。ブンド派とトロツキーは、一方の側が解党主義を否認するかしないかにはかかわりなく、「一定の人物やグループや機関」のあいだの「縁結び」を引きうける仲人の役割を演ずるはずであった。

この仲人の見地こそ、一にトロツキーとイオーノフの調停主義の「思想的基礎」をなしているものである。彼らが、

統合がなりたたなかったといってこぼしたり泣き言を言ったりするときには、cum grano salis〔おおいに割引して〕理解すべきである。それは、仲立ちがまとまらなかったというふうに理解しなければならない。トロツキーとイオーノフがいだいていた統合への希望、つまり、解党主義にたいするその態度にかかわりなく「一定の人物やグループや機関」と統合しようという希望が「失敗したこと」は、仲立ちの失敗を意味するだけであり、仲人の見地がまちがっていて、見こみがなく、みじめなものであることを意味してはいるが、まだけっして党統合の失敗を意味するものではない。

この統合についてはもう一つの見解がある。このもう一つの見解というのは、「(総会にとって、また総会における)一定の人物やグループや機関」のあれこれの構成とはかかわりのない、幾多の深い客観的な原因があって、それが、すでにずっと以前から、ロシアの社会民主主義者の二つの古くからの分派、二つの主要な分派のうちに——ときとすると「一定の人物やグループや機関」のだれかれの意志や意識に反してさえ——統合の思想的・組織的基礎をつくりだすような変化を引きおこしはじめたのであり、いまもたえず引きおこしつづけている、と見る点にある。これらの客観的条件は、ロシアのブルジョア的発展の今日の時代、ブルジョア反革命の時代、専制がブルジョア君主制の型にみずからを改組しようと試みている時代の特質に根ざしている。これらの客観的条件は、同時にまた、たがいに切りはなせないようにあい関連して、労働運動の性格のうちに、労働者の社会民主主義的前衛の構成や型や相貌のうちに変化を引きおこし、社会民主主義運動の思想的＝政治的諸任務の変化を引きおこしている。だから、解党主義(＝自分を社会民主主義の一部とみなしたがっている半自由主義)と召還主義(＝自分を社会民主主義の一部とみなしたがっている半無政府主義)とを生みだす、プロレタリアートにたいするあのブルジョア的影響は、偶然のものではなく、なにか個人の悪だくみ、愚かさ、あるいは誤りではなくて、これらの客観的原因の作用から生まれる避けえない結果であり、「土台」から分離することのできない、現代ロシアの労働運動全体の上部構造なのである。二つの偏向が危険で、非社会民主主義的で、労働運動にとって有害だという意識は、種々の分派の分子の接近を呼びおこし、「あらゆる障害をこえて」党統合への道を切りひらいている。

この見地からみれば、統合は、たとえゆっくりと、やっとのことで、動揺したり、ぐらついたり、逆もどりしたりしながら、すすむにしても、すすまないわけにはいかない。

この見地からみれば、統合は、かならず「一定の人物やグループや機関」のあいだですすむわけではけっしてなく、一定の人物とは無関係に、彼らを自分に従属させ、「一定の人々」のうちから客観的発展の要求を悟らないもの、またはは悟ろうとしないものをほうりだし、「一定の人々」のうちにはいっていない新人を押しだし、引きよせ、旧来の分派や潮流や区分けの内部に変化、入替え、再編成を引きおこしながらすすむのである。この見地からみれば、統合は、その思想的基礎から分離できないものであって、思想的接近にもとづいてのみ成長し、あれこれの論戦的発言やあれこれの文筆上の闘争のさいの偶然の結びつきによってではなく、原因と結果が結びついているように、内的な、切りはなしえない結びつきによって、解党主義と召還主義のような偏向の出現、発展、成長と結びついているのである。

(2) 「二つの戦線での闘争」と諸偏向の克服

わが党の統合の本質と意義についての、二つの原則的に違った、根本的にくい違った見解は、以上のとおりである。

そこで問題になるのは、これらの見解のうちどちらが総会の決議の基礎になっているか、ということである。この決議をよく考察したいと思う者は、しかし、決議の基礎になっているのがあとの見解であること、いくつかの箇所で決議は、まえの見解の趣旨での部分的な「修正」をおこなった跡をはっきりととどめていること、そのさい、これらの「修正」は決議を改悪してはいるが、決議の基礎、その主要な内容——これは徹頭徹尾あとの見解で貫かれている——をすこしも取りのぞいていないことを見てとるだろう。

これがそのとおりだということ、サークル外交式「修正」が実際に部分的修正の性格をおびていること、それらの訂正が事の核心と決議の原則的基礎を変えていないことを示すために、私は、すでに党出版物のうちでふれられた党内事情についての決議の個々の条項と個々の箇所をしらべてみよう。終りから始めよう。

イオーノフは、「旧来の諸分派の指導者たち」が統一の確立を妨げるためにあらゆることをし、総会でも同様にふるまったので、「一つひとつの方策を、たたかいによって彼らからかちとらなければならなかった」と言ってこれらの指導者を非難し、つぎのように書いている。

「同志レーニンは、『社会民主主義的活動を拡大し深化する』という方法で『危険な諸偏向を克服すること』を望まなかった。彼は、党のあらゆる企画の中心に『二つの戦線での闘争』という理論をおかせようと、かなり精

力的に努力した。彼は、党内の『非常事態令』(三)〔『保安強化令』〕を廃止しようという考えさえ許さなかった。」(二二ページ、第一項)

これは、党内事情についての決議の第四節(b)項(三)のことを言っているのである。この決議の草案は私が中央委員会に提出したものであって、問題の条項はすでに小委員会の仕事が終わったあとで総会そのものによって、しかもトロツキーの提案で変更されたのであって、私はこれに反対してたたかって成功しなかったのである。私の草案では、この条項には、文字どおり「二つの戦線での闘争」ということばではないにせよ、いずれにしてもこの考えをあらわしていることばがはいっていた。「拡大し深化するという方法で克服する」ということばは、トロツキーの提案で挿入されたものである。同志イオーノフが、この提案に反対した私の闘争について語ったので、「修正」の意義について意見を述べるちょうどよいきっかけが私にあたえられたことは、たいへん喜ばしい。

「二つの戦線での闘争」という考えほど、総会で猛烈な――しばしば喜劇的な――憤激をかきたてたものはなかった。それを言っただけで、フペリョード派もメンシェヴィキもかっとなってわれを忘れた。この憤激は、歴史的には十分了解できることである。というのは、ボリシェヴィキは実際に、一九〇八年八月から一九一〇年一月まで、二つの戦線での闘争、すなわち、解党派と召還派とにたいする闘争をおこなってきたからである。また、この憤激が喜劇的だったというのは、ボリシェヴィキに腹を立てた連中は、そのことで自分たちに罪があることを証明しただけであり、解党主義と召還主義をすこしでも非難すると、いまだに彼らは怒りだすということを証明したからである。隠すより現われるはなし、というわけだ。

二つの戦線での闘争と書くかわりに、「拡大し深化するという方法で克服する」と書こうというトロツキーの提案は、メンシェヴィキとフペリョード派の熱烈な支持をうけた。

イオーノフも、『プラウダ』も、ウィーン決議も、『ゴーロス・ソツィアル-デモクラータ』も、この「勝利」のことでいまでも狂喜している。だが、借問するが、この条項から二つの戦線での闘争ということばを追放することによって、この闘争の必要性の承認を決議から追放したことになっただろうか? けっしてそんなことはない。なぜなら、「諸偏向」が認められ、それが「危険」なことが認められ、この危険を「説きあかすこと」が必要であると認められ、これらの偏向は「プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の現われ」であることが認められている以上、それ

によって実質上、まさに二つの戦線での闘争が認められたことになるからである！　一箇所で「不愉快な」（あれこれの教父たちにとって）用語を変えたが、基本的な思想はそのままに残したのである！　その結果は、一つの条項の一部分をまぎらわしくし、水でうすめ、空文句で改悪しただけである。

実際、この節で、活動を拡大し深化するという方法で克服すると述べるのは、まさしく空文句であり、たよりない遁辞である。そこには、はっきりした思想はなにもない。活動を拡大し深化することはいつでも無条件に必要である。それについては、決議の第三節全体がくわしく述べており、特殊な——つねに無条件に義務的であるというわけではない、特別な時期の諸条件によって生みだされる——「思想的＝政治的諸任務」に移るまえに述べている。第四節は、これらの特別の任務のことだけにあてられていて、その三つの条項全体へのまえがきには、ここでも、これらの思想的政治的任務が「いまや日程にのぼってきた」と、はっきり述べている。

いったいどういう結果になったか？　活動を拡大し深化する任務もまた、いまや日程にのぼってきたかのようなばかげたことになったのだ！　まるで、この任務がいつものように「日程に」のぼっていない歴史的な「いま」がありうるかのようだ！

それに、どうすれば、社会民主主義的活動を拡大し深化するという方法で諸偏向を克服することができるのか？　およそ拡大するさい、深化するさいには、かならず、どう拡大しどう深化するかという問題が起きてくる。もし解党主義と召還主義が偶然のものではなくて、社会的諸条件によって生みだされた潮流であるとすれば、活動がどんなに拡大されようと、どんなに深化されようと、それらは拡大や深化のなかにはいりこんでくるかもしれない。解党主義の精神で活動を拡大し深化することもできる。——これは、たとえば『ナーシャ・ザリャー』〔三〕や『ヴォズロジデーニエ』〔三〕がやっていることである。召還主義の精神でそうすることもできる。他方、偏向の克服、ほんとうの意味の「克服」には、どうしても、正しい社会民主主義的活動を直接に拡大し深化することから、一定の力と時間と精力を割かなければならない。たとえば、同じイオーノフは、その論文の同じページにこう書いている。

「総会は終わった。出席者たちは散っていった。中央委員会は活動をととのえるにあたって、信じられないほどの困難を克服しなければならないが、それらの困難のうちでかなりの地位を占めているのが、同志マルトフがきわめて頑強にその存在を否定したいわゆる解党派」（ほんとうの、

正真正銘の解党派でなくて、ただいわゆる解党派にすぎないのか？ 同志イオーノフよ）「のふるまいである。」

これこそ、トロツキーとイオーノフのことばがどれほど空っぽであるかを明らかにする材料――ささやかな、だが特徴的な材料――である。ミハイルやユーリー一派の解党主義的な行動を克服するために、中央委員会は、真に社会民主主義的な活動を直接に拡大し深化するために用いるべき力と時間をとられてしまった。もしミハイルやユーリー一派のふるまいがなかったなら、もし、われわれがいまなおまちがって自分たちの同志とみなしている人々のあいだに解党主義がなかったなら、内部闘争に党の力がそがれるようなことはなかったはずだから、社会民主主義的活動の拡大と深化はもっとりっぱにすすんでいただろう。つまり、もし社会民主主義的活動を拡大し深化するということを、扇動や宣伝や経済闘争等々を真に社会民主主義的な精神で直接に発展させることと解するなら、この活動にとっては、社会民主主義からの社会民主主義者の偏向を克服しなければならないことは「積極的活動」からのいわばマイナスであり、差引分であって、したがって、拡大し、うんぬんの方法で偏向を克服するという文句は無意味である。

この空文句は、じつは、社会民主主義者のあいだの内部闘争をもうすこし少なくしたいという漠然たる願望、善良でおめでたい願望をあらわしているのだ！ この文句は、このおめでたい願望以外はなにも反映してはいなかった。これは、解党主義および召還主義との闘争がもうすこし少なかったらいいのだが、といういわゆる調停派の溜息なのである！

こうした「溜息」の政治的意義はゼロであり、ゼロよりももっと悪い。もし党内に、解党派（と召還派）の存在を「頑強に否定する」ことを有利とする人々がいるとすれば、彼らは害悪を隠蔽するため「調停派」の「溜息」を利用する。『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』は、こういうふうにふるまっている。だから、決議のなかのこうした善意ではあるが空っぽな文句の擁護者は、いわゆる「調停派」だけである。実際には、彼らは解党派と召還派の協力者である。実際には、彼らは、社会民主主義的活動を深めるのではなくて、ほかならぬそれからの偏向を強め、害悪を一時隠し、それからの回復を困難にすることによって、ほかならぬこの害悪を強めているのである。

この害悪の意義を、同志イオーノフに例証してやるために、私は彼に、『討論用リーフレット(二六)』第一号の同志イオーノフの論文中のある箇所を思いださせよう。同志イオーノフは、適切にも、解党主義と召還主義を良質の腫物――それは「化膿の過程で、身体中からいっさいの毒素を自分

のところに集め、こうして健康の回復を促進する」――にたとえている。

まさにそうである。「毒素」を身体から排出させる化膿過程は、回復にみちびく。だが、こうした毒素を身体から一掃するのを困難にするものは、身体に害悪をもたらす。同志イオーノフは、同志イオーノフのこの有益な思想をよく考えてみるがよい！

（3）　統合の条件とサークル外交

さきへすすもう。総会の成果についての『ゴーロス』の社説のせいで、われわれは、解党主義と召還主義ということばを決議から削除した問題にふれざるをえなくなった。この社説（第一九―二〇号、一八ページ）には、異常な、どこにも例のない（わがゴーロス派にみられる以外には）……大胆さで、「解党派」という用語はあいまいな用語であること、この用語は「あらゆる誤解を生んだ」（原文のまま!!）こと等々が、また「中央委員会がこの用語を決議から削除することに決めた」理由が述べられている。

この叙述が事実に反することを『ゴーロス』の編集部員たちが知らないはずはないのに、この用語を削除するという中央委員会の決定をこういうふうに叙述するのを、どう呼んだらいいだろうか？　これらの編集部員――そのうちの二名は総会に出席しているので、この用語を削除したのか？　「いきさつ」を知っている――は、なにを当てこんでいたのか？　彼らはほんとうに、自分たちが暴露されないですむものと、当てこんでいたのだろうか？

決議を作成した小委員会では、多数がこの用語を残すことを主張した。小委員会に出席していた二名のメンシェヴィキのうち一名（マルトフ）は、これを削除することに賛成投票し、他の一名（一度ならずプレハーノフの立場に傾いたことのある）は反対投票した。総会では、非ロシア民族代表全員（ポーランド代表二名＋ブンド代表二名＋ラトヴィア代表一名）とトロツキーとが、次の声明を提出した。

「決議に指摘された潮流――これとはたたかう必要がある――を『解党主義』と呼ぶのは、本質的には望ましいことであるが、メンシェヴィキの同志たちがおこなった声明――彼らもこの潮流とたたかうことを必要と思うが、決議のなかでこのような用語をもちいることには、彼らメンシェヴィキに反対する分派的性格があるという声明――を考慮して、われわれは、党の統合にたいするいっさいの無用な障害をなくすために、この用語を決議から削除することを提案する。」

つまり、中央委員会の多数、しかもほかならぬどの分派にも属しない分子の全員が、解党主義ということばは本質

的には正しいし、解党主義とたたかうことは必要であると文書で声明しているのだが、『ゴーロス』編集局は、この用語を削除したのはそれが本質的に不適当だったからだ、と説明しているのである!!

中央委員会の多数、しかもほかならぬどの分派にも属しない分子の全員が、「この潮流とたたかう」ことをメンシェヴィキが約束したので彼らの強い主張に譲歩して(最後通告に譲歩して、と言ったほうが正しいであろう。なぜなら、メンシェヴィキは、さもなければ決議は全員一致の決議にはならないだろう、と声明したからである)この用語を削除することに同意する、と文書で声明しているのだが、『ゴーロス』編集部は、決議は「いわゆる『解党主義との闘争』という問題に明瞭な回答」をあたえた、と書いているのである(同誌、一八ページ)!!

総会では彼らは今後は改めると約束し、われわれは今後は自分でもこの潮流とたたかうから「われわれに反対する用語」をもちいないでほしい、と懇願しているのだが、総会のあとで出た最初の『ゴーロス』では、解党主義との闘争を「いわゆる」闘争と宣言しているのである。

ここでわれわれが見るものが、解党主義へのゴーロス派の完全な、決定的な転換であることは、明らかである。この転換は、総会後に起こったこと、とくに『ナーシャ・ザリャー』、『ヴォズロジデーニエ』およびミハイル、ユーリー、ロマン一派のような紳士たちの声明を、あるまとまった、つながりのある、因果関係で結ばれた事柄とみれば、なるほどと了解できる。これについては、われわれはあとで述べるつもりであるが、そこでわれわれはトロツキーの見地のまったくの皮相さを示すことになろう。われわれの前にあるのは、明らかに、個人または一グループの「義務違反」でもなく、道徳上の行為でも、法律行為でもなくて、政治的行為であり、ほかならぬロシアの反党的合法主義者の結束であるのに、トロツキーは万事を「道徳的=政治的義務の違反」(ウィーン決議)のせいにしたいのである。

いまは別の問題を、ほかでもなく解党主義ということばを決議から削除するというような総会の措置がとられた理由とその意義の問題を、しらべなければならない。このことを、もっぱら、トロツキーやイオーノフの一派のような調停派の法外の熱心さによるものと説明することは正しくないであろう。これにはまだ別の要因がある。要点は、総会の諸決定のかなり多くの部分が、少数は多数に服するという普通の原則にしたがって採択されたのではなく、非ロシア民族代表の仲介のもとに、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの両分派の協定という原則にしたがって採択されたという点にある。同志イオーノフが『オートクリキ・ブ

ンダ』で、「現在形式にこだわっている同志たちは、もし彼らが形式主義の見地に立っていたなら、このまえの総会がどういう結果に終わったであろうかをよく知っている」と書いているのは、たぶん、この事情をほのめかしたものであろう。

同志イオーノフは、右の文句のなかではほのめかしながら語っている。彼はトロッキーと同様に、自分の考えを述べるこういう方法を、とくに「分別のある」、非分派的で、党に特有の方法だと考えている。実際には、これこそまさに、党と党性に害毒以外のなにものももたらさないサークル外交家の行動様式なのである。ほのめかしは、ある人々にはきかないし、他の人々にはサークル的好奇心をかきたて、第三の人々には流言や告げ口をそそのかす。だから、イオーノフのほのめかしを解読する必要がある。もし彼がここで語っていることが、総会はいくつかの問題で協定に(単純多数決にではなくて)達しようとつとめた、ということでないとすれば、私は彼に、もっとはっきりした言い方をし、国外にいるおしゃべりどもを誘惑しないようおすすめする。

だが、もしイオーノフがここで総会での両分派の協定について語っているのなら、「形式にこだわっている同志たち」に反対する彼のことばは、実際にはひそかに解党派を助けている自称調停派のもう一つの特徴を、明瞭にわれわれに示すものである。

総会では、いくつかの全員一致の決定が両分派の協定によって採択された。なぜそうする必要があったのか？　それは、事実上両分派の関係は分裂に等しかったし、およそ分裂のさいにはつねに、また不可避的に、集団全体（この場合は党）の規律が集団の一部分（この場合は分派）の規律の犠牲とされるものだからである。

ロシアの党内の諸関係のもとでは、諸分派の協定をつうずる以外には（すべての分派の協定かそれとも主要な分派のあいだの協定か、分派の一部のもののあいだの協定かそれとも分派全員の協定かということは、別の問題である）統一にすすむことができなかった。ここからして、妥協の必要、つまり多数派は承認しなかったが少数派が要求したいくつかの条項でこうした譲歩をする必要が生じてくる。解党主義ということばを決議から削除したのは、このような妥協的譲歩の一つだったのである。総会の決定のこの妥協的性格のとくにきわだった現われは、ボリシェヴィキが自分の分派の資産を、条件づきで第三者にゆだねたことである。党の一部がその資産を条件づきで第三者（国際社会民主主義運動内の）にゆだね、この第三者がこの資金を中央委員会に引き渡すか、それともその分派に返すかを決定

するはずになっている。この取りきめがまったく異例な、仲間割れしていない正常の党にはありえない性格のものであることは、ボリシェヴィキがどういう条件で協定を受けいれたかを、はっきり示している。中央機関紙第一一号に掲載されたボリシェヴィキの声明は、「解党主義と召還主義を非難し、これらの潮流とたたかうことを、党の政治方針の不可欠の要素と認めている」決議を実行することが、基本的な思想的＝政治的条件であること、この方針が実行される保障の一つは中央機関紙の構成であること、メンシェヴィキが分派的機関誌と分派的政策をつづけるなら、ボリシェヴィキは「保管者に資金の返却を要求する」権利を得ることを、はっきり述べている。中央委員会は、諸分派中央部についての決議のなかで、ボリシェヴィキのこの声明を直接に引合いにだすことによって、これらの条件を受けいれたのである。

そこでおたずねするが、これらの条件は履行すべきものなのかそうでないのか、これらの条件は形式的なものなのかそうでないのか？「形式」について軽蔑的なことばを吐いている同志イオーノフは、取りきめ（＝ボリシェヴィキが資金をゆだねるについての条件、つまり諸分派中央部についての中央委員会の全員一致の決議で確認された条件）の基礎としての協定と、統一保持の基礎としてこの取りきめの形式上の諸条件を守ることとのあいだには、きわめて初歩的な区別のあることを理解しなかったのである。

もし同志イオーノフが、諸分派中央部についての中央委員会の全員一致の決議がなされたあとのいまでも、「形式」を軽蔑的に鼻であしらうとすれば、彼はそれによって諸分派中央部についての中央委員会の決定全体を鼻であしらうわけである。同志イオーノフの詭弁は、つまるところ次のようなことになる。中央委員会の諸決定の総体は、多数決で決議をとおしたことによって得られただけでなく、いくつかの重要な問題で、敵対的な諸潮流が協定したことによっても得られたものである。――だから、これらの決定は今後も形式上拘束的なものではなく、少数派は協定を要求する権利がある！　中央委員会の決定のうちには協定の要素があるから、いつでもこれらの決定を破棄してよい。なぜなら、協定は自発的な行為だから！　と。

このような詭弁は、不手際に隠蔽された解党派の擁護ではないだろうか？

しかし、イオーノフの詭弁がこっけいなものにすぎないにせよ、最大限に可能な譲歩をしようという中央委員会（総会）の努力には、心理的にまた政治的に誠実な正しい要因があった。メンシェヴィキと召還派は、ボリシェヴィキ中央部に気ちがいじみた攻撃をくわえる点で一致し、ボ

リシェヴィキ中央部にはきわめて猛烈な非難が提出された。原則的な意見の相違ではなくてボリシェヴィキ中央部の「悪意」――これこそ、なによりも第一にわれわれを党から遠ざからせているものだ、とメンシェヴィキも召還派も言った。*

* イオーノフの次の批評を参照せよ。「同志マルトフは、これにおとらず執拗に、右への『危険な偏向』というのは悪意あるボリシェヴィキの作り話であり、党内の唯一の敵はボリシェヴィキ中央部とその分派的支配である、と総会にむかって繰りかえし述べた。」(同論文、二二ページ)

これは非常に重要な事情であって、これを明らかにすることなしには、わが党の統合の危機の行程がほかならぬこのようなものであって、これとは違ったものでない理由を理解することはできない。解党主義と召還主義の原則的な擁護者はいなかった。メンシェヴィキもフペリョード派も、そういう立場をとる決心はつかなかった。ここに、すでにずっとまえからわれわれの文献のなかで指摘されている(また日和見主義者に反対する国際的文献のなかで一度ならず指摘されている)今日のマルクス主義「批判家」と真にマルクス主義的な戦術の批判家との特徴――すなわち、不決断、無原則性、「新」方針の秘匿、解党主義と召還主義の一貫した代表者のかばいだて――が現われていた。われわれは解党派ではない、これは分派的な用語である、――とメンシェヴィキは叫んだ。われわれは召還派ではない、これは分派的な誇張である、とフペリョード派が彼らにあいづちをうった。そして、原則的＝政治的な意見の相違をあいまいにし、これを背後に押しやる目的で、いわゆる「犯罪行為」(徴発、と読め)にいたるありとあらゆる問題で、ボリシェヴィキ中央部にたいして数しれぬ非難があびせられた。

ボリシェヴィキはこれにたいしてこう答えた。よろしい、諸君、中央委員会に諸君の非難をすべて審理させ、それについて「裁きと懲しめ」をくださせるがよい。五名の非ロシア民族の社会民主主義者が総会にくわわっている。――総じて決定は彼らの去就にかかっているし、全員一致の決定となればなおさらのことである。諸君の(すなわち、メンシェヴィキとフペリョード派の)非難を審理し、ボリシェヴィキ中央部にたいする諸君の要求を満足させる件については、彼らに「裁判官」として出席してもらうがよい、と。ボリシェヴィキはそれ以上にすすんだ。彼らは諸決議のなかで、メンシェヴィキとフペリョード派が要求した最大限の妥協に同意したのである。

こうして、党内事情についての決議と党協議会についての決議とでは、最大限の譲歩がなされ、すべての「非難」

が検討され、五名の非ロシア民族の社会民主主義者全員の裁定にもとづいて、ボリシェヴィキ中央部にたいするすべての要求が満足させられた。

こうした方法によってのみ、党的方針すなわち反解党主義的方針の反対者から、言いのがれをやるあらゆる可能性、原則的な問題提起を回避するあらゆる可能性を取りあげることが可能であった。そしてわれわれは、この可能性を彼らから取りあげた。

もしいまアクセリロードやマルトフ一派が『必要な補足』で、アレクシンスキー一派がフペリョード派のリーフレットで、ボリシェヴィキ中央部にたいする非難、流言、中傷、うそ、あてこすりにまたぞろ日の目を見せようとするならば、それはこれらの諸君が自分で自分に判決をくだすものである。総会が全員一致で彼らの非難をすべて検討し、その決議によって非難をすべて一掃し、また一掃されたものと認めたこと、——このことを否定するわけにはいかないし、あれやこれやの争論の大家もこれを否定することはできない。ところで、もしそうだとすると、争論を再開している人々(アクセリロード、マルトフ、アレクシンスキー一派)が、流言で原則的な問題をもみ消そうとする政治的恐喝者にすぎないことは、いまやだれの眼にも明らかである。またわれわれは、政治的恐喝者として以外には彼らをとりあつかわないだろう。党が反解党主義的および反召還主義的方針を遂行する問題以外の問題にはたずさわらず、アクセリロードやマルトフやアレクシンスキーには、好きなだけ汚水で水浴びさせておくことにしよう。

ボリシェヴィキが妥協し譲歩したこと、多くの点で十分に断固としていない諸決議に彼らが同意したことは、原則的な境界線を明確に引くために必要であった。ボリシェヴィキは、非ロシア民族代表の多数が正当と認めた*メンシェヴィキと召還派のすべての要求を満足させることによって、その傾向の相違にかかわりなく社会民主主義者にとって、職業的恐喝者を除くすべてのものにとって、党的方針、すなわち、反解党主義的・反召還主義的方針の遂行だけが問題となるという結果をかちとった。だれも、党内のだれひとりとして、党活動にくわわること、この方針の遂行に参加することを妨げられてはいなかった。非ロシア民族の社会民主主義者の意向にもとづく決定によって、この方針を遂行するうえのどんな障害も、それを妨げるどんな付随的な事情も残されてはいなかった。そこで、もしいま解党派がまたもや、いっそうはっきりと本性をあらわしたとすれば、そのことによって、付随的な障害というのは作り話であり、眼をそらさせるためのものであり、流言によるごまかしであり、サークル的陰謀家のやり方であり、それ以上

のものでなかったことが証明されたわけである。

＊　次のことに注意をうながそう。総会で議決権をもっていたのは、メンシェヴィキ四、ボリシェヴィキ四、フペリョード派一、ラトヴィア人一、ブンド派二、ポーランド人二であった。すなわち、メンシェヴィキとフペリョード派にたいして、ボリシェヴィキはポーランド人とラトヴィア人を合わせても多数を制していなかった。ブンド派が決定を左右した。

だから、境界設定と勢力区分は、総会後にはじめて本式に始まったのである。この勢力区分はもっぱら、わが党の解党という最も重要な原則問題をめぐってすすんでいる。境界設定が総会後に始まったことに唖然とし、悲しみ、驚いている「調停派」は、このように驚くことによって、彼らがサークル外交のとりこになっていることを証明したにすぎない。サークル外交家は、マルトフやマルトィノフ、マクシーモフやフペリョード派第二号〔ヴェ・エリ・シャンツェル（マラート）〕との条件づきの協定で境界設定はいっさい終りだ、と考えるかもしれない。なぜなら、こうした外交家にとっては、原則的な意見の相違は第二義的な問題だからである。これとは反対に、解党主義や召還主義という原則的な問題を第一に重要視する者にとっては、まさにマルトフやマクシーモフその他のすべての要求を満足させたあとでこそ、組織問題その他で彼らに最大限の譲歩をしたあとでこそ、純原則的な境界設定が始まらなければならなかったことは、すこしも不思議でないのである。

総会後に党内で起こっていることは、党統合の破綻ではなく、実際に党内でまた党的に働くことができ、また働こうと望んでいる人々の統合の始まりであり、ボリシェヴィキ、党擁護派メンシェヴィキ、非ロシア民族代表、どの分派にも属しない社会民主主義者の真に党的なブロックから、党に敵対的な変節者を、半自由主義者と半無政府主義者とを清掃する仕事の始まりである。＊

＊　ついでながら、ボリシェヴィキに反対するゴーロス派とフペリョード派のブロック（ゲード派に反対するジョレス派とエルヴェ派（三三）のブロックとまったく同様のブロック）を特徴づけるのに、次の事実が役だつかもしれない。マルトフは、『必要な補足』のなかで、プレハーノフが学校委員会（三四）の構成に重要性をおいているというので、彼を嘲笑している。マルトフは事実を曲げている。総会ではこの同じマルトフが、メンシェヴィキの全員およびマクシーモフといっしょに、トロツキーの援助をうけて、某地の召還派の学校を中央委員会が党学校と認め、それと協定すべしという決議をとおすためにたたかったのだ！　われわれはやっとのことで、この反党ブロックをぶちこわすことができた。

もちろん、ゴーロス派にせよフペリョード派にせよ、党にはいっているからには、彼らにはブロックを結ぶ完全な権利がある。問題は権利にあるのではなく、ブロックの原則性に

ある。これは、党性と原則性に反対する無原則分子のブロックである。

(4) 党内事情についての決議の第一節について

総会の諸決議の欠陥の検討をつづけるにあたって、私はいまや、党内事情についての決議の第一項に立ちいらなければならない。この条項は、なるほど、党統合のあれこれの理解に直接に関連のある問題にはふれていないのだが、それでも私はわき道にはいらなければなるまい。というのは、この第一項の解釈が、すでに党内で少なからぬ論争を呼びおこしたからである。

私の決議案にはこの条項はまったくなかったし、私は──『プロレタリー』編集局全体もまた──断固としてこれに反対してたたかった。この条項は、メンシェヴィキとポーランド代表が通したものであって、彼らにたいして一部のボリシェヴィキは、きわめて根気づよく、このあいまいな漠然とした条項はかならず誤解を生むか、あるいは──もっと悪いことだが──解党派に奉仕することになろう、と警告したのである。

総会で私が、この条項の多くの命題を、無内容で空虚で同義反復だという理由で批判したことは、言うまでもない。社会民主主義者の戦術がその原則的基礎においてつねに一つであると言いながら、この原則的基礎とはなにか、まさにどういう基礎が(マルクス主義一般か、それともマルクス主義のあれこれの命題か)なにゆえにここで問題になるのかを規定していないこと、──社会民主主義者の戦術はつねに最大限の成果を予想したものであると言いながら、現在の時期における闘争の当面の目標(当面の可能な成果)をも、この現在の時期に特有な闘争方法をも規定していないこと、──戦術は将来の発展がすすみうるいろいろな道を予想したものであると言いながら、これらの道を具体的に規定していないこと、──戦術は勢力の蓄積を助け、プロレタリアートが公然たる闘争もできれば、不安定な体制の矛盾を利用することもできるようにしなければならない、といったわかりきったことを言うこと──すべてこれらは、明白な、目だった、この条項全体を無用の長物にしている欠陥である。

だが、この条項にはもっと悪いものがある。そこには、解党派のための逃げ道がある。総会中にいろいろな総会出席者が、ボリシェヴィキばかりでなくブンド派の一人とトロツキーさえが、この逃げ道を指摘した。それは、自覚したプロレタリアートにとって、「大衆的な社会民主党にみずからを組織しつつ、国際社会民主主義のこの戦術的方法

を意識的、計画的に、首尾一貫して適用する可能性が、ここにはじめてひらかれつつある」という文句である。(この方法とはどんな方法か？　そのまえのほうでは戦術の原則的基礎が問題になっていて、戦術の方法のことも、ましてなにか特定の方法のことも、問題になってはいなかった。)

なぜはじめてなのか――この条項の批判者たちは総会でこう質問した。もし、国の発展の一歩一歩が技術の水準においても、階級闘争の明確化等々においても、新しいもの、いっそう高度なものをもたらすという理由からだとしたら、これはまたもや月なみな文句である。それなら、どんな時期でもつねに、また無条件に、過去の時期とくらべて、あるはじめてのものをもたらす。しかし、われわれはいま特定の時期に、革命運動の衰退期、革命的高揚のあとをうけて大衆と社会民主主義的労働運動のエネルギーがはなはだしく減退している時期に際会しているのである。そこで、もしこのような時期が、国際社会民主主義の方法を意識的等々に適用する可能性をプロレタリアートにはじめてあたえる時期として特徴づけられるとすれば、これらのことばは不可避的に、あたかも平穏で法にかなった時期のようにみえる第三国会の時期を解党主義的に解釈し、それを、疾風怒濤の時期よりも、プロレタリアートの闘争が直接に革命的な形態をとってすすみ、自由主義者がこの闘争を「自然力の狂気」と悪罵した革命期よりもまさるものとして、純自由主義的に称賛する結果にみちびくであろう。

きわめてあいまいなこの条項を解党主義的に解釈することの危険に特別の注意をはらわせるために、私は総会のその会議で、多くの文書による声明を提出し、演説者たちの演説のうちの幾多の箇所を強調した。つぎにあげるのは私のおこなった二つの声明である。

(一)「レーニンの要求により、同志T〔トィシカ〕(ポーランドの社会民主主義者)のことばのうちから、『ここには反革命とくらべて革命の戦術の卑小化があるという解釈は、まったく誤りである』という句が議事録に記録される。」

(二)「レーニンの要求により、問題の文句は反革命的方法にくらべて革命の意義とその方法を低めるものではなく、かえって高めるものである、というI〔ドゥブロヴィンスキー、イ・エフ〕(この項を擁護したボリシェヴィキ)のことばにたいする同志マルトフの叫び(『そのとおり！』)が議事録に記録される。」

右の二つの声明は、一ポーランド代表と一ボリシェヴィキが、マルトフの同意のもとに、この条項の解党主義的な解釈がほんのわずかでも許されることを断然否認したこと

を確認している。この二人の同志の意図には、いうまでもなく、こうした解釈はまったくふくまれていなかったのである。

しかし、適用されるべきものは法律であって、法律の動機でも立法者の意図でもないことは、すでに早くから知られていることである。扇動と宣伝におけるこの条項の意義は、この条項の起草者たちのだれかれの善良な意図によって決まるのでもなければ、総会での彼らの声明によって決まるのでもなくて、社会民主党のロシア人部分の内部の諸勢力と諸傾向の客観的な相互関係によって決まるであろう（ロシア人以外の社会民主主義者は、おそらく、このあいまいな条項には特別の注意を向けないだろう）。

だから、私は、自分の意見を表明するのをいそがないことにし、総会に出席しなかった社会民主主義者の反響またはゴーロス派の反響をまず聞くことにして、出版物でこの条項がこんどはどういうふうに解釈されるかを、特別の興味をいだきながら待っていたのである。

総会のあとで出た『ゴーロス』の最初の号は、この条項がどういうふうに解釈されるかについてのわれわれの論争を評価するのにまったく十分な材料をあたえてくれた。

総会の成果についての『ゴーロス』の社説にはこう書いてある。

「わが党の過去の戦術は革命的情勢に適応したものであったので、中央委員会はこれらのことば」（「はじめて」うんぬん）「で過去の戦術にたいする間接の非難を表明しようとしたのだ、と仮定することは、もちろん、まったく考えられないし、ばかげたことであろう」（傍点は原筆者のもの、第一九—二〇号、一八ページ）。

上出来である！　筆者は、解党主義的解釈は考えられないし、ばかげていると言明している。ところが、そのさきを読むと、同じ節のうちで次のような主張に出あう。

「過去におけるわれわれの政治生活が革命的形態をとったにもかかわらず比較的におくれたものであったこと——ついでながら、このことが革命が敗北した主要な原因の一つであった——が、これらのことばによって公式に承認された。おくれた社会関係がわれわれの過去の戦術をあまりにも初歩的なものにしていたことが、これらのことばによって公式に承認された。最後に、運動における閉鎖的な地下サークルの独裁と、すべてそれと結びついていた政策にもどろうとするあらゆる試みは、将来政治情勢がどうなろうと、決定的な一歩後退であるということが、これらのことばによって公式に承認された。」

たいしたものではないか？

この「珠玉」の宝庫をさぐるのに、はて、どこから手を

つけたらいいものか。

「公式の承認」を三回も引合いにだしていることから始めよう。およそ、過去の評価、革命の評価、ブルジョア諸政党の役割の評価等々をあれこれの決議によって公式に承認することにたいして、同じ『ゴーロス』からどれほど嘲笑があびせかけられたことだろう！「公式のもの」に反対する叫びのまじめさ加減を示す見本がここにある。党の明瞭な決定がゴーロス派の気にいらないときには、彼らは、複雑な科学上の問題を「公式に」解決しようとすることは無理な望みだなどといって嘲笑する。――ちょうど『社会主義月刊』(三〇)が日和見主義者に反対したドレスデン決議(三一)を嘲笑しているように、あるいはまた今日のベルギーの入閣論者たち(三二)がアムステルダム決議(三三)を嘲笑しているように。だがそのくせ、解党主義にとって逃げ道があるとゴーロス派の一人に思えると、彼は、それが「公式に承認された」ものであると三回も神かけて誓うのである。

ところでゴーロス派の一人が神かけて誓っているときには、彼は……真実からそれているものと心得たまえ。この論文の筆者が彼の解釈は「公式に承認された」と言っているのは、この条項の解釈に議論の余地があることが中央委員会でとくに討議の対象になっただけに、なおさら愚かしいことである。しかも、議事録に公式に――さよう、さよう！　これこそほんとうに「公式に」！――記録されている、ポーランドの一代表と一ボリシェヴィキのこれらのことばをあげた声明をみれば、彼らが『ゴーロス』の解釈をけっして正しいものと認めていないことが明らかである。公式に承認されたものであると叫びたてているわが筆者は、恥をかいただけのことである。

「はじめて」ということばは「過去に比較的におくれていたこと」を承認したものである、と。――このことばを社会的発展の他の諸側面に関係させずに、ほかならぬ政治生活に関係させなければならない理由は明らかでないけれども、これはまあどうでもよい。だが、「革命的形態をとったにもかかわらず」とつけくわえることは、あまりにも軽率に道標派(三四)のロバの耳を突きだすというものだ。この箇所を読んだら、一〇〇人の自由主義者のうちすくなくとも九〇人はゴーロス派に接吻するだろうが、一〇〇人の労働者のうちすくなくとも九〇人は日和見主義者に背を向けるだろうということは、賭けをしてもよい。それに、「ついでに」「革命が敗北した原因」について付言しているのは、解党派の五巻本〔『二〇世紀初頭のロシアの社会運動』全五巻〕の参加者たちの馬脚をあらわしたものである。彼らは、革命におけるプロレタリアートの役割についての自分たちの自由主義的な見解を、あいまいな決議の援護のもと

にもちこみたがっているのである。だから彼らは、「われわれの過去の戦術」を「初歩的」だなどと言い、あまりにも初歩的――これに注意したまえ！――とさえ言っているのである。戦術が「あまりにも」初歩的だというのは、――いいですか――「国際社会民主主義の方法を『はじめて』（大衆党内で）意識的、計画的に、首尾一貫して適用する」ということばからきている。* 公然たる闘争の時期、出版物や大衆的結社が比較的自由であり、革命的な諸政党が参加する選挙がおこなわれ、全住民が興奮しており、政府の政策が急速に動揺する時期、政府にたいしていくつかの大きな勝利をおさめた時期の戦術――この戦術は、どうやら、一九〇九―一九一〇年の初歩的でない戦術にくらべて、あまりにも初歩的なものであったらしい！　このような解釈をくだすには、なんとたくさんの変節と諸事件にたいするなんと貧弱な社会民主主義的理解とが必要なことだろう！

* 同志アンも中央委員会の決議をこういうふうに解釈している（『討論リーフレット』、本号所載の彼の論文『カフカーズからの手紙について』を見よ）。同志アンはその論文によって、『カフカーズからの手紙（2）』の筆者、同志K・スタのきわめてきびしい非難を裏書きしている。もっとも彼はこの手紙を「悪口雑言」と呼んでいるが。多くの点で興味ぶかい同志アンの論文は、あとでふたたび論じよう。

だが、「はじめて」ということばから「閉鎖的な地下サークルの独裁（ディクタトゥーラ）（!!）」にたいする非難を引きだすのは、――これはもうまったく比類のないことである。一九〇五―一九〇七年の「あまりにも初歩的な」戦術の時期には、労働者にたいする党の指導は、一九〇九―一九一〇年におけるよりもはるかに「独裁（ディクタトゥーラ）」めいたものであった――のだそうだ――し、「地下」組織や、現在よりもっと「閉鎖的」であったほかならぬ「サークル」がこの指導をおこなっていた場合がはるかに多かった！と。この滑稽な考えをもっともらしく見せるためには、次のことを思いだす必要がある。それは、日和見主義者やカデットびいきたちは、革命当時には労働者のあいだで自分たちが「閉鎖的なサークル」であることを感じていたのだが、いまや合法性獲得のための闘争（冗談を言いたまうな！）では、自分らは「閉鎖的」ではなく（ミリュコフその人もわれわれとともにある）、「サークル」でもなく（わが国には公然たる変節雑誌がある）、「地下的」でもない、等々と考えているということである。

大衆的な社会民主党にみずからを組織しつつあるプロレタリアートが、自分をプロレタリアートの指導者と考えたがっている人々のあいだに、自由主義的変節へのこれほど計画的で首尾一貫した志向があるのを見るのは、これがは

じめてである。

自分たちの条項を解党主義的に解釈することはまったく誤りだと思うと公式に声明したポーランドの一同志とボリシェヴィキの一同志は、[*]「はじめて」という悪名高い条項の解釈があたえるこの教訓を、いやでもおうでも一考してみなければならないだろう。

* この同志たちは、総会で、第一節を、階級分化の成長、労働者大衆の純社会主義的意識の進歩およびブルジョア反動の強化を指摘したものという意味に解釈した。これらの考えはもちろん正しいが、それらの考えは、第一節を構成していた諸命題のうちには表現されていない（そして、そこに表現されているのはそれらの考えではない）。

（5）一二月（一九〇八年）決議の意義とこの決議にたいする解党派の態度

総会の決議の欠陥についての最後の批評は、第一項のまえがきにかんするものでなければならない。それはこう述べている。「一九〇八年の党協議会の諸決議の基本的諸命題を発展させて、中央委員会は次のように決定する。」……こうした定式化がなされたのは、メンシェヴィキに譲歩した結果であって、ここにもまた、譲歩にたいする驚くべき不誠実な態度、あるいは党的な戦術規定の意義を理解する力の驚くべき欠如の手本が見られるだけに、なおさらこの事情に立ちいらなければならない。

小委員会の多数者の賛同を得た、したがってまた総会の票の確実な過半数を得ていた決議案では、「一九〇八年一二月の諸決議を確認し、それらを発展させて」……となっていた。メンシェヴィキはここでも譲歩にたいする最後通告的な要求を声明し、「確認し」ということばが残されるかぎりは、この決議全体に賛成投票することを拒否すると言った。なぜなら、彼らは、一九〇八年一二月の諸決議を「分派性」の最たるものと見なしているからである。われわれは要求された譲歩をして、確認するということばのはいっていない決議に賛成投票することを拒否しなかった。この譲歩がその目的をとげるなら、すなわち、党の決定にたいするメンシェヴィキの忠誠な態度——これなしにはいっしょに仕事をすることは不可能である——が得られるなら、私はこの譲歩をしたことを残念がる気にはならないだろう。わが党には、一九〇八年一二月の諸決議にある規定以外には、第三国会[(言)]時代の戦術、組織および国会活動における党の基本的任務についての他の規定はない。われわれは、その当時分派闘争が非常に激しかったことを否定しないし、解党派に反対した当時の諸決議のうちのあれこれの

辛辣なことばを固執しようとは思わない。だが、諸決議の基本的な諸命題を、われわれは無条件に固執する。なぜなら、もしそれに解答をあたえなければ、宣伝でも扇動でも組織でも一歩もすすめることのできないような、最も重要な根本的な諸問題にたいして党があたえ、一年間の活動によってその正しさが確証された唯一の解答を、われわれが捨ててかえりみないなら、党や党性や党組織をうんぬんしても、それはいたずらに大言を吐くことになるだろうからである。われわれには、これらの決議を修正するために共同作業をおこない、もちろん党擁護派のメンシェヴィキをもふくめてすべての分派の同志たちの批判にしたがって、それを改訂する必要があることを認める用意が十分にある。われわれは、これらの決議のうちのいくつかの命題については、たぶん、かなり長いあいだ党内に議論が残るであろうし、多数決による以外には、近い将来にそれらを解決することはできないだろう、ということを知っている。しかし、この改訂が企てられて完了するまでは、第三国会時代とそこから生じる諸任務との評価の問題にたいする新しい解答を党があたえるまでは、すべての党擁護派社会民主主義者が、その見解がどうあろうとも、ほかならぬこれらの決議にしたがって行動することを、われわれは無条件に要求する。

そんなことは党性のイロハではないか、と思えるだろう。党の決定にたいしてはこれ以外の態度はありえない、と思えるだろう。ところが、総会のあとで『ゴーロス』が解党主義に転換したために、同誌は、この問題でも、忠誠な党的立場に移るためにではなくて、譲歩の範囲にたいする自分の不満をただちに声明するために、党の多数者の譲歩を利用することになったのである！（ただゴーロス派は、次のことを忘れていたようである。それは、全員一致で採択された妥協的決議にたいする不満と、新しい譲歩および新しい修正にたいする要求とを声明して、この決議について最初に議論をしかけた者は、そうすることによって、相手方にも別の方向への修正を要求する権利をあたえることになる、ということである。そして、もちろん、われわれはこの権利を利用する。）

すでに私が引用した、総会の成果についての『ゴーロス』第一九―二〇号の社説は、いきなり、決議のまえがきは妥協である、と声明している。これは真実であるが、中央委員会の多数者が一九〇八年一二月の諸決議の基本的な諸命題ばかりでなく、そのすべての決議を率直に確認することを断念したのは、メンシェヴィキの最後通告によってよぎなくされた妥協であったということをだまっているなら、この真実は虚偽に変わる！

『ゴーロス』はつづけて言う。「われわれの見地からみれば、この語句〔決議のまえがき〕は、決議の最も重要な諸条項の明瞭な内容とはなはだしっくりしない。これは、党の発展における一定の急転換をあらわすものであるが、それにもかかわらず、それと過去のロシア社会民主主義派全体とのあいだに継承関係があることは、もちろんである。だが、これは、ほかならぬ『ロンドンの遺産』[三六]とは、いちばん」(!!)「つながりが少ないのである。しかし、もしわれわれが、わが党内で絶対的な意見の一致に一挙に達することができると考えるならば、またもしわれわれが地位争いのために運動の巨大な前進を犠牲にするなら、われわれは度しがたい空論家であろう」(!!)。「決議のこれらの誤りの訂正を、われわれは歴史家たちにまかせてよい。」

このことばは、総会に出席したゴーロス派が、ポトレソフ一派のような、ロシア国内にいる自派の合法主義者か、または総会に出席しなかった『ゴーロス』編集部員たちから、「ボリシェヴィキに譲歩した」という理由でお叱りをこうむりでもしたかのように、また彼らがこれらの連中に言いわけしているかのように聞こえる。われわれは空論家ではない。——歴史家に決議の誤りを訂正させるがいい！と。

このすばらしい声明にたいしては、党擁護派の社会民主主義者が決議を作成するのは、歴史家たちのためではなく、実際にこれらの決議にしたがって、自分たちの宣伝、扇動、組織活動をおこなうためであるということを、あえて指摘しよう。第三国会時代のためのこの活動の諸任務の規定は、これ以外にはわが党にはない。解党派にとっては、もちろん、党の決議はゼロである。なぜなら、彼らにとっては、党全体がゼロだからであり、彼らにとっては、党全体を（その諸決議だけでなくて）研究することに利益と興味をもてるのは「歴史家」だけだからである。だが、ボリシェヴィキも党擁護派メンシェヴィキも、同じ組織のなかで解党派といっしょに活動したくはないし、また活動しないだろう。われわれは、解党派がベズゴロフツィ[三七]かエヌ・エス[三八]のところに行くようにお願いする。

もしゴーロス派が党に忠誠な態度をとっていたなら、もし彼らがポトレソフ一派を重んじるのではなくて党を実際に重んじ、合法主義的文筆家のサークルではなくて革命的社会民主主義者の組織を重んじていたなら、彼らは一九〇八年一二月の諸決議にたいする自分たちの不満を別の仕方で表現したであろう。彼らは総会後のいまこそ、「地下の」「決定」とかについての無作法な、カデット[三九]だけにもちまえのせせら笑いをやめたことであろう。彼らは自分たちの見地にしたがって、一九〇七—一九一〇年の経験につ

いての彼らの見解にしたがって、これらの決定の実務的な検討とその修正とに取りかかったであろう。これこそ、真の党統合のための活動であったろうし、社会民主主義的活動の単一の方針にもとづく接近のための活動であったろう。ゴーロス派は、そうすることを拒否して、実際には、ほかならぬ解党派の綱領を遂行しているのである。事実、この問題についての解党派の綱領はどんなものか？　彼らの綱領は、破滅等々の運命にある地下の党の諸決定〔二三〕を無視し、自由主義者やナロードニキやベズザグラフツィ〔二四〕とまじってさまざまの合法的な小雑誌や合法団体などに腰をすえている、社会民主主義者と自称する自由論客どもの、とりとめのない「活動」を党の諸決定に対置することにある。どんな決議も、どんな「現情勢の評価」も、わが党の当面の闘争目標とブルジョア諸政党にたいするわが党の態度についてのどんな規定も、不必要だ――われわれはそれらすべてを（ミリュコフにならって！）「閉鎖的な地下サークルの独裁（ディクタトゥーラ）」と呼ぼうというのである（そのわれわれが、自分のとりとめのなさ、非組織性、細分性によって、事実上、自由主義者のサークルに「独裁（ディクタトゥーラ）」を引き渡していることとには気がつかずに！）。

　さよう、さよう、党の決議にたいする態度の問題では、疑いもなく、解党派は、それらの決議を軽蔑的に嘲笑し無視すること以外には、なにひとつゴーロス派に要求するわけがない。

　一九〇九―一九一〇年の党内事情についての中央委員会の決議は、ロンドンの遺産とは「いちばん」つながりが「少ない」という見解は、そのばからしさが一見して明らかであるから、まじめに検討するにもおよばない。われわれは、党の「過去全体」を考慮にいれる用意があるが、現在と直接つながりがある過去と現在とはそのかぎりでないと言うのは、党を嘲弄するものである！　言いかえれば、われわれには、今日のわれわれの行動を規定しないものなら考慮にいれる用意がある、というのだ。われわれには、一九〇七―一九〇八―一九〇九年の時期のカデット党や、一九〇七―一九〇八―一九〇九年の時期の勤労諸政党や、一九〇七―一九〇八―一九〇九年の時期の闘争の諸任務やについての諸決定をふくむ過去を除いては、社会民主党の「過去全体」を考慮にいれる用意がある（一九一〇年に）、というのだ。われわれには、いま実際に党擁護派となり、党活動をいとなみ、党活動を遂行し、党の戦術を遂行し、第三国会における社会民主党の活動を党的な仕方で方向づけるために考慮にいれる必要があることを除いては、なんでも考慮にいれる用意がある、というのだ。

　ブンドにとって恥ずべきことだが、ブンドは自分の機関

誌に同志イオーノフの論文をのせて（一二二ページ）、ロンドンの遺産にたいする同様な解党主義的嘲笑に場所をあたえている、と言わなければならない。イオーノフはこう書いている。――「これは驚いた。ロンドン大会の諸決議は、現在の時機といま日程にのぼっている諸問題とにどんな関係があるのか？　私はあえて、同志レーニンとそのすべての同類もこれを知らないと思う。」

さあ、そんなむずかしいことをどうして私が知っていようか！　一九〇七年春から[三一]一九一〇年春までのあいだに、ブルジョア政党（黒百人組、オクチャブリスト、カデット、ナロードニキ）の主要な諸グループのうちに、それらの党の階級構成に、その政策に、プロレタリアートと革命にたいするその態度に、本質的な変化はなにも起こらなかったということを、いったいどうして私が知っていようか？　この分野で指摘することができ、また指摘する価値がある小さな部分的変化が、一九〇八年一二月の諸決議に示されているということを、いったいどうして私が知っていようか？　すべてこれらのことを、いったいどうして私が知っていようか？

イオーノフにとっては、すべてこれらのことは、現在の情勢といま日程にのぼっている諸問題とに関係がないにちがいない。彼にとっては、それは、非プロレタリア政党についてのよけいな、党的と称する戦術規定なのだ。なんのために自分で重荷を負うのか？　プロレタリア的戦術の党的規定をつくりあげようとするこの努力を、「非常事態」呼ばわりでもしたほうが簡単ではあるまいか？　社会民主主義者を自由論客に、どんな「非常事態」令の適用も受けないで「自由に」当面の諸問題を解決する[三二]――きょうは自由主義者といっしょに『ナーシ・ポモイ』誌上で、あすは[三三]ベズゴロフツィ[三四]といっしょに文筆界の寄食者たちの大会で、あさってはポッセ派といっしょに協同組合で――無所属者に、変えるほうが簡単ではあるまいか？　ただ……ただ、親愛なお人好し君、これは解党派の合法主義者の努力目標と、いったいどこが違うのだろう？　まったくどこにも違いはない！

ロンドンの諸決定または一九〇八年一二月の諸決議に不満ではあるが、党内で党的に活動しようと望んでいる党擁護派の社会民主主義者は、これらの決議を党出版物のなかで批判するだろうし、修正を提案し、同志たちを説得し、自分の側に党内の多数を獲得するようつとめるだろう。われわれはこのような人々と意見が一致しないかもしれないが、彼らの事にのぞむ態度は党的であろうし、彼らは、イオーノフや『ゴーロス』派がやっているように、混乱を助長しはしないだろう。

ポトレソフ氏を見たまえ。

自分が社会民主党から独立しているということを世間に見せつけているこの「社会民主主義者」は、『ナーシャ・ザリャー』第二号五九ページで、こう叫んでいる。「そして、それを解決せずには、一歩もすすめることができず、ロシアのマルクス主義が時代の革命的意識のエネルギーと力をことごとく真に吸収した思想的潮流となることもできない」（親愛な独立派氏よ、もうすこし空文句を減らすことはできないのか！）「これらの問題、それはどれほどたくさんあることだろう！　ロシアの経済的発展はどのようにすすんでいるか、この発展は、反動のかげで諸勢力のどのような配置換えを生じさせているか、農村と都市ではなにが起こっているか、この発展はロシアの労働者階級の社会的構成にどのような変化をもたらしつつあるか、等々？　これらの問題にたいする解答または解答の端緒はどこにあるか、ロシア・マルクス主義の経済学の学校はどこにあるか？　また、かつてメンシェヴィズムに生命をあたえていた政治的な思想活動はどうなったのか？　その組織上の探求、過去についてのその分析、現在についてのその評価は、どうなったのか？」

もしこの独立派が、苦吟した空文句をしゃべりちらすのでなしに、自分が言っていることをほんとうに考えていたなら、彼はきわめて簡単な一事を見てとったであろう。もしこれらの問題を解決せずには、革命的マルクス主義者は実際に一歩もすすめることができないとすれば（そして、それは真実である）、それらの解決——学問的な完成や学問的な探求という意味の解決ではなく、どのような歩みをどのようにおこなわなければならないかを規定する意味での解決——にあたらなければならないのは、社会民主党である。なぜなら、社会民主党の外にある「革命的マルクス主義」とは、「われわれもまた」ほとんど社会民主主義者であるとときどき自慢したがる合法主義的おしゃべりどものたんなるサロン的空文句にすぎないからである。社会民主党は、右にあげられた諸問題にたいする解答の端緒をあたえた。ほかならぬ一九〇八年一二月の諸決議のなかであたえたのである。

独立派はかなり巧妙な構えをとった。彼らは合法出版物では、自分の胸をたたいて、「革命的マルクス主義者のどこに解答の端緒があるか？」と質問する。独立派は、合法出版物では彼らに答えるわけにいかないのを知っているのである。他方、非合法出版物では、これらの独立派の友人たち（ゴーロス派）が、「それを解決せずには一歩もすすめることのできない」諸問題に解答をあたえることを、軽蔑してはねつけている。この世で独立派に（つまり、社会

主義の変節者に）必要なことは、みな達成される。響きの高い空文句もそこにあるし、社会主義と社会民主党からの事実上の独立もそこにある。

（6）独立派合法主義者のグループについて

こんどは、総会のあとで起こったことを解明することにしよう。トロツキーとイオーノフは、この問題にたいして、一致して簡単な解答をあたえている。ウィーン派の決議はこう言っている。「政治生活の外的諸条件にも、わが党の内的関係にも、党建設の仕事を困難にするような、現実の変化は、総会後になにひとつ起こらなかった。」……分派が再現したこと、分派的関係の遺産が克服されていないこと、これがすべてなのだ。

イオーノフも「人物をあげて」同じ説明をしている。「総会は終わった。出席者たちは散っていった。……旧来の分派の指導者たちは自由の状態にあり、どんな外部からの影響や圧力からも解放されていた。そのうえ、おりよくかなりの援軍もやってきた。すなわち、一方の側には、最近、党にたいする戒厳令の布告をしきりに説いている同志プレハーノフという援軍が、他方の側には、『ゴーロス・ソツィアルーデモクラータ』編集部がよく知っている古い党活動家」（第一九―二〇号、『公開状』(三三)を見よ）「一六名の援軍がやってきた。こうした事情のもとで、どうして戦闘に突入しないでいられようか？　こうしてたがいに撲滅しあうという例の『事業』に取りかかったのである」（『オートクリキ・ブンダ』第四号、二二ページ）。

分派に属する連中のところにおりよく「援軍」がやってきた、そこで――またもやなぐり合った、それだけのことである。なるほど、ボリシェヴィキへの「援軍」としては、おりよく党擁護派メンシェヴィキのプレハーノフがやってきたし、解党派とたたかいながら「おりよくやってきた」。だが、これは、イオーノフにとってはどうでもよいことである。イオーノフにはどうやら、ポトレソフや同志I〔ゴーレフ、ベ・イ〕（「すべてを解散させる」ことを提案した）その他とのプレハーノフの論戦が気にいらないらしい。彼には、もちろん、この論戦を非難する権利がある。だが、いったいどうして、この論戦を「党にたいする戒厳令の布告」と呼ぶのか？　解党派とのたたかいは党にたいする戒厳令の布告である、――同志イオーノフのこの「哲学」を記憶にとどめておこう。

国外のメンシェヴィキのためには、ロシア国内のメンシェヴィキが援軍として現われた。しかし、この事情も、すこしも同志イオーノフに熟考をうながさない。

トロツキーとイオーノフのこのような「現情勢の評価」から、どういう実践的な結論がでてくるかわかりきっている。なにも特別なことは起こらなかった。ただ分派のつかみあいがあるだけだ。新しい中和者たちをたてれば、万事うまくいくだろう、というのである。いっさいが、サークル外交の見地から説明されるのだ。あらゆる実践上の処方は、サークル外交ただ一つである。「戦闘に突入した者」がおり、「調停」の希望者たちがいる。そこでは「土台」についての記述をけずり、ここでは「機関」に某を補充し、あそこでは党協議会の招集方法で合法主義者に「譲歩する」。……在外者のサークル根性の例によって例のごとき物語だ!

総会のあとに起こった事柄についてのわれわれの見解は、これとは違う。

全員一致の諸決議をかちとり、「喧嘩腰の」非難をすべて取りのぞくことによって、総会は最後的に解党派を窮地に追いつめた。喧嘩のかげに隠れることは、もうできない。譲歩的でないとか、「機械的圧迫」(非常事態、戒厳状態、包囲状態などはその変種である)だとか言いたてることは、もうできない。党を離れるには、もっぱら解党主義の理由によるほかはない。(フペリョード派が党を離れるには、もっぱら召還主義と反マルクス主義的哲学の理由によるほかはないのと同じように。)

追いつめられた解党派は、その「素顔」をあらわした。彼らの国内中央部は――正式のものであるかないかを問わず、半非合法的(ミハイル一派)であるか完全に合法的(ポトレソフ一派)であるかを問わず――、党に帰れという呼びかけに拒否をもって答えた。ロシア国内の解党派合法主義者は、最後的に党と絶縁し、独立派社会主義者(もちろん、社会主義から独立し、自由主義に従属している)のグループに結束した。一方、ミハイル一派の回答と、他方、『ナーシャ・ザリャー』および『ヴォズロジデーニエ』の声明は、まさに反党的な「社会民主主義者」(正しくは、えせ社会民主主義者)の諸サークルが、独立派社会主義者の一グループに結束したことを示している。だから、トロツキーとイオーノフの「調停」の大骨折りも、いまでは滑稽でみじめである。こういう大骨折りは、いま起こっている事柄を彼らがまったく理解していないということでしか説明できない。こうした大骨折りはいまでは無害である。というのは、国外のサークル外交家のほかには、どこか片田舎のなにもわからず、なにも知らない連中のほかには、だれひとりそれを支持するものはいないからである。

トロツキーやイオーノフ式の調停派は、総会で調停主義的外交に花を咲かせた特殊条件を、今日の党生活の一般的

条件とどり違えて、誤りをおかした。総会で外交がその役割を演じたのは、主要な両分派のうちに和解（——党の統合）への深い志向を生みだした諸条件があったおかげなのだが、彼らはこの外交を自足的な目標ととり違え、「一定の人物やグループや機関」のあいだで工作するための長ものする道具ととり違えた点で、誤りをおかしたのである。

総会では実際に、外交をやる余地があった。というのは、党擁護派ボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキとの党的統合は必要であったし、譲歩せず、妥協しないでは、それは不可能だったからである。譲歩の度合いを決めるさいには、不可避的に「正直なブローカー」が前面に出てきた。——不可避的にというのは、党擁護派メンシェヴィキと党擁護派ボリシェヴィキにとっては、統合全体の原則的基礎が有効であるかぎり、譲歩の度合いの問題は第二義的な問題であったからである。トロツキーやイオーノフ式の「調停派」は、総会で前面に出てきて、「中和者」としての役割、喧嘩をなくし、ボリシェヴィキ中央部にたいする「要求」を満足させるための「裁判官」としての役割を演ずる可能性を手に入れたので、「一定の人物やグループや機関」があるかぎり、自分らはいつでもこの役割を演ずることができるだろうと考えた。滑稽な思いちがいだ。全員の一致を得るために必要な譲歩の度合いを決めなければならないときには、ブローカーが必要である。統合の一般的な原則的基盤がたしかにあるときには、譲歩の度合いを決める必要がある。あらゆる譲歩がなされたあとでだれがこの統合にくわわるかという問題は、そのときにはまだ未解決になっていた。なぜなら、原則上は、すべての社会民主主義者が党にはいることを希望し、すべてのメンシェヴィキが反解党主義的な決議を、またすべてのフペリョード派が反召還主義的な決議を、忠誠な態度で遂行することを希望しているという約束上の仮定をすることが、避けられなかったからである。

だが、いまではブローカーの必要はなくなり、彼らの割りこむ余地はない。なぜなら、譲歩の度合いという問題がないからである。そして、譲歩の度合いという問題がないのは、どんな譲歩の問題もないからである。総会ではあらゆる譲歩が（過度の譲歩さえ）なされた。いまや問題となっているのは、もっぱら、解党主義との闘争という原則的立場であって、しかもこの闘争は一般的に解党主義との闘争というのではなく、独立派の解党派の特定グループとの、すなわちミハイル一派のグループ、ポトレソフ一派のグループとの闘争なのである。もしトロツキーとイオーノフが、いまでも、党と一定の人物やグループや機関とを「和解」

させようと企てているとすれば、われわれにとって、すなわち、すべての党擁護派ボリシェヴィキとすべての党擁護派メンシェヴィキとにとっては、彼らはたんなる党の裏切者にすぎず、それ以上ではないだろう。

調停派外交家が総会で「有力」であったのは、もっぱら、党擁護派ボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキが平和を望んでおり、平和の諸条件の問題には、反解党主義的および反召還主義的な党戦術の問題にくらべて、従属的な意義しかあたえていなかったからであり、またそのかぎりであった。たとえば、私は譲歩が度をこえていると考えて、譲歩の度合いをめぐってたたかった（それは、『ゴーロス』第一九―二〇号がほのめかしており、またイオーノフが率直に語っているところである）。だが、私はその当時でも和解する用意があったし、今日でも、それで党の方針がくずれないなら、譲歩がこの方針の否定にみちびかないなら、譲歩が人々を解党主義や召還主義から引きはなして党へ引きよせるための橋となるなら、度をこえた譲歩にさえ応ずる用意がある。だが、ミハイル一派、ポトレソフ一派が、党に反対し総会に反対して結束し行動したあとでは、どのような譲歩についてのどのような話合いにも、私は応じない。なぜなら、いまや党はこれらの独立派と絶縁しなければならないし、完全にまた最後的に立場を明らかにした解党派として、彼らと断固としてたたかわなければならないからである。そして、私は、自分だけでなく、すべての党擁護派ボリシェヴィキに代わって、確信をもって言うことができる。党擁護派メンシェヴィキは、プレハーノフその他の口をつうじて、これと同じ趣旨の意見を十分はっきり表明した。そこでこうした党内事情のもとでは、トロツキーやイオーノフ式の「調停派」外交家たちは、その外交を捨てるか、党を去って独立派のところへ行くか、どちらかにしなければならないだろう。

合法主義者が最後的に独立派社会主義者の一グループに結束したことを悟るためには、総会のあとでの出来事をざっと見るだけで十分であり、イオーノフが徒労にもそれに限ろうとしている「紛争」のこまごました、くだらないいきさつの観点だけから評価するのでなく、本質についてこれらの出来事を評価してみればよい。

（一）ミハイル、ロマンおよびユーリーは、中央委員会（総会）の諸決議も、中央委員会の存在そのものも、有害であると公言した。この事実が発表されてから約二ヵ月を経たが、この事実は反駁されていない。それがまちがいないことは明らかである。*

* つい最近『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』第二一号が発行された。その一六ページで、マルトフとダンは、

「三名の同志（??）が中央委員会にはいることを拒絶した」と述べ、この事実がまちがっていないことを裏書きしている。例によって、彼らはそのさいトィシカ＝レーニンに長たらしい悪罵をあびせかけることによって、ミハイル一派のグループが最後的に独立派のグループに変わった事実を隠蔽している。

（二）前記の三人組のうちすくなくとも二名をふくむロシア国内の一六名のメンシェヴィキと多くの著名なメンシェヴィキ文筆家（チェレヴァニン、コリツォフその他）とは、編集部の承認を得て『ゴーロス』誌上で、メンシェヴィキの脱党を正当化する発言をおこない、純解党主義的な声明を発表した。

（三）メンシェヴィキの合法雑誌『ナーシャ・ザリャー』が、ポトレソフ氏の綱領的論文を掲載した。それには、あからさまに、「まとまった、組織された諸機関の階層制としての党は、存在しない」（第二号、六一ページ）、「組織された全一体としてはすでに事実上存在していないもの」を、解党させることはできない（同上）と述べている。この雑誌の寄稿家のうちには、チェレヴァニン、コリツォフ、マルトィノフ、アウグストフスキー、マスロフ、マルトフがはいっている。――このマルトフとは、「組織された全一体」のもっているような中央部をもつ非合法党の「組織された諸機関の階層制」のなかに席を占めながら、同時にまた、ストルィピンの寛大な許しを受けて、この非合法党を存在していないと公言する合法グループにも所属することのできる、あのエリ・マルトフである。

（四）同じ顔ぶれの寄稿家をもつメンシェヴィキの大衆雑誌『ヴォズロジデーニエ』（一九一〇年三月三〇日付第五号）の無署名論文、つまり社説は、『ナーシャ・ザリャー』にでたポトレソフ氏の前記の論文を激賞し、さきに私が引用したのとまったく同じ箇所を引用したあとで、つぎのようにつけくわえて言う。

「解党させるべきものはなにもない。――そしてわれわれは」（すなわち『ヴォズロジデーニエ』編集部は）「自分のほうからつけくわえて言おう――この階層制を、古い地下的な形で復活させようと夢みるのは、まったく有害な反動的空想であって、かつては最も現実主義的だった党の代表者たちが政治的感覚を失ったことを示すものである」（五一ページ）。

すべてこれらの事実を偶然の出来事と考える者は、明らかに、真実を見たくないのである。これらの事実を「分派の再現」ということで説明しようと考える者は、空文句でいい気になっているのである。ミハイル一派のグループも、ポトレソフ一派のグループもとっくの昔に分派精神や分派

闘争の局外に去っているのに、その分派精神と分派闘争がここになんの関係があるのか？　なにも関係はない。わざと眼を閉じようと思わない者にとっては、この点になんの疑いもありえない。総会は党擁護派の合法主義者を党に復帰させるうえでのすべての障害（現実の、あるいは仮想上の）、合法的可能性を利用する新しい諸条件と新しい諸形態とを考慮にいれた非合法党を建設するうえでのすべての障害を取りのぞいた。四名のメンシェヴィキ中央委員と二名の『ゴーロス』編集部員は、共同の党活動にたいするすべての障害は取りのぞかれたものと認めた。ロシア国内の合法主義者の一グループは、総会にたいする自分たちの回答をあたえた。この回答は否定的なものである。すなわち、非合法党の再建と強化にあたることを自分たちは望まない、なぜなら、それは反動的な空想だから、と。

この回答は、社会民主主義運動の歴史における最大の政治的事実である。独立派の（社会主義から独立した）社会主義者の一グループは、最後的に結束し、社会民主党と最後的に絶縁した。このグループがどれほどはっきりした形をとっているか、それは単一の組織からなっているか、それともたがいにきわめて lose に（自由に、ゆるやかに）結びついているいくつかの個々のサークルからなっているか、われわれはいまのところ知らないし、またそれは重要なことではない。重要なのは、党から独立したグループを形成しようとする傾向――以前からメンシェヴィキのあいだにあった――が、いまや新しい政治的形成へとみちびいたことである。そこで、こんごは、思いちがいをしたくないすべてのロシア社会民主主義者は、この独立派の一グループの存在を、事実として考慮にいれなければならない。

この事実の意義を明らかにするために、なによりもまず、フランスの「独立社会主義者」のことを思いおこしてみよ。彼らは、最も先進的な、いっさいの古いものを最も多く掃きすててしまったブルジョア国家で、この政治的流派の傾向をゆきつくところまで押しつめた。ミルラン、ヴィヴィアニ、ブリアンは社会党に所属していたが、一度ならず、党の決定にかかわりなく、党の決定にそむいて行動した。そして、ミルランが、共和制を救い社会主義の利益を守るという口実で、ブルジョア内閣にくわわった結果、彼は党と絶縁するにいたった。ブルジョアジーは、社会主義の裏切者に大臣の職を褒美にあたえた。フランスの変節者の三人組は、ひきつづき自分たちと自分たちのグループを独立派社会主義者と呼んでおり、労働運動と社会改良との利益ということで、ひきつづき自分たちの行動を正当化している。

わが国の独立派にたいしては、ブルジョア社会は、もち

ろんそれほど早く褒美をあたえることはできない。彼らは比較にならないほどおくれた条件のもとでやりはじめているのである。彼らは、自由主義的ブルジョアジー（メンシェヴィキの「独立主義」への傾向を昔から支持してきた）の賛辞と援助で満足しなければならない。だが、基本的な傾向はどの場合にも同じである。すなわち、社会主義政党からの独立は労働運動の利益をはかるためだとされている。「合法性獲得のための闘争」（ダンの定式化したスローガンで、変節的な『ヴォズロジデーニエ』が、その第五号の七ページで、きわめて熱心に唱和しているもの）が労働者階級のスローガンであると宣言されている。自由主義者といりまじって行動しているブルジョア・インテリゲンツィア（フランスでは国会議員、わが国では文筆家）が、現にグループにまとまりつつある。党への服従を彼らは拒否している。すなわち、ミルラン一派も『ヴォズロジデーニエ』および『ゴーロス』も、党は十分「現実主義的」でないと公言している。党について、党は「閉鎖的な地下サークルの独裁」（『ゴーロス』）であるとか、党は広範な進歩に害をおよぼす狭い革命的結社のなかに閉じこもっている（ミルラン一派）とか言っている。

わが国の独立派の立場を明らかにするために、さらに、わがロシアの「人民社会党」〔略称エヌ・エス〕結成の歴史をとってみたまえ。この歴史は、わが国の独立派とミルラン一派との「活動」の外的条件の大きな違いに目をとられてこの両者の親戚関係を見ない者に、事の核心を理解させるのを助けるだろう。わが「エヌ・エス」が小ブルジョア民主主義派の合法主義的な穏健な一翼であること、それは周知のことであって、マルクス主義者のうちだれひとりそれを疑ったものはないと思う。人民社会主義者は、一九〇五年末のエス・エルの大会で、(四六)小ブルジョア民主主義者の革命政党の綱領、戦術および組織の清算主義者として立ちあらわれた。一九〇五年秋と一九〇六年春の自由の日々の新聞では、彼らは、エス・エルときわめて緊密なブロックを結んで行動した。彼らは一九〇六年秋に合法政党となり、わかれて独立の党をつくったが、(四七)そのことは、彼らが第二国会の選挙や第二国会内で、ときおりエス・エルとほとんど合流することを妨げなかった。

一九〇六年秋に、私は『プロレタリー』紙上で人民社会主義者について書いたことがあったが、(四八)私は彼らを「エス・エルのメンシェヴィキ」と名づけた。それから三年半が過ぎ、いまポトレソフ一派は、党擁護派のメンシェヴィキに私が正しかったことを証明することができた。ただ、ペシェホーノフ一派の諸君が、事実上エス・エル党から独立した一連の政治的行動をとったあとで、自分たちはエ

ス・エルから独立した別個の政党であると公然と明言したことは、これらの諸君でさえポトレソフ氏とそのグループよりも政治的により正直な行動をとったものと認めなければならない。もちろん、この「正直さ」は、一つには諸勢力の相互関係によるものであった。すなわち、ペシェホーノフはエス・エル党を無力とみ、この党と非公式に結合していることで自分は損をしていると考えたのである。ポトレソフは事実上社会民主党から独立していながら、依然として社会民主主義者として通用していることによって、自分は政治的アゼフ主義(注)で得をしていると考えている。

ポトレソフ氏一派は、いまのところ、他人の名に隠れ、ロシア社会民主労働党の威信を悪がしこく利用しながら、党を内部から分解させ、党から独立に行動するだけでなく、事実上これに反対行動をとることが、自分らに最も有利であると考えている。わが独立派のグループが、できるだけ長いあいだ他人の羽根で仮装しようとつとめるということも、ありうることである。また、党がなにかの打撃を受けたあとで、非合法組織が大きないっせい検挙をくったあとで、あるいは、たとえば党とは独立に国会に当選する可能性があるというような、とくに魅力ある状況が生まれた場合に、独立派がみずから仮面をかなぐりすてる、ということもありうる。——われわれは、彼らの政治的いかさま行為のありとあらゆる挿話を予見することはできない。

しかし、次のことだけは、われわれはしっかり心得ている。すなわち、労働者階級の党、ロシア社会民主労働党にとって、独立派の隠蔽された活動は有害で破滅的なものであるということ、また、われわれはぜひとも彼らの活動を暴露し、独立派を明るみに引きだし、彼らが党といっさいの関係を断ったことを明らかにしなければならないということがそれである。総会はこの道を大きく一歩前進した。これが一見どれほど奇妙に思われるにしても、ほかならぬマルトフとマルトィノフの同意(不正直な、あるいは無意識の)こそ、ほかならぬ彼らにたいする最大限の、度をこえてさえいる譲歩こそ、解党主義の腫れ物、わが党内の独立派の腫れ物を暴露することを助けたのである。どの分派に共鳴しているかにかかわらず、いまや、良心的な社会民主主義者はだれでも、党擁護派の者はだれでも、ミハイル一派のグループ、ポトレソフ一派のグループが独立派であること、彼らは実際に党を認めず、党を望まず、党に反対して活動していることを、否定することはできない。

独立派の分離と彼らによる独自の党の結成とが成熟していく過程が、どれほど急速に、あるいはどれほどゆるやかにすすむかは、もちろん、予測しがたい多くの原因と事情にかかっている。人民社会主義者のあいだには、革命以前

に独自のグループが存在していた。そこで、一時あやふやに社会革命党に加盟していたこのグループの分離は、とくべつ容易であった。わが独立派は、まだ個人的な伝統や党とのつながりをもっており、それが分離過程をおくらせているが、これらの伝統はますます弱まっており、そのうえ、革命と反革命はどんな革命的伝統も党的伝統ももたない新人を押しだしている。そのかわり、「道標派」的な気分にみちた四囲の環境は、無定見なインテリゲンツィアを非常な速さで独立主義へと押しやっている。革命家の「古い」世代は舞台から退きつつある。その大部分が自由の日々に、革命時代に自分たちの仮名や秘密活動をすっかり明るみに出してしまったこの世代の代表者たちを、ストルィピンは全力をあげて駆りたてている。監獄、流刑、懲役、亡命は、戦列から離れるものの数をますます増大させているが、新しい世代の成長は緩慢である。インテリゲンツィアのあいだには、とくにあれこれの合法活動に「腰をおちつけた」もののあいだには、非合法党にたいする完全な不信が増大しており、とくに困難で、現在ではとくに報いられるところの少ない活動に力を費やしたくないという気持が強まっている。「非運のときの友が真の友」である。そして、新旧の反革命勢力の強襲を受けて苦しい時期に際会している労働者階級は、不可避的に、インテリゲンツィアの「ひとときの友」、祝祭時の友、革命期だけの友――革命期には革命家であったが、退潮期には屈服し、反革命が成功をおさめるやいなや「合法性獲得のための闘争」をすすんでとなえる友――がますます多く脱落していくのを見ることだろう。

幾多のヨーロッパ諸国で、反革命勢力は、たとえば一八四八年のあとで、プロレタリアートの革命的組織と社会主義的組織の残存物を、きれいに一掃することに成功した。青年時代に社会民主党にくわわっていたブルジョア・インテリゲンツィアは、そのまったくの素町人心理のために、あきらめの気持になりがちである。これまでもそうであった、――これからもそうであろう。旧来の非合法組織を守ることは望みのない仕事だし、新しい非合法組織をつくることは、それよりももっと望みがない。われわれは、だいたい、ブルジョア革命におけるプロレタリアートの力を「過大評価」した。われわれがプロレタリアートの役割に「世界的な」意義を認めたのはまちがいだった、と。――変節的な『〔二〇世紀初頭のロシアの〕社会運動』のこれらいっさいの愚論は、直接間接に、非合法党の否認へと押しやるものである。独立派は、いったん斜面に立ってからは、自分がどんどん下へころがりおちていくことに気がつかず、自分がストルィピンと手に手をとって働いていることに気がつかない。ストルィピンは肉体的に、警察的に、

絞首台と懲役をつかって、非合法党を破壊しており、——自由主義者は道標派の思想を公然と宣伝して、同じことをそのままやっており、——独立派は、社会民主主義者のあいだで、党の「麻痺状態」について叫びたて、党を助けることを拒み、党からの脱退を正当化して（『ゴーロス』第一九—二〇号の一六名の手紙を見よ）、間接に非合法党の破壊に協力している。一段また一段というわけだ。

反革命期が長びけば長びくほど、われわれにとって党のための闘争がそれだけ苦しくなるということに、眼を閉じてはならない。党擁護派の人々が危険を過小評価していないこと、彼らがこの危険を直視していることは、たとえば、中央機関紙第一三号にのった同志K〔ステクロフ〕の論文が示している。しかし、党の弱さ、組織の分解、情勢の困難さをきっぱり率直に認めながらも、同志Kはそのために、党が必要であるかどうか、党を再建するために活動する必要があるかどうかについて、かたときも動揺してはいない。——また、党擁護派のだれひとりとして、そのために動揺するものはいないのである。われわれの状態が困難になればなるほど、敵の数がふえればふえるほど——おとといは道標派が、きのうは人民社会主義者が、きょうは独立派の社会民主主義者が敵にくわわった——、すべての社会民主主義者は色合いの別なく、党を防衛するためにますますかたく結束するであろう。革命的気分をもち社会民主党を信頼している大衆をどうやって強襲にみちびいていくかという問題では、多くの社会民主主義者の意見がわかれるかもしれないが、一八九五—一九一〇年につくりだされた非合法の社会民主労働党を維持し強化するためにたたかうことが必須かどうかという問題は、彼らを団結させずにはいないだろう。

『ゴーロス』とゴーロス派についていえば、彼らは、昨年六月の『プロレタリー』拡大編集局会議の決議が彼らについて述べたことの正しさを、いちじるしくあざやかに裏書きした。この決議はこう言っている（『プロレタリー』第四六号付録、六ページを見よ）。「党のメンシェヴィキ陣営では、この分派の公式機関誌である『ゴーロス・ソツィアル-デモクラータ』が解党派のメンシェヴィキに完全にとりこにされている一方で、この分派の少数派は、解党主義の道を行きつくところまでためしてみたあげく、すでにこの道に反対して抗議の声をあげ、自分らの活動のための党的な基盤をあらためてさがしもとめている。」……解党主義の道の「行きつくところ」までの距離は、われわれが当時考えていたよりも長かったが、ここに引用したことばの基本思想の正しさは、それ以来いろいろの事実によって証明された。とくに正しいことが確証されたのは、『ゴー

ロス・ソツィアルーデモクラータ』に適用した「解党派のとりこ」という用語である。それは、まさしく、解党派のとりこであって、率直に解党主義を擁護する勇気もなければ、率直にこれに反対して立つ勇気もない。彼らが総会で全員一致でいろいろの決議を採択したのも、自由な人間としてではなく、自分の「主人」から短期間休暇をもらい、としてであった。彼らは、解党主義を擁護するわけにいかない総会が終わった翌日にはふたたび奴隷の身にもどるとりこないので、ありとあらゆる可能な（およびあらゆる架空の！）障害を、全力をあげて固執した。それらは、原則問題とはなんの関係もなかったが、彼らが解党主義を否認する妨げとなるものなのであった。そして、これらの「障害」がみな取りのぞかれ、彼らの付随的な人事上、組織上、金銭上その他の要求がすべて満足させられたとき、彼らは心ならずも解党主義の否認に「賛成投票」したのである。あわれむべし！　彼らは、そのとき一六名の声明がすでにパリに送られる途上にあったこと、ミハイル一派のグループ、ポトレソフ一派のグループが解党主義擁護の立場をかためたことを、知らなかったのである。そして、彼らは従順に一六名に従い、ミハイルに従い、ポトレソフに従って、ふたたび解党主義に転じたのである！

この人々を擁護しまたは正当化しているイオーノフやトロツキーのような無定見な「調停派」の最大の罪悪は、この人々の解党主義への従属を支援して、彼らを破滅させている点にある。どの分派にも属さないすべての社会民主主義者がミハイル一派やポトレソフ一派にたいして断固として反対すれば（トロツキーも、イオーノフも、これらのグループを擁護する決心はつかないではないか！）、解党主義のとりこになっているゴーロス派のだれかれが党に復帰したかもしれないのに、――「調停派」のしかめづらや気どった身ぶりは、党と解党派をすこしも和解させずに、ゴーロス派に「無意味な期待」をいだかせているにすぎない。

もっとも、このしかめづらと気どった身ぶりとは、疑いもなく、たんに情勢を理解していないためであるところが少なくない。それを理解していないからこそ、同志イオーノフは、マルトフの論文をのせるかのせないかの問題に話を限ることができるのだし、ウィーンのトロツキー支持者たちは、問題を中央機関紙内の「紛争」に帰着させることができるのである。ところで、マルトフの論文（『正しい道に立って』……ただし解党主義への）や、中央機関紙内の紛争は、全体との関連を離れては理解できない部分的な挿話にすぎない。たとえば、マルトフの論文は、解党主義とゴーロス主義のあらゆる色合いを一年間にわたって研究してきたわれわれに、マルトフが方向転換した（あるいは

転換させられた）ことを、はっきりと示した。同じ一人のマルトフが、党協議会についての中央委員会の『手紙』に署名し、しかも論文『正しい道に立って』を書くなどということは、できるものでなかった。トロツキーとイオーノフは、マルトフの論文を諸事件の連鎖から切りはなし、すなわち、この論文にさきだつ中央委員会の『手紙』、この論文につづく『ゴーロス』第一九―二〇号、一六名の声明、ダン（『合法性獲得のための闘争』）、ポトレソフおよび『ヴォズロジデーニエ』の諸論文から切りはなし、中央機関紙内の「紛争」を同じ諸事件の連鎖から切りはなすことによって、いま起こっていることを理解する可能性を自分から取りあげているのである。[*] 反対に、もしすべての基底にあるもの、すなわち、ロシア国内の独立派が、最後的に結束したこと、彼らが非合法党を復活し強化するという「反動的な空想」と最後的に絶縁したことを中心におくなら、なにもかもすっかり明瞭になるのである。

* さらに、一例として、合法的な個々人と非合法党との「同権の理論」をとってみたまえ。この理論の意味と意義とが、独立派合法主義者のグループを承認し、党を彼らに従属させるにあることは、ミハイル一派、ポトレソフ一派の行動を見たあとでは明らかではないだろうか？

（7） 党擁護派のメンシェヴィズムとその評価について

わが党内の「統合の危機」を明らかにするために、われわれが検討しなければならない最後の問題は、いわゆる党擁護派メンシェヴィズムとその意義の評価の問題である。

非分派的な――いや、非分派的と見られたがっている――イオーノフとトロツキーの見解（『プラウダ』第一二号とウィーン決議）は、この点できわめて特徴的である。トロツキーは断固として、頑強に、党擁護派メンシェヴィズムを無視している――これについてはすでに中央機関紙の第一三号で指摘しておいた[(三)]――が、イオーノフは、「同志プレハーノフ」の言動の意義は（イオーノフはその他の党擁護派メンシェヴィキを見ようとしない）ポリシェヴィキの分派闘争に「援軍を送り」、「党にたいする戒厳令の布告」を説くことに帰着すると言明して、同意見者〔トロツキー〕の「内心の」考えをもらしている。

トロツキーとイオーノフのこの立場がまちがっていることは、いろいろの事実がその立場を反駁していることからしても、彼らはすぐそれに気づいたはずである。中央機関紙第一三号からわかるように、すくなくとも七つの在外党協力者グループで――パリ、ジュネーヴ、ベルリン、チュ

ーリヒ、リエージュ、ニース、サン・レモで――、プレハーノフ派が、もっと正確にいえば党擁護派のメンシェヴィキが、『ゴーロス』に反対して立ちあがり、総会の諸決定を履行することを要求し、『ゴーロス』の閉鎖を要求し、『ゴーロス』第一九―二〇号でとられている思想的立場の解党主義的性格を指摘した。同じ過程は、それほど明瞭ではないかもしれないが、ロシア国内の活動家のあいだでも起こっている。これらの事実を隠しておくのは滑稽である。これらの事実にもかかわらず、プレハーノフのゴーロス派との闘争を、文筆家の「分派」闘争のように描きだそうとするのは、――客観的には――党に反対して独立派合法主義者のグループの味方となることである。

　前記の「調停派」がとっている明らかにまちがった、明らかに維持できない立場は、総会における統合の政治的意義が「一定の人物やグループや機関との」協定にあったかのようにみる彼らの見地の出発点の誤りに、彼らの目を開かせるはずである。党内の諸事件の外的な形態や、これらの諸事件の人的な特殊性にだまされてはならない。いま起こっていることの思想的＝政治的意義を評価しなければならない。外見から判断すれば、ゴーロス派の某々とのあいだに協定がなりたった。しかし、協定の基礎、その条件は、ゴーロス派がプレハーノフの立場に移ることではなかったか。このことは、さきに示した党内事情にかんする決議の分析から明らかである。* 外見上ではゴーロス派こそが党内におけるメンシェヴィズムの代表者であった――たとえば中央機関紙〔編集局〕の構成から判断すればそうである。実際には、中央機関紙は、総会のあとでは、ゴーロス派の全面的な反抗を受けながら、党擁護派ボリシェヴィキとプレハーノフ派との「協働」の機関紙に変わりはじめた。こうして、党統合の発展にジグザグのコースが生まれた。はじめは、統合の思想的基礎がはっきり確定していない、いわば全般的和解の雑炊といったようなものであったが、やがて政治的傾向の論理が本来の力を発揮するようになり、このように総会でゴーロス派に最大限の譲歩をしたことによって、党から独立派を淘汰する過程が促進される結果になった。

* 総会に出席した四名のメンシェヴィキ中央委員のうちの二名は、ゴーロス派に最大限の譲歩をしたあとで、事実上彼らをプレハーノフの立場に移らせるために全力を傾けた。このことは、この二人が確固たる党擁護派であったことを意味するものではなく、彼らがゴーロス派に復帰しないのは確実だということを意味するものでもない。このことは、メンシェヴィズムがまだ党的立場を否認できないような時機にあったということを意味している。

「右と左の解党派とたたかうための強力な諸分派の協定」

というスローガン（このスローガンを『ゴーロス』は括弧にいれているが、総会のまえにも総会でもこのスローガンを擁護したのは私だということを、どういうわけか率直に言っていない）に反対する気ちがいじみた論難を総会で聞き、『ゴーロス』（第一九―二〇号、一八ページ）誌上で見たとき、私は腹のなかで考えた。《abwarten!》,《wait and see》（いまにわかるだろう！）。しばらく待ちたまえ、ゴーロス派の諸君。なぜといって、諸君は、「主人ぬきで」協定をしたいと思っているではないか。肝心なのは、協定に参加する可能性を、総会が「強力な」、その思想的＝政治的立場によって強力な分派だけにあたえないで、すべてのものにあたえたことにあるのではない。肝心なことは、諸君の「主人」――すなわち、独立派合法主義者の諸グループ――が、この可能性を現実に変えることを許すかどうかということだ、と。

数ヵ月が過ぎた。――そして、いまでは、実際に「強力な諸分派の協定」こそが党の統合をなすものであり、それが「あらゆる障害をこえて」この統合を前進させているということを見ないでいられるのは、めくらだけである。党内の現実の力関係からしてそうでなければならないし、そうでしかありえないのである。近い将来に、党のすべての指導機関がこの協定を表現するように正式に改組されるか、それとも、党生活と党統合の発展とがしばらく党の指導機関と無関係にすすむか、どちらかとなることは疑いない。

たしかに、党擁護派メンシェヴィキを「強力な分派」と呼ぶことは、一見奇妙に思われる。というのは、現在では――すくなくとも国外では、どうやらゴーロス派のほうがより強力であるらしいからである。しかし、われわれ社会民主主義者は、国外の諸グループがその意見をどう表明しているか、メンシェヴィキの文筆家たちがグループをどうつくっているかによって力を判断するのではなく、だれの立場が客観的に正しく、だれの立場が政治的地位の論理によって「独立派」に従属する運命を負わされているかによって、それを判断するのである。一八九八―一九〇〇年には、国外でもロシア国内でも、ラボーチエ・デーロ派(三二)のほうがイスクラ派(三三)より強力であったが、それでも彼らは「強力な分派」ではなかった。

ゴーロス派がプレハーノフに反対して全勢力を動員し、彼にたいしてそのありったけの汚水桶――ポトレソフ氏にいたるまで、また一九〇一―一九〇三（原文のまま！）年にマルトフがどのように「侮辱された」かという思い出にいたるまで――をもちだしたいまでは、ゴーロス派のこの無力は、とくに明白になっている。ロシア国内で『ナーシャ・ザリャー』二月号と『ヴォズロジデーニエ』三月号が

問題をまったく別の面に移しているとき、プレハーノフが中央機関紙の第一三号で、すでに彼とゴーロス派との衝突のいきさつから筆を転じて、彼らの現在の政策に反対する闘争に移っているとき、アクセリロード一派は、四月に国外で、プレハーノフにたいする人身攻撃的な悪罵の論集(33)を出版して、すでにどうしようもないほど政治的におくれてしまった。古い（一九〇一年にいたるまでの！）「侮辱」を思いだしているゴーロス派も、いまでもボリシェヴィキ中央部にたいする防衛を善良な人々に呼びかけているフペリョード派も、同じようにたよりなくもがきまわっているのだ。

そして一九一〇年に、「レーニン＝プレハーノフ」協定（彼らの用語である！）のことを考えただけでも激怒する――一年まえにマクシーモフが同じ理由で激怒したように――わが「侮辱された人々」が、ますます馬脚をあらわしていくのを見たまえ。マクシーモフと同様に、ゴーロス派は、ほとんど「レーニンとプレハーノフ」の個人的協定が問題となっているかのように事態を描きだそうとつとめており、そのさい後者の行動は、「とっぴな気まぐれ」（『必要な補足』一六ページ）、「サウロのパウロへの転化(34)」、「渡りあるき」等々であると説明されている。マルトフは、メンシェヴィキとしてのプレハーノフの「五年にわたる活動」（同所）を思いだして、この渡りあるきを理由に彼の信用を傷つけようと（おくればせながら）一生懸命になっているが、まさにそうすることによってだれよりも自分自身に唾を吐きかけているということに、気がつかない。

この同じ『必要な補足』のなかで、『ゴーロス』の編集者集団は、プレハーノフはほかならぬ上記の五年間（一九〇四―一九〇八年）には「偉大」であった、とわれわれに断言している（三二ページ）。すると、どういうことになるのか、見てくれたまえ。メンシェヴィキは、プレハーノフが節操をたもっていた、またメンシェヴィキでもボリシェヴィキでもなくて社会民主党の創立者であった二〇年間（一八八三―一九〇三年）における彼の活動のために彼を「偉大」であると公言しているのではなく、当のメンシェヴィキが認めるところでは彼が「渡りあるいていた」、すなわちメンシェヴィキ的方針を一貫して堅持しなかった、ほかならぬ五年間の活動のために、彼を「偉大」であると公言しているのである。そうすると、「偉大さ」は、メンシェヴィズムの泥沼にすっかりはまりこまないことにあった、ということになる。

しかし、アクセリロードとマルトフが思いだしてみそをつけたメンシェヴィズムの五年間の歴史こそ、マルトフが強調しているようなけちくさい個人的理由とは違った仕方

でメンシェヴィキの分裂の理由を明らかにするのを助ける幾多の事実を示しているのである。
プレハーノフは、一九〇三年に『イスクラ』第五二号にのせた論文『なにをなすべきでないか』のなかで、日和見主義者をあいてに駆引をやり、駆引で彼らを矯正したいと言明して、アクセリロードとマルトフを〔『イスクラ』編集局員に〕補充した。彼はそのさい、ボリシェヴィキにたいして極端な攻撃をくわえたほどであった。彼は、一九〇四年末には、はっきり自由主義に転落したアクセリロードを引っぱりだそうとつとめた（『ゼムストヴォ・カンパニア計画』）が、ゼムストヴォ議員の前でのデモンストレーションを「デモンストレーションのより高度の型」だと公言する（党員だけのために出版された小冊子『中央委員会への手紙』のなかで）ような珠玉についてはただのひとことも語らないようなやり方で、これをおこなった。一九〇五年春には、プレハーノフは「駆引」が見こみのないこと(三四)を確信して、メンシェヴィキから離れ、『ドネヴニーク』を創刊して、ボリシェヴィキとの合同を説いた。『ドネヴニーク』第三号（一九〇五年一一月）は、全然メンシェヴィキ的ではなかった。
党内の日和見主義者を相手に駆引をやることに約一年半を費やした（一九〇三年末から一九〇五年春まで）のち、プレハーノフは、一九〇六年はじめから一九〇七年いっぱい、カデットをあいてに駆引をやろうと企てた。そのさい彼は、他のメンシェヴィキよりもはるかに日和見主義的な極端にはしった。しかし、彼が、第一国会の時期(三五)には「駆引をやる」と宣言しながら、国会が解散されたあとで憲法制定議会をめざす闘争のための革命的諸政党の協定を提案したとき（一九〇六年八月二九日付第二号、論文『戦術上の動揺』で）、『プロレタリー』は（『ドネヴニーク』第六号で）、すぐさま、この立場は全然メンシェヴィキ的でないと指摘した。(三六)
一九〇七年春のロンドン大会では、プレハーノフは、――すでに私が論集『一二年間』の序文に引用したチェレヴァニンの話によれば(三七)――メンシェヴィキの組織上の無政府主義とたたかった。彼には「労働者大会」は、党に反対するための駆引としてではなく党を発展させるための駆引として必要であった。一九〇七年の後半には、マルトフが『必要な補足』のなかで語っているところによれば、プレハーノフはアクセリロード（明らかに、事実上無党派的な合法的機関紙のほうがよいと考えていた）に反対してメンシェヴィキの非合法（すなわち党的な）機関紙の必要を主張するために「少なからぬ雄弁をふるわなければならなかった」。一九〇八年におけるポトレソフの論文をめぐる紛

争は、彼が解党派と絶縁するきっかけとなった。

これらの事実はなにを語っているか？　それは、メンシェヴィキの今日の分裂は偶然ではなくて、避けられないものだということである。「駆引をやる」ということは、駆引の名において誤りをおかした者を正当化するものではないし、プレハーノフのこれらの誤りに反対して私が書いたことを、私はなにひとつ取り消しはしない。しかし、「駆引をやる」ということは、独立派のところに去ることが、あるメンシェヴィキにとっては容易であり、ほかのものには困難で、不可能でさえある理由を明らかにしている。駆引をやることによって労働者階級をカデットのうしろに従わせる社会民主主義者は、内在する日和見主義への志向のためにそうする者におとらず、労働者階級に害毒をもたらす。だが、前者は、後者が穴のなかに転落するところでふみとどまる能力をもち、ふみとどまることができ、うまくふみとどまるであろう。ロシアの諺はこう言っている。ある種の人間は、神に祈らせると額に怪我をする、と。プレハーノフはこうも言うことができよう。ポトレソフらやダンらを駆引のために右へすすませようとすると、彼らは原則上右へすすんでいく、と。

あるメンシェヴィキがふみとどまったところは、「党擁護派メンシェヴィキ」という彼らの呼び名を十分正当なものとしている。彼らは、党のために独立派合法主義者に反対する闘争にふみとどまったのである。ポトレソフ氏と『ゴーロス・ソツィアルーデモクラータ』編集部は、『必要な補足』のなかで、この簡単明瞭な問題をうまく避けようとむだな試みをしている。

エンゲルスもS・D・F[五九]（イギリスの社会民主主義者）とたたかった、――とポトレソフは言い抜けを言う（二四ページ）。詭弁だ、親愛な君よ。エンゲルスは党を矯正しようとしたが[六〇]、君は党をどう矯正するのかを言っていないではないか、君はいま非合法の社会民主党が必要であるのかないのか、ロシア社会民主労働党が必要であるのかないのかをさえ、率直に言っていない。君はストルィピンの前では、必要はないと言うが（『ナーシャ・ザリャー』）、党員の前では、非合法出版物では、それを言う勇気がなく、逃げ口上を弄し、言い抜けを言っている。

「レーニン＝プレハーノフは、労働運動の新しい諸形態にたいする戦争を勧告している。」（三一ページ）「われわれは、現実の労働運動の状態、条件、要請から出発する。」（三二ページ）――と、編集部は断言している。詭弁だ、親愛な諸君よ。総会はこれらの新しい諸形態を認めさせるためにあらゆることをしたし、ボリシェヴィキは総会まえのその闘争によってこれを証明したということは、諸君自

身認めたところである。われわれの意見がわかれているのは、「新しい諸形態」が必要かどうか、合法活動をおこなうことが必要かどうか、合法団体をつくることが必要かどうか、ということをめぐってではない。全然そのことについてではない。われわれの意見がわかれているのは、この種の活動をおこなっているミハイル一派のグループ、ポトレソフ一派のグループのような合法主義者が、社会民主主義者の党から独立していながら、自分を社会民主主義者とみなすことが許されるのか、それとも、党に属する社会民主主義者は、党を承認し、党が必要なことを宣伝し、党内で活動し、党組織のために活動し、党との正しい連絡をたもつために、いたるところに、あらゆる団体のなかに非合法の細胞を組織する等々の義務があるのか、ということをめぐってである。そして、諸君は、われわれがいま——総会のあとでは——ただこのことだけをめぐって意見がわかれているのだということを、りっぱに理解している。

ゴーロス派は、党擁護派メンシェヴィキに近づき、独立派に反対して党のためにたたかうために彼らと協定を結ぼうとするわれわれの志向を、「レーニンとプレハーノフ」の個人的なブロックとして描きだそうとつとめている。彼らは、『プロレタリー』第四七—四八号にのった[二]ポトレソフに反対する論文の筆者を、プレハーノフとの「協定を見こして思惑をやっている」、「おべっかつかいの廷臣」の態度だといって、さんざんののしっている。

私はこの論文をひらいて、その第七ページにこう書かれているのを見る。

「もちろん、革命期にプレハーノフがおかした誤りもみな、まさに、彼が旧『イスクラ』でみずからとった方針を首尾一貫して遂行しなかったことから生じたのである。」

ボリシェヴィキがプレハーノフの誤りだと考えていることとをこのように率直に指摘することと、プレハーノフがメンシェヴィキであり、メンシェヴィキのことばを借りて言えば「渡りあるいていた」時期、まさにこの時期のために彼を「偉大」であると明言することと、どちらが「おべっか」と「思惑」に似ているか、読者に判断していただこう。「責任ある」（傍点は『ゴーロス』）「政治行動の時期がふたたびやってくる」ときには、「プレハーノフはわれわれとともにあるだろう」と『ゴーロス・ソツィアルーデモクラータ』編集局は書いている（『必要な補足』三二ページ）。

これは、政治的には無知だが、「思惑」の点では十分明瞭である。無知だというのは、現在はまさに、大衆自身がはるかにたやすくとるべき道を見いだす公然たる闘争のときにくらべて、古い指導者たちにとって百層倍も責任ある

政治行動の時期であるからである。「思惑」の意味で明瞭だというのは、プレハーノフがふたたび「駆引をやり」はじめるときには、彼をふたたびメンシェヴィキと認める用意のほどが示されているからである。

たとえば、「われわれは媚びへつらう従僕の役割を演じるほど」（プレハーノフの前で）「自分をいやしめたくはなかった」（一九ページ）というアクセリロードの文句とならべるとき、彼らのこういう言動がどういう意義をもつかをゴーロス派が理解していないことに、われわれは驚かされる。諸君はまさに、このはじめのことばにあげられた種類の人間としてふるまっているのだ。プレハーノフにたいする諸君の態度は、「敵どうし」か、でなければ兄弟づきあいを」というこの人々の「定式」にまさに一致している。

諸君は五年のあいだ「兄弟づきあい」を求めてきた。いま二つ折版三二ページにわたって「敵どうし」のふるまいをしているが、第三二ページでは、ふたたびメンシェヴィキと認めることも、「兄弟づきあい」を求めることにも同意する「用意をしている」。

われわれについていえば、われわれには、「渡りあるき」の時期にはプレハーノフはけっしてボリシェヴィキでなかった、と言う権利がある。われわれは彼をボリシェヴィキとはみなしていないし、こんごもけっしてみなさないだろう。しかし、われわれは、彼を、また独立派合法主義者のグループに反対して立ちあがり、彼らとの闘争を最後まで遂行する能力のあるあらゆるメンシェヴィキをも、党擁護派メンシェヴィキとみなしている。こうした社会民主主義者と接近するためにあらゆる努力を傾けることは、理論におけるマルクス主義のための闘争と労働運動の実践における党のための闘争が日程にのぼっている今日の困難な時期には、すべてのボリシェヴィキの無条件の義務である、とわれわれは考えている。

（8）結語。ボリシェヴィキの政綱について

総会が予定した党協議会は、すべてのメンシェヴィキが党的立場に移行することを条件として決めておいた議事日程だけにとどめることはできないだろうし、またとどめてはならない。そういう移行は起こらなかったし、自分自身にたいしてかくれんぼ遊びをすることは、われわれにふさわしいことではなかった。

この協議会の代議員選挙のスローガン、協議会の招集と準備のスローガンは、独立派合法主義者のグループとの闘争における党擁護派の結束でなければならない。この任務におうじて、またゴーロス派の反党的立場を考慮して、わ

れわれは党のすべての指導機関を断固として改造し、これらの指導機関が、あらゆるゴーロス派が準備しており、またこんごも準備するであろう喧嘩騒ぎに巻きこまれず、真の党建設の活動にたずさわるようにさせなければならない。ゴーロス派は党を建設することを望まず、独立派合法主義者のグループをこっそり援助しようと望んでいる。

この協議会のためのボリシェヴィキの政綱は、次のようなものでなければならない。(一九〇八年)一二月の諸決議に従い、これらの決議の精神で党を建設すること。総会以後の諸事件の全経過によって命じられている前記の修正を総会の諸決定にくわえることによって、総会の事業を継続すること。プロレタリアートの勢力を結集するために、プロレタリアートがグループをつくり、結束し、闘争にそなえて自分を教育し、胸をはって立つのを助けるために、ありとあらゆる合法的可能性を系統的に、たゆみなく、全面的に、執拗に利用することにあらゆる努力を傾けること。——さらに、新しい諸条件に組織を適応させることを学びながら、非合法の細胞を、非合法の純党的な組織を、主として、まず第一にプロレタリア的な組織を、たゆみなく再建すること。このような組織だけが、合法組織内の全活動を方向づけ、その活動に革命的社会民主主義の精神を浸透させ、変節者や独立派合法主義者と非妥協的な闘争をおこなうことができ、わが党、わがロシア社会民主労働党が、一九〇五年の革命とプロレタリアートの偉大な勝利のあらゆる伝統を保持し、党的なプロレタリア軍を強化拡大して、この軍隊を新しい戦闘に、新しい勝利にみちびくべき時期を準備することができるのである。

一九一〇年三月六（一九）日と五月二五日（六月七日）に『討論リーフレット』第一号と第二号に発表
全集、第五版、第一九巻、二三九—三〇四ページ所収
邦訳全集、第一六巻、二〇七—二七ページ所収

革命の教訓

一九〇五年一〇月、ロシアの労働者階級がツァーリ専制に最初の力づよい打撃をくわえたときから五年たった。プロレタリアートは、この偉大な日々に、幾百万の勤労者を彼らの抑圧者との闘争にたちあがらせた。プロレタリアートは、労働者が何十年ものあいだ「当局」にむなしく期待してきた改善を一九〇五年の数ヵ月のあいだにたたかいとった。プロレタリアートは、ロシアの全人民のために、短期間ではあったが、ロシアにかつて見られなかった出版、集会、結社の自由をたたかいとった。プロレタリアートは、ブルィギンえせ国会を行手の道から一掃し、ツァーリから憲法の詔書をうばいとり、これきり永久に、代議機関によらずにはロシアを統治できないようにした。

プロレタリアートの偉大な勝利は、半分の勝利でしかなかった。というのは、ツァーリの権力がたおされなかったからである。十月蜂起は敗北におわった。そして、ツァーリ専制は、労働者階級の攻撃が弱まり、大衆の闘争が弱まっていくのにつれて、労働者階級が獲得したものをつぎつぎにとりあげだした。一九〇六年には、労働者のストライキや農民と兵士の騒擾は、一九〇五年にくらべてずっと弱くなったが、それでもまだ相当に強かった。第一国会の時期に人民の闘争はふたたび発展しはじめた。ツァーリは第一国会を解散したが、すぐさま選挙法を変えることはあえてしえなかった。一九〇七年には、労働者の闘争はいっそう弱まり、ツァーリは第二国会を解散してクーデター（一九〇七年六月三日）〔三〕をおこなった。ツァーリは国会の同意をえずには法律をださないという、自分自身であたえたきわめておごそかな約束をすっかりやぶって、選挙法を変え、地主と資本家、黒百人組とその下僕たちの党がまちがいなく国会の過半数を占めるようにした。

革命の勝利も敗北も、ロシアの人民に大きな歴史的教訓をあたえた。一九〇五年の五周年を記念するにあたって、これらの教訓のおもな内容を明らかにするようにつとめてみよう。

第一の、基本的な教訓は、労働者の生活や国家の統治にいくらかでも真剣な改善をかちとることのできるのは、大衆の革命的闘争だけだ、ということである。教養ある人々

が労働者に示したどのような「同情」も、個々のテロリストのどのような英雄的闘争も、ツァーリの専制と資本家の無制限の権力を掘りくずすことはできなかった。それをやりとげることができたのは、労働者自身の闘争だけであり、何百万の人々の共同闘争だけであった。そして、このような闘争が弱まっていくと、ただちに、労働者のたたかいとったものの奪還がはじまった。ロシア革命は、国際労働歌にうたわれていることを確証した。

「われわれに解放をあたえてくれるものはない、
神も、ツァーリも、英雄も。
われわれは解放をかちとろう、
自分自身の手で」

第二の教訓は、ツァーリの権力を掘りくずし制限するだけでは不十分だ、ということである。それは絶滅しなければならない。ツァーリの権力が絶滅されないかぎり、ツァーリの譲歩は、つねに長つづきしないものであろう。ツァーリは、革命の攻撃が強まっていくと譲歩するが、攻撃が弱まっていくと譲歩をみな取り消した。民主的共和制をたたかいとり、ツァーリの権力をたおし、人民の手に権力をうつすことだけが、役人の暴力と専横から、黒百人組＝オクチャブリスト的国会から、農村における地主と地主の下僕の無制限の権力から、ロシアをすくいだすことができる。

農民と労働者の不幸が、革命の終わったいま、まえよりいっそうひどくなったのは、革命が弱くて、ツァーリの権力をたおさなかったことの報いである。一九〇五年は、ついで最初の二回の国会とその解散とは、人民にきわめて多くのことをおしえた、なによりもまず、政治的要求を獲得するために共同してたたかうことをおしえた。政治生活にめざめた人民は、はじめは専制に譲歩を要求した。ツァーリは国会を召集せよ、ツァーリは古い大臣を新しい大臣ととりかえよ、ツァーリは普通選挙権を「あたえよ」と。しかし、専制は、このような譲歩に応じなかったし、また応じるはずもなかった。専制は、譲歩するようにという願いに、銃剣でこたえた。そのとき、人民は専制権力にたいする闘争の必要をさとりはじめた。いま、ストルィピンとだんなの極反動国会は、この理解をいっそう大きな力で農民の頭にいわばたたきこんでいる。いまもたたきこんでおり、やがてたたきこみおおせるであろう。

ツァーリ専制もまた、革命から自分の教訓をひきだした。政府は、ツァーリにたいする農民の信頼にたよるわけにはいかないことを見てとった。政府はいま、黒百人組的地主およびオクチャブリスト的工場主との同盟によって、自分の権力をつよめている。ツァーリ専制をたおすためには、いまでは一九〇五年よりもはるかに強力な革命的大衆闘争

の攻撃が必要である。

そのような、はるかに強力な攻撃をやれるだろうか？この問題にたいする答は、われわれを革命の第三の、最も主要な教訓へと導く。この教訓というのは、ロシアの人民のいろいろな階級がどう行動するかを、われわれが知ったことである。一九〇五年までは、多くの人々には、全人民がおなじように自由をもとめ、しかもおなじ自由をのぞんでいるようにおもわれていた。すくなくとも、大多数の人人には、ロシアの人民のいろいろな階級が自由のための闘争にたいしてそれぞれちがった態度をとっており、ちがった自由をもとめていることが、すこしもはっきり理解されていなかった。革命は霧を吹きちらした。一九〇五年の末には、ついで第一国会と第二国会の時期にもまた、ロシア社会のすべての階級が公然と登場した。彼らは自分の本性を行動によって示し、自分たちのほんとうにもとめているもの、自分たちのたたかいの目標、また力強く、ねばりづよく、精力的にたたかうことのできる限度を、あきらかに示した。

工場労働者、産業プロレタリアートは、専制にたいして、最も頑強に断固としてたたかった。プロレタリアートは、一月九日事件(三)と大衆的ストライキとで革命をはじめた。プロレタリアートは、一九〇五年一二月の武装蜂起に立ちあがり、射殺され打ちたたかれ拷問にかけられている農民の擁護に立ちあがって、闘争を最後までやりぬいた。ストライキに参加した労働者の数は、一九〇五年には、約三〇〇万（鉄道や郵便の従業員などをくわえると、おそらく四〇〇万にたっする）、一九〇六年には一〇〇万、一九〇七年には七五万であった。ストライキ運動のこれほどの力を世界はまだ見たことがなかった。ロシアのプロレタリアートは、実際に革命的危機が熟していくときには、労働者大衆のなかには多大の力がひそんでいることを示した。一九〇五年の世界最大のストライキの波は、まだプロレタリアートの闘争力のすべてを汲みつくしたものではけっしてなかった。たとえば、モスクワの工場地帯では、工場労働者数は五六万七千人で、ストライキ参加者数〔延べ人員〕は五四万人であったのに、ペテルブルグの工場地帯では、工場労働者数は三〇万人で、ストライキ参加者数は一〇〇万人であった。つまり、モスクワ地方の労働者は、闘争にあたってペテルブルグの労働者ほどの頑強さを、まだけっして展開しなかったのである。また、リヴォニア県（リガ市）では、一九〇五年には、労働者五万人にたいして二五万人のストライキ参加者があった。すなわち、一人の労働者が一九〇五年には平均五回以上もストライキに参加したのである。いまでは、ロシア全土をつうじて、工場、鉱山、鉄

道の労働者数は三〇〇万をけっしてくだらないし、この数は年ごとにふえている。もし運動が一九〇五年のリガと同じような力を示すとすれば、彼らは、一五〇〇万人のストライキ参加者軍をだせるわけである。

どんなツァーリの権力も、このような攻撃に直面してもちこたえることはできないだろう。だが、だれにもわかるように、このような攻撃を社会主義者や先進的労働者の願望によって人為的にひきおこすことはできない。このような攻撃は、危機、憤激、革命が全国をとらえるときにだけ可能である。このような攻撃を準備するためには、労働者の最もおくれた層までも闘争に引きいれることが必要であり、また何年も何年も、ねばりづよい、広範なたゆみない宣伝・扇動・組織活動をおこない、プロレタリアートのあらゆる団体や組織をつくりだし強化していくことが必要である。

ロシアの労働者階級は、闘争力の点で、ロシアの人民の他のすべての階級の先頭に立っていた。労働者の生活条件そのものが彼らを闘争能力あるものにし、闘争へとおしやる。資本は、労働者を大量に大都市にあつめ、彼らを結集し、共同行動をおしえる。労働者は、いたるところで、その主要な敵である資本家階級とまともにぶつかる。労働者は、この敵とたたかううちに社会主義者になり、全社会を完全に改造してあらゆる貧困とあらゆる抑圧を完全になくすことが必要だとさとるようになる。労働者は、社会主義者になることによって、自分たちの行手をさえぎっているあらゆるもの、なによりもまず、ツァーリの権力と農奴主的地主にたいして、身を賭して勇敢にたたかうようになる。

農民もまた、革命のなかで、地主と政府にたいする闘争に立ちあがったが、彼らの闘争はずっと弱かった。工場労働者の大多数（五分の三）は革命的闘争に、ストライキに参加したとみられているが、農民のうちで革命闘争に参加したものは、疑いもなく少数であった。おそらく、五分の一または四分の一をこえなかったであろう。農民の闘争は、頑強さにおいておとり、ばらばらで、自覚の点でおとり、父なるツァーリの仁慈にまだ望みをかけていたことも、まれではなかった。一九〇五―一九〇六年には、農民は、実のところ、ツァーリと地主をおどかしただけであった。だが、彼らをおどかすのではなくて、絶滅しなければならないし、彼らの政府――ツァーリ政府――を地上から一掃しなければならない。いま、ストルィピンと極反動の地主国会は、富農のあいだから、ツァーリと黒百人組の同盟者として、新しい地主＝フートル農民[三]をつくりだそうとつとめている。しかし、金持の農民が農民大衆を零落させるのをツァーリと国会がたすければたすけるほど、この大衆の自

覚はますます高まり、ツァーリにたいする農民大衆の信頼、農奴的奴隷の信頼、打ちひしがれて無知な人々の信頼はますます消えていくだろう。農村では、農村労働者の数が年ごとにますますふえており、彼らには、都市の労働者と同盟して共同闘争をやる以外に救いをもとめるところがない。農村では、落ちぶれて、とことんまで貧乏になり、飢えきっている農民の数が年ごとにふえているが、都市プロレタリアートが立ちあがるときには、これらの農民の何百万人、何千万人がツァーリおよび地主とのいっそう断固たる、いっそう結束した闘争につきすすむであろう。

革命には、自由主義的ブルジョアジー、すなわち自由主義的な地主、工場主、弁護士、教授などもまた参加した。彼らは、「人民自由」党（カデット）をつくっている。彼らは、たくさんのことを人民に約束し、自分たちの新聞で自由についてさんざんさわぎたてた。彼らは、第一および第二国会では議員の多数を占めていた。彼らは、「平和な道」によって自由を獲得すると約束し、労働者と農民の革命的闘争を非難した。農民と多くの農民議員（「トルドヴィキ」[22]）とは、これらの口約束を信じて、自由主義者のあとにつつましやかに、おとなしくついていき、プロレタリアートの革命闘争からはなれた。革命期に農民（と多くの市民）のおかした最大の誤りは、この点にあった。自由主義者は、一方の手で、――それもごくまれにではあったが――自由のための闘争をたすけながら、他方の手をつねにツァーリにさしのべ、ツァーリにむかって、彼の権力を維持し強化しよう、農民と地主を和解させよう、「狂暴な」労働者を「しずめ」ようと約束した。

革命がツァーリとの決定的な闘争に、すなわち一九〇五年の十月蜂起に達したとき、自由主義者はみな卑劣にも、人民の自由を完全に裏切り、闘争からはなれた。ツァーリ専制は、自由主義者が人民の自由をこのように裏切ったのを利用し、多くの点で自由主義者を信じていた農民の無知を利用して、蜂起した労働者を打ち破った。だが、プロレタリアートが打ち破られてしまったとき、どのような国会も、カデットのどのような甘ったるい演説も、彼らのどのような口約束も、ツァーリが自由のすべての名残りをなくし、専制と農奴主的地主の無制限の権力とを復活するのを押しとどめることはできなかった。

自由主義者自身がだまされたのだ。農民はいたましいが、有益な教訓をえた。広範な人民大衆が自由主義者を信じ、ツァーリの権力との「平和」の可能性を信じて、労働者の革命的闘争からはなれているあいだは、ルーシ〔ロシアの古名〕に自由はないであろう。都市プロレタリアートの大衆が闘争に立ちあがり、動揺的で裏切的な自由主義者をお

しのけ、農村労働者と零落した農民をうしろにしたがえるときには、地上のどんな力も、ロシアに自由がくるのを押しとどめることはできないであろう。
　そして、ロシアのプロレタリアートがこのような闘争に立ちあがるだろうということ、ふたたび革命の先頭に立つだろうということ、このことは、ロシアの経済状態全体、革命期の経験全体が保障している。
　五年まえに、プロレタリアートはツァーリ専制に最初の打撃をくわえた。ロシアの人民には最初の自由の光がひらめいた。いまではツァーリ専制はふたたび復活されており、農奴主たちがふたたびほしいままに支配しており、ふたたびいたるところに労働者と農民にたいする暴力がはびこり、いたるところに官憲のアジア的な専横、人民にたいする卑劣な侮辱が勢いをふるっている。だが、いたましい教訓はむだにはならないであろう。ロシアの人民は、もう一九〇五年以前の人民ではない。プロレタリアートは人民に闘争を教えた。プロレタリアートは人民を勝利に導くであろう。

『ラボーチャヤ・ガゼータ』(六五)第一号、一九一〇年一〇月三〇日（一一月一二日）
全集、第五版、第一九巻、四一六―四二四ページ所収
邦訳全集、第一六巻、三一五―三二一ページ所収

ロシアにおける党内闘争の歴史的意味(六六)

『ノイエ・ツァイト』(六七)第五〇号と第五一号にのったトロツキーとマルトフの論文は、表題に示したテーマにふれている。マルトフはメンシェヴィズムの見解を述べている。トロツキーは、とくに響きの高い空文句に隠れながら、メンシェヴィキに追随している。マルトフにとっては、「ロシアの経験」は、帰するところ、「ブランキ主義的(六八)、無政府主義的非文化性がマルクス主義的文化性にたいして勝利をおさめた」（ボリシェヴィズムがメンシェヴィズムにたいして、と解せよ）ということなのである。「ロシア社会民主党は」、「ヨーロッパ一般の」戦術方法とは違って「あまりにも熱心にロシア語ではなしすぎた」という。トロツキーの「歴史哲学」もこれと同じである。闘争の原因は、「マルクス主義的インテリゲンツィアがプロレタリアート

の階級運動に順応したこと」にある。「セクト精神、インテリ個人主義、イデオロギー上の物神崇拝」が前面に出ている。「政治的に未成熟なプロレタリアートへの影響力をかちとるための闘争」——問題の核心はまさにここにある、という。

一

メンシェヴィズムにたいするボリシェヴィズムの闘争を、未成熟なプロレタリアートへの影響力をかちとるための闘争とみる理論は、新しいものではない。われわれは一九〇五年以来（一九〇三年以来でないにしても）、無数の書物や小冊子や自由主義的出版物の論文のなかで、こういう理論に出会っている。マルトフとトロツキーは、マルクス主義的に潤色した自由主義的見解をドイツの同志たちに提供しているのである。

もちろん、ロシアのプロレタリアートは、西ヨーロッパのプロレタリアートよりも政治的成熟がはるかにおくれている。しかし、ロシア社会のすべての階級のなかで、ほかならぬプロレタリアートこそ、一九〇五—一九〇七年に最大の政治的成熟を示したのである。一八四八年のドイツの自由主義的ブルジョアジーと同様に、わが国で卑劣な、臆病な、愚鈍な、そして裏切り的な行動をとったロシアの自由主義的ブルジョアジーが、ロシアのプロレタリアートを憎んでいるのは、プロレタリアートが一九〇五年に運動の指導権をこのブルジョアジーから奪いとり、自由主義者の裏切りを容赦なく暴露できたほど、政治的に十分に成熟していたからにほかならない。

トロツキーは声明している。メンシェヴィズムとボリシェヴィズムが「プロレタリアートの内奥に深い根をおろした」かのように考えるのは「幻想」である、と。これこそ、わがトロツキーが得意とするあの響きの高い、だが空っぽな文句の見本である。メンシェヴィキとボリシェヴィキとの意見の食いちがいの根は「プロレタリアートの内奥」にあるのではなく、ロシア革命の経済的内容にあるのである。この内容を無視することによって、マルトフとトロツキーは、ロシアにおける党内闘争の歴史的意味を理解する可能性をみずから失ってしまった。問題の核心は、意見の相違の理論的定式化がプロレタリアートのあれこれの層に「深く」浸透したかどうかにあるのではなくて、一九〇五年革命の経済的諸条件がプロレタリアートを自由主義的ブルジョアジーにたいして——労働者の生活改善の問題ばかりでなく、また農業問題や、革命のいっさいの政治問題、等々にもからんで——敵対的な関係に立たせたということにあ

る。「セクト主義」、「非文化性」等々のレッテルをあちこちにはりつけるというやり方で、ロシア革命における諸流派の闘争について語りながら、プロレタリアート、自由主義的ブルジョアジーおよび民主主義的農民の基本的な経済的利益については一言も語らないということは、俗流ジャーナリストの水準になりさがることを意味する。

つぎに一つの例をあげよう。マルトフは書いている。「すべて西ヨーロッパでは、農民大衆が農業の資本主義的変革の耐えがたい結果を知るようになるにつれてはじめて彼らは同盟（プロレタリアートとの）に適するようになる、と考えられている。ところが、ロシアでは、数的に弱体なプロレタリアートと、資本主義の『教育的』影響をまだ受けていないか、またはほとんど受けておらず、したがってまだ資本主義的ブルジョアジーの学校で学んだことのない一億の農民とが団結するという状況を想定したのである。」

これはマルトフの言いちがいではない。これこそ、メンシェヴィズムのすべての考えの中心点である。ポトレソフ、マルトフおよびマスロフの編集でロシア国内で出版されている日和見主義的なロシア革命史（『二〇世紀初頭のロシアの社会運動』）は徹頭徹尾こういう思想につらぬかれている。メンシェヴィキのマスロフがこの「労作」の総括的な論文のなかで、「プロレタリアートと農民の独裁は経済的発展の全行程に矛盾するであろう」と述べたのは、この思想をさらにあざやかに表現したものである。ここにこそ、ボリシェヴィズムとメンシェヴィズムの意見の相違の根源を求めなければならないのである。

マルトフは、資本主義の学校を資本主義的ブルジョアジーの学校とすりかえた（ついでに言っておくが、資本主義的でないブルジョアジーはこの世に存在しない）。資本主義の学校とはなにか？　それは、資本主義が農民を農村の愚鈍から引きはなし、彼らをゆすぶり、闘争へと押しやることにある。「資本主義的ブルジョアジーの学校」とはなにか？　それは、「一八四八年のドイツのブルジョアジーは、自分の血肉をわけた最も自然な同盟者であり、それらの人々なしではブルジョアジー自身が貴族にたいして無力であるこれらの農民をなんのためらいもなしに裏切る」（『新ライン新聞』[69]の一八四八年七月二九日執筆のカール・マルクスのことば）[70]ことにある。それは、一九〇五—一九〇七年のロシアの自由主義的ブルジョアジーが農民を系統的に一貫して裏切ってきたこと、実質上、たたから農民に反対して地主とツァーリズムの側に寝がえり、農民闘争の発展を直接妨害したことにある。

資本主義が農民を「教育する」という「マルクス主義的」なことばのかげに隠れて、マルトフは、（貴族と革命

的にたたかった）農民を、（農民を貴族に売りわたした）自由主義者が「教育する」ことを擁護しているのだ。

これこそ、マルクス主義を自由主義とすりかえるものである。これこそ、マルクス主義的な文句で潤色された自由主義である。社会民主主義者のあいだには国民自由党員(三二)がいると言ったマグデブルクにおけるベーベルのことばがあてはまるのは、ドイツだけのことではない。

さらに指摘しなければならないのは、ロシアの自由主義の思想的指導者の大多数がドイツの文献で教育されており、とくに、「資本主義の学校」を承認はするが革命的階級闘争の学校を否認するブレンターノやゾンバルト式の「マルクス主義」をロシアへもちこんでいるということである。ロシアにおけるすべての反革命的自由主義者、ストルーヴェ、ブルガーコフ、フランク、イズゴーエフの一派は、こういう「マルクス主義的」な文句をひけらかしている。

マルトフは、封建制度にたいする農民蜂起の時代のロシアを、とうの昔に封建制度をかたづけてしまった「西ヨーロッパ」に対比している。これは、歴史的遠近法のまれにみる歪曲である。「地主の土地の没収にいたるまでの農民の革命的行動を支持する」という要求をその綱領(三三)のうちにいれている社会主義者が「すべて西ヨーロッパに」いるだろうか？　いや、いない。「すべて西ヨーロッパでは」、社会主義者は、大経営者にたいする小経営主の土地所有をめぐる闘争を、けっして支持していない。この相違はどこにあるのか？　それは、「すべて西ヨーロッパでは」ブルジョア制度が、とりわけていえばブルジョア的農業関係が、とうの昔に形成され、最後的に確立しているのに、ロシアでは、いままさに、このブルジョア制度がどのようにして形成されるかということをめぐって革命が進行しているというところにある。マルトフは、この問題をめぐって革命的衝突が起こっている時期と、問題そのものがとうの昔に解決されているので革命的衝突のない時期とをいつも対比する、自由主義者の使いふるしのやり方を繰りかえしているのである。

メンシェヴィズムの悲喜劇は、革命のさいには自由主義とあいいれない命題を採用しなければならなかったことにある。もしわれわれが土地没収をめざす「農民」の闘争を支持するなら、つまりわれわれは、勝利が可能であり、労働者階級と全人民とにとって経済的にまた政治的に有利だと認めるわけである。ところで、プロレタリアートに指導される「農民」が地主の土地の没収をめざす闘争で勝利するということは、プロレタリアートと農民の革命的執権（ディクタツーラ）にほかならない。（革命時には執権（ディクタツーラ）が必要であるという一八四八年のマルクスのことば、およびマルクスが執権（ディクタツーラ）

の実施によって民主主義を実現しようと望んだというのでマルクスを非難した人々にたいするメーリングの正当な嘲笑を思いおこそう[33]。

これらの階級の執権(ディクタツーラ)が「経済的発展の全行程に矛盾する」という見解は、根本的に誤っている。まさにその逆である。そのような執権(ディクタツーラ)だけが封建制度のいっさいの残存物をきれいさっぱり一掃し、生産力の最もすみやかな発展を保障するであろう。これに反して、自由主義者の政策は、ロシアの「経済的発展の行程」を百倍もおくらせるロシアのユンカーの手にこの事業をゆだねるのである。

一九〇五—一九〇七年に、自由主義的ブルジョアジーと農民との矛盾は完全に明るみに出た。一九〇五年の春と秋および一九〇六年の春には、農民蜂起は中央ロシアの諸郡の五分の一から二分の一をとらえた。農民は二千におよぶ地主の邸を破壊した(遺憾ながら、これは破壊さるべき数の一五分の一以下である)。ただプロレタリアートだけがこの革命的闘争を献身的に援助し、それに全面的に方向を示し、それを指導し、それを自分たちの大衆的ストライキと結合したのであった。自由主義的ブルジョアジーは、いまだかつて一度も革命的闘争を援助したことはなく、むしろ農民を「なだめて」地主およびツァーリと「和解」させようとした。ついで、最初の二回の(一九〇六年と一九〇七年の)国会で、議会の舞台で同じことが繰りかえされた。自由主義者はいつも農民の闘争にブレーキをかけ、農民を裏切ってきた。そして、ただ労働者議員だけが農民に方向を示し、自由主義者に反対して農民を支持したのであった。農民と社会民主主義者にたいする自由主義者の闘争は、第一国会と第二国会の歴史全体をみたしている。ボリシェヴィズムとメンシェヴィズムとの闘争は、自由主義者を支持すべきかどうか、農民にたいする自由主義者の主導権を打倒すべきかどうかをめぐる闘争として、この歴史と不可分に結びついている。だから、われわれの分裂をインテリゲンツィアの影響、プロレタリアートの未成熟などによって説明するのは、自由主義者のお伽噺の子どもっぽい幼稚な繰りかえしなのである。

国際社会民主主義内部の分裂は、「社会革命的階級が議会制度のかぎられた(狭い)条件に順応する過程」等々によって起こるが、ロシア社会民主党内部の分裂はインテリゲンツィアがプロレタリアートに順応することによって起こる、というトロツキーの議論は、同じ理由によって根本的に誤っている。トロツキーはこう書いている。「この順応過程の現実の政治的内容は、社会主義の終極目標からみてかぎられた(狭い)ものであったが、それだけにこの過程の形態は無拘束であり、この過程が投げかけたイデオロ

ギー上の影は大きなものであった」と。
　このまことに「無拘束な」美辞麗句は、自由主義の「イデオロギー上の影」にほかならない。マルトフと同じようにトロッキーも、異種の歴史的時期をいっしょくたにして、ブルジョア革命をなしとげつつあるロシアと、とうの昔にこの革命を終了しているヨーロッパとを対比している。ヨーロッパでは、社会民主主義活動の現実の政治的内容は、国家のなかですでに完全な支配権をもっているブルジョアジーとの権力獲得闘争の準備をプロレタリアートにさせることである。ロシアではまだ近代的ブルジョア国家の創設が問題になっているだけである。この国家は、（ツァーリズムが民主主義派に勝利した場合には）ユンカー的君主制に似たものとなるであろうし、（民主主義派がツァーリズムに勝利した場合には）農民的なブルジョア民主的共和制に似たものとなるであろう。ところで、現代ロシアにおける民主主義派の勝利は、農民大衆が裏切り的な自由主義派のあとに従うのではなくて、革命的プロレタリアートのあとに従う場合にだけ可能である。この問題は歴史的にはまだ解決されていない。ロシアにおけるブルジョア革命はまだ終わっていない。そして、この限界内では、すなわちロシアにおけるブルジョア制度の形態をめぐる闘争の限界内では、ロシアの社会民主主義者の活動の「現実の政治的内容」は、地主の土地の没収をめざす農民の闘争がまったく存在せず、ブルジョア革命がとうの昔に終わっている国々におけるほど、「かぎられた」ものではないのである。
　ブルジョアジーの階級利益が自由主義者をして労働者に向かって、革命における労働者の役割は「かぎられた」ものである、諸流派の闘争はインテリゲンツィアによって引きおこされたもので、深い経済的矛盾によって引きおこされたものではない、労働者党は、「解放闘争における主導者となるべきではなくて、階級政党となるべきだ」という考えをふきこませる理由は、容易に理解できる。まさにこのような定式がごく最近、解党主義のゴーロス派（『ナーシャ・ザリャー』におけるレヴィツキー）によって提出され、自由主義者の賛同を受けた「階級政党」ということばを、彼らはブレンターノやゾンバルト的な意味に、すなわち、ただ自分の階級のことだけを心配せよ、そしてツァーリズムや裏切り的自由主義との闘争で人民のあらゆる革命的分子を指導しようなどという「ブランキ主義的な夢」を捨てよ、という意味に解しているのである。

二

ロシア革命についてのマルトフの所論と、ロシア社会民

四半期別ストライキ参加者数（単位千人）

	1905年				1906年				1907年			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV
総数	810	481	294	1277	269	479	296	63	146	323	77	193
内訳 経済的ストライキ	411	190	143	275	73	222	125	37	52	52	66	30
内訳 政治的ストライキ	399	291	151	1002	196	257	171	26	94	271	11	163
農民運動が発生した郡の百分比		14.2%		36.9%		49.2%	21.1%					

主党の現状についてのトロツキーの所論とは、彼らの基本的見解の誤りを具体的に立証している。

ボイコットからはじめよう。マルトフはボイコットを「政治的棄権」、「無政府主義者やサンディカリスト」の方法と呼び、そのさい一九〇六年のことだけを論じている。トロツキーは「ボイコット主義的傾向はボリシェヴィズムの全歴史をつらぬいている、――労働組合のボイコット、国会のボイコット、地方自治のボイコット等々」、これは、「大衆のなかに没入してしまうことにたいするセクト的恐怖心の産物であり、非妥協的棄権の急進主義」である、うんぬんと言っている。労働組合や地方自治のボイコットについては、トロツキーはまっかなうそをついている。ボイコット主義がボリシェヴィズムの全歴史をつらぬいているというのも、同じようにうそである。ボリシェヴィズムは、ボイコット問題がはじめて発生する以前に、一九〇五年の春と夏に、一つの潮流として完全に形成されたのである。ボリシェヴィズムは、一九〇六年の八月に、同派の公式機関紙のなかで、ボイコットの必要を呼びおこした歴史的条件は過去のものになった、と声明している。(三)

トロツキーがボリシェヴィズムを歪曲するのは、彼がロシアのブルジョア革命におけるプロレタリアートの役割について多少とも明確な見解を一度も身につけることができなかったからである。

だが、もっとはるかに悪質なのは、この革命の歴史の歪曲である。もしボイコットについて語るなら、最初から始めるべきで、終りからすべきではない。革命の最初の（そして唯一の）勝利は、ボイコットのスローガンのもとにおこなわれた大衆運動によってかちとられた。このことを忘れるのは、自由主義者に有利なだけである。

一九〇五年八月六（一九）日の法律は、諮問機関としてブルィギン国会を創設した。自由主義者は、その最左翼までが、これに参加することを決定した。社会民主党は圧倒

的大多数をもって（メンシェヴィキに反対し）この国会をボイコットすること、そしてツァーリズムにたいする直接の強襲、大衆的ストライキと蜂起を大衆に呼びかけることを決定した。したがって、ボイコット問題は、社会民主党内部だけの問題ではなかったのだ。それは、自由主義派対プロレタリアートの闘争の問題であった。当時の自由主義的出版物はみな、自由主義者が革命の発展を恐れて、ツァーリズムとの「協定」にあらゆる努力を傾けていたことを示している。

直接の大衆闘争のための客観的条件は、どんなものであったか？　これにたいしては、（経済的ストライキと政治的ストライキとに分類した）ストライキ統計と農民運動の統計とが、最もよい回答をあたえている。その主要な数字をここ〔前ページの表〕に引用しよう。それは、これからさきの説明の全体を例証するのに役だつであろう。

＊とくに重要な時期は線でかこんである。一九〇五年の第一・四半期には一月九日[三]があり、一九〇五年の第四・四半期には一〇月と一二月に革命が絶頂に達し、一九〇六年の第二・四半期には第一国会があり、一九〇七年の第二・四半期には第二国会があった。この資料は官庁のストライキ統計からとったものである。私はいま出版準備中のロシア革命史概説のなかでこれらの資料をくわしく研究している〔『ロシアのストライキ統計について』、本書九七―一二三ページ〕。

これらの数字は、革命にさいしてプロレタリアートがどんなに巨大なエネルギーを発揮する能力をもっているかを、われわれに示している。革命前の一〇年間全体をつうじてロシアにおけるストライキ参加者数は四三万一千人、すなわち年平均四万三千人にすぎなかったのに、一九〇五年にはストライキ参加者総数は、工場労働者総数一六六万一千人にたいして、二八六万三千人におよんだのである！　このようなストライキ運動は、世界にかつてなかったものである。ボイコットの問題がはじめて起こった一九〇五年の第三・四半期には、われわれはまさに、ストライキ運動（それにつづいて農民運動も）の新しい、はるかに強力な波への移行の時機を見る。この革命の波をツァーリズム打倒の方向に向けて、この波の発展を助けるか、それとも、諮問国会遊びによって大衆の注意をそらすことをツァーリズムに許すか――これがボイコット問題の現実の歴史的内容であった。だから、ロシア革命の歴史におけるボイコットを「政治的棄権」、「セクト主義」等々と結びつけようとする大骨折りが、どんなに低劣で、自由主義者ふうに愚鈍なものであるかは、これによって判断することができる！一九〇五年第三・四半期の一五万一千人から一九〇五年第四・四半期の一〇〇万人へと政治的ストライキの参加者数を高めた運動は、自由主義者に反対して採用されたボイコ

ットのスローガンのもとにおこなわれたのである。

マルトフは、一九〇五年のストライキが成功した「主要な原因」は「広範なブルジョア層のあいだで成長しつつあった反政府的潮流」である、と言明している。「ブルジョアジーのこれらの広範な層の影響は非常に遠くまでおよんで、一方では、彼らは労働者を直接刺激して政治的ストライキに立たせ」、他方では、工場主にせまって「ストライキ中の賃金を労働者に支払わせたほどであった。」（傍点はマルトフのもの）

ブルジョアジーの「影響」にたいするこの甘ったるい賛歌に、われわれは無味乾燥な統計を対置しよう。一九〇五年には、一九〇七年にくらべて、ストライキが労働者に有利に終わる場合が最も多かった。この年についての統計資料は次のとおりである。一、四三八、六一〇人のストライキ参加者が経済的要求を出し、三六九、三〇四人の労働者が闘争に勝ち、六七一、五九〇人が妥協によって闘争を終え、三九七、七一六人が敗北した。ブルジョアジーの「影響」とは、実際には（自由主義的なお伽噺によってではなく）こういうものであったのだ。マルトフは、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの実際の態度をまったく自由主義的に歪曲している。ブルジョアジーがときたまストライキ中の賃金を支払ったり、反政府的な行動に出たりしたから、労働者が（「経済」でも政治でも）勝利したのではなくて、労働者が勝ったから、ブルジョアジーはフロンド派(三五)ふうの反政府運動をやり、賃金を支払ったのである。親愛なマルトフよ、階級的圧力の力、幾百万人のストライキ、農民の騒擾、軍隊の反乱の力が原因であり、しかも「主要な原因」である。ブルジョアジーの「同情」は結果である。

マルトフは書いている。「国会選挙の見通しをひらいた、また集会を招集し、労働者の結社を組織し、社会民主主義(三六)新聞を発行する可能性をつくりだした一〇月一七日は、活動をすすめるべき方向を示していた。」だが、こまったことに、「『長期消耗戦略』をとることが可能だという考えがだれの頭にも浮かんでこなかった。運動全体が、重大な、決定的な衝突に向かって」すなわち一二月ストライキと一二月の「血の敗北」に向かって、「人為的に押しやられた」と。

カウツキーは、一九一〇年の春ドイツに「長期消耗戦略」から「短期打倒戦略」に移る時機がきたかどうかについて、R・ルクセンブルクと論争した。そのさいカウツキーは、政治的危機がさらに発展した場合にはこの移行は不可避であると明瞭に率直に述べている。ところがマルトフは、カウツキーの裾にしがみつきながら、革命の最も激化した瞬間について、時期おくれに「消耗戦略」を説いているのである。いな、親愛なマルトフよ、君は自由主義者の

ことばを繰りかえしているだけなのだ。一〇月一七日が「ひらいた」のは平和的な憲法の「見通し」――これは自由主義的なお伽噺だ――ではなくて、内乱であった。この内乱は、諸党派または諸グループの主観的意志によってではなく、一九〇五年一月以来の諸事件の経過全体によって準備されたのである。一〇月の詔書は、闘争の停止をあらわしていたのではなくて、ツァーリズムを転覆することができず、革命はまだツァーリズムはもはや統治することができないという、闘争者のあいだの力の均衡をあらわしていたのである。この状態から客観的な不可避性をもって決戦が生まれた。内乱は、一〇月にも、一一月にも事実であった（そして、平和的な「見通し」は自由主義者のうそであった）。この戦争は、ポグロム[注]に現われたばかりではなく、軍隊のうちの不服従の部隊や、ロシアの三分の一の地域の農民や、辺境地方にたいする武力による闘争にも現われた。こういう状況のもとで一二月の武装蜂起と大衆的ストライキを「人為的」なものと考えるような人々は、人為的にだけ社会民主主義者の列にくわえることができる。こういう人々にとっての自然の党は、自由主義の党である。

マルクスは一八四八年と一八七一年にこう言った。闘争なしに敵に陣地を明け渡すことが、闘争して敗北するよりも、大衆の士気をいっそう多く沮喪させるような時機が革命にはあるものだ[注]、と。一九〇五年の一二月は、ロシア革命の歴史上でそのような時機であっただけではない。一二月は、一二ヵ月間にわたって国中いたるところで高まってきた大衆的な衝突と戦闘の自然の不可避的な総仕上げであった。無味乾燥な統計ですら、このことを立証している。純政治的な（すなわち、どのような経済的要求も出していない）ストライキの参加者数は、一九〇五年の一月には一二万三千人、一〇月には三二万八千人、一二月には三七万二千人であった。それなのに、この成長が「人為的」なものであったと、われわれに説こうとする者がいるのだ！　軍隊内での反乱と並行した大衆的政治闘争のこのような成長が、不可避的に武装蜂起へ移ることなしにも可能であるというお伽噺を、われわれに提供する者がいるのだ！　いや、これは革命の歴史ではなくて、革命にたいする自由主義的な中傷である。

三

一〇月ストライキについてマルトフはこう書いている。「ちょうどこの時期に、労働者大衆が全般的に激昂していたこの時期に、……政治的自由のための闘争と経済闘争とを一つに融合させようとする志向が発生している。しかし、

同志ローザ・ルクセンブルクの意見とは反対に、ここに現われたのは運動の強い側面ではなくて、弱い側面であった。」革命的方法によって八時間労働日を実施しようとした試みは失敗に終わり、労働者を「解体」させた。「一九〇五年一一月の郵便電信従業員のゼネラル・ストライキもこれと同じ方向に作用した。」マルトフは、歴史をこのように書いている。

この歴史のいつわりを知るためには、さきに引用した統計を一見するだけで十分である。革命のまる三年をつうじて、われわれは、政治的危機が激化するたびに政治的なストライキ闘争ばかりでなく、また経済的なストライキ闘争も高まるのを見る。それらが結合されたことは、運動の弱さではなくて、その強さであった。これと反対の見解は、まさしく、革命とブルジョアジーとの闘争に最も広範な大衆を引きいれないでおいて労働者を政治に参加させようと望む自由主義的ブルジョアの見解である。ほかならぬ一〇月一七日以後に、自由主義的なゼムストヴォ[三九]運動は最後的に分裂した。地主と工場主は公然と反革命的な「オクチャブリスト」[四〇]党を結成し、オクチャブリストは弾圧の全力をあげてストライキ参加者に襲いかかった（一方、「左翼」自由主義者のカデット[四一]は、出版物で労働者の「無分別」を非難した）。マルトフは、オクチャブリストやカデットのあとについて、労働者がちょうどこのときに経済闘争をいっそう攻勢的なものにしようとつとめたことを、労働者の「弱さ」とみている。われわれは、労働者が攻勢的な経済闘争と武装した政治闘争とへ、十分に断固たる態度で、十分に広範に、十分に急速に移らなかったことを労働者の（それにもまして農民の）弱さとみる。この闘争は、諸事件の発展の経過全体から不可避的に起こったものであって、けっして個々のグループまたは党派の主観的な願望から起こったものではない。われわれの見解とマルトフの見解とのあいだには深淵があるが、「インテリゲンツィア」の見解のあいだのこの深淵は、トロツキーの見解とは反対に、一九〇五年の末に、諸階級のあいだに、すなわち闘争しつつある革命的プロレタリアートと裏切り的な行動をとっているブルジョアジーとのあいだに、実際に存在していた深淵を反映しているにすぎない。

さらにつけくわえなければならないことは、ストライキ闘争における労働者の敗北は、マルトフがとりだしている一九〇五年末だけの特徴ではなくて、むしろより多く一九〇六年と一九〇七年の特徴であるということである。統計がわれわれに語っているところによれば、一八九五―一九〇四年の一〇年間に工場主は（ストライキ参加者数からいって）五一・六％のストライキに勝ったが、一九〇五年に

は二九・四％、一九〇六年には三三・五％、一九〇七年には五七・六％、一九〇八年には六八・八％のストライキに勝利した。このことは、一九〇六—一九〇七年の経済的ストライキが「無分別」であり、「時機をえないもの」であり、「運動の弱い側面」であった、ということを意味するであろうか？　そうではない。それは、一九〇五年には大衆の革命的闘争の攻撃が十分に強くなかったかぎりで、（政治でも「経済」でも）敗北は避けられなかったが、もし、この場合プロレタリアートが敵にたいする新しい攻撃のためにすくなくとも二度（一九〇六年の第二・四半期と一九〇七年の第二・四半期とには政治的ストライキの参加者だけで二五万人にのぼった）立ちあがることができなかったとしたら、敗北はもっとひどかったであろう、ということを意味する。すなわち、クーデターは一九〇七年の六月にではなく、一年まえに、あるいは一年以上も早く起こっていたであろうし、一九〇五年の経済的獲得物はもっと早く労働者から取りあげられていたであろう。

まさに大衆の革命闘争のこの意義を、マルトフは絶対に理解しないのである。彼は、自由主義者に追随して、一九〇六年はじめのボイコットについて、「社会民主党は一時政治的戦線の外にとどまった」と言っている。純理論的にいって、一九〇六年のボイコットの問題をこのように立てることは、きわめて複雑な問題を途方もなく単純化し、卑俗化することである。一九〇六年第二・四半期の現実の「戦線」はどのようなものであったか、議会的なものであったか、それとも議会外のものであったか？　統計を見たまえ。「経済的」ストライキの参加者数は七万三千人から二二万二千人に、政治的ストライキの参加者数は一九万六千人から二五万七千人に高まっている。農民運動にまきこまれた郡の百分比は、三六・九％から四九・二％にふえている。周知のように、軍隊内の反乱もまた一九〇六年の第二・四半期には第一・四半期にくらべて非常に強まり、また頻繁に起こった。さらにこれまた周知のように、第一国会は（二〇世紀の初頭においては）世界で最も革命的な議会であったし、同時にまた最も無力な議会でもあった。その決定で実行されたものは、なにひとつなかったのである。

これが客観的な事実である。自由主義者とマルトフは、国会が現実の「戦線」であって、蜂起や、政治的ストライキや、農民と兵士の騒擾は「革命的ロマン主義者」の空虚な仕業であったというふうに、これらの事実を評価している。そして、思慮ぶかいトロツキーは、この点にもとづく諸分派のあいだの意見の相違は「未成熟なプロレタリアートへの影響力を争う」「インテリゲンツィアの闘争」であったと考えている。われわれは、一九〇六年の春には、真

に革命的な大衆闘争のきわめて重大な高揚が存在していたことを客観的資料が立証している、と考える。だから、社会民主党は、ほかならぬこの闘争を主要な闘争と認め、これを支持し発展させるために全力をつくす義務があった。われわれは、この時期――すなわち、ツァーリ政府がいわば国会の召集を担保としてヨーロッパから二〇億の借款を獲得した時期、ツァーリ政府が急いで国会のボイコットに対抗する諸法律を発布した時期――の独特な政治情勢からみて、ロシアにおける最初の議会の召集をツァーリの手からもぎとろうとしたプロレタリアートの試みを完全に正当であった、と考える。われわれは、「当時政治戦線の外にとどまった」のは社会民主党ではなくて、自由主義者であった、と考える。革命時の自由主義者の世渡りの道はもっぱら立憲的幻想を大衆のあいだにひろめることを基としていたのであるが、この立憲的幻想は第一国会の歴史によってきわめてあざやかにくつがえされた。

最初の二回の国会では、自由主義者（カデット）が多数を占めており、そうぞうしく政治の舞台の正面を占領していた。だが、自由主義者のほかならぬこの「勝利」こそ、自由主義者がつねに「政治戦線の外に」とりのこされていたこと、彼らが大衆の民主主義的意識をはなはだしく堕落させた政治的喜劇役者であったことを、はっきり示したのである。そして、もしマルトフとその友人たちが、自由主義者のあとについて、「なにをなすべきでないか」という教訓として革命の重大な敗北を指摘するなら、われわれは彼らにこう答えよう。革命がかちとった唯一の現実の勝利は、ブルィギン国会にはいれという自由主義者の忠告をしりぞけて、農民大衆を従えて蜂起へとみちびいたプロレタリアートの勝利であった、と。これが第一の点である。そして、第二には、ロシアのプロレタリアートは、三年間（一九〇五―一九〇七年）の英雄的な闘争によって、他国の人民が幾十年も費やしてたたかいとったものを、自分たちとロシアの人民のためにたたかいとったということである。彼らは、裏切り的で、軽蔑すべきほど無力な自由主義派の影響からの労働者大衆の解放をたたかいとった。彼らは、社会主義をめざす闘争の条件である、自由のため、民主主義のための闘争における主導者の役割を自分にたたかいとった。彼らは、それなしには世界のどこでも人類の進歩にとって意義あることはなにひとつ達成されたためしのない革命的大衆闘争を遂行する能力を、ロシアの抑圧され、搾取されているすべての階級に獲得させたのである。

どのような反動も、自由主義者のどのような憎悪や罵言や敵意も、社会主義的日和見主義者のどのような動揺や近視眼や信念の欠如も、ロシアのプロレタリアートからこれ

らの獲得物を奪いとることはできないであろう。

四

ロシア社会民主党の諸分派の革命後の発展は、これもまた「インテリゲンツィアのプロレタリアートへの順応」によって起こったのではなくて、諸階級間の関係の変化によって起こったのである。一九〇五—一九〇七年の革命は、ロシアにおけるブルジョア制度の形態の問題で農民と自由主義的ブルジョアジーとの敵対関係を激化させ、公然化し、日程にのぼせた。政治的に成熟したプロレタリアートは、この闘争にきわめて精力的に参加せざるをえなかった。そして、ボリシェヴィズムとメンシェヴィズムとの闘争は、新しい社会のさまざまな階級にたいするプロレタリアートの態度の反映であった。

一九〇八—一九一〇年の三年間は、反革命の勝利、専制の復活、および第三国会、すなわち黒百人組とオクチャブリストの国会を特徴としている。新制度の形態をめぐるブルジョア諸階級のあいだの闘争は、舞台の正面から引きさがった。プロレタリアートにとっては、反動派にたいしても、反革命的自由主義派にたいしても敵対的な、自分たちのプロレタリア党を守るという基本的な任務が、日程にのぼった。この任務は容易なものではない。というのは、経済的・政治的迫害の重圧、革命時の大衆にたいする指導権を社会民主党に奪われたことにたいする自由主義者の憎しみのすべてが、ほかならぬプロレタリアートのうえにのしかかってきたからである。

社会民主党の危機はきわめて重大である。組織は破壊されている。古い指導者(とくにインテリゲンツィア出身の)の多数は逮捕されている。党の事業をその手に引きうける新しい型の労働者社会民主主義者はすでに生まれてはいるが、しかし彼らは、なみなみならぬ困難を克服しなければならない。このような事情のもとにあって、社会民主党は多数の「同伴者」を失っている。ブルジョア革命のさいに小ブルジョア的な同伴者が社会主義者に同調したのは、当然である。彼らはいま、マルクス主義からも、社会民主党からも脱落しつつある。この過程は、二つの分派のいずれにも現われている。すなわち、ボリシェヴィキにあっては「召還主義的」潮流となって現われている。この潮流は、一九〇八年の春に出現したが、モスクワの協議会(二)でたちまち敗北をこうむり、長い闘争をへてボリシェヴィキ分派の公式の中央部によって否認され、外国で特別な分派——「フペリョード派(三)」——を結成したのであった。崩壊期の特異性は、その政綱に(「プロレタリア哲学の擁護」とい

う看板のかげで）マルクス主義との闘争をもちこんだ「マッハ主義者」（一九）も、「最後通告派」（二〇）という恥ずかしがり屋の召還派も、さらにまた、スローガンの「あざやかさ」に魂を奪われ、それを暗記はしたが、マルクス主義の基礎を理解しなかったいろいろな型の「自由の日々の社会民主主義者」も、みなこの分派に合流した、ということに現われた。

メンシェヴィキにあっては、小ブルジョア的「同伴者」の脱落のこの同じ過程が解党主義的潮流となって現われた。この潮流は、いまではポトレソフ氏の雑誌『ナーシャ・ザリャー』、『ヴォズロジデーニエ』および『ジーズニ』（二一）となって、また「一六人」および「三人組」（ミハイル、ロマン、ユーリー）の態度となって、完全に形成されている。そのさい、在外の『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』は、事実上、ロシア国内の解党派の下僕の地位と、党員大衆から彼らをかばう外交的掩護者の地位を占めた。

反革命時代におけるこの崩壊、社会民主労働党からの非社会民主主義的分子のこの脱落の歴史的経済的意義を理解しなかったトロツキーは、ドイツの読者に向かって、二つの分派の「崩壊」について、「党の崩壊」、「党の分解」について語っている。

これはうそである。そして、このうそは、第一に、トロツキーの完全な理論的無理解をあらわしている。なぜ総会が解党主義をも召還主義をも「プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の現われ」と認めたか、その理由をトロツキーは絶対に理解しなかった。実際、考えてみたまえ。プロレタリアートへのブルジョア的影響の現われとして党が非難している諸潮流が分離したことは、党の崩壊、党の分解をあらわすものであろうか、それとも党の強化、党の浄化をあらわすものであろうか？

第二に、このうそは、実践上では、トロツキー分派の自家広告「政策」をあらわしている。トロツキーの計画が分派をつくろうとする試みであることは、トロツキーが中央委員会の代表を『プラウダ』から放逐した今日では、だれでも知っている。トロツキーは、自分の分派を広告しながら、「党」は崩壊しつつあり、分派は二つともに崩壊しつつあるが、ただ彼トロツキーひとりがすべてを救っていると、ドイツ人に語ることをはばからない。実際には、いまではわれわれすべてが認めているように、――そしてトロツキー派の（一九一〇年一一月二六日付のウィーン・クラブの名における）最近の決議がとくにはっきりと示しているように、――トロツキーが信頼をえているのは、もっぱら解党派と「フペリョード派」のあいだでだけなのである。

そのさい、トロツキーがドイツ人の前で党をいやしめ自分をほめそやすうえでどこまで厚顔無恥であるかは、たと

えば、次の一例が示している。トロツキーは、ロシアの「労働者大衆」は「社会民主党を彼らの仲間の圏外（傍点――トロツキー）にある」ものと考えていると書き、「社会民主党ぬきの社会民主主義者」について語っている。

このようなことばにたいして、ポトレソフ氏とその友人たちが、どうしてトロツキーに接吻せずにいられようか？だが、革命の全歴史だけでなく、労働者クーリア〔選挙等級〕での第三国会の選挙でさえ、これらのことばを反駁している。

トロツキーはこう書いている。合法組織内の活動については「メンシェヴィキ分派もボリシェヴィキ分派も、その従来の思想上および組織上のあり方からみて、完全に無能力であることがわかった」。活動したのは、「社会民主主義者の個々のグループであるが、この活動はすべて諸分派の枠の外で、その組織的な働きかけの外でおこなわれたのである」。「メンシェヴィキが優勢を占めている最も重要な合法組織でさえ、完全にメンシェヴィキ分派の統制の外で活動している」。トロツキーは、以上のように書いている。だが、事実はこうなのだ。第三国会内に社会民主党議員団が存在しはじめたそもそものはじめから、ボリシェヴィキ分派は、党中央委員会の全権委任状をもった自派の受任者をつうじて、国会内における社会民主主義者の活動にたいする協力、援助、勧告および統制の活動をたえずおこなってきた。諸分派（それらは一九一〇年の一月に、分派としては解散したが）の代表たちからなる党中央機関紙編集局も、同じようにやっている。

トロツキーがドイツの同志たちに向かって「召還主義」の愚劣さについてくわしく語り、この潮流をボリシェヴィズム全体に特有のボイコット主義の「結晶」として描きながら、そのあとでたった一言、ボリシェヴィズムは召還主義に「打ちまかされず」、「これに断固として、もっと正しくいえば、無茶苦茶に反対した」と述べるとき、ドイツの読者は、もちろん、このような説明のなかにどれだけ手のこんだ背信が隠されているか想像もつかない。トロツキーの偽善的な「但し書」は、ちっぽけな、まったくちっぽけな「瑣末事」を言いおとすことにある。彼は、はやくも一九〇九年の春にボリシェヴィキ分派がその公式の代表者会議で召還派を遠ざけ除名したということを、言い「忘れた」のである。だがまさにこの「瑣末事」こそ、非社会民主主義的分子の脱落ではなくて、ボリシェヴィキ分派の（ついでまた党の）「崩壊」について語りたいと思っているトロツキーにとっては、都合が悪いのだ！

今日われわれは、マルトフを解党主義の指導者のひとりで、しかも彼がえせマルクス主義的なことばで解党派を

「たくみに」擁護していればいるほど、いっそう危険なひとりである、と考えている。だが、マルトフは公然とその見解を述べており、この見解は、一九〇三―一九一〇年の大衆的労働運動の幾多の潮流にそれ自身の痕跡をのこしている。ところが、トロツキーはただ彼自身の個人的な動揺を代表しているだけで、それ以上のものはなにも代表していない。彼は一九〇三年にはメンシェヴィキであった。一九〇四年にはメンシェヴィズムから離れ、一九〇五年にはただ超革命的な空文句をひけらかすだけで、メンシェヴィキのもとにかえった。一九〇六年にはふたたび離れた。一九〇六年末にはカデットとの選挙協定を擁護し（すなわち、事実上はふたたびメンシェヴィキといっしょになり）、一九〇七年の春にはロンドン大会で、彼とローザ・ルクセンブルクとの相違は「政治的傾向の相違というよりはむしろ個人的色合いの相違」である、と語った。トロツキーは、きょうは一つの分派の思想的貯えから、あすは他の分派の思想的貯えから剽窃し、それゆえに自分は両分派をこえたところに立っていると宣言する。トロツキーは、理論のうえでは、解党派や召還派にどの点でも同意していないが、実践においてはすべての点でゴーロス派やフペリョード派に同意している。

だから、もしトロツキーがドイツの同志たちに、自分は「全党的傾向」を代表していると語るなら、私は、トロツキーは自分の分派だけを代表しており、ただ召還派や解党派のあいだでだけいくらか信頼をえているにすぎない、と声明しなければならない。つぎにかかげるのは、私の声明の正しさを証明する事実である。一九一〇年一月、わが党の中央委員会は、トロツキーの新聞『プラウダ』と緊密な結びつきを打ちたて、その編集局に中央委員会の代表を任命した。一九一〇年九月、トロツキーが反党的政策をとったため、中央委員会の代表がトロツキーと関係を断ったということが、党中央機関紙にのった。コペンハーゲンでは、党擁護派メンシェヴィキの代表者で中央機関紙編集局の代議員であったプレハーノフは、ボリシェヴィキの代表としての本論文の筆者やポーランドの一同志〔ア・ヴァルスキ〕とともに、トロツキーがドイツの出版物でわが党の事情を述べているやり方にたいし、断固たる抗議を声明したのである。

トロツキーがロシア社会民主党内の「全党的」傾向を代表するものであるか、それとも「全反党的」傾向を代表するものであるかについては、いまや読者諸君の判断におまかせしよう。

一九一〇年九月末―一一月に執筆

ロシアのストライキ統計について(82)

一九一一年四月二九日（五月一二日）に
『討論リーフレット』第三号に発表
全集、第五版、第一九巻、三五八—三七六ページ所収
邦訳全集、第一六巻、三九五—四一四ページ所収

一

商工省の有名な出版物、一八九五—一九〇四年の一〇年間と一九〇五—一九〇八年とにおける『工場労働者ストライキ統計』について、われわれの文献はすでになんどとなく触れてきた。この出版物にあつめられている資料はきわめて豊富で貴重なものなので、それを完全に研究し全面的に検討するには、なお非常に多くの時間が必要とされよう。上記の出版物でなされている分析は、この問題への第一着手というにすぎず、十分というにはまだほど遠いものである。完全な叙述はべつの場所にゆずるとして、この論文では、いくらか詳細に検討する一つの試みの暫定的な結果を

ストライキ参加者数（単位千人）

年　　度	ロシア	アメリカ	ドイツ	フランス
1895—1904（年平均）	43	1894—1908年の15年をつうじての年間最大数		
1905	2,863			
1906	1,108			
1907	740	660	527	438
1908	176			
1909	64			

年　　度	労働者総数にたいするストライキ参加者のパーセント	ストライキ総件数にたいする反復ストライキ件数のパーセント
1895—1904	1.46—5.10%	36.2%
1905	163.8	85.5
1906	65.8	74.5
1907	41.9	51.8
1908	9.7	25.4

紹介しよう。

なによりもまず、一九〇五―一九〇七年のロシアにおけるストライキは世界でかつて見られなかった現象であるという事実が完全に確証されている。つぎにかかげる表は、年度別および国別のストライキ参加者数の資料である。〔上の表〕

一九〇五―一九〇七年の三年間は群をぬいている。この三年間のロシアにおけるストライキ参加者は、その最低数でさえ、世界の最も資本主義的な国々でかつて到達したことのある最大数を上まわっている。このことは、もちろん、ロシアの労働者が西欧の労働者よりも進歩しているとか、強力であるとかいうことを意味しない。だが、このことは、工業プロレタリアートがこの分野でどれだけのエネルギーを発揮する能力があるかを、人類がこれまで知らなかったことを意味している。この能力のおおよその大きさが、まだブルジョア革命を経験しつつあるおくれた一国ではじめてあきらかにされたということに、諸事件の歴史的経過の特異性が現われている。

西ヨーロッパにくらべて工場労働者数がすくないロシアで、ストライキ参加者の数がどうしてこれほど大きなものになることができたのかを理解するには、反復ストライキを考慮に入れなければならない。つぎに、労働者数にたい

するストライキ参加者数の比率と関連させて、年度別の反復ストライキ件数を示している資料をかかげよう。〔前ページの下の表〕

これによって次のことがわかる。すなわち、ストライキ参加者の総数の点で群をぬいている一九〇五―一九〇七年の三年間は、反復ストライキの頻度と、労働者総数にたいするストライキ参加者のパーセントの点でもとびぬけているのである。

統計はまた、ストライキがおこった企業の数とストライキに参加した労働者の数をも示している。年度別にみたその資料は次の諸表のとおりである。

この表〔下段の表〕も、前表と同じように、一九〇六年から一九〇七年にかけてのストライキ参加者数の減少が、一九〇五年から一九〇六年にかけての減少にくらべて、全体としてずっと少なかったことを示している。われわれはあとの叙述で、いくつかの産業部門といくつかの地方では、一九〇六年から一九〇七年にかけて、ストライキ運動の衰退ではなく、その強化が認められることを見るであろう。いまさしあたっては、ストライキに実際に参加した労働者の数についての県別の資料が次のような興味ぶかい現象を示していることを指摘しておこう。一九〇五年から一九〇六年にかけては、発展した工業をもつ諸県の大多数で、ストライキに参加した労働者のパーセントが低下した。しかし、一九〇五年から一九〇六年にかけてこのパーセントが上昇した県もいくつかある。それは、最も非工業的な、いわば最もへんぴな県である。これにはいるのは、たとえば、極北地方の諸県――アルハンゲリスク県（工場労働者数一万一千、ストライキに参加した労働者のパーセントは、一九〇五年には〇・四%、一九〇六年には七八・六%）、ヴォログダ県（工場労働者数六千、ストライキ参加者は右と同じ年度にそれぞれ二六・八%―四〇・二%）、オロネッツ県（工場労働者数一千、同じく〇%―二・六%）――、つぎにチェルノモールスカヤ〔黒海〕県（工場労働者数一千、四二・四%―九三・五%）、沿ヴォルガ諸県のうちではシンビルスク県

年　　　度	労働者総数にたいするストライキのおこった企業におけるストライキ参加者のパーセント
10年間（1895―1904）総計	27.0%
1905	60.0
1906	37.9
1907	32.1
1908	11.9

ストライキに参加した労働者のパーセントが 1905 年から 1906 年にかけて上昇した県

県　　数	工場労働者総数	実際にストライキに参加した労働者の数	
		1905年	1906年
10	61,800	6,564	21,484

(工場労働者数一万四千、一〇・〇％—三三・九％)、中部の農業諸県のうちではクールスク県(工場労働者数一万八千、一四・四％—一六・九％)、東部の辺境地方ではオレンブルグ県（工場労働者数三千、三・四％—二九・四％）である。

一九〇五年から一九〇六年にかけてこれらの県でストライキ参加者のパーセントが上昇したことがどういう意義をもっているかは、明らかである。一九〇五年には、波が彼らのところまでとどく間[*]がなかった。もっとすすんだ労働者が世界でかつて見られなかったほどの闘争を一年間おこなったあとではじめて、彼らは運動にひきいれられはじめたのである。以下の叙述でわれわれは、諸事件の歴史的経過を理解するうえに非常に重要な

ストライキに参加した労働者のパーセントが 1906 年から 1907 年にかけて上昇した県

県　　数	工場労働者総数	実際にストライキに参加した労働者の数	
		1906年	1907年
19	572,132	186,926	285,673

この現象に、なんども出会うであろう。

これに反して、一九〇六年から一九〇七年にかけて、ストライキ参加者のパーセントは、いくつかの非常に工業的な県で上昇している。たとえば、ペテルブルグ県（一九〇六年には六八・〇％、一九〇七年には八五・七％——これは一九〇五年の八五・九％とほぼ同じである)、ヴラヂーミル県（三七・一％—四九・六％)、バクー県（三二・九％—八五・五％)、キエフ県(一〇・九％—一一・四％)その他幾多の県でそうである。このように、一九〇五年から一九〇六年にかけて幾多の県でストライキ参加者のパーセントが増大したことに、われわれは、闘争が最大の発展をとげた時機に遅刻した労働者階級の後衛を

工場管区別	1905年の工場労働者数(単位千人)	ストライキ参加者数(単位千人)				
		1895—1904年（総計）	1905年	1906年	1907年	1908年
1 ペテルブルグ	298	137	1,033	307	325	44
2 モスクワ	567	123	540	170	154	28
3 ワルシャワ	252	69	887	525	104	35
4—6 キエフ，沿ヴォルガ，ハリコフ	543	102	403	106	157*	69*
合計	1,660	431	2,863	1,108	740	176

* この二つの数字は，まえの諸年度の数字と完全には比較できない．なぜなら，1907年にはじめて石油企業の労働者がふくめられたからである．そのための増加はおそらく2万～3万人以上ではないであろう．

見るとすれば、他方、一九〇六年から一九〇七年にかけて他の幾多の県でこのパーセントが増大したことは、前衛が闘争をふたたびたかめ、開始された退却をくいとめようと努力していることを、われわれに示している。

この正しい結論をもっと正確なものにするため、第一種の県〔前ページ上の表〕と第二種の県〔前ページ下の表〕について、労働者の数と実際のストライキ参加者の数との実数をあげよう。

一県あたりの平均では〔第一種の県の場合〕、工場労働者総数は六千人である。実際にストライキに参加した労働者の数の増加は、合計一万五千人である。

一県あたりの平均では〔第二種の県の場合〕、工場労働者総数は三万人である。実際にストライキに参加した労働者の数の増加は一〇万人ほどであるが、一九〇六年の計算にはぬけていたバクー県の石油労働者（たぶん二―三万人以下）を控除すれば、約七万人の増加になる。

一九〇六年の後衛の役割と一九〇七年の前衛の役割は、これらの数字にはっきり現われている。

これらの規模についてもっと正確な判断をくだすためには、ロシアの地方別の資料をとって、ストライキ参加者の数を工場労働者の数と比較してみなければならない。その資料を総括するとつぎのとおりである。〔上段の表〕

いろいろの地方の労働者が運動に不均等に参加している。

一九〇五年には、全体として、一六六万人の労働者が二八六万三千人のストライキ参加者、すなわち、労働者一〇〇

人につき一六四人のストライキ参加者を出した。いいかえれば、労働者の半数よりすこし多いものが、平均二回ストライキをしたわけである。しかし、この平均数は、一方のペテルブルグおよびワルシャワの両管区と、他方のその他すべての管区とのあいだの根本的な相違をぼかしている。ペテルブルグおよびワルシャワの両管区は、あわせて工場労働者総数の三分の一（一六六万人のうちの五五万人）を占めているが、それらの管区が出したストライキ参加者は、総数の三分の二（二八六万三千人のうちの一九二万人）である。これらの管区では、一九〇五年には労働者一人あたり平均ほぼ四回ストライキをしたわけである。その他の管区では、一一一万の労働者にたいしてストライキ参加者は九四万三千人になる。すなわち、比率からいえば上記の二つの管区の四分の一である。労働者は自分の力を過大評価したという、自由主義者が説き、わが解党派が繰りかえしている主張がどれほどまちがっているかは、このことだけからでも明らかである。それどころか、事実は、労働者が自分の力を過小評価したことを証明している。なぜなら、労働者は、自分の力を利用しつくさなかったからである。もしストライキ闘争（われわれはここではこの一つの闘争形態についてだけ述べているのだが）のエネルギーと頑強さがロシア全土にわたってペテルブルグおよびワルシャワの両管区の場合と同じようなものであったなら、ストライキ参加者の総数は、二倍になっていたであろう。いいかえれば、この結論はつぎのように言いあらわすことができる。すなわち、労働者は運動のこの分野で、自分の力の半分しか評価できなかった。なぜなら、彼らは、自分の力の残りの半分をまだ利用しなかったからである、と。地理的にいえば、西部と西北部はすでに目ざめたが、中部と東部と南部は半分ねむっていた。資本主義の発展は、おくれた人々を覚醒させるために日々になにかをしているのである。

地方別の資料からえられるその次の重要な結論は、こうである。一九〇五年から一九〇六年にかけては、運動は、不均等ではあったが、いたるところで衰退したが、一九〇六年から一九〇七年にかけては、ワルシャワ管区で大きく衰退し、モスクワ、キエフ、沿ヴォルガの諸管区でごくわずか減退したのにたいして、ペテルブルグ管区とハリコフ管区では増大している、ということである。これは次のことを意味する。すなわち、住民の自覚と訓練の当時の水準にあっては、われわれの考察しているこの運動形態（ストライキ）は一九〇五年のうちに力をつかいはたしてしまった。社会＝政治生活の客観的諸矛盾が消滅しない以上、この形態は、より高度の運動形態に移行しなければならなかったのである。しかし、一年間の——もしそういえるなら

——休息あるいは力の結集期のあとで、一九〇六年中に、国の一部で新しい高揚が現われはじめ、開始された。自由主義者は、また彼らにつづいて解党派は、この期間を評価して、軽蔑したように「ロマン主義者の期待」などといっているが、マルクス主義者はつぎのように言わなければならない。自由主義者は、この部分的高揚を支持することを忌避して、民主主義の成果をまもりぬく最後の可能性をぶちこわしていたのだ、と。

ストライキ参加者の地域的分布の問題については、さらに、その圧倒的多数が、いちじるしく発展した工業をもつ六つの県——そのうち五県には大都市がある——に属することを、指摘しなければならない。その六つの県とは、ペテルブルグ県、モスクワ県、リフリャンド県、ヴラヂーミル県、ワルシャワ県、ペトロコフ県である。一九〇五年には、工場労働者総数一六六万一千人のうち、八二万七千人がこれらの県にいた。すなわち、総数のほぼ半分である。他方、これらの県のストライキ参加者は、一八九五—一九〇四年の一〇年間を総計して、全国のストライキ参加者総数四三万一千人のうちの二四万六千人、すなわち総数の約六〇%であり、一九〇五年には二八六万三千人のうち二〇七万二千人、すなわち約七〇%、一九〇六年には一一〇万八千人のうち八五万二千人、すなわち約七五%、一九〇七年には七四万人のうちの五一万七千人、すなわち約七〇%であり、一九〇八年には一七万六千人のうちの八万五千人、すなわち半分たらずであった。*

＊　一九〇八年に、いちじるしい数のストライキ参加者があった諸県の先頭に立っているのは、ストライキ参加者四万七千人のバクー県である。大衆的政治ストライキの最後のモヒカン族だ！(四〇)

だから、一九〇五—一九〇七年の三年間におけるこの六県の役割は、そのまえおよびそのあとの時期におけるよりも大きかったのである。つまり、この三年間に、二つの首都をふくむ大都市中心地は、その他のすべての地方よりもはるかに多くのエネルギーを発揮したことは、明らかである。農村や比較的小さな都市中心地および工業中心地に分散している労働者は、労働者総数の半分を占めているが、一八九五—一九〇四年にはストライキ参加者総数の四〇%、一九〇五—一九〇七年にはたった二五—三〇%を出したにすぎない。さきにくだした結論を補足して、われわれは、大都市はめざめたが、小都市と農村はまだかなりの程度ねむっていた、ということができる。

農村一般については、すなわち農村に住む工場労働者については、そのほかに、都市と都市以外とのストライキ件数（ストライキ参加者数ではなく）の統計資料がある。

年度	ストライキ件数		
	都市	都市以外	総数
10年間(1895—1904)総計	1,326	439	1,765
1905	11,891	2,104	13,995
1906	5,328	786	6,114
1907	3,258	315	3,573
1908	767	125	892

上にその資料をかかげよう。

官庁統計の作成者は、この資料をあげたさいに、ポゴジェフ氏の有名な研究(3)によれば、ロシアの工場総数の四〇%が都市に、六〇%が都市以外にあると指摘している。したがって、平時(一八九五―一九〇四年)に、都市のストライキ件数が農村のストライキ件数の三倍であったとすれば、企業数にたいするストライキ件数のパーセントは、都市では農村の四倍半ということになる。一九〇五年には、この比率はほぼ八対一、一九〇六年には九対一、一九〇七年には一五対一、一九〇八年には六対一であった。* いいかえれば、ストライキ運動における都市の工場労働者の役割は農村に住む工場労働者の役割にくらべて、一九〇五年にはそのまえの数年よりもずっと大きかった。しかも、一九〇六年と一九〇七年には、この役割はますます大きくなった。すなわち、農村の工場労働者が運動に参加する比率はますます低くなっていったのである。一八九五―一九〇四年の一〇年間の闘争の訓練をうけることが最もすくなかった、農村に住む工場労働者は、いちばん動揺を示し、一九〇五年以後にはいちばん急速に退却にうつったのである。前衛、すなわち都市の工場労働者は、この退却をくいとめるために、一九〇六年には特別の努力をはらい、一九〇七年には、一九〇六年よりいっそう多くの努力をはらったのである。

* 一九〇六年にはじめて監督の対象となった石油企業のストライキ――一九〇八年には二二八件、一九〇七年には二三〇件――が、ストライキ件数にはいっている。

さらに、ストライキ参加者の産業部門の分布をしらべてみよう。そのために、四つの主要な産業部門群を区別しよう。(A)金属労働者、(B)繊維労働者、(C)印刷工、木工、皮革工、化学工業労働者、(D)鉱物精錬業および食料品工業の労働者。年度別の数字は〔次ページの表〕のとおりである。

金属労働者は、一九〇五年以前の一〇年間に最もよく訓

産業部門群	1904年の工場労働者総数	年度別ストライキ参加者数（単位千人）				
		1895—1904年（総計）	1905年	1906年	1907年	1908年
A	252	117	811	213	193	41
B	708	237	1,296	640	302	56
C	277	38	471	170	179	24
D	454	39	285	85	66	55
合計	1,691	431	2,863	1,108	740	176

練をうけた。この一〇年間に金属労働者のほとんど半数（二五万二千人のうちの一一万七千人）がストライキをした。彼らは最もよく訓練されていたので、一九〇五年にも先頭をきっていた。金属労働者のストライキ参加者数は、労働者数の三倍以上である（二五万二千人にたいして八一万一千人）。一九〇五年の月別の資料を検討すると、この前衛の役割はもっとくっきり現われてくる（この資料の詳細な考察は、この短い論文では不可能なので、他の場所にゆずることにする）。金属労働者の場合、一九〇五年の各月をつうじてストライキ参加者数が最大の月は、他のすべての産業部門グループのように一〇月ではなくて、一月である。前衛は、ほかの大衆を「ゆすぶりながら」最大限のエネルギーで運動を開始した。一九〇五年一月の一ヵ月だけでも、金属労働者は一五万五千人がストライキをした。すなわち、金属労働者総数（二五万二千人）の三分の二である。この一ヵ月だけで、ストライキ参加者数は、そのまえの一〇年間の合計をいちじるしく上まわった（一一万七千人にたいして一五万五千人）。だが、このほとんど超人的なエネルギーは、一九〇五年の終りごろには、前衛の力をつかいはたしてしまう。金属労働者は、一九〇六年には運動の衰退の度合いで第一位を占めている。ストライキ参加者数の減少は、金属労働者の場合が最も大きく、八一万一千人から二一万三千人に、すなわち、ほとんど四分の一に減っている。一九〇七年になるころまでに、前衛にふたたび力を結集する。ストライキ参加者数は、このグループ全体としてはごくわずか減少しているが（二一万三千人から一九万三千人に）、金属加工業部門群のうち最も重要な三つの産業部門、すなわち機械製作、造船および鋳物部門では、ストライキ参加者数は、一九〇六年の一〇万四千人から一九〇七年には一二万五千人に増加している。

　繊維労働者は、ロシアの工場労働者の主要な集団をなしており総数の半分弱を占めている（一六九万一千人のうち

の七〇万八千人）。彼らは、一九〇五年以前の一〇年間に訓練をうけた点では第二位にあり、総数の三分の一がストライキをした（七〇万八千人のうちの二三万七千人）。彼らは、一九〇五年における運動の強さの点でもやはり第二位にあり、ストライキ参加者数は労働者一〇〇人につき約一八〇人である。彼らは、金属労働者よりもおくれて闘争にひきいれられている。一月には、繊維労働者のストライキ参加者数は金属労働者のそれよりもすこし多かったが（一五万五千人にたいして一六万四千人）、一〇月には二倍以上になっている（一一万七千人にたいして二五万六千人）。おくれて運動にひきいれられたこの主要な集団は、一九〇六年にはだれよりも頑強にがんばっている。この年の衰退は全般的であるが、繊維労働者の衰退は最もすくない。繊維労働者の場合減少は半分（一二九万六千人にたいして六四万人）なのに、金属労働者ではほとんど四分の一に（八一万一千人にたいして二一万三千人）、その他のものでは五分の二から七分の二に減っている。やっと一九〇七年になるころまでに、この主要な集団の力もやはりつかいはたされたことがわかる。一九〇六年から一九〇七年にかけては、ほかならぬこの群が最大の衰退を示し、半分以下になっている（六四万人にたいして三〇万二千人）。

その他の産業部門についての資料をこまかく検討することはやめて、ただ、部類Dが最下位にあることだけを指摘しておこう。これは、訓練をうけることが最も弱く、また運動への参加が最も弱かった部類である。金属労働者を基準〔労働者数の三倍以上のストライキ参加者〕にとれば、部類Dは、一九〇五年の一ヵ年だけでもストライキ参加者一〇〇万人以上が「借りになっていた」といえる。

金属労働者と繊維労働者との関係は、先進的な層と広範な大衆との関係として特徴的である。一八九五―一九〇四年には自由な団体、自由な出版物、議会の演壇などがなかったので、一九〇五年には、大衆は、自然発生的に、闘争そのものの過程で結集するよりほかはなかった。この結集の機構は、ストライキ参加者の波がつぎつぎにたかまったことにあったが、そのさい前衛は、運動の初期に広範な大衆を「ゆすぶる」ために非常に多くのエネルギーを費さなければならなかったので、運動が頂点に達するころには彼らは比較的弱まっていた。一九〇五年一月にはストライキ参加者は四四万四千人で、そのうち金属労働者は一五万五千人、すなわち三四％であったが、一〇月には、ストライキ参加者の総数は五一万九千人、そのうち金属労働者は一一万七千人、すなわち二二％であった。運動のこうした不均等性は、勢力を細分させその集中を不十分にするため、ある程度勢力の浪費に等しいことは、明らかである。それ

年度	日数
10年間(1895—1904)	4.8
1905	8.7
1906	4.9
1907	3.2
1908	4.9

年度	労働者数
10年間(1895—1904)	244人
1905	205〃
1906	181〃
1907	207〃
1908	197〃

ストライキについての年度別の資料の概観を終えるために、ストライキの規模と継続期間ならびにストライキによる損失の大きさを特徴づける数字について、なおすこしばかり述べよう。

一件のストライキの参加者の平均数はつぎのとおりであった。〔上段の右表〕

ストライキの規模（参加者から見た）が一九〇五年に小さくなったのは、小企業の大衆が闘争にひきいれられたからであって、小企業が参加者の平均数を低下させたのである。一九〇六年にそれがさらに小さくなったのは、あきらかに闘争のエネルギーの低下を反映している。一九〇七年は、この点でもまたある程度の前進を示している。

純政治的ストライキへの参加者の平均数をとれば、次のような年度別の数字がえられる。一九〇五年——一八〇人、一九〇六年——一七四人、一九〇七年——二〇三人、一九〇八年——一九七人。この数字は、一九〇六年に闘争のエネルギーが低下したこと、一九〇七年にはそれがあらたに成長したか、それとも（あるいはそれと同時にかもしれない）一九〇七年の運動には巨大企業がおもに参加したかであることを、いっそうくっきりと示している。

参加労働者一人あたりのストライキ日数は、つぎのとおりであった。〔上段の左表〕

は、第一に、勢力をもっとよく集中すれば効果をもっとたかめることができるということを意味するし、第二に、この時期の客観的事情からして、それぞれの波の初めには、いくつかの手さぐりの動作、いわば偵察行動、試験的運動等々が避けられなかったし、成功をおさめるためにはそれが必要であったことを意味する。だから、自由主義者が、また彼らにつづいてマルトフのような解党派が、「プロレタリアートは自分の勢力を過大評価した」という彼らの理論の見地から、われわれが「自然発生的な階級闘争のあとにくっついていった」といってわれわれを非難するとき、これらの諸君は、自分自身に判決をくだし、その意志に反してわれわれに最大の賛辞をおくっているのである。

年度	ストライキ延日数の総数	そのうち，政治的ストライキの延日数
10年間(1895—1904)総計	2,079,408	—
1905	23,609,387	7,569,708
1906	5,512,749	763,605
1907	2,433,123	521,647
1908	864,666	89,021

この数字によって特徴づけられる闘争の頑強さは、一九〇五年に最大であった。その後は一九〇七年まで急速に低下をつづけ、やっと一九〇八年になって増大した。闘争の頑強さという点では、西ヨーロッパのストライキはくらべものにならないほど高いということを、指摘しなければならない。参加労働者一人あたりのストライキ日数は、一八九四—一八九八年の五年間には、イタリアでは一〇・三日、オーストリアでは一二・一日、フランスでは一四・三日、イギリスでは三四・二日であった。

純政治的ストライキをべつにとりだすなら、次の数字がえられる。一九〇五年には参加労働者一人あたり七・〇日、一九〇六年には一・五日、一九〇七年には一・〇日である。経済的原因によるストライキは、いつでも闘争の継続期間がより長いことを特色としている。

年度によってストライキ闘争の頑強さがちがうことを考慮に入れるなら、ストライキ参加者数についての資料は、いろいろの年度の運動の相対的規模を判定するのにはまだ不十分であるという結論がえられる。それを正確に判定するのに役だつのは、ストライキの延日数である。これは年度別で上の表のとおりであった。

このように、正確に判定した運動の規模は、一九〇五年ただ一年だけで、それ以前の一〇年間の運動総計の一一倍あまりである。いいかえれば、一九〇五年の運動規模は、そのまえの一〇年間の年平均の運動規模の一一五倍である。

いわゆる「平和的」、「有機的」、「進化的」な時代に見られる社会的＝政治的発展のテンポを、あらゆる場合の基準にとり、現代の人類にとって可能な発展速度の指標にとる人々は、官学の学者のあいだに（しかも彼らのあいだだけにかぎらない）あまりにもしばしば見うけられるが、上記の比率は、そういう人々がどんなに近視眼的であるかをわれわれに示している。実際には、いわゆる「有機的な」時代の「発展」テンポは、最大の停滞の指標、発展にとっての最大の障害の指標なのである。

官庁統計の作成者は、ストライキの延日数についての資

産業部門群(18ページを参照)*	1905年の工場労働者数(単位千人)	ストライキによる労働者の損失額(単位千ルーブリ)				
		1895—1904年総計	1905年	1906年	1907年	1908年
A	252	650	7,654	891	450	132
B	708	715	6,794	1,968	659	228
C	277	137	1,997	610	576	69
D	454	95	1,096	351	130	72
総　数	1,691	1,597	17,541	3,820	1,815	501

* 本書では105ページを参照

料によって、工業が受けた損失を算定している。この損失(減産額)は、一八九五―一九〇四年の一〇年間には総計一〇四〇万ルーブリ、一九〇五年には一億二七三〇万ルーブリ、一九〇六年には三一二〇万ルーブリ、一九〇七年には一五〇〇万ルーブリ、一九〇八年には五八〇万ルーブリであった。したがって、一九〇五―一九〇七年の三年間に、減産額は一億七三五〇万ルーブリにのぼったわけである。

　ストライキ期間中に賃金をもらわなかったことによる労働者の損失(それぞれの産業部門の平均日給額によって算定したもの)は、いま対象としている諸年度には上の表のような額(単位千ルーブリ)にのぼった。

　一九〇五―一九〇七年の三年間の労働者の損失は二三二〇万ルーブリで、そのまえの一〇年間を全部あわせた総計の一四倍あまりにのぼった。* 官庁統計の作成者は、工場工業にやとわれている労働者一人あたり(ストライキ参加者一人あたりではなく)のこの損失の平均額は、最初の一〇年間には毎年約一〇コペイカ、一九〇五年には約一〇ルーブリ、一九〇六年には約二ルーブリ、一九〇七年には約一ルーブリであった、と計算している。しかし、この計算は、この問題の点について種々の産業部門の労働者のあいだに見られる非常な違いを度外視している。前掲の数字をもとにしておこなったもっと精密な計算は次のとおりである。

〔次ページの表〕

　運動が最も強力であった時期には労働者がこの損失の一部を企業家に転嫁したことを、念頭におく必要がある。統計は、一九〇五年以降は、ストライキ期間中の賃金支払の要求という、ストライキの特別の原因(官庁統計の分類表では、原因第三類のb)を明らかにすべきであった。この要求を提出した件数は、一九〇五年には六三二件、一九〇六年には二五六件、一九〇七年には四八件、一九〇八年には九件であった(一九〇五年以前にはこの要求は全然提出されなかった)。この

産業部門群	工場工業にやとわれている労働者一人あたりのストライキによる損失平均額（単位ルーブリ）				
	10年間(1895-1904年) 総計	1905年	1906年	1907年	1908年
A	2.6	29.9	3.5	1.8	0.5
B	1.0	9.7	2.8	0.9	0.3
C	0.5	7.2	2.2	2.1	0.2
D	0.2	2.4	0.7	0.3	0.05
平均	0.9	10.4	2.3	1.1	0.3

要求のための労働者の闘争の結果は、一九〇六年と一九〇七年についてだけ、しかもこの原因が主要な原因であった二―三の事例についてだけわかっているにすぎない。一九〇六年には、主としてこの原因からストライキをした労働者一〇、九六六人のうち、二、一七一人がストライキに勝ち、二、六二六人が敗北し、六、一六九人が妥協で終わった。一九〇七年には、主としてこの原因でストライキをした労働者九三人のうち、ストライキに勝ったものは一人もなく、五二人が敗北し、四一人は妥協で終わった。一九〇五年のストライキについてわれわれにわかっているかぎりでは、この原因からおこったストライキは、一九〇五年には一九〇六年よりも多くの成功をおさめたと推定すべきである。

これでわかるように、金属労働者（A群）一人あたりのストライキによる損失額は、一九〇五年にはほとんど三〇ループリであり、総平均額の三倍、また鉱物精錬業と食料品工業の労働者（D群）の平均損失額の一〇倍以上にのぼっている。金属労働者はいま考察している運動形態では一九〇五年末になるころまでにその力をつかいはたしたという、われわれがまえにくだした結論は、この表によってさらにくっきりと確証される。すなわち、A群では損失額は一九〇五年から一九〇六年にかけて八分の一以下に減り、その他の群では三分の一―四分の一に減っている。

これでストライキ統計の年度別資料の検討を終わり、次の章では月別の資料の研究にうつろう。

二

ストライキ運動の波状的性格を研究するには、一年という期間は長すぎる。われわれは、統計のうえから、一九〇五―一九〇七年の三年間には毎一ヵ月が一年に匹敵していた、と言う権利がある。この三年間に労働運動は三〇年分を生きたのである。一九〇五年には、一ヵ月のストライキ参加者数が一八九五―一九〇四年の一〇年間のストライキ

ストライキ参加者数（単位千人）

年度	1905				1906				1907			
四半期	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV
総数	810	481	294	1,277	269	479	296	63	146	323	77	193
内訳												
経済的ストライキの参加者	604	239	165	430	73	222	125	37	52	52	66	30
政治的ストライキの参加者	206	242	129	847	196	257	171	26	94	271	11	163

参加者数の年間最低数を下まわった月は一ヵ月もなかったし、一九〇六年と一九〇七年には、そういう月はそれぞれ二ヵ月しかなかった。

残念ながら、官庁統計における月別資料は、各県別の資料と同じように、非常に不満足なやり方で作成されている。多くの総括をあらためてやりなおさなければならない。こういう理由から、それに紙面のつごうもあるので、われわれは、さしあたっては四半期別の資料に限定する。経済的ストライキと政治的ストライキとの区分について注意しておくが、官庁統計があたえている一九〇五年と一九〇六―一九〇七年との資料は、完全にはたがいに比較できない。両者の混合したストライキ――官庁統計の分類表では、経済的要求をともなう第一二部類と、経済的要求をともなう第一二部類b――は、一九〇五年には政治的ストライキにかぞえられていたが、のちには経済的ストライキにかぞえられている。われわれは、一九〇五年についても、それを経済的ストライキに入れることにする。

ストライキ参加者数[26]は次のとおりである（単位千人）。

〔上の表〕

波の最大の高まりを示している時期は、線でかこんである。この表を一見しただけですでに、そういう時期が、この三ヵ年の全期間を特徴づける政治的諸事件の重要な頂点と一致していることが、目にうつる。一九〇五年の第一・四半期には一月九日事件とその余波、一九〇五年の第四・四半期には一〇月および一二月の諸事件、一九〇六年の第二・四半期には第一国会、一九〇七年の第二・四半期には第二国会があった。一九〇七年の最後の四半期には高揚は最小であったが、その高揚は、第二国会の労働者議員の裁判を機縁とする一一月の政治的ストライキ（ストライキ参加者一三万四千人）によるものである。このように、この三年間の終末にあたり、ロシア史の別の時期への過渡期を

1905—1907年四半期別ストライキ参加者数（単位千人）のグラフ
（1910年作製）

——政治的ストライキ参加者数
——経済的ストライキ参加者数

（ヴェ・イ・レーニンのノート『ロシアのストライキ統計』から．レーニンスキー・ズボールニク第25巻）

が国の社会的＝政治的進化全体の決定的な転換点をあらわしている、ということである。ストライキ統計は、この進化の主要な推進力をわれわれにまざまざと示している。これは、もちろん、この運動形態が唯一の形態あるいは最高の形態であるという意味ではない——われわれはそうでないことを知っている。——これはまた、この運動形態から、社会的＝政治的進化の部分的な諸問題についての直接の結論をくだすことができるという意味でもない。しかし、これは、諸事件の一般的方向の主要な発条（ばね）であった階級の運動を示す統計図（もちろん、けっして完全な図ではないが）がここにある、ということを意味する。他の諸階級の運動は、この中心のまわりにむらがり、この中心のあとにしたがい、この中心によって方向づけられ、あるいは規定され（肯定的な方向にか、否定的な方向にか）、それに依存している。

なしているこの時期は、まさに常則を裏書きするような例外である。すなわち、たとえここではストライキの波の高まりが一般的な社会的＝政治的高揚を意味しないとしても、よりくわしく検討するとわかるように、そこにはまさにストライキの波もなかったのであって、あったのは単独の示威ストライキだけなのである。

この三年間の常則というのは、ストライキの波の高まり

この結論が正しいことを納得するには、この三年間のロシアの政治史の主要な諸契機を思いだすだけで十分である。一九〇五年の第一・四半期をとってみよう。その前夜はなにをわれわれ（七七）に示しているか？　有名なゼムストヴォ懇親会カンパニアである。このカンパニアにおける労働者の行動を「デモンストレーションの高度の形態」と評価したのは正しかっただろうか？　自由主義者に「恐慌」をおこさせないなどという論議は正しかっただろうか？　これらの問題をストライキ統計のわくにはめこんでみれば（一九〇三年——八万七千人、一九〇四年——二万五千人、一九〇五年一月——四四万四千人、そのうち政治的ストライキの参加者——一二万三千人）、答えは明らかであろう。ゼムストヴォ・カンパニアの戦術についての上記の論争は、客観的諸条件に根ざす、自由主義運動と労働運動との敵対関係を反映しているにすぎない。

一月の高揚のあとでわれわれはなにを見るか？* 国家組（八〇）織のある程度の改造に端緒をひらいた有名な二月勅令を見るのである。

* 四半期別の資料によると、〔一九〇五年の前半に〕高揚は一回だけしかなかったことになる。実際には二回あった。一月にはストライキ参加者四四万四千人、五月には二二万人である。その間の最低は三月の七万三千人である。

一九〇五年の第三・四半期をとってみよう。政治史の前面にあるのは、八月六日の法律（いわゆるブルィギン国会（八九））である。この法律は実現される運命にあっただろうか？　自由主義者は然りと考え、そういう意見に応じて自分の行動の方針を決定する。マルクス主義者の陣営にはこれと反対の見解がある。客観的に見て自由主義の見解をとっている人々は、この見解に同意しない。一九〇五年の最後の四半期の諸事件はこの論争を解決している。

四半期全体にたいする数字によると、一九〇五年の末には高揚は一回しかなかったように見える。実際にはそれは二回あり、運動のわずかな弱まりでたがいにへだてられている。一〇月にはストライキ参加者は五一万九千人、そのうち純政治的ストライキの参加者は三二万八千人であり、一一月には三二万五千人（そのうち政治的ストライキの参加者は一四万七千人）、一二月には四三万三千人（そのうち政治的ストライキの参加者は三七万二千人）であった。歴史的文献では、自由主義者とわが解党派（チェレヴァニン一派）の見解が述べられているが、その見解によると、一二月の高揚には「人為的な」要素があるとされている。統計はこの見解をくつがえして、まさにこの月に純政治的ストライキの参加者数の最高を、すなわち三七万二千人を示している。自由主義者に一定の評価をさせた諸傾向はよ

くわかるが、しかし、純科学的な見地からすれば、一ヵ月の純政治的ストライキの参加者数がまる一〇年間のストライキ参加者の総数のほとんど一〇分の九にあたるほど大きな規模をもった運動を、いくらかでも「人為的」なものと見るのは、ばかげている。

最後に、一九〇六年春と一九〇七年春との、あとの二つの高揚をとろう。*それが、一九〇五年の一月と五月の高揚(そのなかでもやはり前者のほうが後者より強かった)と一般にちがうところは、まえの二つが攻撃の線をすすんだのに反し、あとの二つは退却の線をすすんでいることである。この相違は、この三年間の最初の一年とくらべて、あとの二年の一般的な特徴である。したがって、一九〇六年と一九〇七年の上記の期間に見られる数字の上昇について は、これらの上昇が、退却の停止と、ふたたび攻撃にうつろうという退却者の試みとをあらわしているというのが、正確な評価であろう。これこそ、これらの高揚の客観的意義であって、この意義は、「疾風怒濤の三年間」全体がもたらした最後の結末からみて、いまではわれわれにとって明瞭である。第一および第二国会は、下部で退却が停止されていたときの上部での政治的交渉と政治的示威にほかならなかった。

この交渉を、あれこれの退却停止が長くつづくかどうか、それがなにに導くかということにはかかわらない、なにか自足的な、独立のものと見ている自由主義者がまったく近視眼的であることは、これによって明らかである。マルトフと同じように、いま退却の時期の「ロマン主義者の期待」などと軽蔑したように語っている解党派が、客観的には自由主義者に従属していることは、これによって明らかである。ここで問題となっているものは「ロマン主義者の期待」ではなくて、実際におこった退却の中絶、停止であることを、統計がわれわれに示している。もしこれらの停止がなかったなら、退却が退却にとどまっていたかぎり歴史的にまったく不可避であった一九〇七年六月三日の事件(3)は、もっとはやく、おそらくまる一年、あるいは一年以上

* 一八九五—一九〇四年の一〇年間のロシアのストライキの歴史は、経済的ストライキが通常第二・四半期にたかまることを明らかにしている点に、注意する必要がある。一〇年間全体をつうじての年平均ストライキ参加者数は四万三千人であったが、四半期別に見ると、第一・四半期——一万人、第二・四半期——一万五千人、第三・四半期——一万二千人、第四・四半期——六千人となっている。しかし、一九〇六年春と一九〇七年春の高揚は、ロシアでは夏にストライキが高揚するというこの「一般的」原因によって説明がつかないことは、数字を比較しただけでまったく明白である。政治的ストライキの参加者数を一見すればよい。

もはやくおこったであろう。

以上にストライキ運動の歴史を政治史の主要な契機に関連させて考察したので、こんどは経済的ストライキと政治的ストライキとの相互関係を研究しよう。官庁統計はこの問題について、きわめて興味深い資料をあたえている。まず、研究対象となっている三年間の年度別の総数をとろう。〔上の表〕

ストライキ件数（単位千件）			
	1905年	1906年	1907年
経済的ストライキ	1,439	458	200
政治的ストライキ	1,424	650	540
総数	2,863	1,108	740

ここからでてくる第一の結論は、経済的ストライキと政治的ストライキとのあいだに非常に密接な関係がある、ということである。両者はいっしょに高揚し、いっしょに衰退している。攻撃期（一九〇五年）の運動の力は、政治的ストライキが、それにおとらず強力な経済的ストライキの広範な基盤のうえにいわばそびえ立っていることを特徴としている。これらのストライキは、それぞれ別々にみても、一八九五―一九〇四年の一〇年間全体の総数をはるかにしのいでいる。

運動が衰退するときには、経済的ストライキの参加者数は政治的ストライキの参加者数よりも急速に減少している。一九〇六年と、またとくに一九〇七年の運動の弱さは、疑いもなく、経済闘争の広範で堅固な基盤が欠けていたところに特徴がある。他面、政治的ストライキの参加者数の減退が一般によりゆるやかにすすむこと、とくに、一九〇六年から一九〇七年にかけてその数がすこししか減少していないことは、あきらかに、われわれがすでによく知っている現象、すなわち、最大のエネルギーをもつ先進的な層が、退却をくいとめてそれを攻撃にかえようと努力していることを示している。

この結論は、産業部門群別の経済的ストライキと政治的ストライキの比率についての資料によって十分に確証される。論文を数字でごたごたさせないため、一九〇五年の四半期別に金属労働者と繊維労働者を比較するだけにとどめよう。そのさいこんどは、まえに述べたようにこの年度については混合ストライキを政治的ストライキの部に入れた官庁統計の総括*をとることにする。〔次ページの表〕

* この総括によれば、一九〇五年の経済的ストライキの参加者数は一〇二万一千人、政治的ストライキの参加者数は一八四万二千人であった。すなわち、経済的ストライキの参加者

ストライキ参加者数（単位千人）					
1905年四半期		I	II	III	IV
A群（金属労働者）	経済的ストライキ	120	42	37	31
	政治的ストライキ	159	76	63	283
	計	279	118	100	314
B群（繊維労働者）	経済的ストライキ	196	109	72	182
	政治的ストライキ	111	154	53	418
	計	307	263	125	600

が総数のなかで占める割合は、一九〇六年よりもすくなかった。これが正しくないことは、すでに明らかにしたとおりである。

先進的な層と広範な大衆との相違が明確に現われている。先進分子にあっては、純経済的なストライキの参加者は、最初から半数以下であり、また全年度をつうじてそうであった。しかし、第一・四半期は、この群でも純経済的ストライキの参加者数が非常に多い（一二万人）ことを特徴としている。あきらかに、金属労働者のあいだにも、「ゆさぶられる」必要のあった層、純経済的な要求をかかげて運動を開始した層がすくなくなかったのである。繊維労働者にあっては運動の初期（第一・四半期）には純経済的ストライキの参加者が圧倒的に多いことを見る。これは、第二・四半期には半数以下になるが、第三・四半期にはまた半数以上になっている。運動が頂点に達したこの年の最後の四半期には、金属労働者では純経済的ストライキの参加者の数は、ストライキ参加者総数の一〇%、金属労働者総数の一二%である。繊維労働者では、純経済的ストライキの参加者は、同じ期間に、ストライキ参加者総数の三〇%、繊維労働者総数の二五%を占めている。

経済的ストライキと政治的ストライキとの相互依存関係がまさにこのようなものであることは、いまこそまったく明白である。両者の密接な結びつきなしには、真に広範な、真に大衆的な運動は不可能である。この結びつきの具体的な形態は、一方では、運動の初期や新しい層が運動にひきこまれるときには、純経済的ストライキが優勢な役割を演じるが、他方、政治的ストライキが、おくれたものの目をさまさせ、ゆりおこし、運動を一般化し、拡大し、それをより高い段階にひきあげる、ということである。

この三年間全体をつうじて新規の分子がまさにどのよう

企業の数にたいするストライキ件数のパーセント					
企業の規模別	10年間（1895—1904）総計	1905年	1906年	1907年	1908年
労働者20人以下のもの	2.7	47.0	18.5	6.0	1.0
〃　21—50人のもの	7.5	89.4	38.8	19.0	4.1
〃　51—100　〃	9.4	108.9	56.1	37.7	8.0
〃　101—500　〃	21.5	160.2	79.2	57.5	16.9
〃　501—1,000　〃	49.9	163.8	95.1	61.5	13.0
〃　1,000人以上のもの	89.7	231.9	108.8	83.7	23.0

に運動にひきいれられていったかをくわしくあとづけると、非常に興味ぶかいものがあろう。それについての資料は基礎的な材料のなかにある。というのは、調査表では、各個のストライキについての報告が徴せられたからである。だが、官庁統計におけるこれらの報告の加工は非常に不満足なものであって、調査表のなかにある大量のきわめて豊富な資料が加工されないですてられてしまった。いくらか近似的な観念をあたえるのは、規模別の企業数にたいするストライキ件数のパーセントを示す次の表である。

〔上の表〕

これまで地方別および産業部門群別の資料によって、われわれが観察してきたあの先進的な層は、いま企業群別の資料でも顔を出している。各年度をつうじる一般法則は、企業の規模が大きくなるのに応じてストライキのおこった企業のパーセントが上昇していることである。この場合、一九〇五年に特徴的なことは、第一に、企業が大きければ大きいほど反復ストライキが多いこと、第二に、一八九五—一九〇四年の一〇年と一九〇五年とをくらべると、企業が小さければ小さいほどパーセントの増大の仕方が急激だということである。これは、新規の分子がひきいれられる速度、これまでまだいちどもストライキに参加したことのない層がひきよせられる速度が、とくにはやかったことを、あきらかに示している。最大の高揚の時期に急速に運動にひきこまれたこの新規の分子は、最もしっかりしていない。一九〇六年から一九〇七年にかけてストライキがおこった企業のパーセントの低下は、小さな企業で最もはげしく、大きな企業で最もすくない。前衛は、退却をくいとめるために、最も長く、最も頑強に活動しているのである。

だが、経済的ストライキと政治的ストライキとの相互関係の資料に立ちかえろう。さき（一九ページ）〔本書、一一一ページ〕にあげた三年間の四半期別の資料は、なによりも、すべての大きな高揚が、政治的ストライキの参加者

数の高揚だけと結びついているのではなく、経済的ストライキの参加者数の高揚とも結びついていることを示している。一九〇七年春の高揚だけはいくぶん例外となっている。その年には、経済的ストライキの参加者数が最大であったのは、第二・四半期でなく第三・四半期になっている。

運動の初期（一九〇五年第一・四半期）には経済的ストライキの参加者数が政治的ストライキの参加者数より大いに優勢であるのが見られる（六〇万四千人と二〇万六千人）。運動の頂点（一九〇五年第四・四半期）には、経済的ストライキの波が新しく高まっているが、この波は一月の波よりも弱く、政治的ストライキのほうがいちじるしく優勢である。一九〇六年春の第三の高揚は、またしても、経済的ストライキと政治的ストライキの参加者数がともに非常に増加したことを示している。経済的ストライキと政治的ストライキとが結合されたことが「運動の弱い面」であったというような意見をくつがえすには、すでにこの資料だけで十分である。こうした意見は、自由主義者がなんどとなく述べたところであって、解党主義者チェレヴァニンが一九〇五年一一月についてそれを繰りかえしたし、最近では、マルトフもまた同じ時期についてそれを繰りかえした。こういう見解を裏づけるためにとくにしばしば引合いにだされるのは、八時間労働日のための闘争が失敗したことである。[8]

この失敗の事実は争う余地がない。あらゆる失敗は運動の弱さを意味するということも争う余地がない。しかし、経済的ストライキと政治的ストライキが結合されたことこそが「運動の弱い面」だと認めるところに、自由主義者の見解が現われている。マルクス主義者の見解は、この結合が不十分なことと、経済的ストライキの参加者数がまだ十分多くなかった点に、弱さを見るのである。統計は、経済闘争がつよまるときは運動がつよまるという、三年間の「一般法則」を明らかにすることによって、マルクス主義者の見解の正しさをはっきり確証している。しかも、この「一般法則」は、あらゆる資本主義社会の基本的特徴と論理的に結びついている。資本主義社会では、運動が異常に激しくならなければ目をさまさせることのできないほどおくれた層が、いつでもいることであろう。そして、このおくれた層は、経済的要求によらないかぎり、闘争にひきいれることはできないのである。

一九〇五年の最後の四半期の高揚を、そのまえおよびそのあとの高揚に、すなわち一九〇五年の第一・四半期および一九〇六年の第二・四半期に比較すれば、一〇＝一二月の高揚が、経済的基盤の広さの点で、すなわち、ストライキ参加者総数中に占める経済的ストライキの参加者数のパ

結果別にみたストライキ参加者数のパーセント

ストライキの結果	10年間（1895—1904）総計	1905年	1906年	1907年	1908年
労働者に有利	27.1	23.7	35.4	16.2	14.1
相互の譲歩（妥協）	19.5	46.9	31.1	26.1	17.0
雇い主に有利（労働者に不利）	51.6	29.4	33.5	57.6	68.8

ーセントの点で、そのまえの高揚とそのあとの高揚とのどちらよりも弱いということを、われわれははっきり見るのである。八時間労働日の要求が、ブルジョアジーのうち、労働者のその他の要望には共鳴できた多くの分子を反発させたことは、疑いない。しかし、この要求が、それまでまだ運動にひきいれられていなかった、ブルジョアジー以外の分子を多数ひきよせたこともまた疑いない。そういう分子は、一九〇五年の第四・四半期には四三万人の経済的ストライキの参加者をだし、一九〇六年の第一・四半期にはこの数を七万三千にひきさげ、そして一九〇六年の第二・四半期にはふたたび二二万二千に高めたのである。つまり、ブルジョアジーの共鳴がなかったことが弱点なのではなくて、ブルジョアジー以外の分子からの支持が不十分であったか、あるいはその支持が十分に適当な時機にあたえられなかったことが弱点なのである。

この種の運動がいつもブルジョアジーの一部の分子を反発させることをおそれるのは、自由主義者のもちまえである。この種の運動がブルジョアジー以外の広範な分子をいつもひきよせることを強調するのは、マルクス主義者のもちまえである。Suum cuique——各人にはそれぞれのもちまえがある。

労働者と企業家との闘争の推移の問題については、ストライキの結果についての官庁統計の資料がきわめておしえるところが多い。この統計の総結果は上表のとおりである。

ここから出てくる一般的結論は、まず、運動の最大の力はまた労働者の最大の成功をも意味する、ということである。ストライキ闘争の圧力が最も大きかった一九〇五年は、労働者にとって最も有利であった〔労働者に不利な結果が最もすくなかった〕。この年はまた妥協が異常に頻繁であった点でもきわだっている。両当事者ともまだ新しい異常な条件に順応するにいたらなかったのである。企業家はストライキが頻繁におこるのに影響されて度を失った。そして、事件は他のどのときよりも頻繁に妥協で終わった。一

結果別にみたストライキ参加者数（単位千人）

年度 / 四半期 / ストライキの結果	1905				1906			
	I	II	III	IV	I	II	III	IV
労働者に有利	158	71	45	95	34	86	37	6
妥協	267	109	61	235	28	58	46	8
雇い主に有利	179	59	59	100	11	78	42	23
総数*	604	239	165	430	73	222	125	37

* 官庁統計には，この問題にかんする月別の結果はない．これは，産業部門別の資料から集計しなければならなかった．

九〇六年には闘争はもっとねばりづよくなっている。妥協の事例はくらべものにならないくらいまれになった。だが、労働者は全体としてはまだやはり勝利している。勝ったストライキ参加者のパーセントは負けたもののパーセントより大きい。

一九〇七年からは、労働者の敗北は間断なくひどくなり、妥協の事例はすくなくなっていく。

実数をとれば、一八九五―一九〇四年の一〇年間に総数一一万七千人の労働者がストライキに勝ったが、一九〇五年だけでもその数は三倍以上の三六万九千人になり、一九〇六年には一倍半の一六万三千人になっていることがわかる。

しかし、一九〇五―一九〇七年の三年間におけるストライキ闘争の波状運動を研究するには、一年という期間は長すぎる。月別の資料では紙面をとりすぎるであろうから、それを引用することはやめて、一九〇五年と一九〇六年の四半期別の資料〔上の表〕をあげよう。一九〇七年はぬかしてもさしつかえない。というのは、ストライキの結果からすれば、この年には運動の中断、つまり衰退したり高揚したりという状態は見うけられず、すでにあげた年度別の資料に十分あらわれているような、間断ない労働者の退却と資本家の攻撃を見るからである。

上表の資料から、詳細な検討を必要とする非常に興味ぶかい結論が出てくる。全体としては、労働者の圧力が強いほど闘争は労働者の成功となっていることを、われわれは見た。このことはここにあげた資料で確認されるだろうか？　一九〇五年の第一・四半期は第二・四半期――この

期間には運動が弱まっていったにもかかわらず――よりも労働者に不利であった。というのは三ヵ月分の数字は、一月の高揚（経済的ストライキの参加者三二万一千人）と二月（二二万八千人）および三月（五万六千人）の衰退をいっしょにしているからである。高揚の月である一月をべつにとりだすと、この月には労働者が勝利したことがわかる。八万七千人のストライキ参加者がストライキに勝ち、八万一千人が負け、一五万二千人が妥協で終わった。この時期の衰退の月（二月と三月）は、両月とも労働者の敗北を示している。

第二期（一九〇五年第二・四半期）は、高揚の時期である。この高揚は五月に頂点に達している。闘争の高揚は労働者の勝利を意味する。七万一千人のストライキ参加者がストライキに勝ち、五万九千人が負け、一〇万九千人が妥協で終わった。

第三期（一九〇五年第三・四半期）は衰退の時期である。ストライキ参加者数は第二・四半期よりもはるかにすくない。攻撃の衰退は雇い主の勝利を意味する。五万九千人の労働者がストライキに負け、四万五千人が勝ったにすぎない。ストライキに負けた労働者のパーセントは三五・六である。すなわち、一九〇六年よりも高い。これは、自由主義者が労働者の勝利の主要な原因だとしてあれほどしゃべりたてている、一九〇五年における労働者にたいするあの「共鳴の一般的雰囲気」――（最近マルトフもまたブルジョアジーの共鳴が「主要な原因」だと語った）――も、労働者の攻撃が弱まったときには労働者の敗北をすこしも妨げなかった、ということを意味している。自由主義者は労働者にむかって言う。社会が諸君に共鳴するとき、諸君は強い、と。マルクス主義者は労働者にむかって言う。諸君が強いとき、社会は諸君に共鳴する、と。

一九〇五年の最後の四半期は例外のようにみえる。最大の高揚があるのに労働者は敗北している。だが、この例外は、見かけだけのものである。というのは、高揚の月――労働者が経済的な分野でも勝利した一〇月（ストライキに勝った労働者――五万七千人、ストライキに負けた労働者――二万二千人）――と、経済闘争が衰退し、労働者が敗北した一一月（勝った労働者――二万五千人、負けた労働者――四万七千人）および一二月（勝った労働者――一万二千人、負けた労働者――三万一千人）の二ヵ月とを、いっしょにしているからである。そのさい一一月は急転換の月であり、最大の動揺、対立する諸勢力間の最大の均衡があった月であり、一般にはロシアの歴史が、とくに雇い主の労働者にたいする関係の歴史が、どういう総結果になるか、またどういう一般的方向をとるかが、いちばんわからなかっ

た月であって、この月は、一九〇五年の各月のうちで、妥協の事例の最大のパーセントを示している。この月の経済的ストライキの参加者一七万九千人のうちで闘争を妥協で終わったものは一〇万六千人、すなわちストライキ参加者の五九・二%であった。*

＊ 経済的ストライキの参加者総数は、一〇月に一九万人、一一月に一七万九千人、一二月に六万一千人であった。

一九〇六年の第一・四半期は、またもや見かけだけの例外を示している。経済闘争は最も衰退し、労働者は最も多く勝利した（勝った者――三万四千人、負けた者――一万一千人）。ここでもまた、労働者が敗北した月である一月（勝った者――四千人、負けた者――六千人）と、労働者が勝利した月である二月（勝った者――一万四千人、負けた者――二千人）および三月（勝った者――一万六千人、負けた者――二、五〇〇人）とが、いっしょにされている。経済的ストライキの参加者数はこの時期全体をつうじて低下しているが（一月――二六、六〇〇人、二月――二三、三〇〇人、三月――二三、二〇〇人）、一般的運動の高揚はすでにあきらかに現われかけている（ストライキ参加者総数は、一月――一九万人、二月――二万七千人、三月――五万二千人）。

一九〇六年の第二・四半期は大きな運動の高揚と労働者の勝利（勝った者――八万六千人、負けた者――七万八千人）の時期である。この勝利は五月と六月にとくにいちじるしく、六月には、経済的ストライキの参加者数は、一九〇六年の最高数、九万人に達している。――ところが、四月は例外で、三月にくらべて運動が成長したにもかかわらず、労働者は敗北している。

一九〇六年の第三・四半期からは、年末にいたるまで、全体として、経済闘争のたえまない衰退と、これに応じた労働者の敗北が見うけられる（労働者が経済闘争で勝利した最後の月である一九〇六年八月――勝った者一一、三〇〇人、負けた者一〇、三〇〇人――はいささか例外である）。

一九〇五年と一九〇六年の経済闘争の推移を簡単に総括するには、次のような方法をもちいてもよい。一九〇五年には、一般にストライキ闘争の、とくに経済闘争の三つの主要な高揚期が、はっきりと現われている。一月と五月と一〇月である。この三ヵ月をあわせると、経済的ストライキの参加者数は、年間の総数一四三万九千人のうちの六六万七千人を占めていた。すなわち、四分の一ではなくて半数に近い。また、この三ヵ月はすべて、経済の分野で労働者が勝利した月であった。すなわち、ストライキに勝った労働者の数が負けた労働者の数を上まわった月であった。

一九〇六年には、全体として、上半期と下半期が明瞭に

区別される。上半期には退却の停止と大きな高揚があり、下半期には大きな衰退があった。上半期には経済的ストライキの参加者が二九万五千人にのぼり、下半期には一六万二千人になっている。上半期は経済闘争で労働者に勝利をもたらしたが、下半期は敗北をもたらした。

これらの総結果は、経済闘争においても決定的な役割を演じたのは、「共鳴の雰囲気」でも、ブルジョアジーの同情でもなくて、攻撃の力であったという結論を、完全に確認している。

一九一〇年九月末―一一月に執筆
一九一〇年一二月および一九一一年一月に雑誌『ムィスリ』第一、第二号に発表
署名――ヴェ・イリイン
全集、第五版、第一九巻、三七七―四〇六ページ所収
邦訳全集、第一六巻、四一五―四四三ページ所収

ヨーロッパの労働運動における意見の相違(一)

一

現代の欧米労働運動における戦術上の基本的な意見の相違は、事実上この運動の支配的理論になったマルクス主義に背反する二大傾向との闘争ということに帰着する。この二傾向とは、修正主義（日和見主義、改良主義）と無政府主義（アナルコ－サンディカリズム、無政府社会主義）である。労働運動で支配的なマルクス主義理論とマルクス主義戦術とにたいするこの二つの背反は、どちらも、半世紀をこえる大衆的労働運動の歴史をつうじて、すべての文明国にいろいろな形態とさまざまな色合いとで現われている。

この一つの事実だけからでもわかるように、これらの背

反を、偶然や、個々の人物または集団の誤りによって説明するわけにはいかないし、民族的特殊性または伝統の影響などによってさえ説明するわけにはいかない。これには、きっと、すべての資本主義国の経済制度やその発展の性格に根ざした根本的な原因があって、それが絶えずこれらの背反を生みだしているのにちがいない。昨年出版されたオランダのマルクス主義者アントニー・パンネコックの小著『労働運動における戦術上の意見の相違』(Anton Pannekoek.《Die taktischen Differenzen in der Arbeiterbewegung》. Hamburg, Erdmann Dubber, 1909) は、この原因を科学的に研究しようとした興味ある試みである。以下の叙述でわれわれは、パンネコックの結論を読者に紹介するが、この結論はまったく正しいものであると認めないわけにはいかない。

定期的に戦術上の意見の相違を生みだす最も深い原因の一つは、労働運動が成長してゆくという事実そのものである。この運動をなにか空想的な理想のものさしではからずに、普通の人々の実践的運動として考察するときには、次のことが明らかになるであろう。それは、「新兵」が絶えず参加させられ、勤労大衆の新しい諸層が引きいれられてくるときには、かならずそれにともなって、理論と戦術の分野に動揺が生じたり、古い誤謬が繰りかえされたり、古くさい見解や古くさい方法に一時復帰したり、等々するものであるということである。どの国の労働運動も定期的に、多かれすくなかれ精力と注意と時間を、新兵の「教育」に費やすものである。

さらに、資本主義の発展速度は、さまざまな国、国民経済のさまざまな分野で、一様ではない。大工業が最も発展している場合には、労働者階級とそのイデオローグも、最も容易に、最も急速に、完全に、しっかりと、マルクス主義を身につける。発展のおくれた、あるいはおくれかけた経済関係のところでは、一般にブルジョア的世界観、とくにブルジョア民主主義的世界観のすべての伝統ときっぱり絶縁できないで、マルクス主義のいくつかの側面や、新しい世界観の個々の部分や、個々のスローガンや要求を会得しているだけの、労働運動の支持者が絶えず現われてくる。

つぎに、意見の相違を絶えず生みだす一源泉となっているのは、矛盾のうちを、また矛盾をつうじて進行する社会的発展の弁証法的な性格である。資本主義は、古い生産諸様式を破壊し、生産力を発展させるので、進歩的であるが、それと同時に、ある発展段階に達すると、それは生産力の成長をおさえる。資本主義は労働者を啓発し、組織し、訓練するが、また圧迫し、抑圧し、堕落させ、貧困におとし

いれる、等々。資本主義は、自分で自分の墓掘人をつくりだし、自分で新しい制度の諸要素をつくりだすが、それと同時に、これらの個々の要素は、「飛躍」なしには、全体としての事態をすこしも変えないし、資本の支配にはすこしも触れない。弁証法的唯物論の理論としてのマルクス主義は、こういう生きた生活の矛盾、資本主義と労働運動の生きた歴史の矛盾を、把握することができる。しかし、いうまでもないが、大衆は書物からではなくて生活から学ぶのであって、そのため、個々の人物または集団が資本主義的発展の、ときにはこの特色、ときにはあの特色を、資本主義的発展の、ときにはこの「教訓」、ときにはあの「教訓」を、絶えず誇張し、一面的な理論に、一面的な戦術体系にまつりあげるということになる。

ブルジョア・イデオローグ——自由主義者と民主主義者——は、マルクス主義を理解せず、現代の労働運動を理解せずに、ある極端から他の極端へと、よるべなく絶えず飛びうつっている。彼らは、あるときは、悪質な連中がある階級をある階級に「けしかけている」ということで万事を説明し、あるときは、労働者党は「平和的な改良党」である、といって自分をなぐさめる。アナルコーサンディカリズムも改良主義も、このブルジョア的世界観とその影響の直接の産物とみるべきものであって、どちらも、労働運動の一つの側面をつかまえ、その一面だけを理論にまつりあげ、労働者階級の活動のある時期、ある条件に特有の特質であるような、労働運動のいろいろの傾向や特色をたがいにあいいれないものであると宣言する。しかし、現実の生活、現実の歴史は、これらの相異なる傾向をふくんでいるのであって、それはちょうど、生活と自然における発展が、ゆるやかな進化と、急速な飛躍、漸次性の中断とを、どちらもふくんでいるのと同じである。

修正主義者は、「飛躍」がおこるとかいう議論をすべて、労働運動は旧社会全体に原則的に対立しているとかいう議論をすべて、空文句だと考えている。彼らは、改良は社会主義の部分的な実現であるとみなしている。アナルコーサンディカリストは、「こまごました活動」、とくに議会の演壇の利用を排撃する。実際には、この後者の戦術は、大事件をつくりだす勢力を結集する能力をもたないで、「偉大な日々」を待ちうけるということに帰着する。両者ともに、最も重要な、最も緊切な仕事を妨げる。この仕事とは、巨大な、強力な、りっぱに機能を発揮する、しかもあらゆる条件のもとでりっぱに機能を発揮する能力のある組織、階級闘争の精神で貫かれ、自分の目標をはっきり自覚し、真のマルクス主義的世界観で教育する組織へと、労働者を結束させる仕事である。

ここで、すこしばかり本題からそれるけれども、おこりうる誤解を避けるために、ついでに次のことを指摘しておこう。パンネコックは、彼の分析を例証するために、もっぱら西ヨーロッパの歴史、とくにドイツとフランスからとった例にたよっており、ロシアのことは全然考慮していない。ときには彼がロシアのことを暗示しているように見えるとしても、それは、ロシアと西欧のあいだに文化や、生活や、歴史と経済のうえで非常な相違があるにもかかわらず、マルクス主義的戦術にたいする特定の背反を生みだす基本的な諸傾向がわが国にも現われているということによるものにすぎない。

最後に、労働運動の参加者のあいだに意見の相違を生みだす、きわめて重要な原因となっているのは、一般に支配階級の、とくにブルジョアジーの、戦術の変化である。もしブルジョアジーの戦術がつねに一律のもの、すくなくともつねに同種のものであるなら、労働者階級は、同じようにつねに一律の戦術、あるいは同種の戦術でこれにこたえることを、急速に学びとるであろう。実際には、すべての国でブルジョアジーは、かならず二つの統治方式、自分たちの利益のためにたたかい自分たちの支配をまもる二つの方法をつくりあげるのであって、その場合この二つの方法は、ときにはたがいに交替しあい、ときにはいろいろの組合せでからみあっている。その第一は、暴力の方法、労働運動にすこしの譲歩をあたえることも拒否する方法、いっさいの古い、寿命のすぎた諸制度を維持する方法、非妥協的に改良を否認する方法である。これが保守的政策の本質であるが、西ヨーロッパでは、この政策はますます地主階級の政策ではなくなって、ますますブルジョア一般の政策の一変種となろうとしている。第二の方法は、「自由主義」の方法、政治的権利をひろげる方向へ、改良、譲歩、等々の方向へ、歩みをすすめる方法である。

ブルジョアジーが一つの方法から他の方法にうつるのは、個々の人物のたくらみや、偶然によるものではなく、彼ら自身の地位が根本的に矛盾にみちているためである。正常な資本主義社会は、代議制度を確立せずには、住民にある程度の政治的権利をもたせずには、比較的高い「文化的」要求をもっていることを特徴としないわけにはいかない。こういうふうなある最小限の文化性の要求は、高度の技術、複雑さ、屈伸性、可動性、世界的競争の急速な発展、等々をともなう資本主義的生産様式そのものの諸条件によって生みだされる。この結果、ブルジョアジーの戦術に動揺がおこり、暴力の方式から見せかけの譲歩の方式にうつっていくことは、この半世紀のすべてのヨーロッパ諸国の歴史に固

有のことであり、そのさい、いろいろの国が、ある特定の時期にはどちらか一つの方法の適用をおもに発達させる。たとえば、一九世紀の六〇年代と七〇年代のイギリスは「自由主義的な」ブルジョア政策の典型的な国であったし、七〇年代と八〇年代のドイツは暴力の方法をとった、等々。

ドイツで暴力の方法が支配的であったときに、ブルジョア的統治のこの一つの方式の一面的な反響が、労働運動におけるアナルコ－サンディカリズム、または――当時の呼び方でいえば――無政府主義の成長であった（九〇年代のはじめの「青年派」(九二)、八〇年代のはじめのヨハン・モスト(九三)）。一八九〇年に「譲歩」への転換が始まったとき、いつものように、この転換は労働運動にとっていっそう危険なものとなり、ブルジョア「改良主義」の同じく一面的な反響を生みだした。労働運動における日和見主義がそれである。パンネコックは言っている。「ブルジョアジーの自由主義的政策の積極的、現実的な目的は、労働者をまよわせ、労働者のなかに分裂をもちこみ、労働者の政治活動を、無力な、つねに無力で、はかない、えせ改良主義の無力な付属物に変えることにある。」

ブルジョアジーは、「自由主義的」政策を手段として、しばしばある期間その目的を達する。この政策は、パンネコックの正しい評言によれば、「より巧妙な」政策である。ときによると、労働者の一部、労働者の代表者の一部が、表面的な譲歩にだまされる。修正主義者は、階級闘争の学説は「古くさくなった」と宣言したり、事実上階級闘争を放棄することになるような政策を遂行しはじめたりする。ブルジョア的戦術のジグザグは、労働運動内の修正主義をつよめて、しばしば、労働運動の内部の意見の相違を直接の分裂にたちいたらせる。

以上に指摘したような原因はすべて、労働運動の内部に、プロレタリアートのあいだに、戦術上の意見の相違をひきおこす。しかし、プロレタリアートと、これに隣りあう、農民をふくめた小ブルジョアジーの諸層とのあいだには、万里の長城〔絶対的な隔絶〕はないし、またありえない。個々の人物、集団、層が小ブルジョアジーからプロレタリアートにうつるなら、逆にそのことがプロレタリアートの戦術に動揺を生みださざるをえないのは、当然である。

いろいろの国の労働運動の経験は、具体的な実践問題にもとづいてマルクス主義的戦術の本質を明らかにするのをたすけ、より若い国々がマルクス主義にたいする背反の真の階級的意義をいっそうはっきり見わけ、これらの背反といっそう首尾よくたたかうのをたすける。

『ズヴェズダ』(九四)第一号、一九一〇年一二月一六日

マルクス主義の歴史的発展の若干の特質について

われわれの学説は、教条(ドグマ)ではなくて、行動の指針である。——エンゲルスは、自分自身について、また自分の有名な友について、こう言った。この古典的な命題のなかには、マルクス主義のいつも見失われている側面が、すばらしく力強く、意味深長に強調されている。これを見失うと、われわれは、マルクス主義を一面的な、かたわの、死んだものにしてしまう。マルクス主義からその生きた魂をひきぬいてしまう。その根本的な理論的基礎——弁証法、あらゆる面を包含する、矛盾にみちた歴史的発展についての学説——を掘りくずしてしまう。歴史が新しく転換するたびに変化する可能性のあるその時代の特定の実践的な任務と、マルクス主義との結びつきを破壊してしまうのである。

そして、ほかならぬ現在、マルクス主義のまさにこの側

署名——ヴェ・イリイン
全集、第五版、第二〇巻、六二—六九ページ所収
邦訳全集、第一六巻、三六四—三六九ページ所収

面を見失っている人々が、ロシアにおけるマルクス主義の運命に関心をもつ人々のあいだでとりわけ多く見いだされるのである。ところが、だれにも明らかなように、最近の数年間、ロシアではきわめて急激な変動がおこり、そのため異常な速さと異常な激しさとで情勢が、すなわち行動の条件と、したがってまた行動の任務を最も当面直接に決定する社会的＝政治的情勢が、変化した。ここで言っているのは、もちろん、階級間の基本的関係が変わらないかぎり、歴史に転換が起こっても変わることのない一般的、基本的な任務のことではない。ロシアの経済的（経済的だけではないが）進化のこの一般的な方向が、ロシア社会の諸階級間の基本的関係と同じように、たとえば最近の六年間に変わらなかったことは、まったく明らかである。

しかし、この期間に、当面の、直接的な行動の任務は、具体的な社会的＝政治的情勢が変化したのと同じように、非常に大きく変わった。したがって、生きた学説としてのマルクス主義においても、その異なった側面が前面におしだされないわけにはいかなかった。

この考えを明らかにするために、最近六年間の具体的な社会的＝政治的情勢の変化がどのようなものであったかを見ることにしよう。この時期が、三年ずつの二期に分かれることは、すぐにわかる。一つは、だいたい一九〇七年の夏に終わる時期であり、他は、一九一〇年の夏に終わる時期である。はじめの三年間の特徴は、純理論的な見地からすれば、ロシアの国家制度の基本的な諸特徴が急速に変わったという点、しかも、これらの変化の進行がきわめて波瀾に富み、両側への振動の幅がきわめて大きかったという点にある。「上部構造」におけるこれらの変化の社会的＝経済的土台であったのは、ロシア社会のすべての階級が、歴史上めったに見られないほど公然と、堂々と、大衆的に、多種多様な活動場面（国会および国会外の活動、出版、結社、集会など）で行動したことである。

これに反して、あとの三年間の特徴は、――繰りかえして言うが、われわれはここでは、純理論的・「社会学的」な見地にかぎっている――ほとんど停滞といっていいほどの緩慢な進化である。国家制度には、多少ともめだった変化は、まったくおこらなかった。まえの時期に諸階級の公然たる、多面的な行動が展開されていた「舞台」の大部分で、そうした行動はまったくなかったか、あるいはほとんどなかった。

この二つの時期で似ている点は、ロシアの進化が、このどちらの時期をつうじても、依然として、まえと同じ資本主義的進化であったということである。資本主義的な経済的進化と幾多の封建的・中世的制度の存在との矛盾は、と

りのぞかれず、これまた以前のままであった。なにかかにかの個々の制度にいくらか部分的なブルジョア的内容が浸透したことは、この矛盾をやわらげるどころか、むしろ激しくしたのである。

この二つの時期の違いは、はじめの時期には、さきに述べた急速な、波瀾に富んだ変化の結果がまさにどういうものになるかという問題が、歴史的行動の前景にでていたという点にある。これらの変化の内容は、ロシアの進化が資本主義的性格をもっている以上、ブルジョア的なものにならないわけにはいかなかった。しかし、ブルジョアジーにもいろいろある。多かれすくなかれ穏健な自由主義の立場をとっている中ブルジョアジーと大ブルジョアジーは、彼らの階級的地位そのものからして、急激な変化をおそれ、農業制度においても政治的「上部構造」においても、古い制度のかなり多くの残存物を温存しようとつとめた。農村の小ブルジョアジーは、「自分の手の労働によって」生活する農民とからみあっているので、あらゆる中世的遺物の存在する余地のはるかに少ない、別種のブルジョア的改革をめざさないわけにはいかなかった。賃金労働者は、自分たちの周囲の出来事にたいして意識的な態度をとるかぎり、二つの異なった傾向のこの衝突にたいして、一定の態度を決めないわけにはいかなかった。これらの傾向は二つともブルジョア制度の枠内にとどまっていたとはいうものの、これら二つの傾向の規定するブルジョア制度の形態はまったく異なっており、その発展の速さはまったく異なっており、またその進歩的影響の及ぶ範囲は異なっていたのである。

こうして、過ぎさった〔はじめの〕三年間の時期に、ふつう戦術問題とよばれる諸問題がマルクス主義の前景におしだされたことは、偶然ではなくて必然であった。あらゆる種類の道標派[三]がそう考えているように、これらの問題をめぐっておこった論争と意見の不一致が、あたかも「インテリゲンツィア」の論争であり、「未成熟のプロレタリアートを獲得しようとする勢力争い」であり、「インテリゲンツィアのプロレタリアートへの順応」をあらわすものであったかのようにみる見解ほど、誤ったものはない。反対に、この階級〔プロレタリアート〕が成熟していたからこそ、彼らは、ロシアの全ブルジョア的発展の二つの異なった傾向の衝突に無関心ではいられなかったのであり、この階級のイデオローグたちは、これらの異なった傾向にそれぞれ対応した（直接または間接に、その直接の反映としてか、または逆の反映として）理論的定式をあたえないわけにはいかなかったのである。

あとの三年間には、ロシアのブルジョア的発展の異なっ

た傾向の衝突は、日程にのぼらなかった。なぜなら、これらの傾向は、二つとも「野牛」〔極反動派〕によってうちひしがれ、うしろへおしかえされ、内部へ追いこまれ、しばらくのあいだ口をふさがれたからである。この中世的な野牛どもは、たんに前景に立ちふさがったばかりでなく、ブルジョア社会のきわめて広範な層の心を道標派の気分で、意気消沈と変節の精神でみたした。古いものを改革する二つの方法の衝突ではなしに、あらゆる改革にたいする信念の喪失、「柔和」と「懺悔」の精神、反社会的な諸学説への心酔、神秘主義の流行など、——表面に現われたのは、まさにこうしたものであった。

そして、この驚くほどの急激な変化は、偶然でもなければ、「外部からの」圧迫だけの結果でもなかった。まえの時期には、それまで幾世代にも、幾世紀にもわたたって政治問題のそとに立ち、政治問題とは縁のなかった住民の諸層がきわめて深くゆりうごかされたので、「あらゆる価値の再評価」が、基本的な諸問題についての新たな研究が、理論への、初歩の知識への、初歩から始める学習への新たな興味が、自然に、不可避的に、わいてきた。いきなり長い眠りからよびさまされ、いきなり、きわめて重大な問題に直面させられた幾百万の人々は、長いあいだこのような高度の水準にとどまっていることができなかった。彼らは、息抜きなしではすまされなかったし、初歩的な問題に立ちかえらないではいられなかった。また、これまでにないほどいっそうかな教訓の「消化」をたすけ、比較にならないほどいっそう広範な大衆が、ふたたび、しかもこんどははるかに確固とした、意識的な、確信にみちた、一貫した態度で前進することを可能とするような、新しい準備教育なしには、やっていけなかった。

歴史的発展の弁証法は、まさに次の点に現われた。すなわち、第一の時期には、この国の生活のあらゆる分野で直接的改革の実現が日程にのぼったが、第二の時期には、経験を消化すること、いわば基底の層へ、諸階級のおくれた隊列のなかへ、その経験を浸透させることが日程にのぼったのである。

マルクス主義は、死んだ教条ではなく、なにか完結した、できあがった、不変の学説ではなくて、行動の生きた指針であるからこそ、だからこそ、マルクス主義は、社会生活の諸条件の驚くほど急激な変化をそれ自身のうえに反映しないわけにはいかなかったのである。この変化の反映が、深刻な分解、混乱、あらゆる動揺、一言でいえば、マルクス主義のきわめて重大な内部的危機であった。この分解にたいして決然と抵抗し、マルクス主義の原理をまもるため

に、断固とした、ねばりづよい闘争をすることが、ふたたび日程にのぼった。自分の任務を定式化するのにマルクス主義を避けるわけにはいかない諸階級のきわめて広範な諸層は、まえの時期にはマルクス主義をきわめて一面的な、かたわなかたちでとりいれた。彼らは、あれこれの「スローガン」や、戦術上の諸問題にたいするあれこれの解答をまる暗記して、これらの解答のマルクス主義的な基準を理解しなかった。社会生活のいろいろの分野での「あらゆる価値の再評価」の結果、マルクス主義の最も抽象的で一般的な哲学的原理が「修正」されるにいたった。さまざまな観念論的色合いのブルジョア哲学の影響は、マルクス主義者のあいだでのマッハ主義(三)の大流行となって現われた。暗記はしたが、理解もせず、よく考えてもみなかった「スローガン」が繰りかえされたことは、空文句がひろく普及する結果になった。この空文句は、事実上、おおっぴらな「召還主義(四)」や、はずかしがりの「召還主義」、または召還主義をマルクス主義の「正当な考えの一つ」と認める立場のような、まったく非マルクス主義的な、小ブルジョア的潮流に帰着するものであった。

他方では、ブルジョアジーのきわめて広範な諸層をとらえた道標主義の精神、変節の精神は、マルクス主義の理論と実践を「穏健ときちょうめんさ」の川床にひきいれようと努力している潮流のなかにも浸みこんだ。ここでいまなおマルクス主義的であるのは、「階層制度(ヒエラルキー)」、「ヘゲモニー」その他についての、徹頭徹尾自由主義的な精神で貫かれた議論をつつんでいる用語だけである。

もちろん、これらの議論を検討することは、けっしてこの論文の任務ではありえない。マルクス主義がいま際会している危機の深さ、それと現在の時期の社会的＝経済的全情勢との関連について以上に述べた事柄を例証するには、これらの議論を指摘するだけで十分である。この危機によって提起された諸問題を忌避することはできない。空文句でこれらの問題をかたづけようとすることほど、有害で無原則的なことはない。マルクス主義のいろいろな「同伴者」にブルジョアジーの影響をひろめるというやり方で、まったく相反する両側からゆがめられている、マルクス主義の理論的原理とその根本的諸命題を擁護するために、この危機の深さと、それにたいして闘争する必要とを意識したすべてのマルクス主義者が結束することほど、重要なことはない。

さきの三年間は、きわめて広範な諸層を決起させて、社会生活に意識的に参加させたが、彼らのうちにはいまはじめて本格的にマルクス主義を知りはじめているものが、まれでない。ブルジョア新聞は、この点について、いままで

よりはるかに多くの謬見をつくりだし、これをいっそう広範にひろめている。このような諸条件のもとでは、マルクス主義の内部の分解はとくに危険である。だから、現在この分解が避けがたい理由を理解し、これと徹底的に闘争するために結束をかためることは、マルクス主義者にとって、最も直接の、正確な意味で、時代の急務なのである。

『ズヴェズダ』第二号、一九一〇年一二月二三日
署名――ヴェ・イリイン
全集、第五版、第二〇巻、八四―八九ページ所収
邦訳全集、第一七巻、二六―三一ページ所収

農奴制崩壊五〇周年

一九一一年二月一九日で、ロシアにおける農奴制崩壊(六三)の日から五〇年になる。いたるところで、この記念日を祝う準備がおこなわれている。ツァーリ政府はあらゆる手段をつくして、教会と学校で、兵営と公開講演会で、いわゆる農民「解放」についての、もっぱら黒百人組的な見解を説いてまわった。ありとあらゆる施設は、第三国会の最も反動的な政党の一つである「国民クラブ」(六四)が発行するもの以外、どんな書物や小冊子も、人民のあいだにひろめるために注文してはならないという通達が、ペテルブルグから大急ぎでロシア全国にくばられている。いくつかの地方の熱心な知事たちは、警察の「指導」をうけずにもうけられた(たとえばゼムストヴォの)農民「解放」記念祝典委員会を解散するというようなことまでやった。――つまり、この祝典を、黒百人組の政府が要求するようなやり方でおこ

なう準備が不足しているという理由で、解散しているのである。

政府は不安を感じている。あれこれの労働者または農民が、どんなにうちひしがれ、おどおどしており、どんなに無自覚で、無知であっても、やはりなお半世紀まえに農奴制の廃止が宣言されたことを思いだすだけで、地主の、且那がたの国会によっておさえつけられ、以前にもまして、農奴主的地主と彼らの警察および官僚どもの専横、暴力および圧制によって、いっそうひどく苦しめられている人民をめざめさせ、ふるいたたせずにはおかないということを、政府は知っているのだ。

西ヨーロッパ諸国では、農奴制の最後の残存物は、フランスでは一七八九年の革命によって、そのほかの大多数の国では一八四八年の革命によって一掃された。一八六一年のロシアでは、幾百年も地主の奴隷となっていた人民は、自由をめざす広範な、公然たる、自覚した闘争に立ちあがる能力をもたなかった。この時代の農民蜂起は、依然として孤立した、ばらばらな、自然発生的な「一揆」にとどまっていたので、たやすく鎮圧されてしまった。農奴制の廃止は、蜂起した人民の手でおこなわれたのではなくて、クリミア戦争(六)の敗北後、農奴制を維持していくことがまったく不可能であることをさとった政府の手でおこなわれた。

ロシアでは、地主自身が、専制的ツァーリの地主政府とその官吏が、自分で農民を「解放」した。そしてこれらの「解放者」は、農民がまるはだかの貧乏におとされて「自由」の身となり、地主の奴隷から、おなじ地主とその子分の債務奴隷となるように、事をはこんだのである。

高貴な地主諸公は、ロシアの農民を「解放する」にあたって、農民の土地の五分の一以上を地主のために切りとった。農民は、自分たちが汗と血をそそいでたがやしてきた農民自身の土地にたいして買取金を、すなわちきのうの奴隷主にたいする年貢を、支払う義務を負わされた。農民は、農奴主にたいして、この幾億ルーブリという年貢を支払い、ますます零落していった。地主は、農民の土地をかすめとっただけでなく、また最も悪い、しばしばまったく役にたたない土地を農民に割りあてただけでなく、たえず罠をしかけた。すなわち農民の手に、あるいは放牧地が、あるいは草地が、あるいは森林が、あるいは水飼場がのこらないように土地を区画したのである。ロシア本部〔ヨーロッパ・ロシア〕の大部分の県では、農民は農奴制廃止後でも、あいかわらず地主にたいする昔のままの、活路のない債務奴隷の状態にとどまっていた。農民は解放後もあいかわらず「最下層」の身分であり、税金をおさめる畜生(フイドロ)であり、平民であって、地主が任命した郡政長(七)は彼らを愚弄し、彼ら

から税金をびしびし取り立て、彼らを笞でうち、手でなぐりつけ、彼らに乱暴のかぎりをつくしたのである。

農民が「解放」後にも、ロシアで味わったほど零落、貧困、卑下、侮辱を味わった国は、世界のどこにもない。

しかし農奴制の崩壊は、全人民をふるいたたせ、彼らを長い眠りから呼びさまし、みずから活路をみいだし、みずから完全な自由をめざしてたたかうことを、彼らにおしえた。

農奴制の崩壊後、ロシアには、ますます急速に都市が発達し、工場が増加し、鉄道が敷設された。農奴制ロシアにかわって、資本主義ロシアが現われた。定着し、うちひしがれ、自分の村にすっかり根をはやしてしまった、僧侶を信じ、「司政長」をおそれる農奴的農民にかわって、都市へ出稼ぎに行き、渡り鳥生活や賃仕事の辛い体験からなにかを学びとった農民の新しい世代が成長してきた。大都市の工場では、労働者の数はますます増加していった。しだいに、資本家および政府との共同闘争のために、労働者の団体が形づくられるようになった。この闘争をおこなうことによって、ロシアの労働者階級は、幾百万の農民が立ちあがり、背をまっすぐにのばし、農奴の習慣をはらいおとすのをたすけた。

一八六一年には、農民は「一揆」をおこすことしかできなかった。一八六一年以後の数十年間、ロシアの革命家たちは人民を闘争に立ちあがらせようと英雄的に努力はしたが、しかしやはり孤立したままであり、専制の攻撃のもとにたおれていった。一九〇五年ごろまでに、ロシアの労働者階級は、長いあいだのストライキ闘争のなかで、社会民主党がおこなった長いあいだの宣伝、扇動、組織活動のなかで、たくましくなり、成長した。そして労働者階級は、全人民を、幾百万の農民を、革命に導いた。

ツァーリの専制は、一九〇五年の革命によってその力を弱められた。この革命は、ロシアではじめて、思い出すのもいまいましい農奴制におさえつけられた百姓の群集のなかから、自分たちの権利を理解しはじめ、自分たちの力を感じはじめた人民をつくりだした。一九〇五年の革命は、幾百万、幾千万の人々が市民になりつつあること、戦士になりつつあること、自分を役畜や賤民のようにこき使うのを許さないことを、はじめてツァーリ政府に、ロシアの地主に、ロシアのブルジョアジーに、見せつけた。ところで、圧制と専横からの大衆の真の解放が、これらの大衆自身の自主的な、英雄的な、自覚した闘争によらずに達成されたことは、いまだかつて世界のどこにもないのである。

一九〇五年の革命は専制にきずをつけただけで、これを打ちたおすにはいたらなかった。専制はいまや人民に報復

しつつある。地主の国会は、圧制と抑圧をますます強めつつある。不満と憤激は、ふたたびいたるところで増大しつつある。第一歩につづいて、第二歩がふみだされるであろう。闘争がはじまったからには、そのつづきがおこるであろう。一九〇五年の革命につづいて、新しい第二の革命が進行している。農奴制崩壊の記念日は、この革命を思いおこさせ、この革命を呼びかけている。

われわれには「第二の二月一九日」が必要だ、と自由主義者たちは泣きごとを言っている。うそだ。そんなことを言うのは、ブルジョアの臆病者だけである。一九〇五年の革命のあとでは、第二の「二月一九日」はありえない。下から闘争することを学んだ（また学びつつある）——地主的な第三国会の経験にもとづいて学びつつある）人民を、「上から解放する」ことはできない。たとえ一度でも革命的プロレタリアートが人民の先頭に立って行動したからには、その人民を「上から解放する」ことはできない。

黒百人組にはこのことがわかっており、またわかっているからこそ、一八六一年の記念日をおそれているのである。ツァーリの黒百人組の忠実な番犬メンシコフは、新聞『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(九〇)にこう書いた。「一八六一年は、一九〇五年を未然にふせぐことができなかった」と。

黒百人組的国会とツァーリ政府が敵を狂暴に追及しても、それらは新しい革命を未然にふせぐどころか、かえって革命をはやめている。一九〇八—一九一〇年の苦しい経験は、人民に新しい闘争を教えている。労働者の夏（一九一〇年）のストライキのあとにつづいて、学生の冬のストライキがはじまった。新しい闘争が、もりあがりつつある。われわれが望んでいるよりもおそいかもしれないが、しかし確実に、不可避的にもりあがりつつある。

革命的社会民主主義派は、革命と労働者階級の非合法党とに背をむけた不信の徒を一掃しながら、きたるべき偉大な闘争にそなえて自分たちの隊列をととのえ、その力を結集しつつある。

『ラボーチャヤ・ガゼータ』第三号、一九一一年二月八（二一）日
全集、第五版、第二〇巻、一三九—一四二ページ所収
邦訳全集、第一七巻、七七—八〇ページ所収

ロシア社会民主党内の改良主義

すべての文明国における最近数十年間の資本主義の巨大な進歩と、労働運動の急速な成長とは、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの従来の態度に、大きな変化をもたらした。欧米のブルジョアジーは、私有財産の完全な不可侵性と競争の自由の名において社会主義のすべての基本的命題と公然と原則的に闘争するかわりに、その思想家イデオローグと政治家をつうじてますます社会革命の思想に反対し、いわゆる社会改良の擁護にのりだしている。自由主義対社会主義ではなくて、改良主義対社会革命――これが、現代の「すすんだ」教養あるブルジョアジーの定式である。そして、ある国の資本主義の発展が高度であればあるほど、ブルジョアジーの支配が純粋であればあるほど、政治的自由が大きければ大きいほど、「最新の」ブルジョア的スローガン――革命対改良というスローガン、ブルジョアジーの権力の革命的転覆に対抗して労働者階級を分裂させ、よわめるための、ブルジョアジーの権力を維持するための、ほろびゆく体制の部分的つくろいというスローガンの適用範囲はますます広範になっていく。

社会主義の世界的発展という見地からみれば、ここに述べた変化は、大きな一歩前進と見なさざるをえない。はじめ、社会主義はその存立のためにたたかっていた。そしてこれに対抗するものは、自信をもって経済的、政治的見解のまとまった体系としての自由主義を大胆に首尾一貫して擁護していたブルジョアジーであった。社会主義は成長した。それはすでに全文明世界にわたって、その生存権をまもりぬいた。それはいまでは権力のためにたたかっている。そして、解体しつつあり、自分の滅亡の不可避的なことをさとっているブルジョアジーは、中途半端な、偽善的な譲歩を代償として、この滅亡をおくらせ、新しい諸条件のもとでも権力を自分の手に保とうと必死に努力している。

労働運動の内部における改良主義と革命的社会民主主義との闘争の激化は、世界のすべての文明国の経済的政治的環境全体に前述の変化がおこったまったく不可避的な結果である。労働運動が成長すれば、その支持者のなかには、ある数の小ブルジョア分子が不可避的にひきいれられてくる。これらの小ブルジョア分子は、ブルジョア・イデオロ

ギーに盲従していて、それから解放されることはなかなか困難であり、しかもたえず新しくこのイデオロギーにとらえられている。この闘争なしには、——プロレタリアートの社会革命にさきだって、社会主義的「山岳党」(九)と社会主義的「ジロンド党」(一〇)とのあいだに明瞭な原則的な一線を画することなしには、——この革命の期間中に、新しい歴史的勢力の日和見主義的・小ブルジョア的分子と、プロレタリア的・革命的分子との完全な決裂を実現することなしには、プロレタリアートの社会革命は、考えることさえできない。

ロシアでも、事情は本質的にいって変わらない。しかし、われわれがヨーロッパに(それどころか、アジアの先進的な部分にくらべてさえ)立ちおくれており、われわれがまだブルジョア革命の時代をとおっている結果として、事態は複雑にされ、ぼかされ、変形されている。そのために、ロシアの改良主義はとくに根づよいことを特徴としており、いわばいっそう悪質な病気となっていて、プロレタリアートの事業と革命の事業にはるかに大きな害毒をながしている。わが国では改良主義は、同時に二つの源泉から生じている。第一に、ロシアは西ヨーロッパ諸国よりはるかに小ブルジョア的な国である。だからわが国では、あらゆる小ブルジョアジーに特有の、あの社会主義にたいする矛盾した、移り気な、動揺的な態度(あるときは「熱烈な愛」、あるときは卑劣な裏切り)を特徴とする人々、集団、潮流が、とくに頻繁に現われる。第二には、わが国の小ブルジョアジーの大衆は、わがブルジョア革命のなにか一局面に失敗がおこるたびに、だれよりも容易に、またいちはやく士気を沮喪し、裏切り的な気分に陥りやすく、ロシアから中世的制度と農奴制のあらゆる遺物を徹底的に一掃する完全な民主主義的変革の任務を、だれよりもはやく放棄する。

第一の源泉には、くわしくは立ちいるまい。わがストルーヴェ、イズゴーエフ、カラウーロフ、その他等々の諸君にみられるほどはやく、社会主義にたいする共鳴から反革命的自由主義にたいする共鳴への「転向」が生じた国は、おそらく、世界中に一つもあるまいということを、注意しておこう。しかも、この諸君は、例外ではなく、ばらばらの個人ではなく、広くひろまった潮流の代表者なのだ!社会民主党の隊列の外にたくさんいるが、しかしその内部にもまたすくなくないセンチメンタルな人々は、「過度の」論戦や「一線を画することへの熱情」等々に反対するよう説教することがすきであるが、そういう人々は、ロシアではどのような歴史的条件が、社会主義から自由主義への飛躍にたいする「過度の」「熱情」を生みだしているかを、

まったく理解していないことをみずから暴露しているのである。

ロシアにおける改良主義の第二の源泉にうつろう。

わが国ではブルジョア革命は完成していない。専制は、この革命が遺言した、そして経済的発展の客観的過程全体によって課せられている任務を、新しいやり方で解決しようと試みているが、しかしこの任務を解決することは専制にはできない。旧ツァーリズムを新しい装いのブルジョア君主制に転化する方向にふみだされた新しい一歩も、貴族とブルジョアジーの上層とを全国的規模で組織したことも（第三国会）、農民司政長(二七)によって遂行されているブルジョア農業政策も、――これらの「極端な」措置も、ツァーリズムが自分にのこされた最後の舞台、ブルジョア的発展に順応しようとする舞台ではらったこれらの「最後の」努力もみな、不十分である。そんなことをしても、どうにもならない！　このような方法で「革新されつつある」ロシアは、日本人に追いつけないばかりでなく、おそらくは中国にさえ立ちおくれはじめているのだ。ブルジョア民主主義的諸任務が未解決なために生じる革命的危機は、依然として不可避的である。それはあらたに成熟しつつある。われわれはふたたびこの危機にむかってすすんでいる。新しいやり方によってではあるが――以前のようなやり方ではなく、以前のようなテンポではなく、古い諸形態だけではなくて、――しかし、疑いもなくすすんでいる。

プロレタリアートの任務は、このような情勢のなかから、きわめてはっきりとした明確な形で生まれてくる。現代社会で最後まで革命的な唯一の階級としてプロレタリアートは、完全な民主主義的変革のための全人民の闘争、抑圧者と搾取者にたいするすべての勤労者と被搾取者の闘争の指導者となり、主導者（ヘゲモン）とならなければならない。プロレタリアートは、このヘゲモニーの思想を自覚し、それを実行するかぎりでのみ、革命的なのである。この任務を自覚したプロレタリアは、奴隷制に反抗して立ちあがった奴隷である。自分の階級のヘゲモニーの思想を自覚しないか、あるいはこの目標を断念するプロレタリアは、自分の奴隷としての状態を理解しない奴隷である。せいぜいのところ、彼は、自分の奴隷としての状態の改善のためにたたかうだけで、奴隷制の打倒のためにはたたかわない奴隷である。

これからして、わが改良主義の少壮幹部のひとりである『ナーシャ・ザリャー』のレヴィツキー氏が、ロシアの社会民主党は「ヘゲモニーではなくて、階級政党」でなければならないと声明した、あの有名な定式が、最も徹底した改良主義の定式であることは、あきらかである。それだけではない。これは完全に裏切りの定式である。「ヘゲモニ

ーではなくて、「階級政党」だとかたることは、ブルジョアジーの味方にうつること、現代の奴隷である賃金労働者にむかって、自分の奴隷としての状態の改善のためにたたかうがよい、しかし奴隷制の打倒という思想は有害なユートピアだとおもえ！と言っている自由主義者の味方にうつることである。「運動がすべてであり、終極目標は無である」というベルンシュタインの有名な定式を、レヴィツキーの定式と比較してみれば、これが同じ一つの思想の言いかえであることがわかるであろう。どの場合にも、改良だけを承認して、革命を否認することである。ベルンシュタインの定式のほうが広い。なぜなら、これは社会主義革命（すなわち、ブルジョア社会の党としての社会民主党の終極目標）を念頭においているからである。レヴィツキーの定式のほうが狭い。なぜなら、これは、革命一般を否認してはいるが、とくに、一九〇五―一九〇七年に自由主義者にとって最もいまわしかった事柄、すなわちプロレタリアートが、完全な民主主義的変革のための闘争において、人民大衆（とくに農民）にたいする指導権を自由主義者からもぎとったことを否認する点に、主眼をおいているからである。

労働者にむかって、彼らに必要なのは「ヘゲモニーではなくて、階級政党」であると説くことは、プロレタリアートの事業を自由主義者に売りわたすことであり、社会民主主義的な労働者政治を自由主義的な労働者政治とおきかえるように、説くことである。

しかし、ヘゲモニーの思想の放棄は、ロシアの社会民主党内の改良主義の最も粗雑な形態であって、したがって、かならずしもすべての解党主義者が、自分の思想をあえてこのような明確な形で、率直に言いあらわそうとしているわけではない。彼らの一部（マルトフ氏のような）は、真理を愚弄して、ヘゲモニーの放棄と解党主義とのあいだには結びつきがあることを、否認しようとさえ試みている。

改良主義的見解を「基礎づけよう」といういっそう「巧みな」試みは、次のような議論である。ロシアにおけるブルジョア革命は終わった、一九〇五年後には、第二のブルジョア革命、民主主義的変革をめざす第二の全国民的闘争はありえない、だからロシアがいま直面しているものは、革命的危機ではなくて「立憲的」危機であり、労働者階級としては、この「立憲的危機」を土台として自分の権利と利益とを主張することに心をくばるほかには、すべきことはなにもない、と。解党主義者ユ・ラーリンは、『デーロ・ジーズニ』[20]のなかで（それ以前には『ヴォズロジデーニエ』のなかで）、こう論じている。

ラーリン氏はこう書いている、「一九〇五年一〇月はい

ま日程にのぼっていない。」「たとえ国会が廃止されても、それは、革命後のオーストリアにおけるよりも、いっそう急速に復活されるであろう。このオーストリアは、一八五一年に憲法を廃止しながら、九年後の一八六〇年に、なんの革命もなしに」（このことばを注意せよ！）「自分の経済を資本主義的基盤のうえに建てなおした支配階級の最も有力な部分にとってそうするのが利益であったためだけに、その憲法をふたたび承認したのである。」「現在の段階では、一九〇五年におこったような、全国民的な革命運動はありえない。」

ラーリン氏のこうした議論はみな、一九〇八年のロシア社会民主労働党の一二月協議会でダン氏が言ったことばを拡張して言いかえたものにほかならない。「一九〇五年の革命を呼びおこした経済的および政治的生活の基本的諸要因は、作用しつづけている」、「立憲的」危機ではなしに、まさに革命的危機があらたに成長しつつある、と述べている決議――この決議に反対して、解党派の『ゴーロス』の編集者〔ダン〕はこうさけんだ、「彼ら」（すなわちロシア社会民主労働党）は「一度打ちやぶられたところに、押しよせていこうというのだ」と。

ふたたび革命にむかって「押しよせる」こと、うむことなく、変化した事情のもとでも、革命の宣伝のため、労働者階級の勢力に革命の準備をさせるために活動すること――これこそ、改良主義者の見地から見れば、ロシア社会民主労働党の主要な犯罪であり、革命的プロレタリアートの罪過であるのだ。「一度打ち破られたところに、押しよせる」にはおよばない、――これこそ、裏切者や、あらゆる敗北ののちに士気沮喪する人々の分別なのだ。

しかし、ロシアよりも古い、そして「経験に富む」国々の革命的プロレタリアートは、二度も、三度も、四度も、「一度打ちやぶられたところに、押しよせる」能力をもっていた。彼らは（フランスのように）一七八九年から一八七一年までに四回も革命をおこない、最も重大な敗北ののちにさえ、繰りかえし繰りかえし闘争に立ちあがって、共和制をたたかいとる能力をもっていた。彼らは、いまその共和制のもとで、自分の最後の敵――先進的ブルジョアジー――と真正面から対峙している。そして、共和制だけが、社会主義の勝利のための最後的闘争の諸条件に合致した、国家形態となりうるのである。

社会主義者と、自由主義者すなわちブルジョアジーの支持者との相違は、以上のようである。社会主義者は、革命は不可避的であり、プロレタリアートは、新しい革命闘争を準備するために、いっそう広大な舞台で、住民がいっそう発展した状況のもとで、革命を繰りかえすために、社会

生活のすべての矛盾、自分の敵または中間層のあらゆる弱さを利用しなければならない、とおしえる。ブルジョアジーと自由主義者は、革命は労働者に不必要で有害なものであり、労働者は革命にむかって「押しよせる」べきではなく、お利口さんのように、おとなしく改良のために努力すべきである、とおしえる。

だからまた、ブルジョア思想のとりことなっている改良主義者たちは、ロシアの労働者を社会主義からひきはなすために、ほかならぬ六〇年代のオーストリア（ならびにプロイセン）の例をたえず引合いにだす。なぜ彼らには、これらの例が気にいっているのか？ ユ・ラーリンは、その秘密をうっかりしゃべってしまった。それは、これらの国国では、一八四八年の革命が「失敗した」のちに、国のブルジョア的改革が「なんの革命もなしに」なしとげられたからである。

ここに、問題の核心がある！ これこそ、彼らの心を喜びでみたすものである。したがって、ブルジョア的改革は革命なしにでも可能である!! もしそうなら、なんのためにわれわれロシア人は革命について頭をなやます必要があるのか？ なぜ、われわれもまた、「なんの革命もなしに」ロシアのブルジョア的改革をおこなうことを、地主や工場主にまかせてはならないのか!?

プロイセンとオーストリアで、地主とブルジョアジーが、君主制も、貴族の特権も、農村における無権利状態も、その他多くの中世的制度の残存物も保存しながら、労働者の利益に反するやり方で、労働者に最も不利な形で改革をおこなうのを、プロレタリアートが妨げることができなかった原因は、プロレタリアートが弱かったことにあった。

ロシアの改良主義者は、――わが国のプロレタリアートが、一九〇五年に、西ヨーロッパのどのブルジョア革命にもかつて見られなかった力を発揮したあとで――、自分自身の裏切りを弁護するため、自分自身の裏切的説教を「基礎づける」ために、四〇年から五〇年も昔の、他の国々の労働者階級の弱さを例にとるのだ！

わが国の改良主義者がこのんで六〇年代のオーストリアとプロイセンを引合いにだすことは、彼らの議論の理論的破産を証明し、実践的＝政治的に彼らがブルジョアジーの味方にうつったことを証明する最もよい例である。

事実、オーストリアは、一八四八年の革命の敗北のあとでいったん廃止した憲法を復活させ、プロイセンでは「危機の時代」が六〇年代にやってきたが、そのことはなにを証明しているか？ 第一には、これらの国々のブルジョア的改革が完了していなかったことである。ロシアでは権力はすでにブルジョア的なものになったと言い（ラーリンが

言っているように)、いまではわが国の権力が農奴制的な性格をもっていると言ってはならない、と言いながら(同じラーリンの論文を参照せよ)、それと同時に、オーストリアとプロイセンを引合いにだすのは、自分で自分をぶんなぐるというものである！　一般的にいって、ロシアのブルジョア的改革が未完成であることを否定するのは、笑うべきことであろう。カデットやオクチャブリストといったブルジョア政党の政策でさえ、このことをこのうえなく明瞭に証明しているし、ラーリン自身も(のちほど見るように)自分の立場を放棄しているのである。われわれがすでに言ったように、また党の決議(一九〇八年一二月)が認めているように、君主制がブルジョア的発展に適応する道をさらに一歩すすめつつあることは、疑う余地がない。しかし、それよりもっと疑いをいれないことは、この適応でさえも、ブルジョア的反動でさえも、第三国会も、[103]一九〇六年一一月九日(一九一〇年六月一四日)の農業法も、ロシアのブルジョア的改革の課題を解決していない、ということである。

さきへすすもう。なぜ六〇年代のオーストリアとプロイセンにおける「危機」が、「立憲的」危機になって、革命的危機にならなかったか？　それは、一連の特殊事情が君主制の苦境を緩和していたからである(ドイツにおける「上からの革命」、「鉄と血による」ドイツの統合)。それはまた、当時この両国のプロレタリアートがまだきわめて、きわめて弱く、未発達であり、他方、自由主義的ブルジョアジーは、ロシアのカデットにおとらない卑劣な臆病と裏切りとを特徴としていたからである。

当時の事件の体験者であったドイツの社会民主主義者自身、このような事態をどう評価したかを例証するために、昨年その『回想録』(『わが生涯』)の第一部を刊行したベーベルの批評を二つ三つ引用しよう。一八六二年、すなわちプロイセンにおける「立憲的」危機の年についてビスマルクは——後年世に知られるようになったことだが——つぎのように語っている。すなわち、国王は当時極度の意気消沈に陥って、彼ビスマルクにむかって、彼らふたりを絞首台がおびやかしていると泣きごとを言った。ビスマルクは、この臆病者をたしなめ、闘争をおそれないように説きふせた、というのである。

ベーベルは、これについてこう述べている、「これらの事件は、もし自由主義者が事態を利用する能力をもっていたなら、どれほどのものを獲得できたであろうかを、示している。だが彼らは、自分たちの背後に立っている労働者をすでにおそれていた。『もし窮地に追いつめられたなら、私は下界をうごかすであろう』」(つまり、下層社会、大衆

を民衆運動に立ちあがらせるであろう）「と言ったビスマルクのことばは、自由主義者にかぎりない恐怖をおこさせたのである」と。

ドイツ社会民主主義者の指導者は、彼らの国をブルジョア的＝ユンカー的君主制にかえた改革を「なんの革命もなしに」なしとげた「立憲的」危機から半世紀たったのちに、当時の情勢――当時、自由主義者は、労働者をおそれるあまり、この情勢を利用しなかった――の革命性を指摘している。ロシアの改良主義者の指導者たちは、ロシアの労働者にむかって言う、――もしドイツのブルジョアジーが、おじけづいた国王におじけるほどに卑怯であったとすれば、どうしてわれわれもまた、ドイツのブルジョアジーのこのすばらしい戦術をまねようとしてはならないのか、と。ベーベルは、ブルジョアジーが「立憲的」危機を革命のために「利用」しなかったといって、ブルジョアジーを、民衆運動にたいするブルジョアジーの搾取者としての恐怖を非難している。ラーリン一派は、ロシアの労働者がヘゲモニーを（すなわち、自由主義者の意向にさからって大衆を革命にひきいれようと）めざしたといって、彼らを非難し、「革命のためにではなしに」、「きたるべきロシアの立憲的革新にあたって、自分たちの利益を擁護するために」組織をかためるよう、労働者に勧告している。解党派は、くさったドイツ自由主義のくさった見解を、「社会民主主義的な」見解であるかのように見せかけて、ロシアの労働者に提供しているのだ！　それなのに、どうして、このような社会民主主義者をストルィピン社会民主主義者と呼ばずにいられようか？

ベーベルは、プロイセンにおける一八六〇年代の「立憲的」危機を評価するにあたって、ブルジョアジーが労働者をおそれるあまり、君主制と闘争するのをおそれたことを指摘するだけにとどまってはいない。彼はまた、その当時、労働者のあいだでおこっていたことについても、述べている。彼は言う。「政治情勢が耐えがたいものであることは、日をおって労働者にあきらかになっていき、当然彼らの気分にも反映した。だれもかれも変革を要求した。しかし、十分自覚をもち、努力すべき目標をはっきりと見きわめており、また一般の信頼をえている指導分子がおらず、勢力を結集する強固な組織もなかったため、この気分はむなしく発散してしまった（verpuffte）。その本質においてこれほどすばらしい（in Kern vortreffliche）運動が、これほど無効果に終わったことはかつてない。集会はみなあふれるばかりだったし、最も激越に語ったものが時代の英雄となった。とくにライプチヒの労働者教育協会にはこのような気分がみなぎっていた。」一八六六年五月八日にライプ

チヒでひらかれた五千人の集会では、リープクネヒトとベーベルの提出した決議が満場一致で可決されたが、その決議は、普通・直接・平等・秘密の選挙にもとづく議会、全人民の武装によって支持される議会の召集を要求し、また「ドイツ人民は、あらゆる世襲の中央権力を否認する人々だけを議員に選出するであろうという期待」を表明したものであった。したがって、リープクネヒトとベーベルの決議は、完全に明確な共和主義的・革命的なものだったのである。

このように、ドイツの社会民主主義者は、「立憲的」危機にさいして大衆的集会で共和主義的・革命的な決議を通過させている。半世紀ののち、自分の青年時代を回想しながら、はるか昔の出来事を新しい世代にものがたりながら、彼は、当時、十分自覚をもち、革命的任務を理解している指導分子が現実にいなかったこと（すなわち、ヘゲモニーの任務を理解している革命的社会民主党が存在していなかったこと）、強力な組織がなかったこと、革命的気分が「むなしく発散した」ことを、最も遺憾なこととしてまず第一に強調しているのである。[102] ところが、ロシアの改良主義者の指導者たちは、イワンの馬鹿さながらの考え深さで「なんの革命もなしに」やっていけることを証明するために、六〇年代のオーストリアとプロイセンを引合いにだしている！　しかも、反革命の乱暴ぶりに屈服して、思想的に自由主義の奴隷となった、このようなけちな俗物連中が、いまだにロシア社会民主党の名をあえて恥ずかしめているのだ！

社会主義と絶縁した改良主義者のうちには、ラーリンのような率直な日和見主義のかわりに、労働運動の最も重要な原則的諸問題にはふれないで、外交術策を弄する人々がいることは、いうまでもない。そういう連中は、問題の本質を混乱させ、思想上の論争をぶちこわし、それをけがしている。たとえばマルトフ氏がそれであって、彼は合法的な出版物のなかで（つまり、ロシア社会民主労働党の党員の直接の反撃をこうむらないように、ストルィピンによってまもられながら）、まるでラーリンと「一九〇八年の諸決議」をだした「正統派ボリシェヴィキ」とが同一の「図式」をあたえているかのように、主張しようとしたのである。これは、真実をまっこうから歪曲したもので、けがらわしい著作の筆者にふさわしいやり方である。この同じマルトフは、ラーリンとみせかけの論争をやりながら、出版物の紙上でこう声明した。「もちろん私は、ラーリンが改良主義的傾向をもっているのではないかと、疑っているわけではない」と。マルトフは、正真正銘の改良主義的見解を述べているラーリンが、改良主義的ではないかと疑って

いるわけではないのだ!! ――これは、改良主義の外交家の詭計の見本である。* マルトフは、一部のまぬけどもには、ラーリンよりも「左翼的」で、いっそう信頼できる革命家だとおもわれているのだが、この同じマルトフが、ラーリンと彼自身との「意見の相違」をつぎのように要約している。

「要約しよう。依然としてマルクス主義に忠実なメンシェヴィキのいまやっていることを理論的に基礎づけ、政治的に正当化するには、現在の体制が絶対主義と立憲主義との、内的に矛盾した組合せであるという事実、またロシアの労働者階級が、西欧の先進諸国の労働者とおなじように、この体制のこれらの矛盾の弱点をとらえるほど成熟しているという事実をあげるだけで、まったく十分である。」

* 『討論リーフレット』(わが党中央機関紙の付録)第三号に、党擁護派メンシェヴィキのドネヴニツキーが書いている、ラーリンの改良主義とマルトフの逃げ口上とについての正しい批評を参照せよ。

マルトフがどんなに逃げ口上をかまえようとしたところで、要約をあたえようとした最初の試みからして、逃げ口上はみなひとりでに水の泡になる結果になってしまった。ここに引用した文句は、社会主義を完全に放棄して、それを自由主義とすりかえたものである。マルトフは、自由主義者にとってだけ、ブルジョアジーにとってだけ十分である事柄を、「まったく十分である」と宣言している。絶対主義と立憲主義との組合せの矛盾を認めるだけで「まったく十分である」と考えるプロレタリアは、自由主義的な労働者政治の見地に立つものである。そのようなプロレタリアは社会主義者ではない。彼は、自分の階級の任務を理解しなかったのである。この任務とは、ブルジョアジーの動揺または抵抗にもかかわらず、人民大衆を、勤労者と被搾取者の大衆を絶対主義のあらゆる形態に反対して立ちあがらせ、国の歴史的運命に自主的に関与させることにある。そして、ブルジョアジーのヘゲモニーから離脱する大衆の自主的な歴史的行動は、「立憲的」危機を革命に転化させる。ブルジョアジーは(ことに一九〇五年以後は)革命をおそれ、またにくんでいる。プロレタリアートは、人民大衆に革命の思想に献身的な態度をとることをおしえ、革命の任務を説明し、大衆にますます新しい革命的戦闘の準備をさせる。革命がくるかどうか、いつくるか、どんな状況のもとでくるか――それは、あれこれの階級の意志にかかっているものではない。しかし、大衆のあいだでの革命的活動は、けっして跡をのこさずに消えさるものではない。このような活動だけが、大衆に社会主義の勝利を準備させ

る活動である。こうした社会主義のイロハともいうべき初歩的な真理を、ラーリンやマルトフらの諸君はわすれているのである。

ラーリンは、ロシア社会民主労働党とまったく絶縁したロシア解党派の見解を言いあらわすさいに、自分の改良主義を率直に、最後まで言いつくすことをはばからない。つぎに引用するのは『デーロ・ジーズニ』(一九一一年、第二号)からとった彼のことばである。このことばは、社会民主主義の原則をおもんじるすべての人が、記憶にとどめる値うちのあるものである。

「人々が、なにをあすに期待すべきなのか、なにを自分の任務とすべきなのか、まったくわからないときの、あの呆然自失とあやふやな状態——これこそ、漠然たる待機の気分を意味するものであり、革命が繰りかえされるだろうというぼんやりした期待なり、『やがてわかるだろう』というぼんやりした期待なりを、意味するものである。当面の任務は、あてもなく海路の日和を待つことではなくて、次のような指導的思想を広範な階層のなかへ浸透させることである。すなわち、いま到来したロシアの生活の新しい歴史的時期には、労働者階級は、組織をかためなければならないがそれは『革命のため』でもなければ、『革命を期待して』でもなく、単に」……(この単に、に注意せよ……)「生活のあらゆる分野で自分独自の利益をしっかりと、計画的にまもるためであり、この多面的で複雑な活動によって自分の勢力を結集し訓練するためであり、このようにして一般的には社会主義意識を教育し蓄積するためであり、とくに封建的反動の経済的に避けられない自己消耗のあとにきたるべきロシアの立憲的革新にあたって、ロシアの社会諸階級の複雑な相互関係のもとで正しい方向を見いだす(理解する)——そして自分の利益を主張する——能力をもつようになるために、である。」

これこそ、完成された、あからさまの、ひとりよがりの、正真正銘の改良主義者である。革命の思想にたいするたたかい、革命への「期待に」たいするたたかい(改良主義者には、この「期待」はぼんやりしたものに見える、というのは、彼は現代の経済的政治的矛盾の深さを理解しないからである)、革命のために勢力を組織し、知能を訓練するあらゆる活動にたいするたたかい、革命的社会民主主義者の直接の反撃をこうむらないように、ストルィピンによってまもられている合法出版物の紙上でのたたかい、ロシア社会民主労働党からまったく絶縁した合法主義者たちの一グループを代表してのたたかい、——これこそ、ポトレソフ、レヴィツキー、ラーリン一派の諸君がつくりかけてい

るストルィピン労働者党の綱領と戦術である。この連中の真の綱領、真の戦術は、――われわれ「でも社会民主主義者」であるとか、われわれ「でも」「非妥協的なインタナショナル」に所属しているとか、という彼らの偽善的な公の確言とはちがって――、右の引用のうちに正確に表現されている。これらの確言はみせかけの看板である。社会主義をまったく自由主義的労働者政治とおきかえているこの綱領こそ、彼らの行動であり、彼らの現実の社会的本質である。

改良主義者たちがはまりこんだ笑うべき矛盾を見たまえ。もしロシアのブルジョア革命が完成されたのだったら（ラーリンが言うように）、そのときには社会主義革命が日程にのぼるはずである。これは自明のことである。これは、人気のある呼び名で労働者をあざむく目的からではなく、社会主義者と自任しているものには、だれにでもあきらかなことである。その場合には、われわれは、まさに「革命」（社会主義革命）「のために」、まさに革命を「期待して」、まさに社会主義革命への「期待」（ぼんやりしたものではなく、正確な、ますますふえていく科学的資料にもとづいた、確信としての「期待」）のために、自分たちの組織をかためなければならない。

しかし、問題の核心は、改良主義者にとっては、ブルジョア革命が完成されたというおしゃべりは（マルトフにとっては、弱点うんぬんといったおしゃべりがそうであるように）あらゆる革命の放棄を口先でつつみかくすものにすぎないことである。改良主義者は、ブルジョア民主主義革命は完成されたという口実で、あるいは絶対主義と立憲主義との矛盾を認めるだけで「まったく十分だ」という口実で、ブルジョア民主主義革命を放棄し――「さしあたって」われわれに必要なのは「きたるべきロシアの立憲的革新」に参加するために「単に」組織をかためることであるという口実で、社会主義革命を放棄する！

しかし、社会主義者をよそおう、尊敬すべきカデットよ、もし君が、ロシアの「きたるべき立憲的革新」が不可避的であると認めるなら、とりもなおさずわが国におけるブルジョア民主主義革命の未完成を認めることになり、自分で自分をぶんなぐる結果になる。君が、「封建的反動の自己消耗」が不可避的であると論じながらも、封建的反動だけでなく、封建制度のすべての残存物を人民の革命運動によって絶滅するというプロレタリア思想を侮蔑しているのは、自分のブルジョア的本性をまたしても暴露するものである。

わがストルィピン労働者党の立役者たちの自由主義的説教にもかかわらず、ロシアのプロレタリアートは、反革命

期によってよぎなくされた、その苦しい、困難な、日常の、些末な、目だたない活動全体に、つねに、かわることなく、民主主義革命と社会主義革命とにたいする献身の精神を浸透させるであろう。彼らは、革命のために組織をかため、その勢力を結集し、裏切者と変節者に仮借ない反撃をくわえ、「ぼんやりした期待」ではなくて、科学的に基礎づけられた、革命がふたたびやってくるという確信に導かれながら行動するであろう。

『ソツィアル－デモクラート』第二三号、一九一一年九月一四（一）日
全集、第五版、第二〇巻、三〇五―三一八ページ所収
邦訳全集、第一七巻、二三二―二四六ページ所収

党の危機の大詰

二年前には、社会民主主義的出版物の紙上で、党の「統合の危機」についての論議を見いだすことができた〔本書二六―七四ページ〕。反革命期の混乱と崩壊は、新たな諸グループの編成替えと分裂、国外における闘争の新たな激化を呼びおこし、信念が足りないか、あるいは気が弱くて、社会民主労働党の困難な内部事情を見ると元気を失ったものがすくなくなかった。いまや、ロシア組織委員会の結成[108]とともに、危機の終りではないとしても、ともかく党の発展における新しい決定的な好転が、あきらかに近づいている。だから、党内事情の進展のこれまでの段階と近い将来の見通しとを概観しようとする試みは、時宜に適したことであろう。

革命が終わったとき、ロシア社会民主労働党は、三つの、独立した、自治的な、非ロシア民族の社会民主党組織〔ボ

ーランド社会民主党、ラトヴィア社会民主党、ブンド〕と、二つの狭義のロシア人の分派〔ボリシェヴィキとメンシェヴィキ〕となってのこっていた。これらの分派の根がプロレタリアートの発展の諸傾向に、ブルジョア革命のこの当時におけるプロレタリアートの生活状況に、ふかくつながっていることは、波瀾万丈であった一九〇五年、一九〇六年、一九〇七年の経験によって証明された。われわれは、すでに高く登った山から、反革命によってふたたび谷間へと投げおとされた。プロレタリアートは、ストルィピンが絞首台をふりかざし、道標派が泣きごとを言うというような情勢のもとで、隊列を組み直し、新たに力を結集しなければならなかった。

新しい情勢は、社会民主労働党内部の諸傾向の、新たな編成替えを引きおこした。二つの新しい分派の双方から――沈滞期の重圧におされて――社会民主党内の最も確固としていない分子、あらゆる種類のプロレタリアートのブルジョア的同伴者が分かれはじめた。二つの潮流が、社会民主党からのこのような離脱を、最もはっきりと代表している。それは解党主義と召還主義である。それらは、また、双方の分派のなかで、マルクス主義にひきつづき忠実である基本的中核分子がたがいに接近する傾向を、不可避的に引きおこした。一九一〇年一月の総会をひらかせるにいたった事情は、このようなものであった。この総会は、社会民主党の将来の発展におけるプラスとマイナスの出発点、数歩の前進とためらいの後退との出発点となったのである。

総会のおこなった事業の消えることのない思想的功績と、総会のおかした大きな「調停主義的」誤りを、多くの者は今日にいたるまでよく理解していない。だが、それを理解しなくては、現在の党内事情について、まるっきりなにも理解できないのである。だから、われわれは、またしても、現在の危機の出発点を立ちいって解明しなければならない。

当の総会の直前に書かれ、その直後に印刷された、ある「調停主義者」の論文から取りだした、つぎにかかげる引用文は、長たらしい議論や、あるいはいっそう直接的で、いっそう多くの「記録文書」からの引用よりも、はるかにこの解明の助けとなるであろう。総会を支配した「調停主義」の首領株の一人、ブンドの同志イオーノフは、『討論リーフレット』第一号の論文『党の統一は可能か?』のなかでつぎのように書いている(一九一〇年三月一九日付。その六ページに編集局の注として、「この論文は総会のまえに執筆された」とある)。

「召還主義と解党主義が、それ自体としては党にとってどんなに有害であろうとも、分派にたいするその有益な影響は、疑いのないものとおもわれる。病理学上、腫(はれ)

物に悪性のものと良性のものとの二種類あることが知られている。良性の腫物は、身体にとって有益な病気と考えられている。それは、化膿の過程で身体中からいっさいの毒素を自分のところに集め、こうして身体の回復を促進する。私は、メンシェヴィズムにたいしては解党主義が、ボリシェヴィズムにたいしては召還主義＝最後通告主義が、これとおなじような役割を果たしたと思っている。」

　これこそ、総会にさいして「調停主義者」があたえた事態の評価であって、それは、総会で勝ち誇った調停主義の心理と思想を正確にえがきだしている。この引用文にみられる根本の思想は正しい、幾重にも正しい。そしてまさに、それが正しいからこそ、ボリシェヴィキ（すでに総会前から、解党主義にたいしても、召還主義にたいしても、闘争を十分に展開してきたボリシェヴィキ）は、総会で、調停派と決裂することができなかったのである。根本の思想において一致していたからこそ、できなかったのである。意見が相違していた点は、この根本思想の実現の形式にかんすることであった。形式は内容にしたがうとボリシェヴィキは考えていた。そして、彼らは正しかった、——たとえ、この「形式の内容への適応」が、調停派の誤りのために、党から二年間の生活をほとんど「ただで」うばいとったにせよ。

　この誤りはどこにあったか？「腫物」を取りさった潮流、ただそのような潮流だけを（それが腫物を取りさった程度に応じてのみ）正当なものとして認めるかわりに、調停派は、腫物を取りさるという空約束にもとづいて、なんでもかでも正当なものとして認めたという点にあった。フペリョード派も、ゴーロス派も、トロツキーも、召還主義と解党主義とに反対する決議に署名した、——つまり、腫物を「取りさる」ことを約束した、——それで十分だ。調停派は約束を「信用し」、党と、非党的な、彼ら自身の認めるところでは、「腫物的な」グループとを混同した。これは、実際政治からみれば、児戯に等しい行為であり、さらに深い観点からみれば、無思想性、無原則性、策動である。実際、解党主義と召還主義＝最後通告主義が腫物であるとまじめに信じた人々は、腫物が化膿するとともに、身体中から毒素を集め、それを身体の外へ排出させるようにしなければならないことを、理解しないわけにはいかなかったであろう。「腫物」の毒を内攻させることによって、身体の中毒を助けるようなことはできなかったであろう。

　総会後の最初の一年間に、調停派の無思想性が、事実のうえで暴露された。この一年をつうじて、実際に党活動（腫

物の除去と回復）をおこなってきたのは、ボリシェヴィキとプレハーノフ派であった。『ソツィアル－デモクラート』も、『ラボーチャヤ・ガゼータ』（トロツキーが中央委員会の代表を追放した後の）も、この事実を証明している。一九一〇年のいくつかの周知の合法的出版物もまた(102)、この事実を証明している。ここにあるのは、ことばではなくて、まさに事実、すなわち党の指導的機関紙における共同の活動である。

ゴーロス派も、「フペリョード派」も、トロツキーも、この一年間（一九一一年）に、事実上、党をはなれて、まさに、解党主義と召還主義＝最後通告主義とに近づいた。「良性の腫物」も、やはり依然として腫物のままであった。これは悪性な働きをしたので、「毒素」は、党の身体からそれによって取りのぞかれずに、ひきつづきこの身体をおかし、身体を病的な状態にひきとめ、党活動をおこなううえで、この身体を無能力なものとしたのである。この党活動（すべての人々に公開された文献のなかでの）をおこなってきたのは、ボリシェヴィキとプレハーノフ派であった。彼らは、総会のおこなった「調停主義的」諸決議や、総会によって設けられた諸委員会にさからい、ゴーロス派やフペリョード派に反対して党活動をおこなったのであり、これらの連中とともにおこなったのではなかった（なぜなら、解党派や召還派＝最後通告派といっしょに活動するわけにはいかなかったからである）。

だが、ロシア国内の活動はどうか？　一年間に、中央委員会の統一的な会合は一度もひらかれなかった！　なぜか？　なぜなら、ロシア国内の中央委員たち（当然、『ゴーロス・リクヴィダートロフ』(103)の接吻をうけるに値いした調停派）は、やはりなお、解党派を「招請しようとし」、一年間も、一年三ヵ月ものあいだつづけてやったが、一度も彼らを「招請に応じさせる」ことができなかったからである！　残念ながら、善良なわが調停派は総会で、中央委員会への「強制連行」の規定をあらかじめ定めておかなかったのである。総会でボリシェヴィキが、調停派の軽信や幼稚さに反対して予言したような状態が、ほかならぬ、そのようなばかげた、党にとって不面目な状態が生じた。ロシア国内の活動は停滞し、党は束縛され、『ナーシャ・ザリャー』や『フペリョード』の紙上からは、党にたいする忌わしい、自由主義的、無政府主義的な攻撃が滔々と流れでているのだ！　一方では、ミハイル、ロマン、ユーリーなどが(104)、他方では、召還派や創神派が、全力をあげて、社会民主主義活動を破壊しているのに、調停派の中央委員らは、解党派を「招請して」、「待っている」のだ！

一九一〇年一二月五日の「要求書」によって、ボリシェ

ヴィキは、他のすべての分派との協定を破棄すると、公然と正式に声明した。総会で取決められた「和解」の決裂、『ゴーロス』、『フペリョード』、トロツキーによるその決裂は、最後的に認められた事実となった。

それからおよそ半年の期間（一九一一年六月まで）は、協定にもとづいて義務となっていた三ヵ月以内に国外で総会を招集しようとする試みのうちにすぎた。解党派（ゴーロス派――ブンド派――シュワルツ）は、国外の総会をもぶちこわした。そこで、ボリシェヴィキ、ポーランド人、「調停派」の三つのグループのブロックは、事態をすくう最後の試み、すなわち、協議会を招集しロシア組織委員会を創設するという試みをおこなった。ボリシェヴィキは、従来どおり、少数派である。一九一〇年一月から一九一一年六月までは、解党派（中央委員会在外ビューロー[108]では、ゴーロス派――ブンド派の一人――シュワルツ、国内では、解党派を「招請しようとする」「調停派」）が優位を占め、[109]一九一一年六月から一一月一日まで（保管者の仲裁裁判によって定められた期間）は、調停派が優勢であった。ポーランド人同志がその陣営にうつったのである。

問題はつぎのようになった。資金も、受任者の派遣もトィシカとマルク（パリにいる調停派の指導者）の手中にある。ボリシェヴィキにはただ、自分たちをも活動に派遣することが認められているということが、保証されているだけである。総会の引きおこした不一致は、避けることのできなかった最後の点に帰着した。すなわち、だれをも「待た」ず、だれをも「招請」せずに、全力をつくして活動するか（社会民主主義的に活動することをのぞみ、かつ活動しうる者は、招請を必要としない！）、それとも、トロツキー、『フペリョード』などとの取引や再取引をつづけるかである。ボリシェヴィキ[110]は第一の道をえらび、すでにパリでひらいた中央委員の会議で、率直に、明白にこのことを声明した。[111]トィシカ一派は[112]第二の道をえらんだ（そして、技術委員会にも在外組織委員会にもそれをおしつけた）。この第二の道は、客観的には、結局――『ソツィアル-デモクラート』第二四号の小論[113]にくわしく示されているように――空虚で、みじめな策動に帰着したのである。

結果は、いまやすべての人々の目のまえにある。一一月一日ごろまでに、ロシア組織委員会が結成された。実際にこれを創設したのは、ボリシェヴィキと、ロシア国内の党擁護派メンシェヴィ[114]キであった。「二つの強力な（自分の思想的堅固さと、『匪物』を取りさる活動とにおいて強力な）分派の同盟」は、事実となって現われた。――この同盟にたいしては、頭の悪い手合いが、総会でも、総会後[115]にも、ひどく荒れくるって反対したのだが（『ゴーロス』、

『フペリョード』、『オートクリキ・ブンダ』[二五]、『プラウダ』[二六]などを見よ）。バクーやキエフの組織[二七]のように、一九一〇年と一九一一年のロシアにとって模範的な、先進的な社会民主党組織では、ボリシェヴィキにとってきわめて喜ばしいことに、この同盟が党擁護派の社会民主主義者の完全な合同となり、単一の分かちがたい有機体にかわったのである。

「すべての」分派を解散せよという泣き言は、二年間の経験によって点検されたのちには、ポトレソフ氏一派や召還派の諸氏に愚弄された、頭のからっぽな手合いの、みじめな空文句であることが明らかとなった。「二つの強力な分派の同盟」は、そのなすべきことをおこない、――上述の先進的な集団を代表として――単一の党を形成する完全な合同のすぐそばまで近づいた。国外の党擁護派メンシェヴィキの動揺は、この既成の事実をくつがえすには、もはや無力である。

総会ののちの二年間は、任務がきわめて困難であることを理解したがらない社会民主党内の多くの確信のない者やディレッタントには、無益な、活路のない、無意味な喧嘩、分裂、混乱の期間とおもわれているが、それは、解党主義的・召還主義的動揺の泥沼から、社会民主党を正道に引きだす期間であったのである。一九一〇年は、われわれに、党のすべての指導機関（公式、非公式、合法、非合法をとわず）におけるボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキとの共同活動をもたらした。それは、「二つの強力な分派の同盟」の第一歩であり、反解党主義と反召還主義の一つの旗のもとに思想的に準備し、力を結集する一歩であった。一九一一年は、第二歩をもたらした。ロシア組織委員会の創設がそれである。その第一回会議で党擁護派メンシェヴィキが議長をつとめたことは、注目すべき事実である。第二の歩み、実際に活動するロシア国内の中央部の創設は、いまやなしとげられた。機関車は持上げられて、レールの上にのせられたのである。

混乱と離散状態の四年ののちにはじめて、警察の信じられぬほどの迫害と、ゴーロス派、フペリョード派、調停派、ポーランド人 tutti quanti〔その他すべての者〕の前代未聞の「足をすくおうとする行為」にもかかわらず、社会民主党のロシア国内中央部が結成されたのである。国内ではじめて、この中央部から、党内むけのリーフレット[二八]が発行された。諸地方における非合法組織の再建活動が、はじめて（一九一一年七月から一〇月までのほぼ三ヵ月のあいだに）、両首都〔ペテルブルグとモスクワ〕、ポヴォルジエ[二九]、ウラル、カフカーズ、キエフ、エカテリノスラフ、ロストフ、ニコラーエフに、系統的に完全に行きわたった。――

というのは、ロシア組織委員会はこれらの地方をことごとく歴訪したのちに結成されたからであり、その最初の会議は、ペテルブルグ委員会が再建され、それが多数の労働者集会を組織し、モスクワの諸地区で党擁護の決議が採択されたのと同時にひらかれたからである。

もちろん、軽率な楽観にふけるのは、許しがたい幼稚な考えであろう。いまなお巨大な困難がたちはだかっている。警察の追及は、社会民主党中央部の最初のロシア国内版のリーフレットが発行されたのちは、幾重にも強化された。長期かつ困難な歳月が、新たな検挙、活動の新たな中絶が予想される。しかし、主要なことはなしとげられた。旗はかかげられた。ロシア全土の労働者サークルは、その旗をめざして続々と寄ってきた。そしていまでは、どのような反革命の攻撃も、その旗をたおすことはできないであろう！

国内の活動のこの偉大な一歩前進にたいして、国外の「調停派」や、トィシカ、レーデルらは、なにで答えたであろうか？　みじめな策動の最後の燃えあがりで答えたのである。総会の直前にイオーノフがきわめて予言的に述べた「化膿の過程」が、気持ちのよいものでないことは、いうまでもない。しかし、この忌わしい過程が、社会民主党を回復させるということを理解しないような者は、革命的活動に手をつけるべきではない！　技術委員会と在外組織委員会は、ロシア組織委員会にしたがうことをこばんでいる。ボリシェヴィキは、もちろん、軽蔑をもって国外の策動家たちから遠ざかった。そこで動揺がはじまった。すなわち、一一月のはじめに、在外組織委員会の残党（二人のポーランド人、プラス、一人の調停主義者）に、ロシア組織委員会の招集についての報告が送付された。この報告は、全活動を詳細に述べているので、ボリシェヴィキの敵ども、『ゴーロス』にほめたたえられた調停派も、余儀なくロシア組織委員会を認めないわけにはいかなかった。一九一一年一一月一三日付で、「ロシア組織委員会の決定にしたがう」という在外組織委員会の決議が採択された。在外組織委員会の手もとに現在ある資金の五分の四がロシア組織委員会の金庫にゆずりわたされた。つまり、ほかならぬポーランド人自身が、調停主義者自身が、この問題全体が提起されたことの重要さに、疑いをさしはさむことができなかったのである。

だが、それにもかかわらず、それから数日たつと、はやくも技術委員会も、ロシア在外組織委員会も、組織委員会にしたがうことを、ふたたび拒否した!!　この賭博のなぞ

をとく鍵はどこにあるか？

中央機関紙の編集局の手もとに、一つの記録文書[三〇]がある。これは、協議会に提出されるであろうが、これによれば、トィシカが、ロシア組織委員会への不参加、協議会への不参加を扇動していることが、明らかである。

これ以上に忌わしい策動が、考えられるであろうか？　彼らは、技術委員会と在外組織委員会では、協議会の招集と、ロシア組織委員会の設立とをたすけようとした。彼らは、「すべての者」を招請しようとしていることを自慢していたが、だれをも招請に応じさせられなかった（多数派として、招請の権利と自分のすきな条件をつける権利とをもっていたにもかかわらず）。彼らは、ボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキのほかには、どんな活動家も見いださなかった。そして、彼らは、彼ら自身のえらんだ舞台で惨敗を喫した。そして、彼らは、協議会資金の五分の四をすすんであたえたところの、全権をもつ中央部としてのロシア組織委員会そのものの「足をすくおうとする」までに堕落したのである!!

まったく、腫物は、とりわけ「化膿の過程」では、気持ちの悪いものである。なぜ、ありとあらゆる在外グループの同盟をつくろうとする理論家たちには、策動のほかにはなにものこらなかったのか。このことは、すでに中央機関紙の第二四号に示されている。そしていまや、ロシアの社会民主主義的労働者は、自分たちのロシア組織委員会と、自分たちの協議会を擁護するか、それとも、トィシカ、レーデルの一派が策動によって自分たちの協議会を妨げるのをゆるしておくか、どちらかを、苦もなくえらぶであろう。策動家連はわれとわが身を破滅させた。これは事実である。トィシカとレーデルは、すでに罪人の烙印をおされてロシア社会民主労働党の歴史にしるされている。そして、彼らには協議会を妨げることはできないし、ロシア組織委員会を破壊することもできない。

ところで、解党派はどうか？　一九一〇年一月から一九一一年六月までの、まる一年半のあいだ、彼らは、中央委員会在外ビューロー[三一]では多数を占め、中央委員会ロシア〔国内〕ビューローには調停派という忠実な「友人」をもっていたが、ロシア国内の活動のためには、さっぱりなにも、まったくなにもやらなかった！　彼らが多数を占めているあいだ、活動は停滞していた。ボリシェヴィキが、解党主義的な中央委員会在外ビューローを解体し、協議会の招集に着手すると、解党派はうごめきだした。この「うごめき」がなにに現われたかを観察するのは、きわめて意味深いことである。たえず解党派に最も忠誠をつくしているブンドは、最近、現在の「混乱時代」[三二]（たとえば、ラトヴ

ィア人のあいだでは解党派と党擁護派との二つの潮流の闘争の結果はまだ明らかになっていない）を利用しようとのぞんで、どこからか、一人のカフカーズ人をつれてきた。そして、トロツキーとダンがカフェー・ブーベンベルク（ベルン市、一九一一年八月）で作成した決議（三三）に署名をとるために、一味の連中がこぞってZ市に出発した。しかし、ラトヴィアの指導組織を探しだせず、署名も手に入らず、「最強の三つの組織の組織委員会」という大げさな商号をつけた書類はすこしもつくることができなかった。これが事実である。*

＊ 意気衰えぬブンドの他に、フペリョード派も、決議をむりやり作りあげようとかけあしで急いだ。この小グループ——けっして召還主義的ではない、絶対に！——から、ある有名な召還主義者（三四）が、かけあしで飛びだした。彼は、キエフ、モスクワ、ニージニーへ「飛んでいき」、協調主義者たちと「協調」をはかったが、どこでも、なにも得るところがなくて退いた。伝えられるところでは、「フペリョード」グループは、ルナチャルスキーの作りだした悪しき神の不成功を非難し、また、もっとよい神を考えだすという決定を満場一致で採択した。

ロシアの労働者は、ブンド派が、ロシア国内でどういうやり方でロシア組織委員会をぶちこわそうと試みているかを知るがよい。ただちょっと次のことを考えてもらいたい。

協議会招集のために働いている活動家たちが、ウラル、ボヴォルジエ、ペテルブルグ、モスクワ、キエフ、エカテリノスラフ、ロストフ、チフリス、バクーを歴訪しているとき、ブンド派はひとりの「カフカーズ人」（おそらく、カフカーズ地方委員会（三五）の「出版物」を支配し、一九〇八年一二月のロシア社会民主労働党協議会（三六）に、ダンやアクセリロードを代表者として派遣した委員たちのひとりであろう！）を「つれてきて」、ラトヴィア人のところから「署名をうばいとる」ために動いているのである。解党派につかえ、ロシア国内におけるあらゆる活動とは絶対に無縁なこの陰謀団が、出版物の二人の「最強の」支配者たちをふくむ、「三つの組織」の「組織委員会」として、実際に現われるには、あと一歩だ！　それとも、ひょっとすると、ブンド派と一カフカーズ人の諸君は、ロシア国内のどの組織をいつ歴訪したか、どこで活動を再建しようとし、どこで報告をおこなったかを、党に報告するのであろうか？　まあ、やってみたまえ、親愛な諸君よ、語ってくれたまえ！

だが、国外にいる外交問題の達人たちは、事情通のもったいぶった様子で、判断し、指示（さしず）している。「孤立してはいけない」、「ブンドおよびカフカーズ地方委員会と話しあうべきである」と。

おお、喜劇役者たちよ！——ボリシェヴィキの「孤立」をかなしみながら現在動揺している者は、この二年間の党の歴史の意義をよく考え、よく学ぶがよい。おお、われわれは、国外のくだらぬ陰謀家連中ときっぱり縁を切ったとき、また、ペテルブルグ、モスクワ、ウラル、ポヴォルジエ、カフカーズおよび南部のロシアの社会民主主義的労働者の結集をたすけたとき、このような孤立によって、いつにもまして愉快な気持ちを感じているのだ！

孤立をなげく者は、総会の思想的に偉大な業績をも、その調停主義的誤りをも、まったくなにも理解しなかった者である。総会ののちの一年半には、国外では外見だけの統一があり、ロシア国内では社会民主主義的活動が完全に停滞していた。一九一一年の半年あるいは四ヵ月は、ボリシェヴィキの外見上の最大の孤立が、はじめて、国内の社会民主主義的活動の停滞をうちやぶり、社会民主党のロシア〔国内〕中央部をはじめて再建させるという結果を生んだのであった。

解党主義や召還主義のような「腫物」の思想的腐敗と生気のなさとを、いまだにあきらかに理解できない者にたいしては、いまこそ、無力な喧嘩とみじめな策動の歴史が、はっきりと教えてくれるであろう。『ゴーロス』と『フペリョード』のグループは、こういう策動をやるまでに成りさがり、彼らの擁護を試みたありとあらゆる者をあとにしたがえて堕落していったのである。

さあ、活動にとりかかれ、党擁護派の社会民主主義者同志諸君！　非社会民主主義的諸潮流とのつながりと、党の決定に反してこれらの潮流をはぐくむ諸グループとのつながりの、最後の残りかすをふるいおとせ。ロシア組織委員会のまわりに団結し、協議会の招集と諸地方における活動の強化とでこの委員会を援助せよ。ロシア社会民主労働党は重病にたえぬいた。危機は終わろうとしている。

統一された、非合法の、革命的ロシア社会民主労働党万歳！

『ソツィアル－デモクラート』第二五号、一九一一年一二月八（二一）日
全集、第五版、第二一巻、一－一〇ページ所収
邦訳全集、第一七巻、三五四－三六四ページ所収

ゲルツェンの追想

ゲルツェンの生まれた日〔一八一二年四月六日〕から一〇〇年たった。自由主義的ロシア全体は、社会主義の重大な諸問題を用心ぶかく避け、革命家ゲルツェンの自由主義者との相違点を慎重にかくしながら、彼を記念している。右翼の出版物も、ゲルツェンが晩年になって革命を断念したと、うその断言をして、ゲルツェンを追想している。一方、国外の自由主義者とナロードニキ(三五)のゲルツェンにかんする論説には美辞麗句だけが幅をきかしている。

労働者党は、俗物的な賛美をするためにではなく、自分の任務を明らかにするために、またロシア革命の準備に大きな役割を果したこの著作家の真の歴史的な地位を明らかにするために、ゲルツェンを追想しなければならない。

ゲルツェンは前世紀の前半の貴族・地主出身の革命家の世代に属していた。貴族はロシアにビロンやアラクチェーエフの徒を、無数の「飲んだくれの将校、暴れ者、ばくちうち、市場の英雄、猟犬番、喧嘩屋、笞刑吏、ハレムの従者」を、また感傷的なマニーロフのような連中(三六)をもたらした。ゲルツェン(三七)はこう書いている。「そして彼らのあいだから、一二月一四日の人々が、ロムルスとレムス(三八)のように野獣の乳で育てられた英雄たちの隊列が生い立ったのだ。……これは、頭から足の先までまじりけのない鋼鉄をきたえてつくった伝説中の英雄のような人たちであり、若い世代を新しい生活へと目ざめさせ、圧制と奴隷根性の環境のなかで生まれた子供たちを清めるために、明らかな破滅の淵へ意識的に立ちむかっていた同志の戦士たちであった(三九)」

ゲルツェンはそのような貴族の子弟の一人であった。デカブリストの蜂起は彼を目ざめさせ、彼を「清めた」。一九世紀四〇年代の農奴制ロシアにあって、彼は、その時代の最大の思想家たちと同じ高い水準にのぼることができた。彼はヘーゲルの弁証法を自分のものにした。彼は、それが「革命の代数学」であることを理解した。彼は、ヘーゲルよりも先へすすみ、フォイエルバッハにつづいて唯物論へとすすんだ。『自然研究書簡』の第一書簡である、一八四四年に書かれた『経験と観念論』は、いまでさえ、数知れぬ現代の経験的自然科学者や、多数の今日の哲学者、観念論者や半観念論者よりも、ひときわぬきんでた一人の思想

家を、われわれに示してくれる。ゲルツェンは弁証法的唯物論のまぢかに近づき、史的唯物論の直前で立ちどまっている。

まさにこの「立ちどまり」が、一八四八年革命の敗北後、ゲルツェンの精神的破綻を引きおこしたのである。ゲルツェンは当時すでにロシアを離れ、この革命を直接に観察した。彼はその当時、民主主義者であり、革命家であり、社会主義者であった。しかし彼の「社会主義」は、六月の諸事件[三三]によって最後的にうちのめされた、四八年代のあのブルジョア社会主義と小ブルジョア社会主義の無数の形態と変種の一つであった。本質的には、これはけっして社会主義ではなく、感傷的な空文句、おめでたい夢想であって、ブルジョア民主主義派も、その影響下から解きはなされていなかったプロレタリアートも、当時の自分たちの革命性をこのようなかたちで言いあらわしていたのである。

一八四八年以後のゲルツェンの精神的破綻、彼の深い懐疑主義とペシミズムは、社会主義にたいするブルジョア的幻想の破綻であった。ゲルツェンの精神的なドラマは、世界史上、ブルジョア民主主義派の革命性が（ヨーロッパでは）すでに死滅に瀕していたが、社会主義プロレタリアートの革命性がまだ成熟していなかった時代の産物であり、反映であった。いま、自分たちの反革命性を、ゲルツェンの懐疑主義にかんする美辞麗句でおおい隠している、ロシアの自由主義的な、ことばのトリックの騎士たちは、このことを理解しなかったし、また理解するはずもなかった。一九〇五年のロシア革命を裏切り、革命家の偉大な使命を考えることも忘れてしまったこれらの騎士の場合には、懐疑主義は民主主義から自由主義への移行の形態である。すなわち、四八年に労働者を射殺し、くつがえされた王位を復興し、ナポレオン三世に拍手をおくった、またゲルツェンがその階級的本性を理解できないで呪った、あの下司な、卑劣な、けがらわしい、残忍な自由主義への移行の形態なのである。

ゲルツェンの場合には、懐疑主義は、「超階級的な」ブルジョア民主主義の幻想から、プロレタリアートのきびしい、不屈な、不敗の階級闘争への移行の形態であった。その証拠は、ゲルツェンが死の一年前の一八六九年に書いたバクーニンへの『旧友への手紙』である。ゲルツェンは無政府主義者バクーニンと決裂している。なるほど、ゲルツェンはまだこの決裂を、戦術上の意見の不一致とみているだけであって、自分の階級の勝利を確信しているプロレタリアの世界観と、自分の階級の救いに絶望した小ブルジョアの世界観とのあいだにある深淵と見ているわけではない。なるほど、ゲルツェンはここでもまた、社会主義者は「労働者

にも届い主にも、地主にも町人にも同じように教え説かなければならない」という、古いブルジョア民主主義的な空文句を繰りかえしている。しかしそれにもかかわらず、バクーニンと決裂することによって、ゲルツェンは、自由主義にではなく、インタナショナルに(三二)、マルクスの指導していたインタナショナルに――プロレタリアートの「連隊を集め」「働かずに(三三)利得している者の世界を見すてつつある」「労働の世界」を統合しはじめていたインタナショナルに――、その視線をむけたのである！

ゲルツェンは、一八四八年の運動全体とマルクス以前のすべての形態の社会主義のブルジョア民主主義的本質を理解しなかったので、ロシア革命のブルジョア的な本性を理解することはなおさらできなかった。ゲルツェンは「ロシア」社会主義、「ナロードニキ主義」の創始者である。ゲルツェンは、農民を土地つきで解放することを、共同体的土地所有(三四)を、「土地にたいする権利」という農民の思想を、「社会主義」と見た。彼は、これについての自分のとくに好きな思想をなんどとなく展開している。

じっさい、ゲルツェンのこの学説にも、今日の「社会革命党」の色あせたナロードニキ主義をもふくむ、ロシアのすべてのナロードニキにも、社会主義は一かけらもない。これは西欧における「四八年の社会主義」のさまざまな形態と同じように、ロシアのブルジョア的農民民主主義派の革命性を言いあらわしている同じ感傷的な空文句であり、同じおめでたい夢想である。一八六一年(三五)に農民がもっと多くの土地を、もっと安く受け取っていたなら、農奴的地主の権力はそれだけ激しく掘りくずされ、ロシアにおける資本主義の発展はそれだけはやく、それだけ自由に、それだけ幅ひろくすすんだであろう。「土地にたいする権利」と「土地均分」の思想は、地主権力の完全な転覆と地主的土地所有の完全な廃止とをめざしてたたかっている農民の、平等を求める革命的志向を定式化したものにほかならない。

一九〇五年の革命は、このことを十分に証明した。一方では、プロレタリアートが、社会民主労働党を創立し、革命闘争の先頭に立って、まったく自主的に行動したし、他方では、革命的な農民が（「トルドヴィキ」(三六)と「農民同盟」(三七)が）、「土地私有の廃止」にいたる、地主的土地所有を廃止するあらゆる形態をめざしてたたかいながら、ほかならぬ経営主として、小企業者としてたたかったのである。

いまでは、土地にたいする権利等々の「社会主義的性格」についての論争は、真に重要で真剣な歴史的問題、すなわち、ロシアのブルジョア革命における自由主義的ブル

ジョアジーと革命的農民との利害の相違の問題、いいかえれば、この革命における自由主義的傾向と民主主義的傾向、「妥協的」（君主主義的）傾向と共和主義的傾向の問題をぼやかし、おおいかくすことに役だつだけである。もし空文句ではなくて事の本質を見るなら、――もし階級闘争を「理論」と学説の「基礎」として研究し、その逆でないなら、この問題こそ、ゲルツェンの『コーロコル』(一三五)によって提起されているものなのである。

　ゲルツェンは国外で自由なロシア語新聞を創刊した。彼の大きな功績はここにある。『ポリャールナヤ・ズヴェズダ』(一三六)はデカブリストの伝統を取りあげた。『コーロコル』（一八五七―一八六七年）は全力をあげて農民の解放を支持した。奴隷の沈黙はやぶられた。

　しかしゲルツェンは、地主、貴族の社会に属していた。彼は一八四七年にロシアを去った。彼は革命的人民を見なかったし、彼らを信じることができなかった。ここから「上層」にたいする彼の自由主義的な訴えが生まれてくる。ここから絞刑吏アレクサンドル二世にたいする『コーロコル』での彼の無数の甘ったるい手紙が生まれてくる。いまではそれらを嫌悪の情なしに読むことはできない。チェルヌィシェフスキー、ドブロリューボフ(一三七)、セルノーソロヴィエヴィチら、雑階級出の革命家の新しい世代を代表した人人が、ゲルツェンの民主主義から自由主義への後退を非難したのは、まったく正しかった。とはいえ、公平に見るならば、民主主義と自由主義とのあいだをゲルツェンがどんなに動揺したとしても、それにもかかわらず、彼にあってはやはり民主主義者が優位を占めていたと言わなければならない。

　自由主義的下司根性の最も唾棄すべきタイプの一人、かつてはほかならぬ自由主義的傾向があるというので『コーロコル』にすっかり感心したカヴェリンが、憲法に反対し、革命的扇動を攻撃し、「強力」とその呼びかけとに反対し、忍従を説きはじめたとき、ゲルツェンはこの自由主義的賢者ときっぱり手を切った。ゲルツェンは「自由主義者ぶる政府を秘密に指導するために」書かれたカヴェリンの「内容の貧弱な、ばかげた、有害なパンフレット」を攻撃し、「ロシアの人民を家畜として、政府を賢者として」描きだしているカヴェリンの「感傷的な政治的格言」を激しく攻撃した。『コーロコル』は論文『追悼の辞』を掲載し、そのなかで、「自分の尊大だが、きわめてつまらない思想のくさった蜘蛛の巣を編んでいる教授たち、かつては純朴であったが、のちには健全な青年たちが彼らの腺病質的な思想に共鳴しえないことを見てとって腹をたてた元教授たちを」鞭うった。カヴェリンは、この肖像画は自分をかいた

ものだとすぐ気がついた。

チェルヌィシェフスキーが逮捕されたとき、卑劣な自由主義者カヴェリンはつぎのように書いた。「私にはこの逮捕がけしからぬものとは思われない……、革命党は政府をくつがえすためにあらゆる手段をよいものと考えているし、政府はまた独自の手段で自分をまもる」と。だがゲルツェンは、このカデットに答えるかのように、チェルヌィシェフスキーの裁判に関連してこう語った。「ところがここであわれむべき人々、雑草のような人々、意気地のない人々は、われわれを支配する強盗と無頼漢のこの徒党をののしってはならないというのだ」と。

自由主義者ツルゲーネフがアレクサンドル二世に個人的な手紙をおくって、その忠誠の情を述べ、ポーランドの蜂起の鎮圧のさいに傷ついた兵士のために二枚の金貨を寄付したとき、『コーロコル』は「陛下が、自分をとらえた悔恨の情をご存じないことを気にやんで、夜も眠られぬと陛下に書きおくった白髪のマグダレーナ（男性の）」について書いた。そしてツルゲーネフは、ただちにそれが自分のことであることに気がついたのである。

ゲルツェンがポーランドを擁護したので、ロシアの自由主義者がこぞって、ゲルツェンを見すて、「教養ある社会」（貴族、地主、大ブルジョアの知識人層をさす、単に「社会」とも言う）全体が『コーロコル』に背を向けたときにも、ゲルツェンはうろたえなかった。彼は、ポーランドの自由を主張しつづけ、アレクサンドル二世の鎮圧者、死刑執行人、絞刑吏たちを鞭うちつづけた。ゲルツェンは、ロシア民主主義派の名誉を救った。「私たちはロシア人の名誉を救ったのです、そしてそのために大多数である奴隷的な人々の迫害をうけました」と、彼はツルゲーネフに書いた。

農奴である一農民が許嫁の名誉を傷つけようとした地主を殺したという報道を受け取ったとき、ゲルツェンは『コーロコル』でこうつけくわえた、「すばらしいことをやったものだ！」と。[二三七]「平穏な解放」のために軍司令官たちを連れてくるという報道をうけたとき、ゲルツェンは「農民を抑圧するかわりに、自分の部隊を率いて農民と合体する最初の賢明な連隊長は、ロマノフ家の玉座につくことになろう」と書いた。レイテルン大佐が、死刑執行人の助手となるのをいさぎよしとせず、ワルシャワでピストル自殺をとげたとき（一八六〇年）、ゲルツェンはこう書いた。「もし射殺するのなら、武器をもたない人々を射つように命じている将軍たちをこそ射殺すべきであった」と。ベズドナで五〇人の農民が皆殺しにされ、彼らの指導者アントン・ペトロフが処刑されたとき（一八六一年四月一二日）、[二三八]ゲ

ルツェンは『コーロコル』につぎのように書いている。

「おお、ロシアの国の勤労者よ、殉難者よ、私のことばが諸君のもとに届くことができるなら！　……ペテルブルグの宗務院とドイツ人の皇帝とによって諸君のもとに任命されてきた諸君の魂の牧人たちを軽蔑するようなんと諸君に教えたいことだろう——諸君は地主を憎み、下役を憎み、彼らを恐れている、——それはまったくもっともだ。しかし、諸君はまだツァーリと僧正を信じている、……彼らを信じるな。ツァーリは彼らとともにあり、彼らは彼のものだ。ベズドナで殺された若者たちの父である諸君、ペンザで殺された父親の息子である諸君は、いまこそ彼を見るのだ……諸君の牧師たちは、諸君と同じように無知で、諸君と同じように貧しい……カザンで諸君のために殉じたもう一人のアントニー（主教のアントニーではなく、ベズドナのアントン）がそうだった……諸君の聖者たちの身体は四八の奇跡をおこないはしない。彼らへの祈りは歯の痛みをいやしはしない。だが彼らについての生きた思い出は一つの奇跡を、諸君の解放をなしとげることができる。」

奴隷的な「合法」出版物のかげにかくれたわが自由主義者たちが、ゲルツェンの弱い面をほめそやし、その強い面を黙殺しながら、どんなに卑劣なやりかたで、いやしい中傷をゲルツェンにあびせかけているかは、以上から明らかである。ゲルツェンが四〇年代にロシアそのもののなかに革命的人民を見いだすことができなかったのは、彼の罪ではなくて、彼の不幸であった。六〇年代に彼が革命的人民を見いだしたとき、彼は恐れることなく、自由主義に反対して革命的民主主義の側に立った。彼はツァーリズムにたいする人民の勝利のためにたたかったのであり、地主のツァーリと自由主義的ブルジョアジーとの取引のためにたたかったのではなかった。彼は革命の旗をかかげたのである。

ゲルツェンを記念するにあたって、われわれはロシア革命のなかで行動した三つの世代、三つの階級をはっきりと見る。最初は、貴族と地主、デカブリストとゲルツェンである。これらの革命家の範囲は狭い。彼らは人民からおそろしくかけはなれている。しかし、彼らの事業はむだではなかった。デカブリストはゲルツェンを目ざめさせた。ゲルツェンは革命的扇動を展開した。

チェルヌィシェフスキーに始まり、「人民の意志」の英雄たちに終わる雑階級出の革命家は、この革命的扇動をうけつぎ、ひろめ、強め、鍛えた。闘士の範囲はひろくなり、

彼らと人民との結びつきは密接になった。「未来のあらしの若い舵手」とゲルツェンは彼らを呼んだ。しかしそれはまだあらしそのものではなかった。

あらし――それは大衆自身の運動である。唯一の最後まで革命的な階級、プロレタリアートが人民大衆の先頭にたって立ちあがり、幾百万の農民をはじめて公然たる革命闘争に立ちあがらせた。あらしの最初の襲来は一九〇五年にあった。それにつづくあらしはわれわれの目のまえで大きくなりはじめている。

ゲルツェンを記念するにあたって、プロレタリアートは彼の模範にてらして革命的理論の偉大な意義を学んでいる。革命への無私の献身と人民への革命的呼びかけとは、種播きと刈入れとが、たとえ数十年の歳月をもってへだてられていようとも、けっしてむだに終わるものではないということを、理解することを学んでいる。ロシア革命と国際革命における種々の階級の役割の規定を学んでいる。これらの教訓によって知識を豊かにしたプロレタリアートは、自由なロシア語で大衆に呼びかけることによってゲルツェンがはじめてそれに反抗する闘争の偉大な旗をかかげたあのけがらわしいツァーリ君主制を壊滅させ、万国の社会主義的労働者との自由な同盟へすすむ道をきりひらくであろう。

『ソツィアル-デモクラート』第二六号、一九一二年五月八日(四月二五日)
全集、第五版、第二一巻、二五五―二六二ページ所収
邦訳全集、第一八巻、一二―一九ページ所収

ロシアの諸政党

国会選挙には、すべての政党が「自」党の議員をできるだけ多く当選させるために、その扇動を強化し、その勢力を結集している。

そして、他のすべての国々にみられるとおなじように、わが国でも、最も鉄面皮な選挙前の自己宣伝がくりひろげられている。すべてのブルジョア政党、すなわち資本家の経済的特権を擁護している政党は、個々の資本家が自分の商品を広告するのとおなじやり方で、自分の党を広告している。どんな新聞でもよいから、そこにのっている商業広告文に目をとおしてみたまえ。――そうすれば、資本家というものは、自分の商品のために最も「効果をねらった」最も大げさな、最新流行の名まえを考えだし、どんなものにも絶対に遠慮することなく、またどんなうそやでたらめを言うこともけっしてためらわないで、自分の商品をほめちぎるものだということが、おわかりになろう。

大衆は――すくなくとも大都市や商業中心地では――早くから商業広告になれっこになっていて、その真価をわきまえている。ところが残念なことには、政治的な広告は、比較にならないほど多くの大衆をまどわし、それを暴露することは、はるかに困難であり、その欺瞞は、はるかに根強い。政党の呼び名は――ヨーロッパでもアジアでも――しばしば直接の宣伝をめあてにえらばれ、政党の「綱領」もほとんどつねに、公衆をあざむくだけの目的で書かれている。資本主義国では、政治的自由が大きければ大きいほど、民主主義すなわち国民と国民代表の権力が大きければ大きいほど、しばしばますます無遠慮に政党の広告がくりひろげられている。

こういう事態のもとで、公衆は政党の闘争をどのように理解すべきであろうか？　欺瞞と宣伝をともなうこの闘争は、野蛮な反動派や、議会主義の敵がわれわれを説得しようとつとめているように、代議機関や、議会や、国民代表会議が、一般に無益であり、有害でさえあるということを、意味しないだろうか？　いや、そうではない。代議機関がなければ、欺瞞や、政治的なうそや、あらゆるぺてん師的策略が、はるかに多くなり、そして人民の手のなかには、欺瞞を暴露し真理をもとめる手段が、はるかにすくなくな

るばかりである。

政党の闘争を理解するためには、ことばをそのまま信用するのではなく、諸政党の実際の歴史を研究しなければならない。政党が自党について述べたてることをそのまま研究するのではなく、むしろ政党が実際にやっていることを、すなわち、政党がいろいろの政治問題を解決するさいにどんな態度をとるか、社会のいろいろな階級、すなわち、地主、資本家、農民、労働者などの切実な利害に関係をもつ問題をとりあつかうさいにどのようにふるまっているかを研究しなければならない。

一国における政治的自由が大きければ大きいほど、またその国の代議機関が強固で民主的であればあるほど、人民大衆が政党の闘争を理解し政治をまなぶことは、すなわち欺瞞を暴露し真理をもとめることはいっそうたやすくなる。

全国をゆりうごかす深刻な危機のさいには、どの社会も、この上なくはっきり諸政党に分割される。このようなときには政府は、社会のいろいろな階級のあいだに支持をもとめることを余儀なくされる。真剣な闘争は、あらゆる空文句を、あらゆる些末な借りものをふりおとしてしまう。各政党は全力をあげて人民大衆に訴えるが、正しい本能に導かれ、公然たる闘争の経験によって啓蒙された大衆は、それぞれの階級の利益を代表する政党についていくのである。

このような危機の時代は、つねに、その後長い期間にわたって、ときには数十年間にさえわたって、その国の社会的諸勢力の党派別編成を決定する。たとえばドイツではこのような危機は、一八六六年と一八七〇年の戦争(一四)であったし、ロシアでは一九〇五年の諸事件であった。一九〇五年の諸事件までさかのぼらなくては、われわれはわが国の諸政党の本質を理解することができないし、ロシアのあれやこれやの政党がどの階級を代表しているかをはっきりさせることができない。

ロシアの政党の簡単な概観を、まず極右翼の諸政党からはじめよう。

最右翼にいるのは、「ロシア国民同盟」(一五)である。この党の綱領は、ア・イ・ドゥブロヴィンが出版しているロシア国民同盟の通報、『ルースコエ・ズナーミャ』〔『ロシアの旗』〕でつぎのようにうたっている。

「一九〇七年六月三日、陛下から、万人のために、あらゆる点で法と秩序の模範となることによって、ツァーリの頼もしい支柱となるようにというツァーリのお召しの光栄に浴したロシア国民同盟は、ツァーリのご意志がただ次の条件のもとでのみ実現しうるということを告白する。(一) 宗規によって設立されたロシア正教会と密接に生きいきと結びついているツァーリの専制の力を十

分にあらわす場合、(二) 国内の諸県だけでなく、辺境においても、ロシアの国民性が支配する場合、(三) 国家建設事業における専制君主の主要な補佐役として、ロシア人だけからなる国会が存在する場合、(四) ユダヤ人にたいするロシア国民同盟の基本的な主張を完全にまもる場合、(五) ツァーリ専制権力の敵に属する官吏を公職から追放する場合、がそれである。」

われわれはここに、右翼のこのおごそかな宣言を、正確に書きうつしたが、それは、一方では、そのままの原文を読者に知らせるためであり、他方では、この宣言に述べられている基本的な目的が第三国会で多数派をしめるすべての政党にたいして、すなわち「国権派」にたいしても、オクチャブリスト[三]にたいしてもそのまま効力をたもっているからである。このことは、あとの説明であきらかになるだろう。

ロシア国民同盟の綱領は、本質的には、農奴制時代の古いスローガン――すなわちギリシア正教、専制、国民性を繰りかえしている。ふつうロシア国民同盟とこれにつづく他の諸政党とを区別するけじめとされている問題――すなわちロシアの国家制度における「立憲主義的」諸原則を承認するか、それとも否認するかという問題――については、ロシア国民同盟がけっして一般的に代議制度に反対しているわけではないということを指摘することがとくにたいせつである。上記の綱領からあきらかなように、ロシア国民同盟は、「補佐役」の役割を果たす国会の存在を支持しているのである。

ロシア憲法――もしこれでも憲法といってよいなら――の特質は、ドゥブロヴィン一派によって、正確に、すなわち実情に即して表現されている。国権派もオクチャブリストも、その実際の政策では、ほかならぬこの立場に立っている。これらの政党のあいだの「憲法」論争は、結局かなりの程度、ことばの論争に帰着する。すなわち、「右翼」は、国会に反対しているわけではなくて、国会の権利をすこしも規定せずにおきながら、国会が「補佐役」でなければならないと、とくに熱心に強調しているだけであり、また国権派とオクチャブリストにしても、厳密に規定された権利はなにも主張してはいないし、権利の現実的な保障のことなどは考えてもいない。[四]またオクチャブリストの陣営の「立憲主義者」も、六月三日の憲法にもとづいて「憲法反対派」[五]と完全に和解している。

黒百人組の綱領には、一般的に異民族にたいする迫害、とくにユダヤ人にたいする迫害が、率直に、はっきりと規定されている。いつもそうであるように、この場合にも、そのほかの政府党が多少とも「はにかみながら」、または

外交的にかくしていることを、黒百人組は、もっと無作法に、図々しく、がみがみとわめきたてている。

実際に、第三国会の活動や、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(一三二)、『スヴェート』(一三三)、『ゴーロス・モスクヴィ』(一三四)、その他といった彼らの新聞をすこしでも知っている人には、だれにもあきらかなように、国権派も、オクチャブリストも、異民族の迫害に参加しているのである。

そこで問題は、右翼政党の社会的基盤はどこにあるか、この党はどの階級を代表しているか、この党はどの階級に奉仕しているか、ということである。

農奴制のスローガンへの復帰、ロシアの生活におけるあらゆる古いもの、中世的なものの擁護、六月三日の――地主的――憲法にたいする完全な満足、貴族と官僚の特権の擁護――これらすべては、われわれの出した問題にたいして明確な回答をあたえている。右翼は、農奴主的地主の党、連合貴族評議会(一三五)の党である。ほかならぬこの連合貴族評議会が、第二国会の解散、選挙法の改正、六月三日のクーデターで、あのように目だった、むしろ指導的な役割を演じたことは、けっして偶然ではない。

ロシアにおけるこの階級の経済力をはっきり示すためには、内務省刊行の一九〇五年の政府土地統計によって証明されている、次の基本的事実をあげれば足りるだろう。

ヨーロッパ・ロシアでは、一方では三万に足りない地主が七千万デシャチーナ〔一デシャチーナ＝一・〇九二ヘクタール〕の土地を所有しているのにたいし、他方では最小の分与地をもつ一千万戸の農家が、これと同じ面積の土地を所有している。最大級の地主の一人あたり平均土地所有面積が二、二〇〇デシャチーナであるのに、極貧農の一家族、一戸あたり土地所有面積は七デシャチーナにすぎない。

こんなに狭い「分与地」では、農民は生きていくことができず、ただ徐々に死んでいくよりほか仕方がないということは、まったく当然な、避けがたいことである。今年の飢饉のような、幾百万の農家の恒常的な飢餓状態は、不作のたびに、ロシアの農民経営を破壊しつづけている。農民は、あらゆる形態の雇役を条件にして、地主から土地を借りなければならない。農民は、土地を借りる代償として、自分の馬や農具で地主のために働く。これは、公式に農奴制度と呼ばれていないだけで、賦役と同じものである。大部分の地主は、二、二〇〇デシャチーナもある大きな土地で、債務奴隷的、雇役的な経営、すなわち賦役的な経営以外の経営を営むことができない。地主が賃金労働者をつかって耕作しているのは、これらの広大な領地のほんの一部にすぎない。

さらに、この地主貴族の階級は、高級官僚と中級官僚の

圧倒的多数を国家に提供している。ロシアにおける官僚の特権は貴族地主の特権と土地の権力との別の面である。このことからあきらかなように、連合貴族評議会と「右翼」政党とが、古い農奴制的伝統の政策を主張しているのは、偶然ではなくて、必然であり、個々の人物の「悪意」によるものではなくて、おそろしく強大な階級の利益の圧力のもとにうちだされたものである。旧支配階級である地主の後裔が、依然として支配的地位にとどまりながら、自分に適応した政党をつくったわけである。「ロシア国民同盟」、すなわち国会と参議院(三六)の「右翼」が、まさにその政党である。

だが、代議機関が存在するからには、そして一九〇五年のロシアでおこなわれたように大衆がすでに公然と政治の舞台に登場してきたからには、どの政党も、ある限度内で、人民に訴えることが必要になってくる。右翼の諸政党は、どういう看板をかかげて、人民に訴え、人民に呼びかけることができるだろうか？

もちろん、彼らは、地主の利益を擁護すると露骨に言うことはできない。そこで彼らは、古い伝統一般の保持を論じ、全力をあげて異民族憎悪、とくにユダヤ人憎悪をたきつけ、まったくおくれている無知な人をポグロム(三七)へ、「ジード」〔ユダヤ人の蔑称〕の迫害へ駆りたてようと全力をつくしている。貴族や官僚や地主の特権を、ロシア人にたいする異民族の「圧迫」という言辞でおおいかくそうとつとめているのである。

以上が「右翼」政党の正体である。第三国会における右翼の最もすぐれた弁士、この党の党員であるプリシケヴィチは、右翼がなにをのぞんでいるか、彼らがどういう行動をとっているか、彼らがだれに奉仕しているかを人民に示すために、非常に多くの活動をおこない、成功をおさめた。プリシケヴィチは、じつに有能な扇動者である。

第三国会で四六の議席を占める「右翼」と肩をならべているものに、九一の議席を占める「国権派」がある。この党と右翼との色合いの違いは、ほんのわずかである。本質的には、これは二つの党ではなくて、一つの党である。彼らは、異民族、「カデット」（自由主義者）、民主主義者などにたいする攻撃の「仕事」をおたがいのあいだで分担しているのである。一方はより粗暴なやり方で、他方はいくらか洗練されたやり方で、結局、同じことをやっている。実際、ありとあらゆる醜い騒動や、ポグロムや、ゲルツェンシテイン、ヨロス、カラヴァエフのような人々の暗殺をやってのけることのできる「極」右翼が、いくらか脇により、右のほうから政府を「批判している」ように見えることは、政府にとっても有利である。……右翼と国権派との

差異は、重大な意義をもちえない。

第三国会におけるオクチャブリストの議席は一三一だが、そのなかにはもちろん「オクチャブリスト右派」も勘定にはいっている。オクチャブリストの現在の政策には、右翼と本質的に異なるものはなにもない。だがオクチャブリストは、この党が地主に奉仕するだけではなくて、さらに大資本家や保守的な商人などブルジョアジーにも奉仕するという点で、右翼とちがっている。そのブルジョアジーは、労働者とそれにつづいて農民が自主的な生活に目ざめたのにひどく驚き、旧制度の擁護にまったく転換したのである。ロシアには、労働者にたいする態度が、地主の旧農奴にたいする態度よりすこしもよくないような資本家がいる。しかも、その数はけっしてすくなくない。労働者や店員は、彼らにとっては、下僕や召使と同じなのである。右翼の諸政党、国権派とオクチャブリストよりもうまく、この旧制度を擁護できるものは、ほかにいない。また、一九〇四年と一九〇五年のゼムストヴォ[三七]大会や都市大会で「憲法」を要求しはしたが、しかし労働者に対抗し、六月三日の憲法にもとづいて妥協する用意のあるような資本家もいる。

オクチャブリスト党は、地主と資本家の主要な反革命党である。それは、第三国会の指導的政党である。一三一の議席を占めるオクチャブリストは、一三七の議席を占める右翼および国権派とともに、第三国会の確実な多数派を構成している。

一九〇七年六月三日の選挙法は、地主と巨大資本家に多数を獲得させるように保証した。国会に議員を選出するすべての県選挙集会では、地主と第一都市クーリア（すなわち大資本家クーリア）の選挙人が多数を占めている。二八の県集会では、地主の選挙人だけで大多数を占めてさえいる。六月三日の政府の全政策は、オクチャブリスト党の援助のもとに実施された。第三国会の過誤と罪業はすべてこの党に責任がある。

オクチャブリスト党は、口先では、彼らの綱領のなかでは、「憲法」を、それどころか……自由さえも、擁護している！　だが実際には、この党は、反労働者的な施策（たとえば保険法案だけをとってみても――国会労働問題委員会の委員長ティーゼンハウゼン男爵の言動を思いおこしたまえ！）、反農民的な施策、支配者の専横と人民の無権利状態との制限に反対する方策を支持した。オクチャブリストは、国権派とおなじように政府党である。オクチャブリストは、ときどき――とくに選挙のまえには！――「反政府的」演説をするけれども、そのことによって、以上の事情はすこしもかわるものではない。このようなブルジョア諸政党の野党遊び、どんな政府もそれを真にうけはしない

から彼らにとって無害なこの遊び、反政府派のような言動によって「釣ら」なければならない選挙人にたいしてしばしば有効な役目を果たすこの遊びは、議会のあるところにはどこにも、昔から見うけられたことであり、いまでも見うけられる。

だが、野党遊びの専門家、名人は、第三国会の主要な反政府党――カデット[三九]、立憲「民主主義者」、「人民自由」党である。

この党の名称からして、すでに遊びである。実際には、この党は、けっして民主主義の党ではないし、断じて人民の党ではない。また自由の党でもなくて、せいぜい半自由――四分の一の自由でないとしても――の党であるにすぎない。

実際には、この党は、反動よりも人民の運動のほうをはるかにおそれる自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの党である。

民主主義者は、人民を信頼し、大衆の運動を信頼し、あらゆる方法でそれを援助する。――たとえ、しばしば、（ブルジョア民主主義者であるトルドヴィキ[四〇]がそうであるように）資本主義制度の範囲内におけるこの運動の意義について誤った考えをもっているにしても。民主主義者は、最も誠実にあらゆる中世的制度と手を切ろうと努力する。

自由主義者は、大衆の運動をおそれ、それにブレーキをかけ、また大衆、とくに労働者に対抗する支柱をもつために、一定の、しかも最も主要な中世的制度を意識的に擁護する。自由主義者が目ざしているのは、けっしてプリシケヴィチ一派の権力のすべての土台を破壊することではなくて、プリシケヴィチ一派と権力をわかちあうことである。すべては人民のために、すべては人民をつうじて――と、民主主義的小ブルジョア（農民およびトルドヴィキをふくめて）は言う。彼らは、資本にたいする賃金労働者の闘争の意義を理解しないが、プリシケヴィチ支配の土台を一掃しようと心からのぞんでいるのである。これに反して、プリシケヴィチと権力をわかちあい、労働者のうえに、小経営主のうえに君臨することこそ、自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーの真の目的である。

カデットは、第一国会と第二国会で、多数を、すなわち主導的地位を占めた。彼らは、それを無意味な、しかも不名誉な遊び[三]に利用した。すなわち、右にむかっては、忠誠と入閣主義をもてあそび（われわれは、百姓をも傷つけず、プリシケヴィチをも侮辱しないで、すべての矛盾を平和的に解決することができる、と彼らは言う）、左にむかっては、民主主義をもてあそんだのである。カデットは、この遊びの結果として、結局のところ足蹴をくらった。また左

からは、カデットは、人民の自由の裏切者という正当な名まえをうけとった。彼らは最初の両国会で、いつも労働者民主主義派とたたかっただけでなく、トルドヴィキともたたかった。カデットは、トルドヴィキが提出した地方土地委員会の計画（第一国会）、民主主義の初歩、土地整理委員会イロハともいうべきこの計画を拒否し、民主主義における農民にたいする地主と官吏の主導権を擁護したことを指摘するだけで十分だろう！

第三国会では、カデットは、「責任ある野党」、「陛下の野党」[三四]を演じた。彼らは、その名において、しばしば政府の予算に賛成投票した（たいした「民主主義者」だ！）。彼らは自分たちの「強制的」（農民にとって強制的）な土地買取りが〔地主にとって〕危険なものでもなければ、感情を害するものでもないことをオクチャブリストに説明した、――ベレゾフスキー（第一）をおもいだしたまえ。彼らは、「敬虔な」演説をさせるために、カラウーロフを演壇におくった。彼らは、大衆運動を拒否し、「上層」に訴え、下層を叱りつけてだまらせようとした（労働者保険の問題での、労働者議員にたいするカデットの反対闘争）、その他等々。

カデットは反革命的自由主義派の党である。カデットは、「責任ある野党」という役割、すなわち、公認された、合法的な、オクチャブリストとの競争をゆるされた野党、六月三日の支配体制に反対するのではなく、これを支持する野党としての役割を演ずるのは自分だと自任することによって、「民主主義者」としての自分を最後的に葬ってしまった。ロザノフとアントニー・ヴォルィンスキーの接吻をうけたストルーヴェ、イズゴーエフ氏[三五]一派のような、カデットのイデオローグの恥しらずな『道標』的説教と、第三国会における「責任ある野党」の役割――これこそ、一つのメダルの両面である。プリシケヴィチ一派によってうけいれられた自由主義的＝君主主義的ブルジョアジーは、プリシケヴィチとならんですわりたいのである。

いま、第四国会の選挙にあたって、カデットが「進歩派」[三六]とブロックをむすんでいることは、カデットの根深い反革命性をしめす、さらに新たな証拠である。進歩派は、民主主義者であるとはすこしも自任せず、六月三日の全体制との闘争ということには一言もふれず、「普通選挙法」についてはなんの夢想さえしていない。これは、自分がオクチャブリストと親類だということをかくそうともしない穏健自由主義者である。カデットと進歩派との同盟は、カデット党の真の本質について「カデットの受売屋」のなかの最も盲目的な人々の眼さえもひらかせずにはおかないだろう。

ロシアにおける民主主義的ブルジョアジーを代表しているのは、最も左翼的なエス・エル(三六)からエヌ・エス(三七)とトルドヴィキにいたる、あらゆる色合いのナロードニキである。彼らは、みな、このんで「社会主義的な」文句をつかうが、しかし自覚した労働者は、それらの文句の意義についてだまされてはならない。実際には、彼らの言う「土地にたいする権利」のなかにも、土地の「均分」のなかにも、「土地の社会化」のなかにも、社会主義はいささかもふくまれてはいない。土地の私有が廃止され、土地の分配が最も「公正に」おこなわれた場合でも、商品生産、すなわち市場、貨幣、資本の権力がおかされないばかりでなく、逆にさらに拡大されるということを知っている人なら、だれでも、このことを理解するはずである。

しかし、「勤労原理」とか「ナロードニキ的社会主義」とかいう文句は、土地所有制度における、それとともに政治制度におけるあらゆる中世的なものを一掃できるし、また一掃しなければならないという、民主主義者の深い確信(と真剣な意図)をあらわしている。自由主義者(カデット)はプリシケヴィチ一派と政治権力および政治的特権を、わかちあおうとのぞんでいるが、ナロードニキは、現在、土地所有におけるすべての特権と政治におけるすべての特権との一掃を目ざしているし、またそれを目ざさないわけにいかないからこそ、民主主義者なのである。

大多数のロシア農民は、プリシケヴィチ一派との妥協(自由主義者にとっては、まったく可能な、うけいれられる、そして身近な妥協)をまったく夢想することさえできないような状態にある。したがって、小ブルジョアジーの民主主義は、今後かなり長いあいだロシアで大衆的な根をもちつづけるだろう。そして、ストルィピンの農業改革(三八)、百姓の利益に反するプリシケヴィチ一派のこのブルジョア的政策は、今日までのところ、……三千万の農民の飢餓以外には、堅実な成果をなにももたらさなかったのだ!

幾百万という飢えている小経営主は、これとは別の、民主主義的な農業改革——資本主義の枠からとびでることはできないし、賃金奴隷制を廃止するものではないが、しかしロシアの地表から中世的制度を一掃することはできるような農業改革——を目ざさないわけにはいかない。

トルドヴィキは、第三国会では、ひどく劣勢であるが、しかし彼らは大衆を代表している。トルドヴィキがカデットと労働者民主主義派とのあいだを動揺していることは、小経営主の階級的地位から不可避的に出てくるものである。しかも小経営主を結集し組織し教育することはとくに困難なので、トルドヴィキは、党としてはきわめて不明確で、はっきりとした形のないものとなっている。したがって、

第三国会の党派別構成

地主の諸党派	
右翼	46
国権派	74
独立国権派	17
オクチャブリスト右派	11
オクチャブリスト	120
政府党合計	268
ブルジョアジーの諸党派	
進歩派	36
カデット	52
ポーランド議員団	11
ポーランド＝リトワニア＝ベロルシア・グループ	7
回教グループ	9
自由主義政党合計	115
ブルジョア民主主義派	
勤労グループ	14
労働者民主主義派	
社会民主党	13
民主主義派合計	27
無所属	27
総計	437

トルドヴィキは、ナロードニキ左派の愚かな「召還主義」に助長されて、悲しむべき解党状態を呈している。

トルドヴィキとわがえせマルクス主義的解党派との差異は、前者が弱さからくる解党主義者であるのにたいし、後者は悪意からくる解党主義者だという点にある。弱い小ブルジョア的民主主義者をたすけ、彼らを自由主義者の影響から切りはなし、右翼だけでなく反革命的カデットにも対抗して、民主主義派の陣営を結集すること——これこそ、労働者民主主義派の任務である。

第三国会に議員団をもっている後者〔労働者民主主義派〕については、われわれは、ここでは、ほんのすこししか述べることができない。

ヨーロッパのどこでも、労働者階級の諸政党は、一般民主主義的イデオロギーの影響からぬけだし、賃金労働者の資本にたいする闘争と封建制度にたいする闘争とを区別することを学びとりながら、しかもまさに反封建闘争をつよめ、この闘争からあらゆる動揺と臆病をはらいのけるために、形成されてきたのである。ロシアでは、労働者民主主義派は、自由主義派からも、ブルジョア民主主義派（トルドヴィキ）からも、完全に一線を画したが、それは民主主義一般の事業に大きな利益をもたらした。

労働者民主主義派内部の解党主義的流派（『ナーシャ・ザリャー』〔一四〕と『ジヴォエ・デーロ』〔一五〕）は、トルドヴィキとおなじ弱点をもっており、あいまいさを賛美し、「寛容な」野党という立場にあこがれ、労働者のヘゲモニーを拒否し、口先で「公然たる」

組織を論ずるだけにとどまり（非公然の組織を罵りながら）、自由主義的な労働者政治運動を説きまわっている。この流派が反革命期の崩壊と沈滞気分に結びついていることは明らかであり、この流派が労働者民主主義派から脱落していくことは、はっきりしている。

自覚した労働者は、なにものも解消することなく、自由主義的影響に対抗して結束をかため、階級としてみずからを組織し、労働組合その他あらゆる形態の団結を発展させながら、資本に対抗する賃金労働の代表者としても、またロシアにおける旧制度全体に反対し、その旧制度へのあらゆる譲歩に反対する徹底した民主主義の代表者としても立ちあらわれている。

図解の形で第三国会の党派別構成の資料をここにかかげよう〔一七五ページ〕。これは、一九一二年度の公式の国会『便覧』から引用したものである。

第三国会では、二つの多数派があった。（一）右翼とオクチャブリストをいっしょにしたもの——四三七のうち二六八、（二）オクチャブリストと自由主義者をいっしょにしたもの——一二〇プラス一一五——すなわち四三七のうち二三五。この二つの多数派は、ともに反革命的なもので

ある。

『ネフスカヤ・ズヴェズダ』（一五二）第五号、一九一二年五月一〇日
署名——ヴェ・イリイン

全集、第五版、第二一巻、二七五—二八七ページ所収
邦訳全集、第一八巻、三三一—四五ページ所収

経済的ストライキと政治的ストライキ

商工省が作成している官庁ストライキ統計では、一九〇五年いらい、ストライキを経済的ストライキと政治的ストライキとに分類するやり方が、いつもとられている。こういう分類をさせるようにしむけたのは、ストライキ運動の独特な形態を生みだした現実である。そしてストライキ運動が活気をおびてきている現在、科学的な関心、諸事件に自覚のある態度をとろうとする関心は、ロシアのストライキ運動のこの独特な特徴を労働者が注意ぶかく観察することを必要にしている。

まず、政府のストライキ統計から、若干の基本的な数字を引用しよう。一九〇五年から一九〇七年までの三年間に、ロシアのストライキ運動は、世界がかつて見たこともない高さにたっした。政府の統計は工場しか計算にいれていない。そこで、鉱山企業も、鉄道も、建設事業も、賃労働のその他の多くの部門も計算にはいっていない。だが、工場だけをとってみても、一九〇五年には二八六万三千人、すなわち三〇〇万弱、一九〇六年には一一〇万八千人、一九〇七年には七四万人がストライキをおこなった。ヨーロッパで系統的にストライキ統計の作成をはじめた一八九四年から一九〇八年までの一五年間をつうじて、一年間のストライキ参加者数の最高は、アメリカの六六万人であった。

したがって、ロシアの労働者は、一九〇五―一九〇七年にわれわれが目撃したような大衆的ストライキ闘争を世界ではじめて展開したわけである。今日、イギリスの労働者は、経済的ストライキの分野で、運動に新しい、大きな刺激をあたえた。ロシアの労働者の先進的役割は、彼らが西欧の労働者より強力だからとか、よりよく組織されているからとか、より発達しているからというわけではなく、プロレタリア大衆の自主的な参加をともなう大きな国民的危機がヨーロッパにはまだなかったからである。このような危機がやってくれれば、ヨーロッパの大衆的ストライキは、一九〇五年のロシアにおけるよりなお強力なものになることだろう。

この時代に経済的ストライキと政治的ストライキとの相互関係はどうなっていたか？ 政府の統計は、それにたい

ストライキ参加者数（単位千人）

	1905年	1906年	1907年
経済的ストライキ	1,439	458	200
政治的ストライキ	1,424	650	540
合　　　計	2,863	1,108	740

して上〔上表を参照〕のような回答をあたえている。

ストライキの両形態が密接不可分に結びついていることは、ここからあきらかである。運動の最大の高揚期（一九〇五年）には、闘争の経済的基礎が最も広いのが特徴である。この年の政治的ストライキは、経済的ストライキという強固な、確実な土台のうえに立っている。経済的ストライキの参加者数は、政治的ストライキの参加者数よりも多かった。

一九〇六年と一九〇七年とには、運動が低調となるにつれて、経済的な土台の弱まりが認められる。経済的ストライキの参加者数は、一九〇六年にはストライキ参加者総数の一〇分の四に、一九〇七年には一〇分の三に低下している。したがって、政治的ストライキと経済的ストライキとは、たがいに力の源となりながら、相互にささえあっているのである。ストライキのこの二つの形態に密接な結びつきがなければ、真に広範な、大衆的な——そのうえ全国民的意義をおびるような——運動はありえない。運動の初期には、経済的ストライキは、しばしば、おくれたものを目ざまし、ゆりおこし、運動を全般的にし、それをより高い段階にたかめていくという性質をもっている。

たとえば、一九〇五年の第一・四半期には、経済的ストライキは政治的ストライキよりも目だって優勢を占めた。前者のストライキ参加者は六〇万四千人であったが、後者はわずかに二〇万六千人であった。ところが、一九〇五年の最後の四半期には、この関係は逆になった。経済的ストライキ参加者数は四三万人になっているが、政治的ストライキ参加者数は八四万七千人であった。これは、運動の初期には、多くの労働者が経済的闘争を最も重要視したが、最大の高揚期には逆になった、ということである。だが経済的ストライキと政治的ストライキとの結びつきはつねに存在していた。くりかえして言うが、この結びつきなしには、真に偉大な運動、偉大な目的を実現する運動はありえない。

労働者階級は、政治的ストライキのさいには、全国民の先進的階級として行動する。プロレタリアートは、こうい

う場合には、ブルジョア社会の諸階級のうちの一つとしての役割を演じるばかりではなく、主導者（ヘゲモーン）、すなわち、指導者、先進者、首領の役割を演じるのである。運動のうちに現われる政治思想は全国民的性格をおびている。すなわち、全国の政治生活の基本的な、最も根ぶかい諸条件に触れているのである。政治的ストライキのこうした性格は、――一九〇五―一九〇七年代のすべての科学的研究者が指摘しているように――すべての階級のうちに、とくに、もちろん、住民の最も広範な、多人数からなる、民主主義的な諸層、農民その他のうちに、運動への関心を呼びおこした。

他方では、勤労者大衆は、経済的要求なしには、自分たちの状態を直接即座に改善することとなしには、国の全般的な「進歩」をけっして考えようとはしないであろう。大衆が運動にひきいれられ、それに精力的に参加し、それを高く評価して、英雄的精神、自己犠牲、不屈さ、偉大な事業への献身を発揮するのは、働くものの経済状態が改善される場合にかぎる。そうでなければ事はうまくいかない。なぜなら「平時」には、労働者の生活条件は信じられないほど苦しいからである。生活条件の改善をもとめてたたかううちに、労働者階級は、同時に、道義的にも、知的にも、政治的にもたかめられ、その偉大な解放目的を実現する能力を高めていくのである。

商工省が出版したストライキ統計は、労働運動が一般的に活気づいた時代に労働者の経済闘争がもっているこの大きな意義を完全に確証している。労働者の攻撃が強ければ強いほど、彼らはますます多くの生活改善をかちとっている。「社会の同情」も、生活の改善も、闘争の高度な発展の結果である。自由主義者は（解党派も）労働者にむかって、諸君にたいする「社会」の同情があるとき諸君は強いのだ、と言っているが、マルクス主義者は労働者にむかって別なことを言う。諸君が強いとき諸君は「社会」の同情をえるのだ、と。この場合社会とは、住民のありとあらゆる民主的な諸層、小ブルジョアジー、農民、労働者の生活と身近かに接触しているインテリゲンツィア、勤め人などと解すべきである。

ストライキ運動は一九〇五年に最も強かった。そこでどうか？　われわれは、ほかならぬこの年に労働者が最も多くの生活改善をかちとったことを見る。一九〇五年のストライキ参加者一〇〇人につき、なにもえずに闘争を終わったもの、つまり完全な敗北をなめたものは、わずかに二九人であったことを、政府統計は示している。一〇年間（一八九五―一九〇四年）に、ストライキ参加者でなにもえずに闘争を終わったものは一〇〇人中五二人であった！　つ

まり、運動の大衆的性格は、闘争の成功率を最大の規模に、ほとんど二倍ちかくにも高めたのである。

　だが運動がよわまりはじめたとき、闘争の成功率もまた減少しはじめた。一九〇六年には、ストライキ参加者一〇〇人のうち、なにもえずに、はっきりいえば敗北のうちに闘争を終わったものは三三人、一九〇七年には五八人、一九〇八年には一〇〇人中六九人にもなった!!

　このように、数ヵ年にわたる科学的統計資料は、経済的ストライキと政治的ストライキとの結合が必要であり、真に広範な全国民的な運動ではこのような結合が不可避的であるという、自覚した各労働者の体験と観察を完全に確証している。

　現在のストライキ運動の波もまた同じように、この結論を完全に確証している。一九一一年には、ストライキ参加者数は一九一〇年の二倍に増大した（五万人にたいして一〇万人に）。それでも、この数はやはりきわめて小さなものであった。純経済的ストライキは、まだ全国民的な意義をおびずに、比較的「狭い」[一三]問題としてとどまっていた。これに反して、有名な四月事件ののち、今年のストライキ運動がまさにこのような［全国民的な］意義をもつようになったことは、いまでは、だれでも認めている。

　それだから、自由主義者と自由主義的労働者政治家（解党派）が運動のなかへもちこもうとつとめている運動の性格の歪曲に、最初から反撃をくわえることが、きわめてたいせつである。自由主義者セヴェリャニン氏は、『ルースキエ・ヴェードモスチ』[一四]に、メーデー・ストライキに経済的「要求」、あるいは「なんらかの」（なるほど、そうか！）「要求」を「つきまぜる」[一五]ことに反対する論文を掲載し、カデットの『レーチ』紙はそれに共鳴して、この論文の主要な箇所を転載した。

　自由主義者氏はこう書いている、「そのようなストライキを、ほかならぬメーデーという時機と結びつけることは、たいていは根拠のないことである。……そのうえ、全世界の労働者の祝日を祝いながら、その機会に乗じて、これこれの種類のキャラコの布に一割の割増しを要求するなどということは、なんだか奇妙なことでさえある。」（『レーチ』第一三二号）

　労働者には完全に理解できることが、自由主義者には「奇妙」なのである。ブルジョアジーと彼らの法外な利潤の擁護者だけが「割増し」の要求をあざわらうことができるのだ。だが、割増し要求の広範な性格こそ、ストライキの全面的な性格こそ、なによりも多数の新しい参加者をひきよせ、攻撃の力と社会の同情を最もよく確保し、労働者自身の成功ばかりでなく、また彼らの運動の全国民的な意

義をも、なによりもよく保証することを、労働者は知っている。だから、セヴェリャニン氏は、『ルースキエ・ヴェードモスチ』、『レーチ』が説きまわっている自由主義的歪曲にたいして断固として闘争し、全力をつくして労働者がこの種のえせ忠告者を警戒するように注意することが必要である。

解党主義者ヴェ・エジョフ氏は、解党派の新聞『ネフスキー・ゴーロス』(一〇三)のまさに第一号で、いくぶんちがった方面から問題をとりあげてはいるが、やはり同じような純自由主義的歪曲をおこなっている。ヴェ・エジョフ氏は、とくにメーデー参加にたいして罰金をかけたためにおこったストライキを論じている。労働者の組織性が不十分であったことをただしく指摘しながら、筆者は、この正しい指摘から、非常に誤った、労働者にとって有害このうえもない結論をひきだしている。エジョフ氏は、ある工場では抗議のためだけにストライキをやり、ほかの工場ではそれに経済的要求を結合したなどというふうに、まちまちであった点を非組織的だと見ている。だが、実際には、ストライキがこのように多様な形態をとるからといって、それだけではまだ非組織的だということにはならない。組織的であるためにはかならず一様な形態をとらなければならない、と考えるのは、ばかげている！　非組織性は、けっして、エジョフ氏の書いているようなことにあるのではない。しかし、彼の結論ははるかに悪い。

「そのために」（すなわち、ストライキの多様性と、経済を政治と結合するさまざまな形態とのために）「多くの場合抗議の原則的性格（二五コペイカのためにストライキをやったわけではあるまいに）が消えうせた。それは経済的諸要求によって複雑にされた」……

これは、まことに、けしからぬ、徹頭徹尾うそっぱちの、まったく自由主義的な議論だ！「二五コペイカ」の要求が抗議の原則的性格を「消しさる」ことができると考えるのは、カデットの水準に堕落することを意味する。その反対だ、エジョフ君、「二五コペイカ」の要求は、笑いぐさになるどころか、十分に認められる値うちがあるのだ！　その反対だ、エジョフ君、この要求は「抗議の原則的性格」を「消しさる」どころか、かえってそれをつよめるのだ！第一に、生活改善の問題もまた、原則的な、最も重要な原則的問題である。第二に、抑圧の一つの現われに抗議するのでなく、二つ、三つ、それ以上の現われに抗議するとき、それは抗議をよわめるどころか、かえってつよめるのである。

エジョフ氏がやっている、問題のけしからぬ自由主義的な歪曲を、労働者ならだれでも、腹を立てて拒否するであ

ろう。

だが、これはけっしてエジョフ氏の失言ではない。彼はもっとさきのほうで、いっそうけしからぬことを書いている。

「普通のストライキを原則的要求で複雑にすることが目的にそわないのとまったく同様に、自分の抗議を経済的諸要求によって複雑にすることが目的にそわないことは、自身の体験が労働者におしえているにちがいない。」うそだ、まったくのうそだ！　こんな議論をのせることは、『ネフスキー・ゴーロス』の恥である。エジョフ氏には、目的にそわないようにおもわれることが、じつはまったく目的にそっているのだ。最近における各労働者自身の体験も、非常に多くのロシア労働者の経験も、エジョフ氏がおしえたことと正反対のことをものがたっている。

きわめて「普通の」ストライキでも、それを「原則的要求で複雑にする」ことに抗議できるのは、ただ自由主義者だけである。これが第一。第二には、わが解党主義者が、今日の運動を「普通の」ストライキの尺度ではかるのは、深刻な誤りをおかすものである。

しかも、エジョフ氏がその自由主義の密輸入を他人の旗でおおいかくそうと試みているのは、むだなことであるし、経済的ストライキと政治的ストライキとの結合の問題を、両者の準備の問題と混同させようとしているのも、むだなことである！　もちろん、この両ストライキの準備をととのえ、自分もその準備をするということ、しかもできるだけ根本的に、できるだけ協同一致し、できるだけ団結し、できるだけ慎重に、できるだけ堅実に準備するということ――こうしたことはすべてきわめてのぞましいことである。それについて争う余地はない。だが、エジョフ氏とは反対に、ストライキの両形態の結合こそ準備しなければならないものである。

エジョフ氏はこう書いている、「われわれは経済的ストライキの時期に直面している。もしそれが労働者の政治的行動とからみあうならば、それはとりかえしのつかない誤りであろう。そうした混淆は、労働者の経済闘争にも、その政治闘争にも有害な影響をおよぼすであろう。」

これ以上、行き場はないようだ！　解党主義者が平凡な自由主義者の水準に堕落したことは、このことばから、きわめてはっきりと知ることができる。一つ一つの文句がまちがいをふくんでいるのだ！　真理をえるためには、一つ一つの文句をまっこうから正反対の文句におきかえなければならない！

われわれが経済的ストライキの時代に直面している、と

いうのはまちがっている。まさにその逆である。われわれは、経済的ストライキの時代に直面しているだけではない。われわれは政治的ストライキの時代に直面しているのだ。エジョフ君、事実は君の自由主義的歪曲よりも強力である。もし君が商工省に集まっているストライキ統計のカードを手に入れることができたとしても、この政府統計でさえ完全に君の所論をくつがえしてしまうだろう。

「からみあい」が誤りだというのは、まちがっている。まさにその逆である。もし労働者が、ほかならぬこうした「からみあい」のすべての特殊性、そのすべての意義、そのすべての必要性、そのすべての原則的重要性を理解しないとすれば、それこそ、とりかえしのつかない誤りであろう。だがさいわいなことに、労働者は、それをすばらしくよく理解していて、自由主義的労働者政治家のお説教を軽蔑して拒否する。

最後にこうした混淆が〔ストライキの〕両形態に「有害な影響をおよぼす」というのは、まちがっている。まさにその逆である。それは双方に有益な影響をおよぼす。それは双方を強化する。

エジョフ氏は、彼が見つけたどこかの「短気者」に教訓をたれている。ききたまえ。

「労働者大衆の気分を組織的にかためることが必要である。」……――神聖な真理だ！――……「労働組合のための扇動を強化すること、新しい組合員を募集することが必要である」……

まったくそのとおり。しかし……しかし、エジョフ君、「組織的にかためること」を労働組合だけに限定することはゆるされない！　解党主義者君、このことをおぼえておきたまえ！

……「まして、労働者のあいだには、大衆運動に夢中になって、組合は無益で不必要であるかのように、集会で組合に反対する短気者が、すくなくないので、このことはいっそう必要である。」

これは労働者にたいする自由主義的な中傷である。解党派にとっては不快の種であった、そしてこれからもいつも不快の種になるだろう労働者が反対したのは「組合にたいして」ではない。いや、労働者は、エジョフ氏の上記の文句からもあきらかにうかがえるように、組織的にかためることを「労働組合」だけに限定することに反対したのである。

労働者は、「組合に反対した」のではなく、エジョフ氏の論文全体を貫いている、彼らの闘争の性格にたいする自由主義的歪曲に反対したのである。

ロシアの労働者は、彼らの運動の偉大な全国民的意義を

理解するに十分なほど、政治的に成熟した。ロシアの労働者は、自由主義的労働者政治のすべてのうそ、そのまったくの貧弱さを理解するに十分なほどに成熟した。そして労働者はいつもこの政治活動を軽蔑して、拒否するであろう。

『ネフスカヤ・ズヴェズダ』第一〇号、一九一二年五月三一日
署名――イヴ・ペトロフ
全集、第五版、第二一巻、三一七―三二四ページ所収
邦訳全集、第一八巻、七六―八四ページ所収

革命的高揚[(二六)]

全ロシア・プロレタリアートの堂々たるメーデー・ストライキ、これと結びついた街頭デモンストレーション、労働者大衆の前での革命的宣言と革命的演説――これらはロシアがいまや革命的高揚の局面にはいったことをはっきりと示した。

この高揚はけっしてだしぬけに現われたものではない。この高揚は、すでに早くから、ロシア国民生活のすべての条件によって準備されていたものであり、レナの射殺事件[(三)]とメーデーとに関連して起こった大衆的ストライキは、その到来を最後的に確証したにすぎない。反革命の一時的な勝利は、労働者の大衆闘争の衰退と密接に結びついていた。ストライキ参加者の数は、おおよそにすぎないけれども、この闘争の規模について、無条件に客観的で正確な観念をあたえている。

革命にさきだつ一〇年間、すなわち一八九五―一九〇四年には、ストライキ参加者の年平均数は四万三千人（端数を切り捨てて）であった。一九〇五年には二七五万人、一九〇六年には一〇〇万人、一九〇七年には七五万人となっている。革命の三年間は、世界のどこにもその比をみないほど、プロレタリアートのストライキ闘争の高揚したことを特徴としている。一九〇六年と一九〇七年にはじまったストライキ闘争の衰退は、一九〇八年には決定的なものとなり、ストライキ参加者の数は一七万五千人に減った。[三九] 黒百人組的地主と有力な商工業資本家との国会と同盟してツ[四〇]ァーリの専制を復興した一九〇七年六月三日のクーデターは、大衆の革命的エネルギーの衰退から生じた、避けがたい結果であった。

一九〇八年から一九一〇年までの三年間は、黒百人組的反革命の横行、自由主義的ブルジョアジーの裏切り、プロレタリアートの気落ちと解体の時期であった。ストライキ参加者の数はどんどん減少して、一九〇九年には六万人に、一九一〇年には五万人にさがった。

しかし、一九一〇年の終りからいちじるしい転換がはじまった。自由主義者ムロムツェフおよびレフ・トルストイの死にあたっておこなわれたデモンストレーション、さらにまた学生運動も、風むきがかわったことを、民主主義的大衆の気分にある変化が生じたことを、はっきりと示している。一九一一年には、労働者大衆が徐々に攻勢に転ずる傾向がみられ、ストライキ参加者の数は一〇万人にのぼった。各方面から、反革命の勝利から生じた疲労と虚脱状態は過ぎさりつつあり、ふたたび革命の方向にむかいだしたということを指摘した報告がとどいている。[四一] 一九一二年一月にひらかれたロシア社会民主労働党全国協議会は、当面の情勢にたいする評価を概括して、つぎのように確認した。「民主主義勢力の広範な層のなかに、第一にプロレタリアートのあいだに、政治的に活気づきはじめた様子がみられる。一九一〇―一九一一年の労働者ストライキ、デモンストレーションとプロレタリア集会のはじまり、都市のブルジョア民主主義者のあいだの運動のはじまり（学生ストライキ）等々――こうしたことはすべて、六月三日体制に反対する大衆の革命的気分が成長していることの現われである。」（協議会『通報』一八ページを見よ）〔邦訳全集、第一七巻、四八〇ページ〕

すでに今年〔一九一二年〕の第二・四半期には、この気分は非常にたかまり、それは大衆の行動に現われ、革命的高揚を生みだすにいたった。最近一年半の諸事件の経過は、この高揚には偶然的なものはなにもないこと、この高揚の到来がまったく法則にかなったものであること、それは、

ロシアのこれまでの発展全体によって必然的に条件づけられたものであることを、はっきりと示している。

レナの射殺事件は、大衆の革命的な気分を大衆の革命的高揚に転化するきっかけになった。トロツキーは、ウィーンの『プラウダ』で、解党派の尻馬にのって、「団結の自由を獲得するための闘争がレナの悲劇の土台でもあれば、その全国的な強力な反響の土台でもある」と繰りかえしているが、この自由主義的な作り話ほどでたらめなものはない。団結の自由という要求は、レナのストライキでは、なにも特殊なものでも、主要なものでもなかった。レナ射殺事件で暴露されたことは、けっして、団結の自由が欠けていることではなく、挑発、全般的な無権利状態、根拠のない横暴……からの自由が欠けていることであった。

レナ射殺事件は、われわれがすでに『ソツィアル－デモクラート』第二六号であきらかにしたように、六月三日の君主制の全体制をきわめて正確に反映したものである。レナ事件の特徴は、それがけっして諸権利のうちのどれか一つ――それがプロレタリアートにとって最も基本的な権利、最も重要な権利の一つであるにしても――のための闘争ではなかったという点である。この事件にとって特徴的なことは、あらゆる点で、最も初歩的な合法性さえまったく欠けていたということである。その特徴は、挑発者、スパイ、国家保安部員、ツァーリの下僕が、政治的な理由がなにもないのに、大衆的射殺という手段に訴えたことであった。ロシアの生活におけるこの全般的な無権利状態、個々の権利の獲得のための闘争をおこなう希望も可能性もないこと、ツァーリの君主制とその全体制が改善しがたいものであること――これらのことがレナ事件からあきらかになったからこそ、大衆は革命の炎を燃えあがらせたのである。

自由主義者たちはレナ事件とメーデー・ストライキに、労働組合運動と「権利」獲得のための闘争という性格をあたえようとして、大骨を折ったし、いまでも大骨を折っているが、自由主義者（と解党派）の論争に目をくらまされていないすべての人々にとっては、そうでないことがはっきりしている。この大衆的ストライキの革命的性格はあきらかである。この性格は、とくにペテルブルグの社会民主主義系の諸グループ（それどころか、エス・エル系の一労働者グループさえくわわっている！）のメーデー・ビラ[一五]によって強調されている。われわれはそれを本紙のニュース欄に全文転載しているが、それは一九一二年一月のロシア社会民主労働党全国協議会によって提唱されたスローガンを繰りかえしているのである。

いや、レナとメーデー・ストライキの革命的性格を確証する主要なものは、これらのスローガンでさえない。スロ

ーガンは、事実が物語っていることを定式化したものである。地区から地区へとうつりひろがっていく大衆的ストライキの事実、――その巨大な成長、――その波及の速さ、――労働者の勇敢さ、――ますます頻繁になっている大衆的集会と革命的演説、――メーデー参加に課せられる罰金を廃止せよとの要求、――第一次ロシア革命でわれわれにおなじみの政治的ストライキと経済的ストライキとの結合――これらすべては、大衆の革命的高揚という運動の真の性格をはっきりと示している。

一九〇五年の経験を思い出してみよう。諸事件は、革命的大衆ストライキの伝統が労働者のあいだに生きていることと、労働者はただちにこの伝統をとりあげ、復活させていることを、われわれに示している。一九〇五年のストライキの波は、世界にその比をみないもので、政治的ストライキと経済的ストライキとの結合のもとで、この年の第一・四半期には八一万人、第四・四半期には一二七万七千人のストライキ参加者をまきこんだ。概算によれば、レナ事件に関連しておこったストライキは約三〇万人の労働者を、メーデー・ストライキは約四〇万人の労働者をとらえ、しかもストライキはいまなおますます発展している。新聞――自由主義的な新聞でさえ――は毎号、ストライキの火が燃えひろがりつつあるありさまを報道している。一九一二年の第二・四半期は、まだ完全には終わっていない。それなのに、もうすでに、ストライキ運動の規模からみて、一九一二年の革命的高揚のはじまりは、一九〇五年におけるそのはじまりにくらべて、劣るどころか、むしろまさっているという事実が、はっきりと現われている！

ロシア革命は、大衆を扇動し、目ざめさせ、団結させ、闘争にひきいれる、このプロレタリア的な方法を、はじめて大規模に発展させた。そしていまのプロレタリアートは、ふたたび、いっそう不屈な態度で、この方法を適用しつつある。世界のどんな勢力でも、プロレタリアートの革命的前衛がこの方法によって実現していることをやりとげることはできないであろう。一億五千万の人口をもつ広大な国、しかもその住民が広大な地域にちらばり、細分され、圧迫され、無権利と無知の状態におかれ、政府当局や警察やスパイの大群にかこまれて、「有害な影響」をうけないようにされている巨大な国――この国全体が激動しはじめているのだ。労働者でも、農民でも、最もおくれた層までが、ストライキ労働者と直接、間接に接触しはじめている。何十万という革命的扇動家が一度にどっと舞台に現われている。そして、彼らが下層の大衆とかたく結びつき、大衆の隊列の中にとどまり、あらゆる労働者家族の最も切実な必要のためにたたかい、この切実な経済的要求のための直

接的闘争と、政治的抗議と君主制にたいする闘争とを結合することによって、彼らの影響は無限につよまっている。それは、反革命が幾百万、幾千万の人々の心に、君主制にたいするはげしい憎悪を呼びおこし、君主制の演ずる役割について、理解の糸口をあたえたからである。そしてまた、いまや首都のすすんだ労働者のスローガン——民主的共和制万歳！——は、無数の道をとおって、一つ一つのストライキのあとを追って、おくれた層のなかへ、へんぴな田舎へ、「人民」のなかへ、「ロシアの奥深くへ」どんどんひろまっているからである。

『ルースキエ・ヴェードモスチ』が喜んで採用し、『レーチ』が共鳴して転載した、自由主義者セヴェリャニンのストライキ論は、きわめて特徴的である。

セヴェリャニン氏はつぎのように自問自答している。「労働者には、メーデー・ストライキに、経済的要求や、あるいはなんらか（！）の要求をつけくわえる理由がなにかあるだろうか？」——「遠慮なくいって、私はないとおもう。すべて経済的ストライキは、その成否の見込みを真剣に考慮したうえで、はじめて決行できるものだし、また実際にそうしなければならない……。だからこそ、そのようなストライキをほかならぬメーデーという時機と結びつけることは、たいていは根拠のないことである……。全世界の労働者の祝日を祝いながら、その機会に乗じて、これこれの種類のキャラコの布に一割の割増しを要求するなどということは、なんだか奇妙なことでさえある。」

これが自由主義者の議論である！　そしてこの際限のない俗悪、低級、下劣を、民主主義新聞という名称を僭称する「最良の」自由主義新聞が、それに共鳴して掲載しているのである！

ブルジョアの最も野卑な貪欲、反革命の徒のもっとも唾棄すべき卑劣さ——これこそこの自由主義者の効果をねらった空文句のかげにかくされているものである。彼は、雇主のポケットがいたまないことをのぞんでいるのだ。彼は「団結の自由」をもとめる「行儀正しい」、「無害な」デモンストレーションをのぞんでいるのだ！　ところがプロレタリアートは、そうしないで、政治を経済とかたく結びつけた革命的ストライキ、労働者の生活の即時改善をめざす闘争の成功によって、最もおくれた層をひきつけ、同時にツァーリの君主制に反対して人民を立ちあがらせるようなストライキに大衆をひきいれつつある。

そうだ、一九〇五年の経験は、大衆的ストライキの深く偉大な伝統をつくりだしたのだ。そして忘れてはならないことは、これらのストライキがロシアにどういう結果をも

たらすかということである。頑強な大衆的ストライキは、わが国では武装蜂起と不可分に結びついている。

だが、このことばを曲解しないようにしなければならない。ここで問題にしているのは、けっして蜂起への呼びかけではない。現在の時機に、そのような呼びかけをすることは、きわめてばかげたことであろう。ここで問題にしているのは、ロシアにおけるストライキと蜂起との結びつきを立証することとである。

一九〇五年には、蜂起はどのようにして成長したか？　まず第一に、大衆的ストライキ、デモンストレーションおよび集会は、大衆と警察および軍隊との衝突をますます頻繁にしていった。第二に、大衆的ストライキは農民を多くの部分的、分散的、なかば自然発生的な蜂起に立ちあがらせた。第三に、大衆的ストライキは、きわめて急速に陸海軍に燃えひろがり、まず経済的な理由による衝突（「えんどう豆」騒動その他の騒動）を、ついで反乱をひきおこした。第四には、反革命勢力それ自身が、ポグロムや民主主義者にたいする迫害などによって、内乱をはじめた。

一九〇五年の革命が敗北に終わったのは、けっして、自由主義者などの裏切者どもが考えているように、「行きすぎた」からでも、一二月の蜂起が「人為的」であったからでもない。それどころか、敗北の原因は、蜂起が十分にさきまですすまなかったこと、それが必要だという自覚が革命的諸階級のあいだに十分にひろまっていず、しっかり身につけられていなかったこと、蜂起が協同一致した、断固とした、組織的な、同時的な、攻勢的なものでなかったことにある。

つぎに、いま、蜂起の成長の徴候が認められるかどうかを検討しよう。革命的な陶酔に陥らぬために、オクチャブリストを証人にすることにしよう。ペテルブルグのドイツ人オクチャブリスト同盟は、主としていわゆるオクチャブリスト「左派」と、オクチャブリスト「立憲派」に属している。彼らは、カデットにとくに好かれており、また革命をたねにして当局をおどかすことを目的とせずに、諸事件を「客観的に」観察する能力が（他のオクチャブリストやカデットにくらべて）最も高い。

このオクチャブリストの機関紙『ザンクト－ペテルスブルガー・ツァイトゥング』[102]（『サンクト－ペテルブルグ新聞』）は、五月六（一九）日の週間政治評論でつぎのように書いている。

「五月がやってきた。天候のいかんにかかわらず、この月は、ふつう、首都の住民にとってあまり愉快な月ではない。なぜなら、この月はプロレタリアの『祝日』ではじまるからである。今年は、レナのデモンストレーシ

ロンの印象が労働者の心にまだなまなましいので、メーデーはとくに危険であった。首都の空気は、ストライキやデモンストレーションについてのあらゆるうわさでみちみちていて、きなくさい臭いがした。忠実なわが警察も、眼にみえて興奮していた。警察は捜査をやり、何名かの者を逮捕し、街頭デモンストレーションをふせぐために大部隊を待機させていた。警察が、労働者新聞の編集部をおそい、編集者たちを逮捕する以上に名案を考えつかなかったという事情は、労働者の人形部隊をあやつっている糸について、とくに深い知識をもっていないことを証明している。しかも、このような糸は存在している。それは、ストライキの規律ある性格、その他多くの事情がものがたっている。だからこそ、このたびのメーデー・ストライキ、これまでにみたどれよりも大きなストライキ、大小工場の一〇万、さらに一五万さえもの労働者が参加したストライキが、このように恐ろしいものとなったのである。それは平和な行進にすぎなかったが、しかし、この部隊の団結の強さは注目に値いする。労働者の最近の興奮状態とならんで、さらに他の不安な現象がおこっていることを考えると、ますますそうである。わが海軍の各種の艦艇では、革命的宣伝をやったというので、水兵が逮捕されている。新聞に現われたあらゆる情報から判断すると、わが国の軍艦は、もともと大した数でもないのに、そこでの状況はあまりよくないようである……。鉄道従業員も不安な考えをひきおこしている。なるほど、どこでもまだ組織的なストライキをおこそうと企てる段階にさえたっしていない。しかし逮捕――なかでもニコラエフ鉄道駅助役ア・ア・ウシャコフの逮捕のような、注目される逮捕――は、ここにもまたある程度の危険がひそんでいることを示している。

未熟な労働者大衆の革命的な企ては、もちろん、きたるべき国会議員選挙の結果に有害な影響をあたえるだけである。ツァーリがマヌーヒンを任命したこと……およぴ参議院が労働保険法案を採択したこと……を考えると、これらの企ては、なおさらばかげたことである」!!

ドイツ人のオクチャブリストは、こう論じている。われわれとしては、水兵の事件について現地から正確な情報をうけとったことを注意しておこう。その情報は『ノーヴォエ・ヴレーミャ』が事件を大げさに誇張していることを証明している。国家保安部が挑発的な「工作」をおこなっていることはあきらかである。はやまって蜂起を企てることは、まったく思慮のないことであるにちがいない。労働者階級の前衛は、ロシアにおける時宜にかなった――すなわち勝利の見込みのある――武装蜂起をおこなうための基本

的な条件が、労働者階級にたいする民主主義的農民の支持と軍隊の積極的な参加とであることを理解しなければならない。

革命期の大衆的ストライキは、それ自身の客観的な論理をもっている。大衆的ストライキは、何十万、何百万という火の粉を四方八方にまきちらす、――ところで周囲は、極度の憤激、前代未聞の飢えの苦しみ、暗黒きわまりない暴政、「貧民」や「百姓」や下級官吏にたいする恥しらずな、シニカルな侮辱といったような可燃材料でみちみちている。さらに、愚鈍で残虐なニコライ・ロマノフの宮廷党によってひそかに養われ、動かされている黒百人組のこのうえもなく勝手気ままな、ポグロム的ユダヤ人迫害をつけくわえてみたまえ……「これまでもそうだったし、これからもそうだろう」――大臣マカロフは、こういう予言的なことば[六]を、まさに自分自身の頭上に、自分たちの階級に、自分たちの地主的ツァーリにむかって、言ったのだ！

大衆の革命的高揚は、あらゆる労働者社会民主主義者、あらゆるまじめな民主主義者に、大きな、責任のある義務を課している。「はじまりつつある大衆運動（いまや、すでに、はじまった大衆の革命的運動と言わなければならない）を全面的に支持し、完全に実行可能な党のスローガンの旗のもとにこの運動を拡大する」こと、――ロシア社会民主労働党全国協議会は、これらの義務をこう規定している。党のスローガン――民主的共和制、八時間労働日、地主のすべての土地の没収――は、民主主義勢力全体のスローガン、人民革命のスローガンとならなければならない。

大衆運動を支持し拡大するために必要なものは、一にも組織、二にも組織である。非合法党なしには、この事業をおこなうことができないし、また非合法党のことをしゃべっているだけでは、なんにもならない。大衆の攻撃を支持し拡大するにあたって、われわれは一九〇五年の経験を慎重にまなばなければならない。そして蜂起の必要で不可避的なことを説明しながらも、同時に時期尚早な蜂起の企てを警告し、おさえるようにしなければならない。大衆的ストライキの成長、他の諸階級を闘争にひきいれること、諸組織の状態、大衆の気分――これらすべては、全勢力がツァーリの君主制にたいする協同一致の、断固たる、攻勢的な、あくまでも大胆な革命的襲撃のために結集すべき時機をおのずから示すであろう。

革命の勝利なしには、ロシアに自由はない。

プロレタリアートと農民の蜂起によってツァーリの君主制を打倒することなしには、ロシアに革命の勝利はない。

『ソツィアル－デモクラート』第二

七号、一九一二年六月一七（四）日
全集、第五版、第二一巻、三三九—三四六ページ所収
邦訳全集、第一八巻、九八—一〇七ページ所収

二つのユートピア

ユートピアというのはギリシアのことば〔ウートポス〕である。「ウー」はギリシア語で「ない」という意味であり、「トポス」は「場所」という意味である。だから、ユートピアというのは、存在しない場所のことであり、幻想、架空のこと、お伽噺である。

政治におけるユートピアは、現在も将来もけっして実現できないような願望であり、社会的勢力に立脚しない願望、政治的、階級的勢力の成長と発展によって裏づけられない願望である。

一国で自由がすくなければすくないほど、公然たる階級闘争の現われが乏しければ乏しいほど、また大衆の啓蒙の程度が低ければ低いほど、通常、政治的ユートピアはそれだけ発生しやすく、またそれだけ長つづきする。

現代のロシアには、二種類の政治的ユートピアが最も堅

固にたもたれており、そしてその魅力で大衆にある程度の影響をおよぼしている。それは、自由主義的ユートピアとナロードニキ[六〇]的ユートピアである。

自由主義的ユートピアは、平和的に、おだやかに、だれの気もわるくせず、プリシケヴィチらをもおしのけず、激しい徹底的な階級闘争もやらずに、ロシアで、ロシアの政治的自由について、勤労人民大衆の状態について、いくらかでも重大な改善を獲得できるかのようにいう点にある。これは、自由なロシアとプリシケヴィチの徒との平和というユートピアである。

ナロードニキ的ユートピアは、すべての土地の新たな公正な分配によって、資本の権力と支配を除去し、賃金奴隷制を除去できるかのようにいう、あるいは資本の支配のもとでも、貨幣の権力のもとでも、商品生産のもとでも、「公正な」、「均等な」土地分割を維持できるかのようにいう、インテリゲンツィア・ナロードニキと農民トルドヴィキ[六二]の夢想である。

この二つのユートピアはなにによって生みだされたのか？　なぜそれらは、現在のロシアにかなり強固に維持されているのか？

それらは、旧制度、農奴制、無権利状態にたいして、ひとことでいえば、「プリシケヴィチらにたいして」闘争しているが、しかもこの闘争で自立的な立場を占めていない諸階級の利益によって生みだされたものである。ユートピア、夢想は、この非自立性、この弱さの産物である。夢想は弱者の宿命である。

一般に自由主義的ブルジョアジー、とくに自由主義的ブルジョア・インテリゲンツィアは、自由と法秩序をもとめないではいられない。なぜなら、これがなければブルジョアジーの支配は完全でも、全一的でも、確保されたものでもないからである。しかし、ブルジョアジーは、反動よりも大衆運動をもっとおそれる。ここから、政治における自由主義の驚くべき、信じられないような弱さ、彼らの完全な無力が生じるのである。ここから、政治全体における自由主義者の数かぎりないあいまいさ、偽り、偽善、臆病な言いのがれが生じるのである。彼らは、大衆を味方に引きつけるために民主主義をもてあそばなければならないのだが、しかも同時にふかく反民主主義的であり、大衆運動にたいし、大衆の創意、大衆の自発性、「天をもおそう」大衆のやり方（かつて、マルクスが、前世紀のヨーロッパの大衆運動の一つについて表現したように[六三]）にたいして深い敵意をもっているのである。

自由主義のユートピアは、ロシアの政治的解放の大業における無力さからくるユートピアであり、この高貴な願望

をロシア民主主義の「平和的」勝利の理論と詐称することによって、プリシケヴィチらとともに特権を「平和的に」分けあおうとのぞんでいる利己的な金満家のユートピアである。自由主義的ユートピアは、どうしたらプリシケヴィチらを撃破せずにこれに勝てるか、どうしたら彼らをいためつけずに彼らを粉砕できるかということについての夢想である。このユートピアが、ユートピアであるからだけでなく、さらにそれが大衆の民主主義的意識を堕落させることからしても有害なことは、明らかである。このユートピアを信じる大衆は、けっして自由をかちとることはないであろう。このような大衆は、自由を得る資格がない。このような大衆が、プリシケヴィチらに嘲笑されるのは、まったく当然である。

ナロードニキとトルドヴィキのユートピアは、資本家と賃金労働者の中間に立っている小経営主の夢想であり、賃金奴隷制を階級闘争なしに廃止しようという夢想である。今日、政治的解放の問題がそうであるように、経済的解放の問題が、ロシアにとって当面の、直接の、緊急の問題となるときには、ナロードニキのユートピアも、自由主義者のユートピアにおとらず有害なものとなるであろう。

しかし、現在は、ロシアはまだプロレタリア的変革ではなく、ブルジョア的変革の時期にある。極度に成熟しているのは、プロレタリアートの経済的解放の問題ではなくて、政治的自由の問題、すなわち、(本質的には)完全なブルジョア的自由の問題である。

そして、このブルジョア的自由の問題で、ナロードニキのユートピアは独得の歴史的役割を演じている。このユートピアは、新たな土地分配の経済的結果がどのようなものとなるべきか(またどのようなものになるだろうか)ということについてのユートピアであるので、農民大衆の、すなわち、ブルジョア的=農奴制的な現在のロシアで人口の大多数を占めている大衆の偉大な、大衆的な民主主義的高揚の随伴物であり、またその徴候である。(純ブルジョア的ロシアでは、純ブルジョア的ヨーロッパにおけると同じように、農民は人口の多数者ではなくなるであろう。)

自由主義者のユートピアは大衆の民主主義的意識を堕落させる。ナロードニキのユートピアは、大衆の社会主義的意識を堕落させはするが、大衆の民主主義的高揚の随伴物であり、徴候であり、ある程度までその表現者ですらある。

歴史の弁証法によって、ナロードニキとトルドヴィキは、反資本主義的手段として、ロシアの農業問題の分野で最大限に首尾一貫した、断固たる資本主義的方策を提案し、実行している。新たな土地分割の「均等性」はユートピアであるが、しかし、新たな分割にとって欠くことのできない、

すべての古い土地所有——地主的土地所有も、分与地的土地所有も、「官有地」的土地所有もふくめて——との最も完全な絶縁は、きわめて必要な、経済的に進歩的な、そしてロシアのような国にとっては最も切実な、ブルジョア民主主義的方向の方策である。

エンゲルスの注目すべき格言を思いおこす必要がある。「経済学的見地からすれば形式上誤っていることとも、世界史の見地からすれば、それにもかかわらず、正しいものでありうる。」(23)

エンゲルスは、この深遠な命題を空想的社会主義について述べたのである。この社会主義は、経済学的見地からすれば形式上「誤って」いた。剰余価値を交換の法則の見地からみて不公正なものと言明した点では、この社会主義は「誤って」いた。この社会主義にくらべて、ブルジョア経済学の理論家たちは、経済学的見地からすれば形式上正しかった。なぜなら、剰余価値は、交換の法則からまったく「自然に」、まったく「公正に」でてくるものだからである。

だが、空想的社会主義は世界史的な見地からすれば正しかった。なぜなら、それは、資本主義によって生みだされた階級、そして二〇世紀はじめのいま、資本主義に終止符を打つ能力をもちその方向におさえようのない力ですすんでいる大衆的な力に成長した階級の徴候であり、表現者であり、前ぶれであったからである。

エンゲルスの深遠な命題は、ロシアの現代のナロードニキあるいはトルドヴィキのユートピアを評価するさいには、ぜひ念頭におかなければならない(おそらくは、ロシアばかりでなく、二〇世紀にブルジョア革命に際会している多数のアジア諸国でも)。

経済学的見地からは形式上誤っているナロードニキ的民主主義も、歴史的見地からすれば正しいものである。この民主主義は、社会主義的ユートピアとしては誤っているが、ブルジョア的変革の不可分の一要素であり、その完全な勝利の条件である、農民大衆のあの独得な、歴史的に制約された民主主義的闘争の見地からすれば正しいものである。

自由主義的ユートピアは、農民大衆に闘争をやめさせる。ナロードニキ的ユートピアは、たたかおうという農民大衆の志向を表現している。それは、勝利によって百万の恩恵があたえられると農民大衆に約束しているが、実際には、この勝利は百の恩恵しかあたえないであろう。しかし、幾世紀にわたって、未曽有の無知と、困窮と、貧困と、汚濁と、放置と、打ちひしがれた状態のなかに生きてきて、いまや闘争に立ちあがっている幾百万人が、ありうべき勝利の成果を一〇倍にも大きく見つもるのは、当然のことではないだろうか?

自由主義的ユートピアは古い搾取者といっしょに特権を分けあおうという新しい搾取者の利己的な欲望をおおうヴェールである。ナロードニキ的ユートピアは、古い封建的な搾取者をすっかりかたづけようという、幾百万の小ブルジョア勤労者の志向の表現であり、新しい資本主義的搾取者をも「同時に」排除しようという、誤った願望である。

あらゆるユートピアに敵対するマルクス主義者が、封建制と献身的にたたかうことのできる階級の自主性を固守しなければならないことは明らかである。この階級が封建制と献身的にたたかうことができるのは、まさにブルジョアジーを封建領主の中途半端な反対者にし、ときにはその同盟者にさえする所有への参加に、この階級が一〇〇分の一も「足をからまれて」いないからである、農民は、小商品生産に「足をからまれている」。彼らは、有利な歴史的事情のもとでは封建制を完全に除去することができるのだが、しかし彼らは、偶然にではなく不可避的につねに、ブルジョアジーとプロレタリアート、自由主義とマルクス主義とのあいだで、ある程度の動揺を示すであろう。

マルクス主義者は、ナロードニキ的ユートピアの殻から、農民大衆の誠実な、決然とした、戦闘的な民主主義という健全で貴重な核心を、注意ぶかく取りださなければならない。

前世紀の八〇年代の古いマルクス主義文献のなかには、この貴重な民主主義的核心を取りだそうとする系統的な努力を見いだすことができる。いつかは歴史家たちは、これらの努力を系統的に研究し、それと、二〇世紀の最初の一〇年に「ボリシェヴィズム」という名をあたえられたものとの結びつきをあとづけるであろう。

一九一二年一〇月五（一八）日以前に執筆
一九二四年に雑誌『ジーズニ』第一号にはじめて発表
署名――ヴェ・イ
全集、第五版、第二二巻、一一七―一二二ページ所収
邦訳全集、第一八巻、三八〇―三八五ページ所収

資本主義社会における貧困化

ブルジョア改良主義者、それにつづいて、社会民主主義者のあいだの一部の日和見主義者は、資本主義社会では大衆の貧困化はおこらないと主張している。「貧困化理論」は誤っている、大衆の福祉は徐々にではあるが、向上する、——有産者と無産者のあいだの溝は深まらずに小さくなる、と彼らは言う。

近来このような主張がまったくいつわりであることが、ますますはっきりと大衆の見ているところでさらけだされてきている。生計費の騰貴がひどくなっている。労働者の賃金の上昇は、最も頑強な、労働者に最大の成功をもたらすストライキ闘争の場合でさえ、労働力の必要支出が高まるのにくらべると、はるかにおくれている。一方、資本家の富は目ざましい速さで増大している。

ここにドイツの資料がある。ドイツでは、文化水準が高いおかげで、ストライキと結社の自由のおかげで、また政治的自由、数百万人の労働組合員、数百万人の労働者新聞の読者のおかげで、労働者の地位はロシアよりもくらべものにならないほどまさっている。

官庁資料に立脚するブルジョア社会政策学者の資料によれば、ドイツでは労働者の賃金は、最近三〇年間に平均二五%増大した。だが同じ期間に生活費はすくなくとも四〇%上がった!!

食料品も、衣服も、燃料も、家賃も——みな値上がりした。労働者は絶対的に貧しくなっていく、すなわち、まえとくらべてもっと貧乏になっていき、まえよりももっと悪い生活をおくり、もっと乏しい食事をとり、もっと腹をへらし、穴ぐらや屋根裏部屋に住まなければならなくなっている。

しかし、労働者の相対的貧困化、すなわち社会的所得における彼らの分けまえの減少は、もっとはっきりしている。急速に富裕になっている資本主義社会における労働者の相対的な分けまえは、ますます少なくなっている、というのは百万長者がいっそう急速に富裕になっているからである。

ロシアには所得税がない、社会の資力ある諸階級の富の増大の資料がない。わが国のこれ以上に悲惨な現実はカーテン——暗黒、非公開のカーテンでかくされている。

ドイツには有産階級の富について正確な資料がある。たとえば、プロイセンでは被課税財産のはじめの一〇〇億マルク（五〇億ルーブリ）は〔長者番付の筆頭から合計一〇〇億マルクまでは〕一九〇二年には――一八五三人の、一九〇八年には――一一〇八人の所有に属していた。

最大級の金持の数は減少した。彼らの富は増大した。彼らは一九〇二年に各人平均五〇〇万マルク（二五〇万ルーブリ）、一九〇八年に九〇〇万マルク（四五〇万ルーブリ）をもっていた！

「上層の一万人」と言われている。プロイセンでは「上層の二万一千人」の金持が一三五億マルクの財産をもち、残り一三〇万人の被課税財産所有者が三〇億マルクをもっていた。

プロイセン最高の四人の大金持（一名公爵、一名侯爵、二名伯爵）は一九〇七年に一億四九〇〇万マルクの財産を、一九〇八年には四億八一〇〇万マルクの財産をもっていた。

資本主義社会では、富は労働大衆の貧困化とならんで未曾有の速さで増大している。

『プラウダ』[一六四] 第一八一号、一九一二年一一月三〇日　署名――ヴェ
全集、第五版、第二二巻、二二一―二二二ページ所収
邦訳全集、第一八巻、四六六―四六七ページ所収

カール・マルクスの学説の歴史的運命

マルクスの学説における主要なものは、社会主義社会の創設者となるプロレタリアートの世界史的役割を解明したことである。マルクスがこの学説を述べたのち、全世界で生じた諸事件の経過は、この学説を確証したであろうか？

マルクスがはじめてこの学説を提唱したのは一八四四年であった。一八四八年にでたマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』は、すでにこの学説について、まとまった、系統的な、今日でもこれにまさるもののない叙述をあたえている。このとき以後の世界史は、明らかに、三つの主要な時期に分けられる。すなわち、（一）一八四八年の革命[一六五]からパリ・コミューン[一六六]（一八七一年）まで、（二）パリ・コミューンからロシア革命（一九〇五年）まで、（三）ロシア革命以後。

これらの時期のそれぞれにマルクスの学説がたどった運命を概観してみよう。

一

第一期のはじめには、マルクスの学説はけっして支配的ではなかった。それは、非常にたくさんあった社会主義の諸分派または諸潮流の一つにすぎない。支配的だったのは、根本においてわが国のナロードニキ主義に似かよった形態の社会主義であった。すなわち、歴史的運動の唯物論的な基礎を理解していないこと、資本主義社会のおのおのの階級の役割と意義を区別できないこと、民主主義的な改革のブルジョア的本質を「人民」とか「正義」とか「権利」などというさまざまなえせ社会主義的な空文句でおおいかくしていることがそれである。

一八四八年の革命は、前マルクス主義的社会主義のこれらすべての騒々しい、雑多な、仰々しい諸形態に、致命的な打撃をあたえた。この革命は、すべての国で、さまざまな社会階級がいかに行動するかを示した。一八四八年のパリの六月事件(三)で共和主義的ブルジョアジーが労働者を射殺したことによって、プロレタリアートだけが社会主義的本性をもっていることが、最後的に確証された。自由主義的ブルジョアジーは、どんな反動派よりも、プロレタリア階級の自主性のほうを、一〇〇倍もおそれていた。臆病な自由主義派は反動派のまえにはいつくばった。農民は封建制度の残存物が廃止されたことで満足して、現秩序の味方にうつり、ただときおり労働者民主主義派とブルジョア自由主義派のあいだを動揺しただけであった。非階級的な社会主義や非階級的な政治を説く学説は、すべて空虚なたわごとであることがわかった。

パリ・コミューン（一八七一年）は、ブルジョア的改革のこういう発展を終わらせた。ひとえにプロレタリアートの英雄主義のおかげで、共和制――すなわち、階級関係が最もあからさまなかたちで現われてくる国家組織の形態――が確立された。

ヨーロッパの他のすべての国では、もっとこみいった、もっと未完成な発展の結果として、やはり同じブルジョア社会がかたちづくられた。あらしと革命の時期である第一期（一八四八―一八七一年）の終りには、前マルクス主義的社会主義は死滅していった。自主的なプロレタリア諸政党、すなわち第一インタナショナル（一八六四―一八七二年）とドイツ社会民主党が生まれた。

二

第二期（一八七二—一九〇四年）は、「平和的な」性格の点で、革命がない点で、第一期と違っている。西欧はブルジョア革命を終わっていたし、東洋はまだそこまで成長していなかった。

西欧は、未来の改革の時代を「平和的に」準備する局面にはいった。どこでも、根本においてプロレタリア的な社会主義政党がかたちづくられ、これらの党はブルジョア議会制度を利用し、それ自身の日刊新聞、それ自身の啓蒙機関、それ自身の労働組合、それ自身の協同組合をつくりだすことを学んだ。マルクスの学説は完全な勝利をおさめ、そして——幅をひろげていった。プロレタリアートの勢力をよりぬき結集する過程、きたるべき戦闘にそなえて彼らを訓練する過程が、ゆっくりと、だが着実にすすんでいった。

歴史の弁証法によって、マルクス主義の理論的勝利は、その敵に、マルクス主義者に仮装することを余儀なくさせた。内部からくさってしまった自由主義は、社会主義的な日和見主義のかたちでよみがえろうと試みた。偉大な戦闘にそなえて勢力を訓練する時期を、彼らは、これらの戦闘を放棄するという意味に解釈した。賃金奴隷制に反対してたたかうために奴隷の状態を改善するということを、彼らは、五コペイカ銅貨とひきかえに奴隷が自分の自由の権利を売るという意味に説明した。彼らは、臆病にも、「社会平和」（すなわち奴隷所有者との平和）や、階級闘争の否認、等々を説いた。社会主義的議員や、労働運動のいろいろの役員や、インテリゲンツィアの「同情者」のなかに、彼らの味方は非常に多かった。

三

日和見主義者たちが「社会平和」をほめたたえ、「民主主義」のもとではあらしが必要でないことをほめたたえるひまもないうちに、アジアに巨大な世界的なあらしの新しい源泉がひらかれた。ロシア革命につづいて、トルコ、ペルシア、中国の革命が起こった。われわれはいままさに、これらのあらしの時代、そしてそれがヨーロッパに「反映」する時代に生きている。いまさまざまな「文明的な」豺狼がきばをといでねらっている偉大な中華共和国の運命がどうなるにしても、世界のどんな力も、アジアに古い農奴制を復活し、アジアおよび半アジア諸国の人民大衆の英雄的な民主主義を地表から一掃することはできないであろう。

大衆闘争が準備され発展していく条件に注意をはらわない一部の人々は、ヨーロッパで資本主義にたいする決定的闘争がながらく延期されたために、絶望と無政府主義に陥っていった。いまでは、無政府主義的な絶望がどれほど近視眼的で臆病なものであるかがわかる。

八億の人口をもつアジアがヨーロッパと同じ理想のための闘争に引きいれられているという事実からは、絶望ではなく、勇気を汲みとらなければならない。

アジアの諸革命もまた同じように、自由主義派が無定見で卑劣なこと、民主主義的大衆の自主性が非常に重要であること、プロレタリアートとあらゆる種類のブルジョアジーとのあいだには明白な境界があることを、われわれに示した。ヨーロッパでもアジアでもあれだけのことを経験してきたあとで、まだ非階級的な政治や非階級的な社会主義を説くものは、まったく、檻に入れてオーストラリアのカンガルーとでもいっしょに見せ物にしてしかるべきである。

アジアのあとからヨーロッパも――ただし、アジアふうにではなく――動きはじめた。一八七二―一九〇四年の「平和的な」時期は永久に去ってかえらない。物価騰貴とトラストの圧迫は経済闘争をかつて見たことのないほど激化させているし、自由主義によっていちばんひどく腐敗させられたイギリスの労働者をさえ立ち上がらせている。最も「頑迷な」ブルジョア＝ユンカー的な国であるドイツでさえ、政治的危機がわれわれの目のまえで成熟しつつある。狂気のような軍備拡張と帝国主義政策とによって、現代のヨーロッパは、なによりも火薬樽に似た「社会平和」へとつくりかえられてゆく。そして、あらゆるブルジョア政党の分解とプロレタリアートの成熟とがたゆみなくすすんでいる。

マルクス主義が出現してから世界史が経た三つの大きな時代は、それぞれマルクス主義に新しい確証と新しい勝利をもたらした。しかし、きたるべき歴史的時代は、プロレタリアートの学説としてのマルクス主義に、いっそう大きい勝利をもたらすであろう。

『プラウダ』第五〇号、一九一三年三月一日
全集、第五版、第二三巻、一―四ページ所収
邦訳全集、第一八巻、六二七―六三一ページ所収

マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分(一九)

マルクスの学説は、マルクス主義をなにか「有害な宗派」のようなものとみなしているブルジョア科学全体(官学的なものも自由主義的なものも)のきわめて大きな敵意と憎悪を全文明世界で呼びおこしている。これ以外の態度など期待しようもない。なぜなら階級闘争のうえにきずかれている社会に「公平無私の」社会科学はありえないからである。官学と自由主義的な科学は、いずれにせよ、すべて賃金奴隷制を擁護しているが、マルクス主義は、この奴隷制度にたいして容赦ない戦いを宣言したのである。賃金奴隷制の社会で公平無私の科学を期待するのは、資本の利潤を減らして労働者の賃金をふやすべきではないかという問題で、工場主の公平無私な態度を期待するのと同じくらい、ばかげたおめでたいことである。

だが、それだけではない。哲学の歴史と社会科学の歴史とがまったく明瞭に示しているように、マルクス主義には、世界文明の発展の大道のそとで発生した、なにか閉鎖的で、硬化した学説という意味での「セクト主義」らしいものはなにもない。反対に、人類の先進的な思想がすでに提起していた問題に答えをあたえた点にこそ、まさにマルクスの天才がある。彼の学説は、哲学、経済学、社会主義の最も偉大な代表者たちの学説をまっすぐ直接に継続したものとして生まれたのである。

マルクスの学説は、正しいからこそ全能である。それは、完全で、整然としていて、どんな迷信、どんな反動ともあいいれず、ブルジョア的圧制を擁護することとはおよそあいいれない全一的な世界観を人々にあたえる。それは、人類が一九世紀にドイツ哲学、イギリス経済学、フランス社会主義というかたちでつくりだした最良のものの正統の継承者である。

マルクス主義のこの三つの源泉について、またそれとともにその三つの構成部分について、簡単に述べてみよう。

一

マルクス主義の哲学は唯物論である。唯物論は、ヨーロ

ッパの近代史全体をつうじて、とくに一八世紀の終りのフランス――そこではあらゆる中世的がらくたに反対し、制度上の農奴制と思想上の農奴主義とに反対する断固たる戦いがもえあがった――では、自然科学のあらゆる学説に忠実で、迷信やえせ信心などに敵対するただ一つ首尾一貫した哲学であった。そこで、民主主義の敵は、全力をあげて唯物論を「論駁し」、くつがえし、中傷することに懸命になり、いずれにせよ、結局はつねに宗教を擁護するか支持することに帰着する、さまざまな形態の哲学的観念論を擁護した。

マルクスとエンゲルスは、断固として哲学的唯物論を主張し、この基礎から逸脱することはすべてはなはだしい誤りであることを、たびたび説明した。彼らの見解は、エンゲルスの著作『ルードヴィヒ・フォイエルバッハ』と『反デューリング論』のなかに最も明瞭に、また詳しく述べられているが、これらの著作は――『共産党宣言』と同じく――自覚した労働者のだれもがかならず座右におくべき書物である。

しかし、マルクスは一八世紀の唯物論にたちどまってはいないで、哲学をさらに前進させた。彼は哲学を、ドイツ古典哲学、とくにヘーゲルの体系の諸成果によって豊かにした。このヘーゲルの体系は、それとして、フォイエルバッハの唯物論に導いたものである。この成果のうちの主要なものは、弁証法である。すなわち、最も完全で、深遠で、一面性を脱却した発展にかんする学説、永遠に発展する物質の反映をわれわれにあたえる人間の知識の相対性にかんする学説である。自然科学の最近の諸発見――ラジウム、電子、元素の変換――は、古い、腐敗した観念論へ「新たに」復帰しているブルジョア哲学者の諸学説に反して、マルクスの弁証法的唯物論の正しさをみごとに確証した。

マルクスは、哲学的唯物論をふかめ、発展させ、さらに徹底させ、その自然認識を人間社会の認識へとおしおよぼした。科学思想の最大の成果は、マルクスの史的唯物論であった。それまで歴史観と政治観を支配していた混沌と気ままは、驚くほど全一的な、整然とした科学的な理論にとってかわられた。この理論は、生産力の発展の結果として、社会生活の一つの制度から、他の、より高度の制度が発展してくること――たとえば、農奴制から資本主義が成長してくること、を示している。

人間の認識が、人間とは独立に存在する自然、すなわち発展しつつある物質を反映するのとまったく同じように、人間の社会的認識（すなわち哲学的、宗教的、政治的、その他のさまざまな見解や学説）は社会の経済的構造を反映する。政治的諸制度は、経済的基礎の上に立つ上部構造で

ある。たとえば、近代のヨーロッパ諸国家のさまざまな政治形態が、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの支配の強化に役立っているのを、われわれは見ているのである。

マルクスの哲学は完成された哲学的唯物論であって、それは人類に、とくに労働者階級に、偉大な認識の道具をあたえた。

二

経済的構造はその上に政治的上部構造が立つ基礎であることを認めたマルクスは、この経済的構造の研究に最も大きな注意をはらった。マルクスの主著『資本論』は、近代社会すなわち資本主義社会の経済的構造の研究にあてられたものである。

マルクス以前の古典経済学は、最も発展した資本主義国であったイギリスでかたちづくられた。アダム・スミスとデーヴィド・リカードは、経済構造を研究して、労働価値説の基礎をきずいた。マルクスは彼らの事業を継続した。彼はこの理論を厳密に基礎づけ、それを首尾一貫して発展させた。彼は、すべて商品の価値はその商品の生産に支出される社会的必要労働時間の量によって決定されることを示した。

ブルジョア経済学者が物と物の関係（商品と商品の交換）を見たところに、マルクスは人間と人間の関係を示した。商品交換は、市場を媒介とする個々の生産者の結びつきを表現する。貨幣は、この結びつきがますます緊密になって、個々の生産者たちの全経済生活を切り離せないように結合して一つの全体にしていることを意味する。資本は、この結びつきのいっそうの発展を意味する。つまり、人間の労働力が商品となるのである。賃金労働者は自分の労働力を、土地、工場、労働用具の所有者に売る。労働者は労働日の一部を自分と家族との生産費を償うために使い（賃金）、労働日の他の部分をただで働いて、資本家のために剰余価値をつくりだす。この剰余価値が、利潤の源泉であり、資本家階級の富の源泉なのである。

剰余価値説は、マルクスの経済理論の礎石である。

労働者の労働によってつくりだされた資本は、小経営主を零落させ、失業者軍をつくりだすことによって、労働者を圧迫する。工業では、大規模生産の勝利は一目瞭然であるが、農業でも同じ現象が見られる。すなわち、大規模な資本主義的農業の優位が増大し、機械の使用が増し、農民経営は貨幣資本のわなにかかり、おくれた技術の重圧のもとに衰え、零落する。農業では小規模生産の衰退の形態は

違っているが、小規模生産の衰退そのものは争えない事実である。

資本は小規模生産を破壊することによって、労働生産性を増大させ、巨大資本家たちの連合の独占的地位をつくりだす。生産そのものはますます社会的となる――数十万、数百万の労働者が計画的な経済的有機体に結びつけられていく。――しかし、共同労働の生産物は、ひとにぎりの資本家によって取得される。生産の無政府性、恐慌、気違いじみた市場追求、住民大衆の生活不安が増大する。

資本主義体制は労働者の資本への隷属を増大させると同時に、結合された労働という偉大な力をつくりだす。

マルクスは、商品経済の最初の萌芽である単純な交換から、資本主義の最高の諸形態、大規模生産にいたるまで、資本主義の発展をあとづけた。

そして、古い国も新しい国も、すべての資本主義国の経験は、マルクスのこの学説の正しさを、年ごとにますます多数の労働者にまざまざと示している。

資本主義は全世界で勝利した。しかし、この勝利は、資本にたいする労働の勝利の前段階にすぎない。

三

農奴制がくつがえされて、「自由な」資本主義社会がこの世に現われると、この自由が勤労者の抑圧と搾取との新しい制度を意味することが、たちまち明らかになった。この抑圧の反映として、またそれにたいする抗議として、ただちにさまざまな社会主義学説が発生しはじめた。だが、最初の社会主義は空想的社会主義であった。それは資本主義社会を批判し、非難し、のろい、それの廃止を夢想し、よりよい制度を空想し、富者にたいして搾取の不道徳なことを説いた。

しかし、空想的社会主義は真の活路を示すことができなかった。それは、資本主義のもとでの賃金奴隷制の本質を説明することも、資本主義の発展法則を発見することもできず、また新しい社会の創造者となる能力をそなえた社会勢力を見いだすこともできなかった。

そのあいだに、ヨーロッパのいたるところで、とくにフランスで、封建制度、農奴制の没落にともなうあらしのような革命は、階級闘争が全発展の基礎であり推進力であることを、ますます明瞭に示した。

農奴主階級にたいする政治的自由のどの勝利も、必死の抵抗にあわずに獲得されたものは一つもなかった。どの資本主義国も、資本主義社会のさまざまな階級のあいだの生死をかけた闘争によらずに、多少とも自由な民主主義的基

礎の上に形成されたものは一つもなかった。

マルクスの天才は、彼がだれよりもさきにこのことから、世界史の教える結論を引きだし、それを首尾一貫しておしすすめることを理解した点にある。この結論が階級闘争の学説である。

人々が、あらゆる道徳的、宗教的、政治的、社会的な空文句や声明や約束のかげにあれこれの階級の利害を見つけだすことを学ばないうちは、彼らはいつでも政治上の欺瞞と自己欺瞞との愚かしい犠牲者であったし、今後もまたつねにそうであるだろう。すべて古い制度というものは、どんなに野蛮で腐朽しているように見えても、あれこれの支配階級の力によって維持されているのだということを、改良や改善の賛成者が理解しないうちは、彼らはつねに古いものの擁護者によって愚弄されるであろう。そして、これらの階級の抵抗を粉砕するには、ただ一つの手段しかない。それは、古いものを一掃して新しいものをつくりだす能力をもつ力となることができるし、またその社会的地位からして、そうならざるをえない勢力を、われわれのまわりの社会そのもののなかに見いだし、この勢力を啓蒙して、闘争へ組織することである。

マルクスの哲学的唯物論だけが、今日まですべての被抑圧階級にいじけた生活をおくらせてきた精神的奴隷状態から抜けでる道を、プロレタリアートに示した。マルクスの経済理論だけが、資本主義制度全体のなかでのプロレタリアートの真の地位を明らかに示した。

アメリカから日本まで、スウェーデンから南アフリカまでの全世界で、プロレタリアートの自主的な組織の数がふえている。プロレタリアートは、その階級闘争をおこないながら自分を啓蒙し教育し、ブルジョア社会の偏見からまぬがれ、ますます緊密に結束し、自分の成功の度合いをはかることを学び、自分の勢力をきたえ、おさえがたい力で成長している。

『プロスヴェシチェーニエ』[一六]第三号（マルクス死後三〇年記念号）、一九一三年三月
全集、第五版、第二三巻、四〇―四八ページ所収
邦訳全集、第一九巻、三―九ページ所収

アジアの目ざめ

中国が長年にわたって完全に停滞している国の典型として名高かったのは、遠い昔のことであったろうか？　ところが、いま中国には、政治生活がわきたち、社会運動と民主主義的高揚が湧き出ている。一九〇五年のロシアの運動につづいて、民主主義革命が全アジアを――トルコ、ペルシア、中国をとらえた。英領インドでは動揺がたかまっている。

いまや革命的民主主義運動が、蘭領インド、ジャワ島、その他人口約四千万のオランダ植民地にも波及したことは、興味ぶかいことである。

この民主主義運動の担い手は、第一に、回教の旗のもとに民族主義運動がおこってきたジャワの人民大衆である。第二に、資本主義は、現地に定着したヨーロッパ人で蘭領インドの独立を支持しているもののなかから、地元のインテリゲンツィアをつくりだした。第三に、ジャワその他の島々にいるかなり多くの華僑が母国から革命運動をもちこんできた。

オランダのマルクス主義者ファン-ラヴェスタインは、この蘭領インドの目ざめについて書き、オランダ政府の昔ながらの専制政治と横暴がいまや地元民大衆のあいだで断固たる反抗と抗議に出あっている、と指摘している。

革命の前夜に通例生じる現象が起きている。驚くべき速さでいろいろな団体や政党が生まれているのである。政府はそれらを禁止しているが、そのためかえっていっそうの憤激と運動の新しい成長を呼びおこしている。たとえば、オランダ政府は最近、その規約と綱領に独立の欲求が述べられたという理由で「インド党」(一六)を解散させた。オランダのデルジモルダ(一七)［おまわり］（ちなみに、この「おまわり」は教権主義者からも自由主義者からも是認されている。ヨーロッパの自由主義も腐敗したものだ！）は、このなかにオランダから分離しようという犯罪的欲求を見いだしたのだ！　解散された党は、もちろん、別の名称で復活した。

ジャワでは、すでに八万の会員をもち、大衆集会を組織している地元民の民族的団体が生まれた。民主主義運動の成長はおさえられないものとなっている。

世界資本主義と一九〇五年のロシアの運動は決定的にア

ジアをゆりおこした。しいたげられ、中世的停滞のなかにとじこめられていた無知蒙昧の幾億の住民が、新しい生活に目ざめ、基本的人権のため、民主主義のための闘争に目ざめたのである。

世界の先進諸国の労働者は、世界のあらゆる部分であらゆる形態をとった世界的な解放運動のこの力づよい成長を、関心と熱意をこめて見まもっている。労働運動の力におびえたヨーロッパのブルジョアジーは、反動派、軍閥、坊主主義、非開化主義の抱擁に身をゆだねた。しかし、この生きながら朽ちはてつつあるブルジョアジーに代わって、ヨーロッパのプロレタリアートと、自信と大衆への信頼にみちた、アジア諸国の若い民主主義者が登場している。

アジアの目ざめとヨーロッパの先進的プロレタリアートによる権力獲得闘争の開始とは、二〇世紀の初めにひらかれた世界史の新しい時代をあらわしている。

『プラウダ』第一〇三号、一九一三年五月七日
署名――エフ
全集、第五版、第二三巻、一四五―一四六ページ所収
邦訳全集、第一九巻、七二―七三ページ所収

後進的なヨーロッパと先進的なアジア

こういうことばの並べ方は逆説のようにおもえるであろう。ヨーロッパが先進的で、アジアが後進的だということを、知らないものがあろうか？　しかし、この論文の標題にもちいられたことばには、にがい真実がある。

輝かしい発達した技術と、豊かな、全面的な文化と憲法とをもった文明的・先進的なヨーロッパには、成長し強化するプロレタリアートにたいする恐怖から、支配権をにぎるブルジョアジーが、あらゆる後進的なもの、死にかかっているもの、中世的なものを支持するような歴史的時期がやってきた。寿命のつきかけたブルジョアジーは、ぐらついている賃金奴隷制を維持するために、あらゆる寿命のつきはてた勢力や、つきかけようとしている勢力とむすびついている。

先進的ヨーロッパでは、すべて後進的なものを支持するブルジョアジーが支配権をにぎっている。今日ヨーロッパが先進的なのは、ブルジョアジーのおかげではなく、反対にブルジョアジーにさからってである。なぜなら、ひとりプロレタリアートだけがよりよき未来のための闘士の百万の大軍をますます増大させているし、ひとりプロレタリアートだけが後進性、野蛮、特権、奴隷制、人間による人間の侮辱にたいする容赦ない敵意をいだきつづけ、ひろくゆきわたらせているからである。

「先進的な」ヨーロッパで先進的な階級は、プロレタリアートだけである。だが、まだ生きているブルジョアジーは、ほろんでいく資本主義的奴隷制をまもるためならば、どんなに野蛮な野獣的な行為も、犯罪さえもいとわない。

そして、ヨーロッパのブルジョアジー全体のこのような腐敗の実例としては、金融業者や詐欺師である資本家の貪欲な目的をみたすために、彼らがアジアで反動を支持していることと以上に、はっきりした例をあげることはできまい。

アジアではいたるところで、力づよい民主主義運動が成長し、拡大し、強化しつつある。そこではまだブルジョアジーが、人民と手をむすんで反動にたちむかっている。幾億の人々が、生活に、光明に、自由に目ざめかけている。この世界的運動は、集団主義への道が民主主義をとおっていることを知っているすべての自覚した労働者の胸に、なんという歓喜を呼びおこしていることだろう！　すべての誠実な民主主義者は、若いアジアにどんなに共鳴していることだろう？

ところが、「先進的な」ヨーロッパはどうか？「先進的な」ヨーロッパは、中国を略奪し、中国における民主主義の敵、自由の敵をたすけているのだ！

さてここに簡単だが、教訓に富んだ計算がある。中国にたいする新しい借款が中国の民主主義派の利益に反して締結された。「ヨーロッパ」は軍事的独裁を準備している袁世凱を支持しているのである。なぜヨーロッパは彼を支持するのか？　ちょっとしたもうけ仕事のチャンスがあるからだ。この借款は、額面一〇〇にたいする八四の相場で、総額約二億五千万ルーブリとして締結された。したがって、「ヨーロッパ」のブルジョアは、中国人に二億一千万ルーブリを支払い、民衆からは二億二五〇〇万ルーブリをとりあげることになる。どうだ、わずか数週間のあいだに、一挙に一五〇〇万ルーブリの純益となるのだ！　これこそ、ほんとうの「純」益ではないか？

だが、もし中国の人民が借款を承認しなかったらどうか？　中国には共和制があるではないか、国会の大多数は借款に反対しているではないか？

おお、そうなったら「先進的な」ヨーロッパは、「文明」、「秩序」、「文化」、「祖国」についてどなりだすことであろう！　そうなったらヨーロッパは、大砲をうごかし、冒険主義者で、裏切者で、反動の友である袁世凱と同盟して、「後進的な」アジアの共和国をおしつぶすことであろう！
　全ヨーロッパの支配勢力、全ヨーロッパのブルジョアジーは、中国における反動と中世的制度のいっさいの勢力と同盟をむすんでいる。
　そのかわり、若い全アジア、すなわちアジア幾億の勤労者は、すべての文明諸国のプロレタリアートという信頼できる同盟者をもっている。ヨーロッパの諸民族とアジアの諸民族とをともに解放する、プロレタリアートの勝利は、世界中のどんな力もこれをはばむことができないであろう。

『プラウダ』第一一三号、一九一三年五月一八日
全集、第五版、第二三巻、一六六—一六七ページ所収
邦訳全集、第一九巻、八七—八九ページ所収

階級闘争の自由主義的概念とマルクス主義的概念について

覚え書

解党派のア・エルマンスキーは、大商工ブルジョアジーの政治的役割の問題についての彼（とグシカ）の見地にたいする私の批判（『プロスヴェシチェーニエ』第五—七号）[七七]にいきりたって、『ナーシャ・ザリャー』[七八]紙上で、悪口雑言を浴びせてきた。
　エルマンスキー氏は喧嘩口調と、以前にくわえられた「侮辱」（一九〇七年にサンクト-ペテルブルグの社会民主党組織を分裂させようと試みて失敗したダン氏一派にたいしてくわえられた「侮辱」をふくめて）の回想で、問題の真の本意をごまかそうとつとめている。
　しかしわれわれは、エルマンスキー氏が、不当な侮辱や解党派の敗北の回想によって現在の論争の本質をごまかす

のを、ゆるさない。なぜなら、現在の論争は、無数のさまざまなきっかけから、たえずあらたにおこってくるきわめて重要な原則的問題に関係しているからである。

それは、まさにマルクス主義の自由主義的偽造の問題であり、階級闘争についてのマルクス主義的、革命的見解の、自由主義的見解によるすりかえの問題である。マルクス主義者と解党派とのあらゆる論争のこの思想的基礎を、われわれは倦むことなく解明するであろう。

ア・エルマンスキー氏はつぎのように書いている。

『マルクス主義者』イリイン〔レーニンをさす〕は、工業諸団体の活動のなかに、『全国民的規模での』(部分的には国際的な規模でさえもの)階級闘争を見いだすこと——私(エルマンスキー)が自分の論文のなかでこの階級闘争を特徴づけたように——に、どうしても同意しない。なぜか? なぜなら、ここでは、『全国民的なもの、全国家的なものの、基本的標識、すなわち国家権力の構造を欠いている』からである」……(『ナーシャ・ザリャー』五五ページ)。

これこそ、問題の本質を回避するために、可能なことであれ不可能なことであれ、ありとあらゆることをやってのけるア・エルマンスキー自身のあたえた、問題の本質の叙述である! 彼が私を、彼の見解を歪曲したとか、あらゆる大罪をおかしたとかいってどんなに非難しようとも、彼が一九〇七年の分裂の回想の「かげに」のがれることによってどんなにごまかそうとしても、真実はやはり勝つのである。

ところで、私の命題は明白である。すなわち、全国民的なものの基本的標識は、国家権力の構造である。私のおこりっぽい論敵よ、あなたはこの見解には賛成しないのか? これが唯一のマルクス主義的見解であることを、あなたは認めないのか?

そうだとすれば、なぜあなたはそのことをはっきりと言わないのか? どうしてあなたはまちがった見解に、正しい見解を対置しないのか? 全国民的なものの基本的標識は国家権力の構造であるという主張が、あなたの意見では、かっこづきのマルクス主義にすぎないとすれば、なぜあなたは私の誤りを論駁しないのか、マルクス主義にたいするあなたの見方をはっきり、明白に、ごまかさずに、述べようとしないのか?

ここにあげた議論に直接つづくア・エルマンスキー氏の議論を引用するなら、これらの問いにたいする答えは読者にはっきりするだろう。

「イリインは、ロシアの大ブルジョアジーが彼らの階級闘争を別な仕方でおこなうように、つまり彼らがかな

らず国家機構全体の変更を目標とするように、のぞんでいるのである。イリインはそうのぞんでいるのだが、しかしブルジョアジーはのぞんでいない——だがこの点でとががあるのは、もちろん、『解党主義者』のエルマンスキーである。というのは、彼は、『マルクスの言う意味での階級闘争の概念を、階級闘争の自由主義的概念とすりかえている』のだから。」

これが、言いのがれをしようとする解党主義者を犯罪の現場で見つけさせるような、エルマンスキー氏のお談義の全部である。

言いのがれは見えすいている。

私が全国民的なものの「基本的標識」を指摘したのは正しかったかどうか？

ア・エルマンスキー氏自身、私がまさに問題のこの本質を指摘したことを認めないわけにはいかなかった。

そしてエルマンスキー氏は、見つかったと感じて、回答を避けている！

私が指摘した基本的標識が正しいか、正しくないかという問題を避けながら、「見つけられた」エルマンスキー氏は、この問題をとびこえて、イリインとブルジョアジーがなにを「のぞんでいる」かという問題へうつっている。しかし、エルマンスキー氏の飛躍がどんなに勇敢でも、どんなに必死でも、彼は自分が見つけられたことをそれでかくしおおせるものではない。

親愛なわが論敵よ、階級闘争の概念について論争がおこなわれているというのに、いったい「望み」などなんの関係があるのか⁉ マルクス主義的概念を自由主義的概念とすりかえたという点で私があなたを非難しているということ、また私が、全国民的階級闘争のなかへ国家権力の構造をふくめるマルクス主義的概念の「基本的標識」を指摘したということを、あなた自身認めなければならなかったのだ。

ア・エルマンスキー氏は、おこりっぽいがすこぶる不器用な論戦家で、そのため彼自身、一般に解党主義と、とくに彼エルマンスキー氏の誤りと、階級闘争の自由主義的概念との結びつきを、身をもってはっきりと説明してしまった！

階級闘争の問題は、マルクス主義の最も基本的な問題の一つである。だから、ほかならぬ階級闘争の概念については、もっとくわしく立ちいってみる価値がある。

階級闘争は、すべて政治闘争である。自由主義思想の奴隷となった日和見主義者が、マルクスのこの深遠なことばを曲解し、これを歪曲して説明しようとつとめたことは、たとえば周知のとおりである。日和見主義者に属していたのは、たとえば、解党派の兄にあたる「経済主義者」である。「経

済主義者」は、階級と階級とのどんな衝突でも、それだけですでに政治闘争であると考えていた。だから「経済主義者」は、政治のためのもっと高度な、発展した、全国民的な階級闘争を見ようとしないで、一ルーブリにつき五コペイカのための闘争を「階級闘争」とみなしていた。このように、「経済主義者」は、萌芽的な階級闘争を認めて、発展した形でのそれを認めなかった。言いかえれば、「経済主義者」は階級闘争のうちに、自由主義的ブルジョアジーの見地からみて最も受けいれやすいものだけを認め、自由主義者より先へすすむことを拒否し、より高度な、自由主義者には受けいれることのできない階級闘争を認めることを拒否した。「経済主義者」はそれによって、自由主義的な労働政治家になったのである。「経済主義者」はそれによって、階級闘争のマルクス主義的、革命的概念を拒否したのだ。

さらに、階級闘争はそれが政治の分野をとらえるときはじめてほんとうの、首尾一貫した、発展したものとなるというだけではまだ足りない。政治においても、瑣末な部分的なものだけにかぎることもできれば、いっそう深くつきすすみ、基本的なものに達することもできる。マルクス主義は、階級闘争が政治をとらえるだけでなく、また政治において、最も本質的なもの、すなわち国家権力の構造を取りあげる場合に、はじめてこの階級闘争を完全に発展した、「全国民的な」階級闘争とみなす。

これに反して自由主義は、労働運動がいくらか地歩をかためると、階級闘争を否定しようとはもうあえてしないが、しかし階級闘争の概念をせばめ、きりちぢめ、去勢しようとつとめる。自由主義は、政治の分野でも階級闘争を認める用意はもっているが、しかしその分野に国家権力の構造をふくめないという一つの条件をつけたうえのことである。ブルジョアジーのどんな階級的利益が、階級闘争の概念のこういう自由主義的歪曲を呼びおこすかは、理解にかたくない。

ところで、エルマンスキー氏が穏健で几帳面な官吏グシカの労作を受けうりして、彼と提携し、階級闘争の概念の自由主義的去勢に気づかなかった（あるいは見たがらなかった？）ときに、私はエルマンスキー氏に、彼のこの根本的な理論的、一般原則的過誤を指摘したのである。ア・エルマンスキー氏は、私の指摘をくつがえすことができないで立腹し、ののしり、逃げをはり、言を左右にするようになった。

このとき、ア・エルマンスキー氏は、おのれ自身を特別はっきりとさらけだしたほど、不器用な論戦家ぶりを発揮した！「イリインはのぞんでいるが、ブルジョアジーは

のぞんでいない」と彼は書いている。いまやわれわれは、プロレタリア的見地（マルクス主義の見地）とブルジョア的見地（自由主義の見地）とのどんな特質が、これらの「望み」の相違を呼びおこすかを知っている。

ブルジョアジーは階級闘争をきりちぢめ、その概念をゆがめ、せばめ、その鋭鋒をにぶらせることを「のぞんでいる」。プロレタリアートは、この欺瞞が暴露されることを「のぞんでいる」。マルクス主義者は、マルクス主義の名においてブルジョアジーの階級闘争のことを語りはじめる人間が、ただ数字を引用したり、「大きな」数字に大喜びをするだけでなく、階級闘争のブルジョア的概念の狭さを、しかも欲得ずくの狭さをさらけだすことをのぞんでいる。自由主義者はブルジョアジーと彼らの階級闘争を、その狭さを黙過するように、またこの闘争に「基本的なもの」、最も本質的なものをふくませないのを黙過するように評価することを「のぞんでいる」。

ア・エルマンスキー氏は、彼が、興味ぶかくはあるが、しかしグシカ氏によって無思想的に、あるいは奴隷的に算出された数字について、自由主義的に考察したところを見つけられた。このことが暴露されたとき、ア・エルマンスキー氏としては、ののしったり言を左右にしたりする以外に、どうするすべもなかったことは当然である。

ア・エルマンスキー氏の論文の引用を、さきに打ちきった箇所から、さらにつづけてみよう。

「実際には、ここではイリインだけが、現実の事態の研究を、自分のあたえる規定とすりかえること、それどころか（!!）フランス大革命史上の生徒用の標本からつくった紋切型のものさしとすりかえていることは明白である。」[一三]

ア・エルマンスキー氏は、ますます無慈非に自分を「ほろぼす」ほど混乱してしまった！　彼は、フランス大革命の「紋切型」にたいするこの怒りにみちた攻撃によって、彼の自由主義がどんなにさらけだされ、暴露されたかに気がついていない！

親愛なエルマンスキー氏よ、現実の事態をマルクス主義的に、あるいは自由主義的に、あるいは反動的に、あるいはその他のやり方で規定せずには、それを評価せずには、「現実の事態を研究する」ことはできないということを理解してもらいたい（それが解党主義者にとってどんなに困難であろうとも）！

善良な官吏グシカの「研究」を、エルマンスキー氏よ、あなたは自由主義的に規定したし、いまも規定しているが、私はそれをマルクス主義的にやっている。ここに、いっさいの核心がある。批判的分析を国家権力の構造という問題

のしきいぎわで止めてしまったあなたは、それによって、あなたの階級闘争の概念の自由主義的限界性を証明したわけである。

このことこそ、証明を必要としたものである。

フランス大革命の「紋切型」にたいするあなたの攻撃は、あなたの尻尾を暴露している。というのは、ここでは紋切型だとか、フランス的標本とかいうことが問題ではないということは、だれでもわかることだからである——たとえば、広範な規模のストライキは、当時、「紋切型と標本」の諸条件のもとでは、存在しなかったし、また存在しえなかったのである。政治的ストライキはとくにそうだったのだ。

問題は、解党主義者となったあなたが、革命的見地を社会的諸事件の評価に適用することをわすれた点にある。ここが肝心かなめのところだ！　マルクスはけっして自分の考えを、一八世紀末の「紋切型と標本」にかぎることをしないで、階級闘争をつねに、最もふかく評価し（善良なエルマンスキー氏よ！　もっと「学者的な」ことばがあなたのお気に召すなら、「規定をあたえ」）、階級闘争が「基本的なもの」にふれているかどうかをつねにあきらかにし、思想のあらゆる臆病さを、未熟な、去勢された、欲得ずくでゆがめられた階級闘争のあらゆる隠蔽を容赦なくたたきつけながら、つねに革命的な見地をとっていたのである。

一八世紀末には、階級闘争は、それがどのようにして政治的なものになるか、どのようにして真に「全国民的な」形態に到達するかをわれわれに示した。それ以後、資本主義の発展の高さも、プロレタリアートのそれも、驚くほど変化した。古いものの「紋切型」は、たとえば、すでに一部分私がさきに指摘した新しい闘争形態を研究することをだれにも中止させはしないだろう。

しかしマルクス主義者の見地は、つねに、浅薄な「評価」ではなくて、深い「評価」を要求するであろうし、つねに、自由主義的な歪曲、言いのこし、臆病な隠蔽の、みすぼらしさをあばきだすであろう。

解党派は社会現象を革命的見地から見ることをわすれて、階級闘争のマルクス主義的概念を自由主義的概念とすりかえていることを、ア・エルマンスキー氏が身をもって、みごとに解明してくれたことを歓迎する。

『プロスヴェシチェーニエ』第五号、一九一三年五月
署名——ヴェ・イリイン
全集、第五版、第二三巻、二三六—二四一ページ所収
邦訳全集、第一九巻、一一〇—一一六ページ所収

論争問題

公然の党とマルクス主義者

一　一九〇八年の決定

多くの労働者にとって、『プラウダ』[一六四]と『ルーチ』[一七四]とのあいだにおこなわれている闘争は無用なもの、よくわからないものとおもわれている。新聞の各号に見られる個々の、ときにはかなり部分的な問題についての論争的論文が、闘争の題目と内容についてまとまった考えをもたせてくれないのは、あたりまえである。ここから労働者の当然な不満が生じてくる。

ところが、闘争のもとになっている解党主義の問題は、当面、労働運動の最も重要な、最も緊要な問題の一つである。この問題にくわしく通じ、それについて明確な意見をもつことなしには、自覚した労働者であることはできない。自分の党の運命を自主的に解決したい労働者は、論戦が一目見ただけでは十分にわからなくとも、頭から論戦をいやがらないで、真剣に真実をさぐろうとするだろうし、やがて真実をつきとめるであろう。

どうやって真実をつきとめるか？　たがいに矛盾しあう意見や主張のあいだで、どう判断をくだすべきか？

どんな題目であれそれについてはげしい闘争がおこなわれている場合、真実を立証するためには、論争者の声明にとどまることなく、自分で事実と文書をしらべ、証人の証言があるかどうか、そしてそれらの証言が信ずるにたりるかどうかを、自分で検討しなければならないということは、道理のわかる人ならだれでも理解するであろう。

いうまでもなく、これをやるのはかならずしも容易ではない。それよりは、手あたりしだいのもの、耳にはいってくるもの、人々から「おおっぴらに」さけばれているもの、等々を信じこむほうがはるかに「容易である」。だが、それで満足するような人物は、「軽い」、軽率な人間と呼ばれて、だれからもまじめには相手にされない。ある程度自主的に苦労してみなければ、どんなまじめな問題についても、真実は発見できないのであって、苦労をおそれる人間は、真実を発見する可能性を自分からなくすものである。

だからわれわれは、この苦労をおそれずに、自主的に検討し、諸事実、文書、証人の証言を発見しようと努力する決心をした労働者だけに訴える。

まず第一に、解党主義とはいったいなにかという問題が生じる。このことばは、どこから出てきたのか、それはなにを意味しているのか？

『ルーチ』は言う。解党主義、すなわち党の解散、破壊、党の否認ということは、まったく悪意の作り話だ、と。これは、ボリシェヴィキ「分派所属者」が、メンシェヴィキに反対して考えだしたことだ、というのである！

『プラウダ』は言う。全党は、四年以上にわたって解党主義を非難し、それとたたかっている、と。

どちらが正しいか？　どうやって真実を発見すべきか？

あきらかに、ただひとつの方法は、最近の四年間、つまり一九〇八年から、解党派が最後的に党から脱落した一九一二年までの党の歴史上の諸事実と文書をもとめることだ。

今日の解党派がまだ党内にあったこの四ヵ年こそ、解党主義の概念がどこから、どうやって出てきたかをしらべるうえで、最も重要な時期である。

ここから第一の、基本的な結論が生じてくる。それは、一九〇八―一九一一年の諸事実と党の文書を避けながら解党主義のことをかたるものは、労働者に真実をかくすものだ、ということである。

ではそれらの事実と党文書とは、いったいどんなものなのか？

なによりもまず――一九〇八年の一二月に採択された党の決定である。労働者は、おとぎ話や作り話をつめこまれる子供のような扱いをうけたくなければ、自分の助言者、指導者、または代表者にむかって、（注）一九〇八年の一二月に、解党主義の問題について党の決定があったかどうか、そしてその決定は、要するにどういうことか？　をたずねるべきである。

この決定は、解党主義にたいする非難と、解党主義はどういうものかという説明をあたえている。

解党主義とは、「現存の党組織を解消して」（すなわち、解散、破壊、廃止し、とりやめて）「ぜがひでも、すなわち党の綱領、戦術、伝統」（すなわち従前の経験）「をはっきり放棄するという代償をはらってさえもそれを合法性」（すなわち適法性、「公然の」存在）「の枠内での無定形の結合体ととりかえようとする、一部の党内インテリゲンツィアの試みである」。

四年あまりまえの、解党主義についての党の決定は、まさに右のようなものであった。

解党主義の核心はどこにあるのか、解党主義はどういう

点で非難されているのか、ということはこの決定からはっきりとわかる。この核心は、「地下組織」の否認、その解消ということにあり、地下組織をぜがひでも適法性の枠内での無定形な結合体ととりかえるところにある。したがって、党はけっして合法的（適法的）活動を非難しているのでも、それが必要であると強調することを非難しているのでもない。党は、古い党をなにかある無定形な、「公然」の、党とは呼べないようなものととりかえようとすることを非難している、しかも無条件に非難しているのである。

党は、自分の存在をまもることなしには、また党を解消し廃絶しようとするもの、党を認めないもの、党を否認するものと無条件に闘争することなしには、存在することができない。それは、おのずからわかりきったことである。なにかある新しい党のために、現存の党を否認するもの、こういう連中にたいしてはつぎのように言うべきだ。やってみるがいい、新しい党をつくってみたまえ、だが君は、古くからの、いまある、現存の党の党員であるわけにはいかない、と。これが、一九〇八年一二月に採択された党の決定の意味であり、そして、党の存在という問題については、これ以外の決定がありえなかったことは明白である。

解党主義が、背教、綱領と戦術の否認、日和見主義と思想的に結びついていることは、もちろんである。右に引用した決定の末尾は、まさにこの点を指摘している。しかし解党主義は、日和見主義であるだけではない。日和見主義者は党を、まちがった、ブルジョア的な道へ、自由主義的労働者政治の道へひっぱっていこうとするが、しかし、党そのものを否認しはしないし、党を解消しようともしない。解党主義は、党を否認するにいたるような、そういう日和見主義である。党の存在を認めないような人間をふくんでいたのでは、党は存在することができないということは自明である。また現在の条件のもとで地下組織を否認するのは、古い党を否認することだということも、これにおとらず明白である。

そこで、一九〇八年の党のこの決定にたいする解党派の態度はどうか？　ということが問題となる。

ここに、問題の急所があり、ここに、解党派の誠実さと政治的良心の点検がある。

党のそうした決定があったということ、それがとり消されてはいないということ、この事実は、気でもくるわないかぎり、彼らのうちのだれ一人として否定しようとはしないであろう。

ところがここで解党派は、あるいは問題を回避し、一九〇八年の党の決定を労働者にかくしておくことにより、あるいはこの決定はボリシェヴィキが通過させたものだとわ

めきたてることによって（ときにはこれに罵詈雑言をつけくわえて）、言いぬけをしようとする。

しかし、この罵詈雑言は、解党派の弱点をさらけだすにすぎない。メンシェヴィキが通過させた党の決定もある――たとえば、一九〇六年にストックホルムで採択された、公有化についての決定がそれである。これはひろく知れわたっている。多数のボリシェヴィキは、この決定に同意していない。しかし彼らの一人として、これが党の決定であることを否定するものはない。解党主義についての一九〇八年の決定も、まったく同様に、党の決定である。この問題についてのどんな言いぬけも、労働者をまよわせようとする願望を意味するにすぎない。

口先だけでなしにほんとうに党を認めようとおもうものは、ここで、どんな言いぬけもゆるさないだろうし、解党主義の問題にかんする党の決定について、やがて真実をつきとめることであろう。この決定にたいして、一九〇九年以来、プレハーノフをはじめとしてすべての党擁護派メンシェヴィキが賛成した。プレハーノフは、彼が発行する『ドネヴニーク』その他多くのマルクス主義的出版物のなかで、党を解消しようとするものは党内にいることはできないと、幾度となく、しかもまったく明確に、説明したのである。

プレハーノフはメンシェヴィキであったし、今後もやはりそうであろう。だから、一九〇八年の党の決定がボリシェヴィキ的性格をおびているという解党派のおきまりの口実は、二重の意味で、まちがっている。

プレハーノフにたいする解党派の罵詈雑言が『ルーチ』または『ナーシャ・ザリャー』の紙上に数多く見うけられるが、それが多ければ多いほど、それは解党派のうそを、さわいだり、わめいたり、物議をおこすことによって真実をぼかそうとする彼らの試みを、ますますはっきりと証明する。ときにはこういうやり方で、新入者をたちまち聾にすることもできようが、しかしそれでも労働者は自分で判断をくだし、すぐに罵詈雑言をはねとばしてしまうだろう。

労働者の統一は必要であろうか？　必要である。

労働者組織の統一なくして、労働者の統一が可能であろうか？　不可能なことは、明らかである。

なにが、労働者党の統一をさまたげているのか？　解党主義をめぐっての論争である。

だから、労働者は、自分の党の運命を自分で決定し、党をまもりとおすために、これらの論争を検討しなければならない。

それへの第一歩には、解党主義についての党の最初の決定を知ることである。労働者は、問題を言いのがれようと

か、わきにそらせようとかするいっさいの試みを排しながら、この決定をしっかりと知り、注意ぶかく考えてみなければならない。この決定をよく考えてみたならば、労働者はみな、解党主義の問題の核心がどこにあるのか、なぜこの問題がそれほど重要な、それほど「痛切な」問題なのか、なぜ四年以上にわたる反動時代をつうじて、この問題が党に提起されているのかを理解しはじめるであろう。

次の論文でわれわれは、三年半ばかりまえに採択された、解党主義についての党のもう一つの重要な決定を考察し、そのあとで、問題の現状を明確にするもろもろの事実と文書にうつることにしよう。

二　一九一〇年の決定

第一の論文（『プラウダ』第二八九号）でわれわれは、現在の論争で真実をさぐりあてようとのぞむ労働者が知らねばならない第一の基本的な文書、すなわち解党主義の問題にかんする一九〇八年一二月の党の決定を引用した。

こんどは、同じ問題について、三年半まえの一九一〇年一月[三七]に採択された、もう一つの、それにおとらぬ重要な党の決定を引用し、考察することにしよう。この決定は、全員一致で採択されたので、特別な意義をもっている。すなわち、例外なしにすべてのボリシェヴィキが、ついでいわゆるフペリョード派[六]全部が、最後に（これが最も重要なことだが）例外なしにすべてのメンシェヴィキと今日の解党派が、それからまた、すべての「非ロシア人」（すなわち、ユダヤ人、ポーランド人およびラトヴィア人の）マルクス主義者が、この決定を採択したのである。

この決定のなかから最も重要な箇所を、そっくり引用してみよう。

「ブルジョア反革命の時代の社会民主主義運動の歴史的情勢は、プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の現われとして、一方では、非合法の社会民主党を否認すること、この党の役割と意義とを引きさげること、一貫した社会民主主義の綱領的・戦術的諸任務とスローガンとを不具化しようと試みること、等々を生みだすとともに、他方では、社会民主党の国会活動と合法的可能性の利用とを否定し、これら両者の重要性を理解しないこと、一貫した社会民主主義戦術を現情勢の特殊な歴史的諸条件に適用する能力のないこと、等々を、不可避的に生みだしている。

プロレタリアートの階級闘争のあらゆる分野にわたって社会民主主義活動を拡大し、ふかめることによってこの二つの偏向を克服し、これらの偏向の危険性を説明す

ることは、こういう諸条件のもとでの、社会民主主義戦術のきりはなしがたい要素である。(一六)」

この決定からはっきりとわかることは、三年半まえに、例外なしにあらゆる潮流に代表されたすべてのマルクス主義者が、全員一致で、マルクス主義的戦術からの二つの偏向を認めなければならなかったということである。二つの偏向は、危険なものとみなされた。二つの偏向は、偶然でもなく、個々人の悪意によるものでもなくて、現在の時代における労働運動の「歴史的情勢」によるものとして、説明されている。

それればかりではない。全員一致の党の決定のなかでは、これらの偏向の階級的起源と階級的意義が指摘されている。なぜなら、マルクス主義者は、崩壊と分解とのからっぽで、無内容な指摘だけにとどめることはしないからである。多数の民主主義と社会主義の支持者の心中では、分解、不信頼、意気消沈、当惑が支配していることは、だれでも見ているところである。これを認めるだけでは十分でない。混乱と分解の階級的起源はどういうものか、非プロレタリア層のあいだのどんな階級的利益が、プロレタリアートの友人のあいだに「混乱」をはぐくんでいるのかを、理解しなければならない。

そして三年半まえの党の決定は、この重要な問題に回答をあたえている。すなわち、マルクス主義からの偏向を生みだしているのは「ブルジョア反革命」であり、それらを生みだしているのは、「プロレタリアートにたいするブルジョア的影響」である、と。

では、プロレタリアートをブルジョアジーの影響にゆだねる恐れのある、これらの偏向とは、どんなものか？　これらの偏向の一つ、「フペリョード主義」と結びつき、社会民主党の国会活動と合法的可能性の利用を否定することにある偏向は、ほとんど完全に消滅してしまった。ロシアでは社会民主党員のだれひとりとして、もはやこういうまちがった、非マルクス主義的な見解を説こうとするものはない。「フペリョード派」(アレクシンスキーその他をふくめて）は党擁護派メンシェヴィキと肩をならべて、『プラウダ』で働くようになった。

党の決定のなかで指摘されたもう一つの偏向は、ほかならぬ解党主義である。これは、地下組織の「否認」、その役割と意義の「引きさげ」についての指摘から明らかである。最後に、われわれは、三年まえに公表され、しかもだれからも反駁をうけなかった、最も正確な文書――すべての「非ロシア人」のマルクス主義者とトロツキー（解党派としては彼らにまさる証人を想像することもできない）から出ている文書――をもっている。この文書は、率直につ

ぎのように言明している。「決議に指摘された潮流――これとはたたかう必要がある――を解党主義と呼ぶことは、本質的にはのぞましいことである」……

要するにこれが、現在の論争を検討しようとのぞむものが、だれでも知っていなければならない基本的な、最も重要な事実である。すなわち、党は三年半まえに解党主義を、マルクス主義からの「危険な」偏向として、それとたたかう必要のある偏向、「プロレタリアートにたいするブルジョア的影響」をあらわす偏向として、全員一致で認めたのである。

民主主義反対の気分をもち、一般に反革命的な気分をもったブルジョアジーの利益は、プロレタリアートの古い党の解消、解散を要求している。ブルジョアジーは、労働者階級の党の解消にむかうあらゆる思想を、極力おしひろめ、支持している。ブルジョアジーは、古い任務の否認という考えをまきちらし、これらの任務を「不具化し」、切りちぢめ、刈りこみ、去勢するために、また、プリシケヴィチ一派の権力の基礎を断固として一掃するかわりに、これらの連中と和解または協定するために努力している。

解党主義というのは、これらのブルジョア的な否認と背教の思想をプロレタリアートのあいだへもちこむことである。

これが、三年半まえに党の全員一致の決定によって指摘された、解党主義の階級的意義である。まさにこの点にこそ全党は、解党主義の最も深刻な害悪と危険性を見ているのであり、労働運動にたいする、労働者階級の自主的な(口先ではなく行動のうえで)党の団結にたいする解党主義の破滅的な作用を見ているのである。

解党主義は、労働者階級の古い党を解消(すなわち解散、破壊)することであるだけではない。それはまた、プロレタリアートの階級的自主性を破壊し、ブルジョア思想によってプロレタリアートの意識を腐敗させることでもある。

われわれは、次の論文のなかで、解党主義にたいするこの評価をはっきりと説明しよう。その論文では解党派の『ルーチ』の最も重要な議論が完全に引用されるはずである。だがここでは、いままで述べてきたことに簡単なしめくくりをすることにする。およそ「解党主義」などというのは作り話だというふうに事態をえがきだそうとする、一般に「ルーチ派」の、とくにエフ・ダンおよびポトレソフの試みは、『ルーチ』の読者がまったく事情に暗いのを当てこんだ、驚くべき欺瞞にみちたごまかしである。実際には、一九〇八年の党の決定のほかに、解党主義を労働者階級にとって危険な、破滅的な、プロレタリア的進路からのブルジョア的偏向とみる完全な評価をあたえた一九一〇年

の、全員一致の党決定がある。党のこの評価を隠蔽または回避するのは、ただ労働者階級の敵だけである。

三　一九〇八年と一九一〇年の諸決定にたいする解党派の態度

このまえの論文（『プラウダ』第九五（二九九）号）でわれわれは、プロレタリアートにたいするブルジョア的影響の現われとしての、解党主義にかんする全員一致の党決定をそのことばどおりに引用した。

この決定は、われわれの指摘したように一九一〇年一月に採択されたものである。こんどは解党主義などというものはなかったし、いまもないのだなどといまごろ断言する勇気をもっている解党主義者の行動を観察してみよう。

一九一〇年二月、当時発刊されたばかりの雑誌『ナーシャ・ザリャー』の第二号でポトレソフ氏は率直に書いた。――「まとまった組織された階層制度」（すなわち「機関」の階層または体系）「としての党は存在しない」、そして「組織された全体としてはもはや実際に存在していないもの」を、解消しようがない、と（『ナーシャ・ザリャー』、一九一〇年第二号、六一ページを見よ）。

これは、党の全員一致の決定後、一ヵ月してから、あるいは一ヵ月もたたないうちに述べられたことだ！

しかも一九一〇年三月には、同じポトレソフ、ダン、マルトィノフ、エジョフ、マルトフ、レヴィツキーの一派を寄稿者とする解党派のもう一つの雑誌『ヴォズロジデーニエ』[註]は、ポトレソフ氏のことばを強調し、これをわかりやすくつぎのように解説した。

「解消させるべきものはなにもない、そして、――われわれ（すなわち『ヴォズロジデーニエ』の編集局）のほうからつけくわえて言おう――この階層制度を、その古い、地下的な形で復活させようと夢みることは、まったく有害な、反動的空想であって、かつては最も現実主義的であった党の代表者たちが政治的感覚を失ったことを示すものである。」（『ヴォズロジデーニエ』、一九一〇年第五号、五一ページ）

党はない、そしてそれを復活させようとするのは有害な空想である――まさに明白な、はっきりしたことばである。これは明白な、まっこうからの、党否認である。否認したのは（また否認するように労働者にすすめたのは）、地下組織を放棄し、公然の党を「夢みた」その人々である。

さらにその後、ペ・ベ・アクセリロードは一九一二年、『ネフスキー・ゴーロス』[註]（一九一二年第六号）でも、『ナーシャ・ザリャー』（第六号、一九一二年）でも、地下組

織からこうして逃げることをまったくはっきりとおおっぴらに、支持した。

ペ・ペ・アクセリロードはこう書いた。――「このような事情のもとで、非分派性を説くことは、駝鳥に似た行動[二九]をとることを意味し、自他をあざむくことを意味する。」「分派としてまとまった形をとり結束をかためることは、党改革の、あるいはより正しくいえば党革命の支持者の直接の義務であり、緊急な仕事である。」

このように、ペ・ペ・アクセリロードは、党革命、すなわち、古い党の廃棄と、新しい党の樹立にはっきり賛成している。

一九一三年、『ルーチ』第一〇一号にのった無署名の社説には、「あちこちの労働者のあいだには地下組織にたいする共鳴が活気づき、強まってさえいる」、これは「遺憾な事実である」と率直に述べられている。この論文の筆者エリ・セドフは、この論文が『ルーチ』戦術の支持者のあいだにさえ「不満を呼びおこした」ことを、自分で認めている(『ナーシャ・ザリャー』、一九一三年第三号、九四ページ)。おまけに、エリ・セドフ自身の釈明は、またもや『ルーチ』の支持者――すなわち、アンの新しい不満を呼びおこしたほどのしろものであった。アンは『ルーチ』第一八一号紙上に、セドフにたいする反論を書いた。アンは、「地下組織はわれわれの運動の政治的定形化、労働者社会民主党の樹立にたいする障害物である」というような見方をセドフが容認したことにたいして、抗議している。アンは、地下組織がのぞましいものであるかどうかについて「あいまい」になっているエリ・セドフを嘲笑している。

『ルーチ』の編集局は、アンの論文に長たらしいあとがきをつけ、そのなかでセドフに賛意を表し、アンは「エリ・セドフにたいする批判では正しくない」としている。

われわれはいずれ適当な箇所で、『ルーチ』編集局の所論をも、アン自身にみられる解党主義的誤りをも、検討することにする。いまはこのことは論じない。いまは、われわれの引用した文書からえられる基本的な、主要な結論を入念に評価しなければならない。[三〇]

全党は一九〇八年にも、一九一〇年にも、解党主義を非難し排撃するとともに、この潮流の階級的起源がどこにあり、その危険性がどういう点にあるかを、くわしく、明瞭に説明している。解党派の新聞雑誌はすべて、『ヴォズロジデーニエ』(一九〇九―一九一〇年)も、『ナーシャ・ザリャー』(一九一〇―一九一三年)も、『ネフスキー・ゴーロス』[三一](一九一二年)も、『ルーチ』(一九一二―一九一三年)も、いずれもみな、党のきわめてはっきりした、全員一致の決定を見たのちにも、明白な解党主義をふくむ意見

と議論を繰りかえしている。

『ルーチ』の支持者でさえ、この議論、この説教にたいする不同意を声明せざるをえなくなっている。これは事実である。したがって、トロツキー、セムコフスキー、その他多くの解党主義の庇護者たちがやっているように、解党主義者にたいする「迫害」うんぬんをわめきたてることは、まったく非良心的である。というのは、それは真実をはなはだしくゆがめるものだからである。

私の引用した、五年あまり(一九〇八—一九一三年)の期間の諸文書によって証明された真実は、要するに、解党派は党のあらゆる決定を愚弄して、党すなわち「地下組織」をののしり、迫害しつづけているということである。

すべての労働者は、——党の焦眉の論争問題を最も真剣な態度で、みずから検討し、解決しようとのぞむすべての労働者は、ここにあげた党の諸決定と解党派の所論とを研究し点検するための自主的手段を講じて、この真実をなによりもさきに、しっかりと把握しなければならない。自分の党の諸問題と運命を入念に研究し、熟慮し、自主的に解決するものだけが、労働者党の党員、労働者党の建設者と呼ばれるに値いする。党が解党派にたいする「迫害」(すなわち、あまりにもはげしい、事実に反した攻撃)というの点で「罪がある」のか、それとも解党派が、党の諸決定にたいするまっこうからの違反という点で、解党すなわち党破壊の執拗な説教という点で罪があるのか、という問題にたいして、どちらでもよいという態度をとってはならない。

全力をあげて党破壊者とたたかうことなしには、党が存在しえないことは明らかである。

われわれは、この基本的問題についての諸文書をあげておいて、次の論文では、「公然の党」という説教の思想的内容の評価へうつることにしよう。

四 解党主義の階級的意義

われわれはこれまでの諸論文で(『プラウダ』第二八九、二九九、三一四号)、すべてのマルクス主義者が一九〇八年にも一九一〇年にも、解党主義をば、過去を否認するものとして断固として非難したことを示した。マルクス主義者は、解党主義とはプロレタリアートのなかにブルジョア的影響をもちこむことだということを労働者階級に説明した。だが解党派のすべての出版物は、一九〇九年から一九一三年まで、目にあまるやり方で、マルクス主義者の決定に違反してきたし、いまも違反している。

解党派が今日でも『ルーチ』や『ナーシャ・ザリャー』の紙上で擁護している「公然の労働者党」だの、「公然の

党のための闘争」だのというスローガンを見てみよう。

このスローガンは、マルクス主義的、プロレタリア的であろうか、それとも自由主義的、ブルジョア的であろうか？

この質問にたいする回答は、解答派またはその他の諸グループの気分や計画のうちにもとめてはならない——それは、今日の時代のロシアの社会的諸勢力の相互関係の分析のうちに、もとめなければならない。スローガンの意義は、それをとなえる人の意図によってではなく、国内のあらゆる階級の力関係によってきまる。

農奴主的地主と彼らの「官僚」は、政治的自由をもたらす変更にはなんにもよらず敵意をもっている。これはわかりきったことだ。ブルジョアジーは、おくれた半農奴制的な国における自分の経済的地位からして、自由をのぞまないわけにはいかない。しかしブルジョアジーは、反動をおそれるよりも人民の積極性のほうをおそれている。この真理をとくにはっきりと証明したのは一九〇五年である。この真理を、労働者階級はみごとに理解した。これを理解しなかったのは、日和見主義的で半ば自由主義的なインテリゲンツィアだけである。

ブルジョアジーは、自由主義的であり、反革命的である。そこから彼らの、滑稽なほどに無力な、みすぼらしい改良主義が生まれてくる。改良についての夢想と、改良をあたえないばかりか、すでにあたえたものを取り返そうとさえしている農奴主とのきまりを真剣につけることにたいする恐怖心。改良の説教と、人民運動にたいする恐怖心。農奴主をおしのけようとする志向と、彼らの援助を失うことにたいする恐怖心、自分の特権を失うことにたいする恐怖心。諸階級のこの相互関係のうえに、農奴主には無制限の権力をあたえ、ブルジョアジーには特権をあたえる六月三日の体制(三)が打ちたてられているのだ。

プロレタリアートの階級的地位からして、彼らがだれかと特権を「分かちあう」可能性も、あるいは、だれかから特権をうばわれることをおそれる可能性もまったくない。だから、私欲から出た狭い、貧弱な、愚劣な改良主義は、プロレタリアートにとってはまったく無縁である。ところが、一方では、法外に抑圧され、特権どころか飢餓にさえ瀕していながら、他方では、無条件に小ブルジョア的な農民大衆は、不可避的に自由主義者と労働者とのあいだを動揺している。

これが、客観的な状態である。

この状態からはっきりと出てくる結論は、公然の労働者党というスローガンは、その階級的起源からして、反革命的な自由主義者のスローガンだということである。このス

ローガンのなかには、改良主義以外のなにものもなく、――徹底的に民主主義的な唯一の階級であるプロレタリアートが、全民主主義派に影響をおよぼすために自由主義者と闘争するという自分の任務を意識していることを暗示するものさえなく――農奴主、「官僚」等々のあらゆる特権の基礎そのものを取りのぞこうという考えもなく――、政治的自由と民主主義的憲法との一般原則についての考えもない。そのかわり、このスローガンには、古いものにたいする暗黙の否認、したがって、背教と労働者党の解散（解消）がある。

もっと簡単にいえば、このスローガンは、まさに自由主義的ブルジョアジーが彼らのあいだでおこなっていることの説教を、反革命の時代に労働者のあいだへもちこむものである。だから、もし解党派がいなかったならば、賢明なブルジョア進歩派は、労働者階級のなかへこのような説教をもちこむために、インテリゲンツィアをさがしもとめ、あるいはやとったにちがいない！

ただ頭のない連中だけが、解党派のことばを解党派の動機と対比することができる。だが、彼らのことばを自由主義的ブルジョアジーの行動および彼らの客観的地位と対比すべきである。

彼らの行動を見てみたまえ。一九〇二年には、ブルジョアジーは地下組織を支持していた。ストルーヴェは地下の『オスヴォボジデーニエ』(一二五)を出版するために(一二六)、ブルジョアジーから派遣された。労働運動が一〇月一七日に到達すると、自由主義者とカデットは、地下組織を見すて、ついでそれを否認し、それを無用なもの、愚劣、罪悪、不信心だと言明している（『道標』(一二七)）。自由主義的ブルジョアジーにあっては、地下組織にかかわって、公然の党のための闘争が現われている。これは、カデット（一九〇五―一九〇七年）と進歩派(一二八)（一九一二―三年）を合法化しようとするたゆみない試みによって実証される歴史的事実である。

われわれはカデットを見ると「公然の活動とその秘密の組織」があることがわかる――これはお人よしの、つまり無意識な解党主義者ア・ヴラソフが、カデットの行動を「自分のことば」で言いかえただけである。

なぜ自由主義者は、地下組織を否認し「公然の党のための闘争」というスローガンをとりあげたのであろうか？ ストルーヴェが裏切者だからではなかろうか？ いな、その正反対である。ストルーヴェが敵方についたのは、ブルジョアジー全体が方向転換をしたからである。ところでブルジョアジーが(一二九)方向転換をしたのは、（一）一九〇五年一二月一一日の特権をあたえられ、また一九〇七年六月三日には黙認された野党という地位さえあたえられたからであ

り、(二) 彼ら自身、人民運動に寿命のちぢまるほどおびえたからである。「公然の党のための闘争」というスローガンは、これを「高等政策」から、ありふれた明白なことばに翻訳すれば、まさに、つぎのようになる。

「地主諸君! われわれが諸君を、この世から抹殺しようと欲しているなどと考えないでほしい。そうではない。われわれブルジョアにも坐ることができるように(公然の党)、ちょっと身体をずらしていただきたいのだ——そうすれば、われわれはチモシキンやサブレル派の神父たち(二〇五)より五倍も『賢明に』、巧妙に、『科学的に』諸君を擁護するであろう。」

カデットをまねて、小ブルジョア、ナロードニキが「公然の党のための闘争」というスローガンを取りあげた。一九〇六年八月、ペシェホーノフ氏と『ルースコエ・ボガートストヴォ(二〇六)』の一派は、地下組織を否認し、「公然の党のための闘争」を唱道し、自分らの綱領から、一貫して民主主義的な、「地下的」スローガンを切りとってしまった。

「広範な公然の党」についての、これらの素町人の改良主義的おしゃべりの結果、彼らは、だれにも明らかなように、なんの党ももたない、大衆となんの結びつきももたないものとなってしまったし、カデットは、そうした結びつきについて空想することとさえ、やめてしまった。

こういうふうに、もっぱらこういうふうに、諸階級の地位の分析をつうじ、反革命の一般的歴史をつうじてみてはじめて、解党主義の理解に到達することができる。解党派とは、自由主義的な退廃を労働者のあいだへもちこむために、ブルジョアジーから派遣された小ブルジョア・インテリゲンツィアである。解党派は、マルクス主義の裏切者であり、民主主義の裏切者である。彼らのとなえる「公然の党のための闘争」というスローガンは(自由主義者やナロードニキにおけると同様に)、過去の否認であり、労働者階級との絶縁をおおいかくすものである。これは、労働者クーリア〔選挙等級〕の第四国会選挙によっても、労働者新聞『プラウダ』の発生の歴史によっても証明された事実である。だれにも明らかなように、過去を否認せず、もっぱら過去の精神にもとづいて、この過去を強化し、うちかため、発展させるために、「公然の活動」とあらゆる「可能性」を利用することのできた人々にだけ、大衆との結びつきがあったのである。

六月三日体制の時代には、そうでしかありえなかったのである。

解党派(すなわち自由主義者)による綱領と戦術の「切りちぢめ」については、次の論文ですこし述べることにしよう。

五　「公然の党のための闘争」というスローガン

まえの論文（『プラウダ』第一二二号）でわれわれは、「公然の党」あるいは「公然の党のための闘争」というスローガンの客観的意義、すなわち階級関係によってきまる意義を考察した。このスローガンは、ブルジョアジーの戦術の盲従的な繰りかえしであって、彼らにとってこのスローガンは、彼らの革命否認または彼らの反革命性の正確な現われとなっている。

「公然の党のための闘争」というスローガンを擁護しようとする、解党派のあいだでとくに受けている、いくつかの試みを考察してみよう。マエフスキーも、セドフも、ダンも、すべての「ルーチ派」も、公然の党と、公然の工作または公然の活動とを混同しようとつとめている。このような混同は、まったくの詭弁であり、遊戯であり、読者にたいする欺瞞である。

第一に、社会民主主義者の公然活動は、一九〇四―一九一三年の時期については事実である。公然の党ということは、党の否認をおおいかくそうとするインテリゲンツィアの空文句である。第二に、党は解党主義、すなわち公然の党というスローガンを、再三非難した。しかし党は、公然活動を非難しなかったばかりでなく、むしろ反対に、それを放棄し、あるいはそれを否認するものを非難してきたのである。第三に、一九〇四―一九〇七年には、公然活動はあらゆる社会民主主義者によってとくにひろく展開された。しかし社会民主党のいかなる潮流、いかなる分派も、当時、「公然の党のための闘争」というスローガンをかかげはしなかった！

これは歴史的な事実である。解党主義を理解したいものは、このことを考えてみなければならない。

「公然の党のための闘争」というスローガンがなかったことは、一九〇四―一九〇七年の公然活動を妨げたであろうか？　すこしもそんなことはない。

なぜ当時、社会民主主義者にそのようなスローガンが生まれなかったのであろうか？　ほかでもない、社会民主主義者の一部を極端な日和見主義へひきずりこんだ反革命が、当時はまだたけなわではなかったからである。当時は、「公然の党のための闘争」というスローガンが日和見主義的な文句であり、「地下組織」の否認であるということが、あまりにはっきりしていたのである。

諸君、この歴史的転換の意味をつきつめてみたまえ。一九〇五年の時代、公然活動がかがやかしく発展しつつあっ

た時代には、「公然の党のための闘争」というスローガンは存在しなかった。反革命の時代、公然活動の展開が弱まったとき、一部の社会民主主義者のあいだに（ブルジョアジーに追随して）、「地下組織」の否認および「公然の党のための闘争」というスローガンが現われたのである。

これでもまだ、このような転換の意味と階級的意義とが、はっきりしないなどということがありうるだろうか？

最後に、第四の、最も主要な事情がある。公然活動は二つのやり方が可能であり、二つの正反対の方向で可能である（またそういう形で見うけられる）。すなわち、古いものを擁護して、完全に古いものの精神において、古いもののスローガンと戦術のためにおこなわれるような活動と、古いものに反対して、古いものを否認し、古いものの役割とスローガンをちぢめる、等々のためにおこなわれるような活動とがそれである。

公然活動にこれら二つの、原則的に敵対し、和解しがたい種類が存在していたということは、一九〇六年（カデットおよびペシェホーノフ氏一派）から一九一三年（『ルーチ』、『ナーシャ・ザリャー』）までの時代にとって、まったく争う余地のない歴史的事実である。だから、両者とも公然活動をやっているのだとすれば、なにを論争する必要があろうか、などというまぬけな男がいるとすれば、こういうまぬけ（あるいは、一時まぬけのふりをしている人間）のことばを、笑いもせずに聞くことができるだろうか？君、ここではこの活動を、「地下組織」の擁護のために、またその精神においておこなうべきなのか、それとも「地下組織」をけなし、それに反対し、その精神にそむいて行動すべきなのか、まさにこの点で論争されているのだ！論争はもっぱら――まったく、「もっぱら」だ！――当の公然活動が自由主義の精神でおこなわれているのか、それとも首尾一貫した民主主義の精神でおこなわれているのか、という点でおこなわれているのだ。論争は「もっぱら」、公然活動だけに限ることが可能であるかという点で、おこなわれているのだ。自由主義者ストルーヴェ氏をおもいおこしてみたまえ。彼は、一九〇二年にはそれだけに限らなかったが、一九〇六―一九一三年には、完全に「限った」のである！

『ルーチ』に属するわが解党派は、「公然の党のための闘争」というスローガンは、「マルクス主義まがいの」片言隻句のぼろぎれに身を装った自由主義的（ストルーヴェ流の）思想を、労働者のあいだにもちこむものだということを、どうしても理解できないのだ。

あるいはここで、アンへの回答中にある『ルーチ』編集局自身の議論を取りあげてみたまえ（第一八一号）。

……「社会民主党は、現実にせまられて地下組織で活動せざるをえない少数の同志たちだけにつきるものではない。げんに、党が地下組織だけにつきるものであるとすれば、いったい党には幾人の党員がいるだろうか？二、三百人か？　実質上社会民主主義的活動の全部をその双肩にになっている教万人、とまでいかなくとも数千人の労働者は、いったいどこへ行ってしまったのだろう？」

考えのある人間にとっては、この議論だけで、こういう議論を述べる人を自由主義者と認めるのに十分である。第一に、彼らは「地下組織」について、知れきったうそを言っている。すなわち、そこにいるのは、けっして「数百人」どころではない。第二に、世界のどこでも、党員の数は、社会民主主義的活動をやっている労働者の数にくらべて「狭い」。たとえばドイツでは、社会民主党内にはわずか一〇〇万人しかいないが、社会民主党への投票は約五〇〇万、プロレタリアの数は約一五〇〇万人である。社会民主主義者の数にたいする党員の数の比率は、国によってそれぞれ歴史的条件の相違によってきまる。第三に、わが国には「地下組織」に代わるべき他のなにものもない。つまり、党に反対している『ルーチ』は、無党派の、あるいは党外の労働者をよりどころとしているのだ。これこそ、大衆をその自覚した前衛部隊からひきはなそうとつとめる自由主義者のいつものやり口である。『ルーチ』は、一八九五—一九〇一年の「経済主義者」がそれを理解しなかったと同じように、階級にたいする党の関係を理解していない。第四に、「社会民主主義的活動」はいまのところわが国では、それが古いものの精神において、古いもののスローガンのためにおこなわれるときにだけ、真に社会民主主義的な活動である。

『ルーチ』の議論は、現実に存在している党組織への加入を欲しないで、無党派の、個々ばらばらな、意識の低い群衆をこの組織にけしかけることによってこの組織を破壊しようと試みる自由主義的インテリゲンツィアの議論である。ドイツの自由主義者もこのようにふるまっている。すなわち、彼らは言う、社会民主主義者はプロレタリアートの代表者ではない。なぜなら、彼らの国では〔プロレタリアの〕一五分の一「しか」「党」にはいっていないからだ！と。

『ルーチ』のもっとおなじみな議論、「われわれ」は「ヨーロッパでのように」公然の党に賛成である、という議論をとりあげてみるがよい。自由主義者と解党主義者は、こんにちの「ヨーロッパでのように」憲法と公然の党とをのぞんでいるが、しかし彼らは、ヨーロッパがこのこんにち

に到達するにいたった径路をのぞんではいない。

解党派でありブンド派〔ユダヤ人労働者同盟〕であるコソフスキーは、『ルーチ』紙上で、われわれにオーストリア人の例をおしえている。ただし彼は、オーストリア人は一八六七年以来憲法をもっているということ、そして（一）一八四八年の運動がなかったならば、また（二）労働者階級の弱さがビスマルク一派に、有名な「上からの革命」という方法できりぬけることをゆるしたあの深刻な、一八五九—一八六六年の国家的危機がなかったならば、この憲法もありえなかったということを、わすれている。コソフスキー、ダン、ラーリン、およびすべての「ルーチ派」の教訓からでてくることは、いったいなんだろうか！

ただ、彼らが、なにがなんでも「上からの革命」でわが国の危機を解決しようとしていることだけである！　そして彼らのこのような活動こそ、ストルィピン労働者党の「活動」なのである。

どこを向いても、いたるところで解党派がマルクス主義を否認し、民主主義を否認しているのが見られる。

次の論文でわれわれは、われわれの社会民主主義的スローガンを切りちぢめる必要があるという彼らの議論をくわしく考察してみよう。

六

われわれがここで考察すべきことは、解党派に見られる、マルクス主義的スローガン[16]の切りちぢめである。そのためには、彼らの八月協議会の諸決定を取りあげるのがいちばんいいであろうが、しかし明白な理由によって、これらの決定の検討は、在外の出版物でしかできない。それでここでは、エリ・エスの論文で解党主義の全本質、全精神をすこぶる正確に述べている『ルーチ』（第一〇八（一九四）号）を取りあげるしだいである。

エリ・エス氏は、つぎのように書いている。……「ムラノフ議員は、いまのところただ三つの部分的要求だけを認めている。すなわち、周知のように、レーニン派の選挙綱領の基礎となっていた三つの柱——国家機構の完全な民主化、八時間労働日、および農民への土地移譲——だけを認めている。『プラウダ』もまた、あいかわらずこの見地に立っている。ところがわれわれ、ならびに全ヨーロッパの社会民主主義派は」（「われわれ、ならびにわが国にはありがたいことに憲法があると説きつけるミリュコフは」と読め）「部分的要求をかかげることを扇動上の手段と見るのであるが、この手段は、労働者

大衆の日常闘争を重視する場合にのみ、成果をあげることができるのである。一方では、労働運動をいっそう発展させるうえで原則的な意義をもち、他方では大衆にとってさしせまったものとなりうるもの——それだけをわれわれは、現在の時機に、現在の時機に、それこそ社会民主党が注意を集中しなければならない部分的要求としてかかげることができるものだと考える。『プラウダ』がかかげている三つの要求のうち、ただ一つ——八時間労働日——だけが、労働者の日常闘争において大きな役割を演じており、また演ずることができる。他の二つの要求は、現在の時機には、宣伝の対象とはなりうるが扇動の対象とはなりえない。宣伝と扇動との差異については、ゲ・ヴェ・プレハーノフの小冊子『飢餓との闘争』のかがやかしいページを見よ。」(エリ・エスとしてはとんだはめになった。彼が引きうつしをしている「経済主義者」とのあいだにたたかわされたプレハーノフの一八九九—一九〇二年の論戦をおもいおこすことは、彼には「痛い」のに!)

「八時間労働日のほかに、労働運動上の必要からも、またロシアの生活全体の歩みによっても提起されている部分的要求とは、団結の自由、あらゆる組織の自由、およびそれと関係のある集会の自由、口頭および印刷物をもってする言論の自由の要求である。」

これが解党派の戦術である。エリ・エスが「……完全な民主化」ということばで書いている事柄も、彼が「農民への土地の移譲」と名づけている事柄も、——おわかりですか——「大衆にとってさしせまったもの」ではないし、「労働運動上の必要」と「ロシア生活全体の歩みによって」提起されてはいない、というのである!! ロシアのマルクス主義者の実践の歴史を記憶する人々、民主主義の諸任務を否認した「経済主義者」とのその多年にわたる闘争を記憶している人々にとって、こういう議論はなんと古くさく、またなんとなじみぶかいものであろう。当時労働者を、自由主義の道へひきずりこもうと試みたプロコポヴィチとクスコヴァの見解を、『ルーチ』はなんと天才的に引きうつしていることだろう!

それはそうとして『ルーチ』の議論を、もっと入念に吟味してみよう。常識的にみれば、その議論は、まったく気ちがいじみたものと言っていい。実際、気でもくるわないかぎり、前記の「農民的」(すなわち農民の利益をめざした)要求が「大衆にとってさしせまったもの」ではないとか、「労働運動上の必要からも、またロシアの生活全体の歩みによっても提起され」てはいないなどと、主張できるものだろうか? これは、まちがっているだけでなく、途方もなくばかげた言い草である。ロシアの一九世紀の全歴

史は、「ロシアの生活の歩み」全体は、この問題を提起し、これをさしせまった、最もさしせまったものにしたのであって、このことは、ロシアの立法全体にも反映している。なんだって『ルーチ』は、こんなおそろしいまちがいに到達することになったのだろうか？

同紙がそこへ到着せざるをえなかったのは、『ルーチ』が自由主義的な政治のとりこになっており、自由主義者は、農民の要求を排撃する（あるいは――『ルーチ』のように――遠ざける）のが自己に忠実なゆえんだからである。自由主義的ブルジョアジーがそういうことをするのは、彼らの階級的地位が、地主に調子をあわせ、人民運動に反対することを彼らによぎなくさせるからである。

『ルーチ』は、労働者に自由主義的地主の思想を提供し、民主主義的農民にたいして裏切りをやっている。

さらに、「さしせまっている」のは、結社の自由だけだろうか？　個人の不可侵は？　監視と専横の撤廃は？　普通選挙権等々は？　一院制等々は？　読み書きのできるあらゆる労働者、つい最近の過去をおぼえているすべての人人は、これらがすべてさしせまっていることをよく知っている。すべての自由主義者は、これらがみなさしせまったものであることを、無数の論文や演説のなかで、認めている。なぜ『ルーチ』は、もろもろの自由のうちで最も重要なものではあるが、ただ一つの自由だけをさしせまったものと言い、政治的自由、民主主義および立憲制度の根本的諸条件を、抹殺し、遠ざけ、「宣伝」の古文庫へしまいこみ、扇動から取りはずしてしまったのだろうか？

それは『ルーチ』が、自由主義者にとって受けいれられないものを、受けいれないからであり、もっぱらそのせいである。

労働運動上の必要とロシアの生活の歩みからして大衆にとってさしせまっているという観点からすれば、ムラノフの三つの要求と『プラウダ』の三つの要求（簡単を期するために、首尾一貫したマルクス主義者の要求、と言っておこう）のあいだには、差異はない。労働者の要求も、農民の要求も、一般政治的要求も、大衆にとっては同じようにさしせまっており、労働運動上の必要からも、「ロシアの生活全体の歩み」によっても、同じように提起されているものである。中庸と規律のわが信奉者お好みの「部分的性格」という観点からいっても、三つの要求はすべて同様であって、それらは終極目標にたいしては「部分的」であるが、しかし、たとえば「ヨーロッパ」一般にたいしては、きわめて高度である。

なぜ『ルーチ』は、八時間労働日をとりあげ、その他を排撃するのか？　なぜ同紙は、八時間労働日は労働者の日

常闘争において「大きな役割を演ずる」が、一般政治的要求と、農民的要求はそういう役割を演じないということを、労働者にかわってきめたのか？　諸事実はわれわれに、一方では労働者は日常闘争において一般政治的要求をも、農民的要求をもかかげていること、他方では、彼らはしばしば、労働日をわずかばかり短縮することをめざしてたたかっていることを、ものがたっている。

いったい、問題はどこにあるのか？

問題は、この自分の自由主義的限界を、例のとおり「大衆」に、「歴史の歩み」等々に転嫁しようとしている『ルーチ』の改良主義にある。

一般に改良主義は、人々が古い支配階級の主要な基礎の排除を要求しないような変更——これらの基礎の維持と両立しうるような変更——をめざす扇動だけに限るところにある。八時間労働日は、資本の権力の維持と両立しうる。ロシアの自由主義者は、労働者をひきつけるために、みずからこの要求に（「可能なかぎり」）署名する用意がある。『ルーチ』が、そのために「扇動」することをのぞまない諸要求は、前資本主義的な、農奴制の時代の基礎とは両立しないものである。

地主の権力の排除をのぞまないで、権力と特権とを分かちあうことだけをのぞんでいる自由主義者にとって、受けいれることのできないもの、まさにそういうものを『ルーチ』は扇動から追いのけようとしているのだ。『ルーチ』はまさに、改良主義の見地とあいいれないものを追いのけようとしているのである。

ここが肝心かなめなところだ。

ムラノフも、『プラウダ』も、すべてのマルクス主義者も、部分的な要求を排撃するものではない。それはつまらないことだ。たとえば、保険である。われわれは、部分的な要求などというおしゃべりによって、改良主義によって、人民をだますことを排撃する。われわれは、現代ロシアにおける自由主義的改良主義を、立憲的幻想に立脚する空想的な、私欲的な欺瞞的な、地主にたいする奴隷根性の精神にみたされたものとして排撃する。ここに『ルーチ』が、ムラノフも、『プラウダ』も、ある種の「部分的要求」を排撃してはいないということを自分でみとめているにかかわらず、「部分的要求」一般についての空文句で混乱させ、隠蔽しているところの急所があるのだ。

『ルーチ』は、マルクス主義的スローガンを切りちぢめ、それを狭い、改良主義的、自由主義的な寸法に合うようにし、そうやってブルジョア思想を労働者のあいだへもちこもうとしている。

マルクス主義者と解党派との闘争は、人民大衆への影響

をめぐって、人民大衆の政治的な啓蒙と教育をめぐっておこなわれている、先進的労働者と自由主義的ブルジョアとの闘争の現われにほかならない。

『プラウダ』第八五、九五、一一〇、一二三、一二四、一二六号、
一九一三年四月一二、二六日、五月一五、二九、三一日、六月二日
署名――ヴェ・イ
全集、第五版、第二三巻、六五―八八ページ所収
邦訳全集、第一九巻、一四三―一六八ページ所収

マルクス主義と改良主義

マルクス主義者は、無政府主義者とちがって、改良のための闘争、すなわち、権力をこれまでどおり支配階級の手にのこしておきながら、勤労者の地位の改善をはかる闘争を認めている。しかし、それと同時に、マルクス主義者は、労働者階級の努力と活動を、直接または間接に改良だけに限る改良主義者にたいして、最も断固としてたたかう。改良主義は、労働者にたいするブルジョア的な欺瞞であり、労働者は、個々の改善がおこなわれても、資本の支配が存在しているかぎりは、つねに賃金奴隷にとどまるのである。

自由主義的ブルジョアジーは、一方の手では改良をあたえながら、他方の手で、つねにそれを取りあげて無効にしてしまい、労働者を隷属させるため、彼らを個々のグループに分裂させるため、勤労者の賃金奴隷制を永続させるために、改良を利用する。だから、改良主義は、それがまっ

たく誠実なものであるときでさえ、実際にはブルジョアジーが労働者を堕落させ無力にする道具になるのである。あらゆる国の経験は、労働者が改良主義者を信頼すると、つねにばかにされたことを示している。

これと反対に、労働者がマルクスの学説を身につけていれば、すなわち、資本の支配が存続するかぎり賃金奴隷制の避けられないことを理解していれば、彼らは、どんなブルジョア的な改良にもだまされないだろう。資本主義が存続する場合には、改良は恒久的なものでも重大なものでもありえないことを理解している労働者は、改善のためにたたかい、その改善を賃金奴隷制にたいするいっそうねばりづよい闘争をつづけるために利用している。改良主義者は、施し物で労働者を分裂させ、だまし、彼らをその階級闘争からそらせようとつとめている。改良主義がいつわりであることを自覚した労働者は、自己の階級闘争の発展と拡大のために改良を利用する。

労働者にたいする改良主義者の影響が強ければ強いほど、労働者はますます無力になり、ますますブルジョアジーに従属し、ブルジョアジーはますます容易にいろいろな奸計をもちいて改良を無効にしてしまう。労働運動が自主的で根深く、その目標が広範であればあるほど、改良主義の狭さから解放されていればいるほど、ますます労働者は個々の改善をかため利用することができる。

改良主義者はどの国にもいる。なぜなら、ブルジョアジーはどこでも、なんとかして労働者を堕落させて、奴隷制絶滅の考えをすてた満足した奴隷にならせようとつとめているからである。ロシアの改良主義者は解党派であり、これは、新しい、公然たる合法党についての夢想で労働者をねむりこませるためにわが党の過去を否認している連中である。つい最近、『セーヴェルナヤ・プラウダ』(一八〇)に強制されて、ペテルブルグの解党派は、改良主義だという非難にたいして自己弁護を始めた。きわめて重要なこの問題をはっきりと解明するために、彼らの議論に慎重にたちいってみる必要がある。

ペテルブルグの解党派はこう書いている。われわれは改良主義者ではない。なぜなら、改良がすべてで終極目標は無であるとは、われわれは言わなかったからである。われわれが言ったのは、終極目標をめざす運動ということである。われわれが言ったのは、改良のための闘争をつうじて、提起された任務を完遂するということである、と。

この弁護が真実に合致しているかどうかを見よう。

第一の事実。解党主義者セドフは、全解党派の言明を総括して、マルクス主義者がかかげている「三つの柱」(一八一)のうち二つは今日扇動に適しない、と書いている。彼は、理論

的には改良として実現できる八時間労働日をのこしておいた。彼は、まさに改良の枠からはみでるものを取りのぞき、もしくはおしのけた。したがって、彼は、終極目標は無であるという定式によって表現される、まさにその政策をとることによって、最も明白な日和見主義に陥ったのである。「終極目標」(たとえ民主主義にかんする終極目標であっても)を扇動からできるだけ遠くへおしのけることこそ、改良主義なのだ。

第二の事実。解党派の悪名高い八月(昨年の)協議会もまた、非改良主義的な要求をできるだけ近くひきよせ、それを扇動の中心そのものにひきいれようとはしないで、それをできるだけ遠くへ——特別な場合のためのものとして押しのけている。

第三の事実。解党派は「古いもの」を否定し、それを蔑視し、それをはらいのけ、まさにそうすることによって改良主義にとどまっている。今日の情勢のもとでは、改良主義と「古いもの」を否認することとのつながりは明らかである。

第四の事実。労働者の経済的運動は、それが改良主義の限界をのりこえるスローガンと結びつくやいなや、解党派の憤りと攻撃(「ストライキ熱」、「不必要な精力浪費」等)を呼びおこしている。

これを総括すると、どういうことになるか? 解党派は、口先では、原則的改良主義を拒んでいるが、実際にはあらゆる方面でそれを実行している。一方では、自分らにとって改良はけっしてすべてではない、とわれわれに確言しているが、他方では、マルクス主義者が実践において改良主義の限界をこえて行動すると、つねに解党派の攻撃か、あるいは軽蔑的態度かをまねいている。

この場合、労働運動のあらゆる分野の出来事は、われわれに、マルクス主義者が改良のための闘争と改良を実際に利用する点とで、おくれをとっていないばかりか、反対に、はっきりと先頭をすすんでいることを示している。労働者クーリアの国会選挙や、国会内外での議員の言動や、労働者新聞の創刊や、保険の改正の利用や、最大の労働組合としての金属労働組合、その他をとってみたまえ。どこででも諸君は、改良のために扇動し、組織し、闘争し、改良を利用するという、直接的な、当面の「日常」活動の分野で、マルクス主義的労働者が解党派にまさっていることを見るのだ。

マルクス主義者は、改良の「可能性」、改良を利用する「可能性」をただの一つものがさず、また宣伝でも、扇動でも、経済的大衆行動その他でも、改良主義の限界をこえるどんな行動をも非難しないで、それを支持し、注意ぶか

くそれを発展させながら、倦むことなく活動している。ところが、マルクス主義から脱落した解党派は、全一体としてのマルクス主義の存在そのものを攻撃し、マルクス主義的規律を破壊し、改良主義と自由主義的労働者政治とを説くことによって、労働運動を攪乱しているだけである。

これ以外に、ロシアの改良主義はさらに特別のかたちで、すなわち、今日のロシアと今日のヨーロッパの政治情勢の根本条件を同一視するというかたちで、現われていることを忘れてはならない。自由主義者の見地から見れば、こうした同一視は正当である。なぜなら、自由主義者は、「わが国には、ありがたいことに、憲法がある」[(五)]と信じ、そう告白しているのだから。一〇月一七日以後には、改良主義の限界をこえた民主主義派のどんな行動も、気違いざたであり、犯罪であり、過誤等々であるという見解を自由主義者が擁護しているのは、ブルジョアジーの利益を表明しているのである。

しかし、ほかならぬこれらのブルジョア的見解を実際に実行しているのが、わが解党派である。彼らは、「公然の党」や、「合法性のための闘争」等々を、絶えず、系統的に、ロシアに「うつしている」(紙のうえで)。言いかえると、彼らは、自由主義者と同様に、西欧で幾世代のあいだに、ときには数世紀ものあいだに憲法をつくりだし、それを強固なものにした独特の道をぬきにして、ヨーロッパ的憲法をロシアにうつすことを説教している。解党派と自由主義者は、俗にいうように、水につけないで毛皮を洗おうと望んでいるのである。

ヨーロッパでは、改良主義は、実際には、マルクス主義を拒否し、それをブルジョア的「社会政策」とすりかえることを意味している。わが国では、解党派の改良主義はそれだけではなく、さらにそのうえに、マルクス主義的組織の破壊、労働者階級の民主主義的任務の放棄、この任務を自由主義的労働者政治とすりかえることを意味している。

『プラウダ・トルダー』第二号、一九一三年九月一二日
全集、第五版、第二四巻、一—四ページ所収
邦訳全集、第一九巻、三九四—三九八ページ所収

ヴェ・ザスーリチはどのように解党主義をほうむるか

一九一三年七月一九日付『ジヴァーヤ・ジーズニ』[一〇]第八号には、解党主義を擁護するヴェ・ザスーリチの注目すべき論文（『一つの問題について』）がのっている。労働運動と民主主義の諸問題に関心をもつすべての人々は、内容の点でも、権威ある著者の腹蔵のない率直さの点でも貴重なこの論文に特別の注意をはらってもらいたい。

一

ヴェ・ザスーリチは、あらゆる解党主義者と同様になになによりも党を中傷しようとやっきになっているが、それがあまりにも露骨なので、著者自身を驚くほどあざやかに暴露する結果になっている。ヴェ・ザスーリチはこう書いている。「ロシア社会民主労働党は労働者のあいだで宣伝・扇動をするためのインテリゲンツィアの地下組織で、第二回大会[一一]〔一九〇三年〕で創立されたのだが、すぐに分裂してしまった」と。だが、実際には、党は、一八九五―一八九六年の大衆的労働運動の覚醒に依拠して、一八九八年に創立されていたのだ[一二]。なん十人、なん百人という（今はなきペテルブルグのバーブシキンのような）労働者が、サークルで講義をきいただけでなく、すでに一八九四―一八九五年にはみずから扇動をおこない、のちには他の都市へ労働者の組織をひろげていた（ピーテルから派遣されたバーブシキンがエカテリノスラフに組織をつくったことなど）。

運動の当初インテリゲンツィアが比較的優勢なのは、どこでも見られたことで、ロシアにかぎったことではない。ヴェ・ザスーリチはこの事実を労働者党にたいする中傷に利用することによって、かえって一八九四―一八九六年の扇動やストライキを体験した、ものを考えるすべての労働者のあいだで解党主義をぶちこわしている。ザスーリチはつぎのように書いている。

「……一九〇三年にこの活動をしていた地下サークルが合同して、位階制的規約をもつ秘密団体をつくった。こういう新しい組織が当面の活動をたすけたか、それとも妨げたか、どちらとも言えない……。」

忘れん坊になりたくない者ならだれでも、インテリゲンツィアと労働者のグループが、一九〇三年どころか一八九四年から（しばしばもっと以前から）、経済的、政治的扇動をも、ストライキをも、宣伝をもたすけていたことをおぼえている。「組織が活動をたすけたか、それとも妨げたか、どちらとも言えない」と言明することは、歴史について大うそをつくだけではなく、党に見切りをつけることをも意味する。

実際、党が活動をたすけたか、それとも妨げたか、どちらとも言えないとすれば、なんのために党の価値を認めるのか？　人間のための土曜日で、土曜日のための人間でないことは、はっきりしているではないか？

解党主義者にとって、現在の時点での党の否認を正当化するためには、過去にさかのぼって党を否認することが必要なのである。

ヴェ・ザスーリチは、現在について、すなわち六月三日〔三〕体制の時代について語りながら、「わたしは組織の地区支部が空になったという情報を耳にした……」と書いている。

これは争う余地のない事実である。組織の地区支部も、ほかのあらゆる支部も空になった。問題はまさに、組織からの逃亡というこの現象をどう説明するか、またこの現象にどう対処するかにある。

ヴェ・ザスーリチはこうこたえている。「空になったのは、そのときに、そこではなにもすることがなかったからである」と。

この答えは断固たるものだ。それは、地下活動を断固として非難し、そこからの逃亡を正当化するに等しい。ヴェ・ザスーリチは自分の主張を、いったいどのように証明しているのか？　（一）宣伝家たちはなにもすることがなかった。というのは「多くの労働者が」、自由だったころの出版物で「立派な文庫を」「つくっていた」し、「警察はまだそれらを没収しきっていなかった」からである。

自分で自分の主張を反駁していることに気づかずにいられるというヴェ・ザスーリチのこの能力は、珍妙なものである。警察が文庫を「没収しつつあった」とすれば、それは、読んだものが討議され、会得され、さらに深く研究された結果、まさに地下活動が生まれていたことを意味する！　ヴェ・ザスーリチは「なにもすることがなかった」ことを証明しようとしているが、彼女が認めたことのなかから「することがあった」という結論がでてくるのである。

（二）「この時期に地下からの政治的扇動の可能性は問題外であった。そのうえこうした〝行動〟のイニシアチヴをとることは、地区の権利や義務となってはいなかった」。

ヴェ・ザスーリチは、事情を知りもせずに解党主義者の

ことばを繰りかえしている。問題の時期が困難な時期であったこと、それ以前よりも困難な時期であったことは議論の余地がない。だが、マルクス主義者の活動はいつでも「困難」であり、かれらは、困難な活動を不可能だと言わないという、まさにそのことによって、自由主義者と異なっているのである。自由主義者は、困難な活動を不可能だと称し、それによって自分がそれを放棄していることをおおいかくそうとする。活動が困難なとき、マルクス主義者は、困難を克服するために、最良の分子をいっそうかたく結束させようと努めるのである。

問題の時期においてこの活動が可能だったし、また実際におこなわれもしたという客観的事実は、たとえば第三(三二)、第四国会(三三)の選挙によっても証明されている。実際にヴェ・ザスーリチは、地下組織の支持者たちが地下組織の参加なしに国会に当選できたとでも考えているのではなかろうか？

(三)「地下のグループにはなにもすることがなかったが、その外には、必要な社会的活動が山ほどあった……。」クラブ、あらゆる団体、大会、講演など。

ヴェ・ザスーリチによって繰りかえされているすべての解党主義者の見解とは、このようなものである。彼女の論文は、労働者サークルで解党主義の不幸を研究するための教材としてそのまま推薦することができる！

ついでに言えば、地下組織が必要だったのは、クラブや団体や大会などでのマルクス主義的活動が、まさにそれと結びついていたからである。

この私の見解を、ヴェ・ザスーリチの見解と比較してみたまえ。ヴェ・ザスーリチが合法団体での活動を、地下グループの活動の「外で」おこなわれる活動としてえがくどんな根拠をもっているかを考えてみたまえ？？なぜ「外で」なのか。またなぜ「かたく結びついて」でもなく、「同じ方向で」でもないのか？？

ヴェ・ザスーリチには、事実に即した根拠などまったくないのである。なぜなら、だれでも知っていることだが、地下組織のメンバーが参加していないような合法団体等々は、おそらくまず一つもなかったからである。ヴェ・ザスーリチの唯一の根拠は、解党主義者たちの主観的気分である。解党主義者には、自分たちは地下でなにもすることがないという気分、自分たちは地下の外での、その思想的方向の外での活動にだけ同調するという気分があった。別のことばで言えば、ヴェ・ザスーリチの「根拠」は、解党主義者たちの地下からの逃亡の正当化に帰着するのである。

みじめな根拠だった。

だがわれわれは、ヴェ・ザスーリチの文章の主観的根拠

や、彼女の論文の文字どおり一句ごとにみちみちている実際上、論理上の誤りを指摘するだけにとどまってはいられない。われわれは、「地区が空になり」、地下からの逃亡がおこなわれたという争う余地のない事実の客観的根拠をさがしださなければならない。

遠くまでさがす必要はない。問題の時期に、ロシアのブルジョアおよび小ブルジョア社会が、きわめて強い反革命的気分にとらえられていたことは、周知のとおりである。自由の日々に、ブルジョアジーとプロレタリアートとのきわめて深刻な敵対関係がさらけだされ、そのことがプロレタリアートの多くの不確かな友人たちのあいだに混乱、挫折、意気消沈をもたらすとともに、反革命的気分をも生みだしたことは、周知のとおりである。

問題の時期における諸階級のこの客観的な相互関係は、われわれにつぎのことを説明している。すなわち一般にブルジョアジー、とくに自由主義ブルジョアジー（というのは、かれらは人民大衆にたいする主導権を奪いとられたからである）が、なぜ、地下組織を憎むのか、また、なぜ、それを、なんの役にもたたない「無能力者」（ヴェ・ザスーリチの表現）ときめつけ、地下からの政治的扇動や、地下組織の精神とそのスローガンにしたがった、思想的、組織的に地下と不可分に結びついた合法的活動を非難し、拒否しなければならなかったかということを、十分に説明しているのである。

地下からまっさきに、第一番に逃げだしたのは、反革命的な気分に陥ったブルジョア・インテリゲンツィアであった。すなわち、わが国でもヨーロッパでもブルジョア革命におけるプロレタリアート（ヨーロッパでは平民一般）の解放的役割に夢中になった、社会民主主義的労働運動の「同伴者たち」であった。一九〇五年以後、きわめて多くのマルクス主義者が地下組織からはなれ、あらゆる種類の合法的なインテリゲンツィアの巣にそれぞれ腰をおちつけたことは、周知の事実である。

ヴェ・ザスーリチが、主観的にはどんなに「よい」意図をもっていたとしても、彼女によって繰りかえされた解党主義者の議論は、客観的には、結局のところ、反革命的、自由主義的な、くだらない考えの焼直しにすぎない。解党主義者はなによりも「労働者の自主的活動」等々とさけんではいるが、実際には、まさに、労働運動から脱落してブルジョアジーの側に移ったインテリゲンツィアを代表し、またかれらを擁護しているのである。

個々の人間について言えば、地下組織からの逃亡が、疲労と気落ちの結果である場合もあるだろう。こうした人々には同情のほかはない。かれらには援助をあたえなければ

ならない。なぜなら、かれらの気落ちはやがておさまり、俗物根性から、自由主義者から、自由主義的労働者政治からはなれて、労働者の地下運動に近づこうとする志向がふたたび現われてくるだろうからである。しかし、疲れ果て、気落ちした人々が、ジャーナリズムの演壇に這いあがり、自分の逃亡を、疲労や弱さやインテリ的なもろさのあらわれではなくて、自分の功績であると宣言し、しかも、「無能力な」、「役立たずの」、あるいは「硬直した」等々の地下組織に罪を転嫁する場合には、こうした逃亡者は嫌悪すべき背教者、変節者となる。こうした逃亡者は労働運動の最悪の助言者となり、それだけにまた危険な敵となるのである。

解党主義者が、一方ではわれわれ、つまり解党主義者は統一を支持すると誓いをたてながら、同時に他方では同類の連中を擁護し、ほめちぎっているのを見ると、ただ肩をすくめてつぎのように自問しないわけにはいかない。――こうした、まじめくさった愚行や偽善で、彼らはいったいだれをだまそうと考えているのだろうか？　党からの離反をほめちぎることにたいして、断固としてたたかうことなしに労働者党が存在しえないことは、あきらかではないだろうか？

解党主義者は（そのあとにつづいてヴェ・ザスーリチも）、こうした変節者や逃亡者を「労働者階級の生きた勢力」と呼ぶことで、みずからをなぐさめている。だが自由主義的インテリゲンツィアのこうした言いのがれは、全ロシア的規模の、議論の余地のない事実によってとっくにくつがえされている。ボリシェヴィキは、[32]労働者クーリア〔選挙等級〕選出の国会議員中、第二国会で四七％、第三国会で五〇％、第四国会で六七％を占めた。これはまさに、一九〇七―一九一三年の時期に労働者が解党主義者からはなれたことの、反論の余地のない証拠である。また最初の日刊労働者新聞の出現や、現在労働組合のなかにみられる現象は、この証拠をさらに裏付けるものである。自由主義的インテリゲンツィアの高慢ちきな根拠のない声明ではなく、客観的事実をみるならば、労働者階級の生きた勢力は、地下組織を支持する人々、解党主義に反対する人々のなかにあることがわかるのである。

しかし、過去についてのヴェ・ザスーリチの議論はすべてまだほんの序の口にすぎない。本論はもっと先にあるのである。変節や党の放棄を擁護することは、党の破壊を擁護することの序論にすぎない。ヴェ・ザスーリチの論文のこの最も重要な部分に、われわれも移ることにしよう。

二

論文にはこう書かれている。「地下組織はつねにロシア社会民主党の最も弱い側面であった」（まさしく「つねに」と言っているのだ！）。大胆な歴史家とは、わが解党主義者のことである。「つねに」とは、一八八三―一八九三年にも、つまり党の組織的指導のもとで大衆的労働運動がはじまる以前にも、ということであり、また一八九四―一九〇四年にも、ということである。ところで、一九〇五―一九〇七年にはどうか？

「……だが、もしそれ〔地下組織〕が一〇倍もよいものだったとしても、革命と反革命には耐えられなかっただろう。私はヨーロッパ史上に、革命を体験したあとで、反動の時期に活動能力を示した革命的組織をただの一つも記憶していない。」

この議論はまことに「珠玉の名言」に富んでいて、どの珠玉からえらびだしたらいいか、まったくわからない！

ヴェ・ザスーリチは、ヨーロッパ史上に、彼女の興味をひくような事例を「記憶していない」。だがヴェ・ザスーリチは、近隣諸国に数十万、数百万の党員をもつ自主的な労働者党が存在するという情勢のもとで、またその国に、全国的規模で団結した産業プロレタリアートと労働運動をすでに生みだしている高度に発展した資本主義のもとでおこったブルジョア革命を、「ヨーロッパ史上に」記憶しているのだろうか？

ヴェ・ザスーリチがこのような事例を「記憶している」はずはない。なぜならそのような事例は、「ヨーロッパ史上に」はなかったからである。大衆的政治ストライキがブルジョア革命において決定的な役割を果たすようなことは、二〇世紀以前のヨーロッパ史上にはなかったし、またありえなかった。

いったい、どういうことになるのか？　結局、こうなる。つまり、解党主義者は、ブルジョア革命にさいして自主的なプロレタリア政党や大衆的ストライキが存在しなかった「ヨーロッパ史」の実例を引合いにだしている、ということ、――しかも、この実例を、前記の二つの根本的条件（自主的なプロレタリア政党と政治的性格をもつ大衆的ストライキ）が現に存在したし、現に存在している国の任務を放棄し、あるいは低め、削り、縮め、刈りこむために引合いにだしている、ということになるのだ！

ヴェ・ザスーリチは、ちがったことばで、ちがった動機から、別の側面から問題に近づきながら、自由主義者プロコポーヴィチの思想を繰りかえしている。だが、彼女はそ

のことを理解していない。そしてこの無理解は解党主義の大きな特徴である。この自由主義者は、かれが極端な「経済主義者」[二七]になって社会民主主義と訣別したまさにそのとき（一八九九年）に、「自由主義者は政治闘争、労働者は経済闘争をやるべきだ」という思想を述べたのである。

一八九五—一九一三年のロシアの労働運動におけるあらゆる日和見主義は、この思想に傾き、この思想に迷いこんでいる。この思想との闘争のなかでのみ、ロシアの社会民主主義は成長した——そのなかでのみ成長することができた——のである。この思想と闘争すること、大衆をこの思想の影響下からうばいとることこそ、まさにロシアにおける自主的な労働運動をめざす闘争である。

プロコポーヴィチはこの思想を、実際の任務に適用して、命令や願望のかたちで表現した。

ヴェ・ザスーリチはこの思想を、諸事件の歴史的、回顧的考察あるいは概観とでもいったようなかたちで繰りかえしている。

プロコポーヴィチは、「労働者の兄弟よ、政治的自主性について考えるのはやめよ！」と、直接の、率直な、はっきりした、思いきった言い方で語った。ヴェ・ザスーリチは、解党主義が自分をどこにつれていったかを理解せずに、ジグザグにすすみながら、同じ深淵に近づいている。彼女はこう言っている。——「労働者の兄弟よ、ヨーロッパの実例からみても、君たちは、君たちの古い試験ずみの型の、一九〇五年に君たちの組織がそうだったのと同じ型の、〝活動能力のある〟組織をもつべきではない。自由主義者は一九〇五年いらい、〝地下組織〟についてのむなしい夢想をすて、〝活動能力のある〟公然とした組織をつくりだした。この組織は、六月三日体制によって合法化されなかったとはいえ、この体制から大目にみられており、自分の国会議員団を、自分の合法新聞を、自分の、事実上だれもが知っている地方委員会を保持している。ところが、労働者の兄弟よ、君たちの古い組織は活動能力がなく、〝ヨーロッパ史〟の教訓からみても活動能力をもつはずがない。そこで、われわれ解党主義者は君たちに新しい〝公然の党〟を毎日約束しているのだ。君たちにはそれ以上なにが必要なのか？　われわれ解党主義者の約束で満足したまえ。君たちの古い組織をできるかぎりののしりたまえ。それにつばを吐きかけたまえ。それを放棄し、しばらくのあいだ（〝公然の党〟についてのわれわれの約束が追って果たされるまで）どんな組織ももたずにいたまえ！」と。

まさにこれが、ヴェ・ザスーリチの解党主義的議論の実際の意味であり、彼女の意思や意識によってではなく、ロシアにおける諸階級の相互関係と労働運動の客観的諸条件

とによって規定される意味である。そして自由主義者がのぞんでいるのは、まさにこれなのである。ヴェ・ザスーリチは、プロコポーヴィチをおうむがえしに繰りかえしているにすぎないのだ！

一八世紀末、一九世紀前半のヨーロッパとはちがって、ロシアはまさに古い組織〔地下組織〕がその生命力と活動能力を立証した国の見本となった。この組織は、解党主義者や多数の俗物の脱落にもかかわらず、反動期にももちこたえた。この組織は、その根本的な型を保持しながら、その形態を、変化した諸条件に適応させることができたし、この形態を、「ブルジョア君主制への転化の一歩前進」[164]を示している時期の諸要求におうじて変化させることができたのである。

われわれは古い組織のこの適応性の客観的証拠を——最も簡単で明瞭な、自由主義者に最も理解しやすい証拠の一つをあげるとすれば——、第四国会の選挙の結果にみることができる。すでに指摘したように、六つの主要工業県全部をふくめて、労働者クーリア選出の国会議員の三分の二が古い組織を支持したのである。これらの県には約一〇〇万人の工場労働者がいる。この真の大衆、プロレタリア大衆のなかのすべての生きいきとしたもの、すべての自覚的なもの、すべての影響力あるものは、自分たちの古い組織の形態を変え、その活動形態を変化させながら、その方向、その思想的・政治的基礎、その活動内容を維持しつつ選挙に参加したのである。

われわれの立場ははっきりしている。それは、一九〇八年いらい変わることなくきまっていた。ところが解党主義者には——ここにかれらの不幸があるのだが——、かれらが新しい組織をもつまでは、どんな立場もないのである。かれらにはただ悪しき過去についての溜息と、よき未来についての夢想があるだけである。

三

「……組織は党にとって必要である」——とヴェ・ザスーリチは書いている。彼女は、メンシェヴィキが優勢を占めながら、有名な規約第一条の採択を余儀なくされたストックホルムの決定[165]（一九〇六年）にすでに不満なのである。もしそうだとすれば（絶対にそうだが）、ヴェ・ザスーリチはまちがっており、彼女はメンシェヴィキのストックホルム決定を否認しなければならなくなる。組織はたんに「党にとって必要だ」というだけにとどまるものではない。これは、反労働者的政治のために労働者党を「利用」しようとしているありとあらゆる自由主義者、ありとあらゆる

ブルジョアも認めていることである。党とは、一つに結びつけられた諸組織の総和である。党とは、あらゆる地域的組織と特殊的組織、中央組織と一般的組織とに網の目のように分かれている労働者階級の組織である。

ここでもまた、解党主義者がはっきりした立場を少しももっていないことがわかる。彼らは一九〇三年に〔第二回党大会で〕、党員について、組織に加入しているものだけでなく、その統制のもとに（組織の外で）活動するものも党員であるという概念を通過させた。ヴェ・ザスーリチはこのエピソードを思いだしているが、それはあきらかにこのエピソードを重要だと考えてのことである。彼女はこう書いている。

「……一〇年まえ、すでに第二回大会において、メンシェヴィキは党全体を地下組織のなかに隠すことはできないと感じていた……。」

もしメンシェヴィキが一九〇三年に、地下組織に嫌悪を感じていたのなら、いったいなぜ一九〇六年に、党がはるかに「公然」化した時期に、彼ら自身が大会で優勢を占めながら、自分たちが一九〇三年に採択したメンシェヴィキ的規定を廃止して、ボリシェヴィキ的な規定を通過させたのだろうか？　ヴェ・ザスーリチが書いている党の歴史を見ると、いたるところで、信じられないほどの驚くべき事実の歪曲にぶつかる！

メンシェヴィキが一九〇六年にストックホルムで、組織の総和としての党というボリシェヴィキ的規定を採択したことは争う余地のない事実であって、もしヴェ・ザスーリチと彼女の友人たちがもう一度自分たちの見解を変えたのであれば、もし彼らが一九〇六年の自分たちの決定をいままた誤りだと考えているのであれば、なぜそのことを率直に言わないのか？　彼女自身がこの問題をとりあげ、一九〇三年を思いだしていることからみれば、一般的に言ってヴェ・ザスーリチは、あきらかにこの問題を重視しているのだ！

読者にはおわかりのように、組織問題についての解党主義者の見解ほど、頼りなく、混乱したものはない。これこそ、まったくの無定見である。これは動揺と混乱の見本である。ヴェ・ザスーリチは腹を立て、声を張りあげて、「組織上の日和見主義とは、ばかげたことばだ」とさけんだ。しかし「腹を立てて」みたところでなんにもならない。一九〇七年にロンドンのメンシェヴィキ・フラクションの集会で、のちに解党主義者となった人々の「組織上の無政府主義」が指摘されたことを、チェレヴァニン自身が公表したではないか。そのときもいまも、解党主義者のなかの最も著名な人々が解党主義者をやっつけるというきわめ

て奇妙な状態に落ちこんでいたし、また落ちこんでいるのである。ヴェ・ザスーリチはこう書いている。

「……組織は党にとって必要である。だが、党がいくらかでも長い期間にわたって党全体を包みこみ、まったく同じ形態で、まったく同じ規約で」（謹聴！）。「無事に」（！）「存在できるのは、確立され、強化された法秩序のもとで（いつかはそれがロシアで確立されるとして）、ロシアの社会生活がいままで通ってきた険しい山道をあとにして、ついに平坦な道を進むようになったときだけであろう。ロシアの社会生活は、まる百年ものあいだ、その山道を、あるときは頂上によじ登り、あるときは反動の深淵に落ちこみながら、受けた怪我がなおればふたたび山によじ登りはじめるというふうにして、ますます早いテンポで進んでいるのである……。」

これこそ混乱の典型として褒賞に値いする解党主義者の議論の一つである。読者は、著者がなにを言おうとしているのか、理解に苦しむだろう。

「規約」の変更だって？　だがそれなら、紳士諸君、規約をどう変えようというのか、どうか話してくれたまえ！　そして自分を笑いものにするのはやめたまえ。規約は変えられないものではないということの「哲学的」証明にとりかかるのはやめたまえ。

だが、「同じ規約」についてながながとしゃべりながら（ところで、規約はちょうど一九一二年に変更された(二三)）、ヴェ・ザスーリチはどんな変更をも提案していないのである。ヴェ・ザスーリチは、いったい、なにを言いたいのか？　彼女は、ロシアにとって山道が終わり、平坦な道が始まったとき、党は組織となるのだということを言いたいのである(二四)。これはきわめて尊敬に値いする、自由主義的、道標派的思想である。平坦な道にでるまでは、すべてが醜悪で、邪悪であり、党は党でなく、政治は政治でない。「平坦な道」ではすべてが「きちんとする」だろうが、「山道」では混沌があるだけだ、というわけである。

われわれはこうした議論をずっと以前に自由主義者のところで読んだことがある。地下組織や「山道」にたいする自由主義者の憎悪の観点からすれば、こうした議論はわかるし、自然でもあり、当然でもある。そこでは事実がゆがめられているのだが（というのはロシアには地下に多数の党＝組織があったからである）、われわれは地下組織にたいする憎悪がどれほど自由主義者の眼をくらませ、事実を見えなくさせているか、を理解している。

だが――いま一度――、ヴェ・ザスーリチは、いったいなにを言いたいのか？　どうやら、わが国では、党＝組織は不可能だと言いたいらしい……だから、どうなるのか？

あいまいな思想と言い残し、長い、苦しい、困難な時期による問題の混乱、解決のない堂々めぐり。諸君は著者がこっそりと、あらゆる組織を否定しようとかかっているのを感じるだけである。そしてヴェ・ザスーリチは、ひそかにそれをやろうとするなかで、ついにつぎのようなことまで言うにいたった……。これこそ彼女の思想の真骨頂である。

「わが国には、完全な権利をもって西ヨーロッパのどの社会主義政党にも加入できる労働者の広範な層が存在する。この急速に発展する層のなかに、すべての力がある。この層が党を組織するのに足りないのは、正式入党の機会だけである。われわれが彼らをどう呼ぶにしても、われわれは彼らについて、党についてと同じように考えもし、語りもするであろう。」

そこで、解党問題を論ずる場合には、そもそも解党主義者が党の意味をなにか別のものに理解しているのだということを知らなければならない。いったい、彼らは、党をどんなものと理解しているのか？

「党を組織するのに（!:）足りないのは正式入党の機会だけ（!）の……労働者の広範な層」という意味に理解していることがわかった。

これは珍無類だ。——党とは、「正式入党の機会だけが足りない」人々のことである。つまり、党とは、党の外にある人々のことである、と。

まったくのところ、ヴェ・ザスーリチは、すべての解党主義者が言おうとして言えないことをあけすけに言ってのけることによって、実にすばらしい珠玉〔名文句〕をわれわれのために集めてくれたのである。

四

現在ドイツには約一〇〇万人の党員がいる。同国で社会民主党に投票する人は約四二五万人であり、またプロレタリアは約一五〇〇万人である。これこそ、解党主義者がもつれさせたものを解きほぐすための、わかりやすい、生きた見本である。一〇〇万人——これが党である。一〇〇万人が党組織に加入している。四二五万人——これが「広範な層」である。それは実際には、さらになん倍も広範である。というのは、婦人は投票権をもたず、また居住資格や年齢資格等々をもたないこの層の多数の労働者も、投票権をもっていないからである。

この「広範な層」は、ほとんど全部が社会民主主義者であり、この層なしには党は無力であろう。この広範な層は、なにか行動がおこなわれるときには、さらに二—三倍にひろがる。というのは、そのときには、社会民主主義者でな

い大衆が党のあとについてくるからである。

これはわかりきったことではないだろうか？　こんなイロハをさらに嚙みくだいて説明しなければならないとは、まったく具合の悪いことだ！

いったい、ドイツとロシアとでは、どこがちがうのか？　わが国では「党」と「広範な層」とのあいだに差異がないという点に、そのちがいがあるなどということはけっしてない。このことを理解するために、まずフランスをとってみよう。そこでわれわれはつぎのことを知るのである（およその数。もっと正確な数字は、わたしの結論を強めるだけであろう）。

党……………………約七万人*
「広範な層」（社会民主党への投票者）……約一〇〇万人
プロレタリア…………約一〇〇〇万人

* 最近の一九一三年のブレスト大会(九七)での報告によると、正確な数字は六万八九〇三人である。

ところで、ロシアではどうか？　党は一九〇七年に一五万人である（これはロンドン大会(九八)で計算され、確かめられた）。現在はどのくらいか、わかっていない。おそらくずっと少なくなっているだろうが、三万か五万か、はっきりさせるのは不可能である。

わが国の「広範な層」は、社会民主党への投票数から大まかに計算すると、三〇万―五〇万である。最後に、わが国のプロレタリアは、おそらく二〇〇〇万くらいである。くりかえして言うが、これはおおよその数である。しかしだれかがもっと正確に基礎づけようとして、別のどんな数字をだしたとしても、それは私の結論をさらに強く裏付けることになるだけであろう。

結論はこうである。あらゆる国において、つねに、またどこでも、「党」の外に、党をとり巻く人々の「広範な層」と、党の基礎となり、党を生み出し、はぐくみ育てている階級の膨大な大衆とが存在する、ということである。解党主義者はこの簡単な、明々白々な事実を理解せず、一八九五―一九〇一年の「経済主義者」の誤りを繰りかえしている。「経済主義者」には、「党」と「階級」との違いがどうしても理解できなかったのである。

党は階級の自覚ある、先進的な層であり、その前衛である。この前衛の力は、その成員の数より一〇倍、一〇〇倍、いやそれ以上も大きい。

こういうことは可能だろうか？　一〇〇人の力が一〇〇〇人の力をしのぐことができるだろうか？

その一〇〇人が組織されている場合には、しのぐことができるし、またしのいでもいる。

組織は力を一〇倍にする。この真理はけっして新しいものではない。だがヴェ・ザスーリチと解党主義者のために最初から説明しなおさなければならないとしても、それはわれわれの罪ではない。

ところで、先進部隊の自覚は、それがみずからを組織する能力をもっていることにもあらわれる。それはみずからを組織することによって統一された意思をもつようになり、この、先進的な一〇〇〇人、一〇万人、一〇〇万人の統一された意思は、階級の意思となる。党と階級との媒介者となるのが、「広範な層」(党より広範だが、階級よりは狭い)——社会民主党に投票する人々の層、協力者の層、共鳴者の層等々——である。

党と階級との関係は、歴史的状況その他の条件にしたがって、国によってちがっている。たとえばドイツでは、階級の約一五分の一が党に組織されており、フランスでは約一四〇分の一である。ドイツでは、「広範な層」の社会民主主義者は党員一人につき四—五人であり、フランスでは一四人である。フランスでは——「公然とした」組織と政治的自由のもとでも——、実質的に一〇万の党になったことは一度もなかった。

理性のある人ならだれでも、ドイツでは階級の一五分の一を党に組織することを可能にし、フランスではそれを困難にし、ロシアではさらに一段と困難にしているそれぞれの歴史的条件が存在し、客観的原因が存在することを理解している。

もし、あるフランス人が、「わが党は狭いサークルであって党ではない。党を組織の中に隠し込むことなどできるものではない。党とは広範な層のことであり、そのなかにすべての力があるのだ」などと声明することを思いついたとしたら、諸君はなんと言うだろう。おそらく、このフランス人が精神病院にはいっていないことに驚きを示すであろう。

ところが、わがロシアでは、われわれの道がまだいぜんとして険しい山道であること、すなわち組織の条件がより困難であることを感じ、見、知りながら、「自分たちは広範な層(未組織者の!)について党について同じように考えもし、語りもするであろう」と声明する人々の主張をまじめに取りあげようとするものがいるのだ。これらの人人は衰退、意気消沈、[活動の]放棄といった自由主義的な考え方の圧力のもとで持ちこたえられずに呆然自失した党からの脱走者たち、呆然自失した党外あるいは党のまわりの社会民主主義者たちである。

五

ヴェ・ザスーリチはその注目すべき論文の結びに、こう書いている。「この地下組織は、有効な力であるためには、たとえそれだけが党と呼ばれるとしても、この社会民主主義的労働者にたいして」（すなわち、ヴェ・ザスーリチがそのなかに「すべての力」を見いだし、それについて彼女が、「われわれは彼らについて、党についてと同じように考えもし、語りもするであろう」と宣言した広範な層にたいして）、「党の役員たちが党にたいすると同じ」「関係をもたなければならない」と。

名文句に富んだヴェ・ザスーリチのこの論文でも、傑作中の傑作であるこの主張をじっくりと考えてみたまえ。まず第一に彼女は、現在のロシアではなにが党と呼ばれているかを非常によく理解している。ところがなん十人という解党主義の著述家たちは、世間にたいして、かれらがこのことを理解していないかのように断言してきたし、いまも断言しており、その結果解党についての論争は、これらの紳士たちによって、信じられないほど混乱させられているのである。労働運動の運命に関心をいだく読者諸君は、俗悪な、十把ひとからげの解党主義者に背をむけて、ヴェ・ザスーリチの論文を読み、党とはなにかという、昔も今もあいまいにされている問題についての回答を、そのなかから引きだすといい。

第二に、ヴェ・ザスーリチの結論を吟味してみたまえ。地下組織は広範な層にたいして、役員が党にたいすると同じ関係をもたなければならない、と述べている。ここで問題になるのは、あらゆる団体の役員とその団体との関係の本質はどのような点にあるか、ということである。役員は自分の個人的な（またはグループの、またはサークルの）意思ではなくて、この団体の意思を実現する、という点にあることはあきらかである。

それでは、数十万人あるいは数百万人からなる広範な層の意思を、どのようにして決定するのか？　もし広範な層が一つの組織に組織されていなければ、その意思を決定することは絶対に不可能である――このことは子供でもわかるだろう。ヴェ・ザスーリチの、同様にまた他の解党主義者の不幸は、まさにかれらが組織上の日和見主義の坂道にあって、最悪の無政府主義の泥沼にたえず転がり落ちているというところにある。

というのは、ヴェ・ザスーリチが、「広範な層には」「正式入党の機会がない」こと、それゆえに「党を組織する」「可能性が足りない」ことを自分で認めながら、同時に、

解党主義者はこの広範な層について、党についてと同じように考えもし、語りもするであろうとか、地下組織はそれにたいして、最高機関にたいするのと同じような関係、「役員」問題の最高決定者にたいするのと同じような関係をもたなければならない等々とか言明することは、ことばの最も完全な、最も正確な意味での無政府主義にほかならないからである。

こうした広範な層または大衆を組織するのが不可能なことを認めながら、組織に反対して広範な層または大衆に訴えかけるのは、正真正銘の無政府主義である。無政府主義者が労働運動の最も有害な要素の一つとなっているのは、まさにかれらが、つねに被抑圧諸階級の大衆について（あるいは被抑圧大衆一般についてさえ）さけびたてながら、またつねにあらゆる社会主義的組織の名声を傷つけながら、かれら自身は他のどんな組織を対置することも、つくりだすこともできないでいることによるのである。

マルクス主義者は、未組織の（また長い期間、ときには数十年にわたって組織に属したことのない）大衆と党との関係、またそれと組織との関係について、原則的に異なった見方をしている。一定の階級の大衆が自己の利益、自己の立場を理解することを学び、自己の政策の実行を学びとることができるようにするためにこそ、たとえ最初はこの階級の先進的分子が階級のとるにたらぬ割合を占めるにすぎないとしても、これらの分子を、ただちに、またぜひとも組織することが必要なのである。大衆に奉仕し、その利益を正しく表現するためには、先進的部隊、先進的組織は、そのすべての活動を大衆のなかでおこない、大衆のなかから、例外なしに、すべての最良の勢力をひきつけ、また大衆との結びつきが保たれているかどうか、それが生きいきとしたものであるかどうかを、いたるところで、綿密に、客観的に点検しなければならない。このようにしてはじめて、先進的部隊は、大衆の利益を表現し、大衆に組織を教え、大衆のあらゆる活動を自覚的、階級的政治の道にそって方向づけながら、大衆を教育し、啓発することができるのである。

直接間接に選挙に引きいれられる、またはそれに参加する全大衆の政治活動の結果として、選出された労働者代表のすべてが地下組織とその政治方針の支持者、党の支持者であるならば、大衆との結びつきが生きていることを証明する客観的事実、この組織が大衆の階級的利益の唯一の代表者、表現者であり、またそう呼ばれる権利があることを証明する客観的事実がえられるのである。政治的意識をもったあらゆる労働者、あるいは、もっと正確に言えば、労働者のあらゆるグループは、選挙に参加し、それにあれこ

れの方向をあたえることができた。そして、もしその結果、解党派にあざけられ、ののしられ、軽蔑された当の組織が大衆を導くことができたとすれば、それは、すなわち、わが党と大衆との関係が、原則的に正しい、マルクス主義的なものだということになる。

「党を構成するには、正式入党の機会だけがたりない広範な層」という理論は無政府主義である。ロシアの労働者階級は、大衆を堕落させ、組織の概念そのもの、組織原則そのものを破壊するこの理論と容赦なくたたかうことなしには、自己の運動を強化し、発展させることはできない。

党の代わりに「広範な層」という理論は、最大の気ままと大衆的労働運動にたいする嘲弄とを正当化するものである（しかも嘲弄者たちは、二言目にはかならず「大衆」と言い、「大衆的」ということばをいろいろに使っている）。解党主義者がこの理論によって、自分自身を、また自分たちのインテリゲンツィア・サークルを「広範な層」の代表者、表現者にみせかけていることはだれでも知っている。われわれは「広範な層」を代表しているのだから、「狭い」党などわれわれにとってなんの意味があるか！　われわれが広範な層――多分数百万、数千万の――を代表しているとき、選挙で一〇〇万の労働者を導いている地下組織とかいうものが、われわれにとってなんの意味があるか、というわけである。

客観的事実は――第四国会の選挙も、いろいろな労働者新聞の発行も、その紙上での募金も、ペテルブルグの金属労働組合も、事務職員大会も(一六七)――、解党主義者が労働者階級から離反したインテリゲンツィアのサークルだということを明白に証明している。ところが、「広範な層の理論」は、すべての客観的事実をよけて通ること、解党主義者の心を、認められていないその偉大さにたいする誇りの意識でみたすことを可能にしているのだ……。

六

ヴェ・ザスーリチの論文は、マルクス主義の論理のイロハからみると、まったくおかしなことの集まりだが、読者諸君には、当然、このばかげたことのなかにも、本当になにかほかの意味はないだろうか、という考えが浮かんでくるかもしれない。もし、われわれが、そこから見ればヴェ・ザスーリチの論文が完全に理解できるし、論理的で、正しくもあるという観点が存在することを指摘しないとしたら、われわれの分析は不十分なものとなろう。それは分裂の観点である。

労働運動の歴史は、失敗に終わった、役に立たない、有

害でさえある政党の実例にみちている。しばらくわが党がそのようなものだと仮定してみよう。そのときは、その存在を大目にみること、ましてその代表者たちと和解することは、有害であり、罪悪でもある。そのときはこの党をたたきつぶし、それを新しい党ととりかえるためにぜひともたたかわなければならない。

そのときは、次の言明も理解できるし、当然のことになってくる。――すなわち、地下組織の害悪を深く確信するという観点からすれば、「それ（党）が助けとなったか、妨げとなったか」、またいまも助けとなっているか、妨げとなっているか「わからない」といったたぐいの言明も、理解できるものとなろう。われわれは離党者を正当化し、称賛し、*それが古い党の「無能力」によるものだと説明するだろう。われわれは、この古い党に反対して新しい党にはいるよう非党員に呼びかけるだろう。

* ちなみに。こうした脱落者の擁護は、ヴェ・ザスーリチの場合、「広範な層が、党を組織するのに足りないのは、正式入党の機会だけである」ということばのなかにもふくまれている。だが、なん千という事実は逆のことを物語っている。ヴェ・ザスーリチは、「機会の不足」を語ることで、実際には俗物根性、しかもその最も悪質なものを擁護しているのである。

ヴェ・ザスーリチは、この分裂の観点を言い残した。この事実は、彼女にとって主観的には重要で深長な意味があるのかもしれない。しかし、客観的にはたいして意味がない。もし著述家がA、B、C……とアルファベットを順々に列挙してゆき、最後の一つだけを言い残したところで、一〇〇〇人の読者のうち九九九人までが（声に出して、または頭のなかで）それを付け加えるにちがいない。これは賭けをしてもよい。解党主義者は分裂の論拠をたくさん集めて列挙しておきながら、そのあとでは沈黙してしまうか、あるいは自分たちは「統一を支持する」と付け加えている。解党主義者はすべて、こういう笑うべき立場にたっているのだ。

ヴェ・ザスーリチの論文にたいしても、またエリ・エス・ダンやレヴィツキー、エジョフ、ポトレソフ、マルトフのなん十という同様の論文にたいしても、われわれの答えは一つ。――統一の第一の条件は、「党に代わる広範な層という理論」を断固として非難すること、地下組織にたいするいっさいの敵対行為を非難すること、ヴェ・ザスーリチの論文を非難し、このようないっさいの発言を完全に拒否することである。党の存在の必要性に異論をとなえる者とたたかうことなしには、党の「統一」は不可能である。

分裂の観点からすれば、ヴェ・ザスーリチの論文は論理

にかなっており、正しくもある。もし解党主義者が新しい党の創立に成功するならば、またもしこの新しい党が古い党よりよいことがあきらかになるならば、そのときは、ヴェ・ザスーリチの論文は（解党主義者のあらゆる文献と同じく）歴史的に正当なものとなろう。よりよい、本当の、真の労働者党の創立者たちが、古い、活動能力のない、役に立たない党を破壊する権利をもっていることを否定するのは、愚かな感傷というものであろう。だがもし解党主義者がどんな新しい政党をもつくることができず、他のどんな労働者組織をもつくりだすことができなければ、そのときは、かれらのすべての文献とヴェ・ザスーリチの論文は、意気消沈、自信のなさ、俗物根性といった反革命的急流にまきこまれ、自由主義者に追随する党からの脱落者や骨なしのインテリゲンツィアの呆然自失ぶりの記念碑となるであろう。

あれか、これか。そこには中間はない。ここではなにものをも「調停する」ことはできない。古い党を「いくらかほうむる」とか、新しい党を「いくらかつくる」とかすることはできない。

ところで、ロシアがいま当面している歴史的情勢の特徴はまさに次の点に現われている。すなわち、嵐の時期をもちこたえ、ここかしこで個々の組織の連絡がすっかり破壊されたにもかかわらず、みずからを守りぬくことができ、膨大な労働者大衆にたいして非常に強い影響力（もちろん現在のヨーロッパと比較してではなく、一八四九―一八五九年のヨーロッパと比較して）を確保することができた比較的小さい党の中核――この中核が、非常に多くの反党的な、非党員の、党外の、党の周囲の社会民主主義者および社会民主主義者まがいの人々にとり巻かれている。

この国では事態がこのようになるのも当然である。隣にはドイツ社会民主党というモンブランがそびえているが、国内では……自由主義者さえ「山道」よりほかには道がなく、しかもストルーヴェ一派の紳士たちが、十数年ものあいだ、自由主義的なくだらない思想をマルクス主義まがいのことばで表現するなん百、なん千という小ブルジョア・インテリゲンツィアを育ててきたこの国では、事態はまさにこのようにならざるをえないのである。

プロロポーヴィチ氏をとってみたまえ。彼はわが国のジャーナリズムと社会的活動における著名な人物である。彼は本質的にみて疑いもなく自由主義者である。だが彼自身は自分を、党に反対する社会民主主義者だと考えているとみられるふしがある。マフノヴェツ（アキモフ）氏をとってみたまえ。彼はもっと憂うつな気質をもち、労働者を愛する気持のもっと強い自由主義者である。彼自身は、疑い

もなく、自分を非党員の社会民主主義者だと考えている。[三〇]『キエフスカヤ・ムィスリ』、『ナーシャ・ザリャー』[三一]、『ルーチ』[三二]その他の執筆者たちをとってみたまえ。これは党外の、党の周囲の社会民主主義者の完全なコレクシヨンである。彼らのうちのある者は、主として新しい公然の党を結成するという夢想に耽っているが、もし「早まって」天才的な計画の実現にとりかかると、よけいな恥をかくことになるのではないかという疑念をまだ最終的には解決していない。他の連中はもっぱら、自分たちがなにものをも解消せず、統一に賛成し、ドイツの社会民主党と完全に一致している……と誓約している。

社会民主党の国会議員団をとってみたまえ。最も目立った人物の一人はチヘイゼだが、ネクラーソフは、まるで彼のことを予言したかのようにつぎのように書いている。

「……だが、ときどきむずかしい、頭の痛い問題になるとわきによけて通る……」[三三]

社会民主党にとって最もむずかしい、頭の痛い時期は、一九一一―一九一二年、第三国会[三四]と、第四国会のはじめのころであった。労働者の新聞が発行されたが、それには解党主義的なものと反解党主義的なものとがあった。チヘイゼはどちらにも組みしないで、「わきによけて通った」。彼は党の周囲の社会民主主義者であった。彼は待機し、じっと様子を見ているかのようであった。一方からすると、古いもののほかに党はない、他方からすると、「彼ら」が古い党を少しばかりほうむるというようなことがおこらないともかぎらない……というわけである。彼の演説をよむと、右派に反対するまれにみる機知に富んだ辛辣なことばは、燃えるような激しいことばは、古い伝統の擁護に、拍手を送りたくなる――が、同時にまた、解党派の新聞をひろげると鼻をつまみたくなる。そこでは、「熱中」をひどくけなし、伝統を軽蔑し、労働者に組織を軽視するよう教えているが、こうしたことがみな、自分の名前で寄稿者名簿を飾っているチヘイゼの同意をえておこなわれているかのようにみえる。アンの論文が『ルーチ』編集部からひどい叱責をくっているのに出会うと、わがあわれなチヘイゼとわが善良なアンは、ダンの圧制をくつがえそうとして悲喜劇的な敗北をなめたのではないかと、思わず考えてしまうのである……。

古いものをほうむるか、それとも強化するかという問題について、「わきによけて通ろう」としたり、動揺したりしている党の周囲の社会民主主義者まがいの人々のあれこれのグループと協定するよう、プロレタリアの統一という偉大な原則の名において党に忠告する人々がいる。これらの人々自身が動揺しているか、あるいは実情をほとんど知

らないのだということは容易にわかる。存在することを欲する党は、その存立の問題についていささかの動揺も、またそれをほうむりかねない人々とのどんな協定も、許すことはできない。このような協定について調停者の役割を果たしたがっている人はいくらでもいるが、こうした人々はみな、古くからある一つの表現を借りれば、むだに油を燃やして、むなしく時をついやしているのである。

追記。『ジヴァーヤ・ジーズニ』[一〇〇]第一三号（一九一三年七月二五日付）にのったぺ・ぺ・アクセリロードの結びの論文——『過去と現在』という標題のつけられた——は、われわれが述べたことに驚くほどはっきりした確証をあたえた。中味のからっぽなこの論文の実際の眼目は、もちろん解党派の八月協議会[一〇一]をおもしろく宣伝したことではなくて、労働者大会の問題をあらたにもちだしたことにある。ぺ・ぺ・アクセリロード[一〇二]が、一九〇六—一九〇七年の労働者大会の構想にからむ自分のにがい、悲しい経験を思いださないことにしているのは言うまでもない。なんのために古いことをつっつく必要があるのか、というわけである。ぺ・ぺ・アクセリロードはまた、いわば特殊な性格をもった、特殊な動機からひらかれる労働者大会（今日ひらかれた事務職員大会、多分あすひらかれる保険大会あるいは労働組合大会など）が可能となった現在の瞬間の特別な状況にもふれていない。大多数が（解党主義者自身『ジヴァーヤ・ジーズニ』で認めざるをえなかったところによると）解党主義者に反対した事務職員大会の経験は、おそらくぺ・ぺ・アクセリロードの気にいらないのであろう。

アクセリロードは、過去にあったことや現在あることについては述べていない。彼は、——われわれがその具体的な状況を知ることができないのを幸いに——将来の「雪解け」について夢想に耽るほうがいいとしている！　彼は、「全ロシア社会民主主義労働者大会、そうでないとしたら全ロシア人社会民主主義労働者大会」の開催を夢想しており、それは、あとではもう直接に全ロシア人社会民主主義労働者大会と呼ばれている。

結局、以前の天才的な計画に二つの変更があったことになる。すなわち、第一に、たんなる労働者大会ではなく、社会民主主義労働者大会となっていることである。これは進歩である。ぺ・ぺ・アクセリロードに、六年間のこの一歩前進にお祝いを言おう。もしかれがナロードニキ左派との「合同」という空想的な計画の害を確信したのなら、彼にお祝いを言おう。第二に、全ロシア大会を全ロシア人大会にかえたことである。このことは、ロシアにおける非ロ

シア民族労働者との完全な団結を放棄することを意味する(アクセリロードは労働者大会の構想が、非ロシア民族労働者のあいだで最終的に失敗したとみている!)。これは二歩後退である。これは、労働運動における分離主義を神聖化することである。

だが、主要な問題はもっと先にある。なぜペ・ペ・アクセリロードは、労働者大会を夢想する必要があったのだろうか? その理由はこうである。

「……労働者大会は、農奴制国家と身分制的社会・政治体制というおくれた歴史的土壌のうえに生まれた古い党体制の、最近数年間における解消過程を完成し、それと同時にロシアの社会民主主義の歴史的存在におけるまったく新しい時代、西ヨーロッパの社会民主主義諸党とまったく同じ基礎にたったその発展の時代の端緒をひらくであろう。」

こうした「まったく同じ基礎」が、合法的な党の基礎であることはすべての人が知っている。つまり、はっきり言えば、労働者大会は、解党主義者にとって、古い党の「解消を完成し」、新しい合法的な党を創立するために必要なものなのである。

ペ・ペ・アクセリロードの長ったらしい話の意味を簡単に言えば、こういうことになる。

これがまさに、党の周囲の社会民主主義の最新の説である! 党員は党内で活動し、それを強化しなければならない——ペ・ペ・アクセリロードはこの古い、時代おくれの思想を廃棄してしまった。われわれはなにものをも解消しない、それは中傷だ、われわれはただ「わきに」立って、みんなにきこえるように「党の解消過程の完成」をさけんでいるだけだ。われわれはこのさい、あすは将来の合法政党のすばらしい党員となることを誓約し、断言するものである、と。

一九一三年の、これらの愛すべき党の周囲の社会民主主義者たちは、一九〇三年の自由主義者たち、すなわち自分たちが完全に社会民主主義者であり、かならず社会民主党員になるだろう……もちろんそれが合法政党になったときにだが……と断言したあの自由主義者たちと実によく似ている。

ロシアに政治的自由の時節がやってくるだろう、そのときわれわれが合法的な社会民主党をもつだろうということを、われわれはかたときも疑うものではない。おそらくその党には、現在の党の周囲の社会民主主義者のうちの若干の人々がはいるであろう。

では、わが将来の同志たちよ、将来の合法政党で一緒になるまで、さようなら! だが、いまのところ、すまない

が、われわれの道はちがうのだ。なぜなら、党の周囲の社会民主主義者の紳士諸君、いまのところ、君たちがやっているのは、マルクス主義的活動ではなくて、自由主義的な活動だからだ。

『プロスヴェシチェーニエ』第九号、一九一三年九月
署名――ヴェ・イリイン
全集、第五版、第二四巻、二二一―四四ページ所収
邦訳全集、第一九巻、四二〇―四四五ページ所収

テイラー・システムは人間を機械の奴隷にする(102)

資本主義は、一分間も一つところにとどまっていることはできない。それはまえへ、まえへと進まなければならない。現在のような恐慌の時期(103)にはとくに競争が激化するが、この競争によって、生産コストを安くするますます新しい手段を発明しなければならなくなる。だが、資本の支配は、このような手段をすべて、労働者をいっそう抑圧するための道具に変えてしまう。

テイラー・システムは、このような手段の一つである。最近、アメリカでは、この方式の支持者が、次のような方法を採用した。

まず労働者の手に豆ランプをくくりつける。そして労働者の動作を撮影し、豆ランプの運動を研究する。ある動作が「よけいなもの」だとわかると、労働者はこれらの動作

を避けることを強制される。つまり、もっと集約的に作業し、息ぬきのために一秒でもむだにしないように強制される。

材料を工場へとどける場合、それをある職場から他の職場へ持ちはこぶ場合、製品を搬出する場合、一分間でも時間を余分に費やさせないようにするための新しい工場建物の設計がいくつもつくられる。最も優秀な労働者の作業を研究するために、その労働強度を増すために、すなわち、労働者をいっそうひどく「追いまくる」ために、映画が系統的に利用される。

たとえば、一人の組立工のまる一日の作業が映画にとられた。彼の動作を研究したうえで、この組立工が腰をかがめるために時間を空費しないですむように、とくべつ高い腰掛がそなえつけられた。組立工の補助者として、少年工が一名つけられた。この少年工は、機械のそれぞれの部品を、一定の、最も目的にかなったやり方で組立工に手わたさなければならなかった。数日後には、この組立工は、その機械の組立作業を、以前に費やした時間の四分の一で完了したのである！

なんという労働生産性の進歩だろう！……だが、労働者の賃金は、四倍ではなく、たった一倍半にあがるだけであり、それも最初のうちだけである。労働者がこの新しい方式に習熟すると、賃金はふたたびもとの水準へ引きさげられる。資本家は膨大な利潤をうけとるが、労働者は労働を四倍も強化し、自分の神経と筋肉を四倍もはやく消耗する。

あらたに就職した労働者は、工場の映写室へつれていかれ、ここで彼の受持作業の「模範的」動作を見せられる。労働者は、この模範に「追いつく」ことを強要される。一週間たつと、労働者は、映写室で彼自身の作業ぶりをうつした映画を見せられ、それが「模範」と比較される。

これらの大がかりな改善はすべて、労働者の利益に反するやり方でおこなわれる。それは、労働者にたいする圧迫と抑圧を増大させ、しかも、工場内部での合理的な、賢明な分業の範囲を出ないのである。

では、社会全体の内部における分業はどうか、という考えがうかぶのは当然である。資本主義的生産が全体としての労働がむだになっていることだろう！市場の需要がわからないため、原料が何百という買占人や仲買人の手を経て製造業者の手にわたるまでに、どれだけの時間が空費されることだろう！たんに時間だけでなく、生産物そのものも失われ、破損する。そして、無数の小仲買人の手を経て製品を消費者の手もとにとどけるためにも、時間と労働が空費される。これらの小仲買人たちも同じように、買い

手の需要を知ることができないので、余分な動作だけでなく、余分な買いこみや旅行その他等々を大量にやっている！

資本は、労働者をもっと抑圧し自分の利潤をふやすために、工場の内部では労働を組織し、秩序だてる。だが、社会的生産全体では、あいかわらず混沌状態がつづけられ、増大し、それが恐慌をもたらす。そのときには、蓄積された富は買い手が見つからず、幾百万の労働者は仕事を見つけることができないで、零落し、飢えに瀕する。

テイラー・システムは、その創始者が知らないうちに、またその意志に反して、プロレタリアートが社会的生産全体をその手ににぎり、社会的労働全体を正しく配置し秩序だてるため自分自身の労働者委員会を任命する時を準備する。大規模生産、機械、鉄道、電話——すべてこれらは、組織された労働者の労働時間を四分の一に短縮し、彼らに現在の四倍も多くの福祉を保障する幾多の可能性をあたえる。

そして社会的労働が資本への隷属から解放されるときには、労働者委員会は、労働組合の援助のもとに、これらの、社会的労働の合理的配置の原則を適用できるであろう。

『プーチ・プラウドィ』第三五号、一九一四年三月一三日

署名——エム・エム

全集、第五版、第二四巻、三六九—三七一ページ所収

邦訳全集、第二〇巻、一五五—一五七ページ所収

ロシアにおける労働者出版物の歴史から

ロシアにおける労働者出版物の歴史は、民主主義運動と社会主義運動の歴史と不可分に結びついている。だから、解放運動の主要な諸段階を知ることによってはじめて、労働者出版物の準備と成立が、ほかならぬあのような道をすすんできた理由を、ほんとうに理解することができるのである。

ロシアの解放運動は、この運動に自分の足跡をのこしたロシア社会の三つの主要な階級に照応して、三つの主要な段階を経てきた。すなわち、(一) 貴族の時代、およそ一八二五年から一八六一年まで、(二) ラズノチーネツ(三六)またはブルジョア民主主義派の時代、ほぼ一八六一年から一八九五年まで、(三) プロレタリアの時代、一八九五年から現在まで。

貴族時代の最もすぐれた活動家は、デカブリスト(三七)とゲルツェンであった。この時期には、農奴制度のもとで、農奴身分、無権利の、「下層の」、「庶民の」身分の一般大衆から労働者階級をべつに分離することは、問題にもなりえなかった。当時、労働者(プロレタリア民主主義、あるいは社会民主主義)出版物の先駆者となったのは、ゲルツェンの『コーロコル』(三八)を先頭とする、検閲無視の〔非合法の〕一般民主主義的出版物であった。

デカブリストがゲルツェンを目ざめさせたように、ゲルツェンと彼の『コーロコル』は、ラズノチーネツ、すなわち、貴族にではなく、官吏、小市民、商人、農民に属する自由主義的および民主主義的ブルジョアジーの教養ある代表者たちが目ざめるのをたすけた。まだ農奴制度のころに、わが国の解放運動においてラズノチーネツが貴族をすっかり押しのけていくうえで先駆者となったのは、ヴェ・ゲ・ベリンスキーであった。ベリンスキーの文学活動を総括した、彼の有名な『ゴーゴリへの手紙』(三九)は、今日でも巨大な、生きいきとした意義をたもっている非合法の民主主義的出版物の最もすぐれた著作の一つであった。

農奴制度の没落は、一般に解放運動の、とくに民主主義的非合法出版物の主要な、大衆的な活動家として、ラズノチーネツを出現させた。ナロードニキ主義(四〇)が、ラズノチー

ネツの見地に照応する支配的な傾向となった。それは、社会的潮流としては、右の自由主義と左の無政府主義にたいしてついぞ一線を画することができなかった。しかし、ゲルツェンにつづいてナロードニキ的見解を発展させたチェルヌィシェフスキーは、ゲルツェンにくらべて大きく一歩前進した。チェルヌィシェフスキーは、はるかに首尾一貫した戦闘的民主主義者であった。彼の著作からは、階級闘争の匂いがただよってくる。彼は、自由主義の裏切りを暴露する方針をはっきりと貫いていたが、この方針は、今日でもカデット(一〇四)や解党派(一〇五)にきらわれている。彼は、その空想的社会主義にもかかわらず、異常に深刻な資本主義批判者であった。

六〇年代と七〇年代の時代には、戦闘的民主主義と空想的社会主義の内容をもった非合法出版物が、すでにおびただしく「大衆」のなかへはいりはじめた。そして、この時代の活動家のあいだで最も重要な地位を占めているのは、労働者のピョートル・アレクセーエフやステパン・ハルトゥリンなどである。しかし、ナロードニキ主義という一般的な流れのなかに、プロレタリア民主主義の水脈を区別することはできなかった。この水脈を区別できるようになったのはやっと、ロシアのマルクス主義派が思想的に明確となり(「労働解放」団、(一〇六)一八八三年)、また社会民主主義派と結びついた不断の労働運動がはじまった(一八九五—一八九六年のペテルブルグのストライキ)のちのことである。

しかし、ロシアに労働者出版物が本式にはじまるこの時代にうつるまえに、上述の三つの歴史的時期の運動のあいだにある階級的差異をまざまざと示している資料をあげよう。それは、国事(政治)犯罪のかどで処罰(一〇七)された人物の身分別および職業別(階級別)分類の資料である。一〇〇人あたりの内訳は次の表〔次ページの表〕のとおりであった。

貴族の時代、すなわち農奴制の時代(一八二七—一八四六年)には、人口のうちわずかな少数を占める貴族が、「政治犯」の大多数(七六%)を出している。ナロードニキの時代、すなわちラズノチーネツの時代(一八八四—一八九〇年。六〇年代については、残念なことに、こういう資料がない)には、貴族は後景にしりぞいてはいるが、しかし、それでもまだ大きな割合(三〇・六%)を占めている。インテリゲンツィアが民主主義運動の参加者の圧倒的多数(七三・二%)を出している。

一九〇一—一九〇三年の時期、(一〇八)ちょうど最初のマルクス主義的政治新聞、旧『イスクラ』の時期は、運動が完全に民主化されているうえに(貴族一〇・七%と「非特権階級」八〇・九%)、すでに労働者(四六・一%)がインテリゲンツィア(三六・七%)に優越していることを示して

	貴族	小市民および農民	農民	労働者	インテリゲンツィア
1827～1846年	76	23	?	?	?
1884～1890〃	30.6	46.6	7.1	15.1	73.2
1901～1903〃	10.7	80.9	9.0	46.1	36.7
1905～1908〃	9.1	87.7	24.2	47.4	28.4

いる。

先へ進んで、最初の大衆運動の時期（一九〇五―一九〇八年）を見ると、農民（九％だったのが二四・二％に）がインテリゲンツィア（三六・七％だったのが二八・四％に）をおしのけるという形でだけ、変化が現われていることを指摘しよう。

ロシアにおける社会民主主義派の創始者は、一八八三年に国外で生まれた「労働解放」団である。国外で検閲を通さずに印刷されていた同団の諸著作は、全世界の経験が示したように、労働運動の本質とその諸任務をただ一つ正しく表現しているマルクス主義の思想を系統的に叙述し、それからすべての実践的結論を引きだしはじめた。一八八三年から一八九五年までの一二年間に、ロシアで社会民主主義的労働者出版物を創刊しようとしたほとんど唯一ともいうべき企ては、社会民主主義的新聞『ラボーチー』[109]が一八八五年にペテルブルグで、もちろん非合法に出されたことであったが、しかし、この新聞は二号出ただけであった。大衆的な労働運動が欠けていたため、労働者出版物はひろく発展することができなかったのである。

一八九五―一八九六年から、つまり有名なペテルブルグのストライキのころから、社会民主主義派の参加した、大衆的な労働運動がはじまる。この時代こそ、本来の意味で、ロシアに労働者出版物が現われた時代である。当時の労働者出版物の主要な形態は、検閲を通さずに発行されたリーフレットやビラであって、その大部分は活版ではなくこんにゃく版で刷られ、「経済的」（さらにまた非経済的）扇動に、すなわち、いろいろの工場や産業部門の労働者の窮乏や要求を叙述することにあてられていた。いうまでもなく、先進的な労働者がこうした文書の作成と普及に積極的に参加しなかったら、出すことはできなかったであろう。当時活動したペテルブルグの労働者のうち、その後盲目になって積極的に活動できなくなったワシリー・アンドレーエヴィチ・シェルグノフと、シベリアでの蜂起に参加したかどで一九〇五年の末か一九〇六年のはじめに銃殺された熱烈な「イスクラ派」[110]（一九〇〇―一九〇三年）で「ボリシェヴィキ」（一九〇三―一九〇五年）のイワン・ワシーリエヴィチ・バーブシキンの名をあげることができる。

リーフレットを出していたのは、社会民主主義者グルー

プやサークルや組織であったが、それらは、一八九五年の末以来、大部分「労働者階級解放闘争同盟」の名称を採用しはじめた。一八九八年に地方の社会民主主義諸組織の代表者の大会が「ロシア社会民主労働党」を創立した[三〇]。

リーフレットについで、非合法の労働者新聞が――たとえば、一八九七年サンクト－ペテルブルグに『サンクト－ペテルブルグ・ラボーチー・リストーク』[三一]が、また同じくペテルブルグに『ラボーチャヤ・ムィスリ』[三二]（まもなく国外にうつされた）が――現われはじめた。地方の社会民主主義的諸新聞は、この時代から革命のときまでほとんどたえまなく非合法に出されていた。――もちろん、ロシアのいたるところでたえず破壊されながらも、つぎからつぎへとあらたに生まれていたのである。

この時代の、すなわち二〇年まえの労働者リーフレットと社会民主主義的新聞は、いまの労働者出版物の直系の、直接の先駆者である。すなわち、工場内「暴露」も同じであり、「経済」闘争の記録も同じであり、マルクス主義と首尾一貫した民主主義の見地から労働運動の諸任務の原則的解明をおこなっていたことも同じであり、――最後に、労働者出版物に二つの基本的な傾向、マルクス主義的傾向と日和見主義的傾向があったことも同じである。

これは、これまでまだけっして十分に評価されたといえない注目すべき事実である。すなわち、ロシアに大衆的な労働運動が生まれるやいなや（一八九五―一八九六年）、ただちにマルクス主義的傾向と日和見主義的傾向とへの区分が――形態や外観などは変わりはしたが、一八九四年から一九一四年まで本質上同じままである区分が、現われているのである。あきらかに、ほかのどのようなものでもなく、まさにこのような区分と内部闘争が社会民主主義者のあいだにおこったのには、深い社会的、階級的な根源がある。

さきにあげた『ラボーチャヤ・ムィスリ』は、当時の日和見主義的傾向であるいわゆる「経済主義」をあらわしていた。この傾向は、はやくも一八九四―一八九五年に労働運動の地方活動家たちの論争のうちに現われていた。ところが、国外では、ロシアの労働者の覚醒がすでに一八九六年いらい社会民主主義的文献をすばらしく開花させていたのに、「経済主義者」の出現と結集は、一九〇〇年春の分裂[三三]で終わったのである（すなわち、『イスクラ』がまだ生まれるまえに。『イスクラ』は、その第一号を一九〇〇年の年末に出した）。

一八九四―一九一四年の二〇年間における労働者出版物の歴史は、ロシアのマルクス主義とロシア人の（より正し

くいえば、（ロシアの）社会民主主義派内部の二つの傾向の歴史である。ロシアにおける労働者出版物の歴史を理解するためには、さまざまな機関紙誌の名称――今日の読者にはなんの意味もなく、読者をまごつかせるだけの名称――を知るだけでなく、というよりむしろそれ以上に、社会民主主義派のさまざまな部分の内容や性格や思想方向を知らなければならない。

「経済主義者」の主要な機関紙誌は、『ラボーチャヤ・ムイスリ』（一八九七―一九〇〇年）と『ラボーチェエ・デーロ』（三三）（一八九八―一九〇一年）であった。『ラボーチェエ・デーロ』を主導していたのは、その後サンディカリストに変わったベ・クリチェフスキー、著名なメンシェヴィキでいまは解党主義者であるア・マルトィノフ、それから、いまは「独立社会民主主義者」――すべての主要な点で解党派と一致している――であるアキモフであった。

経済主義者に反対してたたかったのは、はじめはプレハーノフと「労働解放」団全体（雑誌『ラボートニク』（三四）その他）だけであったが、その後は『イスクラ』（一九〇〇年から一九〇三年八月まで、すなわちロシア社会民主労働党第二回大会まで）（三五）であった。「経済主義」の本質はいったいどういうものであったか？

「経済主義者」は、口先では労働運動の大衆性や労働者の自主活動をとくに力をこめて擁護しながら、「経済的」扇動に第一の意義があるとか、政治的扇動へ移行するさいには穏健にあるいは漸進的にやらなければならないとかと主張していたのである。ごらんのとおり、これらはみな、解党派も見せびらかしているあの同じお得意の文句である。ほんとうは、「経済主義者」は、自由主義的労働者政治を遂行したのであって、この政策の核心を、「経済主義」の当時の首領の一人、エス・エヌ・プロコポーヴィチ氏は、「労働者には経済闘争、自由主義者には政治闘争」と簡潔に言いあらわした。ほんとうは、労働者の自主活動や大衆運動のことをなによりもさわぎたてていた「経済主義者」は、労働運動内の日和見主義的、小市民インテリゲンツィア的一翼であった。

すでに一九〇一―一九〇三年に国事犯罪のかどで処罰された者一〇〇人のうち、インテリゲンツィアの三七名にたいして四六名を出していた自覚した労働者の圧倒的多数は、日和見主義に反対して旧『イスクラ』の側に立った。『イスクラ』の三年間（一九〇一―一九〇三年）の活動によって、その首尾一貫したマルクス主義にもとづいて、社会民主党の綱領も、その戦術の基礎も、経済闘争と政治闘争との結合の諸形態もつくりだされた。『イスクラ』の周囲に、またその思想的指導のもとに、労働者出版物は、（一九〇

五年）革命前の数年間に大きく成長した。検閲を通さないリーフレットと無許可の印刷所の数は、ロシアのいたるところで非常な多数にのぼり、急速に増大した。

一九〇三年に「経済主義」にたいして『イスクラ』が、日和見主義的なインテリゲンツィア的戦術にたいしてプロレタリア的な首尾一貫した戦術が完全に勝利したので、社会民主党の「同伴者」があらたに激しく党の隊列内に流入してくるようになり、日和見主義は、イスクラ主義にもとづいて、その一部分として「メンシェヴィズム」という形で復活した。

メンシェヴィズムは、ロシア社会民主労働党第二回大会（一九〇三年八月）で、「イスクラ派」のなかの少数派〔メニシンストヴォ〕（メンシェヴィズムという名まえはここからきている）と、『イスクラ』に反対するすべての日和見主義者とから形成された。「メンシェヴィキ」は、当然のことながらやや形を変えて、「経済主義」に逆もどりした。運動内にのこっていたすべての「経済主義者」は、ア・マルトィノフを先頭に、「メンシェヴィキ」の隊列をみたした。

「メンシェヴィズム」の主要な機関紙になったのは、一九〇三年一一月以来入れかわった編集局のもとで出されていた新『イスクラ』であった。「旧『イスクラ』と新『イスクラ』（三六）とのあいだには深淵がある」——こう当時の熱烈なメンシェヴィキであるトロツキーはおおっぴらに声明した。首尾一貫したマルクス主義の戦術を擁護し、旧『イスクラ』に忠実であった「ボリシェヴィキ」〔ボリシンストヴォ＝多数派を語源とする〕の主要な機関紙は、『フペリョード』（三七）と『プロレタリー』（三八）（一九〇五年）であった。

社会民主党と労働者出版物における二つの主要な傾向、すなわち、メンシェヴィキ的傾向とボリシェヴィキ的傾向を、大衆とほんとうに結びつきプロレタリア大衆の戦術を表現しているかどうかという見地から点検したのが、一九〇五—一九〇七年の革命の数年であった。公然の〔合法的〕社会民主主義的出版物は、もし大衆とかたく結びついた先進的労働者の活動がこうした出版物のために基盤を準備していなかったなら、五年〔一九〇五年〕の秋に一挙に生まれるわけにいかなかったであろう。そして、公然の社会民主主義的出版物が、五年にも、六年にも、七年にも、二つの傾向と二つの分派の出版物であったとすれば、このことはさらに、この時代の労働運動における小ブルジョア的方針とプロレタリア的方針との差異として説明するほかはないのである。

公然の労働者出版物は、高揚と比較的な「自由」とのあった三つの時期のどれにも出ていた。すなわち、一九〇五

年の秋にも（ボリシェヴィキの『ノーヴァヤ・ジーズニ』[三〇]、メンシェヴィキの『ナチャーロ』[三一]——われわれは他の多数の機関紙のうちから主要なものだけをあげる）、一九〇六年の春にも（ボリシェヴィキの『ヴォルナー』[三二]『エーホ』[三三]等々、メンシェヴィキの『ナロードナヤ・ドゥーマ』[三四]等々）、一九〇七年の春にも出ていた。

この時代のメンシェヴィキの戦術の本質を、エリ・マルトフその人が、最近次のようなことばで言いあらわした。「メンシェヴィズムは、有産諸階級の反動的な部分を国家権力から排除しようと企てているブルジョア自由主義的民主主義派に協力する——ただし、プロレタリアートとしては完全な政治的自主性をたもちながら、この協力を実行しなければならないが——以外に、プロレタリアートが当面の危機に参加してみのりある結果をあげうるべつの道があるとは考えなかった。」と（ルバーキンの『書物のあいだで』第二巻、七七二ページ）。自由主義者に「協力する」この戦術こそ、実は労働者を自由主義者に従属させるものであり、実は自由主義的労働者政治であった。これに反して、ボリシェヴィズムの戦術は、ブルジョア的危機を最後までおしすすめるための闘争によって、自由主義者の裏切りを暴露することによって、この裏切りに対抗して小ブルジョアジー（とくに農村の）を啓蒙し結集することによって、この危機におけるプロレタリアートの自主性を保証していたのである。

この時期（一九〇五—一九〇七年）に労働者大衆がボリシェヴィキとともにすすんだことは、よく知られており、——また、今日の解党主義者コリツォフ、レヴィツキー、その他にいたるメンシェヴィキ自身なんども認めたことである。ボリシェヴィズムは運動のプロレタリア的本質を、メンシェヴィズムはその日和見主義的、小市民的インテリゲンツィア的一翼をあらわしたのである。

ここでは、労働者出版物の二つの傾向の戦術の内容と意義をこれ以上くわしく特徴づけるわけにはいかない。われわれは、基本的な諸事実を正確に確認し、歴史的発展の主要な諸方向を規定することに、とどめなければならない。

ロシアにおける労働者出版物は、その過去にほとんど一世紀にわたる歴史を——まず予備的歴史、すなわち、労働者的ではなく、プロレタリア的ではなく、「一般民主主義的」すなわちブルジョア民主主義的な解放運動の歴史を、——ついでプロレタリア運動の、プロレタリア民主主義派の、あるいは社会民主主義派の二〇年間にわたる本来の歴史を——もっている。

世界のどこでもプロレタリア運動が、「一度に」、純階級的な形で生まれたことはないし、また生まれるはずもなか

った。それは、ユピテルの頭からミネルヴァがとび出したように[三三]、出来あいのものとして、この世に現われるわけにいかなかった。最も先進的な労働者やすべての自覚した労働者の長期にわたる闘争と困難な活動だけが、小ブルジョア的混ぜ物、局限性、狭い考え、歪曲からプロレタリア的階級運動を区別し、確立させたのである。労働者階級は小ブルジョアジーと肩をならべて生活しているが、この小ブルジョアジーは、零落していくうちに、プロレタリアートの隊列につぎからつぎへと新しい外来者をおくりこむ。そして、ロシアは、資本主義諸国のうちで最も小ブルジョア的な、最も小市民的な国であって、たとえば、イギリスでは一七世紀の、フランスでは一八世紀と一九世紀前半の特徴となっているブルジョア革命の時代に、いまやっと際会しているのである。

自覚した労働者は、いまや労働者出版物を刊行し、それを運営し確立し発展させるという、自分の本来の、切実な仕事にとりかかるにあたって、ロシアにおけるマルクス主義と社会民主主義的出版物の二〇年の歴史を忘れてはならない。

社会民主主義派の内部闘争を自分たちは放棄しており、さらにこの闘争を放棄せよとさかんに叫んだり呼びかけたりしている、この運動の神経の弱いインテリゲンツィアの友人たちは、労働運動に悪影響をあたえている。

マルクス主義が日和見主義とたたかってきた歴史を研究することによってのみ、小ブルジョア的混ぜ物からプロレタリア民主主義派を区別することを徹底的に、くわしく知ることによってのみ、先進的な労働者は、自分の意識と自分の労働者出版物を最後的に確立するであろう。

『ラボーチー』第一号、一九一四年四月二二日
全集、第五版、第二五巻、九三―一〇一ページ所収
邦訳全集、第二〇巻、二五五―二六四ページ所収

統一の叫びにかくれた統一の破壊について

現在の労働運動の諸問題は、多くの点でめんどうな問題である——この運動のきのうの（すなわち、歴史的に言って、過ぎさったばかりの段階の）代表者たちにとってとくにそうである。そうした問題としては、なによりも、いわゆる分派、分裂等々の問題がある。労働運動に参加しているインテリゲンツィアから、ああいうめんどうな問題にはふれてくれるなという興奮した、神経質な、ヒステリーじみた訴えが聞こえることがしばしばある。マルクス主義者のあいだのさまざまな潮流の多年の闘争、たとえば一九〇〇—一九〇一年以降のそれに関係した者にとっては、当然、これらのめんどうな問題についていろいろ議論することはよけいな繰りかえしであるかもしれない。

しかし、マルクス主義者のあいだの一四年間（それどころか、「経済主義」の最初の徴候が現われたときから数えると一八—一九年間）の闘争にくわわった者は、現在ではもうそれほど多くはない。今日マルクス主義者の隊列をみたしている労働者の大多数は、以前の闘争をおぼえていないか、あるいはまるきり知らないかである。この大多数にとっては（とりわけ、本誌のアンケート[註]も示しているようにこれらのめんどうな問題は、とくに大きな興味をひく問題である。そこでわれわれは、トロツキーの「非分派的な労働者雑誌」『ボリバ』[註]によって一見新たに（労働者の若い世代にとっては、実際に新たに）もちだされているこれらの問題をくわしく論じるつもりである。

一　「分派性」について

トロツキーは、自分の新しい雑誌を「非分派的」と称している。彼は、このことばを広告のまっさきにかかげ、当の『ボリバ』の社説でも、また『ボリバ』の発行前に同誌のことを述べたトロツキーの一論文が掲載された解党派の『セーヴェルナヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』[註]の社説でも、いろいろなやり方でそれを強調している。

だがいったい「非分派性」とはなにか？

トロツキーの「労働者雑誌」は、トロツキーの労働者向

けの雑誌である。というのは、この雑誌には、労働者の創意も労働者組織とのつながりも、その痕跡すらないからである。わかりやすくしたいというので、トロツキーはその労働者向けの雑誌で、読者に、「領土（テリトリヤ）」とか「要因（ファクトル）」等々といったことばの解説をしている。

大いにけっこうである。それならどうして「非分派性」ということばも、労働者のために解説してやってはいけないのか？　まさかこのことばは、領土（テリトリヤ）や要因（ファクトル）ということばよりもわかりやすいというわけではあるまい。

いや、そんなことが問題なのではない。分派性の最悪の遺物の最悪の代表者たちが、「非分派性」というレッテルで、労働者の若い世代をだましていることが問題なのである。この点はくわしく説明する価値がある。

分派性は、ある一定の歴史的時期の社会民主党の主要な特徴である。いったいどの時期か？　一九〇三年から一九一一年までである。

分派性の本質がなんであったかを、最もはっきり説明するには、たとえば一九〇六―一九〇七年の具体的な諸条件を思いだす必要がある。当時、党は一つであって分裂はなかったが、分派はあった。すなわち、実際には、一つの党内に二つの分派、事実上別個な二つの組織が存在していた。下部の労働者組織は一つであったが、重要な問題の一つひとつについて、二つの分派が二つの戦術をつくりあげた。これらの戦術の擁護者たちは、一つの労働者組織内でたがいに論争した（たとえば、一九〇六年に国会内閣またはカデット内閣というスローガンを討議したとき、あるいは一九〇七年のロンドン大会の代議員選挙のさいがそうである）。そしてもろもろの問題は多数決で決定された。こうして、一つの分派はストックホルム統一大会（一九〇六年）で敗北者となり、他の分派はロンドン統一大会（一九〇七年）で敗北者となったのである。（三三）

これらは、ロシアにおける組織されたマルクス主義の歴史上の周知の事実である。

トロツキーがひろめている驚くべきうそを知るには、これらの周知の事実を思いだすだけで十分である。

一九一二年以来すでに二年以上にわたって、ロシアでは組織されたマルクス主義者のあいだに分派性はないし、統一的な諸組織内、統一的な協議会や大会では、戦術についての論争はない。あるのは、一九一二年一月（三四）に解党派は党に所属するものではないと正式に声明した党と、解党派とのあいだの完全な決裂状態である。トロツキーはしばしばこの事態を「分裂」と呼んでいる。この呼び方については、あとで節をあらためて述べることにする。だが、「分派性」ということばが真実とくいちがうことは、依然として疑い

のない事実である。

このことばは、われわれがすでに述べたように、きのう、つまり、すでに過ぎさった時期に正しかったことの繰りかえしであり、無批判で、愚かで、無意味な繰りかえしである。そしてトロツキーが、われわれに「分派闘争の混沌」について語るとき（第一号、五、六ページ、その他多くのページを見よ）、彼の口をつうじてまさにどのような古くさい過去が語られているかが、たちまち明らかとなる。

いまやロシアの組織されたマルクス主義者の一〇分の九を占める若いロシアの労働者の見地から、今日の事態を見てみたまえ。彼が見うけるのは、労働運動内のいろいろの見解または潮流の三つの大衆的な現われである。(二〇)すなわち、四万部の発行部数をもつ新聞を中心とする「プラウダ派」、「解党派」（一万五千部）およびナロードニキ左派（一万部）がそれである。発行部数の数字は、ある主張のもつ大衆性を読者に明らかにしてくれる。

ではいったい「混沌」が、これとなんの関係があるのか？ トロツキーは大げさで無内容な文句が好きである――それは周知のことである。だが「混沌」ということばは、空文句であるだけではなく、そのうえに、きのうの時期の国外の諸関係を、現在の時期のロシア国内にもちこむことである（もっと正しく言えば、もちこもうとするむだな企てである）。ここに問題の本質がある。

マルクス主義者とナロードニキの闘争には、なんの「混沌」もない。おそらくトロツキーでもそんなことを言おうとは思わないだろう。マルクス主義者とナロードニキとの闘争は、マルクス主義が生まれたときから三〇年以上もつづいている。この闘争の原因は、あい異なる二つの階級、プロレタリアートと農民の利害と立場が、根本的にくいちがっていることにある。「混沌」がどこかにあるとすれば、それは、このことを理解しない変人の頭のなかにあるだけである。

あと残っているのはなにか？ マルクス主義者と解党派との闘争の「混沌」か？ これもまたうそである。なぜなら、全党によって一つの潮流と認められ、一九〇八年以来非難されている一潮流との闘争を、混沌と呼ぶわけにはいかないからである。ところで、ロシアにおけるマルクス主義の歴史に無頓着でない者は、解党主義が、指導者と参加者の顔ぶれの点ですら、「メンシェヴィズム」（一九〇三―一九〇八年）や「経済主義」（一八九四―一九〇三年）と切っても切れないように、きわめて密接に結びついていることを知っている。つまり、ここでもわれわれの前にあるのは、ほとんど二〇年間の歴史なのである。自分の党の歴史を「混沌」と見るのは、許しがたい空虚な頭の持主であ

ることを意味する。

　だが、パリまたはウィーンの見地から今日の情勢を見てみたまえ。たちまち、すべてが変わってくる。「プラウダ派」と「解党派」のほかに、さらに、最低五つのロシア人の「分派」がある。すなわち、同じ一つの社会民主党の一部とみなされたがっている個々のグループ、つまり、トロツキーのグループ、二つの[三九]「フペリョード」グループ、「党擁護派ボリシェヴィキ」[四〇]および「党擁護派メンシェヴィキ」がそれである。パリとウィーンでは（この二つのとくに大きな中心地を例にあげる）、このことは、どのマルクス主義者にも非常によく知られている。

　そしてここでは、トロツキーは、ある意味では正しい。それは実際に分派性であり、まさしく混沌なのである!!

　「分派性」というのは、名目上の統一（ことばのうえでは、みな一つの党に属している）と現実の細分状態（実際には、すべてのグループは独立していて、主権国家どうしのように、たがいに交渉をおこない協定を結んでいる）があるからである。

　「混沌」というのは、（一）これらの分派とロシアの労働運動との結びつきにかんする点検可能な客観的資料がなく、（二）これらの分派の真の思想的ならびに政治的特徴にかんする判断材料がないからである。一九一二年と一九一三年のまる二ヵ年をとってみたまえ。周知のように、それは労働運動が活気づき高揚した年であって、多少とも大衆的な潮流または傾向（政治では大衆的な現象だけがものの数にはいる）らしいものならどんなものでも、第四国会の選挙に、ストライキ運動に、合法新聞に、労働組合に、保険闘争等々に影響をおよぼさないわけにはいかなかった。だが、この二年間をつうじて、これら五つの在外分派の一つも、たった一つも、ロシアにおける大衆的労働運動の上記の現われのうちのどの一つにでも、目だった作用は絶対になに一つおよぼさなかったのである！

　これは事実であって、だれでもたやすくしらべることができる。

　またこの事実は、われわれがトロツキーを「分派性の最悪の遺物」の代表者と述べたのが正しかったことを証明している。

　トロツキーは、ことばのうえでは分派的でなくとも、ロシアの労働運動に多少でも通じている者ならだれでも知っているように、「トロツキー分派」の代表者である――ここには分派性がある。というのは、それの本質的な特徴が二つとも現にあるからである。すなわち、（一）名目上統一を認めること、（二）実際にはグループとして別個に分離していること、がそれである。ここには分派性の遺物が

ある。というのは、そこには、ロシアの大衆的労働運動との結びつきという点でこれというほどのものはなにも発見することができないからである。

最後に、ここには分派性の最悪の形がある。というのは、どんな思想的＝政治的な明確さもないからである。プラウダ派も（われわれの徹底的な反対者であるエリ・マルトフでさえ、われわれには、あらゆる問題についての万人周知の正式な決定を中心とする「団結と規律」があることを認めている）、解党派も（彼らには、非常に明確な――すくなくとも、彼らのうちのおもな者にあっては非常に明確な――特徴、すなわち、マルクス主義的でない、自由主義的な特徴がある）、こうした明確さをもっていることは否定できない。

トロツキー分派のように、けっしてロシア国内の見地からでなく、もっぱらウィーン―パリの見地から見てのみ現実に存在している諸分派でも、その一部のものがある程度明確であることは否定できない。たとえば、マッハ主義者(三)の「フペリョード」グループがもっているマッハ主義の理論は明確である。また、「党擁護派メンシェヴィキ」が、解党派を理論的に非難するとともに、マッハ主義の理論を断固として否定し、マルクス主義を擁護していることは明確である。

ところがトロツキーには、どんな思想的＝政治的な明確さもない。というのは、「非分派性」の専売特許は、ある分派から別の分派へ、またその逆へと飛びうつる完全な自由の専売特許を意味するだけだからである（われわれはすぐ、これをもっとくわしく見ることにする）。

要するに、

(一)　マルクス主義の諸潮流と諸分派のあいだの思想的不一致は、社会民主党の二〇年の歴史をみたしており、また現在の基本的な諸問題に関連をもっている（われわれがのちに示すように）のだが、トロツキーはそうした不一致の歴史的意義を説明してもいないし、理解してもいない。

(二)　名目上は統一を認めながら実際には細分状態として現われる分派性の基本的な特質を、トロツキーは理解しなかった。

(三)　「非分派性」を旗印としながら、トロツキーは、とくに無思想でロシアの労働運動に基盤をもたない在外分派の一つを擁護している。

光るもの、かならずしも金ではない。トロツキーの空文句にはけばけばしさと仰々しさが多いが、それには中味がない。

二　分裂について

「諸君らプラウダ派に分派性がないとしても、すなわち、実際には細分状態にありながら名目上は統一を認めるということがないとしても、諸君らにはそれよりも悪いもの――分裂主義がある」と言ってわれわれを反駁する者もあるだろう。トロツキーはまさしくそう言っている。彼は、自分の思想を十分にねり、自分のことばのつじつまを合わせることもできずに、激しく分派性の非を鳴らすかと思えば、「分裂はつぎつぎに自殺的な戦果をおさめている」（第一号、六ページ）と叫んだりしている。

この言明が意味しうるところは、次の一事だけである。すなわち、「プラウダ派はつぎつぎに戦果をおさめている」（このことは、たとえば一九一二年と一九一三年のロシアの大衆的労働運動の研究によって明らかにすることのできる、客観的な、点検できる事実である）、しかし私、トロツキーは、プラウダ派を（一）分裂主義者として、また（二）自殺的な政治家として非難する、というのがそれである。

この点をしらべてみよう。

まず第一に、次のことをトロツキーに感謝しよう。すなわち、最近（一九一二年八月から一九一四年二月まで）彼は、エフ・ダンに追随していたのであるが、ダンは周知のように、反解党主義を「殺す」といっておどかし、また「殺す」よう呼びかけていたものである。いまトロツキーはわれわれの傾向を（そしてわが党を――トロツキー君よ、怒らないでくれたまえ、なにしろ真実なのだから！）「殺す」といっておどかさないで、この傾向は自殺するだろうと予言しているだけである！

このほうがずっとおだやかではなかろうか？　このほうが、いかにも「非分派的」ではなかろうか？

だが、冗談はさておくとしよう（冗談は、トロツキーのがまんのならない大言壮語ぶりにおだやかに答える唯一の手段なのだが）。

「自殺」とはたんなる空語であり、無意味な空文句であり、たんなる「トロツキー主義」である。

分裂主義とは重大な政治的非難である。この非難は、解党派も、また、さきに列挙したパリとウィーンの見地からみればまちがいなく存在しているすべてのグループも、われわれにたいしていろいろのやり方で繰りかえしている。

しかも彼らすべてが、この重大な政治的非難を、驚くばかりふまじめに繰りかえしているのである。トロツキーを見たまえ。彼は「分裂が（プラウダ派がと読め）つぎつぎ

に自殺的な戦果をおさめている」ことを認めた。彼はそれにこうつけくわえている。

「多数の先進的労働者が、完全な政治的茫然自失の状態にあってみずから分裂の活動的な手先となることがしばしばある。」（第一号、六ページ）

この問題にたいする態度として、これらのことばによってさらけだされている以上にふまじめな態度の見本をさがしだすことができるだろうか？

われわれには、ロシアの労働運動の舞台には解党主義のほかにはまったくなにも見えないのに、諸君はわれわれの分裂主義を非難する。つまり、諸君は、解党主義にたいするわれわれの態度をまちがいだと考えているわけか？　そして実際に、さきに列挙したすべての在外グループは、たがいにどんなに相違していようと、解党主義にたいするわれわれの態度を、まちがいであり「分裂主義」であると認める点では、まさに一致しているのである。これらすべてのグループと解党派との一致（と本質的な政治的接近）もまた、この点にある。

もし解党主義にたいするわれわれの態度が、理論的、原則的に誤っているなら、トロツキーはそのことを率直に語り、明確に声明すべきであり、この誤りがどの点にあると彼は考えるかを忌憚なく指摘すべきである。ところがトロツキーは、この肝心な点を幾年ものあいだ避けているのである。

もし解党主義にたいするわれわれの態度が、実際に、運動の経験のなかで論破されているなら、この経験を究明すべきであるが、トロツキーはこれもやっていない。「多数の先進的労働者が、分裂の活動的な手先となっている」（プラウダ派の方針、戦術、組織方式の活動的な手先となっている、と読め）――彼はそう認めている。

先進的労働者、しかも多数の労働者が『プラウダ』に味方するというような悲しむべき現象、トロツキーの認めるように経験によって裏づけられる現象が、いったいなぜ起こるのか？

これらの先進的労働者の「完全な政治的茫然自失」の結果である、とトロツキーは答える。

この説明は、もちろん、トロツキーにとり、五つの在外分派のすべてにとり、また解党派にとって、大いに心をくすぐる非難である。トロツキーは、歴史的現象について、「物知りの学者ぶった顔つき」で、尊大で大げさな文句をつかって、トロツキーその人の心をくすぐる説明をすることが大好きである。「多数の先進的労働者」がトロツキーの方針とは一致しない政治方針や党の方針の「活動的な手先」になると、トロツキーはためらうことなく、即座に、

あっさりと、これらの先進的労働者は「完全な政治的茫然自失の状態に」あるとしてこの問題を解決するのであるが、一方、彼トロツキーは、どうやら、政治的にしっかりしており、方針ははっきりしていて正しい「状態にある」らしい！……そしてその同じトロツキーが、自分の胸をたたいて、分派性やサークル主義やインテリゲンツィアが自分の意思を労働者におしつけるのを非難攻撃するのである！……

実際、こういうものを読むと、おもわず、こんな声は精神病院のほうから聞こえてくるのではないのかという疑問が起こる。

解党主義とそれを非難する問題は、一九〇八年以来、党によって「先進的労働者」の前に提起されているし、解党派のきわめて明確な一グループ（すなわち、『ナーシャ・ザリャー』[三] グループ）との「分裂」の問題、すなわち、このグループぬきでこのグループに反対してでなければ党を建設することはできないという問題、このあとの問題は、二年以上まえの一九一二年一月に提起されている。先進的労働者の大多数は、ほかならぬ「一月（一九一二年）の方針」に賛意を表明した。この事実は、トロツキー自身、「戦果」ということばや「多数の先進的労働者」ということばでこれを認めている。しかもトロツキーは、たんに、これらの先進的労働者を「分裂主義者」とか「政治的に茫然自失している」とかののしることでかたづけている！

気が狂っていない人々は、これらの事実から違った結論を引きだすだろう。自覚した労働者の多数者が正確で明確な諸決定を中心に団結しているところには、意見の一致と行動の統一があり、党性と党がある。

われわれが、労働者によって「その部署を追われた」解党派を見いだしたところ、あるいはロシアの大衆的労働運動との自分たちの結びつきを、二年このかたなにによっても証明しえなかった半ダースばかりの在外グループを見いだしたところ、そこにはまさに茫然自失と分裂主義が支配している。プラウダ派マルクス主義者が認めている「全一体」の諸決定を遂行しないようにと、いま労働者を説得しようと試みることによって、トロツキーは運動を解体させ分裂を引きおこそうと試みているのである。

これらの試みは無力であるが、われわれは、度はずれにうぬぼれたインテリゲンツィア・グループの指導者たちを暴露しなければならない。これらの指導者は、みずから分裂をひきおこしながらわれわれを分裂呼ばわりをしており、また二年あまりのあいだに「先進的労働者」から完全な敗北をこうむりながら、彼らを「政治的に茫然自失している」と呼んで、信じられないほどのあつかましさで、これら先

進的労働者の決定と意思とを蔑視しているのである。これこそ、ノズドリョーフ(三三)の、あるいはユードゥシカ・ゴロヴリョーフ(三三)のやり方そっくりではないか。

そこでわれわれは、政論家たる役目がら、再々繰りかえされている分裂呼ばわりにたいして、否定されていない、また否定することのできない正確な数字をうむことなく繰りかえそう。第二国会では労働者クーリアの四七%、第三国会では五〇%、第四国会では六七%がボリシェヴィキ議員であった。

まさにここに「先進的労働者」の多数者があり、まさにここに党があり、まさにここに自覚した労働者の多数者の意見の一致と行動の統一とがあるのである。

解党派は、われわれがストルィピンの制定したクーリアからとってきた論拠をもちいていると反駁する(『ナーシャ・ザリャー』第三号のエリ・エム・ブルキンを見よ)。これは愚かで非良心的な反駁である。ドイツ人は、婦人を除外しているビスマルク選挙法による選挙によって、自分の成功を測っている。ドイツのマルクス主義者が、この選挙法の反動的制限をけっして是認しないままに、この選挙法のもとでおさめた自分の成功を測っているからといって、彼らを非難するのは狂人だけであろう。

われわれもまたそのように、クーリアをもクーリア制度(三三)をも擁護しないままに、いまの選挙法のもとでおさめたわれわれの成功を測ったのである。クーリアは三つの(第二、第三、第四)国会のすべてにあった。そして同じ労働者クーリアの内部に、社会民主党の内部に、解党派に不利な完全な変動が生じたのである。自他をあざむこうと思わない者は、労働者の統一が解党派に勝利したというこの客観的事実を認めなければならない。

もう一つの反駁も、これにおとらず「気のきいた」ものである。すなわち、「メンシェヴィキと解党派が、しかじかのボリシェヴィキに投票した(あるいは選挙に参加した)」というのである。けっこうだ! だがこのことは、非ボリシェヴィキ議員が第二国会で五三%、第三国会で五〇%、第四国会で三三%であったことについても言えることではないのか?

もし議員についての数字のかわりに、労働者の選挙人または選挙代表等々についての数字を取ることができるものなら、喜んでそれを取りたいところである。けれどこうした、もっとくわしい数字はない。だから「反駁者たち」は、公衆に目つぶしをくわせているにすぎない。

ところで、種々の傾向の新聞を援助した労働者グループにかんする数字はどうか? 二年間に(一九一二年と一九一三年)、二八〇一のグループが『プラウダ』を支持し、

七五〇が『ルーチ』[一七四]を支持した。* これらの数字はだれでも点検することができるが、だれもそれをくつがえそうと試みた者はない。

* 暫定的な計算によると、一九一四年四月一日までに、四〇〇〇のグループが『プラウダ』を支持し（一九一二年一月一日から起算して）、一〇〇〇のグループが解党派プラスそのすべての同盟者を支持したことがわかった。

いったい「先進的労働者」の多数者の行動の統一と意思の統一はどちらのほうにあり、多数者の意思の蹂躙はどちらのほうにあるのか？

トロツキーの「非分派性」は、労働者の多数者の意思を最もあつかましく蹂躙したという意味で、これこそ分裂主義である。

三　八月ブロック[一八七]の崩壊について

しかし、トロツキーがあびせている分裂主義だという非難が、正しくかつ真実にかなっているかどうかを確かめる方法、しかも非常に重要な方法がもう一つある。

諸君は、「レーニン派」こそは分裂主義者だと考えるのか？　よろしい。諸君が正しいとしておこう。

だがもし諸君が正しいのなら、その他のすべての分派とグループは、いったいなぜ「レーニン派」をぬきにし、「分裂主義者」に反対して、解党派と統一することが可能なことを証明しなかったのか？……われわれが分裂主義者であるなら、諸君統合論者は、いったいなぜおたがいにも、また解党派とも、統合しなかったのか？　そうすることによって、諸君は、統一が可能であり、それが利益があることを実際に労働者に示せたはずではないか！……

年代を追ってみよう。

一九一二年一月、「分裂主義者」の「レーニン派」は、われわれは解党派をぬきにした、解党派に反対する党であると宣言した。

一九一二年三月、すべてのグループと「分派」、すなわち、解党派、トロツキー派、フペリョード派、「党擁護派ボリシェヴィキ」、「党擁護派メンシェヴィキ」が、この「分裂主義者」に反対して、自分たちのロシア語の諸小新聞とドイツ社会民主党の新聞『フォールヴェルツ』[一九四]の紙上で統合した。すべての者がみな一致し、協同し、和合し、統一して、われわれを「簒奪者」、「瞞着者」その他これにおとらず優しい愛称でののしった。

たいへんけっこうだ、諸君！　だが諸君にとって、「簒奪者」に反対して団結し、「先進的労働者」に統一の実例を示すことよりもたやすいことがあったろうか？　もしも

先進的労働者が、一方には、簒奪者に反対するすべての者の統一、すなわち解党派も非解党派もふくむ統一を見、他方には、「簒奪者」、「分裂主義者」その他だけを見たら、彼らははたして前者を援助しないであろうか??

もし意見の不一致が「レーニン派」によってでっちあげられ、または誇張され等々したものにすぎなくて、実際には解党派、プレハーノフ派、フペリョード派、トロツキー派その他の統一が可能であるとしたら、諸君はなぜ二年のあいだにこのことを自分の実例によって証明しなかったのか?

一九一二年八月に、「統合論者」の協議会がひらかれた。たちまち統一の分解が始まった。すなわち、プレハーノフ派は行くことをまったく拒否したし、フペリョード派は行くことは行ったが、この企て全体が実体のないものであることに抗議し、これを暴露して脱退した。

「統合」したのは、解党派、ラトヴィア人、トロツキー派(三五)(トロツキーとセムコフスキー)、カフカーズ人、七人組であった。彼らは統合しただろうか? われわれは当時こう声明した。いや統合していない、それは解党主義の目隠しにすぎない、と。諸事件はわれわれの見解をくつがえしただろうか?

ちょうど一年半あとの一九一四年二月には、つぎのようになっている。

(一) 七人組が崩壊した――ブリヤーノフが七人組から脱退した。

(二) あとに残った新たな「六人組」のなかでは、チヘイゼとトゥリャコフ、あるいはだれかもう一人の者とは、プレハーノフへの回答をするかどうかについて折合いをつけることができないでいる。彼らは出版物で、彼に答えると声明したが、答えることができないでいる。

(三) すでに何ヵ月ものあいだ、事実上『ルーチ』から姿を消していたトロツキーが、離脱して「自分の」雑誌『ボリバ』を発行した。トロツキーは、この雑誌を「非分派的」と称することによって、『ナーシャ・ザリャー』と『ルーチ』が、彼トロツキーの意見では、「分派的」な、すなわちよくない統合派であった、と明白に(多少とも事情に通じたすべての者にとっては明白に)語っている。

もし君が統合論者であるなら、トロツキー君よ、もしも君が解党派との統一が可能であると公言するのなら、もし君が彼らとともどもに、「一九一二年八月に定式化された根本思想」(『ボリバ』第一号、六ページ、『編集部から』)の立場に立っているのなら、なぜ君自身『ナーシャ・ザリャー』誌上や『ルーチ』紙上で解党派と統合しなかったのか?

トロツキーの雑誌の発刊まえに、『セーヴェルナヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』に、同誌の特性は「判明していない」とか、「マルクス主義者の諸サークルで」同誌のことが「しきりに論議されてきた」とかいった悪意ある批評がのったとき、『プーチ・プラウドィ（誤）』紙（第三七号）（注）は、当然このうそを暴露しなければならなかった。「マルクス主義者の諸サークルで論議されてきたのは」、ルーチ派に反対したトロツキーの秘密覚え書のことであったし、トロツキーの特性と八月ブロックからの彼の離脱は、十分に「判明している」と。

（四） エリ・セドフにいったんは反対した（そのため、エフ・ダン一派から公然とやっつけられた）カフカーズの解党派の有名な指導者アンが、こんどは『ボリバ』に現われた。カフカーズ派がこんどは、トロツキーと行をともにすることを望んでいるのか、それともダンと行をともにすることを望んでいるのかは、いまなお「判明していない」。

（五） ただ一つまったく争う余地のない「八月ブロック」の組織であったラトヴィアのマルクス主義者が、正式にブロックを脱退し、その最近の会議の決議でつぎのように声明した（一九一四年）。

「ぜがひでも解党派と統合しようとする調停派の試み（一九一二年八月協議会）は、無効果に終わり、統合論者自身が、解党派への思想的＝政治的従属におちいった。」

二つの中央部のどれとも連絡をとることを望まず、みずから中立的立場に立っている組織が、一年半の経験をつんだのちに、こう声明したのである。それだけにいっそう、中立的な人々のこの決議は、トロツキーにとって重味があるはずである！

多分もうたくさんだろう。

われわれを、分裂主義だとか、解党派と折れあうことを望まない、あるいは折れあうすべを知らないなどと非難した人々自身が、彼らと折れあわなかったのである。八月ブロックは実体のないものであることがわかり、崩壊した。トロツキーは、この崩壊を自分の読者に隠して、彼らをだましている。

われわれの反対者の経験は、われわれが正しいことを証明し、解党派といっしょに活動することが不可能なことを証明した。

四 「七人組」にたいする一調停主義者の忠告

『ボリバ』第一号の社説『国会議員団の分裂』には、解

党派になりかけている（あるいは解党主義の側に動揺しつつある）国会議員の七人組にたいする一調停主義者の忠告がのっている。その要点は、次の文句である。

「他の諸分派との協定を必要とするあらゆる場合に、まっさきに六人組(六二)に呼びかけること。」（二九ページ）

これはもっともな忠告である。一つにはこの忠告が原因で、トロツキーと解党派＝ルーチ派との意見のくいちがいが生じているのだと思える。国会内の二つの分派の闘争のそもそものはじめから、夏（一九一三年）の会議(六三)の決議以来、プラウダ派はほかならぬこの見地に立っていた。ロシア社会民主党労働者議員団は、分裂後にも、出版物をつうじて再三つぎのように声明した。議員団は、「七人組」が繰りかえしこれを拒否したにもかかわらず、ひきつづきこの立場に立っている、と。

そもそものはじめから、夏の会議以来、われわれは、国会活動の諸問題で協定を結ぶことは望ましくまた可能であると考えてきたし、いまでも考えている。こうした協定が、小ブルジョア的農民民主主義者（トルドヴィキ(六四)）とのあいだで一度ならず結ばれたからには、小ブルジョア的、自由主義的労働者政治家との協定は、言うまでもなく、なおさら可能でありまた必要だからである。

意見の不一致を誇張する必要はなく、現実をまともに直視しなければならない。「七人組」は解党主義の側に動揺している人々で、きのうは完全にダンに従っていたかとおもうと、今日は物思わしげにその視線をダンからトロツキーに、またその逆に移す人々である。解党派は、自由主義的労働者政治をおこなっている、党から離脱した合法主義者のグループである。彼らは「地下組織」を否定しているので、党建設と労働運動の事業で、このグループと統一することは全然問題にならない。これと違った考え方をする者は、一九〇八年以後に起こった変化の深刻さを考慮にいれないという、はなはだしい誤りをおかしているのである。

しかし、この党外の、もしくは党周辺のグループと個々の問題で協定することは、もちろん、許されることである。われわれは、トルドヴィキにたいすると同じように、このグループにたいしてもつねに、労働者的政策（プラウダ派の政治）と自由主義的政策のいずれかを選択するようにせまらなければならない。たとえば、出版の自由のための闘争という問題で、解党派が、検閲無視の出版物を否定するか忘れる自由主義的な問題提起と、これに反対する労働者政策とのあいだで動揺していることが、はっきりと暴露された。

最も重要な国会外の諸問題が直接には提起されない国会政治の枠内で、自由主義的労働者議員の七人組と協定する

ことは、可能でありまた望ましいことである。トロツキーは、この点では、解党派から党の夏の（一九一三年）会議の立場に移ったのである。

ただ忘れてならないことは、党外グループの見地からすれば、協定ということばで、党人が通常このことばで理解していることとはまったく違ったことが理解されていることである。無党派の人々にとっては、国会内の「協定」は「戦術上の決議または方針を作成すること」である。党人にとっては、協定は党の方針の実行に他のものを引きいれる試みである。

たとえば、トルドヴィキは党をもたない。彼らは、きょうはカデットといっしょに、あすは社会民主党といっしょに、いわば「自由に」方針を「作成すること」を協定と解している。だがわれわれは、トルドヴィキとの協定を全然そうは解しない。われわれにはあらゆる重要な戦術問題について党の決定があり、われわれはけっしてこれらの決定から逸脱しはしないであろう。トルドヴィキと協定することは、われわれにとっては、彼らをわれわれの側に引きつけ、彼らにわれわれの正しさを信じさせ、黒百人組[三]に反対しまた自由主義者に反対しての共同行動を拒否しないことを意味する。

党的見地にもとづく協定と、党的でない見地にもとづく協定とのこの基本的な相違を、トロツキーがどれほど忘れてしまったか（彼が解党派のもとに出入りしたのは、やはりむだではなかった！）は、彼の次の議論がこれを示している。

「インタナショナルの受任者たちが、仲間割れしたわが党の国会代表部の両部分を一つにまとめ、なにが彼らを統一させ、なにが彼らを仲間割れさせるかを、彼らとともに検討する必要がある……おそらく、議会戦術の原則を定式化する詳細な戦術的決議が作成されるだろう……」（第一号、二九―三〇ページ）

これこそ、解党主義的な問題提起の特徴的できわめて典型的な見本である！　トロツキーの雑誌は、党を忘れている。正直なところ、そういうつまらないことを思いだす価値があろうか、というわけだ。

ヨーロッパで（トロツキーは、場ちがいにヨーロッパ風について語ることが好きである）いろいろの党が協定するか統合するときには、こういうふうにするものである。すなわち、これらの党の代表者が集まって、まず第一に、意見の相違点を明らかにする（インタナショナルが、「古い党はなくなった[三]」とするカウツキーの軽率な主張を、全然決議にふくめずにロシア問題を日程にのぼせたのが、まさにそれである）。意見の相違点を明らかにしたあとで、代

表者たちは、戦術や組織などの問題で、どういう決定（決議、条件、その他）が両党の大会に提出されるべきであるかを決める。もし一致した決議案を決めることに成功すれば、両大会はそれらを採択するかどうかを決定する。あい異なる諸提案が作成された場合には、両党の大会が同じく最終的にそれを審議する。

解党派とトロツキーの「気にいる」のは、ヨーロッパの日和見主義の手本だけであって、けっしてヨーロッパの党性の手本ではない。

国会議員が「詳細な戦術的決議を作成するだろう」とは!! トロツキーがロシアの「先進的労働者」をあれほど不満に思っているのは無理もないが、その「先進的労働者」は、カウツキーにさえロシアに「党はない」と信じこませた在外小グループのばかげた空想計画がウィーンとパリでどの程度高じているかを、この例でまざまざと見ることができる。しかし、この点で、ときには外国の同志をだましおおせるとしても、ロシアの「先進的労働者」は、（こわいトロツキーからまたも不興を買う危険をおかして）、これらの空想計画家を面と向かってあざけるであろう。

彼らは、これらの空想計画家たちにこう言うだろう。——「詳細な戦術的決議は、われわれのところでは、たとえば一九〇七年、一九〇八年、一九一〇年、一九一二年および一九一三年の党大会と党協議会で作成されている（諸君ら無党派ではどうなっているか知らないが）。われわれは、事情に暗い外国人にも忘れっぽいロシア人にも、わが党の諸決定を喜んで知らせるし、またそれにもまして喜んで、『七人組』または『八月派』または『左派』の代表者その他だれにでも、彼らの大会や会議の決議をわれわれに知らせてくれるようにお願いし、また、われわれの諸決議なり一九一四年の中立的なラトヴィアの党の大会の決議なりにたいしてどういう態度を取るかというはっきりした問題を、彼らの将来の大会に提出することと等々をお願いする」、と。

ロシアの「先進的労働者」は、いろいろの空想計画家たちにこう語るであろう。また、たとえばマルクス主義的出版物で、ペテルブルグの組織されたマルクス主義者はすでにこう語ったのである。トロツキーは、出版物上で解党派にたいして出されたこれらの条件を無視したほうがよいと考えているのか？ それならトロツキーにはなおぐあいが悪い。われわれの義務は、ロシアの自覚した労働者の多数者の意志を重視しようとしない「統合」の（八月ブロック的「統合」型の？）空想計画がどんなにばかげているかを、読者に警告することである。

五　トロツキーの解党主義的見解

トロツキーは、彼の新しい雑誌で、自分の見解の実質をできるだけ話すまいとした。『プーチ・プラウドィ』（第三七号）は、すでに、地下組織の問題についても、公然の党のための闘争というスローガンその他についても、トロツキーは一言も言わなかったことを指摘した。(三四) だからこそ、われわれはとりわけ、別個に分離した一組織がどんな思想的＝政治的特徴ももたずに生まれようとする、こういう場合を分派性の最悪のものだと言うのである。

しかし、トロツキーが自分の見解をあからさまには述べたがらなかったにしても、彼の雑誌の多くの箇所は、彼がひそかに、ひたかくしに隠しながらいだいている考えがどんなものであるかを示している。

第一号の最初の社説には、こう書いてある。

「革命前の社会民主党は、わが国では、その思想とその目的の点でだけ労働者党であった。現実には、それはめざめつつあった労働者階級をひきつれたマルクス主義的インテリゲンツィアの組織であった。」（五ページ）

これは、ずっと以前から知られている自由主義者と解党主義者の唄い文句であって、事実上、党の否定にみちびくのに役だっているものである。この唄い文句は、歴史上の諸事実の歪曲にもとづいている。すでに一八九五―一八九六年のストライキは、思想的にも組織的にも社会民主主義派と結合した大衆的労働運動を生みだした。だが「インテリゲンツィア」が、これらのストライキへ、経済的ならびに非経済的扇動へ「労働者階級をひきつれていった」というのか!?

あるいはここに、一九〇一―一九〇三年の国事犯罪をそのまえの時期と比較した正確な数字がある。〔次ページの表を参照〕

ロシアにまだ社会民主党がなく、運動が「ナロードニキ主義的」であった八〇年代には、インテリゲンツィアが優勢であったことがわかる。インテリゲンツィアは、参加者の半数以上を示したのである。

すでに社会民主党が存在し、旧『イスクラ』がその活動をおこなっていた一九〇一―一九〇三年には、この事情は完全に一変した。インテリゲンツィアはもはや運動参加者中の少数者であり、労働者（「工業および商業」）はすでにインテリゲンツィアよりはるかに多く、労働者と農民を合わせると総数の半分以上となる。

ほかならぬマルクス主義内部の諸潮流の闘争のなかで、「経済主義」（一八九五―一九〇三年）に始まって「メンシ

解放運動参加者（国事犯罪人）の職業別構成（％）

時期	農業	工業および商業	自由職業および学生	職業不定の者および無職者
1884―1890年	7.1	15.1	53.3	19.9
1901―1903年	9.0	46.1	28.7	8.0

エヴィズム」（一九〇三―一九〇八年）と「解党主義」（一九〇八―一九一四年）へとつづく、社会民主党の小ブルジョア・インテリゲンツィア的一翼が現われたのである。トロツキーは、党内諸潮流の二〇年の闘争の歴史にふれることを恐れながら、党にたいする解党主義的中傷を繰りかえしている。

もう一つ例をあげよう。

「ロシア社会民主党は、議会制度にたいするその態度で……（他の国国にも見られるのと）同じ三つの段階を経てきた。……はじめは『ボイコット主義』、……ついで、議会戦術の原則的な、しかし、……（すばらしい「しかし」だ、シチェドリーン(三三)が、耳は額よりうえには伸びない、けっして伸びない、ということばに翻訳したあの「しかし」だ！）……純扇動的目的をもった承認、……最後に、当面の諸要求の……国会演壇への上提」……。（第一号、三四ページ）

またしても歴史の解党主義的歪曲である。第二段階と第三段階の区別は、こっそり改良主義と日和見主義を擁護するために考えだされたものである。「議会政治にたいする社会民主党の態度」の一段階としてのボイコット主義は、ヨーロッパにもなかったし（そこにあったのは無政府主義であり、それがいまに残っている）、ロシアにもなかった。ロシアでは、たとえばブルィギン国会(六八)のボイコットは、特定の機関についてだけのことであって、一度も「議会制度」とは関係がなかったし、強襲の継続をめぐる自由主義とマルクス主義のあいだの独特の闘争から生まれたものであった(六九)。この闘争が、マルクス主義内部の二つの潮流の闘争にどのように反映したかを、トロツキーはほのめかしもしない！

歴史に言及するのなら、具体的な諸問題といろいろの潮流の階級的根源を明らかにしなければならない。諸階級の闘争とブルィギン国会への参加をめぐる諸潮流の闘争とをマルクス主義的に研究したいと思う者は、そこに自由主義的労働者政治の根源を認めるだろう。ところがトロツキーは、具体的な諸問題を避け、今日の日和見主義者のために弁明または弁明めいたものをでっちあげるために、歴史に「言及」しているのだ！

彼はこう書いている。「……事実上は、すべての潮流によって、同じ闘争方法と建設方法とがもちいられてい

るのである。」——「わが労働運動における自由主義の危険という叫び声は、たんに、現実を粗雑にセクト主義的に戯画化したものにすぎない。」（第一号、五および三五ページ）

これはきわめて明らかな、しかも非常に熱心な解党主義者の弁護である。しかしそれでも、なるべく新しいもののうちから、ちょっとした事実を一つだけ取り上げさせてもらおう。トロツキーは空文句をあびせているだけであるが、われわれは、労働者が自分で事実を慎重に考えることを望むからだ。

事実というのは、『セーヴェルナヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』が三月一三日号にこう書いていることである。「労働者階級が当面している特定の具体的任務——国会に法案（出版にかんする）を否決させるという任務——を強調するかわりに、非合法新聞の吹聴——自分の合法新聞をもつための労働者の闘争を弱めることにしかなりえない——とならんで、『完璧なスローガン』のための闘争といういあいまいな定式がかかげられている。」

これこそ、文書による解党主義的政治の明瞭、正確な弁護であり、プラウダ派政治の批判である。よろしい、読み書きのできる人間で、双方の潮流がこの問題で「同じ闘争方法と建設方法」をもちいているというような人間がいるだろうか？　読み書きのできる人間で、解党派がここで自由主義的労働者政治をおこなっていないというような人間がいるだろうか？　労働運動における自由主義の危険が、ここで頭のなかで考えだされたものだというような人間がいるだろうか？

トロツキーが事実と具体的な指摘を避けているのは、それらの事実や指摘が、彼の怒号や美辞麗句をすべて容赦なくくつがえすからである。もちろん、気どって「粗雑なセクト主義的戯画」を口にするのは、きわめてたやすいことである。なおもうすこし辛辣に、もうすこし仰々しく、「保守的分派性からの解放」ということばをつけくわえることもまた困難ではない。

だが、これはあまりに安っぽくはあるまいか？　これは、トロツキーが中学生の聴衆の前で光彩をはなっていた時代の兵器庫から取りだしてきた武器ではあるまいか？

トロツキーが腹を立てている「先進的労働者」は、それでも、具体的な政治的カンパニアについての前記の評価に正確に言いあらわされている「闘争方法と建設方法」を君が是認するのかしないのかを、率直明瞭に語ってもらいたいと思うであろう。もし是認するのなら、それは自由主義的労働者政治であり、マルクス主義と党を裏切ることであって、こうした政治、それをおこなっているグループとの

「平和」あるいは「統一」を口にするのは、自他をあざむくことを意味する。

それとも是認しないのか？――それなら率直にそう言いたまえ。空文句では今日の労働者を驚かせることはできないし、満足させることも、おどすこともできないのだ。

ついでに言っておくが、さきにあげた引用文のなかで解党派が説いている政治は、自由主義の見地から見てさえ愚かしいものである。というのは、法律が国会を通過するかどうかは、すでに国会の委員会で自分の手の内を見せたベンニクセン型の「ゼムストヴォ派オクチャブリスト」にかかっているからである。

⁂

ロシアのマルクス主義運動の古くからの参加者は、トロツキーの人物をよく知っているので、彼らにそれを話してやるまでのことはない。しかし労働者の若い世代は、それを知らないから話してやらなければならない。なぜなら、彼は、これまた事実上解党派と党とのあいだを動揺している五つの在外グループのすべてにとって典型的な人物だからである。

旧『イスクラ』の時代（一九〇一―一九〇三年）には、「経済主義者」から「イスクラ派」へ、またその逆へと動揺し鞍替えするこれらの人間のために、「トゥーシノの内股膏薬」（ルーシの動乱時代[三二]には、一つの陣営から他の陣営にはしった軍人がこう呼ばれた）というあだ名があった。

われわれが解党主義を論じるときには、われわれは、長年にわたって成長し、その根はマルクス主義の二〇年の歴史のなかで「メンシェヴィズム」と「経済主義」とに結びつき、自由主義的ブルジョアジーという特定の階級の政治とイデオロギーに結びついた、明確な一定の思想的潮流を規定しているのである。

「トゥーシノの内股膏薬」は、彼らがきょうはある分派の思想を、あすは別の分派の思想を「借用する」ことを唯一の根拠として、自分らは分派を超越していると称している。トロツキーは、一九〇一―一九〇三年には熱烈な「イスクラ派」であって、リャザーノフは、一九〇三年の大会でのトロツキーの役割を「レーニンの棍棒」の役割と呼んだものである。一九〇三年末には、トロツキーは熱烈なメンシェヴィキであった。すなわち、イスクラ派から、「経済主義者」のほうに鞍替えしたのである。彼は「旧『イスクラ』と新『イスクラ』とのあいだには深淵がある」と宣言した。一九〇四―一九〇五年に、彼はメンシェヴィキから離れ、あるいはマルトィノフ（「経済主義者」）[三三]と協働したり、あるいはばかばかしく左翼的な「永続革命」をとな

えたりして動揺する立場をとった。一九〇六―一九〇七年には、彼はボリシェヴィキに近づき、一九〇七年春には、自分はローザ・ルクセンブルクと同じ考えだと声明した。

崩壊の時期には、長い「非分派的な」動揺のあとで、彼はふたたび右にはしり、一九一二年の夏には、解党派とブロックを結んだ。いまやふたたび解党派を離れつつあるが、しかし実質上は彼らの思想を繰りかえしている。

こうしたタイプは、ロシアの大衆的労働運動がまだ眠っており、どんなグループにとっても自分らが一個の潮流、グループ、分派であるかのように――一言でいえば、他の諸勢力と統合について話し合う「一勢力」であるかのようによそおう「余地があった」過ぎし日に、歴史的に形成され構成されたものの残骸として特徴的である。

一九〇八年以来解党主義にたいする態度を規定し確立した党の諸決定をも、それらの決定の完全な承認を基礎として、実際に多数者の統一をつくりだしたロシアの現在の労働運動の経験をも、絶対に顧慮しようとしない人々が、法外な要求をかかげているいま、労働者の若い世代が、自分の相手にしているのはどういう人物であるかをよく知っておくことが必要である。

一九一四年五月に雑誌『プロスヴェシチェーニエ』第五号に発表

全集、第五版、第二五巻、一八三―二〇六ページ所収
邦訳全集、第二〇巻、三四七―三七一ページ所収

民族自決権について

ロシアのマルクス主義者の綱領のなかで民族自決権をあげている第九項[註]は、最近（すでにわれわれが[註]『プロスヴェシチェーニエ』誌上で指摘しておいたように）日和見主義者の大がかりな攻撃をひきおこした。ロシアの解党派のセムコフスキーもペテルブルグの解党派の新聞紙上で、また、ブンド派のリープマンやウクライナの民族主義的社会民主主義者ユルケヴィチもそれぞれ自分の機関紙で、この項にくってかかり、このうえなく軽蔑したようすでこれをあしらっている。われわれのマルクス主義的綱領にたいする、この日和見主義の「一二民族の襲来」[註]が今日の民族主義的動揺一般と密接なつながりがあることは疑いがない。だからこの問題を詳しく分析することは、時宜にかなったことだと思われる。ただ、次のことを指摘しておこう。右に述べた日和見主義者のだれひとりとして、独自の論拠をただの一つももちだしてはいない。みな、ローザ・ルクセンブルクが一九〇八―一九〇九年のポーランド語の大論文『民族問題と自治』で言っていることを繰りかえしているだけなのである。だから、この論文でも、ローザの「独創的な」論拠をいちばん多くとりあげることになる。

一　民族自決とはなにか？

いわゆる自決をマルクス主義的に究明しようと試みるとき、まず第一にこの問題がでてくることは、当然である。このことばはどう理解すべきであろうか？　権利についてのありとあらゆる「一般概念」から演繹されるような法律的定義に、その答えを求めるべきであろうか？　それとも、民族運動の歴史的＝経済的研究に、その答えを求めるべきであろうか？

セムコフスキー、リープマン、ユルケヴィチのような諸君が、この問題を提起しようと思いつきもしなかったことは、驚くにあたらない。彼らは、マルクス主義者の綱領が「あいまい」だとくすくす笑うだけでお茶をにごし、民族自決については一九〇三年のロシアの綱領だけでなく、一八九六年の〔第二インタナショナル〕ロンドン国際大会の決定（この決議については、その項〔第七節〕のところで詳

しく述べるつもりである）も論じているということさえ、まのぬけたことには知らないらしいからである。むしろはるかに驚くべきことは、この条項が抽象的であり、形而上学的であると称して、大いに熱弁をふるっているローザ・ルクセンブルクその人が、ほかならぬその抽象と形而上学の誤りに陥っていることである。ローザ・ルクセンブルクこそ、いつも自決にかんする一般論に迷いこみ（民族の意志をどうやって知るのかという、こっけいきわまる空理空論にふけることをもふくめて）、事の本質は法律上の定義にあるのか、それとも全世界の民族運動の経験にあるのかという問題を、どこでもはっきりと正確にだしたことはないのである。

この問題を正確に提起することは、マルクス主義者として避けることができないものであるが、それはローザ・ルクセンブルクの議論の一〇分の九を、たちどころにくつがえしてしまうであろう。民族運動は、ロシアにはじめて起こったのでもなければ、ロシアだけに特有のものでもない。全世界をつうじて、資本主義が封建制にたいして最後の勝利をおさめた時代は、民族運動をともなっていた。民族運動の経済的基礎は次の点にある。すなわち、商品生産が完全な勝利をおさめるためには、ブルジョアジーが国内市場を獲得することが必要であり、同一の言語をつかう住民の住んでいる諸地域が一つの国家にまとまる――そのさい、この言語が発達し文献のうちに固定するのを妨げているあらゆる障害がとりのぞかれる――ことが必要であるという点にある。言語は人間の最も重要な交流手段である。言語の統一とその自由な発達は、近代資本主義に照応する真に自由で広範な商品取引のための、また住民がそれぞれの階級に自由にひろく編成されていくための、最も重要な条件のひとつであり、最後に、市場を、大小を問わずすべての経営者に、売り手と買い手に、密接に結びつけるための条件である。

だから、近代資本主義のこれらの要求を最もよくみたす民族国家を形成することが、あらゆる民族運動の傾向（志向）である。最も根ぶかい経済的諸要因が、この方向におしすすめるのである。だから、西ヨーロッパ全体にとって、それどころか文明世界全体にとって、資本主義時代の典型的なもの、正常なものは、民族国家である。

したがって、もしわれわれが法律的定義をもてあそんだり、抽象的な規定を「案出」したりしないで、民族運動の歴史的＝経済的諸条件を検討することによって民族自決の意義を理解しようとするなら、われわれは不可避的に次の結論に達する。すなわち、民族の自決とは、ある民族が他民族の集合体から国家的に分離することを意味し、自立し

た民族国家を形成することを意味しているのである。

自決権を独立の国家的存立を営む権利以外のことと理解することが正しくない理由は、なおほかにもあるが、それはまたあとで述べよう。ここでは、ローザ・ルクセンブルクが、民族国家をつくろうとする傾向には根ぶかい経済的基礎があるという避けがたい結論からどうやって「逃げよう」としたかを、述べなければならない。

ローザ・ルクセンブルクは、カウツキーの小冊子『民族性と国際性』(『ノイエ・ツァイト』[二六五]第一号付録、一九〇七―一九〇八年、ロシア語訳は、『科学思想』[二六六]誌、リガ、一九〇八年、所載)をよく知っている。カウツキーが、この小冊子の第四章で、民族国家の問題を詳しく分析したのち、オットー・バウアーは「民族国家の創設に駆りたてる力を軽視している」(前掲小冊子の二三ページ)という結論に達した[二六七]ことを彼女は知っている。ローザ・ルクセンブルクは、自分でもカウツキーの次のことばを引用している。「民族国家は、現代の諸条件」(すなわち、中世的、前資本主義的等の諸条件と区別された、資本主義的な、文明化された、経済的に進歩した諸条件)「に最もよく適応する国家形態であり、その任務(すなわち、最も自由に、広範に、また急速に、資本主義を発展させる任務)を最もたやすく果たすことのできる形態である。」われわれはこれに、さらに正確なカウツキーの次の結論をつけくわえなければならない。すなわち、カウツキーは、雑多な民族からなる国家(一民族国家とは違ういわゆる多民族国家)は、「いつでも、なにかの原因から、内部の構成が変則なものまたは未発達のもの(おくれたもの)としてとどまっていた国家」である、と言っている。いうまでもなく、カウツキーが変則というのは、もっぱら、発達しつつある資本主義の要求に最もよく適合したものとは違うという意味である。

さて問題は、カウツキーの歴史的＝経済的結論に、ローザ・ルクセンブルクがどういう態度をとったか、ということである。これらの結論は正しいのか、まちがっているのか？　歴史的＝経済的理論をとなえるカウツキーが正しいのか、それとも、その理論が根本的に心理的であるバウアーが正しいのか？　バウアーの疑う余地のない「民族的日和見主義」、文化的民族的自治の擁護、民族主義的熱中(カウツキーの表現によれば、「ところどころに民族的契機の強化がある」)、「民族的契機のはなはだしい過大視と国際的契機の完全な忘却」(カウツキー)と、彼が民族国家の創設に駆りたてる力を軽視していることとの結びつきは、どこにあるのか？

ローザ・ルクセンブルクは、この問題を提起さえしなかった。彼女は、この結びつきに気づかなかった。彼女はバ

ウアーの理論的見解全体をよく考えなかった。彼女は、民族問題における歴史的＝経済的理論と心理的理論とを対置することさえ、全然しなかった。彼女は、カウツキーに反対して、つぎのように言っただけであった。

「……この『最良の』民族国家というのは、理論的に展開したり、理論的に擁護したりすることは容易だが、現実に合わない抽象にすぎない。」（『社会民主主義評論』[三八]、一九〇八年、第六号、四九九ページ）

そして、この断定を裏づけるために、資本主義列強の発展と帝国主義とは、小民族の「自決権」を幻影にするという議論をもちだしている。ローザ・ルクセンブルクは、つぎのように叫んでいる、「形式的には独立しているモンテネグロ人、ブルガリア人、ルーマニア人、セルビア人、ギリシア人の『自決』を、それどころか、ある程度はスイス人の『自決』さえも――彼らの独立そのものが政治闘争と『ヨーロッパ協商』の外交的駆引きの産物である――、本気で論じることができようか？」（五〇〇ページ）。これらの条件に最もよくかなっているのは、「カウツキーが主張しているような民族国家ではなく、略奪国家である」。そしてつぎに、イギリス、フランス、その他に属している植民地の大きさについて何十という数字があげられている。

こうした議論を読むと、物の道理を理解することができない著者の能力に、驚かざるをえない！　カウツキーにむかって、小国家は大国家に経済的に依存しているとか、ブルジョア国家のあいだでは他民族を略奪的に圧迫するための闘争がおこなわれているとか、帝国主義と植民地とが存在しているとか、もったいぶって説教すること――これは、滑稽な、子供じみた利口ぶりである。なぜなら、こうしたことはすべて、当面の問題とはすこしも関係がないからである。小国家ばかりでなく、たとえばロシアも、経済的には「富裕」なブルジョア諸国の帝国主義的金融資本の威力にまったく従属している。微小なバルカン諸国家だけでなく、一九世紀のアメリカも、かつてマルクスが『資本論』で指摘したように[三九]、経済的にはヨーロッパの植民地であった。こうしたことはすべてのマルクス主義者も、もちろんよく知っている。しかし、このことは、民族運動や民族国家の問題とは断じてかかわりのないことである。

ローザ・ルクセンブルクは、ブルジョア社会における諸民族の政治的自決の問題、それらの民族の国家的自立の問題を、それらの民族の経済上の自立と独立の問題にすりかえている。これは、ブルジョア国家における議会すなわち国民代表会議の主権についての綱領的要求を論じている人が、ブルジョア的な国の制度がどのようなものであろうと

も主権をにぎっているのは大資本であるという、最も至極の確信をならべたてはじめるのと、同じくらいの賢明さである。

世界中で最も人口密度の高い部分であるアジアの大部分が、「列強」の植民地の状態にあるか、それでなければひどく従属的な、民族的抑圧をうけている国家の状態にあるか、どちらかだということは、疑いがない。しかし、この周知の事実は、次のような余地のない事実、すなわち、商品生産が最も完全に発達し、資本主義が最も自由に、広範に、急速に発展する条件がつくりだされているところは、アジアでは日本、すなわち自立した民族国家だけであるという議論の余地のない事実を、いくらかでもゆるがすものであろうか？　この国家はブルジョア国家である。だから、この国家自身も他の民族を圧迫し植民地を隷属させはじめた。われわれには、アジアが、資本主義が崩壊するまえにヨーロッパのように自立した諸民族国家の体制をつくりあげることができるかどうかわからない。だが、資本主義がすでにアジアを目ざめさせてアジアのいたるところに民族運動をよびおこしていること、アジアにおける民族国家の創設がこれらの運動の傾向であること、資本主義発展の最良の諸条件を保障するのはまさにこのような国家であること、これらのことは依然として争いがたいことである。アジアのこの実例は、カウツキーに有利で、ローザ・ルクセンブルクには不利である。

バルカン諸国家の実例もまた、彼女に不利である。というのは、バルカンにおける資本主義の発展のための最良の諸条件は、まさにこの半島で自立した民族国家が創設されるにつれてつくりだされているということは、いまではだれでも知っていることだからである。

したがって、先進文明人類全体の実例も、バルカンの実例も、ローザ・ルクセンブルクに反して、カウツキーの命題――民族国家は資本主義の通則であり、「常規」であって、雑多な民族からなる国家は後進的であるか例外であるという命題――が、無条件に正しいことを証明している。民族的関係の見地から見て、資本主義の発展にとって最もよい条件をあたえるのは、疑いもなく民族国家である。もちろん、このことは、このような国家が、ブルジョア諸関係を基盤としながら、諸民族の搾取や抑圧を除去しうるということを意味するものではない。このことは、マルクス主義者は民族国家を創設しようとする志向を生んでいる強力な経済的諸要因を見失うわけにはいかない、ということを意味するだけである。このことは、マルクス主義者の綱領にある「民族の自決」とは、歴史的＝経済的見地からいって、政治的自決、国家的自立、民族国家の創設以外のど

んな意味ももちえないということを意味する。

「民族国家」というブルジョア民主主義的要求を支持するには、マルクス主義的見地、すなわち階級的プロレタリア的見地からいって、どのような条件がそなわっていなければならないかについては、あとでくわしく述べよう。ここでは、われわれは、「自決」の概念を規定するだけにしておく。なお、ローザ・ルクセンブルクはこの概念（民族国家）の内容を知っているが、彼女の日和見主義的支持者であるリープマン、セムコフスキー、ユルケヴィチのような連中はそれさえ知らないということだけはしるしておかなければならない。

二　歴史的・具体的な問題提起

どんな社会問題を検討する場合でも、それを一定の歴史的なわくのなかにおき、つぎに、もし問題になっているのが一国（たとえばその国の民族綱領）である場合には、同一の歴史的時代にありながらも、その国を他の国々から区別している具体的特殊性を考慮することが、マルクス主義理論の無条件の要求である。

このマルクス主義の無条件の要求を、われわれがいま論じている問題に適用すると、どういうことになるか？

なによりもまず、民族運動の見地から見て根本的に異なっている資本主義の二つの時期を厳密に区別する必要があるということになる。一方では、それは、封建制度と絶対主義の崩壊の時期であり、ブルジョア民主主義的な社会と国家の形成の時期、民族運動がはじめて大衆的なものになり、出版物や代議機関への参加などをつうじてすべての階級をなんらかの形で政治にひきいれる時期である。他方では、それは、立憲政体をうちたててからすでに久しく、プロレタリアートとブルジョアジーの敵対関係が高度に発展している、完全に形づくられた資本主義諸国家の時期であり――資本主義崩壊の前夜と呼ぶことのできる時期である。

第一の時期に典型的なのは、民族運動が目ざめることであり、一般に政治的自由のため、とくに民族の権利のための闘争と結びついて、最も人数の多い、最も「腰のおもい」層である農民が、民族運動にひきいれられることである。第二の時期に典型的なのは、大衆的なブルジョア民主主義運動のないこと、発展した資本主義が、すでに完全に商品流通の中にひきいれられた諸民族をますます接近させ、ますます混交させながら、国際的に一体となった資本と国際労働運動との敵対関係を前面におしだすことである。

もちろん、この二つの時期は壁でへだてられているので

なく、無敵の中間的な環で結ばれており、しかもそれぞれの国は、さらに民族的発展の速さ、住民の民族的構成、その分布等々の点で異なっている。したがって、これらすべての一般的な歴史的諸条件や具体的な国家的諸条件を考えにいれずに、特定の国のマルクス主義者の民族綱領をとりあげるということは問題にならない。

そしてまさにこの点で、われわれはローザ・ルクセンブルクの議論の最大の弱点につきあたる。彼女はなみなみならぬ熱心さで、われわれの綱領の第九項に反対する「強い」ことばを寄せ集めて自分の論文をかざりたて、第九項が「大ざっぱ」だ、「紋切型」だ、「形而上学的な文句」だなどと際限もなく言っている。これほどみごとに形而上学（マルクス主義的な意味での、すなわち非弁証法）や、無内容な抽象を非難する筆者であるからには、問題の具体的＝歴史的な検討の模範をわれわれに見せてくれるものと期待するのは当然であろう。われわれがいま問題にしているのは、特定の時期、すなわち二〇世紀初頭の、ある特定の国、すなわちロシアのマルクス主義者の民族綱領である。おそらくローザ・ルクセンブルクも、ロシアがいまどのような歴史的時期にあるか、この特定の時期の特定の国の民族問題と民族運動の具体的な特殊性とはどんなものであるか、という問題を出しているのではあるまいか？

ところが、ローザ・ルクセンブルクは、それについては、まったくなにひとつ言っていないのである！　現在の歴史的時期におけるロシアの民族問題はどういうかたちで出されているか、この点でロシアの特殊性はどのようなものであるか、という問題の検討は、彼女の著作には影も形も見あたらない！

われわれが言ってきかされることは、バルカン諸国における民族問題の提起の仕方はアイルランドの場合とは違っているとか、マルクスは一八四八年の具体的条件のもとでのポーランドとチェコの民族運動をしかじかに評価したとか（一ページにもわたるマルクスからの抜書き）、エンゲルスはスイスの森林地帯諸県のオーストリア[三]にたいする闘争と、一三一五年に起こったモルガルテンの戦闘をしかじかに評価したとか（エンゲルスからの約一ページの引用とこれにたいするカウツキーの注釈つき）ラサールは一六世紀のドイツ農民戦争を反動的とみなしたとか、その他いろいろのことである。

これらの注釈や引用にとくに目あたらしいところがあるとはいえないが、いずれにせよマルクスやエンゲルスやラサールが個々の国の具体的＝歴史的な諸問題の検討にどういう態度でのぞんだかを、くりかえしもう一度思いおこすことは読者として興味がある。そして、マルクスやエンゲ

ルスからの、教訓に富んだこれらの引用をよく読んでみると、ローザ・ルクセンブルクがどんなに滑稽な羽目に陥っているかが、とくにはっきりわかってくる。彼女は、雄弁に、また激しい口調で、いろいろの時期の、いろいろの国の民族問題を具体的＝歴史的に分析する必要を説いている、――ところが彼女は、二〇世紀初頭のロシアが資本主義発展のどのような歴史的段階にあるか、この国の民族問題の特殊性はどのようなものであるかを規定しようとする試みはいささかもしていない。ローザ・ルクセンブルクは、ほかの人たちがこの問題をマルクス主義的に検討した実例を示しているが、それは、善意がかえって仇になることが多いこと、よい忠告も、じっさいそのとおりにやる気がないか、その能力がないのを隠すためにもちだされることがあるということをわざわざ強調するようなものである。

つぎに教訓に富んだ対照の一つをあげよう。ローザ・ルクセンブルクは、ポーランドの独立というスローガンに反対するさい、一八九八年の自著をあげている。同書は、ロシアに工業製品を販売した「ポーランドの」急速な「工業的発展」を論証している。いうまでもなく、ここからは、自決権の問題についてなにひとつ結論は出てこないし、それによって証明されるのは古い小貴族のポーランドの消滅などだけである。ローザ・ルクセンブルクは、ロシアとポーランドを結びつけている要因のうちで、いまではもう近代資本主義的関係の純経済的要因が支配的になっているという結論にいつのまにか絶えず移っている。

だが、ここで、わがローザは、自治の問題に移って、――彼女の論文の表題は一般的に『民族問題と自治』となっているのに――ポーランド王国にかぎって自治権をもっていることを証明しはじめる（この点については『プロスヴェシチェーニエ』、一九一三年第一二号参照[三二]）。ポーランドの自治権を論証するために、ローザ・ルクセンブルクは、ロシアの国家制度を、明らかに経済的・政治的・日常生活的・社会学的諸標識によって、つまりそれを合わせると「アジア的専制」という概念[三三]になるような諸特徴の総体によって、特徴づけている（『評論』第一二号、一三七ページ）。

周知のように、この種の国家体制が非常に大きな安定性をもっているのは、その国の経済のなかで、完全に家父長制的な、前資本主義的な特徴が優勢であって、商品経済と階級分化がわずかしかすすんでいない場合である。もしも国家制度がきわだって前資本主義的な性格を特色としている国に、資本主義が急速に発展している、民族的に一線を画した一地方があるとすれば、その資本主義の発展が急速であればあるほど、それだけこの発展と前資本主義的国家

制度との矛盾は大きくなり、それだけその先進的な地方――「近代資本主義」のきずなではなく、「アジア的専制」のきずなで全体と結びついている地方――の全体からの分離はますます予想されるものになる。

このように、ローザ・ルクセンブルクは、ブルジョア的ポーランドとの関係から見たロシアの権力の社会的構造の問題についてさえ、まったくつじつまのあわないことを言っているばかりでなく、ロシアにおける民族運動の具体的＝歴史的特殊性の問題は提起さえしなかったのである。

われわれが立ちいって論じなければならないのは、ほかならぬこの問題である。

三　ロシアにおける民族問題の具体的特殊性とロシアのブルジョア民主主義的変革

……「『民族自決権』の原則は、明らかに、ロシアに住んでいる諸民族だけではなく、ドイツとオーストリア、スイスとスウェーデン、アメリカとオーストラリアに住んでいる諸民族にも同じように適用されるものであるから、まったくありきたりな事であって、この原則はどうにでも解釈できるにもかかわらず、われわれは、現在の社会主義政党のどの綱領にも見いださない」……。（『評論』第六号、四八三ページ）

ローザ・ルクセンブルクは、マルクス主義的綱領の第九項にたいする攻撃のはじめにこう書いている。ローザ・ルクセンブルクは、綱領のこの項は「まったくありきたりな事」であるという解釈をわれわれにおしつけることによって、みずからもこの誤りに陥っており、この項がロシアやドイツやその他の民族に「明らかに同じように適用される」かのように、おかしいほど臆面もなく言明している。

われわれはこう答えよう。明らかにローザ・ルクセンブルクは、自分の論文のなかで中学生の勉強の役にたつ、論理学の誤謬例集をつくる決心をしたらしい、と。なぜなら、ローザ・ルクセンブルクの長口舌は、始めから終りまでナンセンスであり、歴史的＝具体的な問題提起を嘲弄するものだからである。

このマルクス主義的綱領を、子供じみたやり方ではなくて、マルクス主義者らしく解釈するならば、それがブルジョア民主主義的民族運動にかんするものであることをさとるのは、むずかしいことではない。もしそうだとすれば――疑いもなくそうなのだが――、このことから、この綱領が、ブルジョア民主主義的民族運動のあらゆる場合に、「ありきたりな事」うんぬんとして、「ひっくるめて」あて

はまることとは「明らか」である。ほんのすこしでも熟考したら、ローザ・ルクセンブルクにとっても、われわれの綱領は、このような運動が実際に存在する場合だけを扱っているのだという結論は、同じく明らかであろう。

ローザ・ルクセンブルクが、これらの明らかな諸点を一考したならば、自分がなんというナンセンスを言ったかが、とくに骨をおらなくともわかったであろう。彼女は、われわれが「ありきたりな事」をもちだした事を責めながら、ブルジョア民主主義的な民族運動の存在しない国民の綱領に民族自決が述べられていないという議論を、われわれに反対するためにもちだしている！　すばらしく賢明な論証だ！

いろいろの国の政治的・経済的発展の比較も、それらの国のマルクス主義者の綱領の比較も、マルクス主義の見地から見てきわめて大きな意義をもっている。なぜなら、近代国家が共通の資本主義的性質をもっていることも、それらの国家に共通の発展法則があることも、疑いのないことだからである。しかし、そのような比較は、うまくやらなければならない。そのためのわかりきった条件は、比較される国々の歴史的発展段階がはたして比較されうるかどうかという問題を、明らかにすることである。たとえばロシアのマルクス主義者の農業綱領を、西ヨーロッパのそれと「比較」するのは、まったく無学者（『ルースカヤ・ムィスリ』誌上のイェ・トルベツコイ公のような）〔註〕だけである。というのは、われわれの綱領は、西ヨーロッパ諸国では問題にもならないブルジョア民主主義的農業変革の問題にたいする答えだからである。

同じことが、民族問題にもあてはまる。西ヨーロッパ諸国の多くでは、この問題はとうの昔に解決されている。存在しない問題にたいする答えを、西ヨーロッパの諸綱領のなかに探しもとめるのは滑稽である。ローザ・ルクセンブルクは、ここで、最もたいせつな事柄を、すなわち、ブルジョア民主主義的変革がとうの昔に完了した国々と、それがまだ完了していない国々との相違を、見おとしてしまっている。

この相違のなかに、いっさいのかなめがある。この相違をまったく無視したので、ローザ・ルクセンブルクの長たらしい論文は、からっぽで、内容のない陳腐な事柄の寄せ集めになってしまったのである。

西ヨーロッパ大陸では、ブルジョア民主主義革命の時代は、かなり一定した期間、すなわち、ほぼ一七八九年から一八七一年にわたっている。この時代こそまさに、民族運動と民族国家創設の時代であった。この時代が終わってから、西ヨーロッパは、ブルジョア国家――通例、単一の民

族からなる国家――の確立した体系になってしまった。だから、いまごろ西ヨーロッパの社会主義者の諸綱領のなかに自決権を探しもとめることは、マルクス主義のイロハも知らないことである。

東ヨーロッパとアジアでは、ブルジョア民主主義革命の時代は、一九〇五年に始まったばかりである。ロシア、ペルシア、トルコ、中国の各革命、バルカン戦争――これらが、わが「東洋」の現代の世界的事件の連鎖である。そして、事件のこの連鎖のなかに、幾多のブルジョア民主主義的民族運動と民族的に独立した単一民族国家を創設しようという志向の目ざめのあることがわからないのは、盲だけである。ロシアがその隣接諸国とともに、この時代にあるからこそ、われわれは、わが綱領のなかに、民族自決権についての一項を必要とするのである。

しかし、ローザ・ルクセンブルクの論文の引用を、もう少しつづけよう。

彼女はこう書いている、「とくに、きわめて雑多な民族的構成をもつ国家で活動している党、またその党にとっては民族問題が第一級の役割を演じているような党の綱領――オーストリア社会民主党の綱領――は、民族自決権の原則をふくんでいない。」(前掲書)

このように、「とくに」オーストリアの実例によって読者を説得しようというのである。具体的＝歴史的見地から、この実例のなかには道理にかなったものがたくさんあるかどうかを、調べてみよう。

まず第一に、ブルジョア民主主義革命の完了という根本問題をだそう。オーストリアでは、この革命は一八四八年に始まり一八六七年に終わった。そのときいらい、この国では、ほとんど半世紀のあいだ、だいたいにおいて確立したブルジョア憲法が支配しており、それにもとづいて合法的な労働者党が合法的に活動している。

したがって、オーストリアの発展の国内的諸条件のなかには(すなわち、一般にオーストリアの、とくにその個々の民族の、資本主義的発展の見地からみて)、民族的独立国家の形成をその随伴物の一つとする飛躍を生みだすような要因は存在していない。ローザ・ルクセンブルクは、自分の比較によって、ロシアがこの点で類似の条件にあるものと仮定して、根本的にまちがった、反歴史的な想定をしているだけでなく、心ならずも解党主義に転落しているのである。

第二に、われわれがいま論じている問題について言うと、オーストリアとロシアとでは、諸民族の相互関係がまったく違っていることは、とくに大きな意味をもっている。オーストリアは、長いあいだドイツ人が支配的であった国家

だというだけではない。オーストリア系ドイツ人は、ドイツ民族全体のなかでヘゲモニーをかちとろうという野望をもっていた。この「野望」は、ローザ・ルクセンブルク（ありきたりなこと、紋切型、抽象的なことがきらいだと称する彼女）もおそらく思い出す気になってくれることと思うが、一八六六年の戦争でうちくだかれた。オーストリアで支配的な民族であるドイツ民族は、一八七一年に最終的につくられた、自立したドイツ国家の境界外にあった。他方、自立した民族国家をつくろうというハンガリー人の企ては、はやくも一八四九年に、ロシアの農奴の軍隊の攻撃をこうむって崩壊した。

こうして、きわめて特異な情勢が生じた。すなわち、ハンガリー人、ついでチェコ人としても、オーストリアからの分離ではなくて、オーストリアの保全に傾いたが、それは、ほかならぬ民族の独立をまもるためであって、その独立は、より侵略的で強力な隣国によってまったく押しつぶされたかもしれなかったのである！　オーストリアは、この特異な事情のために、二つの中心をもつ（二元的）国家になったのであったが、いまや、三つの中心をもつ（三元的、すなわち、ドイツ人、ハンガリー人、スラヴ人の）国家になりつつある。

ロシアには、これに類似したことがあるだろうか？　わが国では、もっと悪い民族的抑圧をうけるおそれがあるため「異民族」が大ロシア民族との合同に傾いているようなことがあるだろうか。

民族自決の問題について、ロシアとオーストリアを比較することが、どんなにナンセンスであり、紋切型であり、物知らずであるかを知るためには、この問題を提起するだけで十分である。

民族問題におけるロシアの特異な条件は、われわれがオーストリアで見たところとは、正反対である。ロシアは――、大ロシア人を単一の民族的中心とする国家である。大ロシア人は広大な、ひとつづきの領土を占めており、その数はほぼ七千万人に達している。この民族国家の特徴は、まず第一に、「異民族」（これは全体から見ると全人口中の過半数――五七％――を占めている）が辺境地方に住んでいるということ、第二に、これら異民族にたいする抑圧が近隣の諸国家（ヨーロッパとはかぎらない）におけるよりもはるかに強度であること、第三に、多くの場合に、これらの辺境地方に住む被抑圧民族にはロシアの国境のむこうでより多くの民族的独立をかちとっている同族があること（わが国の西と南の国境ぞいにあるフィンランド、スウェーデン、ポーランド、ウクライナ、ルーマニアをあげるだけで十分であろう）、第四に、「異民族」の住んでいる辺境

地方のほうが、しばしば国家の中心部よりも資本主義の発展や文化の一般的水準の点で高いことにある。最後に、この国に隣接するアジア諸国家には、ブルジョア革命と民族運動の時期が始まっており、それがロシアの国境内にいる同族の一部分をもとらえていることが見られる。

こうして、まさにロシアの民族問題の具体的特殊性が、わが国で現在民族自決権を承認することを、とくに緊急な事柄としているのである。

なお、純然たる事実の点からいってさえ、オーストリア社会民主党の綱領には民族自決権の承認がふくまれていないという、ローザ・ルクセンブルクの主張は正しくない。民族綱領を採択したブリュン大会議事録(三四)をあけて見さえすれば、全ウクライナ(ルテニア)代表団を代表したルテニアの社会民主党員ハンケヴィチ(同議事録、八五ページ)や、全ポーランド代表団を代表したポーランドの社会民主党員レーゲル(一〇八ページ)の声明、この両民族のオーストリア社会民主党員は、自分らの要求のなかに自民族の民族統一と自由と自立の要求をいれるという声明を、そこに見いだすだろう。だから、オーストリア社会民主党はその綱領のなかに民族自決権を直接にかかげてはいないけれども、しかし、同時に党の諸部分が民族的自立の要求をかかげることを承認しているのである。実際には、これは、いうまでもなく、民族自決権の承認を意味しているではないか！　このように、ローザ・ルクセンブルクがオーストリアを引合いに出していることは、すべての点でローザ・ルクセンブルクの主張に不利なのである。

四　民族問題における「実際主義」

日和見主義者たちは、わが党の綱領の第九項には「実際的」なものがなにもないというローザ・ルクセンブルクの論拠を、とくに熱心に受け売りしている。ローザ・ルクセンブルクは、この論拠にひどく夢中になっていて、彼女の論文には、ときによると、この「スローガン」が一ページに八回もくりかえされているほどである。

彼女はこう書いている。第九項は、「プロレタリアートの日常の政策にたいするなんの実際的指示もあたえず、民族問題の実際的な解決をなにもあたえていない」と。

この論拠はまた、第九項はまったくなにも言いあらわしていないとか、第九項は民族的志向をすべて支持する義務を負わせているとか、というふうにも定式化されているが、この論拠を検討することにしよう。

民族問題における「実際的態度」の要求は、なにを意味するか？

民族的志向をすべて支持するということを意味するか、それともそれぞれの民族の分離の問題に「イエスかノーか」を答えることを意味するか、それとも、一般に民族的要求の即時の「実現性」ということを意味するかである。「実際的態度」の要求がもちうる、以上三つの意味をすべて検討してみよう。

あらゆる民族運動のはじめに、当然にこの運動のヘゲモーン（指導者）として現われるブルジョアジーは、あらゆる民族的志向を支持することを実際的だと言っている。だが民族問題（ほかの諸問題でもそうであるが）におけるプロレタリアートの政策は、一定の方向でブルジョアジーを支持するだけであり、けっしてブルジョアジーの政策と一致するものではない。労働者階級がブルジョアジーを支持するのは、民族的和合（ブルジョアジーは和合を完全にもたらすことはできず、和合は完全な民主主義化に応じてのみ実現される）のため、同権のため、階級闘争の最もよい環境をつくりだすためだけである。したがってプロレタリアは、ブルジョアジーの「実際主義」とは正反対に、民族問題における原則的な政策をかかげ、つねにブルジョアジーを条件つきで支持するにすぎない。どんなブルジョアジーでも、民族問題では自民族の特権を望むか、それとも自民族の排他的な利益を望むか、どちらかである。これこそ「実際的」と呼ばれているものなのである。プロレタリアートは、どのような特権にも、どのような排他的地位にも反対する。プロレタリアートに「実際主義」を要求することは、ブルジョアジーの言いなりになること、日和見主義に陥ることを意味する。

各民族の分離の問題には「イエスまたはノー」と答えるべきであろうか？　それは、きわめて「実際的」な要求のように見える。しかし、現実には、これは愚かなことであり、理論的には形而上学的であり、実践的にはプロレタリアートをブルジョアジーの政策に従属させることになる。ブルジョアジーは、いつでも自分の民族的要求を第一位にかかげる。無条件にそれをかかげる。プロレタリアートにあっては、民族的要求は階級闘争の利害に従属する。ブルジョア民主主義革命を完成させるのが、ある民族の分離であるか、それとも他の民族との同権的地位であるかを、理論的にまえもって請け合うことはできない。プロレタリアートにとっては、どの場合にも自階級の発展を保証することがたいせつである。ブルジョアジーにとっては、プロレタリアートの任務を「自」民族の任務のあとに引き下げることで、プロレタリアートの発展を妨げることがたいせつである。だから、プロレタリアートは、自決権を承認するという、いわば消極的な要求をするにとどまり、どの民族

にも保証をあたえず、他民族を犠牲にしてなにかをあたえる義務も負わないのである。

これは、「実際的」でないかもしれないが、実際には、あらゆる可能な解決方法のうちで最も民主主義的な解決をなによりも確実に保証するものである。プロレタリアートに必要なのは、これらの保証だけであるが、どの民族のブルジョアジーにも必要なことは、他民族の立場（場合によってはその利益）を考慮せずに自分自身の利益を保証することである。

ブルジョアジーは、この要求の「実現性」になによりも関心をもち、——ここから、プロレタリアートを犠牲にしても他民族のブルジョアジーと取引をしようとする不断の政策が生まれる。プロレタリアートにとってたいせつなことは、ブルジョアジーに対抗して自階級を強化することであり、一貫した民主主義と社会主義の精神にたって大衆を教育することである。

これは日和見主義者にとって「実際的」ではないとしても、実際にはただひとつの保証であり、封建地主にもさからい民族主義的ブルジョアジーにもさからって、最大限の民族的平等と和合とを保証するものである。

民族問題におけるプロレタリアの全任務は、各民族の民族主義的ブルジョアジーの立場からすれば、「非実際的」だということになる。なぜなら、プロレタリアは、「抽象的な」同権を要求し、どんなにわずかな特権であろうと原則的にこれを認めないことを要求し、あらゆる民族主義に敵対するからである。ローザ・ルクセンブルクは、このことを理解しなかったので、おろかにも実際主義をほめたたえて、日和見主義に、とくに大ロシア人的民族主義への日和見主義的譲歩に、ひろく道をひらいたのである。

大ロシア人的民族主義への、というのはなぜか？それは、大ロシア人はロシアでの抑圧民族であり、民族問題については、当然、日和見主義は、被抑圧民族の場合と抑圧民族の場合とで現われ方が違うからである。

被抑圧民族のブルジョアジーは、自分の要求が「実際的」だということを名として、プロレタリアートに自分の志向を無条件に支持するように呼びかけるであろう。ありとあらゆる民族の分離の権利にたいしてではなく、特定の民族の分離にたいして直接に「イエス」と答えることが、最も実際的だというわけだ！

プロレタリアートは、このような実際主義に反対する。プロレタリアートは、同権と民族国家をつくる平等の権利を認めるとともに、あらゆる民族のプロレタリアの同盟をなによりも尊重し、重視する。またあらゆる民族的要求、あらゆる民族的分離を、労働者の階級闘争の視点から評価

する。実際主義というスローガンは、実際にはブルジョア的志向を無批判にうけいれよというスローガンにすぎない。

分離の権利を支持することで、君たちは被抑圧民族のブルジョア民族主義を支持しているのである――われわれはこう言い聞かされている。ローザ・ルクセンブルクがこう言っているし、日和見主義者のセムコフスキーも、彼女につづいて同じことを繰りかえしている。ついでに言っておくが、彼は解党派の新聞ではこの問題における解党派思想の唯一の代表者である！

これにたいして、われわれはこう答える。そうではない、ここでは、ほかならぬブルジョアジーにとっては「実際的」解決がたいせつであるが、労働者にとっては、二つの傾向の原則的識別がたいせつである。被抑圧民族のブルジョアジーが抑圧民族とたたかうかぎり、そのかぎりわれわれは、いつでも、どんな場合にも、他のだれよりも断固として彼らを支持する。というのは、われわれこそ抑圧にたいする最も勇敢で、最も一貫した反対者だからである。被抑圧民族のブルジョアジーが自分らのブルジョア民族主義を固執するかぎり、われわれはそれに反対する。抑圧民族の特権や暴力とたたかうとともに、われわれは、被抑圧民族が特権をもとめる志向をけっして大目に見ない。

もしわれわれが分離の権利というスローガンをかかげず、これを扇動のさいにとりあげなければ、われわれは抑圧民族のブルジョアジーだけでなく、封建地主や絶対主義をも利することになろう。この論拠は、カウツキーが早くからローザ・ルクセンブルクに反対して提起しているものであり、議論の余地のないものである。ローザ・ルクセンブルクは、ポーランドの民族主義的ブルジョアジーを「たすける」ことを恐れて、ロシアのマルクス主義者の綱領にある分離の権利を否定することにより、実際には、大ロシア人の黒百人組をたすけているのである。彼女は、実際には、大ロシア人の特権（と特権よりももっと悪いもの）にたいする日和見主義的妥協をたすけていることになる。

ポーランドの民族主義との闘争に心を奪われてしまって、ローザ・ルクセンブルクは、大ロシア人の民族主義を忘れているのである。ところが、この民族主義こそ、現在なにより恐るべきものであり、ブルジョア的というよりも封建的であり、民主主義とプロレタリア闘争の主要なブレーキなのである。被抑圧民族のブルジョア民族主義の場合には、どの民族主義にも抑圧に反対する一般民主主義的内容がある。そしてわれわれは、自民族の民族的排他性をめざす傾向とこれとを峻別し、ユダヤ人を圧迫しようとするポーランド・ブルジョアの傾向とたたかいながら、その他等々の

ことをしながら、この一般民主主義的内容を無条件に支持する。

これは、ブルジョアと小市民の見地からすると「非実際的」であるが、実はこれこそ民族問題におけるただひとつ実際的な、原則的な、民主主義と自由とプロレタリアの同盟を実際にたすける政策なのである。

すべての民族に分離権を承認すること、あらゆる不平等、あらゆる特権、あらゆる排他的地位をとりのぞく見地から、それぞれの具体的な分離問題を評価することが必要である。

抑圧民族の立場をとってみよう。他の諸民族を抑圧する民族は、自由でありうるだろうか？ ありえない。大ロシア住民の自由のためには、＊このような抑圧との闘争が必要である。被抑圧民族の運動を抑圧してきた長い歴史、何世紀にもわたる歴史、「上層」諸階級がおこなっているこの抑圧の系統的な宣伝は、大ロシア人自身の事業にたいして、偏見その他のかたちで巨大な障害をつくりだした。

＊ パリにいるエリ・ヴェとかいう人には、このことばは、非マルクス主義的なものと思われるらしい。このエリ・ヴェは滑稽なほど「利口すぎる」。この「利口すぎる」エリ・ヴェは、わが最低綱領から「住民」とか「人民」とかいうことばを追求する（階級闘争の見地から！）研究を執筆しようとしているらしい。

大ロシア人の黒百人組は、これらの偏見を意識的に支持し、あおりたてている。大ロシア人ブルジョアジーは、この偏見と妥協し、またはそれに調子をあわせている。大ロシア人プロレタリアートは、これらの偏見と系統的にたたかわなければ、自分自身の目的を実現することができないし、自由への道をひらくこともできない。

ロシアでは、自立した民族国家の創設は、これまでのところ、大ロシア民族だけの特権に終わっている。われわれ大ロシア人プロレタリアは、どのような特権も擁護しないし、この特権も擁護しない。われわれはこの国家を基盤として闘争し、またこの国家のすべての民族の労働者を団結させる。われわれは、民族的発展でどれか特定の道を進むと確約することはできない。われわれは、あらゆる可能な道をつうじて、自分の階級的目標にむかって進んでいく。

しかし、あらゆる民族主義とたたかい、またいろいろの民族の労働者の平等を主張することなしには、この目標にむかって進むことはできない。たとえばウクライナが独立国家を形成する運命にあるかどうかは、まえもって知ることのできない一千もの要因にかかっている。そこでわれわれは、むだな「推測」などやらずに、まったく疑う余地のないこと、すなわち、ウクライナがこうした国家をつくる権利をもっていることをはっきりと支持する。われわれは、

この権利を尊重する。われわれは、ウクライナ人にたいする大ロシア人の特権を支持しない。われわれは、ウクライナ人の権利を承認し、どの民族のものであれ国家的特権を否定するという精神で大衆を教育する。

すべての国がブルジョア革命の時期に経験したいろいろな飛躍のさいに、民族国家をつくる権利をめぐっていろいろな衝突や闘争の起こることは可能であり、予想されることである。われわれプロレタリアは、あらかじめ大ロシア人の特権の反対者であることを宣言し、この方向にむかってわれわれのすべての宣伝と扇動をおこなう。

ローザ・ルクセンブルクは、「実際主義」を追うあまり、大ロシア人プロレタリアートにも異民族のプロレタリアートにも負わされている主要な実際的任務、すなわち、すべての国家的・民族的特権に反対して、あらゆる民族は自分の民族国家をつくる同等の権利をもつとする日常の扇動と宣伝をおこなう任務を見おとしてしまったのである。この任務は、民族問題におけるわれわれの（現在の）主要な任務である。なぜなら、この方法によってのみ、われわれは民主主義の利益と、あらゆる民族のすべてのプロレタリアの同権にもとづく同盟の利益を擁護できるからである。

このような宣伝は、抑圧者である大ロシア人の見地からしても、被抑圧民族のブルジョアジーの見地からしても「非実際的」であるかもしれない（前者も後者も、社会民主党の「はっきりしない」点をとがめて、はっきりしたイエスかノーかを要求しているのだ）。だが実際には、この宣伝こそ、そしてこの宣伝だけが、大衆の真に民主主義的な、真に社会主義的な教育を保証しているのである。このような宣伝だけが、ロシアがこのまま多民族国家である場合には、ロシアにおける民族和合の最大の可能性を保証するであろうし、分割の問題が起こる場合には、いろいろの民族国家にたいして最も平和な（そしてプロレタリアの階級闘争に害のない）分割を保証するであろう。

民族問題におけるこの唯一のプロレタリア的政策を、より具体的に説明するために、われわれは、大ロシア人自由主義派の「民族自決」にたいする態度、およびノルウェーのスウェーデンからの分離の実例を検討しよう。

五　民族問題における自由主義的ブルジョアジーと社会主義的日和見主義者

われわれがすでに見たように、ローザ・ルクセンブルクは、自決権の承認が被抑圧民族のブルジョア民族主義を支持するに等しいという論拠を、ロシアのマルクス主義者の

綱領とたたかうさいの自分の主要な「切り札」のひとつにしている。他方では、ローザ・ルクセンブルクはつぎのように言っている。もしこの権利を、諸民族にくわえられるあらゆる暴力に反対する闘争としてだけ理解するならば、綱領のこの特別の条項は必要がない、なぜなら、社会民主党は、一般に、あらゆる民族的暴力と民族的不平等に反対であるから、と。

第一の論拠は、約二〇年前にカウツキーが反駁できないほどはっきり指摘したように、自分の民族主義を他人に転嫁するものである。というのは、被抑圧民族のブルジョアジーの民族主義を恐れるあまり、ローザ・ルクセンブルクは、事実上、大ロシア人の黒百人組的民族主義を利することになるからである！　彼女の第二の論拠は、じつは、民族同権の承認が分離権の承認をふくむかどうかという問題を、臆病にも避けることである。もしふくむのなら、ローザ・ルクセンブルクは、われわれの綱領の第九項が原則的に正しいと認めることになる。もしふくまないのなら、彼女は民族同権を認めないことになる。ここでは避けたり逃げ口上をつかったりしてもどうにもならない！

ところで、右に述べた論拠や、それに類するあらゆる論拠を点検する最良の方法は、いろいろの社会階級のこの問題にたいする態度を研究することである。マルクス主義者にとっては、このような点検は必須である。客観的なものに依拠し、この点にかんする諸階級の相互関係をとりあげなければならない。ローザ・ルクセンブルクは、そうせずに、形而上学、抽象性、ありきたりな事、大ざっぱ等々、彼女が自分の論敵が陥っていると非難しようとむだ骨をおったあの誤りに陥っているのである。

ここで問題にされているのは、ロシアのマルクス主義者、すなわち、ロシアのすべての民族のマルクス主義者の綱領である。ロシアの支配階級の立場を検討すべきではなかろうか？

「官僚制」（不正確なことばで恐縮だが）と連合貴族評議会型の封建地主の立場は、周知のとおり、民族の同権も自決権も無条件に否定する立場である。農奴制の時代からうけついだ古いスローガン——専制政治、正教、民族。しかも民族とは大ロシア民族だけをさしている。ウクライナ人さえ「異民族」だと宣言され、彼らの母語さえ迫害されている。

ロシアのブルジョアジー、なるほどごくわずかばかりであるが、ともかく権力に、すなわち「六月三日」〔(三)〕の立法と行政の体制に参加する「使命をさずかった」ブルジョアジーを見よう。オクチャブリスト〔(三)〕がこの問題で実際には右翼に追随していることについては、多く語るまでもない。残

念ながら、若干のマルクス主義者は、自由主義的な大ロシア人ブルジョアジー、進歩派[140]、カデット[139]の立場に、ほとんど注意をはらっていない。ところでこの立場を研究せず、それを熟考しないものは、かならず、民族自決権を討議するさいに、抽象性や空疎なおしゃべりという誤りに陥る。

昨年の『プラウダ』[133]と『レーチ』[134]の論争は、「不愉快な」問題に直接回答するのを外交的に避けることにかけてはあれほど達者な、カデット党のこの中心機関紙に、ともかくいくつかの貴重な告白をさせた。もめごとは一九一三年の夏リヴォフでひらかれた全ウクライナ学生大会[135]から起こった。折紙つきの「ウクライナ通」で、『レーチ』のウクライナ人寄稿者のモギリャンスキー氏は、同紙に一文をのせ、そのなかでウクライナの分離に、すなわち、民族主義的社会民主主義者ドンツォフが擁護し、この学生大会が承認した思想に、このうえなくひどい毒舌（「たわごと」だとか「冒険主義」だとかいう）をあびせかけた。

『ラボーチャヤ・プラウダ』[136]は、ドンツォフ氏にはいささかも同調せずに、彼は民族主義的社会民主主義者であって、多くのウクライナのマルクス主義者は彼の意見に同意しないとあけすけに指摘し、同時に、『レーチ』の論調、もっと正確にいえば『レーチ』の原則的な問題の出し方は、大ロシア人の民主主義者または民主主義者という評判をとりたがっている人間としてはまったく無作法な許しがたいことだ、と言明した[137]。『レーチ』が、ドンツォフ氏一派の言うことを正面から論駁するならするがいい。だが、自称民主主義派のこの大ロシア人機関紙が、分離の自由、分離の権利を忘れているのは、原則的に許しがたいことである。

数ヵ月ののち、モギリャンスキー氏は、リヴォフで発行されているウクライナ語の新聞『シリャヒ』[138]でドンツォフ氏が反駁しているのを知り、『レーチ』第三三一号に「釈明」をのせた。ところでドンツォフ氏は、「『レーチ』の排外主義的論難に、しかるべく汚名をきせた（烙印をおした？）のは、ロシア社会民主党の新聞だけである」と言っている。モギリャンスキー氏の「釈明」は、「ドンツォフ氏の解決策を批判すること」は「民族自決権を否定することと縁もゆかりもない」と、三回も繰りかえしたことにつきる。

モギリャンスキー氏はこう書いている、「『民族自決権』もなにか批判を許さない物神ではない（謹聴!!）と言わなければならない。民族の生活の不健全な諸条件は、民族自決上、不健全な傾向を生みだすかもしれない。そしてこれらの不健全な傾向を摘発することはまだ、民族自決権を否定することを意味しない。」

ごらんのように、この自由主義者の「物神」うんぬんと

いう文句は、ローザ・ルクセンブルクの文句とまったく同じ主旨のものである。モギリャンスキー氏が、政治的自決権すなわち分離権を承認するかどうかという質問に、直接に回答することを避けたがったことは、明らかである。

『プロレタールスカヤ・プラウダ』[39]（第四号、一九一三年一二月一一日）は、モギリャンスキー氏にもカデット党にも、この質問をあからさまに提起した[40]。

『レーチ』は、そこで（第三四〇号）、この質問に答えた無署名の声明、すなわち編集局の正式声明をのせた。この答えは次の三点に要約できる。

（一）カデット党の綱領第一一条には、率直に、正確に、明確に、民族の「自由な文化的自決権」が述べてある。

（二）『レーチ』の主張によれば、『プロレタールスカヤ・プラウダ』は、自決と分離主義、すなわちあれこれの民族の分離とを「どうにもならないほど混同している。」

（三）「実際にカデットはロシア国家から『民族が分離する』権利を擁護しようとしたことはかつてなかった。」（『プロレタールスカヤ・プラウダ』第一二号、一九一三年一二月二〇日の論文『国権的自由主義と民族自決権』を参照〔全集、第二〇巻、四六ページ〕）

『レーチ』の声明の第二点に、まず注意をむけよう。この第二点が、セムコフスキー、リープマン、ユルケヴィチその他の日和見主義者の諸君に明らかに示していることは、「自決」の意味が「不明瞭」だとか「不明確」だとか彼らがののしり騒ぐのは、実際には、すなわちロシアの諸階級と階級闘争の客観的相互関係からすれば、自由主義的・君主主義的ブルジョアジーの言っていることのたんなるくりかえしだということである！

『プロレタールスカヤ・プラウダ』は、そこで『レーチ』の教養ある「立憲民主主義者」諸君に、次の三つの質問を提出した。（一）国際民主主義運動の全歴史のなかで、とくに一九世紀のなかばから、民族自決が、ほかならぬ政治的自決の意味に、すなわち自立した民族国家を創設する権利の意味に解されていることを、諸君は否定するのか？（二）一八九六年のロンドン国際社会主義者大会が採択した有名な決議も同じ意味をもっていることを、諸君は否定するのか？（三）すでに一九〇二年に自決のことを書いているプレハーノフが、このことばをほかならぬ政治的自決の意味に解していたことを、諸君は否定するのか？——『プロレタールスカヤ・プラウダ』がこの三つの質問を提出すると、カデットの諸君はだまってしまった!!

彼らは一言も答えなかった。なぜなら、彼らにはなにも言うことがなかったからである。彼らは無言のうちに、『プロレタールスカヤ・プラウダ』が無条件に正しいと認

めざるをえなかった。

「自決」という概念があいまいだとか、社会民主主義者がこれと分離とを「どうにもならないほど混同している」といって自由主義者がわめくのは、問題を「混乱させ」、民主主義勢力によって一般に確立されている原則を避けようとする努力にほかならない。もしセムコフスキーやリープマンやユルケヴィチの諸君がこんなにも物知らずでなかったのなら、労働者のまえで自由主義者のようにふるまうことは彼らの良心が許さなかったであろう。

だが、さきへすすもう。『プロレタールスカヤ・プラウダ』は、『レーチ』に、「文化的自決」ということばがカデットの綱領ではまさに政治的自治の否定という意味をもっている、ということを認めさせた。

「実際にカデットは、ロシア国家から『民族が分離』する権利を擁護しようとしたことはかつてなかった」――『プロレタールスカヤ・プラウダ』が、『レーチ』のこのことばをわがカデットの「誠実さ」の模範として、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(九八)と『ゼムシチナ』(二六二)に推薦したことは、理由のないことではない。『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は、第一三五六三号で、一方では「ジッド」〔ユダヤ人の蔑称〕に言及し、カデットにあらゆる皮肉を言う機会をのがさないのはもちろんであるが、つぎのようにも言明している。

「社会民主主義者にとっては政治的英知の公理であることが」(すなわち民族の自決権、分離権の承認が)、「今日ではカデットのあいだでさえ意見の相違をよびおこしはじめている。」

カデットは、「ロシア国家から民族が分離する権利を擁護しようとしたことはかつてなかった」と宣言することによって、原則的には、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』とまったく同じような立場をとってしまったことになる。この点にこそ、カデットの国権的自由主義、彼らとプリシケヴィチ一派との親近性、彼らのプリシケヴィチ一派への思想的＝政治的および実践的＝政治的依存性がよってたつ基礎のひとつがある。『プロレタールスカヤ・プラウダ』は、つぎのように書いている。「カデットの諸君は、歴史を学んで、『つかまえたが最後、離さない』(二六三)というプリシケヴィチらの昔ながらの権利を実際に行使した結果がしばしば、どんな――穏やかなことばづかいをすれば――『ポグロム(二六四)ふうの』作用をもたらしたかを、よく知っている。」カデットは、プリシケヴィチ一派の無制限の権力の封建的な起原と性格をよく知っているが、それにもかかわらず、この〔封建〕階級によってつくりだされた関係と境界を完全に自分の基盤としている。カデットの諸君は、この階級によってつくりだされるか、定められるかした関係や境界のな

かには、多くの非ヨーロッパ的なもの、反ヨーロッパ的なもの(もし日本人や中国人を不当に軽視するようにきこえなければ、アジア的なものと言いたいところである)があるのをよく知っていながら、それを限界と認め、それをこえようとしない。

これは、プリシケヴィチ一派に順応し、彼らに屈従し、彼らの地位をゆるがしはしないかと恐れ、人民運動と民主主義派から彼らを守ってやることである。『プロレタールスカヤ・プラウダ』は、こう書いている、「これは、実際には、農奴主の利益に順応し、支配民族の最悪の民族主義的偏見と系統的にたたかわずに、それに迎合することを意味している」と。

カデットは、歴史を知り、民主主義者だと自称しているだけに、今日、東部ヨーロッパの特徴にもアジアの特徴にもなっている民主主義運動、資本主義的文明諸国の型にしたがって前者をも後者をもつくりかえようとつとめている民主主義運動、――この運動が封建時代によって、すなわちプリシケヴィチ一派が無制限の権力をふるい、ブルジョアジーと小ブルジョアジーの広範な層が無権利状態にあった時代によって決められた境界を、かならずそのままにしておかなければならないとは、さすがに断言しようとはしない。

ところで、『プロレタールスカヤ・プラウダ』と『レーチ』との論争によって提起された問題は、けっして文献上の問題にとどまるものではなく、現実の当面の政治問題にふれたものであったことを証明したのは、なかでも一九一四年三月二三―二五日にひらかれたカデット党の最近の協議会であった。『レーチ』(第八三号、一九一四年三月二六日)にのったこの会議の公式報告には、つぎのように述べられている。

「民族問題も、とくに活発に討議された。民族問題は以前よりももっと断固たる態度をとらなければならない、機の熟した、大きな要因であると、キエフ代表たちは指摘し、エヌ・ヴェ・ネクラソフとア・エム・コリュバキンもこれにくわわった。しかし」(この「しかし」はシチェドリンの「しかし」――「耳は額(ひたい)より上には伸びない」――と好一対だ)、「エフ・エフ・ココシキンは、綱領もこれまでの政治的経験も、『民族の政治的自決』という『どうにでも解釈できる定式』を、きわめて慎重に取り扱うことを要求していると指摘した。」

カデット協議会のこのきわめて注目すべき主張は、すべてのマルクス主義者、すべての民主主義者の重大な関心をひく価値がある。(ついでに注意しておくが、大の事情通であるようにみえる、またココシキン氏の思想を疑いもな

く正しく伝えている『キエフスカヤ・ムィスリ』(100)は、彼が国家の「崩壊」の危険を——いうまでもなくその論敵への警告として——とくに強調したとつけくわえている。）

『レーチ』の公式報告は、できるだけ内幕を見せないよう、できるだけものを隠しておくように、巧妙にずるくつくられている。だがそれでも、このカデット協議会の席上で起こったことは、だいたい明らかである。代議員——ウクライナの事情に通じている自由主義的ブルジョア、さらにカデット「左派」は、まさに政治的民族自決の問題を提起したのである。でなければ、ココシキン氏がこの「定式」を「慎重に取り扱う」ように訴える必要はなかったであろう。

カデット協議会の代議員たちにはいうまでもなく知られていたように、カデットの綱領にあるのは、まさに政治的自決ではなくて「文化的」自決である。つまり、ココシキン氏は、ウクライナの代議員やカデット左派に対抗して綱領を擁護し、「政治的」自決に反対して「文化的」自決を擁護しているのである。まったく明らかなことだが、ココシキン氏は、「政治的」自決に反対し、「国家の崩壊」の危険をもちだし、「政治的」自決の定式を「どうにでも解釈できる」ものだと呼ぶことによって（ローザ・ルクセンブルクとまったく同じように！）、大ロシア人の国権的自由主義を擁護し、カデット党のより「左翼的な」またはより民主主義的な分子に反対し、またウクライナのブルジョアジーに反対したのである。

『レーチ』の報告中「しかし」という裏切的なことばでもわかるように、ココシキン氏はこのカデット協議会で勝利をおさめた。大ロシア人の国権的自由主義がカデットのあいだで凱歌をあげたのである。この勝利は、カデットにつづいて、「民族の政治的自決という、どうにでも解釈できる定式」を同じく恐れはじめた、ロシア・マルクス主義者のあいだの少数の愚かな連中の頭をはっきりさせるのを助けはしないだろうか？

「しかし」事の本質を明らかにするために、ココシキン氏の考えの筋道を検討してみよう。ココシキン氏は、「これまでの政治的経験」（すなわち、明らかに一九〇五年の経験。このとき大ロシア人ブルジョアジーは自分らの民族的特権がどうなるかを恐れ、自分が恐れたためにひいてはカデット党をも恐れさせた）を引合いにだし、また「国家の崩壊」の危険をもちだすことによって、政治的自決とは分離して自立した民族国家を創設する権利を意味するものにほかならないということを、よく理解していることを明らかにした。では、一般に民主主義の見地から、とくにプロレタリアートの階級闘争の見地からは、ココシキン氏の

懸念をどう見るべきであろうか？

ココシキン氏は、分離の権利を承認することは「国家の崩壊」の危険を大きくする、とわれわれに信じさせようとしている。これは、「つかまえたが最後、離さない」ことをモットーとする巡査ムィムレツォフの見地である。民主主義一般の見地からすれば、まさに逆である。分離権を承認することは、「国家の崩壊」の危険を減らすのである。

ココシキン氏は、まったく民族主義者の精神にたって考察している。民族主義者は、最近の大会で、「マゼッパ・派」[36]のウクライナ人を粉砕した。サヴェンコ氏とその一派はこう叫んだ。――「ウクライナ人の運動は、ウクライナとロシアとの結びつきをよわめるおそれがある。なぜなら、オーストリアは、その親ウクライナ主義で、ウクライナ人とオーストリア人との結びつきをつよめているからである!!」と。サヴェンコ氏一派がオーストリアがつかっているといって非難しているのと同じ方法で、すなわち、ウクライナ人に母語をつかう自由、自治、自治議会、その他を許すという方法で、ロシアがウクライナとの結びつきを「つよめ」ようと試みることができないというのは、なぜか？　この理由は、ついに明らかにされなかった。

サヴェンコ一派とココシキン一派の考え方は、まさしく同種のものであり、純論理的見地から見ると同じように滑稽でばかげている。ウクライナ民族がどこかある国でより多くの自由を手にいれればいれるほど、ウクライナ民族とその国との結びつきがかたくなるということは、明らかなことではないか？　民主主義のすべての前提をすっかりすてないかぎり、この自明の真理に反対するわけにはいかないように思われる。民族がもつ自由には、分離の自由、自立した民族国家を創設する自由よりも、大きなものがいったいあるだろうか？

自由主義者（とわけがわからないため彼らに付和雷同している連中）によってこうも紛糾させられたこの問題をもうすこしわかりやすくするために、最も簡単な例をあげてみよう。離婚の問題をとってみよう。ローザ・ルクセンブルクは、その論文で、中央集権的民主主義国家は、個々の部分の自治を十分に認めるとともに、最も重要な立法部門――離婚についての立法もその一つであるが――は、すべて中央議会の所管としておくべきである、と述べている。民主主義国家の中央権力が離婚の自由を保障しようと、このように気をくばっているのは、まったく当然である。反動派は離婚の自由に反対し、この問題を「慎重に取り扱う」ように呼びかけ、またこれは「家庭の崩壊」を意味すると叫んでいる。だが、民主主義派はつぎのように考える。――反動派は偽善者だ。彼らは、実際には警察と官僚制度

の無制限の権力、男性の特権と婦人にたいする最悪の抑圧を擁護しているのだ。離婚の自由は、実際には家庭の絆(きずな)の「崩壊」を意味するものではなく、逆にそれを文明社会でただ一つ可能で、堅固な民主主義的基礎にもとづいて強化するものである、と。

自決の自由、すなわち分離の自由を支持するものを、分離主義を奨励するものだといって責めることは、離婚の自由を支持するものを、家庭の絆の破壊を奨励するものだといって責めるのと同様に、ばかげたことであり、偽善である。ブルジョア社会で離婚の自由に反対するものが、ブルジョア的結婚によって立つ特権と打算の擁護者であるのと同じように、資本主義国家で、自決の自由、すなわち民族の分離の自由を否定することは、支配民族の特権と民主主義的統治方法をふみにじる警察的統治方法とを擁護することである。

たしかに、資本主義社会のあらゆる関係によってひきおこされる政治的術策から、時として、国会議員や政治評論家が、あれこれの民族の分離について、ひどく軽率な、まったくばかげた駄弁をろうすることがある。しかしそんな駄弁におどかされる（あるいはおどかされたふりをする）のは、反動派だけである。民主主義の見地に立つもの、すなわち、国家的な諸問題は人民大衆が決定するという見地に立つものは、政治屋の駄弁と大衆の決定とのあいだには「どえらい規模の距離」(三四)があることを、非常によく知っている。人民大衆は日常の経験からして、地理的経済的結びつきの意義や、大市場と大国家の長所をよく知っている。したがって、彼らは、民族的抑圧と民族的軋轢(あつれき)のために、共同の生活がまったく耐えがたくなり、ありとあらゆる経済的関係が妨げられるようになる場合にはじめて、分離に同意する。そしてこのような場合には、資本主義的発展と階級闘争の自由とを代表しているのは、ほかならぬ分離しようとする人々であろう。

要するに、どの面からココシキン氏の議論を研究してみても、それは愚の骨頂であり、民主主義の原則を嘲笑するものである。だがこの議論には、一定の論理がある。それは、大ロシア人ブルジョアジーの階級的利害の論理である。ココシキン氏は、カデット党の大多数と同じように、このブルジョアジーの財布の下僕である。彼は、一般にブルジョアジーの特権を、とくに国家的特権を擁護しているのである。彼はプリシケヴィチとともに、プリシケヴィチとならんで、それを擁護している。ただ彼らの違いは、プリシケヴィチが農奴制の棍棒(こん)のほうを信用しているのに、ココシキン一派は、この棍棒が一九〇五年にひどくへし折られたことを知り、大衆をあざむくブルジョア的方法、たとえ

ば小市民や農民を「国家の崩壊」というお化けをもちだしておどしたり、「人民の自由」と歴史的伝統との結合という美辞麗句でだましたりする方法のほうをあてにしている点にある。

政治的民族自決の原則に自由主義者がいだいている敵意の現実の階級的意義は、ただひとつ、国権的自由主義、大ロシア人ブルジョアジーの国家的特権の擁護である。そして、六月三日体制の時代である。ほかならぬ今日、民族自決権に敵対している、ロシア・マルクス主義者のあいだの日和見主義者、すなわち、解党主義者のセムコフスキー、ブンド派のリープマン、ウクライナの小ブルジョアのユルケヴィチなどは、実際には、国権的自由主義派の尻にくっついて、労働者階級を国権的自由主義の思想で堕落させているのである。

労働者階級の利益のため、資本主義にたいするその闘争の利益のためには、あらゆる民族の労働者の完全な連帯と最も緊密な統一が必要であり、どの民族のブルジョアジーの民族主義的政策にたいしても反撃をくわえる必要がある。したがって、社会民主主義者が被抑圧民族の自決権すなわち分離権を否定することも、社会民主主義者が被抑圧民族のブルジョアジーのあらゆる民族的要求を支持することも、プロレタリア政治の諸任務からの逸脱であり、労働者をブルジョアジーの政治に従属させることになる。賃金労働者にとっては、自分を主として搾取するのが、異民族のブルジョアジーではなくて大ロシア人のブルジョアジーであろうと、あるいはユダヤ人のブルジョアジーではなくてポーランド人のブルジョアジーであろうと、同じことである。自分の階級の利益を自覚した賃金労働者は、大ロシア人資本家の国家的特権にたいしても、自分らが国家的特権をにぎれば地上に楽園がうちたてられるというポーランド人またはウクライナ人資本家の約束にたいしても、無関心である。資本主義は、多民族国家の場合にも、個々の一民族国家の場合にも、いずれにせよ発展しているし、今後も発展するだろう。

いずれにしても、賃金労働者は搾取の対象であり、プロレタリアートが搾取に反対して首尾よくたたかうためには、プロレタリアートが民族主義に拘束されていないこと、優勢を占めようとして諸民族のブルジョアジーが闘争するにあたって、いわば完全な中立をまもることが必要である。もし、どれかある民族のプロレタリアートが「自」民族のブルジョアジーの特権を、ほんのすこしでも支持しようものなら、かならず、他の民族のプロレタリアートの不信を買い、労働者の国際的な階級的連帯性をよわめ、労働者を分裂させ、ブルジョアジーを喜ばせるであろう。そして、

自決権または分離権を否定することは、かならず、実際には、支配民族の特権を支持することを意味する。

ノルウェーがスウェーデンから分離した具体的な例をとってみれば、われわれは、もっとはっきりとこの点を納得することができる。

六　ノルウェーのスウェーデンからの分離

ローザ・ルクセンブルクは、ほかならぬこの実例をとりあげて、つぎのように論じている。

「連邦関係の歴史における最近の事件であるノルウェーのスウェーデンからの分離――当時この問題は、社会愛国主義的なポーランド新聞（クラクフの『ナープシュド』(三〇七)を見よ）によって、国家的分離の志向のつよさと進歩性の喜ばしい現われとして、急いでとりあげられたものであるが――は、まもなく、連邦制度とそれから生じる国家的分離が、進歩性または民主主義の現われではないことを示す、顕著な証明に変わってしまった。スウェーデン王が退位させられ、ノルウェーから退去させられた、いわゆるノルウェー『革命』ののち、ノルウェー人は全国民投票によって共和制樹立の提案を正式にしりぞけて、きわめて平穏のうちに他の国王を選んだ。民族運動や独立まがいのものならなんでも浅薄に崇拝する連中が、『革命』と宣言したものは、農民とブルジョアの地方分立主義、すなわち、スウェーデンの貴族からおしつけられた国王のかわりに、自分の責任で『自分自身』の国王をもちたいという希望の現われにすぎず、したがってそれは、革命的精神とは縁もゆかりもない運動であった。同時に、このスウェーデン＝ノルウェー連合の分裂の歴史は、この場合もまた、それまでつづいた連邦というものが、どれほど純王朝的な利害の現われであったか、したがって、君主主義と反動の形態にすぎなかったということを、あらためて証明したのである。」（『評論』）

これは、ローザ・ルクセンブルクがこの点について言っていることを、そっくりそのまま書きうつしたものである!!　ほんとうの話、これくらいローザ・ルクセンブルクがはっきりと自分のたよりない立場をさらけだしたものはなかろう。

問題は、民族的構成の多様な国家の社会民主党にとって、自決権または分離権を承認する綱領が必要であるかどうかということであったし、いまもそうである。

だがローザ・ルクセンブルク自身がとりあげたこのノルウェーの例は、この問題についてなにを示しているか？

わが筆者は、『ナープシュド』に反対して、逃げ口上を言ったり、機知をひけらかしたり、悪口を言ったりしているが、この問題には答えていない!! ローザ・ルクセンブルクは、問題の本質については一言も言わないために、ありとあらゆることを口にしているのだ!!

たしかに、ノルウェーの小ブルジョアジーは、自分の責任で自分自身の国王をもちたいと願い、国民投票で共和制樹立の提案を否決して、きわめて悪い俗物的な性質を暴露した。たしかに、『ナープシュド』も、自分ではそれに気づいていないとしても、同じように悪い、同じように俗物的な性質を暴露している。

だが、いったい、これらすべてが、ここでの問題になんの関係があるのか?

ここで問題になっているのは、民族自決権とこの権利にたいする社会主義的プロレタリアートの態度ではないか! なぜローザ・ルクセンブルクは、この問題には答えずに、そのまわりをぐるぐるまわっているのか?

鼠にとって猫より強い獣はない、と言われている。ローザ・ルクセンブルクにとっては、どうやら「フラキ」より強い獣はないようである。「フラキ」というのは、「ポーランド社会党」(三六)、いわゆる革命派の俗称であり、クラクフの『ナープシュド』はこの「革命派」と同じ思想をいだいている。ローザ・ルクセンブルクは「この革命派」の民族主義との闘争にまったく目がくらんでいたので、『ナープシュド』以外のものは彼女の視界からすっかり姿を消してしまったのである。

ローザ・ルクセンブルクは、『ナープシュド』が「イエス」と言えば、ただちに「ノー」と宣言することを、自分の神聖な義務と考えている。そして、このようなやりくちによって、自分が『ナープシュド』に左右されていないどころか、かえって滑稽なほど「フラキ」に左右されていること、自分に、クラクフの蟻塚の見地よりいくらかでもふかく広い見地からものを見る能力のないことをさらけだした。しかも、彼女はまったくそれに考えおよばないのである。なるほど『ナープシュド』は、きわめてよくない、けっしてマルクス主義的でない機関紙である。だからといって、このことは、われわれがノルウェーの実例をとりあげた以上、それを本質的にマルクス主義的に検討する妨げとなるはずがない。

この実例をマルクス主義的に解明するために、われわれが検討しなければならないのは、ひどく恐ろしい「フラキ」の悪い性質ではなくて、まず第一に、ノルウェーのスウェーデンからの分離の具体的・歴史的特質と、第二に、この分離における両国のプロレタリアートの任務はなんであったかということでなければならない。

ノルウェーをスウェーデンに接近させる地理上、経済上ならびに言語上の結びつきは、大ロシア人と大ロシア人以外の多くのスラヴ民族との結びつきにおとらず緊密である。しかし、ノルウェーとスウェーデンの合同は自発的なものではなかった。だから、ローザ・ルクセンブルクが「連邦」と言っているのは、まったく的はずれである。彼女がこういうことを言ったのは、なにを言ってよいのかわからなかったからにすぎない。ノルウェーは、ナポレオン戦争時代に、ノルウェー人の意志に反して、君主がスウェーデンに譲り渡したものである。だからスウェーデン人は、ノルウェーを服従させるために、そこに軍隊をいれなければならなかった。

その後数十年にわたって、ノルウェーは非常に広範な自治（自分の議会など）を得ていたにもかかわらず、ノルウェーとスウェーデンの紛争は絶えまなくつづき、ノルウェー人は全力をあげてスウェーデン貴族の圧制をふりすてようとしてきた。ついに一九〇五年八月、彼らはそれをふりすてたのである。すなわち、ノルウェー議会が、スウェーデン王は今後ノルウェー王ではなくなったと決議し、そののちおこなわれた国民投票、すなわちノルウェー人民の投票では圧倒的多数（約二〇万票対数百票）がスウェーデンからの完全な分離に賛成投票した。スウェーデン人は、しばらくためらったのち、あきらめてこの分離の事実を認めた。

この例は、現在の経済的および政治的諸関係のもとでは、なにを基盤とすれば民族の分離は可能であるか、また実際になにがしばしばおこなわれているか、そして政治的な自由と民主主義の環境のもとでは、ときには分離はどのような形態をとるかということをわれわれに示している。

どのような社会民主主義者も、政治的自由と民主主義の問題など自分にとってどうでもよいことであるとあえて宣言しないかぎり（そういう場合には、もちろん彼は社会民主主義者ではなくなるが）、次のことを否定するわけにはいかないだろう。すなわち、この例は、民族の分離が原因になって起こるかもしれない紛争が「ロシアふうに」ではなくて、一九〇五年にノルウェーとスウェーデンのあいだで解決されたようなやり方でだけ解決されるように、組織的に宣伝し準備することが、自覚した労働者の義務であることを事実によって証明しているのである。民族自決権の承認という綱領的要求によって言いあらわされているのは、まさにこのことなのである。そこでローザ・ルクセンブルクは、ノルウェーの俗物どもの小市民性やクラクフの『ナープシュド』を激しく攻撃して、自分の理論にとって不愉快な事実を言いのがれなければならなかったのである。な

ぜなら、この歴史的事実は、民族自決権が「空想」であるとか、「黄金の皿で食事をする」権利と同じことである等等という、彼女の言いぐさを断然くつがえしていることを、彼女はよく知っているからである。このような言いぐさは、東ヨーロッパの諸民族間の現在の力関係が不変なものだという、ひとりよがりな、日和見主義的な信念をあらわしているにすぎない。

さきへすすもう。ほかのあらゆる問題の場合と同じように、民族自決の問題で、なによりもわれわれの関心をひくのは、民族の内部におけるプロレタリアートの自決である。ローザ・ルクセンブルクは、この問題をも遠慮がちに避けている。なぜなら、彼女自身が選んだノルウェーの例にもとづいてこの問題を検討することが、彼女の「理論」にとってきわめて不愉快なことを感じているからである。

ノルウェーとスウェーデンのプロレタリアートは、分離の紛争のさいに、どんな態度をとったか、またどんな態度をとるべきであったか？　ノルウェーの自覚した労働者は、分離したのちにはもちろん、共和制に賛成投票すべきであったろう。*もし反対投票した社会主義者があったとすれば、それは、ヨーロッパの社会主義のうちには、時には、きわめて多くの愚鈍な俗物的な日和見主義があることを証明するだけのことである。この点については、二つの意見はありえない。しかしわれわれがこの点にふれたのは、ローザ・ルクセンブルクが要点のはずれたおしゃべりで問題をもみ消そうとしているからにすぎない。われわれは、ノルウェー社会民主主義者のノルウェーの社会主義的綱領がノルウェー社会民主主義者に分離問題について一つのきまった見解をもつ義務を負わせていたかどうか知らない。かりにそうでないとしよう。ノルウェー社会主義者は、ノルウェーの自治が自由な階級闘争のためにどの程度十分なものであったか、また、スウェーデン貴族との絶えまない衝突と紛争がどれだけ経済生活の自由を妨げていたかという問題を、未解決のままにしていたとしよう。それにしても、スウェーデンの貴族に反対し、ノルウェーの農民的民主主義派の勢力（それがどんなに小市民的に偏狭であったにしても）を支持することがノルウェー・プロレタリアートの義務であったという事実は、争えない。

* もしノルウェー民族の大多数が君主制に賛成し、プロレタリアートが共和制を支持したとすれば、その場合には、プロレタリアートには次の二つの道がひらけていたわけである。すなわち、もしその条件が成熟していたなら、革命をおこなうこと、さもなければ、大多数の意思に服して長期の宣伝・扇動活動をおこなうこと。

スウェーデンのプロレタリアートはどうか？　スウェー

デンの坊主の助けをうけているスウェーデンの地主が、ノルウェーにたいする戦争を宣伝していたことは周知のことである。そしてノルウェーはスウェーデンよりはるかに弱く、すでにスウェーデンの侵入にあっているし、またスウェーデン貴族は自国内にきわめて威信があるので、この戦争宣伝は非常に重大な脅威であった。「政治的民族自決というどうにでも解決できる定式」を「慎重に取り扱う」べきだと訴え、「国家の崩壊」の危険を喧伝し、また「人民の自由」とスウェーデン貴族の伝統とが両立すると説くことによって、スウェーデン版のココシキン一派が長いあいだ熱心にスウェーデンの大衆を堕落させていたことは、確かである。もしスウェーデンの社会民主党が、地主的イデオロギーおよび政策とも、「ココシキン的」イデオロギーおよび政策とも全力をあげてたたかわなかったなら、また彼らが諸民族の同権一般（これにはココシキン一派も賛成している）のほかに、民族自決権とノルウェーの分離の自由をも主張しなかったなら、彼らが社会主義の大業と民主主義の大業を裏切ることになるということは、いささかの疑う余地もない。

スウェーデンの労働者がノルウェー人の分離権を承認したので、ノルウェーとスウェーデンの労働者の緊密な同盟、彼らの完全な同志的な階級的連帯性は力をくわえた。なぜなら、ノルウェー労働者は、スウェーデン労働者がスウェーデンの民族主義にかぶれていないということ、ノルウェーのプロレタリアとの友好をスウェーデンの労働者はスウェーデンのブルジョアジーや貴族の特権よりも重視しているということを、納得するようになったからである。ヨーロッパの君主たちとスウェーデンの貴族からおしつけられていた結びつきが解かれたことは、スウェーデンの労働者とノルウェーの労働者との結びつきをつよめた。スウェーデンの労働者は、ブルジョア政治のあらゆる変遷をつうじて——ブルジョア的諸関係を基礎としては、スウェーデン人にたいするノルウェー人の強制的従属の復活はまったくありうることである！——彼らがスウェーデンのブルジョアジーともノルウェーのブルジョアジーともたたかうさいに、両民族の労働者の完全な同権と階級的連帯性を保持し、まもりとおせることを実証した。

「フラキ」はローザ・ルクセンブルクとわれわれとの意見の不一致を、ポーランド社会民主党に反対するために「利用」しようとときどき試みているが、それは根拠がないだけでなく、まったくふまじめですらあることが、とりわけ、以上のことから明らかである。「フラキ」はプロレタリア政党でもなければ、社会主義政党でもなく、小ブルジョア民主主義政党であり、ポーランドの社会革命党のよ

うなものである。ロシア社会民主党とこの党のあいだには、これまでどんな統一も問題にならなかったし、また問題になるはずもなかった。逆に、ロシアの社会民主主義者のなかで、ポーランド社会民主党との接近と結合を「後悔」したものは、だれもなかった。民族主義的な渇望と熱狂にみちみちているポーランドに、真のマルクス主義的な党、真にプロレタリア的な党をはじめてつくりあげたのは、ポーランド社会民主主義者の偉大な歴史的功績である。だが、ポーランドの社会民主主義者の功績が偉大な功績であるのは、ローザ・ルクセンブルクが、ロシア・マルクス主義者の綱領第九項に反対してナンセンスを述べたという事情によるものではなく、このような嘆かわしい事情があるにもかかわらず、そうなのである。

「自決権」は、ポーランド社会民主党にとっては、もちろんロシアの党ほどに重要ではない。民族主義で目のくらんだポーランドの小ブルジョアジーとの闘争が、ポーランドの社会民主主義者を特別な（ときには、おそらくいささか度をすごした）熱心さで「行きすぎる」ようにしたことは、まったく当然である。ロシアのマルクス主義者はだれひとり、ポーランド社会民主主義者がポーランドの分離に反対したといって、非難しようと考えたりしたことはない。ただこれらの社会民主主義者が誤りをおかすことになるのは、ローザ・ルクセンブルクのように、ロシアのマルクス主義者の綱領のなかで自決権を承認する必要を否定しようとするときである。

このことは、本質的にいって、クラクフの見地からみて当然な関係を、大ロシア人をふくむロシアのすべての民族にあてはめることを意味する。それは全ロシアの見地にたつ社会民主主義者でも、国際的見地にたつ社会民主主義者でもなくて、「ポーランド民族主義者の裏がえし」になることを意味する。

なぜなら、国際社会民主主義は、まさに民族自決権の承認に立脚しているからである。つぎにこの問題に移ろう。

七　一八九六年のロンドン国際大会の決定

この決定はつぎのように述べている。

「本大会は宣言する。本大会は、すべての民族の完全な自決権（Selbstbestimmungsrecht）に賛成し、現在、軍事的、民族的その他の専制の抑圧のもとに苦しんでいるあらゆる国の労働者に同情する。本大会は、これらすべての国の労働者に、全世界の自覚した（Klassenbewusste＝自分たちの階級の利害を自覚している）労働

者の隊列にくわわり、国際資本主義にうちかって国際社会民主主義運動の目的を実現するために、彼らとともにたたかうことを呼びかける。*」

* ロンドン大会のドイツ語公式報告書『一八九六年七月二七日から八月一日までロンドンでひらかれた、国際社会主義労働者および労働組合〔第二インタナショナル〕大会の議事と決議』、ベルリン、一八九六年、一八ページを参照。国際大会の決議をのせたロシア語のパンフレットがあるが、それには「自決」としないで「自治」と誤訳している。

すでにわれわれが指摘したように、わが日和見主義者たち、セムコフスキー、リープマン、ユルケヴィチの諸君は、この決議を全然知らない。しかし、ローザ・ルクセンブルクはそれを知っていて、その全文を引用しているが、そのなかにはわが綱領にあるのと同じ「自決」という表現がある。では、ローザ・ルクセンブルクは、彼女の「独創的な」理論をはばんでいるこの障害物をどうやってとりのぞいているのか？

なに、まったく簡単だ。〔彼女はこう言っている〕……ここでは重点は決議の後半にある……その部分は宣言的性格をもっている……誤解ででもなければ、それを引合いに出せるはずがない!!

わが筆者の無力と困惑は、まったく驚くべきものである。卑怯にも首尾一貫した民主主義的、社会主義的な綱領的条項に反対する直接の討論を避けながら、これらの条項はただ宣言的性格をもつにすぎないと言っているのは、通常、日和見主義者だけである。ローザ・ルクセンブルクが、こんどは、セムコフスキー、リープマン、ユルケヴィチなどの嘆かわしい仲間になってしまったことは、明らかに理由のないことではない。ローザ・ルクセンブルクは、上述の決議を正しいと考えるのか誤りと考えるのかを、率直に声明する決心がつかない。彼女は、この決議の後半まで読んでいったときには、もうその前半を忘れてしまうような読者、またはこのロンドン大会にさきだって社会主義新聞でおこなわれた討論のことは、なにも聞いていないような読者、そういう不注意であるか、事情に通じていない読者をあてにしているかのように、逃げ口上をつかったり自分の考えを隠したりしている。

しかし、もしローザ・ルクセンブルクが、ロシアの自覚した労働者をまえにして、このような重要な原則問題にかんするインタナショナルの決議を批判的に検討することさえせずに、この決議をやすやすとふみにじりおおせると思ったら、大きなまちがいである。

ローザ・ルクセンブルクの見解は、ロンドン大会にさきだっておこなわれた討論——主として、ドイツ・マルクス

主義者の機関誌『ノイエ・ツァイト』でおこなわれた――のなかで発表されたが、しかもこの見解は、実質上、インタナショナルで敗北をこうむったのである！　ここにこの問題の核心があるので、ロシアの読者はとくにこの点を念頭におかなければならない。

討論はポーランド独立の問題についておこなわれ、次の三つの見解がのべられた。

(一)「フラキ」の見解でヘッケルが彼らを代表して発言した。彼らは、インタナショナルがポーランドの独立要求を、その綱領のなかで認めることを要求した。この提案はうけいれられなかった。この見解はインタナショナルで敗北をなめた。

(二)ローザ・ルクセンブルクの見解。すなわち、ポーランドの社会主義者はポーランドの独立を要求してはならないという見解。この見地からすれば、民族自決権を宣言することなど問題にならない。この見地も同じくインタナショナルで敗北をこうむった。

(三)そのときK・カウツキーがローザ・ルクセンブルクに反対し、彼女の唯物論が極度に「一面的」であることを証明して、だれよりも詳しく展開した見解。カウツキーはこう言っている。この見解によれば、インタナショナルは現在ポーランドの独立をその綱領の一条項とすることができないが、ポーランドの社会主義者がこの要求をかかげることはいっこうにかまわない。社会主義者の見地からすれば、民族的圧迫がおこなわれている事情のもとで、民族解放の任務を無視することは絶対にまちがいである。

インタナショナルの決議に再現されているのは、ほかならぬこの見解の最も本質的、基本的な命題である。すなわち、一方では、あらゆる民族にたいする完全な自決権の、直接の、曲解の余地のない承認。他方では、労働者の階級闘争の国際的統一について彼らへの同じく明確な呼びかけ、がそれである。

われわれは、この決議はまったく正しいと考える。そして、二〇世紀初頭の東ヨーロッパとアジアの諸国にとっては、この決議こそ、またその二つの部分を不可分に結びつけるときにこそ民族問題におけるプロレタリアートの階級的政策に唯一の正しい方針をあたえるものであると考える。

右に述べた三つの見解をもうすこし詳しく論じよう。

周知のように、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは、西ヨーロッパの全民主主義派にとっては、社会民主主義派にとってはなおさらのこと、ポーランドの独立要求を積極的に支持することが無条件の義務であると考えていた。

一九世紀の四〇年代と六〇年代の時期、オーストリアと

ドイツのブルジョア革命の時期、そしてロシアの「農民改革」〔一八六一年の「農奴解放」〕の時期にとっては、この見解はまったく正しく、また唯一の一貫した民主主義的、プロレタリア的な見解であった。ロシアと大多数のスラヴ諸国の人民大衆がまだ深い眠りからさめていなかったあいだは、これらの国に自主的、大衆的な民主主義運動がなかったあいだは、ポーランドの貴族の解放運動[三六]は、全ロシア民主主義派、全スラヴの民主主義派の見地からだけでなく、全ヨーロッパの民主主義派の見地からいっても、巨大な第一級の意義をおびていた。*

* 一八六三年のポーランドの反乱を起こした一人の小貴族の立場――ポーランドの運動の意義を（マルクスと同じように）評価することができた全ロシア的な革命的民主主義者チェルヌィシェフスキーの立場――と、ずっとのちに現われたウクライナの小市民ドラゴマノフの立場とを比較することは、きわめて興味ぶかい歴史的研究である。ドラゴマノフは、農民の見解を代表していたのだが、この農民はまだひどく粗野で、ねぼけていて、自分の糞の山と一体になっていたので、ポーランドの地主にたいする当然の嫌悪から、これらの貴族の闘争が全ロシアの民主主義派にとってどんな意義をもつか理解できなかった（ドラゴマノフの『歴史的ポーランドと大ロシア人の民主主義』を参照）。のちにドラゴマノフは、すでに国権的自由主義者となっていたペ・ペ・ストルーヴェ氏の熱烈な接吻をうけたが、それだけの値うちは十分にあったのである。

しかし、このマルクスの立場が一九世紀の中葉あるいは第三・四半期には正しかったとしても、それは二〇世紀には正しくなくなった。自主的な民主主義運動、それどころか自主的なプロレタリア運動でさえ、多くのスラヴ諸国に、最もおくれたスラヴ諸国のひとつであるロシアにさえおこってきている。貴族的ポーランドは消えうせて、資本主義的ポーランドに席を譲った。このような状況のもとで、ポーランドは、その独占的な革命的意義を失わざるをえなかった。

ペ・ペ・エス（ポーランド社会党、現在の「フラキ」）が一八九六年に他の時代のマルクスの見解を「固定」しようと企てたのは、マルクス主義の文字をマルクス主義の精神にそむいて利用しようとしたことを意味する。したがって、ポーランドの社会民主主義者が、ポーランドの小ブルジョアジーの民族主義的熱狂に反対し、民族問題はポーランド労働者にとっては第二次的な意義をもつものであると指摘し、はじめて純プロレタリア的な党をポーランドにつくりあげ、ポーランドとロシアの労働者が階級闘争のなかで最も密接な同盟を結ぶという原則がきわめて重要なことを宣言したのは、まったく正しかった。

しかし、それだからといって、インタナショナルが二〇

世紀初頭に、政治的民族自決の原則すなわち分離権を、東ヨーロッパとアジアにとってはよけいなことだとみなしてよかったということになるであろうか？　それは、まったく背理であり、トルコ、ロシア、中国の諸国家のブルジョア民主主義的変革がすでに完了したと認めるに等しく（理論的には）、絶対主義にたいする日和見主義に等しい（実践的には）。

そうではない。ブルジョア民主主義革命が始まった時代、民族運動の覚醒と激化の時代、自主的プロレタリア諸政党の発生の時代の東ヨーロッパとアジアにとっては、これらの政党の民族政策上の任務は、二面的でなければならない。その第一は、あらゆる民族にたいする自決権の承認、――なぜなら、ブルジョア民主主義的変革はまだ完了しておらず、労働者民主主義派は自由主義的にではなく、ココシキン的にではなく、一貫して、真剣に、心から、諸民族の同権を擁護するからである。――つぎに、ある国家が歴史上どのような変遷を経るときにも、ブルジョアジーが個々の国家の国境をどのように変更する場合にも、その国家のすべての民族のプロレタリアの階級闘争の最も緊密で不可分な同盟。

一八九六年のインタナショナルの決議は、プロレタリアートのほかならぬこの二面的な任務を定式化している。一九一三年のロシア・マルクス主義者の夏の会議[一三六]の決議も、その原則上の基本点からみれば、まさに以上のようなものであった。この決議は、第四条で、自決権すなわち分離権を認めて、いかにも民族主義に最大限のものを「あたえ」ているようであるが（実際には、あらゆる民族の自決権を認めることには、民主主義の最大限と民族主義の最小限がふくまれている）、第五条では、どんなブルジョアジーがとなえようと民族主義的スローガンには反対するよう労働者に警告し、国際的な単一のプロレタリア組織にすべての民族の労働者が統一し結集することを要求しているのは「矛盾している」ように思う人もいる。だが、ここに「矛盾」があると考えることのできるのは、たとえば、スウェーデンの労働者が、ノルウェーが分離して独立国家となる自由を擁護したとき、スウェーデンとノルウェーのプロレタリアートの統一と階級的連帯性が強化された理由を理解できないような、まったく浅薄な頭脳の持ち主だけである。

八　空想家カール・マルクスと実際的なローザ・ルクセンブルク

ポーランドの独立を「空想」だと宣言し、それをあきあきするほど繰りかえしながら、ローザ・ルクセンブルクは、

どうしてアイルランド独立の要求をかかげないのか、と皮肉って叫ぶ。

「実際的な」ローザ・ルクセンブルクは、きっと、カール・マルクスがアイルランドの独立問題にどのような態度をとったか知らないのであろう。日和見主義的見地からではなく真にマルクス主義的な見地からなされた、民族独立の具体的な要求の分析を示すためには、この点にたちいるだけのことがある。

マルクスには、自分の知合いの社会主義者たちを「テストして」——彼のことばをかりれば——彼らの意識と信念を点検するくせがあった。(二六)ロパーチンと知合いになったマルクスは、一八七〇年七月五日付のエンゲルスあての手紙で、この若いロシアの社会主義者に大いに賛辞を呈しているが、しかしそのさいつぎのようにつけくわえている。

……「弱点は、ポーランドだ。この点については、彼は、(二六)イギリス人——たとえばイギリスの旧派のチャーティスト——がアイルランドのことを言うときとまったく同じような口ぶりをする。(二七)」

マルクスは、抑圧民族の社会主義者に、被抑圧民族にたいする彼の態度を問いただし、たちどころに、支配民族(イギリス人とロシア人)の社会主義の共通の欠点をあばいている。すなわち、圧迫されている諸民族にたいする彼らの社会主義的義務を理解していないこと、「大国」のブルジョアジーからうけついだ偏見のむしかえしがその欠点である。

アイルランドについてのマルクスの積極的な言明にうつるまえに、われわれは、マルクスとエンゲルスが一般に民族問題にたいしては、この問題の重要性が歴史的に条件づけられていることを理解して、厳に批判的な態度をとっていたということを、ことわっておかなければならない。たとえばエンゲルスは、一八五一年五月二三日にマルクスにあててこう書きおくっている。歴史を研究すると、自分はポーランドについて悲観的な結論にみちびかれる。ポーランドの意義は、ロシアに農業革命が起こるまでの一時的なものである。ポーランド人の歴史上の役割は、「勇敢な愚行」である。「ポーランドが、ロシアとだけくらべて見ても、進歩を代表することに成功したか、あるいはなにか歴史的意義のあることをした、ただひとつの瞬間もあげることができない。」ロシアには、「のらくらぐらしの小貴族〔シュリャフタ〕(二八)のポーランド」よりも、文明や教養や工業やブルジョアジーの要素が多い。「ペテルブルグ、モスクワ、オデッサ等々とくらべれば、ワルシャワとクラクフはなんであろう!(二九)」エンゲルスは、ポーランドの小貴族たちの蜂起の成功を信じないのである。

だが天才と洞察とに富んだこれらの思想も、一二年後にロシアがまだねむっているのにポーランドがわきたったとき、エンゲルスとマルクスがきわめて深い熱烈な共感をポーランドの運動に示すことをすこしも妨げなかった。

一八六四年に、インタナショナルの宣言を起草していたさい、マルクスはエンゲルスへの手紙（一八六四年一一月四日付）で、マッツィーニの民族主義とたたかわなければならない、と書いている。「宣言で国際政治が問題になるかぎりでは、私は国について語り、民族についてはかたらない。またロシアを糾弾するが、諸小国（minores gentium）を糾弾しない。」——マルクスはこう書いている。「労働問題」とくらべれば民族問題が従属的意義しかもたないことは、マルクスには疑いの余地がない。だが、彼の理論は、民族運動の無視とは雲泥の差がある。

一八六六年がやってきた。マルクスは、エンゲルスにあててパリの「プルードンの徒党」について書きおくっている。この徒党は、「民族を無意味なものと宣言し、ビスマルクとガリバルディを攻撃している。排外主義との論争としては、彼らのふるまいは有益であり、明白である。だが、プルードン信者たち（当地における私の親友ラファルグとロンゲもやはりその仲間である）が、フランスの諸君が『貧困と無知』を撤廃するまで、全ヨーロッパはしずかに尻をおちつけてすわっているべきであり、またいるだろうと考えているのは、……滑稽である」（一八六六年六月七日付の手紙）。

一八六六年六月二〇日に、マルクスはつぎのように書きおくっている。「きのう、インタナショナルの評議会で、現在の戦争の問題について討論があった。……討論は、当然予期されたことだが、結局、『民族問題』一般とそれにたいするわれわれの態度の問題になった。……『青年フランス』の代表者たち（非労働者）は、あらゆる民族体および民族そのものが『古くさくなった偏見』だと言ってのけた。プルードン化されたシュティルナー主義だ。……フランス人が社会革命をやれるように成熟するまで、全世界は待っているべきだ、というのだ。……民族を廃止してしまったわれわれの友人ラファルグその他の諸君は、『フランス語』で、すなわち、聴衆の一〇分の九にはわからない国語で、われわれに話しかけた、——こういう文句で私が自分の演説を始めると、イギリス人たちは大笑いをした。私は、さらに、ラファルグはまったく無意識にではあるが、民族の否定ということを、模範民族たるフランス民族へそれらの民族を吸収することと理解しているように思われる、と指摘した。[(三三)]」

マルクスの以上の論評からひきだされる結論は、明らか

である。労働者階級は、民族問題を神聖視することが最もすくない。なぜなら、資本主義の発展は、かならずしもすべての民族を独立生活に目ざめさせるとはかぎらないからである。だが、ひとたび大衆的な民族運動がおこったときに、この運動を無視すること、この運動のなかにある進歩的な要素の支持を拒否することは、実際には民族主義的偏見に陥ること、すなわち「自」民族を「模範民族」（すなわち、われわれとしてつけくわえていえば、国家をつくる排他的な特権をもつ民族）だと認めることを意味する。*

* さらに、一八六七年六月三日付のマルクスのエンゲルスへの手紙を参照せよ。……「私は、『タイムズ』(二三四)のパリ通信から、ロシアに反対するポーランドびいきの叫びをパリ人があげているのを知って、ほんとうに満足である。……プルードン氏と彼の小さな空論家の徒党は、フランス人ではない(二三五)。」

しかし、アイルランド問題にもどることにしよう。

この問題についてのマルクスの態度は、彼の手紙の次のいくつかの断片に、最もよく現われている。

「私は、フィアナ派(二三六)〔フェニアン党〕を支持するイギリス労働者のデモンストレーションをひきおこそうと、あらゆる方法でつとめた。……以前私は、アイルランドのイギリスからの分離は不可能だと考えていた。いまは、たとえ分離したのち連邦制をとることになろうとも、分離は避けられないものであると考えている。」マルクスは、一八六七年一一月二日のエンゲルスへの手紙に、こう書いている。

この年の一一月三〇日付の手紙には、彼はつぎのようにつけくわえて言っている。

「われわれとしては、イギリスの労働者になにを勧告すべきか？　私の考えでは、彼らは連合の廃棄（Repeal）」（アイルランドとイギリスの連合の破棄、すなわち、アイルランドのイギリスからの分離）、「（一言でいえば一七八三年の思いつき(二三七)を、ただしそれを民主化し、時勢にあわせて）その宣言の一項目にとりいれなければならない。これこそ、アイルランド解放の唯一の合法的な形態であり、したがってイギリス人の党の綱領に採用することのできる唯一の可能な形態である。この両国のあいだに単に同一の君主をいただくだけの関係が存続しうるかどうかは後日経験が示すにちがいない。……

……アイルランド人に必要なのは、次のことである。

一　自治とイギリスからの独立。

二　農業革命……」

マルクスはアイルランド問題を非常に重要視し、〔在ロンドン〕ドイツ人労働者協会で、このテーマについて一時間半にのぼる報告をした（一八六七年一二月一七日付の手紙(二三八)）。

エンゲルスは、一八六八年一一月二〇日付の手紙に「イギリス労働者のあいだに見られるアイルランド人にたいする憎悪」を指摘しているが、約一年後（一八六九年一〇月二四日）にこのテーマにたちかえってつぎのように書いている。

「アイルランドからロシアへは、ほんの一歩だ（il n'y a qu' un pas）……。アイルランドの歴史の例から、他の民族を隷属させることが、その民族にとってどんなに不幸であるかを、知ることができる。イギリス人のあらゆる醜行の起原は、アイルランドのペール[二九]にある。クロムウェル時代についてはもっと勉強しなければならないが、もし、アイルランドを軍事的に支配し、ここに新しい貴族をつくりだす必要がなかったなら、イギリスでも事情は違ったものになっていたろうということだけは、確かだと思われる。」

ついでながら、マルクスの一八六九年八月一八日付のエンゲルスあての手紙をあげておこう。

「ポーゼンでは、ポーランド人労働者がベルリンの仲間の援助で、勝利をおさめてストライキを終わった。資本というご主人（Monsieur le Capital）に反対するこの闘争は――ストライキという低い形態をとった場合でさえ――ブルジョア諸君の平和の熱弁とは違って、民族的偏見をかたづけるであろう[三〇]。」

マルクスがインタナショナルでアイルランド問題についてどういう政策をとったかは、次のことからわかる。

一八六九年一一月一八日にエンゲルスにあてた手紙で、マルクスは、自分はインタナショナルの評議会で、一時間一五分にわたって、アイルランド人の大赦問題にたいするイギリス内閣の態度について演説し、次の決議案を提案した、と書いている。

「決議。

投獄されたアイルランドの愛国者の釈放を求めたアイルランド人の要求にたいする回答……において、グラッドストン氏は故意にアイルランド民族を侮辱している。

彼は、失政の犠牲者にとっても、犠牲者の属する民族にとっても、屈辱的な条件をつけて、政治的大赦を妨げている。

彼は、責任ある地位にまっこうから反して、アメリカの奴隷所有者の反乱に、公然かつ熱烈に声援をおくったが、いまやアイルランド民族に無抵抗服従の教義を説きはじめている。

アイルランド人の大赦問題にかんする彼の全行動は、かつてグラッドストン氏がそれを激しく糾弾することによって彼の政敵トーリー党を下野させたあの『侵略政策』の正真正銘の産物である。

『国際労働者協会』総評議会は、アイルランド人民がその大赦請願運動に示している、気力ある確固とした高潔な態度に称賛を表明する。

以上の決議は、『国際労働者協会』の全支部およびこれと連絡のあるヨーロッパとアメリカのすべての労働者団体に伝達されるべきである。(三〇)」

一八六九年一二月一〇日、マルクスは、インタナショナルの評議会における自分のアイルランド問題報告をつぎのようにまとめると書きおくっている。

……「アイルランドに正義を、といったような、あらゆる『国際的』な空語や『人道的』な空語は度外視して――こんなことはインタナショナル評議会ではわかりきったことだから――、自分たちとアイルランドとの現在の関係を断つことが、イギリスの労働者階級の直接の利益である。そして、これは私の十分に確信することであり、それ相応の理由があって言っているのだが、その理由のある部分は、私からイギリスの労働者自身に打ち明けるわけにはいかない。長いあいだ私は、イギリスの労働者階級が権力をとることによって、アイルランドの支配体制を打ち倒すことができると信じていた。私は『ニューヨーク・トリビュン』(三一)(マルクスが長いあいだ寄稿していたアメリカの新聞)「でいつもこの見解を述べてきた。ところが、もっとふかく研究してみて、私はその反対のことを確信するようになった。イギリスの労働者階級は、アイルランドを解放しないうちは、けっしてなにもなしとげられないだろう。……イギリス本国におけるイギリス人の反動は、……アイルランドの隷属に根ざしている。(三二)」(傍点はマルクス)

これで、アイルランド問題におけるマルクスの政策は、読者諸君に十分明らかになったものと思う。

「空想家」マルクスは、半世紀たってもまだ実現されないでいるアイルランドの分離を支持するほど「非実際的」なのである。

マルクスはどういう理由でこの政策をとったのか、そしてそれは誤りではなかったのか?

マルクスは、はじめは、被抑圧民族の民族運動ではなくて抑圧民族のあいだの労働運動がアイルランドを解放するだろう、と考えていた。マルクスは、あらゆる民族の完全な解放をもたらしうるのは、労働者階級の勝利だけであることを知っていたので、けっして民族運動を絶対的なものに祭りあげなかった。被抑圧民族のブルジョア的解放運動と抑圧民族のあいだのプロレタリア的解放運動とのありうべき相互関係を全部あらかじめ考慮にいれること(現代ロシアの民族問題をきわめて困難なものにしているのは、まさにこの問題である)は不可能である。

だが情勢は、イギリスの労働者階級がかなり長いあいだ自由主義者の影響のもとに陥り、自由主義者に追随し、そして自由主義者の労働者政策をとることによって自分で自分の首を切りとるという成行きとなった。アイルランドのブルジョア的解放運動は強くなり、革命的な形態をおびるにいたった。マルクスは自分の見解を再検討して、それを訂正した。「他の民族を隷属させることは、その民族にとって不幸である。」アイルランドがイギリスの抑圧から解放されないかぎり、イギリスの労働者階級は解放されないであろう。イギリスにおける反動を強化しはぐくむものは、アイルランドの隷属である(ロシアにおける反動をはぐくんでいるのが、ロシアによる幾多の民族の隷属であるのと同じように!)。

だから、マルクスは、インタナショナルで「アイルランド民族」、「アイルランド人民」にたいする同情決議をとおすとともに(賢いエリ・ヴェは、おそらく、階級闘争を忘れたといって、哀れなマルクスをしかりとばすことだろう!)、「たとえ分離したのち連邦制をとることになろうとも」、アイルランドのイギリスからの分離を説いているのである。

マルクスのこの結論の理論的な前提はどんなものか?イギリスでは、ブルジョア革命はだいたいにおいてとっくの昔に完了した。しかし、アイルランドではそれはまだ完了していない。それは、それから半世紀もたったいま、イギリスの自由主義者の改革によって完了しようとしている。イギリスの資本主義がマルクスがはじめのころ期待していたように急速にくつがえされたとすれば、アイルランドのブルジョア民主主義的な全民族的運動がおこる余地はなかったであろう。だが、この運動がいったんおこった以上、マルクスはイギリスの労働者に、それを支持し、それに革命的衝撃をあたえ、それを自分自身の自由のために最後まで遂行するように、すすめているのである。

前世紀の六〇年代のアイルランドとイギリスの経済的な結びつきは、いうまでもなく、ロシアとポーランド、ウクライナなどとの結びつきよりも、密接であった。アイルランドの分離が(地理的条件からいっても、またイギリスの無限の植民地支配力からいっても)「実行不可能」であり、「実現性のない」ことは、一見して明らかであった。連邦制の原則的反対者であったにもかかわらず、マルクスはこの場合、アイルランドの解放が改良的にではなく、イギリスの労働者階級に支持されたアイルランドの人民大衆の運動によって革命的におこなわれさえするなら、連邦をも認めているのである。* 歴史的任務をこのように解決することだけが、プロレタリアートの利益と急速な社会的発展にと

って最も有利であることは、まったく疑う余地がない。

*ところで、社会民主主義の見地から見た場合、なぜ民族「自決」権ということを、連邦制とも、自治制とも解してはならないかは、わかりにくいことではない（抽象的にいえば、この両者とも「自決」のうちにはいりはするけれども）。連邦の権利ということは、総じてナンセンスである。というのは、連邦制は双務的な条約にもとづくものだからである。マルクス主義者は、連邦制一般の擁護をその綱領のなかにいれることはけっしてできない。それについてわざわざ言うまでもない。他方、自治についていえば、マルクス主義者が擁護するのは、自治の「権利」ではなくて、自治そのものであり、多様な民族的構成をもち、地理的条件その他の条件にいちじるしい差異がある民主主義国家の一般的・普遍的原則なのである。だから「民族自治権」の承認は、「民族連邦権」の承認と同じくらい、無意味なことであろう。

ところが、そうはいかなかった。アイルランド人民も、イギリスのプロレタリアートも、弱かった。いまようやくアイルランド問題は、イギリスの自由主義者とアイルランドのブルジョアジーとの哀れむべき取引により、土地革命（買取りによる）と自治（いまのところまだ実施されていない）をつうじて解決されようとしている（アルスターの例は、この解決がはかどらないことを示している）。いったいどういうことになるか？　このことから、マルクスとエンゲルスは「空想家」であったとか、彼らは「実現性のない」民族的要求を提起したとか、アイルランドの小ブルジョア的民族主義者（「フィアナ」運動の小ブルジョア的な性格については疑う余地がない）の影響をこうむった、等々という結論になるだろうか？

そうではない。アイルランド問題でも、マルクスとエンゲルスは、真に民主主義と社会主義の精神にたって大衆を教育する、一貫したプロレタリア的政策をとったのである。このような政策だけが、必要な諸改革が半世紀もおくれたり、自由主義者が反動の気にいるようにそれらの改革を奇形にしたりすることから、イギリスとアイルランドの双方を救うことができたのである。

アイルランド問題におけるマルクスとエンゲルスの政策は、抑圧民族のプロレタリアートが民族運動にたいしてどんな態度をとるべきかについて、いまでも巨大な実践的意義をもちつづけている偉大な模範を示した。それは、あらゆる国、あらゆる人種、あらゆる言語の俗物たちが、一民族の地主とブルジョアジーの暴力と特権によってうちたてられた国境の変更を、あわてて「空想」と認めようとしているあの「奴隷的な性急さ」にたいする警告であった。

もし、アイルランドとイギリスのプロレタリアートがマルクスの政策をうけいれず、アイルランドの分離をスロー

ガンとしてかかげなかったとすれば、それは彼らの最悪の日和見主義であり、民主主義と社会主義の任務を忘れて、イギリスの反動派とブルジョアジーへ譲歩することであったろう。

九　一九〇三年の綱領とその解消派

ロシア・マルクス主義者の綱領を採択した一九〇三年の大会[203]の議事録は、いまではめったに手にはいらなくなり、現在の労働運動活動家の圧倒的多数は、この綱領の個々の条項の趣旨をよく知らない（これにかんする文献がかならずしも合法性の恩恵にあずかっているわけではないから、ますますそうである……）。したがって、われわれの関心をひくこの問題が一九〇三年の大会でどう検討されたかにたちいる必要がある。

まず第一に指摘しておくと、「民族自決権」をあつかったロシア社会民主党の文献がどんなに乏しくとも、それにしてもその文献からはっきり知られることは、この権利がいつでも分離権の意味に理解されてきたことである。この点を疑って、第九項は「あいまい」だうんぬんと言っているセムコフスキー、リープマン、ユルケヴィチなどの諸君は、きわめて無知で軽率なために「あいまい」であると言っているにすぎないのである。はやくも一九〇二年に、プレハーノフは、『ザリャー』[204]で、綱領草案中の「自決権」を擁護して、この要求はブルジョア民主主義者にとっては必須なものではないが、「社会民主主義者にとっては必須なものである」と書いている。プレハーノフは、つぎのように書いている。「もしわれわれがこれを忘れるか、大ロシア民族に属するわれわれの同胞の民族的偏見にふれることをおそれて、これを提起する決心がつかないとすれば、『万国の労働者、団結せよ！』という呼びかけをわれわれが口にすることは、恥ずべきうそになるであろう……[205]」

これは、われわれが検討している条項を擁護する基本的論拠の、きわめて的確な特徴づけである。それはあまりにも的確なので、「自分の出身を忘れた」わが綱領批評家たちが、おずおずとそれを避けてきたし、またいまも避けているのは、理由のないことではない。この条項を放棄することは、それがどんな趣旨によるにせよ、実際には大ロシア人的民族主義への「恥ずべき」譲歩を意味する。しかし、すべての民族の自決権が問題になっているのに、大ロシア人的民族主義への譲歩だというのはなぜか？　それは、大ロシア民族からの分離が問題だからである。プロレタリアの団結のため、プロレタリアの階級的連帯性の強化のためには、諸民族の分離権を承認することが必要である。――

これこそプレハーノフが一二年前に上記のことばで認めたことである。わが日和見主義者たちがこの点に思いをめぐらしたならば、彼らはおそらく、自決についてこんなにたくさんたわごとを述べはしなかったであろう。

プレハーノフが擁護したこの綱領草案が承認された一九〇三年の大会では、主要な活動は綱領委員会に集中された。残念なことには、この委員会の議事録はとられなかった。しかも、この点についてこそ議事録があれば、とくに興味あるものになったことであろう。なぜなら、ポーランド社会民主党の代表者のワルシャフスキとガネツキーが、自分たちの見解を擁護し「自決権の承認」に反対しようとしたのは、この委員会においてだけだったからである。彼らの論拠（それは、議事録の一三四―一三六および三八八―三九〇ページのワルシャフスキの演説および彼とガネツキーの声明に述べられている）と、われわれが以上で検討したポーランド語の論文に述べられているローザ・ルクセンブルクの論拠とを比較してみれば、これらの論拠が完全に一致することがわかるであろう。

だれよりもプレハーノフがポーランドのマルクス主義者に反対した第二回大会の綱領委員会は、これらの論拠にたいしてどういう態度をとったであろうか？　これらの論拠はひどく嘲笑されたのである！　ロシアのマルクス主義者にむかって民族自決権の承認を取り消せと提案することのばかばかしさがあまりにも明白に証明されたので、ポーランドのマルクス主義者は、大会の全体会議では、自分たちの論拠をくりかえす決心もつかなかった!!　彼らは大ロシア人もユダヤ人もグルジア人もアルメニア人も出席していたマルクス主義者の最高の会議での自分らの立場が見込みのないものだということがわかったので、大会を退場してしまった。

この歴史的なエピソードは、いうまでもなく、自分の綱領に真剣な関心をもっているあらゆる人にとってきわめて大きな意義をもっている。この大会の綱領委員会でポーランドのマルクス主義者の論拠が完全に粉砕されたこと、ポーランドのマルクス主義者がこの大会の全体会議で自分たちの見解を擁護しようとする企てをすてたことは、きわめて意味深長な事実である。ローザ・ルクセンブルクが、一九〇八年の論文で、これについて「つつましくも」沈黙をまもったのは、理由のないことではない。――たぶん、この大会の思い出はあまりにも不愉快だったのであろう！彼女はまた、綱領の第九項を「修正」せよという、滑稽なほどまずい提案についても、沈黙していた。これは、一九〇三年にワルシャフスキとガネツキーがポーランドの全マルクス主義者を代表して出したが、ローザ・ルクセンブルク

クもその他のポーランド社会民主主義者も二度とくりかえそうとしなかった（今後もくりかえそうとはすまい）ものである。

だが、たとえローザ・ルクセンブルクが一九〇三年の自分の敗北を隠し、これらの事実について沈黙をまもったところで、自分の党の歴史に関心をもつ人は、これらの事実を確かめ、その意義をよく考えるように気をくばるであろう。

一九〇三年の大会を退場するさいに、ローザ・ルクセンブルクの同志たちは、大会にあてててつぎのように書いてよこした。「われわれはこの綱領草案の第七項（現在の第九項）に次のような定式をあたえることを提案する。『第七項。国家の構成にくわわっているすべての民族に文化的発展の完全な自由を保障する諸施設』と」（議事録、三九〇ページ）

要するに、ポーランドのマルクス主義者はこのとき民族問題についてきわめて不明確な見解を主張したのであって、彼らの提案は実際には、自決ではなくて、例の悪名たかい「文化的民族的自治」の別名にほかならなかったのである！

これは、まさかと思われるが、残念ながら事実なのである。大会そのものでは評議権をもつコストロフを別として、五票をもつ五名のブンド派、六票をもつ三名のザカフカーズ派がいたのに、民族自決の条項の削除に賛成したものは一人もいなかった。この条項に「文化的民族的自治」をつけくわえること（すなわち諸民族に「文化的発展の完全な自由を保障する諸施設の創設」というゴルドブラットの定式に賛成したのは三票、リーベルの定式（「彼ら――諸民族――の文化的発展の自由にたいする権利」）に賛成したのは四票であった。

ロシアの自由主義政党、すなわちカデット党がすでに出現している今日、われわれは彼らの綱領のなかでは民族の政治的自決が「文化的自決」に代えられていることを知っている。したがって、ローザ・ルクセンブルクのポーランドの友人たちは、ポーランド社会党の民族主義と「たたかう」さいに、マルクス主義的綱領を自由主義的綱領に代えることを提案するほどの成功をおさめたのである！　しかもその彼らが、それと同時にわが綱領を日和見主義的であると非難したのである――この非難が第二回大会の綱領委員会で笑いを買っただけであることは、異とするにたりない！

すでに見たように、第二回大会の代議員のうち「民族自決」に反対したものは一人もなかったが、彼らは「自決」をどのような意味にとっていたのであろうか？

議事録から取ってきた次の三つの抜書きが、それを証明している。

『『自決』ということばに広い解釈をあたえるべきではない。それは民族が独立の政治的単位に分立する権利を意味するにすぎず、けっして地方自治を意味するのではない、とマルトィノフは、考えている」（一七一ページ）。マルトィノフは、ローザ・ルクセンブルクの友人たちの論拠がくつがえされ、一笑にふされた綱領委員会の一員であった。その当時マルトィノフは、その見解では、「経済主義者」であり、『イスクラ』の熱烈な反対者であった。だから、もし彼が綱領委員会の多数とは違った意見を述べたとしたら、もちろん彼の意見は反対をうけたことであろう。

ブンド派のゴルドブラットは、委員会の審議が終わって大会で綱領の第八項（現在の第九項）が審議されたとき、最初に発言した。

ゴルドブラットは、つぎのように言った。

『『自決権』にはなにも反対はできない。もしある民族が自立のためにたたかう場合にはそれにさからってはならない。もしもポーランドがロシアとの正式の結婚を望まないならば、同志プレハーノフが言ったように、それを妨げてはならない。この範囲内では、この意見に同意する。」（一七五―一七六ページ）

プレハーノフは、大会の総会では、この条項について全然発言しなかった。ゴルドブラットが引用しているのは、綱領委員会におけるプレハーノフの発言であり、そこでは「自決権」は、くわしく、わかりやすく、分離権の意味に説明されている。ゴルドブラットについで発言したリーベルは、つぎのように言っている。

「もちろん、もしある民族がロシアの国境内で生活することができないとしたら、党はそれを妨げないであろう。」（一七六ページ）

読者のごらんのように、綱領を採択した第二回党大会では、自決とは分離の権利「だけ」を意味するという点については、異論はなかった。ブンド派さえ、当時はこの真理を会得していた。ひきつづく反革命とあらゆる種類の「変説」のいたましい時代になってはじめて、綱領は「あいまい」だ、などと宣言する臆面もなく無知な連中が現われたのである。しかし、これらのあわれむべき「えせ社会民主主義者」に時間をさくまえに、われわれは、綱領にたいするポーランド人の態度にけりをつけておこう。

彼らは、統合が必要かつ緊急だという声明をたずさえて、第二回大会（一九〇三年）にのぞんだ。だが彼らは、綱領委員会で「敗北」すると、大会から退場した。そして彼らの最後の発言は、大会議事録にのっている文書による声明

であり、その内容は、自決を文化的民族的自治に代えるという上述の提案であった。

一九〇六年にポーランドのマルクス主義者は入党した。しかも、入党するさいにも、またそののちにも（一九〇七年の大会[二九]のときにも、一九〇七年の協議会[三〇]や一九〇八年の協議会[三一]のときにも、一九一〇年の総会[三二]のときにも）、彼らはロシアの綱領の第九項を修正せよという提案を一度も出さなかった！

これは事実である。

そしてこの事実は、あらゆる証言にもかかわらず、次のことをはっきり証明している。すなわち、ローザ・ルクセンブルクの友人たちは、第二回党大会の綱領委員会でこの問題が論じつくされ、この大会の決定がくだされたことを認めた。また彼らは、一九〇三年に大会を退場してから一度も綱領の第九項を改訂する問題を党的な仕方で提起しようとしなかったのであるから、一九〇六年に党に加入したときは、自分らの誤りを暗黙のうちに承認して、それを訂正していたことになる。

ローザ・ルクセンブルクの論文は、一九〇八年に彼女の署名で発表された——いうまでもなく、党員文筆家に綱領を批判する権利がないなどと考えるものはひとりもいない。この論文が出たのちも同様に、ポーランドのマルクス主義者のどの公式機関も、第九項改訂の問題を提案したものはひとつもなかった。

だから、トロツキーが『ボリバ』編集局の名で、同誌の第二号（一九一四年三月）につぎのように書いているのは、ローザ・ルクセンブルクの崇拝者たちにはまったくありがた迷惑なことである。

……「ポーランドのマルクス主義者は、『民族自決権』をまったく政治的内容がなく、綱領から削除すべきもの、とみなしている。」（二五ページ）

おせっかいのトロツキーは、敵よりこわい！　トロツキーは、「ポーランドのマルクス主義者」全体を、ローザ・ルクセンブルクの各論文の支持者の数にくわえるための証拠を、「個人的な談話」（つまり、トロツキーがいつも朝から晩までやっているただのゴシップ）から借用してくるよりほかはなかった。トロツキーは、「ポーランドのマルクス主義者」を名誉も良心もなく、自分自身の信念や自分の党の綱領さえ尊重できない人々として押し出したわけである。トロツキーもおせっかいなことだ！

一九〇三年に、ポーランドのマルクス主義者の代表が自決権のことから第二回大会を退場したそのときなら、トロツキーも、彼らがこの権利を内容がなく、綱領から削除すべきものとみなした、と言えたはずである。

だが、その後、ポーランドのマルクス主義者たちは、このような綱領をもつ党に加入したのだし、また一度もその改訂動議を出してもいない。*

* われわれが受けている報告によれば、ポーランドのマルクス主義者は、一九一三年のロシア・マルクス主義者の夏の会議に、評議権だけをもって参加したので、自決権（分離権）の問題について、そうした権利一般に反対を表明はしたが、投票は全然おこなわなかった。もちろん、彼らはこのようにふるまう完全な権利をもっていたし、またこれまでどおりに、ポーランドでポーランド分離反対の扇動をおこなう完全な権利をもっていた。しかし、このことは、トロツキーが言っていることとはまったく違う。なぜなら、ポーランドのマルクス主義者は、第九項を「綱領から削除」することを要求しはしなかったからである。

なぜトロツキーは、これらの事実を自分の雑誌の読者に黙っていたのであろうか？　ポーランドとロシアの解党主義反対者のあいだの意見の相違をかきたてることをあてこむこと、そして綱領の問題でロシアの労働者をあざむくことが、自分に有利であったからにほかならない。

トロツキーは、いまだかつてマルクス主義のどんな重要問題についても、なにひとつ持続的な意見をもっていたためしがない。彼はいつも、なにかの意見の相違の割れ目に「もぐりこみ」、あっちへついたり、こっちへついたりしてきた。いま彼は、ブンド派と解党派の仲間にはいっている。ところでこの紳士諸君は、党に遠慮しない。

ブンド派のリープマンの言うことをきこう。

「ロシア社会民主党が一五年前（一八九八年）に、その綱領に各民族の『自決権』の条項をいれたとき、この流行の（!!）ことばはいったいなにを意味するのか、とだれも（!!）が自問したものだった。これにはなんの答えもなかった（!!）。このことばは霧につつまれたまま（!!）になっていた。じっさい、その当時この霧を散らすのはむずかしいことであった。この条項を具体化することのできる時期はまだきていない、もうしばらく霧につつまれたままにしておこう（!!）。そうすれば、そのうちに、実生活そのものがこの条項にどんな内容をいれるべきかを示すであろう、と当時は言われたものである」と、この紳士は書いている。

党綱領をあざわらっているこの「ズボンなしの少年」（二八三）は、じっさいなんと堂々としているではないか？

ところで、なぜ彼はあざわらっているのか。

それは、彼がまったく無知な男で、なにひとつ学んだことがなく、党史についてさえなにも読んだことがなく、党や党派性の問題では素裸で歩くのが「ならわし」になっている解党派の仲間いりをしたからにほかならない。

ポミャロフスキーの神学生は、「塩づけキャベツの小桶につばをはいた」ことを自慢している。(二八) ブンド派の諸君は、もっとうわてである。彼らは、リープマン一派を自由にふるまわせて、これらの紳士に公衆の面前で自分の小桶につばをはかせたのである。国際大会でどういう決定をしようと、自分自身の党大会で自分自身のブンド派の二名の代表(彼らは「激しい」『イスクラ』批判者であり、その断固たる敵であった!)が「自決」の意義を完全に理解する能力を示し、「自決」に同意さえしようと、リープマン一派にとっては、それがなんであろう。そして「党の政論家」(ふざけてはいけない!)が神学生流に党の歴史と綱領とを取り扱うなら、党を解消することはもっとたやすいことではあるまいか。

つぎに、第二の「ズボンなしの少年」である『ズヴィン』(二九) 派のユルケヴィチ氏がいる。ユルケヴィチ氏は、たぶん第二回大会の議事録をもっていたのであろう。なぜなら、彼はゴルドブラットがくりかえしたプレハーノフのことばをあげているし、また自決とは分離権のことにほかならないことを知っていることを示しているからである。だがそうだからといって、彼がウクライナの小ブルジョアジーのあいだに、ロシアのマルクス主義者はロシアの「国家的保全」を支持しているという中傷をひろめる妨げにはならない(『ズヴィン』誌)一九一三年第七—八号、八三ページその他)。もちろんユルケヴィチ一派は、ウクライナの民主主義派と大ロシアの民主主義派とを離間させるのにこれ以上いい方法を考えだすことはできなかった。このような離間策は、ウクライナの労働者を独自の民族的組織に分離することを主張する『ズヴィン』の筆者グループの全政策に一致している。*

* とくに、レヴィンスキー氏の著書『ガリチアにおけるウクライナ人労働運動発展の概観』(一九一四年、キエフ)につけたユルケヴィチ氏の序文を参照。

プロレタリアートを分裂させようとしている——『ズヴィン』の客観的役割はまさにこういうものであるが——民族主義的小市民のグループにとっては、民族問題について手のつけようのない混乱をまきちらすことは、もちろん、まったくふさわしいことである。もちろん、ユルケヴィチやリープマンの諸君は——彼らは「党の周辺をうろつく者」だと言われると「ひどく」憤慨するが——、自分が綱領で分離権の問題をどう解決しようとしているのかに、一言も、文字どおり一言もふれなかったのである。

さてつぎには、第三の、主要な「ズボンなしの少年」であるセムコフスキー氏をとろう。彼は解党派の新聞紙上で大ロシア人の公衆にむかって第九項を「こきおろし」てい

るが、しかもそれと同時に、「ある考えから」この条項を削除しようとする「提案には同意しない」と声明している!!

これは信じられないことであるが、事実である。

一九一二年八月、解党派の協議会(一八三)は、公式に民族問題を提起した。それから一年半のあいだに、セムコフスキー氏の書いた論文を除けば、第九項の問題について書いた論文はひとつも現われていない。しかもこの論文では筆者は、「ある考え（内緒の病気にでもかかっているのか？）から」綱領を修正しようとする「提案には同意しないで」、綱領に反対しているのだ!!　うけあってもよいが、世界じゅうを探しても、このような日和見主義、いや日和見主義より悪いもの、党の否認、党の解消の例はなかなかあるものじゃあない。

セムコフスキーの論拠がどのようなものかを示すには、次の一例をあげれば十分であろう。彼は、つぎのように書いている。

「ポーランドのプロレタリアートが、一つの国家のわく内で、ロシアのプロレタリアート全体とともに共同闘争をしようと望んでいるが、これに反してポーランド社会の反動諸階級がロシアからのポーランドの分離を望み、国民投票のさいに分離に賛成する多数票を集めるとしたら、いったい、われわれはどうしたらよいのか？　われわれロシアの社会民主主義者は、中央議会で、わがポーランドの同志たちとともに分離に反対投票すべきであろうか、それとも『自決権』を侵害しないために分離に賛成投票すべきであろうか？」（『ノーヴァヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』(一八二)第七一号）

以上が明らかなように、セムコフスキー氏はなにが問題であるかさえ理解していない！　彼は、分離権は、まさに中央議会ではなくて分離しようとする地方の議会（セイムや国民投票など）による問題の解決を前提としていることを、考えもしなかったのだ。

プリシケヴィチ一派も、ココシキン一派も分離について考えることさえ許すべからざることだとみなしているときに、民主主義のもとで大多数が反動派を支持したら「どうしたらよいのか」などという子供じみた当惑で、現実のほんとうの生きた政治が隠蔽されているのだ！　おそらく、全ロシアのプロレタリアは、いまはプリシケヴィチ一派やココシキン一派とたたかうべきでなく、彼らを避けてポーランドの反動階級とたたかうべきだというのだろう！

エリ・マルトフ氏が思想的指導者のひとりとなっている解党派の機関紙にも、これと同じような信じられないたわごとが書いてある。一九〇三年に綱領草案を起草し、それを通過させたあのマルトフ、そしてそののちに分離の自由

を擁護してものを書いたあのマルトフが、いまでは、どうやら次の法測にしたがって判断しているのである。

あそこには、利口なものは
いりはせぬ、
レアードやるがいいところ、
おれはなりゆき見ていよう。(三三)

彼は、レアードのセムコフスキーをやり、セムコフスキーが日刊新聞で、われわれの綱領を知らない新しい読者層にむかってこの綱領を歪曲し、際限なく混乱させるにまかせている!

そうだ、そうだ、解党主義ははるかにすすんでしまった。非常に多くの、かつては著名な社会民主主義者にさえも、もはや党派性の痕跡さえ残っていない。

もちろんローザ・ルクセンブルクを、リープマンやユルケヴィチやセムコフスキーの仲間と同列におくことはできない。だが、この連中が彼女の誤りにとびついているという事実は、彼女がどのような日和見主義に陥ったかをとくにはっきりと証明している。

一〇 結論

要約しよう。

マルクス主義理論一般からすれば、自決権の問題はなにもむずかしいものではない。一八九六年のロンドン大会の決定についても、自決権とは分離権としてしか考えられないことについても、また独立した民族国家の創設はあらゆるブルジョア民主主義的変革の傾向であることについても、実際に問題はありえない。

ある程度困難をつくりだしているのは、ロシアでは被抑圧民族のプロレタリアートと抑圧民族のプロレタリアートが肩をならべてたたかっており、また、たたかわなければならないということである。社会主義をめざすプロレタリアートの階級闘争の統一を維持し、ブルジョア的民族主義と黒百人組的民族主義のあらゆる影響に抵抗すること——これこそわれわれの任務である。被抑圧民族のなかでは、プロレタリアートを独自の党に組織することは、しばしばその民族の民族主義とのきわめて激しい闘争をひきおこすので、全体の展望がゆがめられ、抑圧民族の民族主義が忘れられてしまうことがある。

しかし、このゆがめられた展望が可能なのは、しばらくのあいだだけである。われわれが政治問題を提起する場合には、「クラクフ」の見地からではなく、全ロシアの見地からしなければならないことは、いろいろな民族のプロレタリアの共同闘争の経験が明らかすぎるくらいに示してい

る。ところで、全ロシアの政治で支配的な地位を占めているのは、プリシケヴィチ一派やココシキン一派である。彼らの思想が支配しており、「分離主義」と分離の思想をもっているというので異民族にくわえる彼らの迫害は、国会でも、学校でも、教会でも、兵営でも、幾百幾千の新聞でも、宣伝され、実行されている。全ロシアの政治的空気全体をよごしているのは、民族主義のこの大ロシア人的害毒である。他民族を隷属させることによって全ロシアの反動をつよめている民族は、なんと不幸なことか。一八四九年と一八六三年(三九)の思い出は、生きた政治的伝統になっている。この伝統は、きわめて大規模な嵐がおきないかぎり、さらに何十年にもわたって、あらゆる民主主義運動、とくに社会民主主義運動を困難にするおそれがある。

　被抑圧民族の一部のマルクス主義者の見解（彼らの「不幸」は、時とすると、人民大衆が「自」民族の解放の思想のために目をくらまされる点にある）が、時として当然のことのように思われるにしても、実際には、すなわち、ロシアにおける諸階級の勢力の客観的相互関係からすれば、自決権の擁護を放棄することは、最悪の日和見主義であり、プロレタリアートをココシキン一派の思想にかぶれさせるに等しいことは、疑う余地がない。これらの思想は、じつのところ、プリシケヴィチ一派の思想であり、政策なのである。

　したがって、ローザ・ルクセンブルクの見解は、はじめのうちはポーランドや「クラクフ」に特有な狭さ*として許しうるとしても、いたるところで民族主義、なによりも官製の大ロシア人的民族主義がつよまり、しかもそれが政治の方向を決めている現在では、そのような狭さは、許すことができないものにまでなりつつある。じじつ、この狭さにしがみついているのは、あらゆる民族の日和見主義者であって、彼らは「嵐」とか「飛躍」とかいった観念とは遠くへだたっており、ブルジョア民主主義的変革が終わったものと認めており、ココシキン一派の自由主義にひきつけられているのである。

＊ 全ロシアのマルクス主義者、まず第一に大ロシア人マルクス主義者が、諸民族の分離権を承認するからといって、それはけっして、個々の被抑圧民族のマルクス主義者の分離に反対する扇動を許さないことにはならない。それはちょうど、離婚の権利を承認するからといって、個々の場合に離婚に反対する扇動を許さないことにはならないのと同様に、理解しにくいことではない。だから、われわれは、いまセムコフスキーやトロツキーが「むしかえし」ている、ありもしない「矛盾」を嘲笑するポーランド・マルクス主義者の数が、今後かならずふえるものと思う。

大ロシア人的民族主義は、あらゆる他の民族主義とも同

じように、ブルジョア国でどの階級が首位を占めるかによって、いろいろの局面をとおるであろう。一九〇五年まで、われわれのところに見うけられたのは、ほとんど民族主義的反動派だけであった。革命後には、民族主義的自由主義派が生まれた。

わが国では、オクチャブリストもカデット（ココシキン）も、すなわち現在のブルジョア全体が事実上この立場に立っている。

今後、大ロシア人の民族主義的民主主義派の発生することは避けられない。「人民社会」党(一八五)の創立者のひとりペシェホーノフ氏は、（『ルースコエ・ボガートストヴォ』(一八六)誌の一九〇六年八月号で）農民の民族主義的偏見に慎重な態度をとるように呼びかけて、すでにこの見解を言いあらわしている。農民を「理想化している」とどんなに中傷されようとも、われわれボリシェヴィキは、農民の分別と偏見とを、プリシケヴィチに反対する農民民主主義と地主や僧侶と妥協しようとする農民の傾向とを、いつも厳密に区別してきたし、今後もつねにそうするであろう。

プロレタリア民主主義派は、いまでももう、大ロシア人農民の民族主義を考慮にいれなければならないし（それに譲歩するという意味ではなくて、それとたたかうという意味で）おそらく今後もかなり長いあいだ、そうしなければならないであろう。* 一九〇五年以後につよく現われてきた被抑圧民族のあいだの民族主義の勃興（たとえば、第一国会での「自治・連邦派」グループ、ウクライナ人の運動や回教徒の運動の成長などを思いおこせばよい）は、かならず、都市と農村における大ロシア人の小ブルジョアジーの民族主義をつよめるであろう。ロシアの民主主義的変革の進行が遅々としていればいるほど、いろいろの民族のブルジョアジーの民族的な迫害と罵り合いは、ますます頑強で、乱暴で、激しいものになるであろう。しかも、ロシアのプリシケヴィチ一派がなみはずれて反動的である結果、時とするとその隣接諸国家でははるかに大きな自由を得ているようなところの被抑圧民族のあいだに、「分離主義」的傾向が生まれる（かつつよまる）であろう。

* たとえば、ポーランドの民族主義がどのように変化しているかをたどってみることは興味ぶかいことであろう。すなわち、それは、小貴族(シュラフタ)の民族主義からブルジョア民族主義へ、そしてさらに農民の民族主義へとうつり変わっているのである。ルードヴィヒ・ベルンハルトは、その著書『プロイセン国家内のポーランド人社会』（『プロイセンにおけるポーランド人』という題のロシア語訳がある）で、ドイツ版ココシキンの見地に立ちながらも、きわめて独特な現象――民族と宗教と「ポーランド人の」土地のための闘争のなかで、ポーランド人農民のあらゆる協同組合その他の団体を結集するとい

うかたちをとった、在独ポーランド人の一種の「農民共和国」の樹立――について述べている。ドイツ人の抑圧は、まず貴族の民族主義を、ついでブルジョアの民族主義を、最後に農民大衆の民族主義（とくに一八七三年にドイツ人が学校でのポーランド語の使用に攻撃をくわえはじめてから）をよびおこして、ポーランド人を結集させ、彼らを分離させたのである。ロシアでも、事態は同じような方向にすすんでいる。しかも、それは、ポーランドについてだけではなく、その他の民族についても言える。

このような事情は、ロシアのプロレタリアートにたいして、二重の任務、もっと正しくいえば二面的な任務をあたえる。すなわち、あらゆる民族主義、なによりも大ロシア人的民族主義とたたかうこと、一般にあらゆる民族の完全な同権を認めるだけではなくて、国家建設の点での同権、すなわち民族自決権、分離権を認めること。――が、それと同時に、すべての民族のあらゆる民族主義との闘争を有利にすすめるために、ブルジョアの民族的分立の傾向に反対して、プロレタリア闘争とプロレタリア諸組織の統一を擁護し、それらを国際的統一体に緊密に結合するようにたたかうこと。

諸民族の完全な同権、民族自決権、すべての民族の労働者の融合――マルクス主義は、また全世界の経験とロシアの経験は、労働者にこの民族綱領を教えている。

この論文がすでに組みにまわってから、『ナーシャ・ラボーチャヤ・ガゼータ』[三九二]の第三号を受け取った。同紙でヴェ・コソフスキー氏は、あらゆる民族に自決権を認めることについて、つぎのように書いている。

「第一回党大会（一八九八年）の決議から機械的にとってきた――この大会はまたそれを国際社会主義者大会の決議から借りてきたのであるが――民族自決権は、討論から明らかなように、一九〇三年の大会では、社会主義インタナショナルがあたえたと同じ意味に、すなわち、政治的自決権、政治的独立をめざす民族自決の意味に理解された。こういうわけで、民族自決の定式は、領土的分立の権利ということを意味していて、現存の国家からぬけだす力のない、またはそうしようと望んでいない諸民族のために、特定の国家組織の内部で民族的諸関係をどう調整するかの問題にはまったくふれていない。」

この文章からわかるように、ヴェ・コソフスキー氏は、一九〇三年の第二回大会の議事録をもっており、自決のほんとうの（そして唯一の）意義を知っている。この事実を、ブンド派の新聞『ツァイト』[三九三]の編集部が綱領をあざけって、それがあいまいだと声明するために、リープマン氏を登場さ

せた事実と、比較してみるがよい!! ブンド派の諸君の「党風」は、なんと奇怪なものだろう。……大会が自決権を承認したことをコソフスキーはなぜ機械的にとってきたものだと言うのか、「アラーぞしろしめす」である。なにを、どのように、なぜ、なんのために反対するのか自分にもわからずに「反対したい」という人がよくあるものである。

一九一四年二―五月に執筆
一九一四年四―六月に雑誌『プロスヴェシチェーニエ』第四、五、六号に発表
署名――ヴェ・イリイン
全集、第五版、第二五巻、二五五―三二〇ページ所収
邦訳全集、第二〇巻、四二一―四九〇ページ所収

事項注

(一)　『ソツィアル-デモクラート』(『社会民主主義者』)——ロシア社会民主労働党中央機関紙（非合法）。一九〇八年二月から一九一七年一月まで発行。ボリシェヴィキが準備し、すでに部分的にヴィルノで印刷されていた第一号は没収され、すぐまたペテルブルグで印刷にかかったが、印刷されたものの大部分は憲兵の手に落ちてしまった。それから発行所は外国に移され、第二―第三二号（一九〇九年二月―一九一三年一二月）はパリで、第三三―第五八号（一九一四年一一月―一九一七年一月）はジュネーヴで発行された。全部で五八号出たが、そのうち五号には付録（『討論リーフレット』）がついていた。『討論リーフレット』は、一九一〇―一九一一年、パリで出された。

　編集局は第五回（ロンドン）党大会で選出された党中央委員会の決定によってボリシェヴィキ、メンシェヴィキ、ポーランド社会民主主義者の代表者から構成されたが、事実上の編集長はレーニンであった。レーニンはこの新聞に八〇点以上の論文と記事を書いた。レーニンは編集局の内部で解党派メンシェヴィキに反対し、ボリシェヴィキの路線を守ってたたかった。編集局の一部（カーメネフとジノヴィエフ）は解党派に調停主義的な態度をとり、レーニンの路線の遂行を妨害した。編集局員中のメンシェヴィキ——マルトフとダンは中央機関紙編集局での活動をサボると同時に『ゴーロス・ソツィアル-デモクラータ』で解党主義を公然と擁護し、党擁護派メンシェヴィキの中央機関紙への参加を妨害した。しかし、解党派にたいするレーニンの妥協のない闘争の結果、一九一一年六月、マルトフとダンは編集局から脱退した。一九一一年一二月以来、『ソツィアル-デモクラート』はレーニンによって編集された。

　『ソツィアル-デモクラート』は、反動期と革命運動の新たな高揚の時期には解党派、トロツキスト、召還派に反対し、非合法のマルクス主義党を維持し、その統一を固め、その大衆との結びつきを強化するボリシェヴィキの闘争で大きな意義があった。そしてプラハ党協議会（一九一二年）以後はボリシェヴィキ党の中央機関紙となり、第一次世界大戦中は戦争、平和、革命の諸問題についてのボリシェヴィキのスローガンの宣伝できわめて重要な役割を演じ、そのロシア国内での配布と再刷はロシア・プロレタリアートの政治教育、特に国際主義の育成、大衆の革命への準備に大いに役立った。

九、三七

(二)　ロシア社会民主労働党協議会——一九〇八年一二月二一―二七日（一九〇九年一月三―九日）にパリで開かれたロシア社会民主労働党第五回全国協議会のこと。議決権をもつ一六名の代議員が出席した。そのうち、ボリシェヴィキ五名、メンシェヴィキ三名、ポーランド社会民主党五名、ブンド三名。レーニンは党中央委員会の代表として出席した。ボリシェヴィキの代議員は直接ロシア国内で活動していた闘士たちで、党の最大の組織を代表していた（中央工業地方から二名、ペテルブルグから二名、ウラルから一名）。メンシェヴィキの代議員はいろいろな欺瞞的方法でカフカーズ組織からやっと委任状を手に入れた連中で、外国に住み、ロシア国内の活動と結びつきをもたない人々であった。協議会の席上で、ポーランド社会民主党の代議員はボリシェヴィキを支持し、ブンドは多くの問題で解党派メンシェヴィキに追随した。

議題——(一)ロシア社会民主党中央委員会、ポーランド社会民主党中央委員会、ブンド中央委員会、ペテルブルグ組織、モスクワ・中央工業地方組織、ウラル組織、カフカーズ組織の活動報告、(二)現在の政治情勢と党の任務、(三)社会民主党国会議員団について、(四)政治的諸条件の変化に関連する組織問題、(五)各地方における民族的(非ロシア人)諸組織との統一、(六)在外組織の諸問題、その他。

レーニンは「現在の情勢と党の任務について」報告し、国会議員団問題、組織問題その他について演説した。ボリシェヴィキはこの協議会で解党派と召還派という二つの種類の日和見主義にたいして闘争した。協議会はボリシェヴィキの決議案を採択した。この協議会についてはレーニンの論文『大道へ』(邦訳全集、第一五巻、三三三—三四一ページ)を参照。九、一七、一四一、一五七、三四〇

(三) 黒百人組(チェルノソーテンツイ)——一九〇五年につくられた極反動的暴力団体(ロシア国民同盟、天使長ミハイル同盟など)の総称。そこから一般に暴力的極右翼分子が「黒百人組」と呼ばれた。九、一三三、一六八、二六五、三〇七

(四) 社会主義者取締法——一八七八年にドイツでビスマルクがつくった弾圧法。大衆的労働運動の圧力のもとに一八九〇年に廃止された。九

(五) ロシア社会民主労働党中央委員会総会(いわゆる「合同」総会)——一九一〇年一月二—二三日(一月一五日—二月五日)にパリで開かれた。ボリシェヴィキとメンシェヴィキが同席した最後の総会。

党とその統一を強化する方法についての問題は一九〇九年の秋に特に鋭く提起された。一九〇九年一一月、レーニンは『プロレタリー』拡大編集局会議の決定にしたがって解党派と召還派にたいする共同闘争のためにボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキ(プレハーノフ派)との接近とブロック結成の計画を提案したが、ジノヴィエフ、カーメネフ、ルイコフらの調停派はレーニンの計画とは反対にボリシェヴィキと「ゴーロス」派(解党派)メンシェヴィキおよびトロツキストとの合同を達成しようと努力した。そのような合同は事実上ボリシェヴィキ党の解消を意味した。中央委員のドゥブロヴィンスキーとノギンも調停主義的動揺を示した。当時の党内情勢とロシア国内情勢が党の諸勢力の合同に関連する諸問題の解決を執拗に要求していたので、一九〇九年一一月一(一四)日にボリシェヴィキは、党中央委員会総会を早急に開く必要があるという声明を中央委員会在外ビューローに送った。

この一月総会にはあらゆる分派とグループの代表者、また民族的(非ロシア人)社会民主主義組織の代表者も参加した。総会では調停派が多数を占めた。

この総会でレーニンは日和見主義者および調停主義者とねばり強くたたかい、解党主義と召還主義に断固たる非難を浴びせるように努力し、ボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキとの接近の方針を堅持した。レーニンが執拗に要求した結果やっと、総会は解党主義と召還主義を非難する決定を採択したが、他方では、レーニンの意に反して、ボリシェヴィキの機関紙『プロレタリー』の廃刊とボリシェヴィキ中央部の解散についての決定が採択された。レーニンはボリシェヴィキ中央部の解消と同時に「ゴーロス」派や「フペリョード」派の中央部もなくすという条件を、総会の決定にふくめさせた。総会は、トロツキーの『プラウダ』(ウィーンの)に財政的援助をあたえるという決定をおこなった。ジノヴィエフとカーメネ

フはこれを党中央機関紙にしようとつとめた。またレーニンの抗議にもかかわらず、解党派メンシェヴィキも中央諸機関の構成員に選出された。

この総会における調停主義的諸決定は解党派と召還派に利益をあたえ、党に多大の害毒をもたらした。のちに「ゴーロス」派メンシェヴィキ、「フペリョード」派、トロツキストは一月総会の決定に従わず、その分派活動をつづけた。これに関連して、一九一〇年の秋、ボリシェヴィキは一月総会での諸分派の協定にもはや拘束されないと声明し、独自の機関紙『ラボーチャヤ・ガゼータ』(『労働者新聞』)を発刊し、新しい総会の招集を提唱し、一時中央委員会に移管したボリシェヴィキの資産と資金の返還を要求した。

一月総会の議事録は失われたまま、まだ発見されていない。一月総会の活動、そこでの解党派、「フペリョード」派、トロツキスト、調停派とのレーニンの闘争の詳細についてはレーニンの論文『政論家の覚え書』(本書一七一七四ページ)を参照。一〇、三七、九三、三四〇

(六)『フペリョード』グループ——ボリシェヴィキのなかから出てきた召還派、最後通告派、創神派の反ボリシェヴィキ的、反党的グループ、彼らの分派センターであるカプリ党学校が崩壊したのち、一九〇九年一二月にア・ボグダーノフとゲ・アレクシンスキーのイニシアチブで組織された。『フペリョード』(『前進』)がその機関論集(不定期)であった。

一九一〇年一月の党中央委員会総会では解党派＝ゴーロス派およびトロツキストと密接な連絡をとりながら行動し、同総会に自己の存在を「党出版グループ」として認めさせ、出版補助金さえ獲得したが、総会後にはその決定にしたがうことを拒否し、プラハ党協議会(一九一二年一月)以後は解党派メンシェヴィキおよびトロツキストと結合して協議会の決定に反対した。しかし、その反党的、反マルクス主義的な無原則的行動は労働者の反発を招き、その影響力はきわめて微々たるものにとどまった。一九一三年には事実上崩壊していたが、形式的には一九一七年二月革命のあとまで存続した。一〇、一七、九三、三三〇

(七)『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』(『社会民主主義者の声』)——メンシェヴィキの在外機関紙。一九〇八年二月から一九一一年一二月まで、はじめはジュネーヴ、のちにはパリで発行された。編集局員はアクセリロード、ダン、マルトフ、マルトィノフ、プレハーノフであった。第一号から解党派を擁護し、その反党活動を正当化した。プレハーノフがこの新聞の解党主義的立場を非難して、編集局から脱退したのちは、完全に解党派の思想的中心になった。一一、一四

(八)**召還主義**——第三国会から社会民主党議員を召還せよという、ボリシェヴィキの一部(ア・ボグダーノフ、ア・ヴェ・ルナチャルスキーその他)の主張。一九〇八年に独自のグループを結成してレーニンに反対。反動期には党は非合法活動だけをおこなうべきだと言い、国会、労働組合、協同組合など合法、半合法大衆団体への参加を拒否、党と大衆とを切り離す危険があった。一七、一三

(九)『プロレタリー』——ボリシェヴィキの非合法新聞。第四回(統一)党大会後にレーニンの編集のもとに一九〇六年八月二一日(九月三日)から一九〇九年一一月二八日(一二月一一日)まで五〇号発行。ウラジミルスキー、ヴォロフスキー、ルナチャルスキー、ドゥブロヴィンスキーが編集に参加。創刊号から第二〇号まではロシア国内で(ヴィボルグで製版、ペテルブルグで印刷、官憲の目をくらますために紙上にはモスクワ発行と記した)、第二一—四〇号

はジュネーヴで、第四一—五〇号はパリで、ロシア社会民主労働党ペテルブルグ、モスクワその他の地方委員会の合同機関紙として発行されたが、事実上ボリシェヴィキの中央機関紙であった。この新聞に掲載されたレーニンの論文と記事は一〇〇をこえる。ストルィピン反動期にボリシェヴィキ組織の維持と強化に、解党派、召還派＝最後通告派、創神派にたいする闘争に大きな役割を演じたが、一九一〇年の党中央委員会一月（「合同」）総会の決定にしたがって廃刊された。一七、二六九

（一〇）『プロレタリー』拡大編集局会議——レーニンの発案で一九〇九年六月八—一七（二一—三〇日）にパリで開かれ、ボリシェヴィキ中央部のメンバー九名とペテルブルグ、モスクワ州、ウラルの諸組織の代表者が参加した。ア・ボグダーノフ（マクシーモフ）とヴェ・エリ・シャンツェル（マラート）が召還派、最後通告派、創神派を代表し、モスクワ州組織の代表者シュリャチコフ（ドナート）が彼らを支持した。ジノヴィエフ、カーメネフ、ルイコフ、トムスキーは調停主義的立場をとった。

会議は召還主義と最後通告主義、創神主義的傾向（注一〇七）、国会活動にたいする態度、党内におけるボリシェヴィキの任務、カプリ島の党学校、フラクションの統一、党とは別個のボリシェヴィキ大会またはボリシェヴィキ協議会のための扇動、ア・ボグダーノフのフラクションからの除名、その他の諸問題を審議した。

会議は召還主義＝最後通告主義と創神主義をきびしく非難し、その理論はプロレタリア・イデオロギーを小ブルジョア的なアナルコ－サンヂカリズム的傾向にすりかえるものであることを強調し、すべてのボリシェヴィキにこれらの偏向と断固たたかうよう呼びかけ、この会議の決定に服従しないと声明したボグダーノフをボリシェヴィキ・フラクションから除名した。

会議はこれらの偏向者の「頑迷な分派根性」を鋭く批判し、ボリシェヴィキの任務は他の分派のマルクス主義的党擁護派分子と接近し、党の維持と強化のためにたたかうことにあると指摘した。会議はさらにカプリ党学校を召還派の新しいセンターとして非難した。

この会議の詳細については『プロレタリー』拡大編集局会議の諸資料（邦訳全集、第一五巻、四一五—四四〇ページ、第四一巻二六九—二八二ページ）を参照。一七

（一一）解党派——一九〇五年革命の敗北につづく反動期に革命的政策をすて、非合法党を解消しようとしたメンシェヴィキ。ストルィピン反動政府の許しをうけて合法的に活動しうるような「公然たる」労働者党の結成を主張した。一八、二六五

（一二）オクチャブリスト（「一〇月一七日同盟」）——「市民の自由」と「立法」議会を約束した一九〇五年一〇月一七日のツァーリの詔書が発布されたのちに、これを支持して結成された反革命的政党。大産業資本家と資本主義的経営をおこなう地主の利益を代表。指導者は工業家、モスクワの大家主グチコフと大地主ロジャンコ。ツァーリ政府の内外政策を支持。一九〇六年秋以降、与党となった。二〇、九〇、一六八、三一〇

（一三）マッハ主義者——オーストリアの物理学者、哲学者マッハとドイツの哲学者アヴェナリウスが創始した反動的な主観的観念論哲学——マッハ主義または経験批判論の支持者。マッハ主義は口先では観念論に反対し、近代自然科学の用語を使い、「科学性」を装いながら、マルクス主義の発展という偽善的口実にかくれて、実際にはマルクス主義哲学の基礎を修正しようとするものであったので、労働者階級にとってとくに危険な思想であった。メンシェヴィキの

知識人のあいだに広く普及し、解党派ボリシェヴィキの一部もその影響に陥った。レーニンは『唯物論と経験批判論』でマッハ主義の反動的本質を暴露した。三六、四四、一三三

(四)　ラサール派とアイゼナッハ派――一九世紀の六〇年代と、七〇年代のはじめにおけるドイツ労働運動内の二つの潮流。主として戦術上の問題、なによりもドイツ再統一の進路という当時のドイツの政治生活上の最も切迫した問題をめぐって、両派のあいだに激しいたたかいがおこなわれた。

ラサール派――ドイツの小ブルジョア社会主義者F・ラサールの支持者や追随者で、一八六三年にライプツィヒの労働団体の大会で創立された全ドイツ労働者同盟のメンバー。同盟の初代会長はラサールで、彼が同盟の綱領と戦術の基礎をまとめあげた。マルクスとエンゲルスは、ラサール主義の理論、戦術および組織原則を、ドイツ労働運動内の日和見主義的潮流として何度も激しく批判した。

アイゼナッハ派――一八六九年にアイゼナッハの創立大会で設立されたドイツ社会民主労働党の党員。マルクスとエンゲルスの思想的影響のもとにあったA・ベーベル、W・リープクネヒトが、アイゼナッハ派の指導者であった。ドイツ社会民主労働党はみずからを「国際労働者協会の一支部」と認め、「その志向をともにする」ものであると、アイゼナッハ派の綱領には述べてあった。同派は、マルクスとエンゲルスの不断の助言と批判をうけていたので、ラサール派よりも一貫した革命的政策をとった。

一八七一年におけるドイツ帝国の成立は、ラサール派とアイゼナッハ派のあいだの戦術上の主要な意見の相違をとりのぞいた。そして労働運動の高揚と政府の弾圧強化とにせまられて、両派は一八七五年のゴータ大会で合同し、単一のドイツ社会労働党（のちのドイツ社会民主党）をつくった。一三〇

(五)　エンゲルス『一八七五年三月一八―二八日付のベーベルへの手紙』、全集、第一九巻、八―九ページ参照。一三〇

(六)　『ゲ・ヴェ・プレハーノフの「ドネヴニーク」への必要な補足』――一九一〇年四月一七日に『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』編集部が発行したリーフレットで、プレハーノフに反対する文書。一三一

『ドネヴニーク・ソツィアル－デモクラータ』（『社会民主主義者の日記』）――プレハーノフが出していた不定期の機関誌。一九〇五年三月から一九一二年四月まで、長い間隔をおいて、ジュネーヴで発行され、全部で一六号を出した。一九一六年にペテルブルグで復刊されたが、一号で終わった。第九―一六号（一九〇九―一九一二年）でプレハーノフは解党派メンシェヴィキに反対し、非合法党組織を擁護したが、戦略・戦術の根本問題ではメンシェヴィキ的立場にとどまった。一三一

(七)　「ウィーン党擁護派社会民主主義クラブの決議」――レーニンがこの論文で述べているような党内の出来事に関連して、トロツキー派の「クラブ」が採択したこの決議は、解党派の分裂主義的行動には口をつぐみながら、中央委員会の「合同」総会の決定をたてにとって、レーニンの論文『党に反対する解党派の「ゴーロス」』を非難していた。一三一

(八)　最後通告主義――召還主義の一変種。社会民主党国会議員を教育して徹底した革命的議員にしあげる必要を理解せず、党中央委員会の決定に絶対服従せよとの最後通告を社会民主党国会議員団に突きつけ、これが履行されない場合には議員を国会から召還することを提案した。最後通告主義は隠蔽された召還主義、偽装された

召還主義であった。二九、九四

(二九) 『プラウダ』(ウィーン) ——一九〇八—一二年に発行されたトロツキストの新聞。はじめ三号はリヴォフ、あとはウィーンで出され、全部で二五号発行された。ウクライナの『スピルカ』同盟の機関紙として出された最初の二号を除いて、ロシアのいかなる党組織をも代表しない「個人企業」(レーニン) であった。編集者はエリ・デ・トロツキー。「超分派」の仮面に隠れて解党主義と召還主義を擁護し、ボリシェヴィズムに反対。革命家と日和見主義者とが一つ党内に同居できるとする中央主義的「理論」を宣伝。一九一〇年一月の党中央委員会総会後、公然たる解党主義的立場にたち、反党的『フペリョード』グループを支持。一九一二年に反党的八月ブロックの提唱者、組織者となった。三一

(三〇) ブンド (在リトアニア—ポーランド—ロシア・ユダヤ人労働者総同盟) ——一八九七年にヴィルノ (現在のリトワ・ソヴェト社会主義共和国首都ヴィリニュス) で設立、主としてロシア帝国西部諸州のユダヤ人手工業者を統合。一八九八年のロシア社会民主労働党第一回大会 (ミンスク) で「ユダヤ人プロレタリアートに関係のある問題についてだけ自主的な自治組織として」同党に加盟。

ブンドはロシア労働運動での民族主義、分離主義の担い手。第二回党大会でブンドをユダヤ人プロレタリアートの唯一の代表者と認めよとの要求が否決されたのち脱党。一九〇六年、第四回 (統一) 大会の決定により復党。

つねに党内の日和見主義的一翼 (「経済主義者」、メンシェヴィキ、解党派) を支持し、ボリシェヴィキの民族自決権という綱領的要求に対抗して、文化的民族自治の要求をかかげた。

反動期には解党主義、第一次世界大戦中は社会排外主義の立場をとり、一九一七年にはブルジョア臨時政府を支持。だがブンドの一部の時期にはブンドの指導者は反革命軍と結んだ。軍事干渉と内戦にソヴェト権力と協力する方向への転換がおこり、一九二一年三月ブンドはみずから解散。一部のメンバーはロシア共産党 (ボリシェヴィキ) に入党した。三一

(三一) 『オートクリキ・ブンダ』——ブンド在外委員会の不定期の機関誌。一九〇九年三月から一九一一年二月までジュネーヴで発行され、全部で五号を出した。三一、一五四

(三二) 「非常事態令」——本来一八八一年に施行された「国家秩序および公安保護のための措置にかんする規則」による特別措置をいう。ここはその比喩的転用。三四

(三三) 第四節 (b) 項——中央委員会一月総会の決議『党内事情について』の第四節は、社会民主主義運動の思想的=政治的任務の分野にかんするもので、その (b) 項は次のようになっていた。「こういう事情のもとでの社会民主党の戦術の不可分の要素は、プロレタリアートの階級闘争のすべての分野で社会民主主義的活動を拡大し深化し、また二つの偏向の危険を説きあかすという方法でそれらの偏向を克服することである。」三四

(三四) 『ナーシャ・ザリャー』(『われわれのあかつき』) ——解党派メンシェヴィキの合法月刊雑誌で、一九一〇—一九一四年にペテルブルグで発行された。この雑誌を中心にロシア国内の解党派の中央部が形成された。三五、一五五、二二〇、二五八、二七九

(三五) 『ヴォズロズデーニエ』(『復興』) ——解党派メンシェヴィキの合法雑誌。一九〇八年一二月から一九一〇年七月までモスクワで発行された。はじめは月刊であったが、一九一〇年には毎月二号を出した。ダン、マルトフ、マルティノフ等が寄稿した。三五、二二三

（二六）『討論リーフレット』——党中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』の付録で、中央委員会一月総会の決定により、一九一〇年三月六（一九）日から一九一一年四月二九日（五月一二日）までパリで三号発行された。編集局にはボリシェヴィキ、メンシェヴィキ、最後通告派、ブンド、プレハーノフ派、ポーランド社会民主党、ラトヴィア辺区社会民主党の各代表がはいっていた。三六

（二七）ゲード派——一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてジュール・ゲードとポール・ラファルグを指導者としたフランスの社会主義運動における革命的マルクス主義者の流派。

ジョレス派——フランスの社会主義者ジャン・ジョレスの支持者たち。「批判の自由」の名のもとにマルクス主義の基本命題の修正を唱え、労資協調を説き、一九〇二年改良主義的なフランス社会党を創立した。

エルヴェ派——フランスの社会主義者ギュスターヴ・エルヴェの支持者たち。エルヴェは、はじめ無政府主義者。のち社会党に入り、党内の「極左」派をなした。四三

（二八）学校委員会——一九一〇年の党中央委員会一月総会で、国外に党学校を設立するために任命された学校委員会をさす。委員は九名で、ボリシェヴィキ二名、メンシェヴィキ二名、フペリョード派二名、非ロシア民族組織のブンド、ラトヴィア社会民主党、ポーランド社会民主党各一名となっていた。四三

（二九）『社会主義月刊』——ドイツの日和見主義者の主要な機関誌で、国際日和見主義の機関誌の一つ。一八九八年から一九三三年までベルリンで発行された。第一次世界大戦のときには社会排外主義の立場をとった。四七

（三〇）ドレスデン決議——ドイツ社会民主党ドレスデン大会は一九〇三年九月一三—二〇日にひらかれた。大会の中心議題は、党の戦術と修正主義にたいする闘争との問題であった。大会は、ベルンシュタイン、ゲーレ、ダーヴィット、ハイネその他一部のドイツ社会民主党員の修正主義的見解を非難する決議を二八八対一一の圧倒的多数で採択した。しかし、修正主義にたいする闘争で、大会は十分に一貫した態度をとらなかった。修正主義者は党から除名されず、大会後も日和見主義的見解の宣伝をつづけた。四七

（三一）入閣論者（入閣主義者）——ブルジョア政府に社会主義者が閣僚として入閣することを支持する人々。一八九九年フランスの社会主義者ミルランが反動的ブルジョア政府に入閣したことから始まる。ミルラン主義またはジョレス主義とも言う。四七、一七三

（三二）アムステルダム決議——第二インタナショナルのアムステルダム大会が一九〇四年八月に採択した決議『社会主義的戦術の国際的原則』をさす。この決議は、社会主義者がブルジョア政府に参加すること、あるいは社会主義政党がブルジョア政党と協力することを禁止したものである。四七

（三三）道標派——一九〇九年にモスクワで発行された論集『道標』の執筆者たち。カデットの有力な政論家で反革命的自由主義的ブルジョアジーの代表者エヌ・ア・ベルヂャーエフ、エス・エヌ・ブルガコフ、エム・オ・ゲルシェンゾーン、ベ・ア・キスチャコフスキー、ペ・ベ・ストルーヴェおよびエス・エリ・フランクがそれである。道標派は、ロシアのインテリゲンツィアについての彼らの論文のなかで、ベリンスキーやチェルヌィシェフスキーその他のロシア人民のすぐれた代表たちの革命的民主主義の伝統を中傷しようと試みた。また彼らは、一九〇五年の革命運動を侮辱し、ツァーリ政府が「その銃剣と牢獄とによって」ブルジョアジーを「人民の狂

恐から」救ったとして、ツァーリ政府に感謝した。レーニンは、この論集を「自由主義的背教の百科全書」、「民主主義派に注がれる反動的汚水のたえまない急流」と呼んだ。四七、一三三

(三四) 『カフカーズからの手紙』――スターリンの手紙。この手紙はチフリスの解党派に反対して一九〇九年一二月に書かれた。『ソツィアル-デモクラート』編集局内のメンシェヴィキは、手紙を党中央機関紙に掲載することを拒否した。手紙は、数ヵ月後に、一九一〇年五月二五日(六月七日)付『討論リーフレット』第二号に、それにたいするカフカーズのメンシェヴィキの指導者エヌ・ジョルダニア(アン)の回答といっしょに掲載された。四八、二四九

(三五) 第三国会――貴族、地主および商工業ブルジョアジーに大多数の議席をあたえ、労働者と農民の議員数を減らすよう改悪された一九〇七年六月三(一六)日の選挙法によって成立した国会。一九〇七年一一月一(一四)日から一九一二年六月九(二二)日まで五回ひらかれた。議員総数四四二名、その党派別構成は、右派(極右派、国権主義者および穏健右派)一四七、オクチャブリスト一五四、ポーランド=リトアニア=ベロルシア・グループ七、ポーランド国粋派一一、進歩派二八、回教徒グループ八、カデット五四、トルドヴィキ一四、社会民主党一九であった。

この国会は、その階級的性格からみて、黒百人組的=オクチャブリスト的であり、革命勢力にたいする弾圧と迫害の反動政策を遂行するためのツァーリ政府の補助機関の役割を果たした。第三国会は、内外政策のあらゆる問題について反動的な六月三日体制を支持し、警察、憲兵、裁判所、監獄その他の弾圧機関の増員と支出増にかんする法案、兵役義務の改悪法案、労働保険の改悪法案、ストルィピンの農業立法の構想にもとづく農業法案等を通過成立させた。

社会民主党議員団は、はじめのうち幾多の誤りをおかしはしたが、ボリシェヴィキ派をふくんでいたため、第三国会の反人民的性格を暴露するうえに大きな働きをした。四九、二四三、二八六

(三六) 「ロンドンの遺産」――ロシア社会民主労働党第五回(ロンドン)大会(注六〇を参照)は、ボリシェヴィキが多数を制した大会であって、その遺産とは、同大会の諸決議、および同大会で成立した党中央部の体制のもとでひらかれた一九〇八年の一二月協議会の諸決議をさすものと思われる。五一

(三七) 「ベズゴロフツィ」とは「ベズザグラフツィ」(「無標題派」)をもじって言ったもので、「頭のない者」の意味。「ベズザグラフツィ」については注(四一)を参照。五三

(三八) エヌ・エス(人民社会党)――一九〇六年にエス・エル(社会革命党)右派から分立した小ブルジョア的な政党。カデットとのブロックを主張。「共和制の主張もすべての土地の要求も綱領から取り下げたから、カデットといくらも違わない」(レーニン)。指導者――ペシェホーノフ、アンネンスキー、ミャコーチン。二月革命後トルドヴィキと合同し、臨時政府を支持。十月革命後反革命的陰謀に参加。外国干渉と内戦の時期に消滅。五二、一四四

(三九) カデット(立憲民主党)――一九〇五年一〇月にオスヴォボジデーニエ派(解放同盟)を中核とし創設された自由主義的=君主主義的ブルジョアジーの主要な政党。民主主義を装おい、「人民自由党」(副党名)とも自称して勤労大衆をあざむき、立憲君主制の形でツァーリズムを温存しようとした。第一次大戦期にはツァーリ政府の侵略的対外政策を支持し、二月革命にさいしては君主制の救済に努力し、ブルジョア的臨時政府では主導的地位を占めて、反人民的政策をおこない、十月革命後は反ソヴェト・反革命活動に参加し、

外国干渉軍に協力、内戦終結後は国外に亡命して、反ソ活動をつづけた。その著名な幹部はミリュコフ、ムロムツェフ、マクラコフ、シンガリョフ、ストルーヴェ、ローヂチェフなど。五三、九〇、一三三、二六五、三二一

（四〇）　**ナロードニキ**――一八六〇―七〇年代に出現したロシア革命運動の一派（語源―ナロード＝人民）。ゲルツェンによって基礎づけられ、チェルヌィシェフスキーらによって発展させられた。専制の打倒と地主の土地の農民への移譲をめざし、農民を革命の基本勢力と考え、ロシアでは資本主義を通らずに農民共同体を基盤として社会主義を実現できるとする空想的農民社会主義の立場に立っていた。ナロードニキ主義は当時における農奴制の広範な残存と資本主義の未発達にもとづいていた。農民を立ち上がらせるためにナロードニキは「ヴ・ナロード」（人民の中へ）の標語のもとに農村におもむいたが、そこで支持を得られなかった。しかし、初期のナロードニキは農民のために民主主義を要求し、ツァーリズムと真剣にたたかう革命的民主主義者であった。後期（一八八〇―九〇年代）のナロードニキはツァーリズムへの宥和政策をとり、富農の利益を代弁し、マルクス主義と頑強にたたかった。レーニンは『「人民の友」とはなにか』（一八九四年）でナロードニキを全面的に批判した。

一八六一年に創設されたナロードニキの組織「土地と自由」団は一八六四年に解散し、一八七六年にペテルブルグにつくられた「革命的ナロードニキ北部グループ」は一八七八年に「土地と自由」団と改称した。一八七九年の大会後、「人民の意志」派と「黒い割替」派とに分裂した。五三、一五九、一九三、二六四

（四一）　**ベズザグラフツィ**（無標題派）――一九〇五―一九〇七年革命の退潮が始まった時期に結成されたロシアのブルジョア知識人の半カデット的、半メンシェヴィキ的グループ（エス・エヌ・プロコポーヴィチ、イェ・デ・クスコーヴァなど）。一九〇六年一―五月にペテルブルグで発行されていた政治週刊誌『ベズ・ザグラーヴィヤ』（『無標題』）にちなんでこの名称がつけられた。のちにカデット左派の新聞『タヴァーリシチ』（『同志』）の周囲に結集した。ベズザグラフツィは、形式的無党派の名にかくれながら、ブルジョア自由主義と日和見主義の思想を宣伝し、ロシアおよび国際社会民主主義派の修正主義者を支持し、プロレタリアートの独自の政策に反対した。レーニンは「ベズザグラフツィ」を、メンシェヴィキ的カデットまたはカデット的メンシェヴィキとよんだ。五三

（四二）　**『ナーシ・ポモイ』**――「われわれの汚水」という意味。解党派の『ナーシャ・ザリャー』を皮肉って言ったことば。五三

（四三）　**「寄食者たちの大会」**――第二回全ロシア著作家大会のこと。一九一〇年四月二一―二八日（五月四―一一日）に、解党派の『ナーシャ・ザリャー』やメンシェヴィキの『ソヴレメンヌイ・ミール』（『現代世界』）の代表も参加して、ペテルブルグでひらかれた。警察から要求されると、大会は、なんの抵抗も示さずに、出版の自由のための闘争についての決議の審議をとりやめた。五三

（四四）　**ポッセ派**――ヴェ・ア・ポッセは協同組合運動家で、『消費者の組合』という自由主義的ブルジョア的雑誌を指導していた。ここでレーニンがポッセ派といっているのは、解党派の連中がこの雑誌に寄稿していることをさしている。五三

（四五）　**公開状**（「一六人の手紙」）――解党派メンシェヴィキの公開状。これは、『ドネヴニーク・ソツィアル-デモクラータ』第九号（一九〇九年八月）で解党派とその指導者ポトレソフに反対したプレハーノフの発言にたいする回答であった。この公開状は『ゴーロス・ソツィアル-デモクラータ』第一九―二〇号（一九一〇年一―

二月）に発表された。レーニンはこの公開状を「ヘロストラトス式に有名な」文書と名づけた。五五

（四六）　**エス・エル**（社会革命党）——一九〇一年末にさまざまなナロードニキ・グループの合同によって成立した、農民を基盤とする小ブルジョア政党。機関紙誌は『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』（『革命ロシア』）と『ヴェーストニク・ルースコイ・レヴォリューツィー』（『ロシア革命通報』）。その見解はナロードニキ主義と修正主義との折衷であった。第一次革命の時期には、最も重要な闘争戦術として政治的テロルを広範に適用し、この目的で狭い「戦闘組織」を創設した。この時期に分裂して、右派はカデットに近い合法政党「勤労人民社会党」（エヌ・エス）をつくり、左派は半無政府主義的な「マクシマリスト」同盟をつくった。ストルィピン反動期には思想的、組織的に壊滅し、第一次世界大戦にさいしては社会排外主義の立場に立った。

二月革命後、メンシェヴィキ、カデットとともに臨時政府の主要な支柱となり、その指導者ケレンスキー、アウクセンチエフ、チェルノフは入閣した。十月革命後、左派は独立して、一時ボリシェヴィキと提携したが、一九一八年七月六日の武装反乱を契機として反ソヴェト闘争の道へすすんだ。エス・エルは外国干渉・内戦期には反革命陰謀にくわわり、ソヴェト国家と共産党の指導者にたいするテロルに狂奔した。内戦終結後もエス・エルは国の内外でソヴェト国家にたいする敵対行動をつづけた。六一、一四

（四七）　**第二国会**——一九〇六年七月の第一国会の解散のあとをうけて一九〇七年二月二〇日（三月五日）からひらかれた国会。議員総数五一八名、その党派別構成は、君主主義者とオクチャブリストからなる右派五四、カデットおよび同調者九九、非ロシア民族代表七六、無所属五〇、カザック・グループ一七、エス・エヌ一六、エス・エル三七、トルドヴィキ一〇四、社会民主党六五であった。

右派は、あらゆる問題でツァーリ専制を支持した。カデットは、ついにその反革命性をあらわし、専制と取り引きする立場をとった。左派は、議席数においては第一国会を上まわっていたが、革命が退潮期にはいっていたため、その力は弱かった。社会民主党議員団はメンシェヴィキが多数を占めていたため、その活動は、カデットとのブロックを結ぶとか、立憲主義の幻想をそだてるというような日和見主義の傾向を示した。レーニンはこの誤りを痛烈に批判した。ボリシェヴィキは、ツァーリズムと反革命的ブルジョアジーの裏切りを暴露し、党の革命的綱領を宣伝するための演壇として国会を利用した。

この国会の中心問題は土地問題であった。その他予算、飢民救済、失業対策、恩赦の問題などが審議された。

革命が力不足であることを見てとったツァーリ政府は、国会の解散を決意し、ストルィピンは、社会民主党議員団の反国家的陰謀を理由に、社会民主党議員全員の国会からの除名と、うち一六名の逮捕について国会の同意を求めた。カデットは大筋においてこれに賛成した。六月三（一六）日、第二国会は解散を命じられ、社会民主党議員は逮捕された。同時に、地主と大ブルジョアジーに圧倒的優位をあたえるよう改悪された新選挙法が公布された。第二国会の解散は、反動期の始まりをあらわしていた。六二、二四

（四八）　レーニン『エス・エルのメンシェヴィキ』、全集、第一一巻、一八七ページを参照。六一

（四九）　**アゼフ主義**——エス・エル党の指導者のひとりで挑発者アゼフの名からとったもので、政治的裏切りのこと。六三

（五〇）　レーニン『党の統一にたいする障害の一つ』、全集、第一六巻、一九八―二〇〇ページを参照。六八

（五一）　**ラボーチエエ・デーロ派**――在外ロシア社会民主主義者同盟の不定期機関誌『ラボーチェエ・デーロ』（ジュネーヴ、一八九九―一九〇二年）を中心とする「経済主義者」の一派。レーニンは『なにをなすべきか』（一九〇一―〇二年）で彼らを批判した。六八

（五二）　**イスクラ派**――レーニンが創設したロシア最初の全国的なマルクス主義的非合法新聞『イスクラ』（旧）を中心に結集した革命的社会民主主義者の一派。本書注（二〇八）、（二一六）を参照。六八、二六八

（五三）　**人身攻撃的な悪罵の論集**――『ゲ・ヴェ・プレハーノフの「ドネヴニーク」への必要な補足』をさす。注（一六）を参照。六九

（五四）　**「サウロのパウロへの転化」**――サウロはパウロの元の名。はじめサウロはキリストの弟子を脅迫、殺害していたが、改心してイエスのことを宣伝するようになった（新約聖書の使徒行伝の篇）。ここではプレハーノフがレーニン反対の立場からレーニンと協同関係に立つようになったことをさす。

（五五）　**『ドネヴニーク』**――『ドネヴニーク・ソツィアルーデモクラータ』（『社会民主主義者の日記』）のこと。注（一六）を参照。七〇、二二九

（五六）　**第一国会**――ヴィッテ内閣のもとで一九〇六年四月二七日（五月一〇日）に召集された国会。ヴィッテ国会ともいう。

一九〇五年一〇月一一日の詔書（注七六を参照）で「立法」議会を国民に約束したツァーリ政府は、一二月一一（二四）日、国会が政府に都合のよいものとなるような選挙法を、また一九〇六年二月二〇日（三月五日）には、国会を通過した法案にたいする拒否権を参議院にあたえる法律を、さらに四月二三日（五月六日）には、国政上最も重要な諸問題を国会の審議からはずす法律を公布した。

選挙は、一九〇六年二―三月におこなわれた。ボリシェヴィキは選挙のボイコットを宣言した。これは、国会にたいする国民の信頼をゆるがせはしたが、選挙の施行を妨げることはできなかった。この不成功は、メンシェヴィキの譲歩的態度と農民の立憲主義的幻想によるところが少なくなかった。結局国会が召集されたとき、レーニンは、革命的宣伝のために国会を利用するという任務を提起した。

第一国会の議員総数は四七八名、その党派別構成は、カデット一七九、自治派（ポーランド国粋派、ウクライナ、バルト三国のブルジョア民族主義者グループ等）六三、オクチャブリスト一八、無所属一〇五、トルドヴィキ九七、社会民主党一八であった。

この国会の中心問題は土地問題であった。カデットとトルドヴィキがそれぞれ法案を提出した。カデットは、農民の農具で耕作されるか小作されている地主所有地についてだけ「公正な価格で」の買取りを認め、結局は地主的土地所有を維持しようとした。

国会は弱体で、その決定は中途はんぱであったが、政府の期待にはそわず、政府は六月八（二一）日国会を解散した。七〇

（五七）　全集、第一一巻、一六八―一七三ページを参照。七〇

（五八）　全集、第一三巻、八五―一〇三ページを参照。七〇

（五九）　**S・D・F**（イギリス社会民主主義連盟）――一八八四年に創立されたもので、改良主義者（ハインドマンその他）や無政府主義者とならんで、マルクス主義の支持者（ハリ・クウェルチ、トム・マン、エドワード・エーヴリング、エリナー・マルクス－エーヴリングその他）もはいり、イギリス社会主義運動の左翼を形成した。エンゲルスは、連盟が教条主義とセクト主義におちいり、イギリスの大衆的労働運動から遊離し、イギリスの特殊性を無視してい

ると言って批判した。一九〇七年、連盟は社会民主党と改称し、さらに一九一一年、独立労働党の左派とともにイギリス社会党を結成した。一九二〇年、イギリス社会党は社会主義統一グループとともに、イギリス共産党の結成に重要な役割を果たした。七二

(六〇) エンゲルスの論文『ロンドンの五月四日』(二三巻選集、第一七巻、二〇五―二一三ページ)をさす。なお、エンゲルスのゾルゲあての二通の手紙――一八八六年一一月二九日付(二三巻選集、第一七巻、二五一―二五四ページ)と一八八九年五月一一日付――を参照。七二

(六一) 論文『メンシェヴィキ的ロシア革命史におけるプロレタリアートのヘゲモニーの解消(ア・ポトレソフはどのようにして同志プレハーノフと「イスクラ」を一掃したか)』(一九〇九年九月一八(五)日、一〇月一六(三)日付『プロレタリー』第四七―四八合併号、第四九号)の筆者カーメネフのこと。七三

(六二) **一月九日事件**(「血の日曜日」)――一九〇五年一月九日、僧ガポンが創設した「ペテルブルグ市ロシア工場労働者の集い」によって組織されたペテルブルグ労働者(一四万人以上)の冬宮への平和な請願デモにたいしてツァーリ政府の命令で軍隊が発砲し、冬宮前広場で死者一千人、負傷者二千人以上を出した事件。労働者集会における請願の審議にさいしてボリシェヴィキは、プロレタリアートは革命的闘争によってのみ自分の権利を獲得できることを説明し、請願に社会民主主義的要求を盛りこんだ。しかし、労働者のツァーリへの信頼が強かったので、請願デモをやめさせることができなかった。この事件はツァーリへの信頼を打ちくだき、全国に専制打倒の抗議ストをまきおこし(一月中のストライキ参加者四四万人)、一九〇五年革命の発端となった。七七、八〇

(六三) **フートル農民**――フートルとは、ハンガリア語の határ からきたことばで、元来は所有者の家屋敷、農業用建物をもふくむ特別の土地のこと。これは農村共同体が解体していくにしたがって形成される個人的土地所有にもとづく私有地である。しかしフートルをもつことができたのは富裕な農民だけにかぎられた。ストルィピンの改革は、このフートル農民を大量につくり出して、農業における資本主義の発展を促進した。六八

(六四) **トルドヴィキ**(トルドヴァヤ・グルッパ)(勤労者党)――ナロードニキの流れをくむ農民や知識人から成るロシア国会内の小ブルジョア民主主義者のグループ。一九〇六年四月、第一国会の農民出身議員からトルドヴィキ議員団が結成された。すべての身分的、民族的制限の撤廃、ゼムストヴォと都市自治体の民主化、普通選挙権を要求。ナロードニキの土地均等用益の原則から出発して、国有地等を没収して土地の全国民共同フォンドをつくることを農業綱領とした。国会では、トルドヴィキは小経営主としての農民の階級的本性からカデットと社会民主党とのあいだを動揺したが、それでも農民大衆を代表していたので、ボリシェヴィキはツァーリ専制とカデットにたいする共通の闘争のために国会内でトルドヴィキと個々の問題にかんする協定をむすぶという戦術をとった。一九一七年にトルドヴィキは「人民社会党」と合同して、ブルジョア臨時政府を積極的に支持し、十月革命ではブルジョア反革命の側に立った。九六、一六二、一七三、一九三、二〇四

(六五) **『ラボーチャヤ・ガゼータ』**(『労働者新聞』)――レーニンの指導のもとに一九一〇年一〇月(一一月)から一九一二年七月(八月)までパリで発行されたボリシェヴィキの非合法新聞。全部で九号出た。首尾一貫して解党派、召還派、トロツキストとたたか

い、プラハ協議会（一九一二年一月）の決定によってロシア社会民主労働党（ボリシェヴィキ）の公式機関紙として認められた。レーニンの論文一〇以上を掲載。〈八〉

（六六）**『ロシアにおける党内闘争の歴史的意味』**――一九一〇年九月にドイツ社会民主党の雑誌『ノイエ・ツァイト』にマルトフとトロツキーの論文が掲載されたのに関連して書かれたもの。これらの論文では、ロシアにおける党内闘争の実際の意味と一九〇五―一九〇七年の革命の歴史とがねじまげられていた。

レーニンは、この論文によってマルトフとトロツキーの発言に答えようとした。しかし、雑誌の指導者――カウツキーとヴルム――は、レーニンの論文を掲載する気がなかった。彼らの提案により、ユリアン・マルフレフスキー（カルスキー）がマルトフへの回答を書くことをひきうけた。マルフレフスキーはその論文をレーニンにあらかじめ一読してもらうために送るとともに、レーニンがこの論文だけで満足することに同意してほしいと、カウツキーおよび自分の名で要請した。レーニンは、マルフレフスキーにあてた一九一〇年九月二四日（一〇月七日）付の返信で、これに同意した。レーニンがトロツキー批判の論文を書きあげたことは、カウツキー夫妻やラデックにあてた彼の手紙からも明らかである。論文は一九一一年四月にようやく発表された。〈八〉

（六七）**『ノイエ・ツァイト』（『新時代』）**――ドイツ社会民主党の理論雑誌。一八八三年から一九二三年までシュトゥットガルトで発行。編集者は一九一七年一〇月までカール・カウツキー、それ以後はハインリヒ・クノーであった。マルクス、エンゲルスのいくつかの重要著作を掲載したが、エンゲルスの死後、ベルンシュタインなど修正主義者の論文を掲載し、第一次大戦期には中央主義的立場をとり、事実上社会排外主義者を支持した。〈八、二四〉

（六八）**ブランキ主義**――フランスの革命家で空想的共産主義の著名な代表者ルイ・オギュスト・ブランキにひきいられるフランス社会主義運動内の一潮流。ブランキ主義者は、プロレタリアートの階級闘争によらずに、少数のインテリゲンツィアの陰謀によって、人類が賃金奴隷制から解放されることを期待していた。彼らは、革命党の活動を秘密陰謀団の行動にすりかえることによって、蜂起の勝利に必要な具体的情勢を無視し、大衆との結びつきを軽視した。〈一〇〉

（六九）**『新ライン新聞』**――一八四八年六月一日から一八四九年五月一九日まで、ドイツのケルンで発行されていた。新聞の指導者はマルクスとエンゲルスで、マルクスが編集長であった。反動によってくわえられた打撃のため、第三〇一号で廃刊をよぎなくされた。〈一二〉

（七〇）マルクス『封建的諸負担廃止法案』、全集、第五巻、二七五―二八〇ページを参照。〈一二〉

（七一）**マクデブルクにおけるベーベルのことば**――一九一〇年九月一八―二四日にマクデブルクでひらかれたドイツ社会民主党大会におけるベーベルの発言をさす。国民自由党は、一八六六年にプロイセンの進歩党からわかれてできた政党で、反動的大ブルジョアジーの利益を代表していた。同大会についてはレーニン『二つの世界』、全集、第一六巻、三二一―三三〇ページを参照。〈一三〉

（七二）ロシア社会民主労働党第四回（統一）大会で採択された決議『農業問題についての戦術的決議』をさす。この決議は全集月報第一〇号に訳出してある。〈一三〉

（七三）**一八四八年のマルクスのことばとメーリングのことば**――前者については、一八四八年九月一四日付の『新ライン新聞』にの

ったマルクスの論文『危機と反革命』（九月一三日執筆）、全集、第五巻、四〇二―四〇五ページを参照。マルクスのことばは、――「すべて革命のあとにつづく臨時的な国家秩序は、独裁を、しかも精力的な独裁を必要とする。」（同四〇二ページ）。この論文は、メーリングが出版した『カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルスおよびフェルディナント・ラサールの遺稿から』（シュトゥットガルト、一九〇二年）の第三巻に収録された。メーリングのことばというのは、この巻に書いたメーリングの序説的小論の一つ『九月危機』のなかにある。（八四）

（七四）　レーニン『ボイコットについて』、全集、第一一巻、一二八―一三六ページを参照。（八六、二六八）

（七五）　**フロンド派**――フランスのルイ一四世時代の一六四六―一六五三年に絶対主義的王党に反対した反政府的貴族＝ブルジョアジーの一味。転じて、個人的な動機からの反対を意味する。（八六）

（七六）　**一〇月一七日**（の詔書）――一九〇五年秋全国的政治ストライキが最高潮に達したとき、一〇月一七日に公布されたツァーリの詔書をさす。ツァーリはこの詔書で、「市民の自由」と「立法」議会を約束した。詔書は専制の政治的策略であって、その真意は、時をかせぎ、革命勢力を分裂させ、ストライキを打ちやぶり、革命を鎮圧することにあった。詔書は、革命がツァーリズムから奪いとった譲歩であるが、この譲歩は、けっして自由主義者やメンシェヴィキが主張したように革命の運命を決定するものではなかった。ボリシェヴィキは詔書の真の内容を暴露した。（八六、三三七、三三九）

（七七）　**ポグロム**――帝政ロシアで反動政府や支配階級が一部のおくれた住民大衆をけしかけて起こさせた反動的排外主義的迫害行動。ふつう特定の民族、とくにユダヤ人を対象とし、殺人や傷害、財産の破壊や略奪などをともなった。（八九、三一三）

（七八）　マルクスの参加のもとにエンゲルスが書いた『ドイツにおける革命と反革命』の一論文『プロイセン憲法制定議会――フランクフルト国民議会』の中の命題をさす（全集、第八巻、七四ページを参照）。『ドイツにおける革命と反革命』はマルクスの署名のもとに『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』に一八五一―五二年に連載された。その実際の著者がエンゲルスであったことは、ずっとのち、一九一三年に、マルクスとエンゲルスの往復書簡が発表されてから確認された。マルクスは同じ考えをL・クーゲルマンにあてた一八七一年四月一七日付の手紙で述べている。（選集、第八冊、一九六―一九七ページを参照）。（八九）

（七九）　**ゼムストヴォ**――一八六四年にロシアの中央諸県に設けられた地方自治体。ゼムストヴォの設置は、クリミア戦争の敗北後の社会的憤激と革命的攻撃の圧力によってツァーリズムがよぎなくされたブルジョア的改革の一つ。わずかな譲歩によって穏健な自由主義者を買収することを目的とするものであったが、事実上貴族に支配されていた。執行機関はゼムストヴォ参事会で、その議長は郡または県の貴族会長。知事と内務大臣の監督下におかれ、その権限は、経済、保健、教育、行刑、道路、土木、消防などの純地方的な問題に限られた。知事と内務大臣はゼムストヴォのいかなる決定も無効にすることができた。（九〇、一一七）

（八〇）　**一九〇七年六月三日のクーデター**――第二国会の解散、社会民主党国会議員の逮捕をさす。注四七を参照。（七五、九二、一二四、一六八、一八五、二四一、三一〇）

（八一）　一九〇八年五月末にひらかれたロシア社会民主労働党モスクワ全市協議会で、召還派は、社会民主党議員を国会から召還しよ

うとする彼らの決議案をとおそうとしたが、かえって代議員大多数の反撃をくって敗退した。九三

(八二)『ジーズニ』(『生活』)——合法的社会・政治雑誌、一九一〇年八月と九月にモスクワで発行された解党派メンシェヴィキの機関誌。全部で二号出ただけであった。九四

(八三) **論文『ロシアにおけるストライキ統計について』**——この論文のなかでレーニンは、工場監督官ヴェ・イェ・ヴァルザールがあつめた官庁統計の資料を利用している。レーニンが統計資料の検討に着手したのは、一九一〇年九月末のことであった(『レーニンスキー・ズボールニク』第二五巻、一二九—一五五ページ所収の彼の手稿ノート『ロシアにおけるストライキ統計』を参照)。レーニンは、あつめた資料をもとにして、ロシア革命史の概説を書くつもりであった。彼の予定によると、この概説は三〇〇ページほどの単行本になるはずで、彼はそれをのちにドイツ語に訳そうと考えていた。しかし、この論文が書かれただけで、予定していた大きな論文はしあげられなかった。九七

(八四) **最後のモヒカン族**——モヒカン族は北アメリカに住んでいたインディアンの一つで、いまは死滅している。F・クーパーの同名の小説から転じて、「最後のモヒカン族」というのは、死滅しつつある社会現象の最後の代表者をさす。一〇三

(八五) ア・ヴェ・ポゴジェフ『ロシアにおける労働者数とその構成の計算。労働統計資料』、サンクトペテルブルグ、帝室科学院刊、一九〇六年のこと。一〇四

(八六) **ストライキ参加者数**——同じ表を、レーニンは論文『ロシアにおける党内闘争の歴史的意味』のなかでも引用している(本書八六ページを参照)が、そこでは、レーニンは、一九〇五年の政府統計とおなじく、混合ストライキを政治的ストライキに入れている。だが論文『ロシアにおけるストライキ統計について』のなかでは、彼は官庁統計のこの不正確さを訂正して、混合ストライキを経済的ストライキに入れている。二つの表が、総数ではあっていながら、内訳がちがっているのは、そのためである。一一一

(八七) **ゼムストヴォ懇親会カンパニア**——ゼムストヴォ議員などの自由主義者が中心になって懇親会という名目で会合を開き、多少とも反政府的な気勢を示したブルジョア自由主義的反政府運動。一一三

(八八) **二月勅令**——一九〇五年二月一八日(三月三日)に発布されたロシア皇帝ニコライ二世の二つの勅令をさす。第一のものは、「住民から選出された人々を立法提案の予備的起草ならびに審議に参加させる件」についてのブルィギン内相あての勅書。第二のものは、「国家施設の充実、国民福祉の改善」にかんする個人および機関の請願の審理を閣僚会議(政府)に課した元老院あての勅令。一一三

(八九) **八月六日の法律(いわゆるブルィギン国会)**——一九〇五年八月六(一九)日、二月勅令にもとづいて国会の開設にかんする詔勅、国会設置法、国会選挙規則が公布された。この国会は、これらの法規の起草にあたった特別委員会の議長ア・ゲ・ブルィギン内相の名をとって「ブルィギン国会」と通称された。選挙権は地主、資本家、少数の農民(家長)にしかあたえられず、労働者は除外された。四一二の議席のうち農民に割り当てられた議席は五一にすぎなかった。この国会は立法権をもたず、ただツァーリの諮問機関としていくつかの問題を審議できるだけであった。レーニンはこれを「〃人民代議制〃にたいする最も厚かましい嘲弄」(全集、第九巻、一九六ページ)と特徴づけた。

ボリシェヴィキはブルィギン国会の積極的ボイコットを呼びかけ、

武装蜂起、革命軍、臨時革命政府のスローガンに扇動を集中したが、メンシェヴィキはこの国会への選挙に参加してもよいと考え、自由主義的ブルジョアジーとの協力を主張した。

ボリシェヴィキはブルィギン国会ボイコットのカンパニアをすべての革命的勢力を動員し、大衆的政治的ストライキをおこし、武装蜂起を準備するために利用した。革命運動の高揚と一〇月の政治的ストライキの結果、選挙はついにおこなわれず、政府はこの国会の召集に失敗した。そして専制を救うために、一九〇五年一〇月一七(三〇)日の詔書で言論・集会・結社の自由、人身の不可侵を宣言し、立法機能をもつ国会の開設を約束することを余議なくされたのである。一三、二八

(九〇) レーニンはチェレヴァニンの著書『革命におけるプロレタリアート』(モスクワ、一九〇七年)を念頭においている。チェレヴァニンはその中で「強奪的な方法で八時間労働日を獲得しようとする闘争は、革命にとって害にしかならない不幸な考えである」と述べている。マルトフも、雑誌『ナーシャ・ザリャー』第七号(一九一〇年七月)と雑誌『ノイエ・ツァイト』第五一号(一九一〇年九月一六日)に掲載された論文で同じ思想を表明した。二八

(九一) 論文『ヨーロッパの労働運動における意見の相違』は、新聞『ズヴェズダ』第一号の「在外通信」の欄に発表された。一三

(九二) ドイツ社会民主党の「青年派」——一八九〇年に党内に発生した小ブルジョア的な半ば無政府主義的な一派。グループの中核をなしたのは「学歴の浅い学生」と若い文筆家たちであった。この派は、社会民主党員が議会に参加することをすべて否定した綱領をかかげた。エンゲルスは「青年派」を、「いがみあいと陰謀とによって党を解体」させようとつとめる「革命的空文句」の達人と呼んだ。一八九一年一〇月のエルフルト党大会で、この一派は除名された。一三七

(九三) 八〇年代はじめのヨハン・モスト——モストはドイツ社会民主党員で、党にたいする攪乱的行動のかどで一八八〇年代のバーデン大会で党から除名された人。彼は八〇年代に無政府主義に同調した。一三七

(九四) 『ズヴェズダ』(『星』)——『プラウダ』に先行して創刊されたボリシェヴィキの合法新聞。一九一〇年一二月一六(二九)日から一九一二年四月二二日(五月五日)までレーニンの国外からの思想的指導のもとにペテルブルグで出された。一九一二年二月二六日(三月一〇日)には、『ズヴェズダ』と並行して『ネフスカヤ・ズヴェズダ』(『ネヴァの星』)第一号が出た。これは、『ズヴェズダ』が閉鎖されてからは、そのあとをつぐ出版物となり、同年一〇月五(一八)日まで出された。

モロトフ(スクリャビン)、オリミンスキー、バトゥーリン、ポレタエフ、エレメーエフ、ゴーリキーらが寄稿。一九一一年の秋までは党擁護派メンシェヴィキ(プレハーノフ派)も参加した。レーニンは『ズヴェズダ』と『ネフスカヤ・ズヴェズダ』に約五〇の論文を発表した。

合法的な『ズヴェズダ』は戦闘的なボリシェヴィキ新聞で、非合法の党の綱領をまもりとおした。『ズヴェズダ』は労働者通信員の欄をもうけて、労働者との恒常的な確固としたつながりを打ちたてた。『ズヴェズダ』の発行部数は五—六万にのぼった。新聞はたえず政府の圧迫をうけ、『ズヴェズダ』と『ネフスカヤ・ズヴェズダ』の全九六号のうち、三九号は没収され、一〇号については、罰金を課された。『ズヴェズダ』は日刊のボリシェヴィキ新聞『プラウ

ダ』の刊行を準備し、『プラウダ』の創刊の日に閉鎖された。一二七

（九五）　**農奴制崩壊**――ロシアにおける農奴制の廃止。「農民改革」とも言う。それは国の経済的発展、封建制・農奴制の危機、資本主義的諸関係の発生と発展の結果、支配階級（農奴主・地主）がみずから余儀なく上から施行したブルジョア的改革であった。クリミア戦争（注九六）における敗北は農奴制ロシアの腐敗と無力をまざまざと見せつけた。それは農民運動の成長とあいまって政府をして農奴制廃止にふみきらせた。一八六一年二月一九日、アレクサンドル二世は農奴制廃止の詔勅（宣言）に署名した。それによって二二五〇万人の農民が農奴としての身分的隷属から解放されたが、土地は地主の所有に残され、農民はその土地を高い金を支払って買取らなければならず、依然として種々の束縛的義務を負わなければならなかった。農民への土地の移譲は地主の自由意思にまかされ、地主は重要な土地を「切取り地」として手元に残しておくことができた。革命的民主主義者はこの改革の狭さ、その農奴制温存の性格を指摘した。一三三、一六八

（九六）　**クリミア戦争**――一八五三―一八五六年、ロシア一国にたいしてトルコ、イギリス、フランス、サルデーニャ四国が連合しておこなった戦争。東方戦争とも言い、主戦場はクリミア半島、とくに三四九日間にわたったセヴァストーポリ攻防戦に戦闘が集中された。原因はイギリス、フランス、ロシアの東方膨張政策の衝突にあり、パレスチナ聖地管理権をめぐるフランス、ロシアの係争が開戦のきっかけとなった。戦争はロシアの敗北に終わり、ロシアはベッサラビアを失った。一三四

（九七）　**農民司政長**――農村地方の一郡を数地区に分け、その各地区の司法・行政権力をその一身に掌握した官吏で、地元の貴族から任命された。これは一八八九年に従来の治安判事にかわってもうけられた官職で、一八六一年の農民改革に対応する一連の地主的反動改革の頂点をなすもので、事実上、農民にたいする地主の無制限の権力を復活した。一三五、一三九

（九八）　**『ノーヴォエ・ヴレーミャ』（『新時代』）**――一八六八年から一九一七年一〇月までペテルブルグで発行されていた日刊新聞。初めは穏健自由主義的であったが、一八七六年から反動的な貴族および官僚層の機関紙になり、ツァーリ政府に買収されて革命運動にたいする攻撃に従事した。一九〇五年以降は黒百人組の機関紙の一つになった。二月革命後、臨時政府の反革命政策を支持して、ボリシェヴィキを攻撃。一九一七年一〇月二六日（一一月八日）ペトログラード・ソヴェト軍事革命委員会によって禁止された。一三六、一六九、三三三

（九九）　**山岳党（ジャコバン党）**――一八世紀末のフランス・ブルジョア革命で絶対主義と封建制度の廃止を強硬に主張した当時の最も革命的な一派。レーニンはロシア社会民主党内の革命的社会民主主義者を「プロレタリア的ジャコバン党」とよんだ。一三八

（一〇〇）　**ジロンド党**――一八世紀末のフランス・ブルジョア革命で革命と反革命とのあいだを動揺し、君主制との取引の道をすすんだ一派。レーニンはロシア社会民主党内の日和見主義的潮流を「社会主義的ジロンド党」とよんだ。一三八

（一〇一）　**『デーロ・ジーズニ』**――解党派メンシェヴィキの合法機関誌。一九一一年一―一〇月にペテルブルグで発行され、全部で九号出た。一四〇

（一〇二）　**一九〇六年一一月九日（一九一〇年六月一四日）の農業法**――いわゆる「ストルィピン農業改革」の柱となった法律。ツァーリ政府は一九〇五年革命ののち富農を育成してこれを農村におけ

るツァーリズムの社会的支柱にする目的で一九〇六年の末期から一九一六年までのあいだに多くの農業立法をおこなった。この政策は当時の首相の名をとって「ストルィピン農業改革」と呼ばれた。それは、プロイセン的な道によって農村における資本主義の発展を促進するもので、政治的には農民の注意を地主にたいする革命的闘争からそらし、分与地をめぐる農民内部の闘争に向けさせようとする反動的な政策であった。その中心をなすのが、農民がオープシチナ（農民共同体）から出て、その分与地を個人的所有にする手続を定めた一九〇六年一一月九日の政令であった。この政令は若干の修正ののち国会と参議院で可決され、一九一〇年六月一四日の法律となった。一九〇七—一九一六年の一〇年間に二〇〇万戸の農家がオープシチナから出た。そして貧農は農民人口の三分の二に達した。これらすべては国内市場の狭隘化、農業の退化、農業危機の深刻化をもたらし、新たな人民革命を不可避的なものにした。一四三

（一〇三）**イワンの馬鹿**——イワンはロシア民話にたびたび出てくる馬鹿正直の典型的人物。ここではとくに「馬鹿のひとつ覚え」という意味。一四五

（一〇四）**ロシア組織委員会**——党協議会を招集する仕事のために、一九一一年九月末に、地方党組織代表者会議のさい成立した。この代表者会議は、在外組織委員会の全権代表オルジョニキーゼの指導のもとにバクーでひらかれた。会議には、バクー、チフリス、エカテリンブルグ、キエフ、エカテリノスラフの各組織の代表が参加した。代議員のうちにはシャウミャンとスパンダリャンもいた。警察の追及があって危険だったので、会議の場所はチフリスにうつされた。地方からの報告のほか、ロシア組織委員会の構成、在外組織委員会との関係、協議会のための選挙、合法組織の代表権、非ロシア民族組織の代表選挙の問題が審議された。ロシア組織委員会の会議についての報告は、一九一一年一二月八（二一）日の『ソツィアル－デモクラート』第二五号に、オルジョニキーゼによって発表された。会議は地方組織へのアピールを採択し、決議といっしょにして単行のリーフレットとして出版した。一四九

（一〇五）**周知の合法的出版物**——ボリシェヴィキの新聞『ズヴェズダ』（注九四）と雑誌『ムィスリ』のこと。これらの出版物には、党擁護派メンシェヴィキも寄稿した。

『ムィスリ』（『思想』）——ボリシェヴィキの哲学・社会・経済月刊合法雑誌。一九一〇年一二月から一九一一年四月までモスクワで全部で五号発行された。一五三

（一〇六）**『ゴーロス・リクヴィダートロフ』**（『解党派の声』）——解党派の『ゴーロス・ソツィアル－デモクラータ』（注七）を皮肉っていったもの。一五三

（一〇七）**創神派**——マルクス主義に敵対的な宗教的・哲学的潮流、創神主義の支持者たち。この潮流は一九〇五—一九〇七年革命の敗北後、ストルィピン反動期に、マルクス主義から離れた一部のインテリ党員のあいだに発生した。創神派（ルナチャルスキー、バザロフら）はマルクス主義と宗教との和解を試み、新しい「社会主義的」宗教の創造を提唱した。一時作家ゴーリキーが彼らに同調した。『プロレタリー』の拡大編集局会議（一九〇九年六月）は創神主義を非難し、特別決議でボリシェヴィキ・フラクションは「かかる科学的社会主義の歪曲」とあいいれないと声明した。レーニンは著書『唯物論と経験批判論』とゴーリキーへの手紙で創神主義の反動的本質を暴露した。一五三

（一〇八）**中央委員会在外ビューロー**——中央委員会ロシア（国内）

ビューローに従属する全党的在外代表機関（三名で構成）として一九〇八年八月ロシア社会民主労働党中央委員会総会で創設された。しかし在外ビューローは解党派メンシェヴィキに乗っ取られ、中央委員会八月総会の委任（在外協力グループの統合）を果たさなかったので、一九一〇年一月の総会は在外ビューローを改組しその役割を一般的党員の指導に限定し、それだけロシア・ビューローの権限を強化した。また在外ビューローを五名で構成し、そのうち三名は民族（非ロシア人）組織中央委員会の代表をもってあてることにした。しかし、結局、解党派がその多数を占め、中央党機関の活動を混乱させようとした。一九一一年五月、ボリシェヴィキのただ一人の代表セマシコは辞任を余儀なくされた。同年六月の党中央委員パリ会議は在外ビューローの反党的行動を非難し、その存続問題を近く開かれる党中央委員会の解決にまかせた。同年一一月、ポーランドとラトヴィアの社会民主党がその代表を在外ビューローから引き上げたので、一九一二年一月、中央委員会在外ビューローは自己解消した。一五三

（一〇九）**保管者の仲裁裁判**――一九一〇年一月の党中央委員会総会でボリシェヴィキの代表は、他のすべての分派が解散して反解党主義、反召還主義の方針をとることを条件として、自分たちの分派を解散しその財産を中央委員会に引渡すことを承認し、この条件がみたされるまでその財産を保管者（カウツキー、メーリング、ツェトキン）に寄託した。しかし、他の諸分派がこの協定を破ったという事実が明らかになるに及んで、ボリシェヴィキは一九一〇年一二月、他の諸分派との協定を破棄し、資金返還を要求すると声明した。この要求は保管者の仲裁裁判で審査され、暫定的な措置として資金の一部を技術委員会（注一一一）と在外組織委員会（注一一二）に引渡すことが決定されたが、保管者が全員辞任したので、一九一一年一二月、ボリシェヴィキは自分たちの印刷所とその他の財産を取り返し、解党派、召還派等の在外グループと結びつきを絶って、すべての党的分子をロシア組織委員会とその招集する全党協議会に結集することを声明した。『「保管者」の仲裁裁判の総決算』（全集、第一七巻、三七七―三七九ページを参照）。一五三

（一一〇）**パリでひらいた中央委員の会議**――一九一一年五月二八日―六月四日（六月一〇―一七日）、レーニンのイニシアチヴによって準備され、パリでひらかれた在外党中央委員の会議。レーニンはこの会議の構成を「ボリシェヴィキ、ポーランド人、〝調停派〟の三グループのブロック」と特徴づけた。会議は在外中央委員会総会の招集、第四国会選挙対策、全党協議会の準備、在外ビューローの処置などの議案を審議し、決議を採択した。この会議は解党派＝ゴーロス派、フペリョード派、トロツキストとたたかい、党を強化するために党の勢力を結集し、統合するうえで重要な一歩であった。一五三

（一一一）**技術委員会**（在外技術委員会）――党文書の出版、輸送その他の技術的機能を遂行するために一九一一年六月パリの中央委員会議で創設。ボリシェヴィキ、調停派、ポーランド社会民主党（調停派に同調）から各一名ずつ代表を出し、三名をもって構成。事実上調停派が多数を占めた結果、党協議会の準備資金や党機関紙の発行資金の支出を遅らせ、レーニンやボリシェヴィキを攻撃し、ロシア組織委員会への服従を拒否したので、一九一一年一〇月ボリシェヴィキは代表を引き上げ、関係を絶った。一五三

（一一二）**在外組織委員会**――全党協議会をひらく準備のために一九一一年六月パリの中央委員会議で創設。ボリシェヴィキ、調停派、ポーランド社会民主党の代表から構成。他の在外組織は招請された

が、代表を送らなかった。在外組織委員会は調停派とこれを支持するポーランド社会民主党の代表が多数を占めたので、同委員会に代表を送らなかったフペリョード派やトロツキーと交渉をつづけるという無原則的方針をとり、ロシアへの党資金の移送をおくらせ、党協議会の準備にブレーキをかけ、ボリシェヴィキを非難し、ロシア組織委員会への服従を拒否した。その結果、ボリシェヴィキの代表は同委員会から脱退した。一三三

（一二三）『ソツィアル-デモクラート』第二四号の小論――レーニンが書いた『調停主義者、すなわち道徳的な人々の新しい分派について』（全集、第一七巻、二六二―二八四ページ）をさす。一三三

（一二四）**党擁護派メンシェヴィキ**――反動期に解党派に反対したプレハーノフを先頭とするメンシェヴィキの一グループ。プレハーノフは一九〇八年一二月解党主義的な新聞『ゴーロス・ソツィアル-デモクラータ』の編集局から脱退し、一九〇九年解党派との闘争のために『ドネヴニーク・ソツィアル-デモクラータ』の発行を再開した。この一派はメンシェヴィズムの立場にとどまりながらも、同時に非合法党組織の維持と強化を主張し、この目的のためにボリシェヴィキとブロックを結んだ。ロシア国内のメンシェヴィキ労働者の大多数が彼らを支持した。彼らとの接近をはかるレーニンの戦術は合法的労働者組織の中にボリシェヴィキの影響力をひろめ、そこから解党派を追い出すのに役立った。

しかし一九一一年末プレハーノフはボリシェヴィキとのブロックを打ち切り、ボリシェヴィキを日和見主義者と和解させようとした。そして一九一二年にはトロツキスト、ブンド派、解党派とともにプラハ党協議会の決定に反対した。一三三、一三五

（一二五）**『ゴーロス』**――『ゴーロス・ソツィアル-デモタラータ』（『社会民主主義者の声』）の略称。在外解党派メンシェヴィキの機関紙。この一派をゴーロス派と言う。本書注（七）を参照。一三三

（一二六）**『プラウダ』**（ウィーン）――トロツキストの新聞。本書注（一九）を参照。一三四

（一二七）**バクーの党組織**――反動期と新たな革命的高揚の時期には最も積極的な地方組織の一つであった。一九一一年の初めに、解党派と召還派に反対し、非合法党の再建をめざす闘争を基盤として、ボリシェヴィキと党擁護派メンシェヴィキとの統一がすすみ、統一バクー委員会がつくられた。バクー組織は、党の全国協議会を招集するという一九一一年六月の中央委員会議の決定を支持し、ロシア組織委員会の創立に積極的に関与した。

キエフの党組織――反動期にもほとんど中断することなく活動していた。一九一〇―一九一一年にはボリシェヴィキは党擁護派メンシェヴィキと共同行動をとった。キエフ組織は他の組織にさきがけて、一九一一年六月の中央委員会議の決定と、党協議会招集のためのロシア組織委員会の創立という考えを支持し、キエフ委員会の一員をさいて在外組織委員会の代表を援助させた。一三三

（一二八）一九一一年一一月に出版されたロシア組織委員会の単行のリーフレット（同委員会の『通報』と決議）のこと。一三四

（一二九）**ポヴォルジエ**――ヴォルガ川中流・下流地域。現在のマリー、チュワシ、タタール、モルドワの各自治共和国とゴーリキー、キーロフ、ウリヤノフスク、ペンザ、クイブイシェフ、サラトフ、ヴォルゴグラード、アストラハンの各州をふくむ。一三四

（一三〇）**一つの記録文書**――『ソツィアル-デモクラート』編集局にあてたオルジョニキーゼの手紙のこと。一九一一年一二月八

（一三一）日付の同紙第二五号に、エヌという署名で発表された。

一九一一年ゲ・カ・オルジョニキーゼは全党協議会の準備のために在外組織委員会からロシアへ派遣されたが、パリに帰って来て同委員会にロシア組織委員会の活動を報告した。その結果、在外組織委員会はロシア組織委員会の指導的役割を認めざるをえなくなったが、のちに『公開状』を出して、公然とロシア組織委員会の「分派性」を非難しはじめたので、オルジョニキーゼはこの手紙で在外組織委員会の反党活動を暴露した。一五六

（二一）　**中央委員会ロシア（国内）ビューロー**——ロシア社会民主労働党中央委員会ロシア（国内）委員会（一九〇八年八月の中央委員会総会で確認され、一九一〇年まで存続）の全体会議で選出され、中央委員会の総会と総会の中間にロシア（国内）委員会のすべての業務をつかさどる機関。一九一一年三月弾圧のためいったん壊滅したが、第六回（プラハ）全国協議会（一九一二年）によって再建された。一五六

（二二）　**「動乱時代」**——一七世紀の初めの約一〇年間、階級対立の激化（農奴制の強化に反抗する最初の農民戦争）、国際関係の複雑化（ポーランドおよびスウェーデンの侵入、貴族の裏切り、これらにたいする人民大衆の抵抗）、支配階級内部の抗争（帝位をめぐる争い、上級貴族と下級貴族の対立）などによってロシアが鋭い政治的危機にあった時代を、貴族・ブルジョア史学では「動乱時代」と呼んだ。一五六、二九〇

（二三）　一九一一年八月、ベルンのカフェー・ブーベンベルクでロシア社会民主労働党中央委員会在外ビューローのもとでの会議がひらかれた。この会議には在外ビューローで多数を占める解党派の委員（リーベル、ゴーレフ、シュワルツ）のほかにトロツキー（ウィーン『プラウダ』）、ダン（『ゴーロス・ソツィアルーデモクラータ』）、ルヂス（ラトヴィア辺区社会民主党在外委員会）、ブンド在外委員会代表（リーベルが兼務）が出席した。トィシカは招待されたが、出席しなかった。『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集局だけでなく、ポーランドーリトワ王国社会民主党本部や『ドネヴニーク・ソツィアルーデモクラータ』と『フペリョード』グループも、この会議への参加を拒否した。この会議で採択された諸決議（ロシア組織委員会、在外技術委員会、在外組織委員会などにかんするもの）は第六回全国協議会の準備に反対するものであったが、実際にはなんの効果もなかった。

一九一一年秋、リーベルは解党主義的なカフカーズ州委員会の代表とともにこの会議の決議に署名してもらうためにラトヴィア辺区社会民主党在外委員会の所在地Z市（ブリュッセル）へ行った。一五七

（二四）　**ある有名な召還主義者**——ア・ヴェ・ソコロフ（エス・ヴォリスキー）をさす。一五七

（二五）　**カフカーズ（ザカフカーズ）州委員会**——カフカーズの解党派メンシェヴィキのセンター。一五名のメンシェヴィキと一名のボリシェヴィキが出席した一九〇八年二月の社会民主党ザカフカーズ組織第五回大会で選出された。裏切り的反党活動をおこない、なんの選挙もなしに勝手にアクセリロード、ダン、ラミシヴィリを党の第五回全国協議会（一九〇八年）の代議員に指名し、反党的八月ブロック（一九一二年）に加盟した。一五七

（二六）　**マニーロフのような連中**——マニーロフはゴーゴリの作品『死せる魂』に出てくる地主。いくじのない空想家で、無能なおしゃべり屋の典型。「マニーロフかたぎ」という表現もそこから出ている。一五九

（二七）　**一二月一四日の人々**——いわゆるデカブリスト（十二月

党員）。一八二五年のこの日、進歩的思想をもっていた一団の人々（貴族出身）は、ニコライ一世の即位の日を期して専制と農奴制の転覆を目的として蜂起をおこした。蜂起はただちに鎮圧され、参加者は重刑に処せられたが、このデカブリストの事件は、ロシアにおける革命運動の端緒をひらいたものとして、重要なできごとであった。一五九、二八四

（一二八）**ロムルスとレムス**——ローマ建設の伝説の主。双生児で狼にそだてられて成長したが、のちに兄弟あらそいをおこし、ロムルスがレムスをころして、パラティンに都を建設した。これがローマの始まりといわれる。一五九

（一二九）ア・イ・ゲルツェンの『終りと始め』の中のことば。一五九

（一三〇）**六月の諸事件**——一八四八年二月のフランスのブルジョア革命後、同年六月二二日パリにおこったプロレタリアートの蜂起をさす。この蜂起はフランスのブルジョアジーがプロレタリアートの力によって革命に勝利しながら、この革命の果実をプロレタリアートからうばいとろうとしたところからおこった。パリの労働者は、政府軍との五日にわたる英雄的な戦いののちに壊滅させられ、三千人以上が虐殺された。この蜂起は、プロレタリアートが初めてブルジョアジーの権力の転覆という革命的目標をかかげてたたかったプロレタリアートの解放運動史上画期的な歴史的事件である。一六〇、一六九

（一三一）**インタナショナル**——国際労働者協会（第一インタナショナル）（一八六四—一八七六年）をさす。一六一

（一三二）ア・イ・ゲルツェンのバクーニンへあてた『旧友への手紙』（一八六九年）の中のことば（第四の手紙と第二の手紙から）。一六一

（一三三）**共同体的土地所有**——ロシアの農村共同体（オープシチナ）は農民の土地用益の自治体的形態で、義務的輪作と森林および牧場の不分割（共同使用）を特徴としていた。農民は、国家および地主にたいする年貢、租税、公課その他あらゆる支払と賦役その他の義務の遂行について連帯責任を負わされた。定期的に土地の割替えがおこなわれたが、農民は割当てられた分与地を拒否する権利を持たなかった。そして土地の売買は禁止されていた。ロシアの空想的社会主義者はオープシチナを理想化し、これをロシア農村における社会主義的諸関係の萌芽と見た。オープシチナはゲルツェンの「ロシア的社会主義」、それに追随したナロードニキの理論の中心におかれた。一六一

（一三四）「農民同盟」（全ロシア農民同盟）——モスクワ県の農民の提唱によって一九〇五年八月に成立し、短期間のうちに広範な農民大衆を組織した。政治的自由と憲法制定議会の即時召集を要求し、第一国会をボイコットする戦術を支持。土地私有の廃止、買取金なしでの、修道院領地、教会領地、帝室領地、御料地、国有地の農民への引渡しを要求。エス・エルと自由主義者の影響下にあった同盟は、政策上中途はんぱな態度と動揺を示し、地主的土地所有の一掃を要求しながら、地主にたいする部分的補償を認めた。活動の第一歩から、警察の弾圧をこうむり、一九〇七年初めに崩壊した。一六一

（一三五）『**コーロコル**』（『鐘』）——"Vivos voco!"（「生あるものに呼びかける」）という標語のもとに出されていた政治雑誌。一八五七年にア・イ・ゲルツェンとエヌ・ペ・オガリョーフによって創刊され、一八六五年四月までロンドンで、その後はジュネーヴで、月に一回ないし二回発行され、一八六七年七月までに二四五号ロシア語で出された。最後の一八六八年には雑誌はフランス語で出され、それと同時に付録がロシア語で印刷された。これは一五号

出た。発行部数は二五〇〇部に達し、ロシア全国にひろく普及し、労働者出版物の出現にさきだつ検閲無視の革命的出版物のさきがけとなった。一六三、二六四

(一三六)『ポリャールナヤ・ズヴェズダ』(『北極星』)――文学・政治論集。一八五五―一八六八年、ロンドン(第一―七号)とジュネーヴ(第八号)で発行され、先進的なロシア文学と社会思想の発展に著しい役割を果たした。最初の三号の編集者はゲルツェン、その後はオガリョフが加わり、全部で八号出された。一六三

(一三七) **雑階級出の革命家**――一九世紀中葉のロシアにおける、聖職者、官吏、町人あるいは農民等の雑多な階層(ラズノチーネツ)の出身者で、貴族には属しない、平民のインテリゲンツィアの革命家。貴族革命家のあとに、労働者革命家にさきだって出現した。一六三、二六四

(一三八)「農民改革」(一八六一年二月一九日に署名、三月五日に公布されたアレクサンドル二世の農奴制廃止の詔勅による)は農民大衆の反対を予想して、ひとつの軍事上の作戦として準備され、軍隊の配置がえがおこなわれ、皇帝側近の将軍たちがあらかじめ全国各地に派遣された。一六三

(一三九) **ベズドナでの農民の皆殺し**――一八六一年四月、「農民改革」に反対したカザン県スパスク郡ベズドナ村の農民蜂起にたいするツァーリ政府の残酷な弾圧をさす。農民は公布された規則を本物だと信用せず、ほんとうの詔勅や規則は地主や役人が隠していると考えた。一八六一年の春、多くの県に農民の騒乱がおこったが、若い農民アントン・ペトロフに指導されたベズドナ村の蜂起はその最大のものであった。この騒乱は近隣の七五ヵ村に波及したが、きわめて残酷なやり方で鎮圧された。ベズドナ村の悲劇はゲルツェンによって『コーロコル』紙上でくわしく報道され、ロシア社会の先進的な層のあいだに広範な反響を呼びおこした。一六三

(一四〇) **一八六六年と一八七〇年の戦争**――当時、ドイツの支配階級はビスマルクのもとにいわゆる鉄血政策、外交的術策と戦争によって「上から」ドイツの統一を達成しようと努力していた。一八六六年の普墺(プロイセン＝オーストリア)戦争の結果、北ドイツ連邦が結成され、一八七〇―一八七一年の普仏(プロイセン＝フランス)戦争の結果、ドイツ帝国が樹立された。一六七

(一四一) **ロシア国民同盟**――君主主義者の極反動的、黒百人組的組織。一九〇五年一〇月、革命運動との闘争のためにペテルブルグで創立。反動的地主、大家主、商人、警察官僚、聖職者、都市の小市民、富農、社会から落後した堕落分子、犯罪者などを統合した。幹部はボブリンスキー、ドゥブロヴィン、クルシェヴァン、マルコフ二世、プリシケーヴィチなど。機関紙は『ルースコエ・ズナーミャ』(『ロシアの旗』、一九〇五―一九一七年、ペテルブルグで発行)、『オブエヂネーニエ』(『統一』)、『グロザー』(『雷鳴』)。ロシアの多くの都市に支部をもっていた。

ツァーリ専制、半農奴制的地主経済、貴族の特権の維持を主張。「正教、専制、国民性」をスローガンとし、ポグロムと暗殺を主要な反革命闘争の手段とした。第二国会解散後、プリシケヴィチをかしらとする『天使長ミハイル同盟』(第三国会の利用を主張する一派)とドゥブロヴィンをかしらとする本来の『ロシア国民同盟』(従来のテロル戦術を踏襲する一派)とに分裂。一九一七年の二月革命にさいして両方とも解散させられた。十月革命後、これらの組織の元のメンバーはソヴェト権力に反抗する反革命的反乱と陰謀に積極的に参加した。一六七

(四二)『ノーヴォエ・ヴレーミャ』(『新時代』)――一八六八年から一九一七年一〇月までペテルブルグで発行されていた新聞。はじめは穏健自由主義的であったが、一八七六年から反動的な貴族および官僚の機関紙になり、ツァーリ政府に買収されて、革命運動にたいする攻撃に従事した。一九〇五年以降は黒百人組の機関紙の一つになった。二月革命後はブルジョア臨時政府の政策を支持して、ボリシェヴィキを攻撃。十月革命直後、ペトログラード軍事革命委員会によって閉鎖された。レーニンはこれを買収のきく新聞の典型と称した。一六七

(四三)『スヴェート』(『光明』)――ブルジョア民族主義的な日刊新聞、一八八二年から一九一七年までペテルブルグで発行されていた。一六九

(四四)『ゴーロス・モスクヴィ』(『モスクワの声』)――日刊新聞、オクチャブリスト党の機関紙。一九〇六年から一九一五年までモスクワで出ていた。一六九

(四五) 連合貴族評議会――農奴主=地主の反革命的組織。一九〇六年五月、第一回県貴族会代表者大会で結成され、一九一七年一〇月まで存続。専制制度、地主の大土地所有、貴族の特権の擁護を主要目的とし、幹部はボブリンスキー伯爵、カサトキン=ロストフスキー公爵、オルスフィエフ伯爵、プリシケヴィチら。事実上、政府に立法を指図する半政府機関になっていた。会員の大多数は参議院議員および黒百人組的諸組織の幹部であった。一六九

(四六) 参議院――革命前のロシアにおける国政の最高機関の一つ。一八一〇年にスペランスキーの案によりツァーリの諮問機関として設立。その議員はツァーリが指名した。一九〇六年二月二〇日(二月五日)の法律で国会(ドゥーマ、下院にあたる)で審議された法案を認可し、または拒否する権限をあたえられた。しかし、ツァーリは基本的法律を修正し、また特に重要な法律を発布する権限を保留していた。

一九〇六年以来、参議院議員の半数は貴族、聖職者、大ブルジョアジーの代表から選挙され、残りの半数はあいかわらずツァーリによって指名されることになった。参議院は極反動的な上院として、しばしば国会を通過した穏健な法案をさえ握りつぶした。一七〇

(四七)「陛下の野党」――原文では「生格つきの野党」。ロシア語の第二格(生格)は所有をあらわす格変化。一九〇九年六月、ロシアの国会と参議院の代表団がイギリスを訪れたとき、カデットの首領シリュコフがロンド市長の招宴における演説でツァーリへのカデットの忠節を再確認し、ロシアに国会があるかぎり「ロシアの野党は陛下に反対する野党ではなくて陛下の野党としてとどまるだろう」と強調したのを、レーニンがもじって「生格つきの野党」と言ったのである。一七三

(四八)「進歩派」(進歩党)――ロシアの自由主義的・君主主義的ブルジョアジーの政治的グループ。「超党派」の名のもとにさまざまなブルジョア地主的諸党派の統合をはかった。幹部にはモスクワの著名な工業家リャブシンスキーやコノヴァロフ、地主のエフレモフらがいた。一九一二年一一月、独自の政党を結成。綱領として、選挙権を制限する穏健な憲法、小規模の改革、責任内閣、すなわち国会にたいして責任をもつ政府、革命運動の弾圧を要求する「オクチャブリストとカデットとの混合物」(レーニン)であった。

第一次世界大戦時には軍指導部の交替、軍需への産業動員、ブルジョアジーの代表が参加する「責任内閣」を要求。二月革命後は党の幹部を臨時政府に入閣させ、十月革命後はソヴェト権力と積極的

に闘争した。機関紙誌として『モスコフスキー・エジェネデーリニク』（『週刊モスクワ』）、新聞『スローヴォ』、『ルースカヤ・モルヴァ』、『ウートロ・ロシー』を出した。一七三、三二一

（一四九）　ストルィピンの農業改革――土地の私有化を促進し、富農を育成し、これを農村における君主制の支柱にするとともに、農業における資本主義の発達を促進しようとするツァーリ政府の一連の農業政策。当時の首相ペ・ア・ストルィピンの名をとって、こう呼ばれている。本書注（一〇二）を参照。一七四

（一五〇）　『ジヴォエ・デーロ』――一九一二年一月から同年四月末までペテルブルグで出された解党派メンシェヴィキの合法週刊新聞。一六号出た。マルトフ、ダン、アクセリロードらが参加。レーニンはこれを「自由主義的労働者政治の機関紙」と評した。一七五

（一五一）　『ネフスカヤ・ズヴェズダ』――一九一二年二月二六日（三月一〇日）から同年一〇月五（一八）日までペテルブルグで出されたボリシェヴィキの合法新聞。全部で二七号出た。はじめのうち新聞『ズヴェズダ』と同時並行的に出され、四月二二日（五月五日）以後はこれにかわるものとして出された。レーニンの外国からの思想的指導のもとにバトゥリン、モロトフ、オリミンスキーらが編集にあたった。レーニンの論文二〇編と三六〇以上の労働者通信が掲載された。たえず弾圧をうけ、二七号のうち九号は没収され、二号は罰金を科せられた。編集局員は一度ならず刑事責任を問われた。『ネフスカヤ・ズヴェズダ』はメンシェヴィキ、トロツキスト、ブルジョア自由主義者らの暴露で大きな役割を演じた。一七六

（一五二）　有名な四月事件（レナ金鉱虐殺事件）――一九一二年四月四（一七）日、シベリアのレナ金鉱でストライキの最中にツァーリの軍隊が武器をもたない労働者に発砲して死者二七〇人、負傷者二五〇人を出した事件。金鉱はイギリスの資本家の所有に属し、ロシアの資本家、皇族、高官が参加しており、毎年七〇〇万ルーブリの利潤をあげていた。金鉱はシベリア鉄道から二千キロも奥へはいった密林の中にあったので、労働者にたいする搾取、虐待、侮辱はとくに激しかった。これに耐えかねた労働者は一九一二年三月初め、前年秋に結成されたボリシェヴィキ・グループの指導のもとにストライキをおこし、ストライキ委員会を組織し、八時間労働日、賃金の一〇―三〇％引上げ、罰金の廃止、医療保護の組織、食糧と住宅の改善などを要求した。資本家はこれらの要求を拒否し、食糧の前貸しを中止し、宿舎から追出しにかかった。それは労働者とその家族を餓死に追いやることを意味した。ストライキ労働者は挑発やおどしにのらず、不屈に頑張ったが、その闘争は平和な組織的な性格を維持していた。

有力な株主の要請で政府は武力弾圧を決意し、まず四月三日に中央ストライキ委員会の委員数名を逮捕した。翌四日、約三千人の労働者が官憲の不法行為にたいする抗議と逮捕者釈放の請願書を検事に手渡すためにナデジヂンスキー採金場へ向かうところを撃たれたのである。

レナ金鉱虐殺事件のニュースはロシアの全労働者階級に衝撃をあたえ、抗議のデモやストライキ、集会が全国各地に展開された。社会民主党議員団がこの事件について国会で政府に緊急質問をおこなったところ、マカロフ内相が「これまでもそうしてきたし、これからもそうするだろう！」と答弁したので、労働者の不満はいっそうたかまった。レナ事件にたいする抗議ストライキの参加者数は約三〇万人、メーデー・ストと合流して四〇万人に達した。「レナ射殺事件は大衆の革命的気分が大衆の革命的高揚へ移行するきっかけにな

った」（レーニン）。一八〇、一八四

（一五三）『ルースキエ・ヴェードモスチ』（『ロシア報知』）——一八六三年以来モスクワで、モスクワの自由主義的教授やゼムストヴォ議員らによって発行されていた日刊新聞。自由主義的地主とブルジョアジーの利益を代表していた。一九〇五年からはカデット右派の機関紙となった。一九一七年の十月革命後、他の反革命的新聞とともに禁止された。一八〇

（一五四）『レーチ』——カデットの中央機関紙（日刊）。一九〇六年二月二三日（三月八日）からペテルブルグで発刊。編集者はミリュコフ、ゲッセン、ヴィナヴェル、ドルゴルーコフ、ストルーヴェらが協力。一九一七年一〇月二六日（一一月八日）ペトログラード軍事革命委員会によって閉鎖されたが、その後も一九一八年八月まで『ナーシャ・レーチ』、『スヴォボードナヤ・レーチ』、『ヴェーク』、『ナーシ・ヴェーク』などと標題をかえて発行されていた。一八〇、二三一

（一五五）『ネフスキー・ゴーロス』（『ネヴァの声』）——解党派メンシェヴィキの週刊合法新聞。一九一二年五月から八月までペテルブルグで出され、全部で九号出た。『ジヴォエ・デーロ』のかわりとしてコストロフによって発行され、アクセリロード、マルトフ、マルトィノフ、チャツキーらが寄稿した。一八〇、二三三

（一五六）論文『革命的高揚』は一九一二年六月一七日に発表されたが、それに先だってレーニンはロシア社会民主労働党在外組織パリ支部の会議で、四月二六日（五月九日）にはロシアにおける諸事件について報告し、五月三一日（六月一三日）には『ロシア・プロレタリアートの革命的高揚』と題する報告をおこなった。パリ支部が印刷したこの報告の案内には報告のくわしいプランが出ているが、それはこの論文の根本的命題と一致している。一八四

（一五七）ストライキ参加者数——『ロシアのストライキ統計』（本書九七―一二三ページ）を参照。一八五

（一五八）ロシア社会民主労働党全国協議会——一九一二年一月五―一七日（一八―三〇日）、プラハでひらかれた第六回全国協議会をさす。二〇以上の党組織の代表が出席。警察の追及その他の困難のために若干の党組織は代表を出席させることができなかったが、書面でこの協議会を支持するとの声明を送ってきた。また中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』と『ラボーチャヤ・ガゼータ』の編集局、在外組織委員会、党中央委員会輸送グループの代表が参加した。二名の党擁護派メンシェヴィキを除いて、あとの代議員はすべてボリシェヴィキであった。レーニンは中央機関紙編集局の代表として出席。おもな議題は当面の情勢と党の任務、第四国会選挙、国会議員団、国家労働者保険、ストライキ運動と労働組合、「請願カンパニア」、解党主義、飢饉との闘争などで、二三回の会議がおこなわれた。ロシア国内で活動しているほとんどすべての党組織が代表を出したので、協議会は「全党的協議会」と認められ、実質的に党大会の役割を果たした。協議会はレーニンの指導のもとにおこなわれ、解党派メンシェヴィキを党から除名して、ボリシェヴィキ党としての党の統一をかためた。詳細は『ロシア社会民主労働党第六回（プラハ）全国協議会』（全集、第一七巻、四六六―四九九ページ）を参照。一八五

（一五九）メーデー・ビラ——一九一二年のメーデーの直前にペテルブルグで印刷され、各工場にまかれた。ビラはロシア社会民主労働党第六回（プラハ）協議会が打ちだしたスローガン（憲法制定議会、八時間労働日、地主の土地の没収）のもとに各所でメーデー集会をひらき、ネフスキー大通りでデモンストレーションをおこなう

よう労働者に呼びかけた。一八六

（一六〇）『ザンクト・ペテルスブルガー・ツァイトゥング』（『ペテルブルグ新聞』）——一七二七—一九一四年のあいだ、ペテルブルグで発行されたドイツ語の日刊新聞。一八九

（一六一）**大臣マカロフのことば**——レナ金鉱射殺事件に関連して社会民主党議員が国会で政府に緊急質問したとき、マカロフ内相が答えたことば。本書注（一五二）を参照。一九一

（一六二）**「天をもおそう」大衆**——マルクスは一八七一年四月一二日付のクーゲルマンあての手紙で、パリ・コミューンをきわめて高く評価して、コミューンの戦士たちを「天をもおそう巨人」（選集、第一一巻、二九六ページ）と形容している。一九三

（一六三）**エンゲルスの格言**——マルクス『哲学の貧困』ドイツ語第一版への序文（一八八四年）から（選集、第一巻、四六六ページ）。一九七

（一六四）**『プラウダ』**——ペテルブルグで発行されたボリシェヴィキの日刊合法労働者大衆新聞。このような新聞の必要性は第六回全国協議会の決定で強調されたが、ペテルブルグ労働者の創意と熱心な努力によって労働者自身が集めた資金で一九一二年四月二二日（五月五日）に創刊（それにちなんで、現在ソ連では五月五日を「新聞デー」にしている）。これには先行する新聞『ズヴェズダ』による準備がおおいに貢献した。先進的労働者が通信員となり、創刊後二年あまりの間に一万七千以上の労働者通信が掲載され、発行部数は四—六万部に達した。レーニンは国外から『プラウダ』を指導し、いろいろなペンネームでほとんど毎号執筆し、その数は二七〇点以上になった。おもな編集者と執筆者には、バトゥリン、デミヤン・ベードヌイ（詩人）、アンナ・ウリヤノワ－エリザロワ（レーニンの姉）、カリーニン、クルプスカヤ（レーニン夫人）、メンジンスキー、モロトフ、オリミンスキー、ポドヴォイスキー、ポレタエフ、スヴェルドロフ、スクルイプニク、スターリン、ストゥチカなどがいた。第四国会のボリシェヴィキ議員も積極的に協力し、作家マクシム・ゴーリキーはその作品を掲載した。『プラウダ』には農民欄が常設され、農民の状態を系統的に報道した。

一九一二年一二月末、党中央委員会クラクフ会議はレーニンが作成した『プラウダ』編集局の改組とその活動の改善にかんする決議を採択した。『プラウダ』編集局には党の組織活動の著しい部分が集中され、ここで地方党細胞の代表者との会合がおこなわれ、工場における党活動の報告がここへ送られ、党のペテルブルグ委員会や中央委員会の指令がここから伝達された。

『プラウダ』はたえず警察の弾圧をうけ、新聞の押収（四一号）、編集局員の逮捕・投獄（総計四七・五ヵ月）がつづいた。八回禁止処分をうけたが、そのつど名称をかえて発行をつづけた（『ラボーチャヤ・プラウダ』、『セーヴェルナヤ・プラウダ』、『プラウダ・トルダー』、『ザ・プラウドゥ』、『プロレタールスカヤ・プラウダ』、『プーチ・プラウドィ』、『ラボーチー』、『トルドヴァヤ・プラウダ』）。一九一四年七月八（二一）日、『プラウダ』は完全に閉鎖されたが、創刊以来二年あまりのあいだに六三六号出すことができた。

一九一七年二月革命後、再刊。帰国したレーニンが編集局に参加した。同年七—一〇月、臨時政府の弾圧のもとで名称をかえて発行をつづけた（『リストーク・プラウドィ』、『プロレタリー』、『ラボーチー』、『ラボーチー・プーチ』）。十月革命後、元の名称『プラウダ』にかえり、現在はソ連共産党中央委員会の機関紙としてモスクワで発行されている。一九六、二一六、二七四、三一一

(一六五) 一八四八年の革命――ヨーロッパの一連の国々で一八四八―一八四九年におこった革命のこと。これらの革命の共通の客観的課題は資本主義の発展を妨げるさまざまな封建的残有物を排除することにあった。フランス、ドイツ、オーストリア、個々のイタリア国家ではブルジョア民主主義的性格をおび、ハンガリー、チェコ、一連のイタリア国家では単にブルジョア的性格をおびた。その推進力はプロレタリアート、農民、都市貧民の広範な大衆であったが、プロレタリアートの力が弱く、よく組織されていなかったので、革命のヘゲモニーはブルジョアジーまたはブルジョア化した自由主義的な貴族に握られた。革命の過程にプロレタリアートとブルジョアジーとの対立が鋭く現われ、プロレタリアートは独自の要求をかかげるようになった。この一連の革命の爆発は一八四七年の経済恐慌に刺激されるところが多かったが、直接の発端はフランスの二月革命からであった。

大多数の国で一八四八―一八四九年革命は結局敗北に終わったが、その主要な原因は、大衆の革命的高揚に恐れをなしたブルジョアジーが革命を裏切って反革命の陣営に移ったこと、小ブルジョア的民主主義派が動揺したこと、労働者階級が未発達で弱かったことにあった。しかし、敗北にもかかわらず、封建的君主制と農奴制の基礎をぐらつかせ、必要なブルジョア的改革に刺激をあたえることができた。そして、多くの国でブルジョアジーは権力の実権を握り、資本主義は支配的社会制度となった。一六八

(一六六) パリ・コミューン――一八七一年三月一八日から五月二八日まで七二日間パリに存在した世界史上最初のプロレタリア独裁政権。普仏戦争におけるフランスの敗戦の結果勃発したパリのプロレタリア革命によって樹立された労働者階級の革命的政府。広義には、プロレタリア独裁の最初の経験となったこの革命そのものをさす。一六八

(一六七) 『マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分』は、雑誌『プロスヴェシチェーニエ』一九一三年第三号(マルクス死後三〇年記念号)に発表された。二〇三

(一六八) 『プロスヴェシチェーニエ』(『啓蒙』)はボリシェヴィキの月刊合法機関誌、社会=政治・文学雑誌。一九一一年一二月から一九一四年六月までペテルブルグで発行されていた。発行部数は五千部に達した。モスクワで出され、ツァーリ政府に禁止されたボリシェヴィキの雑誌『ムィスリ』にかわるものとして、レーニンのイニシアチヴによって創刊された。第一次世界大戦の前夜に禁止され、一九一七年秋に再刊されたが、一号で終わった。レーニンはこの雑誌を指導し、多くの重要な論文を出した。作家ゴーリキーも協力した。二〇六

(一六九) 「デルジモルダ」――ゴーゴリの戯曲『検察官』に出てくる警察官の名前。野卑で横柄な圧制者、そして凶暴な人物の典型。二〇七

(一七〇) 教権主義者――一国の政治・文化生活における教会の勢力を強めようとする反動的な政治的傾向、教権主義を支持する人々。二〇七

(一七一) エルマンスキーにたいするレーニンの批判とは、『プロスヴェシチェーニエ』一九一二年四―五月、第五―七号にヴェ・イリインの署名で掲載されたレーニンの論文『大資本の諸組織にかんするアンケート』(邦訳全集、第一八巻、四六―六四ページ)のこと二一〇。

(一七二) 「階級闘争はすべて政治闘争である」――マルクス、エン

ゲルス『共産党宣言』（一八四八年）の中のことば。全集、第四巻、四八四ページを参照。二二三

（一七三）　**フランス大革命**――一七八九―一七九四年のフランスにおけるブルジョア民主主義革命。封建的・絶対主義的体制に決定的打撃をあたえ、資本主義の発展のための地盤をつくった。そして、全ヨーロッパにおける資本主義的諸関係の発展と思想・政治闘争に大きな影響をあたえた。二二四

（一七四）　**『ルーチ』（『光』）**――解党派メンシェヴィキの合法日刊新聞。一九一二年九月一六（二九）日から一九一三年七月五（一八）日まで、ペテルブルグで、二三七号出された。資金は主として自由主義者の寄付金によった。思想的に指導したのはアクセリロード、ダン、マルトフ、マルトィノフであった。ボリシェヴィキの革命的戦術に反対し、いわゆる「公然の党」の創設を提唱し、労働者の革命的・大衆的ストライキに反対し、党綱領の最も重要な命題を修正しようとした。レーニンはこの新聞を、自由主義的政治に隷属する背教者の機関紙と名付けた。二二六、二五八、二六一

（一七五）　**解党主義についての党の決定**――一九〇八年一二月二一―二七日（一九〇九年一月三―九日）にパリでひらかれたロシア社会民主労働党第五回全国協議会の「諸活動報告にたいする決議」の第二項をさす。本書注（二）を参照。二二七

（一七六）　**公有化についての決定**――一九〇六年四月一〇―二五日（四月二三日―五月八日）にストックホルムでひらかれたロシア社会民主労働党第四回（統一）大会で採択された農業綱領（メンシェヴィキの提案にもとづく）の第三項（土地公有化）のこと。この大会では、決議権をもつ代議員のうちでメンシェヴィキ（六二名）がボリシェヴィキ（四六名）よりも多数を占めたので、ボリシェヴィキが同意しない決議も採択された。農業綱領はその一つである。二二九

（一七七）　**一九一〇年一月の党決定**――一九一〇年一月二―二三日（一月一五日―二月五日）にパリでひらかれたロシア社会民主労働党中央委員会（「合同」）総会で採択された「党内事情」についての決議の第四項をさす。この総会については本書注（五）を参照。二三〇

（一七八）　一九一〇年一月の党中央委員会（合同）総会の「党内事情」にかんする決議第四項からの引用。『ソ連共産党大会・協議会・中央委員会総会の決議・決定集』（政治図書出版所、モスクワ、一九七〇年版）第一巻、二九一ページを参照。二三一

（一七九）　**駝鳥に似た行動**――駝鳥は速く走るが飛べない。敵に会うと、あわてて翼の下に頭を突っ込み、隠れたつもりになる。そこから「頭かくして尻かくさず」、さらに転じて「耳を蔽って鈴を盗む」という意味。二三四

（一八〇）　レーニンはこの論文を論集『マルクス主義と解党主義』に転載したとき、この段落の文章をつぎのように変更した（手稿による）。

『ジヴァーヤ・ジーズニ』第八号（一九一三年七月一九日）で、ザスーリチは、数十の解党主義的議論をくりかえしながら、『新しい組織（社会民主党）……が活動の助けとなったか、それとも妨げとなったか、言うことはむずかしい』と書いている。あきらかに、これらのことばは党の否認に等しい。ヴェ・ザスーリチは、組織には人がいなくなった、『なぜなら、この時機にそこではすることがなにもなかったからである』と言って、党からの逃亡を正当化しようとしている。ヴェ・ザスーリチは党のかわりに「広範な層」と

いう純然たる無政府主義理論をつくりだしている。一九一三年の『プロスヴェシチェーニエ』第九号におけるこの理論の詳しい分析〔『ヴェ・ザスーリチはどのように解党主義をほうむるか』、本書、二四〇―二六一ページ〕を見よ。

ここにわれわれの引用した文書からえられる主要な結論があるのだ。」

『ジヴァーヤ・ジーズニ』――一九一三年七月、ペテルブルグで発行された解党派メンシェヴィキの合法日刊新聞。三二四、三三〇、三三九

（一八一） 論集『マルクス主義と解党主義』では、「『ルーチ』も」のつぎに「『ノーヴァヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』も」が追加され、次のような脚注が付された。

「たとえば『ノーヴァヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』一九一四年第一号、新年にあたっての社説――『行動する公然の政党への道は、同時にまた、党の統一』（公然の党の建設者の統一？）『への道である』――を見よ。あるいは一九一四年第五号――『克服（労働者大会の組織への道をはばんでいるすべての障害物の克服）は、団結の自由のための、すなわち、社会民主労働党の公然たる存在のための闘争とかたく結びついた労働運動の合法性のための真の闘争にほかならない』――を見よ。」

『ノーヴァヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』――一九一三年八月八（二一）日から一九一四年一月二三日（二月五日）まで『ジヴァーヤ・ジーズニ』にかわるものとしてペテルブルグで出された解党派メンシェヴィキの日刊合法新聞。三二四、三三三

（一八二）『オスヴォボジデーニエ』（『解放』）――ペ・ベ・ストルーヴェの編集で一九〇二年六月一八日（七月一日）から一九〇五年一〇月五（一八）日まで外国で発行された隔週刊雑誌。ロシアの自由主義的ブルジョアジーの機関誌として穏健な君主主義的自由主義の思想を宣伝した。一九〇三年にこの雑誌の周囲に結集した一派（オスヴォボジデーニエ派）は一九〇四年一月に『解放同盟』（一九〇五年一〇月まで存続）を結成、立憲主義的ゼムストヴォ活動家とともに一九〇五年一〇月に創立された立憲民主党（カデット）の中核をなした。三三七

（一八三） 論集『マルクス主義と解党主義』では、『道標』ということばは削除され、次のような脚注が付けられた。

「数版をかさねることができて、反革命的自由主義派のこれらの思想の見事な集大成を提供している、『道標』という注目すべき書物がある。」

『道標』（『ヴェーヒ』）については本書注（三三）を参照。三三七

（一八四） 一九〇五年一二月一一（二四）日の特権――モスクワ武装蜂起の最中にツァーリ政府がこの日に公布した「立法」国会召集にかんする法律をさす。この法律は国会における地主と資本家の優勢を保障するもので、この法律にもとづいて選出された第一国会ではカデットが第一党となった。本書注（五六）を参照。三三七

（一八五） サブレル派の神父たち――宗務院長サブレルの指示にもとづいて、ツァーリ政府にとって都合のよい議員が選出されるように第四国会選挙に積極的に参加した聖職者たちのこと。三三八

（一八六）『ルースコエ・ボガートストヴォ』（『ロシアの富』）――一八八〇年から一九一八年までペテルブルグで発行されていた月刊文学・学術雑誌。一八九二年にミハイロフスキーが編集するようになってから、自由主義的ナロードニキの機関誌となり、マルクス主義とたたかった。その文学欄にはウスペンスキー、ガルシン、ゴーリキー、ヴェレサーエフ、コロレンコの作品が掲載された。一九〇

四年以来（断続的に一九一八年まで）コロレンコが編集兼発行人となった。そして、一九〇五年以後、半カデット的人民社会党（エヌ・エス）の機関誌になった。三二八、三四六

（一八七）　**八月協議会**——一九一二年八月にウィーンでひらかれた、解党派のあらゆる流派の協議会。この協議会で、トロツキーの主導したいわゆる八月ブロックが結成された。

協議会は社会民主党の戦術のあらゆる問題で反党的な解党主義的決議を採択し、非合法党の存在に反対意見を表明した。

種々雑多な色合いのものから形成された八月ブロックは、すでに協議会そのものの席上で崩壊しはじめた。解党派は中央委員会を選出することができず、組織委員会をつくるにとどまった。しかもボリシェヴィキから打撃を受けて、八月ブロックはまもなく最後的に崩壊した。三三三、三五九、三六一、三四三

（一八八）　**『セーヴェルナヤ・プラウダ』**——ボリシェヴィキの日刊合法新聞『プラウダ』の別名の一つ。『プラウダ』は禁止処分を受けるたびにいろいろに名称を変えて発行をつづけた。本書注（一六四）を参照。「『セーヴェルナヤ・プラウダ』に強制されて」とは、同紙第二一号（一九一三年八月二七日付）にレーニンの改良主義にたいする批判『ロシアのブルジョアジーとロシアの改良主義』（全集、第一九巻、三四二—三四五ページ）が掲載されたことをさす。三三七

（一八九）　**「三つの柱」**——ロシア社会民主労働党の三つの主要なスローガン（民主的共和制、八時間労働日、すべての地主の土地の没収）をさす。このことばは、ロシアのブルジョア民主主義革命における党の最小限綱領の革命的要求を表現するために合法的出版物や合法的集会で使われた。原文では「三頭のクジラ」。大地は三頭のクジラによってささえられているという伝説による。三三七

（一九〇）　**ロシア社会民主労働党第二回大会**——一九〇三年七月一七（三〇）日から八月一〇（二三）日までひらかれた。はじめブリュッセルで一三回の会議をおこなったが、のちに官憲の追及が激しくなったので、会場をロンドンへ移した。大会はレーニンの指導のもとに『イスクラ』によって準備された。二六の組織を代表する四三名の議決権をもつ代議員が出席。数名の代議員は二人分の票をもっていたので、票の総数は五一になった。この大会には『イスクラ』の支持者も、その反対者も、また不安定な動揺分子も出席した。

大会の最重要議題は綱領・規約の採択と中央指導機関の選挙であった。日和見主義者は、『イスクラ』編集局が作成した綱領草案、とくに労働運動における党の指導的役割、プロレタリア執権（ディクタツーラ）の必要性などの条項や農業政策の部分を激しく攻撃したが、結局、一人の棄権を除いて満場一致で党綱領が採択された。それによってブルジョア民主主義革命における当面の任務（最小限綱領）と、社会主義革命の勝利とプロレタリア執権（ディクタツーラ）の樹立を目標とする長期の任務（最大限綱領）とが定式化され、マルクス、エンゲルスの死後はじめて革命的綱領が採択された。

党規約の審議では組織原則が問題となり、レーニンは不安定な動揺分子の入党を防止するために、規約第一条で単に綱領を承認し、党を財政的に支持するだけではなく、みずから党組織の一つに参加する者だけが党員たりうることを規定するよう主張したが、マルトフは党組織の指導のもとに定期的に党に協力するだけでよいと主張し、結局、わずかの差でマルトフ案が可決された（しかし、一九〇六年の第四回大会ではレーニンの定式が承認された）。

大会はイスクラ的傾向の徹底した支持者であるレーニン派と、

「軟弱な」イスクラ派であるマルトフ派とに分裂し、前者は党中央指導機関の選挙で多数（ボリシンストヴォ）を占めたのでボリシェヴィキと呼ばれ、後者は少数（メンシンストヴォ）にとどまったのでメンシェヴィキと呼ばれるようになった。

大会は手工業主義とサークル主義を克服し、ロシアにおける革命的マルクス主義政党の基礎をきずいた。「一九〇三年以来、ボリシェヴィズムは政治思想の潮流として、また政党として存在している」（レーニン）。二四〇、二六六、三三六

（一九一） 党の創立——一八九八年三月一—三（一三—一五）日にミンスクでひらかれたロシア社会民主労働党第一回大会のこと。六組織の代表九名が出席。中央委員会を選出し、『ラボーチャヤ・ガゼータ』を正式に機関紙と認め、『宣言』を発表し、在外ロシア社会民主主義同盟を党の在外代表と声明した。

第一回大会の意義は党の創立を宣言することによって偉大な革命的、宣伝的役割を果たしたことにあった。しかし、綱領も規約も採択せず、この大会で選出された中央委員会はまもなく逮捕され、機関紙の印刷所は押さえられ、個々のマルクス主義サークルを結合し統一することはできなかった。したがって、単一の中央部からの指導も、地方組織の活動における統一的方針もなかった。二四〇

（一九二） 第四国会——一九〇七年六月三日のクーデターによって改悪された新選挙法によって選出され、一九一二年一一月一五日から一九一七年二月二五日までつづいた。議員の党派別構成は右翼六五、国権派および右翼穏健派一二〇、オクチャブリスト九八、進歩派四八、カデット五九、三つの非ロシア民族グループ二一、トルドヴィキ一〇、社会民主党一四、無所属七（合計四四二名）。ブルジョア地主的諸党派が優勢を占めたので、第四国会はツァーリズムの政策を全面的に支持した。

社会民主党議員団はボリシェヴィキ六名、メンシェヴィキ七名、メンシェヴィキに同調したワルシャワ市選出議員一名で構成された。一九一三年一〇月、ボリシェヴィキ議員は党中央委員会の指示で独自の議員団を結成した。レーニンはボリシェヴィキ議員の活動を日常的に指導した。ボリシェヴィキ議員は国会内で党の立場を固守し、不屈にたたかった。

第一次世界大戦が始まり、ブルジョア、地主党派だけでなく、メンシェヴィキとエス・エルも祖国防衛主義の立場に立ったとき、ボリシェヴィキだけが戦争に反対したので、一九一四年一一月、第四国会のボリシェヴィキ議員は全員逮捕され、裁判に付された。

一九一五年八月、第一次世界大戦における勝利を保障しえないツァーリズムにたいするブルジョアジーの不満にもとづいて反政府的「進歩ブロック」が国会内に結成され、革命運動の弾圧と戦勝のためにツァーリズムから政治的譲歩を獲得しようとした。議員の過半数がこのブロックに加入した。一九一七年二月二六日、ツァーリは第四回国会の解散を宣言したが、翌二月二七日（三月一二日）、臨時国会委員会が組織され、ペトログラード・ソヴェトのエス・エルおよびメンシェヴィキの幹部と協定を結んで臨時政府を組閣した（二月革命）。臨時国会委員会のメンバーは軍部独裁とソヴェトの解散を要求したが、臨時政府は一九一七年一〇月六（一九）日国会解散の布告を出すことを余儀なくされた。二四一

（一九三） 「経済主義者」——一九世紀末から二〇世紀はじめにかけてロシア社会民主党内に発生した日和見主義的一潮流、国際日和見主義の一変種「経済主義」の支持者。機関紙誌は『ラボーチャヤ・ムィスリ』（一八九七—一九〇二年）と『ラボーチェエ・デーロ』

(一八九九—一九〇二年)。労働者階級の任務を経済闘争に限定し、政治闘争は自由主義的ブルジョアジーの仕事であると主張した。労働者階級の党の指導的役割を否認し、労働運動の自然発生的性格を尊重し、革命的理論の意義を軽視し、社会主義思想は自然発生的な労働運動からのみ生まれると主張した。社会主義意識を外からマルクス主義政党が労働運動の中へ持ち込む必要性を否認し、それによってブルジョア・イデオロギーに道をひらいた。社会民主主義運動の分散性と手工業性を擁護し、中央集権的な労働者階級の党の創設に反対した。「経済主義」は労働者階級を階級的、革命的な道からそらせ、ブルジョアジーの政治的付加物にしてしまう危険があった。
　レーニンは『何をなすべきか』その他の論文に新聞『イスクラ』で「経済主義者」とたたかい、これを完全に粉砕した。二四六

(一九四)　一九〇八年の第五回全国党協議会の決議から、ストルィピン反動期におけるツァーリズムの進化の特徴づけの部分を引用したもの。二四七

(一九五)　**ストックホルムの決議**——一九〇六年四月ストックホルムでひらかれたロシア社会民主労働党第四回(統一)大会で、党規約第一条について、さきに一九〇三年の第二回大会で採択されたマルトフの定式をしりぞけて、レーニンの定式を採用することをきめた決議。本書注(一九〇)を参照。二四七

(一九六)　**党規約の改正**——一九一二年一月の第六回全国協議会(プラハ)でおこなわれた。全集、第一七巻、四九五—四九六ページを参照。二四九

(一九七)　**ブレスト大会**——一九一三年三月二三—二五日にフランスのブレスト市でひらかれた、フランス社会党の第一〇回大会のこと。二五一

(一九八)　**ロンドン大会**——一九〇七年四月三〇日—五月一九日(五月一三日—六月一日)にロンドンでひらかれたロシア社会民主労働党第五回大会のこと。一四万七千人あまりの党員を代表する三三六人の代議員が出席。その内訳はボリシェヴィキ一〇五名、メンシェヴィキ九七名、ブンド五七名、ポーランド社会民主主義者四四名、ラトヴィア辺区社会民主党代表二九名、「いかなる分派にも属しない者」四名。ボリシェヴィキは主として大工業中心地から送られた。レーニンは上部カマ地方の党組織から大会代表に選ばれた。作家ゴーリキーも評議権をもって参加した。
　ボリシェヴィキは大会でポーランド・リトワ王国社会民主党とラトヴィア辺区社会民主党の支持を得たので、多数を制することができた。大会はすべての基本問題、とくにブルジョア諸党にたいする態度、国会問題、「労働者大会」問題、「労働組合と党」の問題でボリシェヴィキの提案にもとづく決議を採択した。大会は規約を変更して、中央機関紙編集局は中央委員会に従属することにした。中央委員にはボリシェヴィキ五名、メンシェヴィキ四名、ポーランド社会民主主義者二名、ラトヴィア社会民主主義者一名が選ばれ、中央委員候補にはボリシェヴィキ一〇名、メンシェヴィキ七名、ポーランド社会民主主義者三名、ラトヴィア社会民主主義者二名が選ばれた。あとでブンドから二名、ラトヴィア辺区社会民主党から一名が補充された。
　さまざまな潮流の代表から成る中央委員会の指導が当てにならないことを考慮して、大会の終りにボリシェヴィキ派の会議でレーニンをかしらとするボリシェヴィキ・センターが選ばれ、新聞『プロレタリー』編集局もそれに加わった。二五一、二四〇
第五回党大会はロシアの労働運動におけるボリシェヴィズムの勝

利であった。ボリシェヴィキの戦術は党全体にとっての統一的戦術として承認された。三三、三四〇

（一九九）　事務職員大会——商工業従業員第四回大会のこと。一九一三年六月二九日—七月三日（七月一二—一六日）に、モスクワでひらかれた。大会には三七八名の代議員が出席した。ボリシェヴィキはほとんど半数の代議員の支持をえたが、さらに大会出席者のうちのナロードニキ左派的部分をもひきいれて、彼らといっしょになって多数派を形成した。解党派の代表はほとんどとるにたりなかった。大会の活動の模様は『プラウダ』の紙面で報道された、しかし内務大臣の命令により大会は途中で禁止された。三三五

（二〇〇）『キエフスカヤ・ムィスリ』（『キエフの思想』）——自由主義的ブルジョアジーの日刊新聞。一九〇六年一二月から一九一八年一二月までキエフで発行された。一九一五年までは毎週絵入りの付録がついていた。一九一七年以後は朝刊と夕刊とを出していた。三三六、三三五

（二〇一）　ネクラーソフの詩『四〇年代の人』のなかの次の二行の言いかえ。

「だがときどきおそるべき焦眉の問題がおこるとわきへよけてとおる」三三六

（二〇二）「労働者大会」——メンシェヴィキのペ・ベ・アクセリロードが一九〇五年に提唱した解党主義的構想。さまざまな労働者組織の代表の大会を招集し、そこで社会民主主義者もエス・エルも無政府主義者も加入できる「広範な労働者党」を設立しようとした。第五回党大会（一九〇七年）はこれを無条件に有害なものとして非難した。三三九

（二〇三）　論文『テイラー・システムは人間を機械の奴隷にする』の手稿はながいあいだ所在がわからなかった。やっと一九五九年に『プーチ・プラウドィ』編集局の一九一四年分の原稿のあいだに発見された。それはモスクワのソ連中央国家歴史アルヒーフの一万五千点以上にのぼる「物証」コレクションに保管されてあった。この手稿は、他の多くのボリシェヴィキ出版物（『プラウダ』、『プロスヴェシチェーニエ』等）の編集局の文書と同様に、新聞『プラウダ』の反政府活動の物証として警視庁に没収されていたのであった。三六一

（二〇四）　現在のような恐慌の時期——一九〇七年につづいて一九一三年に発生した周期的過剰生産恐慌をさす。三六一

（二〇五）『ゴーゴリへの手紙』——ベリンスキーが一八四七年七月に書いた手紙。ゲルツェンによって一八五五年にはじめて『ポリャールナヤ・ズヴェズダ』（『北極星』）に発表された。三六四

（二〇六）「労働解放」団——一八八三年にスイスのジュネーヴで創設された最初のロシア人のマルクス主義的グループ。同団の創設者はゲ・ヴェ・プレハーノフで、ほかにペ・ベ・アクセリロード、エリ・ゲ・デイチ、ヴェ・イ・ザスーリチ、ヴェ・エヌ・イグナートフらが参加した。同団はマルクス、エンゲルス『共産党宣言』、マルクス『賃労働と資本』、エンゲルス『空想から科学への社会主義の発展』その他をロシア語に翻訳し、国外で印刷し、秘密にロシア国内にひろめて、ナロードニキに大きな打撃をあたえた。しかし、ナロードニキ的見解の残存、農民の革命性の過小評価、自由主義的ブルジョアジーの役割の過大評価などの重大な誤りもあり、これがプレハーノフらの後年のメンシェヴィキ的見解の素因となった。労働運動との実践的結びつきはなかったが、ロシア労働者階級の革命的自覚の確立に大きな役割を果たし、一八八九年の第二インタナシ

ョナル第一回大会（パリ）以来そのすべての大会でロシアの社会民主主義派を代表した。「労働解放」団は一九〇三年のロシア社会民主労働党第二回大会でみずから解消した。二六五

（二〇七）　この資料については、『セーヴェルナヤ・プラウダ』一九一三年八月二八日付第一三号に掲載されたレーニンの論文『解放運動における諸身分と諸階級の役割』（全集、第一九巻、三四六―三四九ページ）を参照。二六五

（二〇八）　旧『イスクラ』（『火花』）――レーニンが創設した最初の全国的なマルクス主義的非合法新聞。第一号は一九〇〇年一二月一一日（二四日）ライプチヒ発行。つづく諸号はミュンヘンで、一九〇二年四月以後はロンドンで、一九〇三年の春以後はジュネーヴで発行。編集局はレーニン、プレハーノフ、マルトフ、アクセリロード、ポトレソフ、ザスーリチの六名。レーニンは事実上編集長であった。ロシアの多くの都市に『イスクラ』派に属するグループや委員会が組織された。『イスクラ』によって準備されたロシア社会民主労働党第二回大会（一九〇三年七―八月）がひらかれるときには、その地方組織の大多数が「イスクラ」派に属していた。第二回党大会は党建設に果たした『イスクラ』の功績を評価し、これを党の中央機関紙と宣言した。

第二回党大会ではレーニン、プレハーノフ、マルトフの三名から成る編集局が確認されたが、マルトフが拒否したので、第四六―五一号はレーニンとプレハーノフの編集で発行。その後プレハーノフがメンシェヴィズムに移り、旧編集局員の全員復帰を要求したので、一九〇三年一〇月一九日（一一月一日）レーニンが編集局から脱退し、第五二号はプレハーノフ一人で編集された。同年一一月一三日（二六日）、プレハーノフは独断で以前のメンシェヴィキ的メンバーを編集局に補充した。こうして『イスクラ』は第五二号以後、メンシェヴィキの機関紙になった。レーニンが編集していた『イスクラ』を旧『イスクラ』、第五二号以後を新『イスクラ』という。本書注（五二）、（二一六）を参照。二六五

（二〇九）『ラボーチー』（『労働者』）――ディミトリー・ブラゴエフ（一八五六―一九二四年）が組織したロシア最初の社会民主主義グループの一つ「ブラゴエフ団」が一八八五年にペテルブルグで創刊したロシア最初の社会民主主義新聞。もちろん、非合法（検閲無視の）出版であった。ブラゴエフの逮捕（同年三月）などの事情で、二号出ただけで終わった。二六六

（二一〇）　一八九八年三月にミンスクでひらかれたロシア社会民主労働党第一回（創立）大会をさす。本書注（一九一）を参照。二六七

（二一一）『サンクト・ペテルブルグ・ラボーチー・リストーク』（『サンクト・ペテルブルグ労働者小新聞』）――非合法新聞、ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の機関紙。一八九七年に二号だけ出た。第一号は二月に（日付は一月になっている）、ロシア国内で三〇〇―四〇〇部ばかり謄写版で印刷され、第二号は九月にスイスのジュネーヴで活版印刷された。この新聞は労働者階級の経済闘争を広範な政治的要求と結合するという任務を提起し、労働者党創設の必要性を力説した。二六七

（二一二）『ラボーチャヤ・ムィスリ』（『労働者の思想』）――「経済主義者」の機関紙。一八九七年一〇月から一九〇二年一二月までペテルブルグ、ベルリン、ワルシャワなどで発行され、全部で一六号出た。カ・エム・タフタリョーフその他が編集にあたった。国際日和見主義のロシア的変種として『ラボーチャヤ・ムィスリ』の見解の批判を、レーニンは新聞『イスクラ』に発表した諸論文や『ロ

シア社会民主党内の後退的傾向』、『なにをなすべきか？』のなかでおこなっている。二六七

(二二三)　**一九〇〇年春の分裂**――一八九八年のロシア社会民主労働党の第一回大会で党の在外機関として公認された「在外ロシア社会民主主義者同盟」は、一九〇〇年四月の第二回大会で分裂し、同盟の日和見主義的多数派（「経済主義者」）と絶縁した少数派は、同年五月、ロシア革命的組織「社会民主主義者」団という名称の別個の組織をつくった。二六七

(二二四)　『**ラボーチエエ・デーロ**』（『労働者の事業』）――「経済主義者」の雑誌、「在外ロシア社会民主主義者同盟」の不定期機関誌として一八九九年四月から一九〇二年二月までジュネーヴで発行され、全部で一二号（九冊）出された。編集者はクリチェフスキー、テプロフ（シビリャク）、イヴァンシン、のちにマルトィノフ。この雑誌の付録として『ラボーチエエ・デーロ・リーフレット』が一九〇〇―一九〇一年に出された。本書注（五一）を参照。二六八

(二二五)　『**ラボートニク**』（『働き手』）――一八九六―九九年に「労働解放」団の編集のもとに「ロシア社会民主主義者同盟」によって外国で発行された不定期論集。レーニンが一八九五年に外遊中プレハーノフとアクセリロードを説きつけて、発行させたもの。彼は帰国するやこの出版の資金集めや情報収集の組織に尽力し、同年一二月に逮捕されるまでに論文『フリードリヒ・エンゲルス』を書き、数編の通信を送った。『ラボートニク』は六号（三冊）、『ラボートニク・リーフレット』は一〇号出た。二六八

(二二六)　新『**イスクラ**』――一九〇三年一〇月一九日（一一月一日）にレーニンが編集局から脱退したのち、メンシェヴィキによって編集された第五二号以後の『イスクラ』をさす。メンシェヴィキはそれを反マルクス主義、反党活動の機関紙、日和見主義の宣伝のための演壇にかえた。レーニンの指導のもとにボリシェヴィキはこれに対抗する新聞『フペリョード』を発行して、第三回党大会の招集のためにたたかった。本書注（五二）、（二〇八）を参照。二六九

(二二七)　『**フペリョード**』（『前進』）――ボリシェヴィキの非合法週刊新聞。一九〇四年一二月二二日（一九〇五年一月四日）から一九〇五年五月五（一八）日までジュネーヴで発行され、全部で一八号出た。発行部数七千ないし一万部。この新聞の組織者、指導者はレーニン。編集局員としては、ヴォロフスキー、オリミンスキー、ルナチャルスキーがいた。

『フペリョード』は、メンシェヴィキが第二回党大会後欺瞞的な方法で党の中央諸機関（中央機関紙、党評議会、中央委員会）を乗っ取った激しい党内闘争のなかで発行され、メンシェヴィキの日和見主義および組織破壊活動と妥協なくたたかい、地方党組織を結集して、第三回党大会を準備し、第一次ロシア革命が提起する諸問題を解明し、正しい戦術を立てるうえで、すぐれた役割を果たした。

『フペリョード』には、六〇以上にのぼるレーニンの論文や記事が発表された。いくつかの号――たとえば、一九〇五年一月九（二二）日の事件にあてられている第四号と第五号――は、ほとんどまったくレーニンひとりで編集された。

『フペリョード』はロシア国内の多くの党組織と恒常的な結びつきをもっていた。『フペリョード』にのったレーニンの論文は、しばしばボリシェヴィキの地方機関紙に転載され、また単行のリーフレットや小冊子としても出版された。

第三回党大会（一九〇五年四―五月）の決定にもとづいて『フペリョード』は廃刊され、それに代わる党中央機関紙として『プロレ

タリー』が創刊された。三六九

（三八）『ノーヴァヤ・ジーズニ』（『新生活』）――ボリシェヴィキの最初の合法的新聞。一九〇五年一〇月二七日（一一月九日）から一二月三（一六）日まで、ペテルブルグで毎日発行されていた。一一月の初めにレーニンが亡命先からかえってから、レーニンの直接の指導のもとに発行されるようになった。これは、事実上、ロシア社会民主労働党の中央機関紙であった。最も近しい寄稿者は、ヴォロフスキー、オリミンスキー、ルナチャルスキーその他であった。ゴーリキーもこれに積極的に参加し、新聞に多大の物質的援助をあたえた。外国からの寄稿者にはローザ・ルクセンブルク、カール・リープクネヒト、マルセル・カシャン、ポール・ラファルグなどがいた。この新聞にはレーニンの論文が一四編掲載された。毎日の発行部数は八万部に達した。数々の弾圧を受け、二七号のうち一五号が押収され、破棄された。ツァーリ政府によって禁止されたあと、最後の第二八号は非合法に発行された。三七〇

（三九）『ナチャーロ』（『始め』）――メンシェヴィキの合法的日刊新聞、一九〇五年一一―一二月にペテルブルグで出ていた。三七〇

（三〇）『ヴォルナー』（『波』）――ボリシェヴィキの合法的日刊新聞。一九〇六年四月二六日（五月九日）から五月二四日（六月六日）まで、ペテルブルグで出ていた。全部で二五号出た。一九〇六年五月五（一八）日（第四回党大会を終えてレーニンがストックホルムからかえってきたあと）の第九号から、事実上レーニンによって編集された。レーニンはこの新聞に二〇以上の論文をのせた。編集活動にはヴォロフスキーとオリミンスキーが参加した。しばしば弾圧を受け、ついにツァーリ政府によって禁止された。そのあと、これにかわって、『フペリョード』ついで『エーホ』が発行された。三七〇

（三一）『エーホ』（『こだま』）――ボリシェヴィキの合法的日刊新聞。政府によって禁止された『フペリョード』にかわって、一九〇六年六月二二日（七月五日）から七月七（二〇）日まで、ペテルブルグで出ていた。全部で一四号出た。編集者は事実上レーニンであった。毎号レーニンの論文がのった。『新聞雑誌から』という欄の仕事には、レーニンが直接に参加した。

『エーホ』はほとんど毎号弾圧を受けた。第一国会の解散の前夜に発行を禁止された。三七〇

（三二）『ナロードナヤ・ドゥーマ』（『人民国会』）――メンシェヴィキの日刊新聞、一九〇七年三―四月にペテルブルグで出ていた。三七〇

（三三）ユピテルとミネルヴァ――古代ローマの神々。ユピテルは天空、光、雨、雷電の神で、のちにローマ国家の最高神。ミネルヴァは戦争の女神で、工芸、科学、芸術の守護神。神話によれば、ミネルヴァが完全武装の姿でユピテルの頭からとびだしたことになっている。三七一

（三四）ボリシェヴィキの合法的な月刊理論雑誌『プロスヴェシチェーニエ』をさす。本書注（一六八）を参照。三七三

（三五）『ボリバ』（『闘争』）――トロツキーの雑誌。一九一四年二月から七月までペテルブルグで発行された。「超分派」の仮面にかくれて、トロツキーはこの雑誌でレーニンとボリシェヴィキ党にたいする闘争をおこなった。三七三

（三六）『セーヴェルナヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』（『北部労働者新聞』）――解党派メンシェヴィキの日刊新聞。一九一四年一月三〇日（二月一二日）から五月一（一四）日まで『ノーヴァヤ・ラ

ボーチャヤ・ガゼータ』の後継紙としてペテルブルグで発行された。五月三（一六）日からは『ナーシャ・ラボーチャヤ・ガゼータ』と改題。二七三

（三一七）　ストックホルム（第四回）大会の敗北者とはボリシェヴィキ、ロンドン（第五回）大会の敗北者とはメンシェヴィキをさす。第四回大会の代議員中ボリシェヴィキは四六名、メンシェヴィキは六二名であった。第五回大会については注（一九八）を参照。二七三

（三一八）　一九一二年一月の声明——ロシア社会民主労働党の第六回（プラハ）全国協議会で採択された解党派についての決議をさす。本書注（一五八）を参照。二七三

（三一九）「党擁護派ボリシェヴィキ」——解党派に引きつけられていた調停派。ア・イ・リュビーモフ（エム・ゾンメル）に指導されていた。くわしくはレーニンの論文『冒険主義について』（全集、第二〇巻、三八三—三八七ページ）を参照。二七五

（三二〇）　マッハ主義——オーストリアの物理学者で哲学者E・マッハとドイツの哲学者R・アヴェナリウスが創始した反動的な主観的観念論哲学の一潮流。経験批判論とも言う。本書注（一二三）を参照。二七六

（三二一）　ノズドリョーフ——ゴーゴリの小説『死せる魂』に出てくるごろつきの地主。いたるところいざこざをまきおこす人物。二八〇

（三二二）　ユードゥシカ・ゴロヴリョーフ——サルトィコフ－シチェドリンの作品『ゴロヴリョーフ家の人々』の主人公。歴史的に滅亡の運命をたどり、精神的、肉体的に崩壊しつつある封建的地主階級、社会的寄生者、不誠実な偽善者の典型。それからユードゥシカとは、友情めかしたことばのかげで不信行為をはたらく裏切者の意。二八〇

（三二三）　クーリア制度——帝政ロシアにおける財産や身分、民族などによる不平等な選挙等級制度。土地所有者クーリア、農民クーリア、第一都市クーリア、第二都市クーリア、労働者クーリアなどに分かれ、労働者階級は最も不利な立場に立たされていた。二八〇

（三二四）『フォールヴェルツ』（『前進』）——ドイツ社会民主党の日刊中央機関紙。ハレ党大会の決定により一八九一年からベルリンで発行。エンゲルスは同紙上で日和見主義のあらゆる現われと闘争した。エンゲルスの死後、同紙編集局は党の右翼の手に落ち、ドイツ社会民主党と第二インタナショナルを支配するにいたった日和見主義者の論文を系統的に掲載するようになった。第一次世界大戦にさいしては社会排外主義の立場をとり、十月革命後は反ソ宣伝の中心となった。一九三三年に廃刊。二八一

（三二五）　七人組——第四国会の社会民主党議員団の中の七人のメンシェヴィキをさす。ボリシェヴィキは六人で、「六人組」と呼ばれた。二八二

（三二六）『プーチ・プラウドィ』（『真理の道』）——ボリシェヴィキの『プラウダ』の一名称。一九一四年一月二二日（二月四日）から五月二一日（六月三日）まで、この名称で出た。二八三

（三二七）『プーチ・プラウドィ』一九一四年三月一五日付第三七号に掲載されたレーニンの論文『八月ブロックの崩壊』（全集、第二〇巻、一六一—一六四ページ）をさす。二八三

（三二八）　一九一三年夏の会議——ロシア社会民主労働党中央委員会と党活動家との合同会議をさす。この会議は、秘密保持のために「夏の会議」と言われているが、一九一三年九月二三日—一〇月一日（一〇月六—一四日）に、当時レーニンが生活していたポロニン村（クラクフの近く）でひらかれた。

会議は、中央委員会と地方諸組織の報告、当面の扇動の任務、組

織問題と党大会、ストライキ運動、党出版物、党の国会活動、党国会議員団、合法団体内での活動、民族問題、きたるべきウィーン国際社会主義者大会について討議した。中央委員会の報告にもとづいて、会議は、新しい歴史的条件のもとでの党の任務と党活動の基本形態を規定した。当時緊急になっていた民族問題で、会議は「民族的文化的自治」というブンドの要求を拒否し、レーニンの作成した民族問題についての基本命題を採択した。レーニンは、民族問題についての会議の決議を、党の綱領的宣言とみなした。会議は、社会民主党国会議員団の二派（六人組と七人組）の同権を要求し、一票の偶然の優位を利用するメンシェヴィキ派の行動を非難した。レーニンと中央委員会の指示にしたがって、ボリシェヴィキ議員は、一九一三年一〇月に独自の「ロシア社会民主党労働者議員団」を結成した。二八四、三三八

（三三九）**「古い党はなくなった」**――一九一三年一二月一三日と一四日にロンドンでひらかれた国際社会主義ビューローの一二月会議では、「社会民主党の綱領またはそれに一致する綱領を承認するロシア（ロシア領ポーランドをふくむ）の労働運動のあらゆる分派が、分派を離間させている諸問題について相互に意見を交換するため」、分派代表者の会議を招集することを同ビューロー執行委員会に委任する決議が採択された。この決議を基礎づけて、カウツキーは一二月一四日の演説で、ロシアの古い社会民主党は死んだ、統一を願うロシア労働者の気持にもとづいて党を再建することが必要である、と述べた。レーニンは論文『りっぱな決議とまずい演説』（全集、第一九巻、五六九―五七二ページ）のなかで、決議の内容を明らかにし、カウツキーの演説をとんでもないものと評価した。

国際社会主義ビューロー――第二インタナショナルの常設の執行・情報機関。各国の社会主義政党の代表者からなるビューローを設置する決定は、第二インタナショナルのパリ大会（一九〇〇年九月）で採択された。ロシア社会民主主義派の代表者としては、プレハーノフとクリチェフスキーがビューローに選出された。一九〇五年から、レーニンはロシア社会民主労働党の代表者としてビューローにはいっていた。ビューローの内部にあって、レーニンは、第二インタナショナル幹部の日和見主義と断固たたかった。二八五

（三四〇）『「八月」ブロックの崩壊』（全集、第二〇巻、一六一―一六四ページ）を参照。二八七

（三四一）**耳は額よりうえには伸びない**――サルトィコフ－シチェドリンの作品からとったことば。「耳はいくら大きくなっても額よりうえには伸びられない」、すなわち、どれほどいろいろのことを許そうとも、ある確固たる限界があって、それをこえることは許されないという意味。二八八

（三四二）**「永続革命」**――日和見主義者のパルヴスとトロツキーはマルクス主義的な連続革命の思想をゆがめて、一九〇五年にいわゆる「永続革命」の「理論」をつくりだした。この「理論」の要点はプロレタリアートの同盟者としての農民の革命的役割の否定、レーニンの社会主義革命理論の否定にあった。この「理論」から出発して、トロツキストは孤立した一国における社会主義の勝利が不可能であることを「立証」しようと試みた。二九〇

（三四三）**民族自決権をあげている第九項**――ロシアのマルクス主義者の綱領、すなわち、ロシア社会民主労働党第二回大会（一九〇三年）で採択された党綱領に、ツァーリ専制にかかわる民主的共和制の憲法が保障すべきものとしてあげてある一四の項目のうちの第九項「国家の構成に加わるすべての民族は自決権をもつ」のこと。全

集。第二四巻、五〇〇ページ、「党綱領改正資料」を参照。二九二

（二四四） 一九一三年一〇—一二月に執筆され、『プロスヴェシチェーニエ』第一〇、一一、一二号に発表されたレーニンの論文『民族問題についての論評』（全集、第二〇巻、三—三九ページ）をさす。二九二

（二四五）「一二の民族の襲来」——一八一二年にナポレオン一世が六〇万のヨーロッパ諸国連合軍をひきいてロシアへ攻め込んだことをさす。二九三

（二四六）『科学思想』——一九〇八年にリガで発行されていた雑誌。メンシェヴィキ的傾向をもっていた。二九四

（二四七） 一九一六年、この著作の再版を準備するにあたって、レーニンはこの箇所に次の注を付した。「カウツキーが一九〇九年までは、彼の御立派な小冊子『権力への道』までは日和見主義の敵であったことを、読者諸君は忘れないでもらいたい。彼が日和見主義の擁護に転向したのは、やっと一九一〇—一九一一年であり、さらに決定的に転向したのは、ようやく一九一四—一九一六年になってからであった。」二九四

（二四八）『社会民主主義評論』——ポーランドの社会民主主義者がローザ・ルクセンブルクの密接な協力を得て、一九〇二—一九〇四年と一九〇八—一九一〇年とにクラクフで発行していた雑誌。二九五

（二四九） マルクスが『資本論』で指摘したように——全集、第二三巻、九九七ページを参照。二九五

（二五〇） モルガルテンの戦闘——オーストリア王家が都市の小市民とむすんで貴族に対抗し、ドイツ王国を建設しようとしていたころ、レオポルド公はスイスに兵をすすめて、一三一五年にモルガルテンの天険で全滅した。この戦闘は原住スイス人の英雄的な戦いとして有名であるが、しかしそれは「歴史的圧迫にたいする頑固な牧羊者の戦いであり、執拗な固定的な地方的利害の、全民族の利害にたいする戦いであり、粗野の教養にたいする、野蛮の文明にたいする戦いであった」（エンゲルス——全集、第四巻、四〇八ページ）。二九八

（二五一） レーニンの論文『民族問題についての論評』（全集、第二〇巻、三—三九ページ）を参照。二九九

（二五二）『評論』——『社会民主主義評論』のこと。二九九

（二五三）『ルースカヤ・ムィスリ』（『ロシアの思想』）——月刊の文学・政治雑誌。一八八〇年から一九一八年までモスクワで発行。一八八五年までの編集者はヴェ・エム・ラヴロフで、一九〇五年までは自由主義的ナロードニキ的傾向の雑誌。一八九〇年代にはマルクス主義者の論文が掲載されたこともあった。その当時はゴーリキー、コロレンコ、ウスペンスキー、マミン－シビリャク、チェーホフのような進歩的作家の作品が発表されたこともあった。一九〇五年革命以後はカデット右派の機関紙。編集者ストルーヴェ。民族主義、「ヴェーヒ（道標）主義」、坊主主義を説き、地主的土地所有を弁護。三〇一

（二五四） ブリュン大会——一八九九年九月二四日から二九日までブリュン（ブルノ、現在チェコスロバキア領）でひらかれたオーストリア社会民主党大会をさす。中心議題——民族問題にかんして次の二つの決議案が出された。（一）中央委員会提出、諸民族の地域的自治を主張。（二）南スラヴ委員会提出、非属地的な文化的・民族的自治を主張。大会は満場一致で後者を否決し、オーストリア国家内での民族的自治を認めた妥協的な決議を採択した。レーニンの論文『オーストリアとロシアにおける民族綱領の歴史によせて』（全

集、第二〇巻、九三一—九六ページ）を参照。三四

（三五五）**全ウクライナ学生大会**——一九一三年六月一九—二二日（七月二—五日）、リヴォフ（西部ウクライナ、当時オーストリア領）で、イワン・フランコ（一八五六—一九一六年、ウクライナの大作家、学者、社会活動家、革命的民主主義者）の記念祭と同時にひらかれ、大会の討議にはロシアのウクライナ学生の代表も加わった。大会はウクライナの社会民主主義者ドンツォフが『ウクライナ青年と民族の現状』と題する講演をおこない、ウクライナの「自主独立」（分離）を主張した。三一

（三五六）**『ラボーチャヤ・プラウダ』**——ボリシェヴィキの合法的日刊新聞『プラウダ』の別名。『プラウダ』は禁止を受けるたびに、何度も題名を変えて発行を続けたが、これはその一つ。本書注（一六四）を参照。三一

（三五七）『ラボーチャヤ・プラウダ』一九一三年七月一六日付、第三号に掲載されたレーニンの論文『ウクライナ問題にかんするカデットの所論』（全集、第一九巻、二七二—二七三ページ）をさす。三一

（三五八）**『シリャヒ』（『道』）**——民族主義的傾向をもったウクライナ学生連盟の機関紙。一九一三年四月から一九一四年三月まで、リヴォフで出ていた。三一

（三五九）**『プロレタールスカヤ・プラウダ』**——ボリシェヴィキの合法的日刊新聞『プラウダ』の別名。三二

（三六〇）レーニンの論文『カデットと「民族自決権」』（全集、第一九巻、五六六—五六八ページ）をさす。三二

（三六一）**『ゼムシチナ』**——黒百人組的日刊新聞、極右翼の国会議員の機関紙。一九〇七年七月から一九一七年二月までペテルブルグで発行された。三三

（三六二）**「引っぱって離さない」**——ウスペンスキーの短編小説『駐在所』に出てくる巡査ムイムレッツォフはいつも飲んだくれ、人を見ると理由もなく「引っぱって離さない」。そこから出てきたことば。三三

（三六三）**「マゼッパ派」**——マゼッパ（イワン・ステパノヴィチ、一六四四—一七〇九年）はウクライナのゲマトン（コサックの頭目）、ポーランド国王のちにスウェーデン国王とウクライナのロシアからの分離について謀議し、一七〇八年公然とスウェーデン国王カール一二世の側へ移り、一七〇九年のポルタワの戦役でスウェーデン軍が敗北すると、カール一二世とともにトルコへ逃げた。マゼッパのようにウクライナのロシアからの分離をはかる一派を「マゼッパ派」と言う。三六

（三六四）**「どえらい規模の距離」**——グリボエドフの作品『知恵の悲しみ』のなかでスカロズープが言った表現。三七

（三六五）**『ナープシュド』（『前進』）**——ガリチア・シレジア社会民主党の中央機関紙。一八九二年からクラクフで出された。小ブルジョア的民族主義イデオロギーを代表していたので、レーニンはこれを「非常によくない、少しもマルクス主義的でない機関紙」と特徴づけた。三九

（三六六）**ポーランド社会党（ペ・ペ・エス）**——一八九二年に創立された改良主義的、民族主義的政党。ピルスツキーとその一派の指導のもとにポーランド独立のスローガンをかかげ、専制と資本主義に反対するロシア労働者との共同闘争からポーランド労働者を引き離そうと努力した。一九〇六年に分裂、左派は一九一八年にポーランド共産党の結成に参加し、ひきつづきペ・ペ・エスを名のった

右派は第一次大戦後独立の回復とともに一時政権をにぎったが、一九二六年のピルスッキーのファシスト・クーデターで野党となった。第二次大戦中に再び分裂。反動的部分（「自由・平等・独立」党）はロンドン亡命「政府」に参加し、左翼的部分（ポーランド社会主義者労働党）は反ヒトラー抵抗運動に参加、一九四四年解放とともに再びペ・ペ・エスと名のり、人民民主主義的ポーランドの建設に参加。一九四八年一二月ポーランド労働党（一九四二年創立）と合同してポーランド統一労働者党を結成した。三三〇

（三六七）**ポーランドの貴族の解放運動**——ロシアの専制にたいする一八六三—一八六四年のポーランド民族解放の蜂起。はじめ蜂起は民族独立、すべての男子の同権、買取りなしに土地を耕作農民に移譲することなどを綱領として、下級貴族の「赤色」党によって指導されたが、大土地貴族と大ブルジョアジーの「白色」党が加わり、後者は蜂起を利用し、英仏の援助を得てツァーリ政府と有利な取引をしようとつとめた。蜂起の指導権は「白色」党に移り、その裏切りによって蜂起は残忍に鎮圧された。

ロシアの革命的民主主義派はこの蜂起に深く共鳴した。マルクスとエンゲルスはこれを進歩的なものと評価し、非常に共鳴し、その勝利を熱烈に希望し、ロンドン在住ドイツ人亡命者の名でポーランド人への援助を呼びかけた。三三七

（三六八）**マルクスのくせ**——ウィルヘルム・リープクネヒトのマルクスの思い出による（国民文庫『マルクスの回想』五九ページを参照）。三三九

（三六九）**チャーティスト**——一八三〇—四〇年代に困難な経済状態と政治的無権利からおこったイギリス労働者の大衆的革命運動の参加者。運動の組織的中心となった「ロンドン労働者連盟」は議会にたいする請願書、「人民憲章」を作成しその実行を要求した。この「チャーター」（憲章）ということばから運動の名称が生まれた。人民憲章は（一）二一歳に達したすべての男子にたいする普通選挙権、（二）秘密投票、（三）平等な選挙区、（四）国会議員候補にたいする財産上の資格の廃止、（五）議員報酬の支払、（六）毎年の国会改選、という六項目の綱領を提起した。運動は巨大な集会やデモンストレーションで始まり、一九四〇年七月には「全国チャーティスト連盟」が創設されたが、これこそ労働運動史上最初の大衆的労働者党となった。

一八四二年五月二日、チャーティストの第二の請願書が国会に提出された。今度はすでに一連の社会的要求（労働時間の短縮、賃金の引上げ、その他）をふくんでいた。国会がこれを拒否したので、チャーティストはゼネストを決行した。

一八四八年、チャーティストは第三の請願書をもって国会デモを計画した。しかし、政府は軍隊を出動させて、これを阻止した。請願書は何ヵ月もかかって審議され、結局拒否された。一八四八年以後、チャーティスト運動は衰退した。この運動の失敗の主要な原因は、明確な綱領と戦術、それにプロレタリアートの首尾一貫した革命的指導が欠けていたからであった。しかし、チャーティストはイギリスの政治史にも、国際労働運動の発展にも絶大な影響をあたえた。三三九

（三七〇）**マルクスの手紙**——全集、第三二巻、五二〇（原）ページを参照。三三九

（三七一）**ポーランドの小貴族（シュリャフタ）**——封建制のもとで納税、賦役の義務を免除され、国王の選挙・交渉権と法案の拒否権をもっていたが、一七九五年ポーランド国家が解消したのちは、

自分の階級的特権を守るために民族解放運動の先頭に立った。その後、民主勢力の成長に関連して解放運動から遠去かり、ポーランドを分割したオーストリア、プロイセン、帝政ロシアの支配階級と同盟を結び、ポーランド人民の革命的闘争に対抗した。一九二一年、ポーランドですべての身分的特権が廃止されたときに消滅。三二九

(二七二) **エンゲルスの手紙**——全集、第二七巻、二六七(原)ページを参照。三二九

(二七三) **マルクスの手紙**——全集、第三一巻、二二八—二二九(原)ページを参照。三三〇

(二七四) **『タイムズ』**——ロンドンで一七八五年に創刊された日刊新聞。イギリス・ブルジョアジーの保守的な大新聞の一つ。三三一

(二七五) **マルクスの手紙**——全集、第三一巻、三〇二(原)ページを参照。三三一

(二七六) **フィアナ派**(フェニアン党)——一八五〇年代の末ごろに始まったアイルランド民族独立運動の小ブルジョア的一派。その綱領と活動はイギリスの植民地的抑圧にたいするアイルランド人民大衆の抗議を反映しており、民族独立、民主共和国の樹立、自作農の創設を要求した。だが、その陰謀戦術によってアイルランドの広範な人民各層と結びつきをかためることができず、またイギリスの一般民主主義運動および労働運動とも結びついていなかった。フィアナ派は一八六七年二—三月に蜂起をおこしたが、打ち破られ、その後はテロル行為をこととし、一八七〇年代に衰退した。三三一

(二七七) **一七八三年の思いつき**——一七八三年の「権利放棄条例」をさす。アイルランドはこの条例によって、自分自身の議会が定めた法律や自分自身の裁判所によって支配されるという権利を得たが、大臣の任命その他の権限はなおイギリス人の手に残された。一八〇一年の併合によってアイルランド議会が廃止されたとき、この条例も効力を失った。三三一

(二七八) **マルクスの手紙**——全集、第三一巻、四一二(原)ページを参照。三三一

(二七九) **アイルランドのペール**——イギリス人がアイルランド征服の途上で、一五四七年にアイルランドにつくった特別区域で、その内部ではイギリスの法律、言語などが強制的に通用させられていた。三三二

(二八〇) **マルクスの手紙**——全集、第三一巻、三六八(原)ページを参照。三三二

(二八一) **マルクスの手紙**——全集、第三一巻、三九二—三九五(原)ページを参照。三三三

(二八二) **『ニューヨーク・トリビュン』**——正確には『ニューヨーク・デイリー・トリビュン』。一八四一年から一九二四年までニューヨークで発行された。一八五〇年代のなかばまではアメリカ・ホイッグ党右派、のちに共和党の機関紙。マルクスは一八五一年八月から一八六二年三月まで寄稿。エンゲルスもマルクスの依頼で同紙のために多くの論文を書いた。ヨーロッパの反動期にマルクスとエンゲルスは当時としては進歩的で、しかも広く普及している同紙を利用して、資本主義社会の欠陥を具体的な事実で暴露した。しかし、アメリカの南北戦争にさいして、同紙編集局内に奴隷所有者と妥協する者が勢いを得て、同紙が進歩的な立場から離れたので、マルクスは寄稿を中止した。その後、同紙の傾向はますます右翼的になった。三三三

(二八三) **マルクスの手紙**——邦訳二三巻選集、第八巻、五二七—五二八ページを参照。三三三

(二六四)『ザリャー』(『あかつき』)――一九〇一年三月から一九〇二年八月までシュトゥットガルトで『イスクラ』編集局によって合法的に発行されたマルクス主義的科学・政治雑誌。全部で四号(三刷)出た。同誌の任務はレーニンがロシアで書いた『イスクラ』および『ザリャー』編集局の声明草案(全集、第四巻、三四七―三五九ページ)に規定された。一九〇二年、編集局内部に意見の相違と紛争がおこったとき、プレハーノフは(『ザリャー』の編集を自分に確保しておく意図で)雑誌を新聞から切り離すという案を出したが、否決され、『イスクラ』と『ザリャー』の編集局は終始共通であった。

『ザリャー』は国際修正主義とロシア修正主義をきびしく批判し、マルクス主義の理論的基礎を守った。レーニンとプレハーノフが同誌にいくつかの重要な論文を書いた。三二六

(二六五) プレハーノフの論文『ロシア社会民主党綱領草案』からの引用。これは一九〇二年の雑誌『ザリャー』第四号に発表された。三二六

(二六六) 一九〇七年の協議会――一九〇七年七月二一―二三日(八月三―五日)にコトカ(フィンランド)でひらかれたロシア社会民主労働党第三回(第二回全国)協議会と同年一一月五―一二(一八―二五)日にヘルシングフォルス(現在のフィンランドの首都ヘルシンキ)でひらかれた同党第四回(第三回全国)協議会のこと。

第三回協議会は六月三日のクーデターと第三国会選挙に関連する戦術問題を審議するためにひらかれ、議決権をもつ代議員二六名(ボリシェヴィキ九名、ポーランド社会民主主義者五名、ラトヴィア社会民主主義者二名、メンシェヴィキ五名、ブンド五名)が出席。第三国会への参加問題については、ボイコットに反対するレーニンと、ボイコットを主張するボグダーノフと、カデットと協力して選挙に参加することを主張するダンとの三つの決議案が出されたが、結局レーニン案が採択された。第三協議会は同時に他党との選挙協定、選挙政綱について決定を採択し、全ロシア労働組合大会問題については四つの決議案を資料として中央委員会に提出することにした。

第四回協議会には二七名の代議員(ボリシェヴィキ一〇名、メンシェヴィキ四名、ポーランド社会民主主義者五名、ブンド五名、ラトヴィア社会民主主義者三名)が出席し、国会内社会民主党議員団の戦術、各分派のセンター、党中央委員会と地方組織との連絡の強化、ブルジョア出版物への社会民主主義者の参加などの問題を審議した。最初の議題でレーニンが報告し、プロレタリアートの革命的教育と党の基本政策(民主共和制、地主の土地の没収、八時間労働日)の宣伝のために国会を革命的に利用することを主張した。代議員の大多数はメンシェヴィキとブンドの提案をしりぞけて、レーニンが提案したボリシェヴィキの決議案を支持した。三三〇

(二六七)「ズボンなしの少年」――サルトィコフ-シチェドリンの印象記『国外で』から取ったことば。三三一

(二六八) ポミャロフスキーの神学生――エヌ・ゲ・ポミャロフスキーの作品『官費神学校の記録』から取った表現。三三三

(二六九)『ズヴィン』(『鏡』)――メンシェヴィキ的傾向の民族主義的合法月刊雑誌。一九一三年一月から一九一四年なかごろまで、キエフでウクライナ語で発行された。三三三

(二七〇) クリミア戦争のときに、一八五五年八月四日のチョールナヤ川の会戦についてうたった、セヴァストーポリの兵士の歌のなかのことば。この歌の作者はトルストイ。三三四

（三九一）　一八四九年と一八六三年の思い出——一八四九年にはハンガリー革命がツァーリ・ニコライ一世の軍隊によって弾圧され、一八六三年にはポーランドの叛乱がおなじくツァーリ政府によって鎮圧された。三四五

（三九二）　『ナーシャ・ラボーチャヤ・ガゼータ』（『われらの労働者新聞』）——解党派メンシェヴィキの日刊新聞。一九一四年五月三〇日から『セーヴェルナヤ・ラボーチャヤ・ガゼータ』にかわってペテルブルグで発行されたが、同年中に停刊。三四七

（三九三）　『ツァイト』（『時代』）——ブンドの機関紙。ユダヤ語で印刷され、一九一二—一九一四年、ペテルブルグで発行された。三四七

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アウグストフスキー→ツェデルバウム、エス・オ

アキモフ（**マフノヴェツ**）、**ヴェ・ペ**（一八七五—一九二一）——一八九〇年代の中ごろから革命運動に参加。「在外ロシア社会民主主義者同盟」の右翼的指導者、ベルンシュタイン主義を弁護。メンシェヴィキの最右翼に属す。のち、協同組合活動に従事し、政治からまったく遠ざかった。

アクセリロード、ペ・ベ（一八五〇—一九二八）——メンシェヴィキの指導者。はじめナロードニキ、「土地と自由団」の分裂にさいして「黒い割替」派に属し、「労働解放」団の創設に参加。『イスクラ』『ザリャー』編集局員。第二回党大会後積極的メンシェヴィキ。一九〇五年プロレタリアート党に対抗する労働者大会の招集を主張、労資協調思想を擁護。反動期には解党派。一九一二年反党的八月ブロックに参加。第一次大戦中は中央派。二月革命後ペトログラード・ソヴェト執行委員、ブルジョア臨時政府を支持。十月革命にたいしては敵対的態度をとり、亡命して、ソヴェト・ロシアにたいする武力干渉を提唱した。

アラクチェーエフ、ア・ア（一七六九—一八三四）——アレクサンドル一世のもとで陸軍大臣、極端な反動政治家。彼の名は警察的専制主義と野蛮な軍国主義の代名詞になっている。

アレクサンドル二世（**ロマノフ**）（一八一八—一八八一）——ロシア皇帝（在位一八五五—一八八一）。農奴解放令を発布（一八六一年）。ペテルブルグで「人民の意志」派によって爆弾で暗殺された。

アレクシンスキー、イ・ペ（一八七二年生）——モスクワ大学外科医学講座の教授。ゼムストヴォ活動家、ウラジーミル県選出第一国会議員。カデット、のちに人民社会党（エヌ・エス）に移った。

アレクセーエフ、ペ・ア（一八四九—一八九一）——七〇年代の著名な革命家、職工。ペテルブルグのちにモスクワで活動し、一八七五年捕えられ、一八七七年三月一〇（二二）日法廷でツァーリ専制の不可避的倒壊を予言する有名な演説をした。この演説は非合法に印刷されて全国に普及し、ロシアの革命運動に大きな影響をあたえた。一〇年の懲役刑に処せられたが、一八八四年流刑にかえられ、ヤクーチアに住んだ。そして、そこで強盗におそわれて、殺された。

アン→ジョルダニア、エヌ・エヌ

アントニー・ヴォルィンスキー（**フラポヴィツキー、ア・ペ**）（一八六三—一九三六）——黒百人組的大主教、「戦闘的僧侶主義」の思想的代表者。十月革命後、内戦中はデニキンと協力。国外に亡命。

イオーノフ（**コイゲン、エフ・エム**）（一八七〇—一九二三）——社会民主主義者、ブンド指導者のひとり、のちにロシア共産党員。一八九三年からオデッサの社会民主主義サークルで活動。一九〇三年にブンド中央委員となる。第四回、第五回党大会、第五回党協議会に参加。党擁護派メンシェヴィキの立場に立っていたが、のちに調停主義に傾いた。第一次世界大戦中はブンドの国際主義的一翼に属し、十月革命後ロシア共産党に入党。ヴォツカヤ（ウドムルト）州委員会で活動した。

イズゴーエフ（**ランデ**）、**ア・エス**（一八七二年生）——ブルジョア政論家。はじめ「合法マルクス主義者」、のちカデット党員。

同党の新聞でボリシェヴィキを攻撃。十月革命後、国外追放。

イスフ、イ・ア（ミハイル）（一八七八—一九二〇）——メンシェヴィキ。モスクワとペテルブルグで活動。一九〇七年メンシェヴィキを代表して中央委員会にはいる。反動期には解党派。第一次世界大戦にさいしては祖国防衛派。一九一七年にはメンシェヴィキ・モスクワ委員会の一員。モスクワ・ソヴェト執行委員会および第一次全ロシア中央執行委員会に参加。十月革命後は労働博物館で働いた。

ヴァルスキ、アドルフ（ワルシャフスキ、ア・エス）（一八六八—一九三七）——ポーランドの革命家。ローザ・ルクセンブルクらとともに国外でポーランド語の新聞『労働者の事業』、雑誌『社会民主主義評論』を創刊。ロシア社会民主労働党第四回大会後、同党中央委員、機関紙編集委員。第一次世界大戦中は国際主義者。ツィンメルヴァルトとキンタールの反戦会議に出席。ポーランド共産主義労働者の創立者、中央委員のひとり。その国会議員団長。一九二九年ソ連へ亡命。マルクス・エンゲルス・レーニン研究所でポーランド労働運動史を研究。

ヴィヴィアーニ、R・R（一八六三—一九二五）——フランスの政治家、弁護士。ブルジョア政党と公然と協力する「独立社会主義者」グループに属し、何度も国会議員に当選。一九〇六—一〇年、はじめクレマンソー内閣、のちにブリアン内閣で労相。一九〇六年社会党と絶縁し、一九一一年ミルランその他の裏切者とともに「共和国社会党」（「独立社会主義者」グループの後身）を創立。一九一四年、首相兼外相、のちに法相。一九二〇年国際連盟フランス代表。一九二一年ワシントン会議フランス代表。

ヴォリスキー、エス（ソコロフ、ア・ヴェ、エス・ヴェ）（一八八〇年生）——ボリシェヴィキ、召還派のリーダーのひとり。イタリアのカプリおよびボロニアにおける分派的党学校の組織者。反党的「フペリョード」グループに参加。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト軍事部で活動。十月革命に反対し、いったん国外へ亡命したが、まもなく帰国して、林業協同組合、ゴスプラン、商業人民委員部で働き、一九二七年以来文筆活動に専念。

ヴラソフ、ア——解党派メンシェヴィキ新聞『ルーチ』一九一三年五月一四日付、第一〇九（一九五）号に掲載された論文『組織問題について』の筆者。

ウラヂミロフ、エム・カ（シェインフィンケリ、エム・カ、エリ・ヴェ）（一八七九—一九二五）——ボリシェヴィキ、一九〇三年以来の党員。一九〇五—一九〇七年革命に参加し、シベリアへ終身流刑となるが、一九〇八年国外へ逃亡。一九一一年ボリシェヴィキから離れ、パリのプレハーノフ派に属し、新聞『ザ・パールチユ』（『党のために』）を発行。第一次大戦中、パリで発行されたトロツキーの新聞『ナーシェ・スローヴォ』に参加。二月革命後、トロツキーらのメジュライオンツィに加わり、彼らとともに第六回党大会でボリシェヴィキに復党。十月革命後、一連の要職につく。一九二一年ウクライナ食糧人民委員。一九二二年ロシア連邦共和国財務人民委員。一九二四年以後、ソ連最高国民経済会議副議長。

エジョフ、ヴェ→ツェデルバウム、エス・オ

エリアス、カ・ヤ（シュワルツ）（一八八六年生）——ラトヴィアのメンシェヴィキ、解党派。新聞『ツィーナ』編集委員。反党的八月協議会（一九一二年）に参加。二月革命後、労働者・兵士・無土地農民代表ソヴェト執行委員。その後、ブルジョア的国民会議（一九一八—一九二〇年）と憲法制定議会の一員、第一、第二、第

三国会（セイム）議員。一九一九—一九二九年、メンシェヴィキ新聞『ツィアルーデモクラート』を編集。

エリ・ヴェ→ウラヂミロフ、エム・カ

エリ・エス→コリツォフ、デ

エルマンスキー、ア（コーガン、オ・ア、グシカ ソ・オ）（一八六六—一九四一）——メンシェヴィキ。第四回党大会では調停派。反動期には解党派。第三国会議員。第一次世界大戦中は中央派。一九一七年メンシェヴィキ＝国際主義者、一九一八年メンシェヴィキ中央委員。一九二一年メンシェヴィキから離党、モスクワで学術研究に専念した。

エルモラーエフ、カ・エム（ロマン）（一八八四—一九一九）——メンシェヴィキ。一九〇四—一九〇五年、ペテルブルグとドンバスで活動。第五回党大会代議員。メンシェヴィキから中央委員に選出。一九一〇年、一六人のメンシェヴィキの一人として党の解消にかんする「公開状」に署名。一九一七年、メンシェヴィキ中央委員に選出、第一次全ロシア中央執行委員会に参加。

袁世凱（一八五九—一九一六）——中国の軍閥政治家。一九一二年清朝崩壊後、中華民国の初代大総統。一九一五年、みずから皇帝になろうとして失敗。

カヴェリン、カ・デ（一八一八—一八八五）——モスクワおよびペテルブルグ大学教授、観念論的「歴史法学」派に属し、穏健自由主義的政論家。ブルジョア化する地主の利益を代弁した。

カウツキー、カール（一八五四—一九三八）——第二インタナショナルとドイツ社会民主党の指導者のひとり。はじめマルクス主義者であったが、のちに裏切者となる。日和見主義の最も危険で最も有害な変種——中央主義（カウツキー主義）のイデオローグ。ドイツ社会民主党の理論雑誌『ノイエ・ツァイト』の編集者。

一八七四年から社会主義運動に参加。当時の見解はラサール主義、新マルサス主義、無政府主義の混合であった。一八八一年にマルクス、エンゲルスを知り、その影響下にマルクス主義に移る。八〇—九〇年代に書いた一連の著作は誤りもあったが、マルクス主義の宣伝に役だった。のちに中央主義の思想を説き、公然たる日和見主義者を党内にとどめておくよう主張した。第一次大戦にさいしては社会排外主義の立場にたち、国際主義についての空文句でそれを隠蔽した。超帝国主義論を書いたが、その反動的本質はレーニンによって暴露された。十月革命後、プロレタリア革命とプロレタリア執権（ディクタトゥーラ）に公然と反対し、ソヴェト権力に敵対した。

ガネツキー〈ハネツキ〉（フュルステンベルグ）、ヤ・エス（一八七九—一九三七）——ポーランドとロシアの革命運動の著名な活動家、一八九六年以来の社会民主党員。ポーランド・リトワ王国社会民主党の数度の大会、ロシア社会民主労働党第二回、第四回、第五回大会に参加。後者の第五回大会で同党中央委員。一九一二年のポーランド社会民主党分裂後、ボリシェヴィキに最も近い、いわゆる「ロズラモヴィエツィ」分派の指導者のひとり。第一次大戦中、「ツインメルワルド左派」。しばしば逮捕、流刑に会う。一九一七年、ロシア社会民主労働党中央委員会在外ビューローの一員。十月革命後、財務、外交等の政府機関で働き、のち商業人民委員部と国民経済最高会議の参与会員。一九三五年以後、ソ連革命博物館長。

カラヴァエフ、ア・エリ（一八五五—一九〇八）——農民出身の医師、トルドヴィキ、第二国会議員。第三国会選挙の直前、黒百人組に殺された。

カラウーロフ、ヴェ・ア（一八五四—一九一〇）——カデット、

元「人民の意志」派のテロリスト。エニセイ県選出第三国会議員。

ガリバルディ、ジュゼッペ（一八〇七―一八八二）――イタリアの国民的英雄、イタリアの革命的民主主義の指導者、すぐれた軍司令官。一八四八―一八六七年、イタリアの統一のために外国への隷属、封建・絶対主義制度、教権の反動に反対して闘争。一八六〇年、シチリアの解放で事実上イタリアを統一。一八七〇年、息子たちとともにフランスへ行き、プロイセン軍と戦闘。パリ・コミューンを歓迎。マルクス、エンゲルス、レーニンは彼を自由のためのすぐれた闘士として高く評価した。

グシカ、ア・オ→エルマンスキー、ア

クスコヴァ、イエ・デ（一八六九―一九五八）――「経済主義」の日和見主義的本質を明確に表現した『クレード』の筆者。「解放同盟」に加入。一九〇六年、プロコポーヴィチとともに半カデット的雑誌『ベズ・ザグラーヴィヤ』（『無標題』）を発行。カデット左派の新聞『タヴァリシチ』に寄稿。十月革命後、ソヴェト政権に反対。一九二二年、国外追放。

グラッドストン、W・E（一八〇九―一八九八）――イギリスのブルジョア政治家、自由党党首（一八六七―一八七五）、首相（一八六八―一八七四、一八八〇―一八八五、一八八六、一八九二―一八九四）。

クリチェフスキー、ベ・エヌ（一八六六―一九一九）――社会民主主義者、評論家、「経済主義」のリーダーのひとり。亡命後『ラボーチェエ・デーロ』の編集者、ベルンシュタイン主義を宣伝。第二回党大会後、運動から離れた。

クロンウェル、オリヴァー（一五九九―一六五八）――一七世紀のイギリス・ブルジョア革命の最大の指導者、独立派党首、イギリス護民官。すぐれた軍事指導者として議会軍をひきいて王党軍を打ち負かした。一六四八年、第二次内戦に勝利したのち、人民大衆の圧力のもとにロンドン・ブルジョアジーの上層部を代表するプレズビテリアンズ（長老派）を議会から排除し、国王を処刑し（四九年）、共和制を宣言した。同時に民主主義的傾向の代表者（レヴェラースなど）とアイルランドやスコットランドの民族解放運動を残酷に弾圧した。一六五三年、議会を解散して、独裁制をしき、みずから護民官と称した。クロンウェルの独裁制はスチュアート朝復活の道をひらいた。エンゲルスは彼を「ロベスピエールとナポレオンをひとりに結合したような人物」と表現した。

ゲルツェン、ア・イ（一八一二―一八七〇）――ロシアの偉大な革命的民主主義者、唯物論哲学者、政論家、作家、「ロシア的」「農民」社会主義の創始者。デカブリストの伝統をつぐ貴族的革命家。一八四七年一月、ツァーリ政府の迫害を受けて国外へ亡命。一八五二年、ロンドンにロシア語印刷所をつくり、国外での自由なロシア語出版の道をひらく。一八五五年、年報『ポリャールナヤ・ズヴェズダ』、一八五七年新聞『コーロコル』を創刊。

ゲルツェンシテイン、エム・ヤ（一八五九―一九〇六）――経済学者、モスクワ農業大学教授、カデット党のリーダー、同党の農業問題理論家、第一国会議員。同国会解散後、フィンランドで黒百人組に暗殺された。

ココシキン、エフ・エフ（一八七一―一九一八）――ブルジョア政治家、政論家。カデット党創立者のひとり、同党中央委員。第一国会議員。新聞『ルースキエ・ヴェードモスチ』、雑誌『プラーヴォ』、『ルースカヤ・ムィスリ』等に寄稿。二月革命後、ブルジョア臨時政府閣僚（会計検査院長官）。十月革命後、ソヴェト政権に敵

対し、水兵に殺された。

コストロフ→ジョルダニア、エヌ・エヌ

コソフスキー、ヴェ（レヴィンソン、エム・ヤ）（一八七〇—一九四一）——一八九七年ブンド創立大会で中央委員、その中央機関紙『ディ・アルバイター・シュティンメ』編集長。反イスクラ派、第二回党大会以後メンシェヴィキ。反動期には解党派。第一次世界大戦期には親独的立場をとった。十月革命に反対。亡命し、ポーランドのブンド組織で活動。一九三九年渡米。

ゴーリキー、マクシム（ペシコフ、ア・エム）（一八六八—一九三六）——ロシアの偉大なプロレタリア作家。ヴォルガ河畔のニージニーノヴゴロド（現在のゴーリキー市）で生まれ、幼少のころから貧困と窮乏に苦しみ、ロシア全国を遍歴し、革命的労働運動に参加し、しばしばツァーリ政府の弾圧を受けた。ロシア労働者階級の生活とその闘争の姿を作品に描き、社会民主党を援助した。ゴーリキーと親しかったレーニンは彼の才能を高く評価し、彼の誤りを正し、いつも彼について配慮していた。社会主義リアリズムの創始者。

コリツォフ、デ（ギンズブルグ、ベ・ア）（一八六三—一九二〇）——メンシェヴィキ。一九〇五—一九〇七年革命当時はペテルブルグの労働組合運動に参加。反動期には解党派。第一次大戦期には社会排外主義者、二月革命後、ペトログラード・ソヴェト労働委員。十月革命に敵対的な態度をとっていたが、のちペトログラードで協同組合運動に従事。

コリュバキン、ア・エム（一八六八—一九一五）——ゼムストヴォ活動家、ブルジョア自由主義者、カデット。一九〇五—一九〇六年、ノヴゴロド県ゼムストヴォ議長。一九〇七年第三国会議員。カデット党中央委員。

ゴルドブラット→メデム、ヴェ・デ

ゴーレフ（ゴリドマン）、ベ・イ（I）（一八七四年生）——九〇年代のなかばから革命運動に参加。一九〇五年、ロシア社会民主労働党ペテルブルグ委員会の一員、ボリシェヴィキに属する。一九〇七年にはメンシェヴィキに加担し、第五回党大会でメンシェヴィキから党中央委員候補に選出。解党派の機関紙誌に協力。一九一二年、ウィーンの反党的八月協議会に参加。二月革命後、『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集者、メンシェヴィキ中央委員、第一次全ロシア中央執行委員会の一員。一九二〇年、メンシェヴィキ組織からの脱退を声明。その後、教育活動に従事。

サヴェンコ、ア・イ（一八七四年生）——ブルジョア民族主義者、政論家、大地主。一九〇八年キエフに「ロシア民族主義者クラブ」を創設。第四国会議員、「進歩ブロック」に属す。黒百人組的新聞『ノーヴォエ・ヴレーミャ』、『キエヴリャニン』に寄稿。十月革命後、ソヴェト国家と闘争、のちに亡命。

ザスーリチ、ヴェ・イ（一八四九—一九一九）——ナロードニキ、のちに社会民主主義者。「労働解放」団の創立に参加。一九〇〇年『イスクラ』『ザリャー』編集局員。第二回党大会後、メンシェヴィキの幹部のひとり。解党派。社会排外主義者。十月革命に否定的態度をとった。

シェルグノフ、ヴェ・ア（一八六七—一九三九）——労働者、職業革命家、ボリシェヴィキ。ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」の組織者のひとり。逮捕、流刑後、エカテリノスラフ（現在のドネプロペトロフスク）、バクー、チフリス、ペトログラードで活動。一九〇五年、獄中で発病、失明。一九一〇年、新聞『ズヴェズダ』と『プラウダ』の発刊、編集、寄稿に参加。十月革命後、モス

クヴォレック党組織と全ソ古参ボリシェヴィキ協会で活動。

シチェドリン→サルトィコフ－シチェドリン、エム・イェ（シチェドリン、エヌ）（一八二六―一八八九）――すぐれた風刺作家、革命的民主主義者。レーニンは彼の作品の中の形象をしばしば利用した。マルクスも彼を高く評価した。

シャンツェル、ヴェ・エリ（マラート）（一八六七―一九一一）――ボリシェヴィキ、弁護士。非合法大衆新聞『ラボーチー』を編集。一九〇五年、モスクワにおける武装蜂起の準備に積極的に参加。何度も捕えられ、何度も逃亡する。第五回党大会で中央委員に選出。ボリシェヴィキ新聞『プロレタリー』の編集に参加。外国にあって最後通告派に属し、反党的「フペリョード」グループにはいる。一九一〇年、病気のためモスクワへ移され、そこで死亡。

シュティルナー、マックス（シュミット、J・K）（一八〇六―一八五六）――ドイツの哲学者、ブルジョア的個人主義と無政府主義の代表者のひとり。主著―『唯一者とその所有』。

シュワルツ→エリアス、カ・ヤ

ジョルダニア、エヌ・エヌ（アン、コストロフ）（一八七〇―一九五三）――メンシェヴィキ。九〇年代に政治活動を始め、第二回党大会に評議権をもって出席。大会後、カフカーズ・メンシェヴィキのリーダーになる。一九〇五年にはグルジア語新聞『ソツィアル－デモクラチー』を編集し、ブルジョア民主主義革命におけるボリシェヴィキの戦術に反対。第一国会議員。第五回党大会でメンシェヴィキを代表して中央委員に選出。反動期には形式的には党擁護派メンシェヴィキに属しながら、実質的には解党派を支持。一九一四年にはトロツキーの雑誌『ボリバ』に協力。第一次世界大戦中は社会排外主義者。二月革命後、チフリス労働者代表ソヴェト議長。一九一八―一九二一年、グルジアの反革命的メンシェヴィキ政府の首相。一九二一年以後、国外へ亡命。

スターリン（ジュガシヴィリ）、イ・ヴェ（K・スタ）（一八七九―一九五三）――ロシアおよび国際共産主義・労働運動、ソ連共産党、ソヴェト国家の最も著名な活動家のひとり。一八九八年にロシア社会民主労働党に入党。第二回党大会以後、ボリシェヴィキ。チフリス、バトゥム、バクー、ペテルブルグで党活動に従事。一九一二年一月、第六回（プラハ）党協議会で中央委員。『プラウダ』の編集に参加。十月革命の準備と遂行の時期には蜂起準備のための軍事革命センターの一員。十月革命直後の第二回全ロシア・ソヴェト大会で選出された最初のソヴェト政府の民族問題人民委員。外国の武力干渉と内戦期には共和国革命軍事会議の一員として一連の戦線で重要任務を遂行。一九二二年、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）第一一回大会で中央委員会書記長となる。一九四一年以後、ソ連首相（人民委員会議のちに閣僚会議の議長）。大祖国戦争中は同時に国家国防委員会議長、国防相、ソ連軍最高総司令官。

スターリンは社会主義建設、ソヴェト国家の防衛、レーニン主義の敵（トロツキスト、右翼日和見主義者、ブルジョア民族主義者、さまざまな修正主義者）との思想的闘争で大きな功績をあらわしたが、晩年、個人崇拝に関連して重大な誤りをもおかした。ソ連共産党は彼の死後、第二〇回大会（一九五六年）でスターリンの誤りを批判した。

ストルィピン、ペ・ア（一八六二―一九一一）――帝政ロシアの政治家、大地主。一九〇六―一九一一年首相および内相。政治的反動と革命運動のきびしい弾圧の時代（一九〇七―一九一〇年）は彼の名と結びついている（「ストルィピン反動」）。富農経営創設のた

めに農地改革を実施したが失敗。キエフでエス・エル党員のボグロフに暗殺された。

ストルーヴェ、ペ・ペ（一八七〇―一九四〇）――一八九〇年代には「合法マルクス主義者」、カデット党創立とともにその中央委員、反動期には黒百人組的民族主義者、ロシア帝国主義の思想的代表者、十月革命後はソヴェト権力の狂暴な敵。

スミス、アダム（一七二三―一七九〇）――古典的ブルジョア経済学を確立したイギリスの大経済学者、社会哲学者。主著――『国富論』。

セヴェリャニン、ア（ブイコフ、ア・エヌ）（一八六〇―一九一九）――カデット。工程技師の教育を受けた。一八八九―一九〇六年、工場監督官。ブルジョア自由主義派の機関誌『ルースキエ・ヴエードモスチ』、『ルースコエ・スローヴォ』等に寄稿。著書――『一〇年の実践』、『黒土帯の畑の中で』、『ロシアにおける工場立法の発達』等。

セドフ、エリ→コリツォフ、デ

セムコフスキー、エス（ブロンシテイン、エス・ユ）（一八八二年生）――メンシェヴィキ。トロツキーの『プラウダ』（ウィーン）編集局に参加。民族問題その他でレーニンの批判を受けた。第一次世界大戦期には中央派。一九一七年帰国してメンシェヴィキ中央委員。一九二〇年メンシェヴィキから離党。のちウクライナの諸大学の教授。

セルノ-ソロヴィエヴィチ、ア・ア（一八三八―一八六九）――「土地と自由」派の革命家。ゲルツェンの著作の普及にあたっていたが、一八六二年国外へ亡命し、亡命者グループの左翼に属してゲルツェンを攻撃、第一インタナショナルに参加した。神経衰弱で自殺。

ソコロフ、ア・ヴェ→ヴォリスキー、エス

ゾンバルト、ウェルナー（一八六三―一九四一）――ドイツの経済学者。マルクス主義的な用語を使うブルジョア的マルクス批判家のひとり、のちナチの理論家。反ユダヤ主義者。

ダン（グールヴィチ）、エフ・イ（一八七一―一九四七）――メンシェヴィキ指導者のひとり、医師。九〇年代から社会民主主義運動に参加し、ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」に加入。一九〇三年国外に亡命後、メンシェヴィキとなる。第四回、第五回党大会その他一連の党協議会に参加。反動期には国外で解党派グループを指導し、『ゴーロス・ソツィアルーデモクラータ』を編集。第一次世界大戦中、祖国防衛派。二月革命後、ペトログラード・ソヴエト執行委員会と第一次全ロシア中央執行委員会幹部会の一員。ブルジョア臨時政府を支持。十月革命後、ソヴェト政権とたたかい、一九二二年はじめ国外追放。

チェルヌィシェフスキー、エヌ・ゲ（一八二八―一八八九）――ロシアの偉大な革命的民主主義者、空想的社会主義者、ロシア社会民主主義の先駆者のひとり。唯物論者、無神論者。学者、作家、批評家。雑階級出身の革命家（ラズノチーネツ）の代表者のひとり。聖職者の家に生まれ、サラトフ神学校、ペテルブルグ大学歴史・哲学部に学んだ。雑誌『ソヴレメンニク』を指導し、当時の革命的民主主義勢力を結集した。一八六一年の農民改革に反対し、農民に蜂起を呼びかけて捕えられ、二〇年有余のシベリア流刑に処せられたが、屈しなかった。彼の多くの著作、とくに小説『なにをなすべきか』はレーニンをはじめ若い世代の革命家に大きな影響をあたえた。

チェレヴァニン、エヌ（リプキン、エフ・ア）（一八六八―一九

三八）——メンシェヴィキの指導者、極端な解党主義者。第四回、第五回党大会に参加。解党にかんする一六人のメンシェヴィキの『公開状』（一九一〇年）の起草者のひとり。一九一二年八月の反党協議会（八月ブロック）後メンシェヴィキ本部員。第一次大戦中社会排外主義者。一九一七年メンシェヴィキ中央委員、『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集員。十月革命に敵対的態度をとった。

チヘイゼ、エヌ・エス（一八六四—一九二六）——メンシェヴィキ。第三、第四国会議員（チフリス県選出）。第一次世界大戦中は中央派。二月革命にさいして国会臨時委員会のメンバー。祖国防衛派。ペトログラード・ソヴェト議長、第一次中央執行委員会議長として積極的にブルジョア臨時政府を支持。十月革命後、グルジアのメンシェヴィキ政府首相。一九二一年、パリへ亡命。

チモシキン、エフ・エフ（一八七二年生）——富農で商人、ザカフカーズのロシア人住民選出第三国会議員、国会で右翼に属し、黒百人組的な演説をした。

ツェデルバウム、エス・オ（アウグストフスキー、プラート・パホミヤ、エジョフ、ヴェ、ヤコフ）（一八七九—一九三九）——一八九八年ペテルブルグの「ラボーチェエ・ズナーミャ」グループに加入。のちに『イスクラ』のロシア国内輸送に協力。一九〇四年、国外へ亡命して、メンシェヴィキに属する。メンシェヴィキのジュネーヴ協議会に参加。その合法新聞『クリエール』を編集。反動期にはペテルブルグの解党派「イニシアチヴ・グループ」のリーダー。第一次世界大戦中は祖国防衛派。一九一七年、メンシェヴィキ新聞『フペリョード』に協力。十月革命後、政治活動から遠去かる。

ツルゲーネフ、イ・エス（一八一八—一八八三）——ロシアの大作家、その作品にロシア社会生活の特徴的な矛盾を反映した。彼においては農奴制にたいする熱烈な抗議が穏健自由主義的な要求と結合していた。「ツルゲーネフは、ドブロリューボフとチェルヌィシェフスキーの農民的民主主義を嫌悪し、穏健な君主主義的、貴族的憲法に引かれた」（レーニン）。

ティーゼンハウゼン、イエ・イエ（一八六〇年生）——男爵、技師、セルプホフ織物工場支配人。第三国会議員、オクチャブリスト。国会の労働問題委員長となり、大工業家の利益を擁護し、労働者保険立法の審議を妨害した。

テイラー、フレデリック・ウィンスロー（一八五六—一九一五）——アメリカの機械技師。労働日を最大限に充実させる労働組織方式（いわゆるテイラー・システム）を考案。このシステムは資本主義のもとでは搾取の強化に利用される。高速度鋼の発明者。主著—『科学的管理の原則』。

デューリング、オイゲン（一八三三—一九二一）——ドイツの哲学者、経済学者、小ブルジョア思想家。その哲学的見解は実証論、形而上学的唯物論、観念論の折衷的混合。その反動的空想的「社会」経済体系はプロイセンの半農奴制的経済形態を理想化した。彼の見解は、ドイツ社会民主党の一部にも支持者を見いだしたが、エンゲルスの『反デューリング論』によって徹底的に粉砕された。

トイシカ、ヤン（ヨギヘス、レオ。T）（一八六七—一九一九）——ポーランドとドイツの労働運動の著名な活動家。一八九三年に創立されたポーランド王国社会民主党の創立者のひとり。同党本部員。修正主義とたたかい、民族主義に反対し、ポーランドとロシアのプロレタリアートの共同闘争の必要性を主張。一九〇五年革命に積極的に参加。一九〇六年捕えられるが、国外へ逃亡して活動をつづけ、第五回党大会で中央委員に選出。反動期には解党派を糾弾し

ながらも彼らにたいして調停主義的態度をとり、プラハ党協議会（一九一二年）の決定に反対し、レーニンの批判を受ける。第一次世界大戦中、ドイツにあって、ドイツ社会民主党の活動に参加し、国際主義的立場に立って、「スパルタクス同盟」の組織者のひとりとなる。一九一六—一九一八年投獄。一九一八年一一月のドイツ革命で釈放されたのちは、ドイツ共産党の創立に参加し、その中央委員会書記に選出される。一九一九年三月、逮捕され、ベルリン監獄で殺された。

ドゥブロヴィン、ア・イ（一八五五—一九一八）——ロシア黒百人組の首領。「ロシア国民同盟」の創立者、指導者。十月革命後、銃殺。

ドゥブロヴィンスキー、イ・エフ（I、インノケンチー）（一八七七—一九一三）——ボリシェヴィキ党のすぐれた活動家のひとり、職業革命家。一八九三年から革命運動に参加し、はじめ「人民の意志」派のサークルに属していたが、のちにマルクス主義者となる。「モスクワ労働者同盟」の指導者のひとり。一九〇二年から『イスクラ』受任者。第二回党大会以後ボリシェヴィキ。一九〇五年にはモスクワ武装蜂起の組織者、指導者のひとり。第五回党大会で中央委員に選出。国外にあって『プロレタリー』編集局で活動。反動期には解党派にたいする態度で調停主義的動揺を示した。しばしば弾圧を受け、一九一三年流刑地トゥルハンスクで死亡。レーニンは、彼の調停主義的誤りを指摘すると同時に、労働者階級の事業に献身した党の最大の組織者のひとりとして彼を高く評価した。

トゥリャコフ、イ・エヌ（一八七七年生）——労働者、メンシェヴィキ、第四国会議員。

ドネヴニツキー、ペ・エヌ（ツェデルバウム、エフ・オ、P）（一八八三年生）——党擁護派メンシェヴィキ。プレハーノフの『ドネヴニーク・ソツィアルーデモクラータ』に協力。ボリシェヴィキの新聞『ズヴェズダ』および『プラウダ』に寄稿。十月革命後、ソヴェト権力に反対。

ドブロリューボフ、エヌ・ア（一八三六—一八六一）——ロシアの偉大な革命的民主主義者、すぐれた批評家、唯物論哲学者。ロシア社会民主主義の先駆者のひとり。雑階級出身（聖職者の子）。チェルヌィシェフスキーの僚友。雑誌『ソヴレメンニク』や『スヴィストーク』で批評欄や風刺欄を担当。専制と農奴制の敵。人民蜂起の支持者。

ドラゴマノフ、エム・ペ（一八四一—一八九五）——ウクライナの歴史学者、民俗学者、政論家、ブルジョア自由主義の代表者のひとり。ツァーリ政府に迫害されて亡命。国外でツァーリズムの政策を暴露するとともに社会主義と階級闘争理論に反対、「人民の意志」派と社会民主主義者を批判。ウクライナ民族解放運動の穏健派の指導者。文化的民族自治を主張。

トルストイ、エリ・エヌ（一八二八—一九一〇）——ロシアが生んだ世界的大作家。彼についてレーニンには『ロシア革命の鏡としてのレフ・トルストイ』その他の評論がある。

トルベツコイ、セルゲイ・ニコラーエヴィチ（一八六二—一九〇五）——公爵、観念論哲学者、自由主義者。穏健な憲法でツァーリズムを強化しようとした。一九〇五年ゼムストヴォ代表団の一員としてツァーリのまえで綱領的演説をおこなった。同年、モスクワ大学総長に選ばれたが、学内における学生の公然たる革命的行動を恐れて、大学の一時閉鎖に同意した。

トロツキー（ブロンシテイン）、**エリ・デ**（一八七九—一九四〇）

――第二回党大会後メンシェヴィキ。一九〇五年革命にさいしパルヴスの「永続革命」論を支持。反動期には解党派。一九一二年反党的八月ブロックを組織。第一次大戦中は「中央派」。二月革命後、「メジュライオンツィ」グループに加入。第六回党大会で同グループとともにボリシェヴィキ党に加入。十月革命後、外務人民委員、陸海軍人民委員、革命軍事会議議長の要職についたが、ブレスト講和（一九一八年）、労働組合論争（一九二〇―二一年）、社会主義建設の基本方針（一九二三年）等の諸問題でレーニンと党中央部に反対、その後も反党的反国家的分派活動をつづけ、一九二七年党から除名、一九二九年国外追放。外国で反ソ活動をつづけていたが、一九四〇年メキシコで暗殺された。ソ連共産党はトロツキズムを党内の小ブルジョア的偏向としてきびしく批判した。

ドンツォフ、デー――ウクライナ社会民主労働党員。リヴォフの新聞『シリャヒ』、モスクワで発行された雑誌『ウクラインスカヤ・ジーズニ』に寄稿。第一次大戦中、オーストリア君主制の援助で「独立」ウクライナのスローガンを実現しようとする民族主義的団体「ウクライナ解放同盟」の創立者のひとり。十月革命後、国外へ亡命。

ナポレオン三世（ボナパルト、ルイ）（一八〇八―一八七三）――フランス皇帝（在位一八五二―一八七〇）。

ネクラーソフ、エヌ・ア（一八二一―一八七八）――ロシアの大詩人、革命的民主主義者。レーニンは彼の作品を高く評価し、しばしばその著作に引用した。

バウアー、オットー（一八八二―一九三八）――オーストリア社会民主党と第二インタナショナルの指導者、改良主義の一変種、いわゆる「オーストリア・マルクス主義」の思想的代表者。「文化的民族自治」論を提唱。十月革命に否定的態度をとった。一九一八―一九一九年、オーストリア共和国政府外相。一九一九、一九二七、一九三四年に労働者の革命的大衆行動の弾圧に参加。反共的言動でファシズムと結びつき、「アンシュルス」（独墺合併）を支持。

バクーニン、ミハイル・アレクサンドロヴィチ（一八一四―一八七六）――無政府主義の思想的代表者。ロシアの貴族の家に生まれたが、一八四〇年以来外国に居住し、専制と農奴制を鋭く批判、貴族の称号を剝奪された。四八年のプラハ蜂起、四九年のドレスデン蜂起に参加して逮捕され、ロシアへ送還。獄中でツァーリに懺悔の手紙を書き、転向を誓った。五七年シベリアへ流刑。六一年国外へ逃亡。六三―六四年のポーランド解放運動に協力。六八年以来第一インタナショナルに参加。その内部に無政府主義者の秘密結社を組織、総務委員会を乗っ取ろうとし、マルクスの主張により七二年除名。バクーニンの理論はプルードン主義と共産主義の混合で、生産手段の共有を個人の「絶対的自由」と結合し、国家の廃止を主張。プロレタリアートの世界史的役割を否認し、ルンペン・プロレタリアートと小ブルジョアの利益を表現。レーニンの定義によれば、バクーニン主義は「みずからの救済に絶望した小ブルジョア」の世界観であった。

バーブシキン、イ・ヴェ（一八七三―一九〇六）――ボリシェヴィキ。労働者、職業革命家。一八九三年、レーニンの指導するサークルで革命的活動を開始。レーニンによる最初の社会民主主義的扇動リーフレット『セミャンニコフ工場の労働者へ』の作成と配布に参加。ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」が創立されるとその最も積極的な同盟員になり、レーニンの片腕となった。『イスクラ』の発刊に協力し、その最初の受任者、熱心な通信員になった。

しばしば逮捕され、流刑や禁錮に処せられた。一九〇五—一九〇七年革命に積極的に参加し、党のイルクーツクおよびチタ委員会の委員になった。しかし、武器を輸送中、懲罰隊に捕えられ、審理も裁判もなしに銃殺された。レーニンはバーブシキンの革命への献身を高く評価した。

ハルトゥリン、エス・エヌ（一八五七—一八八二）——ロシア最初の労働者革命家のひとり、指物師。七〇年代のなかば、ペテルブルグの労働者サークルを統合しようとしたナロードニキ的「友の会」に参加。一八七八年オブノルスキーとともに非合法的「ロシア労働者北部同盟」を組織。「同盟」が弾圧で壊滅してから、「人民の意志」党とその指導者ジェリャボフに接近し、その影響を受けて、当時指物師として働いていた冬宮内で皇帝暗殺を企て、一八八〇年冬宮内で爆弾を破裂させたが目的を達せず、南部へ逃亡。ジェリャボフとともにオデッサで軍検事ストレリニコフ将軍を暗殺。二人とも捕えられ、軍法会議にかけられて、処刑された。

ハンケヴィチ、エヌ（一八六九年生）——ガリチアのウクライナ社会民主労働党の創立に参加。一九一四—一九一七年、リヴォフの「中央ウクライナ・ラーダ〔人民代表者会議〕」のメンバー。十月革命後、ソヴェト・ロシアに対抗するウクライナ＝ポーランド同盟を支持。

パンネコック、アントニー（一八七三—一九六〇）——オランダの社会民主主義者、アムステルダム大学天文学教授。一九〇七年オランダ社会民主労働党左派機関紙『ディ・トリビューネ』を創刊。第一次大戦中国際主義者。ツィンメルワルド左派理論機関誌『フォルボテ』を発行。一九一八—一九二一年オランダ共産党に加入、コミンテルンの活動に参加。極左的セクト的立場にたち、レーニンから批判される。一九二一年離党。政治から引退。

ビスマルク、オットー・エドゥアルト・レオポルト（一八一五—一八九八）——ドイツ帝国初代宰相（在任一八七一—一八九〇）。鉄血宰相とよばれ、ドイツの統一を実現し、ユンカー（地主貴族）と大ブルジョアジーの同盟を確保。社会主義者取締法を制定。それでも労働運動を圧殺しえないので、社会立法の約束で労働者をあざむこうとしたが、成功しなかった。

ビロン、エルンスト・ヨハン（一六九〇—一七七二）——一八世紀三〇年代にロシア宮廷で権力をふるっていた反動政治家。女帝アンナの寵臣。帝国の摂政。近衛兵に打倒され、流刑に処せられたが、のちに復帰してクルランド公に任ぜられた。

ファン-ラヴェスタイン→ラヴェスタイン、ウィレム・ファン

フォイエルバッハ、ルートヴィヒ・アンドレアス（一八〇四—一八七二）——ドイツのすぐれた哲学者。はじめヘーゲル左派の観念論者、のち唯物論に移り、鋭い宗教批判をおこなったが、人間を感性的存在としてのみとらえ、認識と社会発展における実践の役割をつかみえなかった。晩年社会主義に関心をよせ資本論を読み、一八七〇年ドイツ社会民主党に入党した。

フランク、ルートヴィヒ（一八七四—一九一四）——ドイツ社会民主党員、修正主義者、社会排外主義者。一九〇七年から国会議員。開戦と同時に志願兵となって戦死。

ブリアン、A（一八六二—一九三二）——フランスの政治家、弁護士。一時社会党左派に属したこともあったが、一九〇二年国会議員に当選してから反動化。一九〇六年ブルジョア政府に文相として入閣し、社会党から除名され、「共和国社会党」に加入。一九〇九年「三人の裏切者（ブリアン、ミルラン、ヴィヴィアーニ）の内

閣」の首相となる。一九一〇年鉄道ストライキを残酷な手段で弾圧。一九一三年、一九一五—一九一七年、一九二一—一九二二年、首相。一九二四年国際連盟フランス代表。一九二五年、反ソ的ロカルノ協定の締結に参加。一九二五—一九三一年、外相としてフランス外交を指導した。

プリシケヴィチ、ヴェ・エム（一八七〇—一九二〇）——札つきの反動政治家。大地主、第二、第三国会議員。「ロシア国民同盟」と「天使長ミハイル同盟」の創立者。ラスプーチンの暗殺に参画。十月革命後、白衛軍に参加。

ブリヤーノフ、ア・エフ（一八八〇年生）——メンシェヴィキ。反動期には解党派。第四国会議員。一九一四年、党擁護派メンシェヴィキに移る。第一次大戦中は祖国防衛主義に傾く。

ブルィギン、ア・ゲ（一八五一—一九一九）——帝政ロシアの政治家、大地主。予審判事のちに数県の知事。一九〇〇—一九〇四年モスクワ副総督としてズバトフの政治警察活動を助成。一九〇五年一—一〇月内相。ツァーリの特命をうけて全国にたかまる革命の気運を弱めるために諮問議会召集の法案を起草したが、革命に一掃されて、成功しなかった。一九〇五年一〇月一七日の詔勅発布後、辞職。

ブルガコフ、エフ・エヌ（一八七一—一九四四）——ロシアのブルジョア経済学者、神秘主義哲学者。はじめ「合法マルクス主義者」としてマルクスの農業理論の修正を試み、一九〇五年革命後、カデット。十月革命後、司祭となったが、一九二二年反革命活動のかどで国外追放に処せられた。

ブルキン（セミョーノフ）エフ・ア（一八八八年生）——メンシェヴィキ。反動期には解党派。第一次大戦中は祖国防衛派、労働組合運動に従事。十月革命後、オレンブルグ・ソヴェトのメンシェヴィキ代表。一九二〇年、ロシア共産党（ボ）に入党。一九二二年「労働者反対派」に参加して除名。一九二七年復党、経済活動に従事。

プルードン、ピエール・ジョセフ（一八〇九—一八六五）——フランスの小ブルジョア社会主義者、無政府主義の理論的創始者のひとり。もと植字工。小生産者の私的所有を保障するユートピアを夢み労働者階級の革命的進出に反対し、一八五一年一二月のボナパルト主義的変革を支持した。マルクスは『哲学の貧困』でプルードンをきびしく批判した。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（一八五六—一九一八）——ロシアにおけるマルクス主義の最初の宣伝家、レーニン以前の主要な理論家。はじめレーニンと協力していたが、第二回党大会後メンシェヴィキに加担。十月革命に反対した。反動期には党支持派、第一次世界大戦期には社会排外主義者。くわしくは第一巻人名注参照。

ブレンターノ、ルヨ（一八四四—一九三一）——ドイツのブルジョア経済学者、一八九六年いらいミュンヘン大学の経済学教授、講壇社会主義者、労働者階級の団結の自由を認め、それを介してその経済的地位を資本主義のワク内で改善させることが社会政策の基本的課題だと考えた。

プロコポーヴィチ、エス・エヌ（一八七一—一九五五）——経済学者。一八九〇年末には「経済主義」の極右的代表者、のち「解放同盟」の活動家、一九〇六年にはカデット党中央委員。半カデット的、半メンシェヴィキ的雑誌『ベズ・ザグラーヴィヤ』（『無標題』）の編集・発行人。二月革命後、臨時政府の商工相および食糧相。十月革命後、反ソ活動のかどで国外追放。

ブロンシテイン、ペ・ア（ユーリー）（一八八一年生）——メンシェヴィキ。はじめオデッサで活動。解党派。『デーロ・ジーズニ』誌編集者。一九一七年にはペトログラードにおけるメンシェヴィキ幹部のひとり。メンシェヴィキ中央機関紙『ラボーチャヤ・ガゼータ』編集者。十月革命後、南部で反革命活動をやり、のちに国外へ亡命。

ヘーゲル、ゲオルグ・ウィルヘルム・フリードリヒ（一七七〇—一八三一）——ドイツの大哲学者、客観的観念論者、ドイツ・ブルジョアジーの思想的代表者。弁証法を深く全面的に探求したことは彼の功績であるが、彼の弁証法は観念論的性格をおびていた。社会的・政治的見解では立憲君主制の支持者。マルクス、エンゲルスはヘーゲル弁証法から「合理的核心」だけを取りだし、弁証法的唯物論の確立に利用した。主著——『精神現象学』、『論理学』、『哲学百科事典』等。

ペシェホーノフ、ア・ヴェ（一八六七—一九三三）——評論家、一九〇三—一九〇五年「解放同盟」に参加、一九〇六年以後エヌ・エスの指導者。二月革命後臨時政府の食糧相。十月革命後ソヴェト権力に敵対。一九二二年国外へ亡命。

ヘッケル、エミール（一八七五—一九三四）——ポーランド社会党右派の活動家。一八九二年からガリチア・シレジア＝ポーランド社会民主党員。一八九四年から約四〇年間、クラクフの社会主義新聞『ナープシュド』を編集。一九〇六—一九一九年、党指導部員。しばしば第二インタナショナルの大会に参加。晩年はポーランド社会党本部員。

ペトロフ、ア（シドロフ、ア・ペ）（一八二四（？）—一八六一）——カザン県スパスキー郡ベズドナ村の農奴。「農民改革」に抗議するベズドナ農民の蜂起を指導。蜂起の鎮圧後、軍法会議にかけられて銃殺。

ベーベル、アウグスト（一八四〇—一九一三）——ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家。第一インタナショナル会員、ドイツ社会民主労働党（アイゼナッハ派）の創立者。ベルンシュタイン主義とたたかったが、後年いくつかの中央主義的誤りをおかした。

ベリンスキー、ヴェ・ゲ（一八一一—一八四八）——偉大な革命的民主主義者、文芸批評家、政論家、唯物論哲学者、農奴制とたたかう農民大衆のイデオローグ。チェルヌィシェフスキー、ドブロリューボフらの先駆者。『テレスコープ』、『モスコフスキー・ナブリュダーテリ』、『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』、『ソヴレメンニク』などの進歩的雑誌に寄稿または編集。一八四七年七月三日、国外から有名な『ゴーゴリへの手紙』を書く。ロシアにおける社会思想の発展と解放運動に大きな影響をあたえた。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇—一九三二）——ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極端に日和見主義的な一翼の指導者、修正主義と改良主義の理論家。一八九六—一九八年『ノイエ・ツァイト』誌に『社会主義の諸問題』と題する論文を連載し、革命的マルクス主義の哲学的、経済学的、政治的基礎の修正を試み、階級闘争理論、資本主義の必然的崩壊、社会主義革命、プロレタリア独裁の学説を否定した。

ベルンハルト、リュドヴィク（一八七五—一九三五）——ドイツの経済学者、政論家。ベルリン、キールその他で教授。一時、ポーランド＝プロイセン政策を研究、ポーランド人のドイツ化を支持。晩年、ファシズムの経済体制を研究。

ペレゾフスキー（第一）、ア・イェ（一八六八年生）——第三国

会議員。地主、農学者、カデット党員、ゼムストヴォ活動家。

ベンニクセン、エ・ペ（一八七五年生）——伯爵、地主、オクチャブリスト。ゼムストヴォ議員、ペテルブルグ市議会議員。第三、第四国会議員。

ボグダーノフ、ア（マリノフスキー、ア・ア、マクシーモフ、エヌ）（一八七三—一九二八）——社会民主主義者、哲学者、社会学者、経済学者。医師の教育を受けた。九〇年代、トゥラで社会民主主義サークルに加入。第二回党大会以後ボリシェヴィキに属し、第三回党大会で中央委員。『フペリョード』、『プロレタリー』、『ノーヴァヤ・ジーズニ』の編集に参加。反動期には召還派を指導し、反党的「フペリョード」グループのリーダー。哲学問題では独自の体系「経験批判論」を打ちたてようとしたが、レーニンから『唯物論と経験批判論』で徹底的に批判された。それはえせマルクス主義的用語で偽装したマッハ主義哲学の変種にすぎなかった。一九〇九年六月、『プロレタリー』拡大編集局会議でボリシェヴィキ派から除名。十月革命後、「プロレトクリト」の組織者、指導者のひとり。一九二六年以後、みずから創立した輸血研究所の所長。

ポトレソフ、ア・エヌ（スタロヴェル）（一八六九—一九三四）——メンシェヴィキの指導者。『イスクラ』『ザリャー』の編集に参加。反動期には解党派。第一次世界大戦期には社会排外主義者。二月革命後、悪質なボリシェヴィキ攻撃をおこなう。十月革命後、国外へ亡命。

マエフスキー、イエ（グトフスキー、ヴェ・ア）（一八七五—一九一八）——メンシェヴィキ、解党派、祖国防衛派。雑誌『ナーシャ・ザリャー』、新聞『ルーチ』等に寄稿。十月革命後、ソヴェト政権に敵対。

マカロフ、ア・ア（一八五七—一九一九）——反動政治家。一九〇六年内務次官、一九〇七年以来元老院議官。ストルィピン暗殺後（一九一一—一九一二）内相兼憲兵長官。一九一二年四月、国会演説でレナ金鉱虐殺事件の責任者を弁護して、「いままでもそうであったし、今後もそうなるだろう」と言った。一九一六年法相。

マクシーモフ、エヌ→ボグダーノフ、ア。

マスロフ、ペ・ペ（一八六七—一九四六）——経済学者、社会民主主義者、第二回党大会後メンシェヴィキ、土地公有化を提唱。反動期には解党派。第一次大戦中には社会排外主義者、十月革命後政治から離れ、教育と学術研究に専念。一九二九年以後ソ連科学アカデミー正会員。

マッツィーニ、ジュゼッペ（一八〇五—一八七二）——イタリアの著名な革命家、ブルジョア民主主義者、イタリア民族解放運動の指導者、思想的代表者のひとり。イタリアを「下から」独立ブルジョア共和国として再統一するという綱領を主張し、その闘争の主要手段は蜂起であると考えた。しかし、陰謀的戦術をとり、農民の利益を軽視し、労働問題を「労資協調」で解決するという小ブルジョア的空想計画を宣伝した。レーニンは彼をマルクス以前の非プロレタリア的社会主義の代表者のひとりと見た。

マッハ、エルンスト（一八三八—一九一六）——オーストリアの主観的観念論哲学者、物理学者、生理学者。ウィーン、プラハ等の大学教授。アヴェナリウスとともに経験批判論の代表者。科学は経験的事実を記述するものと主張した。主著—『感覚の分析』、『認識と誤謬』。ボグダーノフ、ルナチャルスキーらが彼の学説に影響された。レーニンは『唯物論と経験批判論』でマッハ主義を批判した。

マフノヴェツ→アキモフ、ヴェ・ペ

マラート↓シャンツェル、ヴェ・エリ
マルク↓リュビーモフ、ア・イ
マルトィノフ、ア・エス（ピーケル、ア・エム）（一八六五―一九三五）――はじめ「人民の意志」派、のちに社会民主主義者、『経済主義』の理論家。第二回党大会後メンシェヴィキ、第一次大戦中国際派（マルトフ派）。十月革命後ロシア共産党に入党、コミンテルンで活動した。
マルトフ、エリ（ツェデルバウム、ユ・オ）（一八七三―一九二三）――はじめペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」や『イスクラ』でレーニンと協力。第二回党大会後、メンシェヴィキの指導者、その主要な理論家。反動期には解党派。第一次大戦中は「中央派」。二月革命派、国際派メンシェヴィキを指導。十月革命後、ソヴェト権力に反対し、ドイツに亡命。
ミハイル↓イスフ、イ・ア
ミリュコフ、ペ・エヌ（一八五九―一九四三）――カデット、ロシアの帝国主義ブルジョアジーのイデオローグ。一九〇二年から雑誌『オスヴォボジデーニエ』（『解放』）に協力。一九〇五年一〇月、カデット党創立者のひとり、同党中央委員会議長、中央機関紙『レーチ』編集者。第三、第四国会議員。二月革命後第一次臨時政府外相。同年八月コルニロフ反乱に参画。十月革命後外国の武力干渉を組織。一九二一年以来新聞『ポスレードニエ・ノーヴォスチ』をパリで発行。
ミルラン、アレクサンドル（一八五九―一九四三）――フランスの政治家、反動的ブルジョア政府に入閣した最初の社会主義者。一九〇四年フランス社会党から除名され、独立社会党を創立。一九二〇―一九二四年フランス大統領。
ムラノフ、エム・カ（一八七三―一九五九）――ボリシェヴィキ、仕上げ工。一九〇四年以来の党員。ハリコフで活動。第四国会議員。国会外でも活動。『プラウダ』に協力。一九一四年一一月他のボリシェヴィキ議員とともに逮捕され、トゥルハンスクへ流刑。一九一七―一九二三年、ロシア共産党（ボ）中央委員会の機構内で働く。第六、第八、第九回党大会で中央委員。一九二二―一九二四年、党中央統制委員。
ムロムツェフ、エス・ア（一八五〇―一九一〇）――カデット党の創立者、中央委員、法学者、モスクワ大学教授。第一国会議長。
メデム、ヴェ・デ（グリンベルグ、ヴェ・デ、ゴルドブラット）（一八七九―一九二三）――ブンド幹部のひとり。一九〇六年ブンド中央委員。ロシア社会民主労働党第五回大会に出席、メンシェヴィキを支持。十月革命後、ポーランドにおけるブンド組織の頭首。一九二一年渡米。ユダヤ人の右翼社会主義新聞『フォーワーズ』にソ連中傷論文を執筆。
メーリング、フランツ（一八四六―一九一九）――ドイツ社会民主党左派の指導者、理論家、歴史家、政治・文芸評論家、党理論機関誌『ノイエ・ツァイト』編集局員。マルクス、エンゲルス、ラサールの遺稿集を出版。『マルクス伝』『ドイツ社会民主党史』等を著述。その著作にはマルクス主義から逸脱した点もあったが、第二インタナショナル内の日和見主義、修正主義、カウツキー主義と積極的にたたかい、国際主義を擁護。スパルタクス団を指導し、ドイツ共産党の創立に尽力した。
メンシコフ、エム・オ（一八五九―一九一九）――極反動的政論家、『ノーヴォエ・ヴレーミャ』寄稿者。青年時代には自由主義に秋波を送っていたが、一八九〇年以後ツァーリズムを擁護して、自

由主義を攻撃。一九一九年銃殺。

モギリャンスキー、エム・エム（一八七三—一九四二）——弁護士、政論家。一九〇六年カデットに入党。その中央機関誌『レーチ』その他ロシア語、ウクライナ語の定期刊行物に執筆。十月革命後、カデットから離党。三〇年代にはウクライナ共和国科学アカデミーで働く。

ユーリー→ブロンシテイン、ペ・ア

ユルケヴィチ（ルイバルカ）、エリ（一八八五—一九一八）——ウクライナのブルジョア民族主義者、ウクライナ社会民主労働党中央委員。メンシェヴィキ的傾向の民族主義雑誌『ズヴィン』（『鐘』）に参加。第一次大戦中ローザンヌで月刊新聞『ボロチバ』を発行。その中で敗北主義者として親独的民族主義団体「ウクライナ解放同盟」に反対。レーニンは彼を「最低の、冴えない、最も反動的な民族主義」の代表者と称した。

ヨロス、ゲ・ベ（一八五九—一九〇七）——自由主義的政論家、一九〇五年以来『ルースキエ・ヴェードモスチ』編集者。黒百人組に殺された。

ラヴェスタイン、ウィレム・ファン（一八七六年生）——オランダの社会主義者。一九〇〇年からオランダ社会民主労働党員。その左派機関誌『トリビューン』を編集。一九〇九年除名。革命的社会民主党の創立に参加。一九一八年オランダ共産党に加入。一九一八—一九二五年、国会議員。一九二二年以後右翼的偏向を示し、一九二六年除名。ヴァインコープとともに「独立共産主義者グループ」に加入。

ラファルグ、ポール（一八四二—一九一一）——国際労働運動のすぐれた活動家、フランス労働党の創立者のひとり、才能豊かな政論家、フランスにおける科学的共産主義の最初の継承者のひとり、マルクス、エンゲルスの親友、マルクスの次女ローラの夫。一八六六年から労働運動に参加。第一インタナショナルの会員となり、マルクスと身近に知り合い、マルクス主義者となる。パリ・コミューンにたいする南仏諸州の援助を組織。一八八〇年ゲードとともに労働党綱領を書く。第二インタナショナル内の日和見主義とたたかい、ロシアの最初のマルクス主義組織「労働解放」団の創立を祝い、のちボリシェヴィキに共鳴。マルクス主義とカント主義との〝総合〟をめざすベルンシュタイン主義を批判し、改良主義、修正主義とたたかったが、農民問題、民族問題、社会主義革命の課題の問題で誤りがあった。老齢になり革命運動に役だたなくなったと考えて、妻とともに自殺した。

ラーリン、ユ（ルーリエ、エ・ムア）（一八八二—一九三二）——一九〇一年から革命運動に参加。メンシェヴィキに属し、土地公有化を主張。一九〇五年には「労働者大会」の構想を支持。反動期には露骨な解党主義者。一九一二年反党的八月ブロックの組織に参加。二月革命後、国際派メンシェヴィキを指導。一九一七年八月ボリシェヴィキに入党。十月革命後、メンシェヴィキ、エス・エルとの連立政府の組織を主張。のちに経済活動に移り、一九二〇—一九二一年最高輸送委員会副議長、ゴスプラン幹部会員。

リカード、デーヴィド（一七七二—一八二三）——イギリスのすぐれた経済学者。その著『経済学および課税の原理』（一八一七年）、『農業保護論』（一八二二年）等で古典派ブルジョア経済学を完成し、とくに労働価値説をはじめて体系的に発展させ、自由競争の原則を主張し、資本主義生産の発展を阻害するあらゆる制限の撤廃を要求した。マルクスは、『資本論』、『剰余価値説』等でリカードの理論

的見解を批判した。

リープクネヒト、ヴィルヘルム（一八二六―一九〇〇）――ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家、ドイツ社会民主党の創立者で指導者。第二インタナショナルの組織者。カールの父。一八四八年革命に参加したのちロンドンに亡命、そこでマルクス、エンゲルスと知り、その影響で社会主義者となる。一八七五年から死にいたるまで党中央委員、党機関紙『フォルヴェルツ』編集長。マルクス、エンゲルスは彼を高く評価したが、同時に日和見主義分子にたいする彼の調停主義的立場を批判した。

リープマン、エフ（ゲルシュ、ペ・エリ）（一八八二年生）――一九一一年にブンド中央委員、『オートクリキ・ブンダ』編集局員、解党派。第一次大戦中、ツァーリズムの併合政策を支持。スイスに居住。

リーベル（ゴリドマン）、エム・イ（一八八〇―一九三七）――ブンド幹部のひとり。反動期には解党派。一九一二年には反党的八月ブロックの積極的活動家。第一次大戦中、社会排外主義者。二月革命後、ペトログラード・ソヴェト執行委員会と第一期中央執行委員会幹部会の一員。メンシェヴィキ的立場をとり、連合政府を支持。十月革命に反対。のちに経済活動に従事。

リャザーノフ（ゴリデンダッハ）、デ・ベ（一八七〇―一九三八）――一九〇〇年国外で「ボリバ」グループを組織。『イスクラ』の党綱領案に反対し、第二回党大会への参加を拒否。一九〇九年反党的「フペリョード」グループのカプリ学校やロンジュモの党学校で労働組合運動について講義。ドイツ社会民主党の委任を受けてマルクス・エンゲルス全集を準備。第一次大戦中は中央派。メンシェヴィキ＝トロツキスト的新聞『ゴーロス』と『ナーシェ・スローヴォ』に寄稿。第六回党大会（一九一七年七―八月）でトロツキーらの「メジュライオンツイ」とともにボリシェヴィキ党に入党。十月革命後、労働組合運動に従事。一九一八年、ブレスト講和に反対して、いったん離党したが、また復党。労働組合論争（一九二〇―一九二一年）では反党的立場に立ち、労働組合活動から排除された。マルクス・エンゲルス研究所の設立に参加し、一九三一年までその所長。同年二月、メンシェヴィキの反革命活動に協力したかどで党から除名。

リュビーモフ、ア・イ（マルク）（一八七九―一九一九）――社会民主主義者。一八九八年から運動に参加。一九一〇年、ロシア社会民主労働党中央委員会在外ビューローの一員。調停派パリ・グループ（一九一一―一九一四年）の創立者のひとり。第一次世界大戦中、極端な祖国防衛派。一九一七年、プレハーノフ派の「エヂンストヴォ」グループに参加。

ルクセンブルク、ローザ（一八七一―一九一九）――国際労働運動のすぐれた活動家、第二インタナショナル左派の指導者のひとり、ポーランド社会民主主義運動の創始者のひとり、民族主義的偏向とたたかう。一八九七年以来ドイツの運動に参加し、ベルンシュタイン主義、ミルラン主義とたたかう。ワルシャワで第一次ロシア革命に参加。ロシアの社会民主労働党第五回大会に出席し、ボリシェヴィキを支持。第一次大戦の当初から国際主義的立場にたち、スパルタクス団を創立。ユニウスの筆名で小冊子『社会民主主義の危機』を著述。ドイツの一一月革命後、ドイツ共産党創立大会を指導。一九一九年一月、シャイデマン政府に逮捕され、殺害された。レーニンは彼女を高く評価するとともに彼女の一連の誤り（党の役割、帝国主義、民族・植民地問題、農民問題、永続革命などについて）を

批判した。

ルナチャルスキー、ア・ヴェ（一八七五—一九三三）——一九〇年代のはじめから運動に参加。第二回党大会後、ボリシェヴィキ。『フペリョード』、『プロレタリー』、『ノーヴァヤ・ジーズニ』編集局員。反動期には「フペリョード」グループに参加し、創神主義を提唱。カプリおよびボロニアの党学校を組織。レーニンは『唯物論と経験批判論』で彼を批判した。一九一三年、フペリョード派から別れて、独自のサークル「プロレタリア文化」をつくる。第一次世界大戦中、国際主義者。一九一七年はじめ「メジュライオンツイ」グループに加入。このグループとともに第六回党大会でボリシェヴィキ党に復帰。十月革命ののち、一九二九年まで教育人民委員、のちにソ連中央執行委員会付属学術委員会議長。一九三三年八月、スペイン駐在大使に任命されたが、まもなく死亡。芸術、文学にかんする多くの著作がある。

ルバーキン、エヌ・ア（一八六二—一九四六）——書誌学者、著述家。書誌学、ロシア図書史、地理学、自然科学等について多くの普及的著作がある。一九〇七年スイスに亡命、そこに永住。主著『書物のあいだで』（約二万点のロシア文献解題）（一九〇六年）、『数字から見たロシア』（一九一二年）はレーニンから高く評価された。レーニンは国外で彼と会い、彼の蔵書を利用した。十月革命後、ローザンヌの図書心理学研究所長。死後、八万冊の蔵書をソ連に遺贈。国立レーニン図書館（モスクワ）に保管されている。

レイテルン（一八六一年死）——陸軍大佐。ワルシャワ、デモンストレーションの鎮圧を命ぜられたが、人民大衆に発砲することを望まず、自殺をとげた。

レヴィツキー（ツェデルバウム）、ヴェ・オ（G-g、ゲオルグ）（一八八三年生）——メンシェヴィキ、解党派、祖国防衛派。解党「公開状」に署名。雑誌『ナーシャ・ザリャー』を編集。十月革命後、ソヴェト政権に敵対。一九一九年、反革命的「戦術センター」事件に連座。のちには文筆活動に専念。

レヴィンスキー、ヴェ——ウクライナの労働運動にかんする一連の著作の著者。一九一三—一九一四年、メンシェヴィキ的傾向をもった民族主義的合法雑誌『ズヴィン』に寄稿。

レーゲル、タデウシ（一八七二—一九三八）——ガリチアとシレジアのポーランド社会民主労働党員、ジャーナリスト。一九〇三—一九二〇年、週刊誌『シレジア労働者』を編集。一九一一—一九一七年、オーストリア国会議員。一九一九—一九三五年、ポーランド・セイム（国会）議員、ポーランド社会党右派。

レーデル、ヴェ・エリ（一八八二—一九三八）——ポーランドの社会民主主義者。一九〇五年『イスクラ』通信員。一九一〇—一九一一年ポーランド・リトワ社会民主党本部書記、ロシア社会民主労働党中央機関誌『ソツィアル-デモクラート』編集局内同党代表。在外組織委員会および技術委員会の一員。調停派を支持。第一次世界大戦中、社会排外主義的立場に立つ。一九一九—一九二〇年ポーランド共産主義労働者党の活動に活発に参加。一九二一年以来、コミンテルンとプロフィンテルンの役員、ソヴェト出版物への積極的な協力者。

ロザノフ、エヌ・エス（一八七〇年生）——第三国会議員、医師、トルドヴィキ。

ロパーチン、ゲ・ア（一八四五—一九一八）——著名なナロードニキ革命家。七〇年代、外国へ行き、マルクス、エンゲルスと親交を結び、第一インタナショナル総評議会に選出。ダニエリソンととも

もにマルクス『資本論』第一巻をロシア語に翻訳。しばしば捕えられ、一八八七年死刑の判決を受けるが、無期懲役に減刑され、シュリッセルブルグ要塞監獄の独房で受刑。一九〇五年特赦。その後は政治活動から遠ざかった。

ロマン→エルモラーエフ、カ・エム

ロンゲ、シャルル（一八三九―一九〇三）――フランス労働運動の活動家、プルードン主義者、ジャーナリスト（マルクスの長女イェニーの夫）。一八六六―一八六七年、一八七一―一八七二年、第一インタナショナル総評議会の一員、たびたびその大会に参加。パリ・コミューンのメンバー。コミューン敗北後、イギリスへ亡命。一八八〇年帰国し、フランス労働党の日和見主義的潮流ポシビリストに属した。

ワルシャフスキ、ア・エス→ヴァルスキ、ア

I→ゴーレフ、ベ・イ

I→ドゥブロヴィンスキー、イ・エフ

K・スタ→スターリン、イ・ヴェ

T→トィシカ、ヤン

レーニン10巻選集 （5）

1971年5月13日第1刷発行
1980年5月6日第13刷発行

￥1200

訳 者© 日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

発行者 平 智 享

発行所 株式会社 大 月 書 店

印刷 三晃印刷
製本 関山製本

〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話（813）4651 振替東京 3-16387